大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発 掘 調 査 報 告 書

（2015）

2017.3

大 阪 市 教 育 委 員 会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例言

1. 本報告書は平成27年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

目　次

北　区
同心町遺跡発掘調査（DC15-1）報告書……1
長柄古墳発掘調査（HH15-1）報告書……9
長柄西遺跡Ｂ地点発掘調査（NN15-1）報告書……17
天満橋１丁目遺跡Ｃ地点発掘調査（TW15-1）報告書……27

福島区
野田城跡伝承地発掘調査（NO15-1）報告書……61

中央区
日本橋１丁目所在遺跡発掘調査（NP15-1）報告書……69
大坂城下町跡発掘調査（OJ15-1）報告書……89
大坂城下町跡発掘調査（OJ15-2）報告書……101
大坂城下町跡発掘調査（OJ15-3）報告書……113
大坂城下町跡発掘調査（OJ15-4）報告書……119
大坂城跡発掘調査（OS15-1）報告書……147
大坂城跡発掘調査（OS15-2）報告書……161
大坂城跡発掘調査（OS15-3）報告書……171
大坂城跡発掘調査（OS15-4）報告書……179
大坂城跡発掘調査（OS15-7）報告書……203
大坂城跡発掘調査（OS15-8）報告書……217
上本町遺跡発掘調査（UH15-2）報告書……227
西心斎橋１丁目所在遺跡発掘調査（WS15-1）報告書……235

西　区
江戸堀１丁目所在遺跡Ｂ地点発掘調査（ED15-1）報告書……243

天王寺区
茶臼山古墳発掘調査（CU15-1）報告書……253
大道１丁目所在遺跡発掘調査（DA15-1）報告書……271
大坂城跡発掘調査（OS15-5）報告書……277
大坂城跡発掘調査（OS15-6）報告書……283
四天王寺旧境内遺跡発掘調査（ST15-1）報告書……289
上本町遺跡発掘調査（UH15-1）報告書……299
上本町遺跡発掘調査（UH15-3）報告書……317

淀川区
宮原遺跡発掘調査（MH15-1）報告書……329

東淀川区
崇禅寺遺跡発掘調査（SZ15-1）報告書……341

城 東 区
榎並城跡伝承地発掘調査(EN15-1)報告書……349
関目２丁目所在遺跡発掘調査(SE15－1)報告書……357

阿倍野区
阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS15-1)報告書……365

住 吉 区
山之内遺跡発掘調査(YM15-1)報告書……371

東住吉区
杭全遺跡発掘調査(KP15-1)報告書……383
難波大道跡発掘調査(ND15-1)報告書……391

北区天満橋二丁目34－３における建設工事に伴う
同心町遺跡発掘調査(DC15－１)報告書

調査個所	大阪市北区天満橋二丁目34－3
調査面積	62㎡
調査期間	平成27年11月19日～11月26日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代～中世の集落遺跡である同心町遺跡の北部に位置し、大川に近接する。これまで付近では、北200mのDC02－3次調査地で、弥生時代から近世にわたる地層や遺構が確認され、弥生時代中･後期および奈良時代の遺物が多く出土した[大阪市教育委員会･大阪市文化財協会2004]。また、南400mのDC07－1次調査地においても、弥生時代中期と中世の遺構が検出され[大阪市教育委員会･大阪市文化財協会2008]、大川沿いに弥生時代中期の集落が少なくとも南北600mの範囲に拡がっていることが判明している。

また、近世では今回の調査地から南南東800mのTW12－1次調査地、900mのTW08－1次調査地では、堤防跡が検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。その規模はTW08－1次調査地では上端面で幅7m前後、下端幅20～25m前後に推定されている。築造時期を明確に示す出土遺物はないものの、豊臣秀吉による1586(天正14)年の堤防普請に対応する可能性が高いことが指摘されている。

当該地で大阪市教育委員会が2015年8月2日に行った試掘調査の結果、現地表下約1.2mで、中世～近世の遺構面および遺物包含層が検出され、本調査を実施することになった。

調査は比較的遺跡の残存状況が良いと思われる敷地東側に東西7m、南北6mの調査区を設定し、11月19日に開始した。地表下1.0mまでを重機によって掘削し、精査したところ、調査区全面で盛土が検出され、堤防跡(SX04)に当たっていることが判明した。教育委員会の指示のもと、その規模を調べるために調査区の一部を西側に拡張し62㎡とした。調査はSX04を中心に進め、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。その後、SX04の一部を裁割りし、弥生時代の遺構を確認･

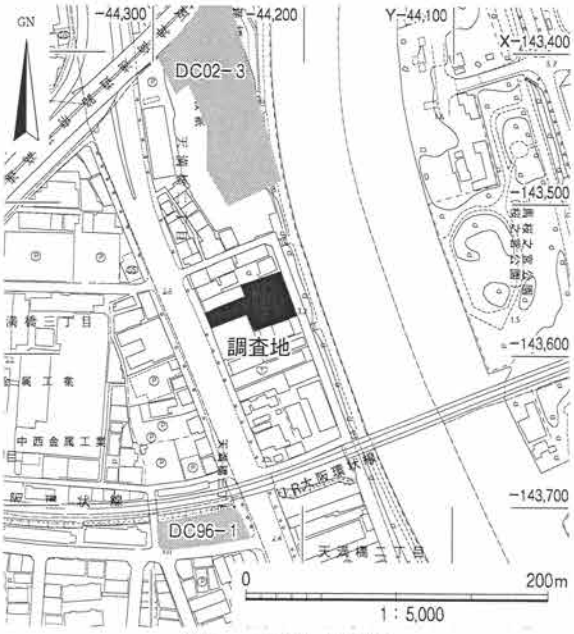


図1　調査地位置図

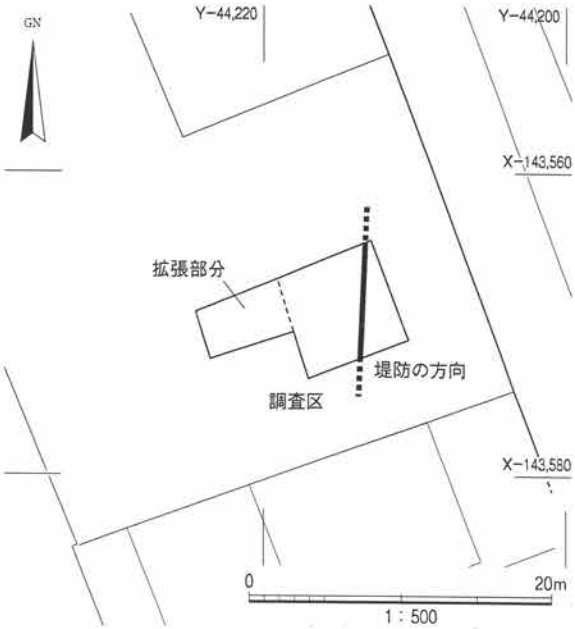


図2　調査区配置図

記録し、11月26日、現地における調査を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図２は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

２)調査の結果

ｉ)層序

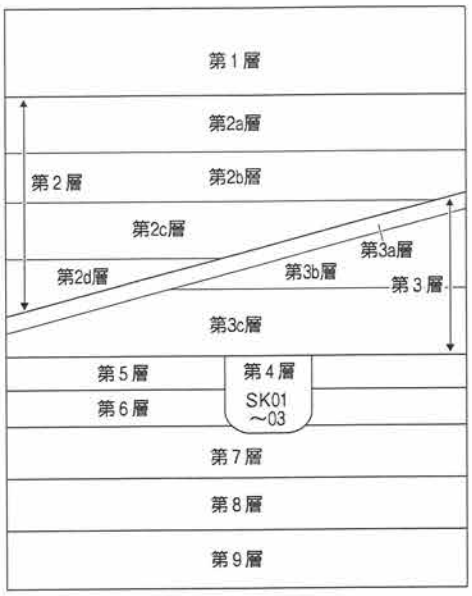


図３　地層と遺構の関係図

調査地の現地表面はTP+3.2m前後とほぼ平坦である。調査では現地表下2.8m（TP+0.4m)までの地層を確認し、９層に大別した。各岩相の特徴は次の通りである。

第１層：現代盛土・攪乱層である。層厚は全体的に20cmで、最大120cmである。

第２層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトおよび黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトを主体とする盛土層で、層厚は最大200cmである。盛土を構成する単層間の境界が明瞭である。2a～ｄ層の４層に細別した。

第2a層：オリーブ黄色(2.5Y4/6)を基調とする細粒砂質シルトからなり、層厚は最大40cmである。

第2b層：黒色(10YR2/1)細粒砂質シルトを基調とし、層厚は最大50cmである。

第2c層：偽礫を多く含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト～黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトからなり、層厚は最大100cmである。弥生土器、土師器、瓦器を含む。

第2d層：黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトを主体とし、層厚は最大50cmである。

第３層：中礫～粗粒砂からなる盛土層であり、層厚は最大180cmである。盛土を構成する単層間の境界が明瞭である。第3a～ｃ層の３層に細別した。いずれも弥生土器を含む。

第3a層：灰色(5Y5/1)を基調とする粗粒～細粒砂からなり、層厚は最大30cmである。

第3b層：暗灰黄色(2.5Y5/2)～灰黄褐色(10YR4/2)中礫～粗粒砂からなり、層厚は最大90cmである。

第3c層：黄褐色(2.5Y5/4)粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大20cmである。

第４層：暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルトからなる遺物包含層・SK01～03の埋土である。包含層はSX04築造によって、大きく削平されているが、一部で30cm以上存在したことが確認できた。弥生時代中期の土器を含む。

第５層：黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂からなる自然堆積層で、層厚は最大20cmである。上面で弥生時代の遺構が検出された。

第６層：灰オリーブ色(5Y5/2)細礫～粗粒砂からなる自然堆積層で、層厚は最大30cmである。

第７層：灰色(5Y5/1)細礫～粗粒砂からなる段丘礫層である。層厚は最大25cmである。上面は凹凸が著しい。

第８層：黄灰色(2.5Y5/1)細礫～粗粒砂からなる段丘礫層である。層厚は最大30cmである。

第９層：黄灰色(2.5Y5/1)細礫～粗粒砂からなる段丘礫層である。層厚は20cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物(図４・５)

ａ．弥生時代の遺構と遺物

第５層上面で弥生時代の遺構SK01～03を検出した。埋土はいずれも暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルトである。

SK01　調査区北部で検出した深さ0.1mの西から東への落ちで、南北1.2m以上、東西0.6m以上である。弥生土器壺１が出土した。口縁部が外反し、端部に刻み目を施し、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式に属する。

SK02　SX04の一部断ち割りで検出した土壙で、一辺0.7m以上、深さ0.25mの土壙である。

SK03　SX04の一部断ち割りで検出した土壙で、一辺0.6m以上、深さ0.5m以上の土壙である。甕６を含む弥生土器が、６、７点出土した。

そのほか図示可能な遺物のほとんどは第２層から出土した。２は壺の頸部で、櫛描直線文を施す。３は広口壺の口縁部で、内面をハケで調整する。４は壺の口縁部、５は底部である。これらは畿内第Ⅱ～Ⅲ様式に属する。７は高杯の脚裾部で、底径10.0cmである。８は小型鉢で口縁端部を短く外反させる。以上は飛鳥時代に属する。

ｂ．近世の遺構

SX04　第５層から土盛された堤防跡SX04を検出した。盛土は東西幅12.5m、南北９mの調査区全域に及ぶ。高さは現状で約2.0mである。先述したように盛土からは弥生土器を中心に中世以前の遺物しか出土せず、また、第５層からはまったく遺物が出土しなかったため、正確な築造時期は不明である。地層・盛土の観察から、堤防は次の工程を経て、築造されたと考えられる。

①築造開始面には旧表土は存在せず、構築前に全体に地面は削平されている。全体が水平ではなく、堤防の基部の西端は高く削り残されている。

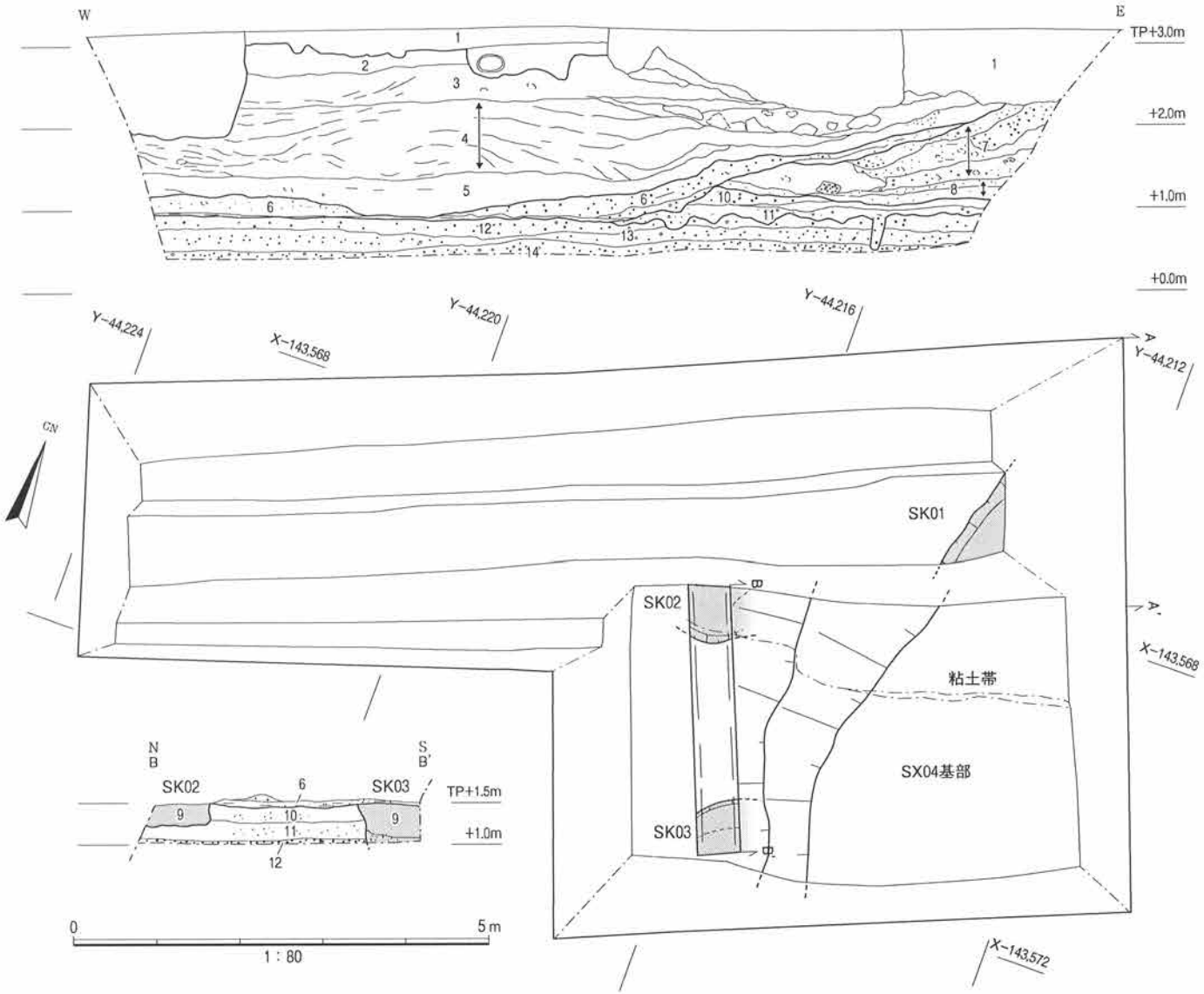
②大川の川砂に由来すると考えられる細礫～粗粒砂(第3b層)を盛り上げ、基部が作られる。その東西幅は不明であるが、高さは現状で2.0mまで確認でき、約30°の斜面を作る。走行方向は検出部をみる限り、正方位からやや東に振っており、西に振る大川の方向と一致しない。

③次に基部の斜面から平坦面まで細礫～粗粒砂(第3a層)で覆う。

④その後、街場から運ばれたと考えられる黄褐色細粒砂シルトおよび黒褐色細粒砂シルト(第２層)を積み上げる。高さは現状で2.0mまで確認できる。

先述したように、天満地域、大川沿いには、TW08－１・12－１次調査の２か所で堤防が検出されている。その築造開始は天正期に遡る可能性があり、その後18世紀に内側で補修工事が行われている。今回のSX04では第２層と第３層と間には土壌化は確認できず、盛土工程の二段階の時間差は明確にできなかった。

一方、天満の堤の描写がある「明暦元年大阪三郷町」絵図(1655年)、「篠山絵図」(1654年以前)によ



1：現代盛土・撹乱（第１層）
2：オリーブ褐色（2.5Y4/6）
細粒砂質シルト（第2a層）
3：黒色（10YR2/1）細粒砂質シルト（第2b層）
4：黄褐色（2.5Y5/4）～
黒褐色（10YR3/2）細粒砂質シルト（第2c層）
5：黄褐色（2.5Y5/6）細粒砂質シルト（第2d層）
6：灰色（5Y5/1）粗粒～細粒砂（第3a層）
7：暗灰黄色（2.5Y5/2）～
灰黄褐色（10YR4/2）中粒～粗粒砂（第3b層）
8：黄褐色（2.5Y5/4）粗粒～中粒砂（第3c層）
9：暗褐色（10YR3/3）細粒砂質シルト（第４層）
10：黄灰色（2.5Y5/1）粗粒砂（第５層）
11：灰オリーブ色（5Y5/2）粗粒砂（第６層）
12：灰色（5Y5/1）細礫～粗粒砂（第７層）
13：黄灰色（2.5Y5/1）細礫～粗粒砂（第８層）
14：黄灰色（2.5Y5/1）細礫～粗粒砂（第９層）

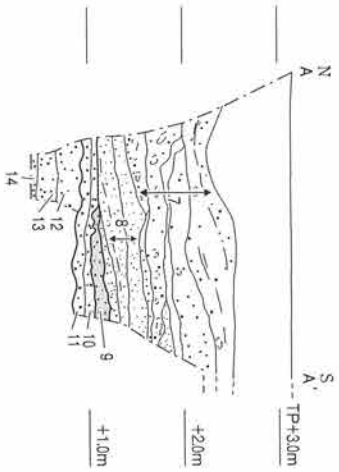


図４　調査区平面・断面図

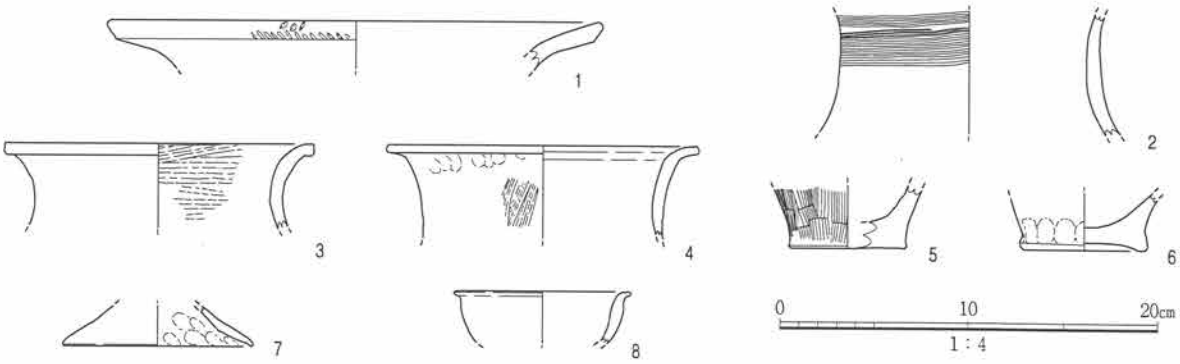


図５　出土遺物

SK01(３)、SK03(６)、第２層(２～５・７・８)

ると、前者では現在の帝国ホテル付近、後者では大阪環状線付近まで、堤が北に延びていることが確認でき、今回発見された堤防はこれに連なるものと考えられる。

３)まとめ

今回の調査では、限られた面積にも係らず、大川から天満の町を守る堤防跡が検出され、詳細な築造時期は不明なものの、絵図や発掘調査で知られていた堤がさらに北に延びていることが明らかになった。また、その下位には弥生時代中期の集落が拡がっていることが確認された。今後、周辺調査の蓄積によって、より確度の高い地域史像が復元できるものと期待される。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96－１)」:『平成８年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13－22

2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02－３)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.３－11

2008、「同心町遺跡D地点発掘調査(DC07－１)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.３－11

2010、「桜宮地区埋蔵文化財調査(天満１丁目所在遺跡発掘調査(TW08－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.21－29

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2014、「北区天満橋１丁目所在遺跡発掘調査(TW12－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.45－54

調査区全景（北西から）

調査区北壁断面（東から）

堤基部の状況（西から）

北区本庄東３丁目９－10における建設工事に伴う

長柄古墳発掘調査(HH15－１)報告書

調査個所	大阪市北区本庄東3丁目9－10
調査面積	48㎡
調査期間	平成28年2月29日～3月4日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、松本啓子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は淀川河口部のデルタ地帯に立地し、淀川は北約300mの地点を西向きに流れている。

戦後の復興期に調査地の北200m地点で行われた工事で、古墳時代中期の家形埴輪が出土したことから、長柄古墳の存在が推定されるようになり、調査地はその推定範囲内に位置している。

周辺の調査で、古墳の痕跡は未だ見つかっていないが、HH01－2次調査では古墳時代前期の遺構・遺物が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。また、HH97－1次調査では弥生時代後期と江戸時代の遺構・遺物が、HH13－1次調査では中世の溝・土壙などの遺構と遺物、HH10－1次調査では江戸時代の耕作痕跡が検出された(図1)[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012・2015]。

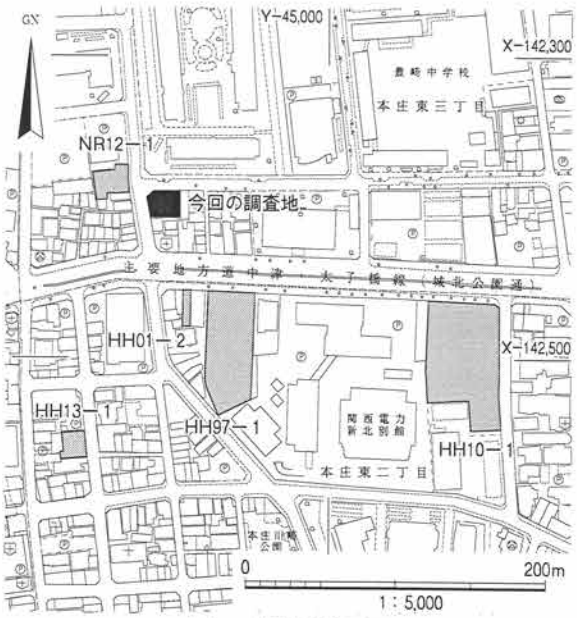


図1　調査地位置図

これらの結果を受けて、現在この地域は長柄古墳推定地を含め、本庄東遺跡・本庄東遺跡B地点という名称で埋蔵文化財包蔵地に登録されている。本調査でもこれらと同様の時期の遺構・遺物の検出が期待された。

当該地で平成28年1月14日に大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.2m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査が行われることとなった。

図2　調査区配置図

調査は平成28年2月29日から開始した。東西6m、南北8mの調査区を設定し(図2)、地表下1.2mまでを重機を用いて掘削し、その後、人力による掘削を行った。層序に応じて順次掘り下げて遺構・遺物を検出し、適宜実測図や写真撮影によって記録しながら、河川による自然堆積層の第3層層中(地表下2.5m)まで調査した。3月4日には現地におけるすべての作業を終えて撤収し、調査を完了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

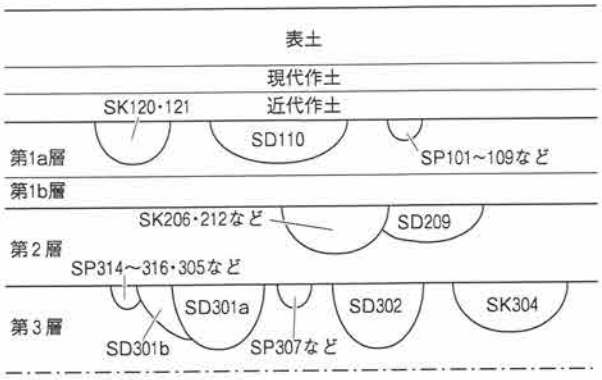


図3　地層と遺構の関係

2)調査の結果

i)層序(図3・4、写真図版上段)

調査地内の現況地形はTP+2.8~2.9mで、ほぼ平坦である。

現代の表土・作土層、近代の作土層の下の地層は3層に分かれる。

第1層：本層は2層に細分した。第1a層は褐色礫混り細粒砂層で、層厚12~15cmの近世の整地層で、上面で溝や土壙、小穴が見つかった。第1b層はにぶい黄褐色礫やシルト混り細粒砂層で、近世の整地層である。層厚は最大15cmあるが、中央部に向かって徐々に薄くなり、南部では見られない。

遺物は第1a層から図8の内黒の黒色土器椀口縁部2、瓦器椀3などの古代後半~中世の遺物とともに肥前磁器の破片が出土した。黒色土器や瓦器は下位の第2層に由来するもので、本層は江戸時代の地層である。

第2層：黒褐色極細粒砂混り砂質シルトで、炭を含む。層厚は最大45cmである。上面で土壙や溝が見つかった。

遺物は土師器の破片が1点出土したが、時期は判別できなかった。しかし、本層上面の遺構SD209から瓦器片が出土したことから中世の地層と推定される。

第3層：本層は河川による堆積層で、上面から20cmほどの間はにぶい黄褐色細粒砂層である。その下約50cmの間は、極細粒砂から細粒砂、粗粒砂、礫へと下に向かって粒径が大きくなる堆積で、ラミナの方向はほぼ水平であった。さらにその下の約10cmが極細粒砂~細粒砂、約5cmが粗粒砂、約15cmが極細粒砂、5cmほどの礫を間に挟んで20cmほどの極細粒砂が堆積しており、南へ下がる緩やかな傾斜のラミナが西壁で観察された。ここまでの層厚は約1.2mで、本層はさらに下へと続いていた。

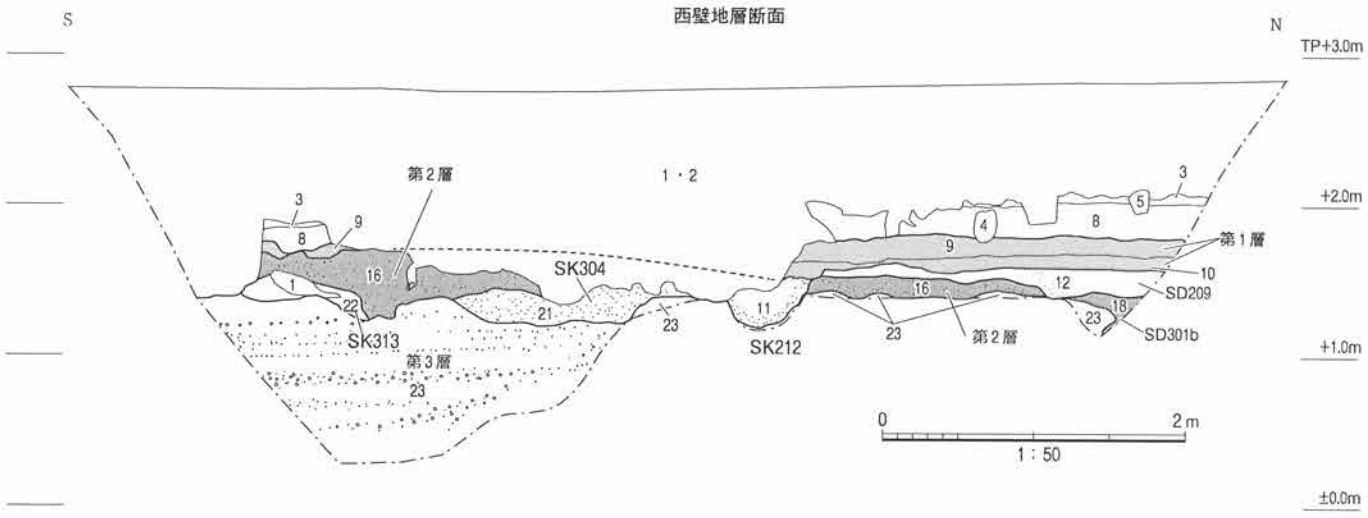
本層からの出土遺物はない。本層上面で溝や土壙、小穴が見つかった。

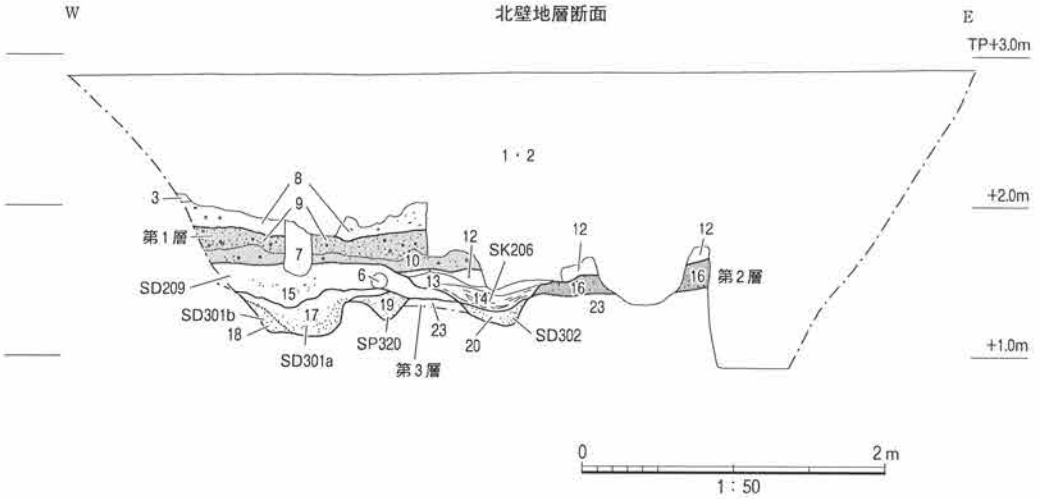
ii)遺構と遺物(図5~8、写真図版上・中段)

第3層上面(図5、写真図版中段)

第3層上面では溝と土壙・小穴が見つかったが、いずれの遺構からも遺物は出土していない。

調査区の南東隅から北西隅に延びる溝SD301は、図5のSD301北断面に見られるような、溝の方向に沿って数cmの高まりが底部に残っていたことから、同じ位置で掘り直されたことがわかり、上の溝をSD301a、下の溝をSD301bとした。埋土はいずれも水成堆積層で、SD301aが黒褐色砂質シルト~シルト、SD301bが黒褐色細粒砂混シルトとよく似ているため、平面・断面とも両者の境界は不明瞭であった。溝の幅は、両者がほぼ重なっている南端で約0.5m、北部ではSD301aは0.2mほど東





1：暗褐色(2.5Y5/2)礫混り粘土質細粒砂(攪乱)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)礫・シルト混り細粒砂(表土)
3：灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト(現代作土)
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)礫・炭混り細粒砂(杭)
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)礫・シルト混り細粒砂(杭)
6：灰黄褐色(10YR4/2)粘土質砂(杭)
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質砂(杭)
8：褐色(10YR4/4)細粒砂・炭・礫混りシルト質粘土(近代作土)
9：褐色(10YR4/4)礫混り細粒砂(第1a層)
10：にぶい黄褐色(10YR4/3)礫・シルト混り細粒砂(第1b層)
11：黒褐色(10YR3/2)シルト質砂(SK212)
12：にぶい黄褐色(10YR4/3)礫・シルト混り細粒砂(SK206上層)
13：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混シルト(SK206中層)
14：黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土(SK206下層)
15：黒褐色(10YR3/2)炭・極細粒砂混り砂質シルト(SD209)
16：黒褐色(10Y5/2)炭・極細粒砂混り砂質シルト(第2層)
17：黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト～シルト(SD301a)
18：黒褐色(10YR3/1)細粒砂混シルト(SD301b)
19：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂混りシルト(SP320)
20：暗褐色(10RY3/3)細粒砂混粘土質シルト(SK302)
21：黒褐色(10YR3/2)シルト質砂(SK304)
22：暗褐色(2.5Y5/2)砂質シルト(SK313)
23：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂(第3層)

図4　地層断面図

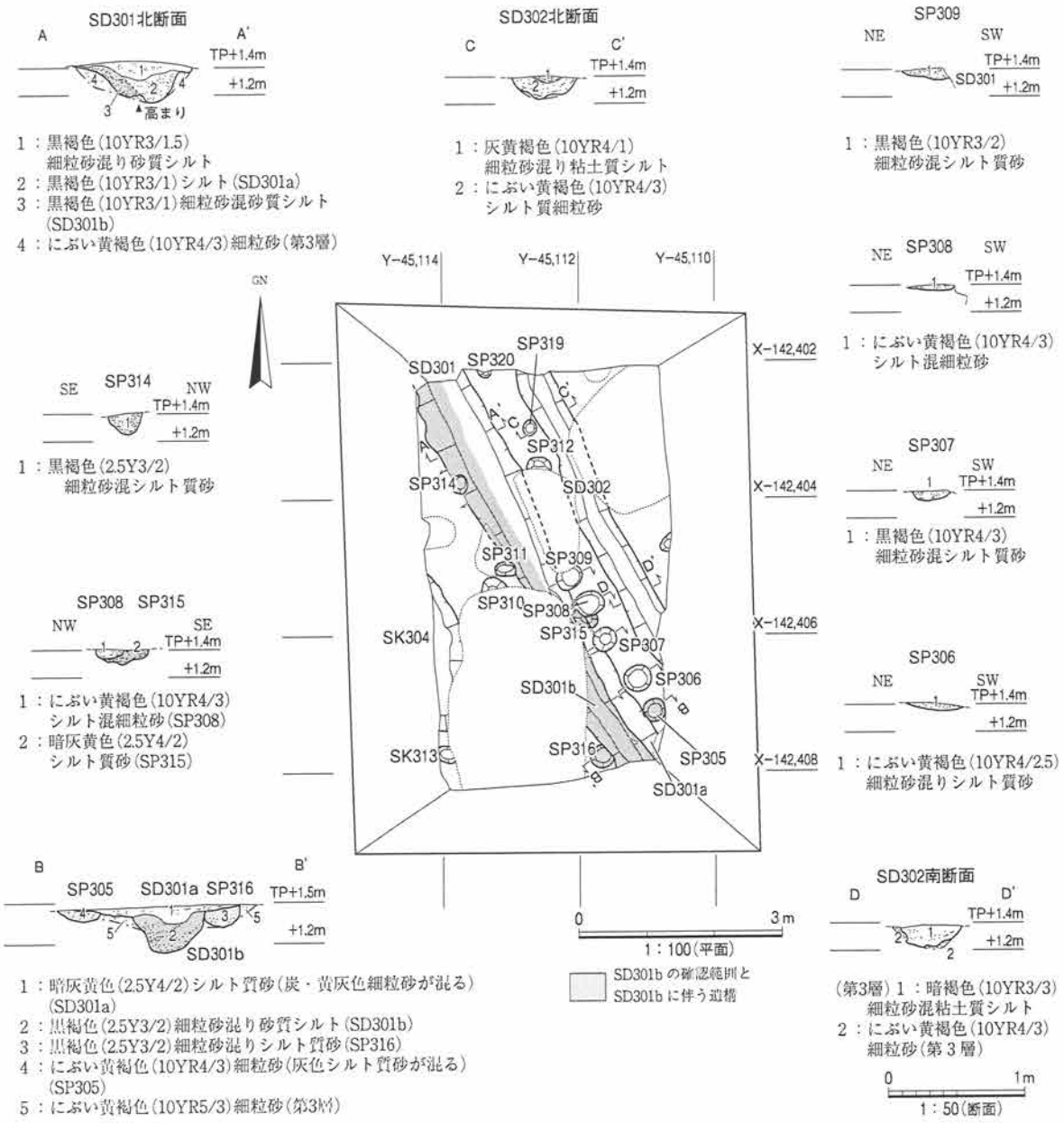


図5　第3層上面の遺構

にずれた位置に掘られていた。深さは0.5～0.6mで、底面は調査区の両端で5cmほどの高低差があり、北西側が少し低くなっている。

溝の両肩際には直径0.3～0.4m、深さ10cmほどの小穴が並んでおり(SP305～309・311・312・314～316・320)、これらは暗オリーブ褐色細粒砂混りシルトで埋められていた。

SD302は、SD301aの約1m東にほぼ平行に掘られた溝で、幅0.45m、深さは15～18cmある。埋土は暗褐色細粒砂混粘土質シルトで、水の流れた痕跡があり、その方向は南東から北西方向である。

このほか、土壙が西壁際で2基見つかったが(SK304・313)、攪乱によって大きく削平されているため、性格はよくわからない。SK304は、東西0.4m、南北2.3m分が残っており、深さは25cmで、埋土は黒褐色シルト質砂である。SK313は、南北0.3m、東西0.3m以上を測り、深さは20cmで、埋土は暗褐色砂質シルトである。

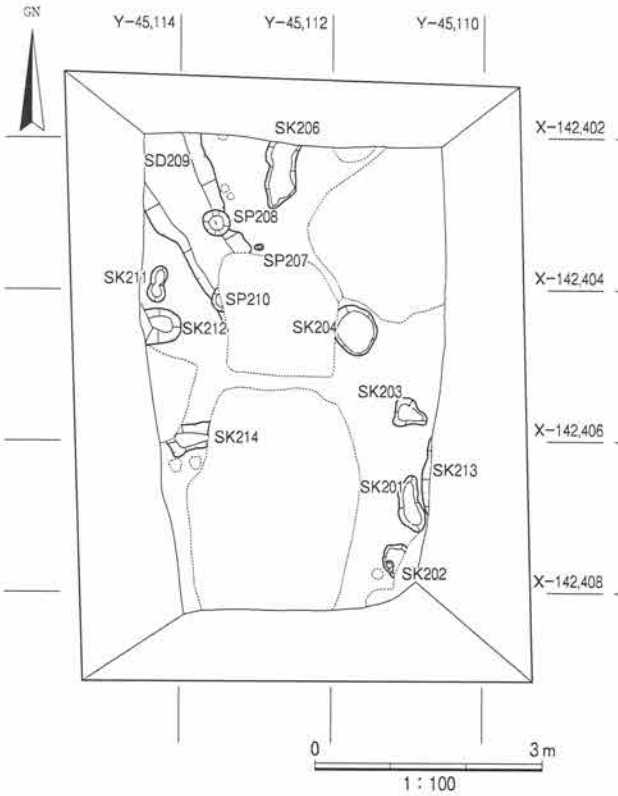


図6　第2層上面の遺構

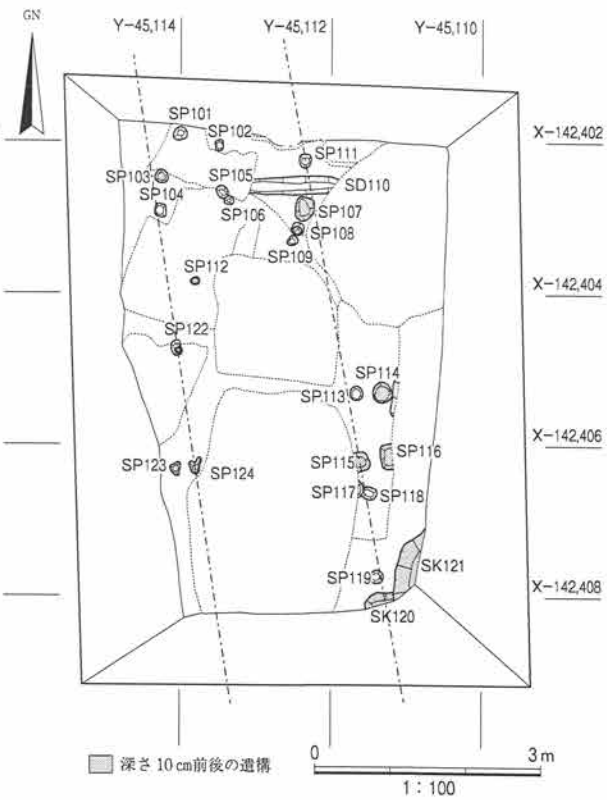


図7　第1層上面の遺構

第2層上面(図6・8、写真図版下段)

第2層の上面では溝と土壙が見つかった。

SD209は、幅約1.0m、深さは25cmの溝である。調査区の中央から北西隅にかけて見つかった。埋土は黒褐色極細粒砂混り砂質シルトで、炭を含む。SD209は第3層上面のSD301a・301bとほぼ同じ位置にあり、北西方向の溝である。SD301a・bの埋まりきらずに残った凹みが埋積されたものであろう。埋土から瓦器椀の破片4・5が出土した。あまり密ではないが、器表面にヘラミガキがある。13世紀のものと推定され、これらがSD209の時期を示す。

SK206は、調査区北端で見つかった、幅約0.4m、深さ4～15cmの南北に細長い土壙である。埋土は3層に分かれ、上層がにぶい黄褐色礫・シルト混り細粒砂、中層が暗灰黄色細粒砂混シルト、下層が黒褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

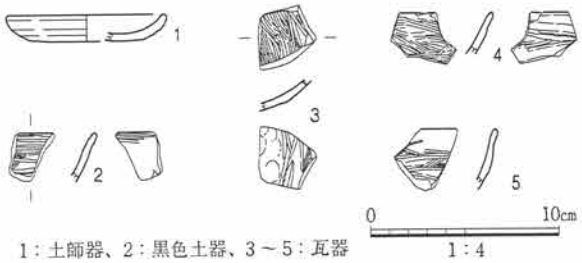
このほか南北約0.5m、東西0.5m以上、深さ40cmのSK212や、南北約0.8m、東西約0.3m、深さ8cmのSK201、南北約0.5m、南北約0.3m、東西0.5m以上、深さ5cmのSK214、南北約1.0m、東西0.1m以上、深さ5cmのSK213は平面形が楕円形または溝状の土壙で、東西約0.2m、深さ12cmのSK211は平面瓢箪形の土壙である。ほかに、直径約1.2m、深さ5cmのSK204、直径約0.4m、深さ6cmのSP208、南北約0.4m、東西0.3m以上、深さ5cmのSK202、南北約0.4m、東西0.1m以上、深さ14cmのSP210、長径約0.5m、短径約0.4m、深さ12cmのSK203がある。土壙の埋土はいずれも黒褐色シルト質砂である。これらの土壙から遺物は出土していない。

第1層上面(図7)

本層上面では溝と小穴、土壙が検出された。

SD110は、幅0.25m、深さ最大10cmで、埋土は灰黄褐色細粒砂である。土師器片と肥前磁器の白磁片が出土した。

土壙はSK120・121が調査区南東隅で見つかった。SK120はSK121により東側が切られている。東西0.4m以上、南北0.2m以上で、深さは45cmある。埋土は灰黄褐色細粒砂である。SK121は東西0.3m以上、南北1.0m以上、深さ45cmの土壙で、埋土は炭混りの暗黄褐色細粒砂である。どちらも遺物は出土しなかった。



1：土師器、2：黒色土器、3～5：瓦器

図8　遺物実測図

SD209(4・5)、第1a層(2・3)、表土掘削中(1)

小穴は、深さ30cm程度の深いものと10cm程度の浅いものとがある。

深いほうの一群は、直径10～20cmの円形の小穴で、直径8cm前後の柱抜取穴があるもの(SP108・122)もある。埋土は暗灰黄色礫・炭混り細粒砂で、柱抜取穴には灰黄褐色粘土質砂が詰まっていた。

遺物はSP108から焼塩壺の破片、SP101・102・104から肥前磁器の破片が出土し、これらが江戸時代の遺構であることがわかる。

浅いほうの一群は、形も大きさもまちまちで、一辺が0.3mほどの平面隅丸方形のSP115・116や、直径0.1～0.3mの平面円形のSP103・107・112・114、長径0.2mほどの平面不整形なSP123・124がある。埋土はいずれも暗灰黄色礫・炭混り細粒砂である。

SP104・122・124、SP111・115・118・119は、方位北で西にやや振る柱筋にのるようであるが、明確に建物を復元するには至らなかった。

3)まとめ

今回の調査では、第1層上面で近世の遺構を、第2層上面で中世の遺構を検出した。第3層上面遺構からは遺物が出土していないので、詳細な時期はわからないが、図8に示した表土から出た土師器皿1や第2層出土の内黒の黒色土器2が第3層上面の遺構の時期を示す可能性がある。

今回は弥生時代や古墳時代の遺構・遺物は検出されなかったが、今後の調査の積み重ねによって、当該地の古代から近世に至る過程を明らかにできると思われる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「小倉商事㈱による建設工事に伴う確認調査(HH97－1)」:『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.19－27

2003、「本庄東遺跡発掘調査(HH01－2)報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－7

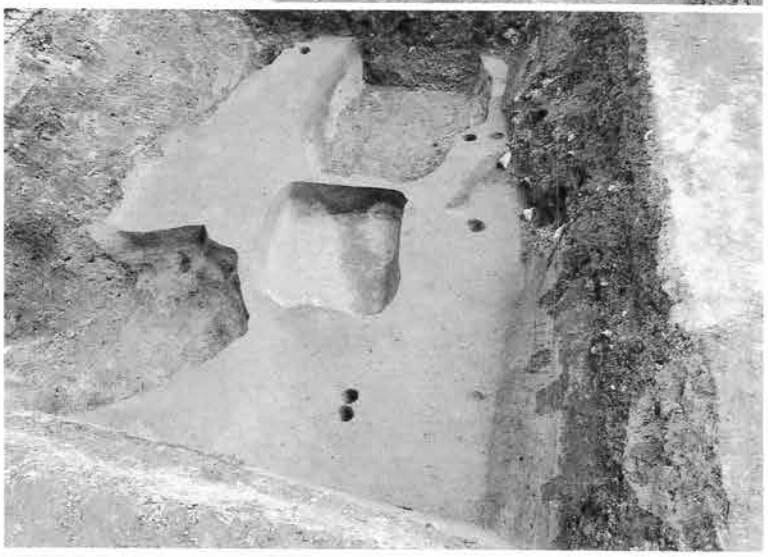
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「北区本庄東二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(HH10－1)報告書」:『平成22年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.1－10

2015、「本庄東遺跡発掘調査(HH13－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.15－22

北壁地層断面

第３層上面全景（北西から）

第２層上面全景（北から）



北区長柄西一丁目12－１における建設工事に伴う
長柄西遺跡B地点発掘調査(NN15－１)報告書

調査個所	大阪市北区長柄西一丁目12－1
調査面積	160㎡
調査期間	平成27年11月9日～11月17日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	大阪文化財研究所 調査課長 清水和明、積山洋

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は市営地下鉄「天神橋筋六丁目」駅の北東約250mの位置にあり、旧淀川の本流である大川の西岸に当る。現地表面の標高は約3.5mという低地である。当地の北西400mには家形埴輪が出土した長柄古墳や弥生時代とされる本庄東遺跡があり、北東400mには長柄東遺跡、南300mには摂津国分寺跡などの遺跡が存在する(図1)。

長柄西遺跡はもともと調査地の北方約500mの地点であったが、2011年、本調査地の北隣で実施された発掘調査では、埴輪や飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器を含む遺物包含層が確認され(NN11－2次調査)、長柄西遺跡B地点と称されるようになった[大阪文化財研究所2013]。

平成27年9月15日に数箇所で試掘調査を実施したところ、一箇所で地表下約1.7m以下の深さで中世～近世の遺構面と遺物包含層が確認されたため、その地点で本格的な発掘調査を実施することとなった(図2)。

調査は平成27年11月9日に開始した。地表下1.7mまで重機にて掘削し、それ以下は人力により掘り下げた。機械掘削の際、未知の地中障害物(大型の防火水槽)によって調査区南側の遺物包含層が破壊されていることが明らかとなり、関係諸機関と協議の上、その分を北西側に拡張して調査を行った。その結果、調査面積は当初予定の120㎡から160㎡となった。調査は、地表下1.7mより下に遺存する複数の遺構面を精査し、遺構の検出、遺物の採集、平面図・断面図の作成を行った。調査は11月17日にすべての現地作業を終了した。

本報告書で用いた方位は、発掘調査現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)

図1　調査地位置図

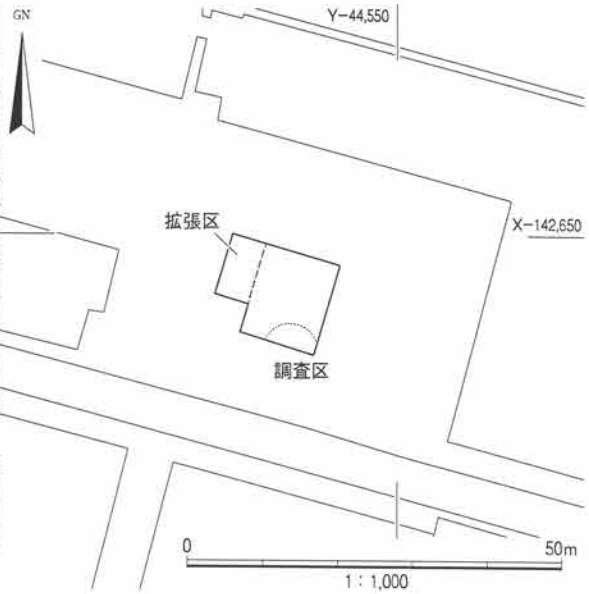


図2　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

である。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の地層は6層に区分される。第2a～3b層は、第2a層が近代を含むほかはいずれも近世の作土層で、第4層が自然堆積層である。

第1層：近現代の整地層で、盛土の厚さは約1mである。

第2a層：灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混りシルト層で、層厚は20～25cmである。年代を推定できる資料は出土していないが、下位層の年代から近世末～近代の層準とみられる。

第2b層：灰黄褐色(10YR5/2)砂混りシルト層で、層厚は15～20cmである。肥前磁器の細片、糸切底の

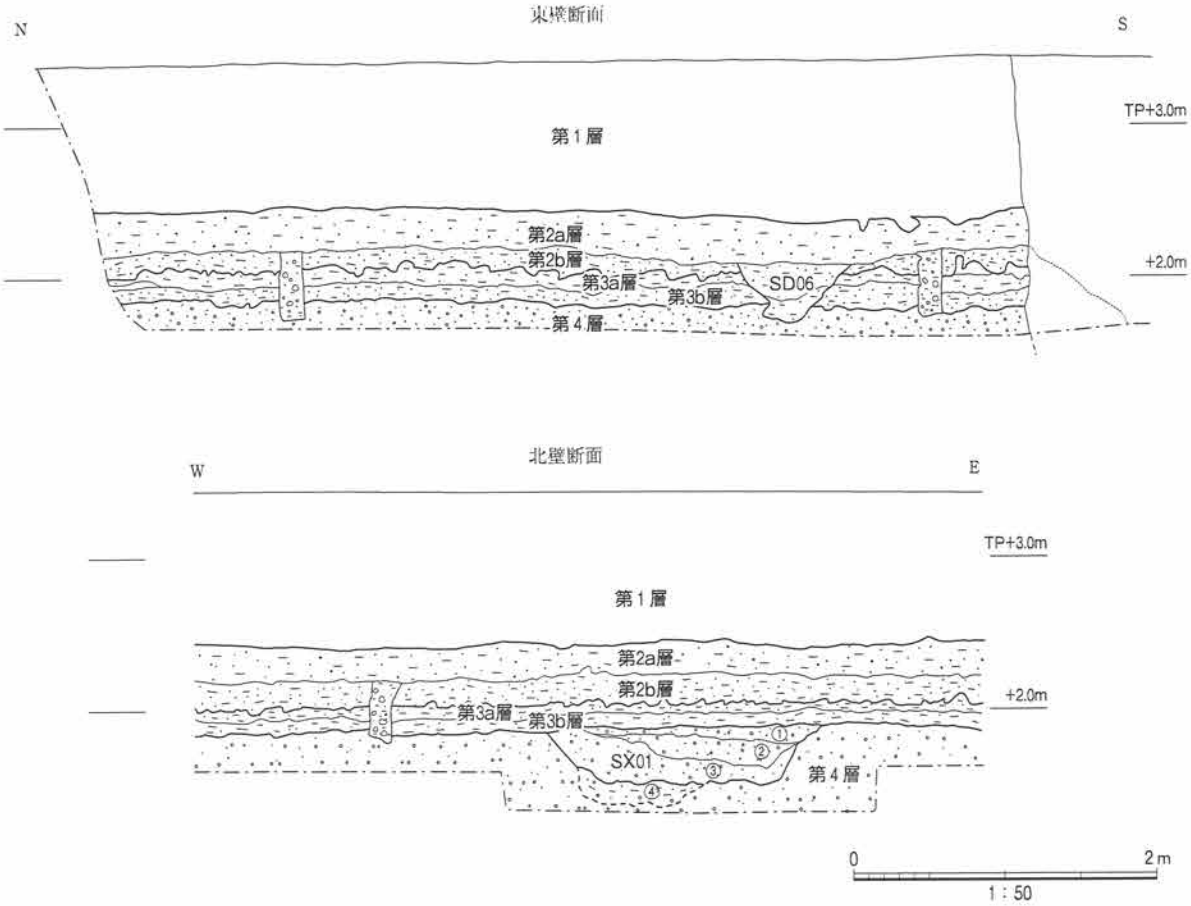


図4　東壁・北壁断面図

土師器皿のほか、白泥の上に染付する関西系陶器が出土しており、19世紀中ごろに年代の一点がある。

第3a層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂混りシルト層で、下位の3b層に比べて含有する砂は少ない。層厚は5～10cmである。土師器・須恵器・瓦器の細片などが出土しているが、下位層の年代より新しい層準である。

第3b層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂混りシルト層で、含有する砂は比較的多い。層厚は10cmほどである。肥前磁器の細片を含むので、江戸時代には降るが詳細は不明である。

第4層：明黄褐色(10YR6/6)の砂・礫層で自然堆積層である。本層には遺物は含んでいないが、上面で検出される遺構からまとまって出土した須恵器により、年代の下限は6世紀である。

ii)遺構と遺物

第4層上面遺構(図5)

SX01：調査区の北側で検出された不定形な落込みである。蛇行する流路かとも思われるが、埋土

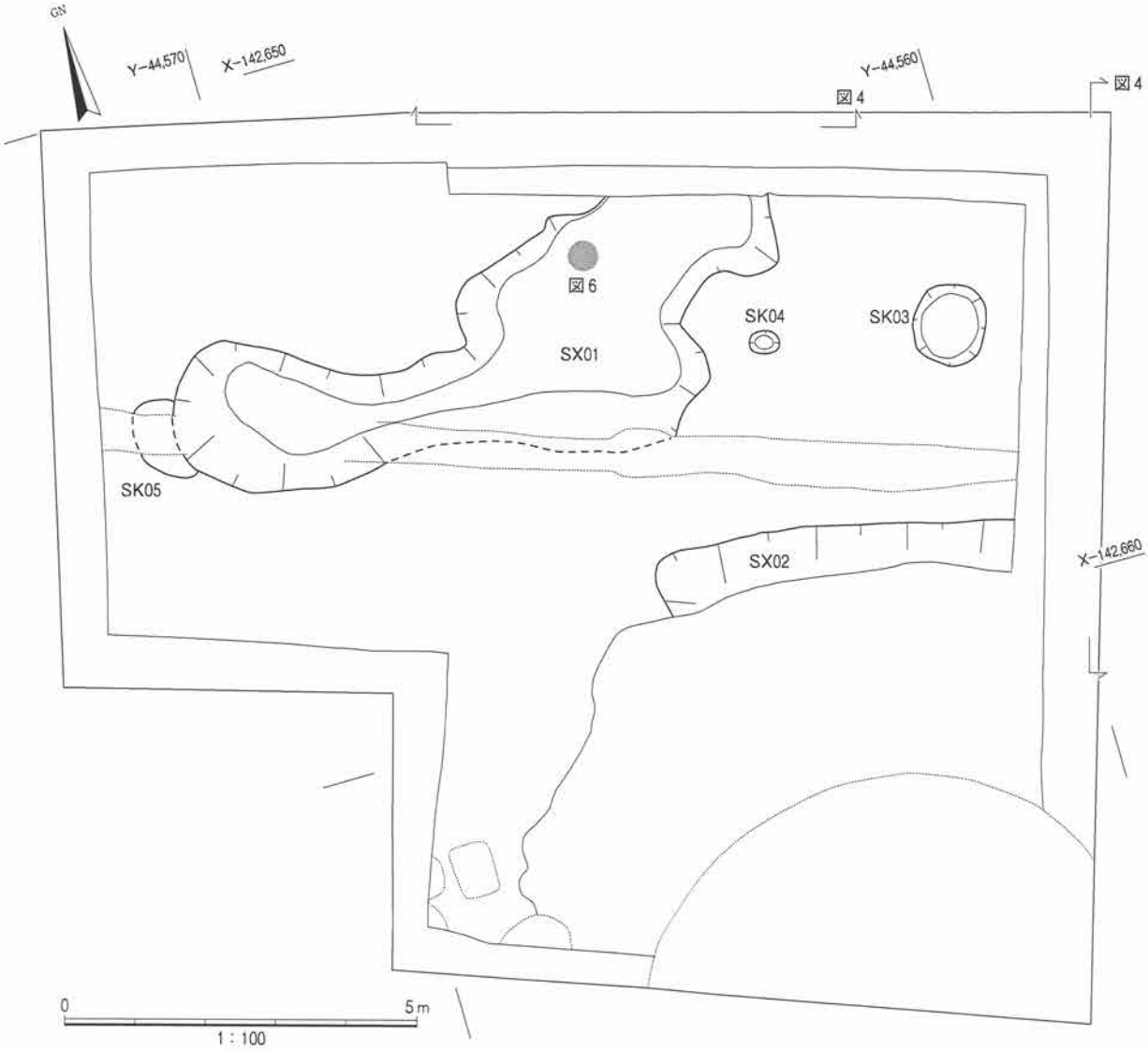


図5　第4層上面遺構平面図

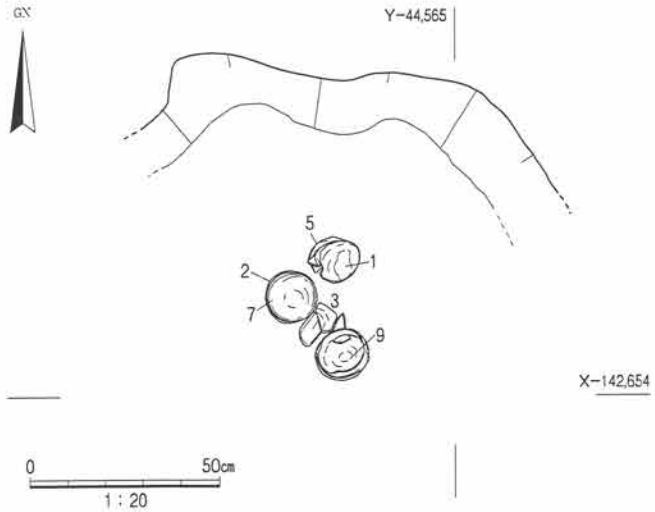


図６　須恵器蓋杯出土状況

は図４北壁断面図に示した①～③であり、再堆積した第４層の砂礫が主体であるが、ラミナ等は明瞭でない。深さは0.2～0.3m程度であるが、北壁の断面観察では約0.5mとみられた。ただ、そこでは下位に生痕が顕著であり（図４北壁断面図の④層）、その部分は遺構外かもしれない。そうであれば、ここでの深さは0.4m程度となる。落込みの上半部から数箇所で須恵器が出土した。その大半は甕等の破片であるが、うち一箇所では完形の杯蓋が杯身の上にかぶさった状態で出土した（図６）。それらは図７の１と５、２と７がセットであり、その脇でも３と９が出土した。ただし、３と９は口径からみると組合っていた可能性は低い。蓋がかぶさった２セットの蓋杯の内部にはこの遺構の埋土と同じ粗粒砂が充満していた。

出土土器は須恵器のみである（図７）。１～９は蓋杯である。このうち１～４は杯蓋である。口径は最小の１が13.0cm、最大の４が14.8cmである。天井部外面の回転ヘラケズリは範囲が狭くなる傾向にあり、天井部下端の稜の突出は丸味を帯びて鋭さを欠く。５～９は杯身である。口径は最小の５が11.0cm、最大の９で13.6cmを測る。口縁端部は内側に面を作り出す７～９と、丸く終わる５・６がある。10は短頸壺で、口縁部が直立して蓋とセットになるものである。11～13は甕であり、このうち13は平底で底部内面まで成形時の当て具痕（青海波）がおよぶという特異な土器である。これらの須恵器は、５・６の口縁端部に新しい傾向がみられるものの、おおむねMT15型式に位置づけられる。

SX02：SX01の南東で部分的に検出されたごく浅い落込みであるが、防火水槽の攪乱壙に壊されており、詳細は不明である。検出部分で東西約５m、深さ約0.1m未満であった。遺物は出土していない。

土壙：SK03は調査区の東側で検出された円形の土壙である。東西約１m、南北約1.2mで、深さは0.1m程度である。平面と断面で生痕が顕著に見られた。遺物は出土しなかった。SK04は東西0.4m、南北0.3mほどの小土壙で、深さは約0.2mである。遺物は出土していない。SK05はSX01と重複し、かつSX01に先行する遺構であるが、後述のSD06とも重複しており、詳細は不明である。南北規模は約１mであった。遺物の出土はない。

第3a層下面遺構（図８）

小溝群：この面ではおもに調査区の東側で東西方向の小溝が検出された。第3a層の耕作に伴う、いわゆる犂溝群がごく部分的に遺存したようである。下位の第3b層の年代により、これらは江戸時代のものとみられる。

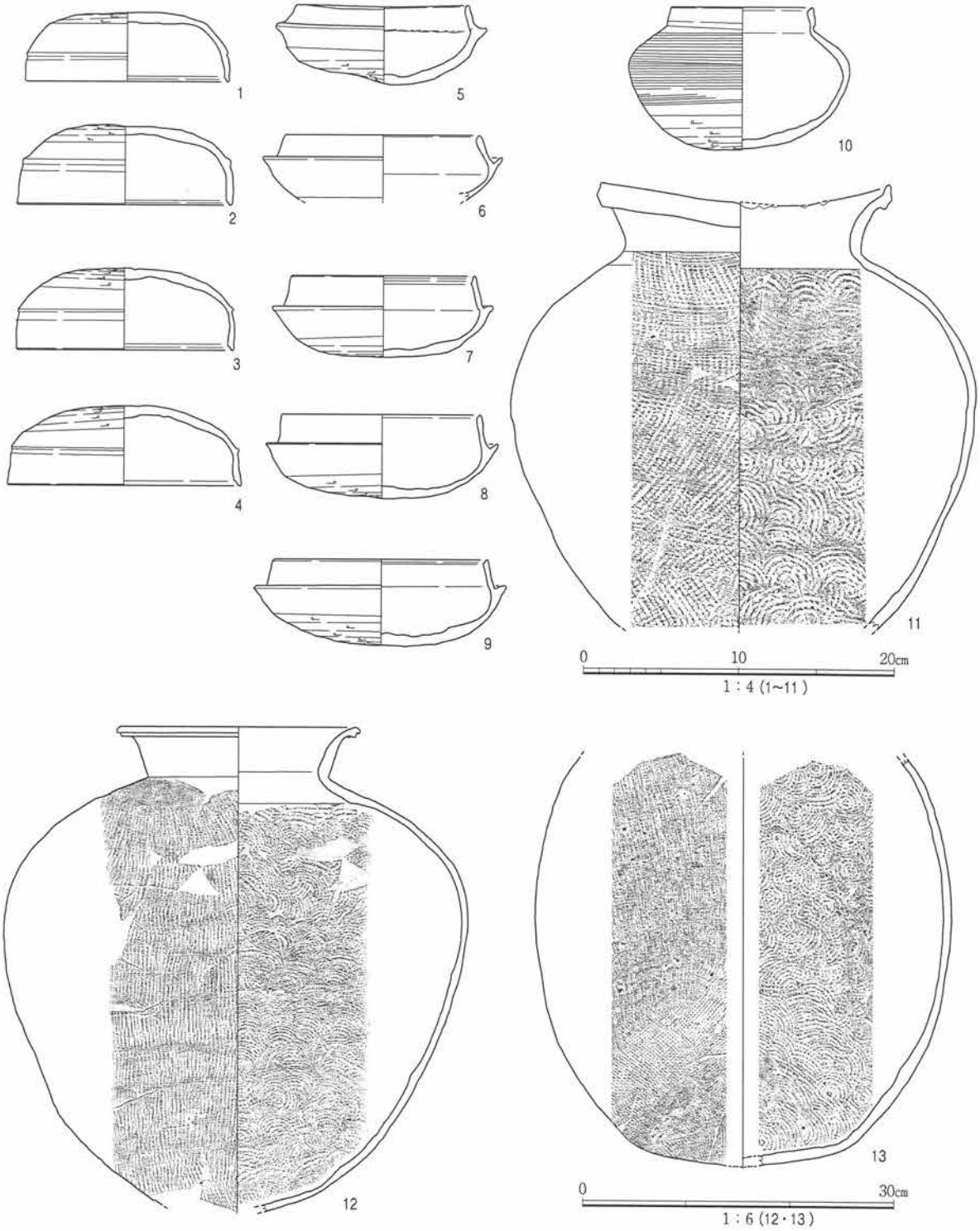


図７　SX01出土遺物実測図

第2b層上面検出遺構（図８）

大きく分けて、東西溝とその南の土壙群からなる古段階と、方形の小穴群からなる新段階の遺構がある。

古段階：SD06は幅0.8～1.0m、深さ0.4mの直線的な溝である。埋土は砂混りシルトであるが、砂の多い上層と少ない下層に大別され、上層ではシルトや砂の偽礫が混るなど、人為的に埋めたものと

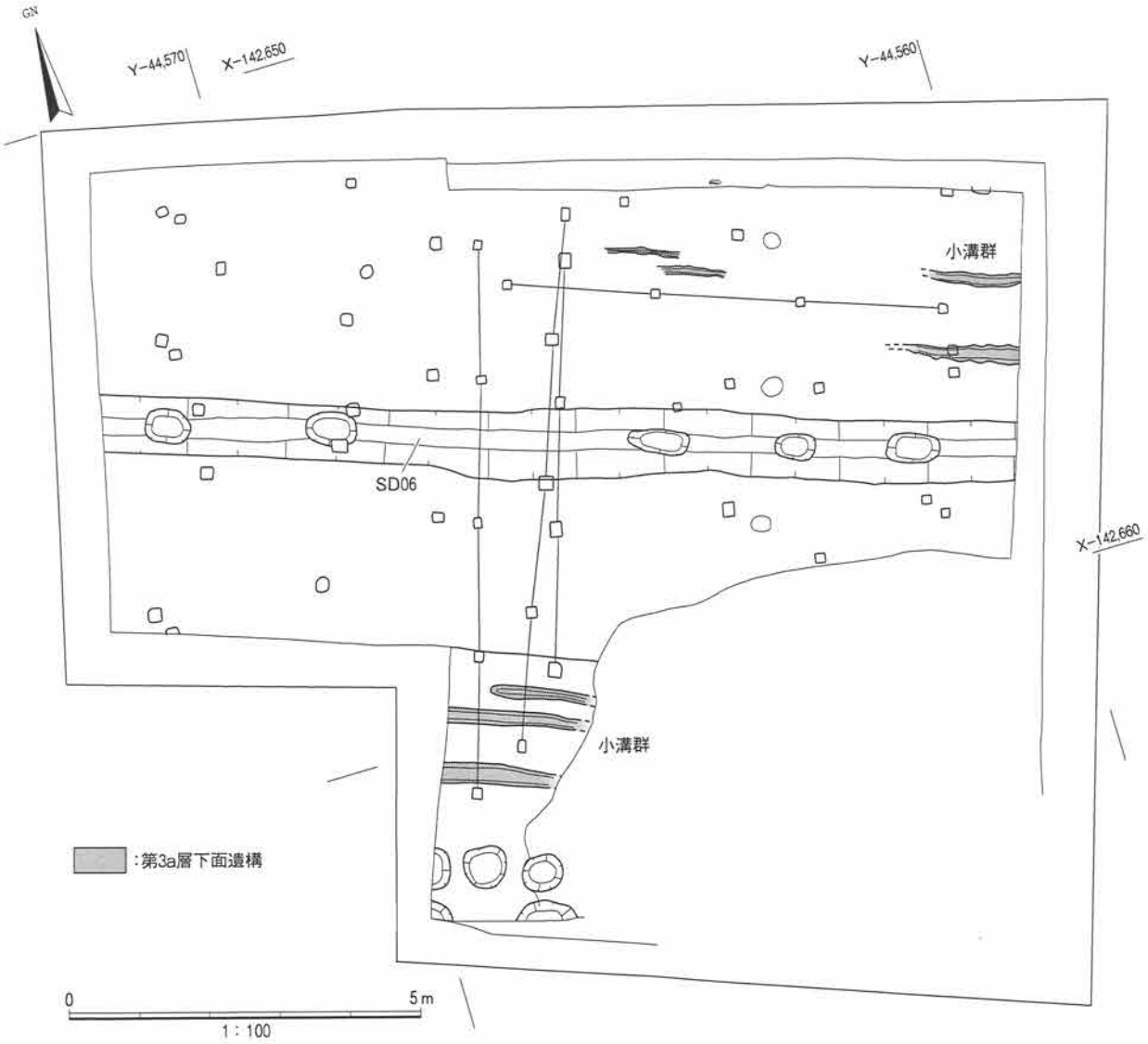


図8　第3層・第2層検出遺構平面図

みられる。溝の底には点々と楕円形で深さ0.1mほどの掘り込みが見られた。これらも人為的に埋められたものである。中央部を除いてその間隔は2m前後であったが、規則的というほどではない。18世紀後半の陶磁器等が出土したが、下位の第2b層の年代からみると、古くとも近世末、おそらく近代初めごろの溝であろう。

新段階：一辺15cm前後の方形の小穴が多数検出された。深さはまちまちで、浅いもので0.4mほど、深いものでは0.6mほどである。柱列のように一直線に並ぶ例もいくつか見られたが、建物を構成するにはいたらなかった。埋土には偽礫が入っており、人為的に埋められていた。おそらく近代の所産であろうが、その性格はよくわからない。

3)まとめ

今回の調査成果は、事前の予想に反して6世紀前半(MT15型式)の須恵器がまとまって出土したことである。それらは数箇所に散在しており、投棄されたものと思われる。ただし、蓋をかぶせた状態

の蓋杯が２セットあったことは、古墳での類例をみるまでもなく、なんらかの祭祀が行われたことを示すであろう。甕類もそれに伴う供献物が入っていたのかもしれない。当時、この地の付近に居住者たちがいたことは確かであろう。

調査地は、東と南が大川(淀川の本流)、北は新淀川開削(1910(明治43)年)以前の中津川に囲まれた低地である。この地の開発は、南方の大川沿いの北岸で５世紀に始まっていたことが判明している[小田木富慈美2004]。一方、調査地が位置するこの低地の北部の開発をうかがわせるのは、旧中津川南岸に位置する「長柄古墳」であろう[中村博司1975]。ただ、ここでは墳丘が未確認で、家形埴輪の出土が知られるのみである。家形埴輪は明らかに無黒斑で焼成されたものであるが、その年代は５～６世紀としかいえない(少し限定しても５世紀後半～６世紀前半であろう)。今回出土の須恵器は、この期間内に収まるものである。

大川北岸の開発が、５世紀に進んだことと呼応して、その北方約２kmのこの地も、遅くとも６世紀前半には開発の手がおよんでいたことが判明した。これが今回の調査の大きな成果であろう。それが具体的にどういう内容であったのか、今後の調査の進展が期待される。

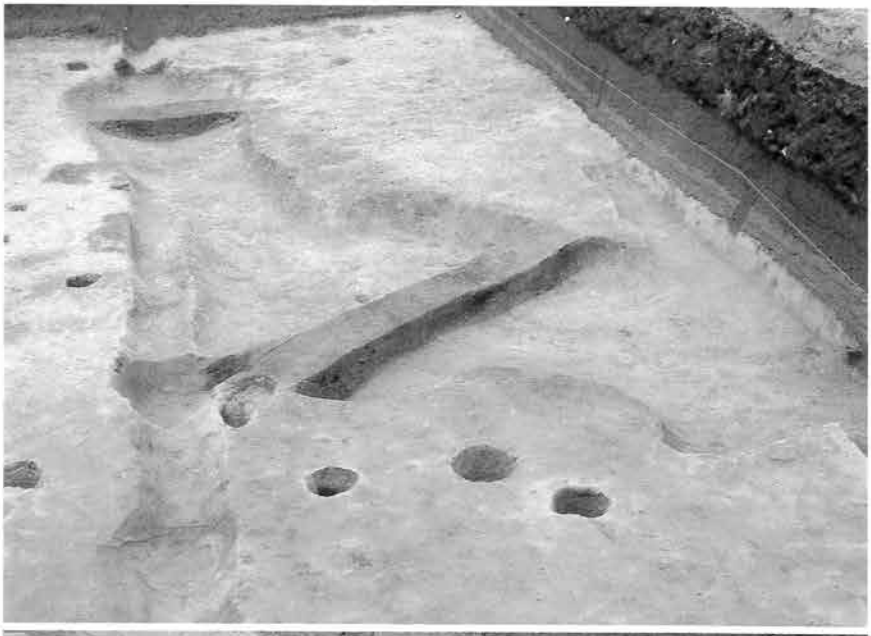
参考文献

大阪文化財研究所2013、『長柄西遺跡B地点発掘調査報告』

小田木富慈美2004、「古墳時代の天満～砂州上のムラ～」:『葦火』113号、大阪市文化財協会。

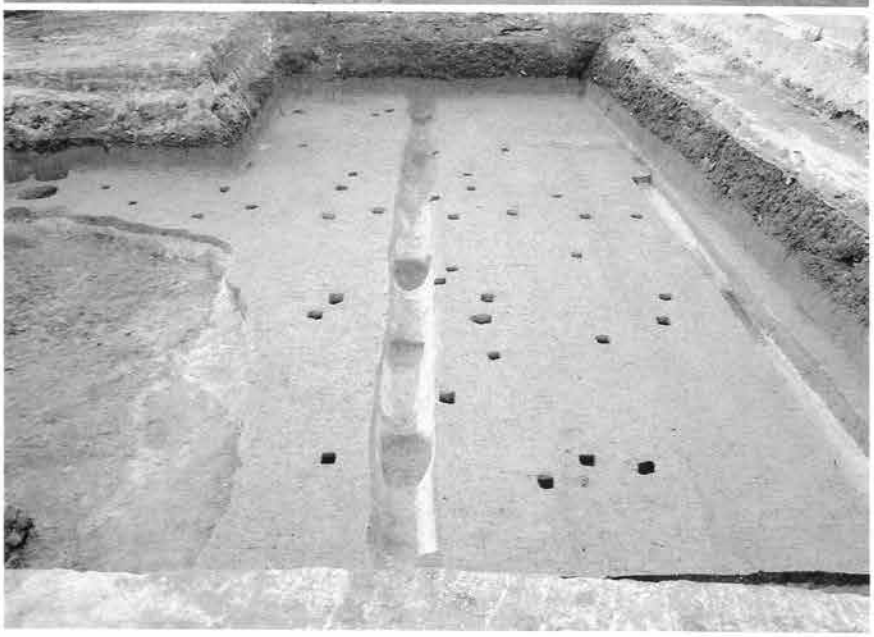
中村博司1975、「大阪市内出土の埴輪鳥・家について」:『大阪城天守閣紀要』第３号

SX01
（東から）



SX01遺物出土状態
（南東から）

第２・３層の遺構全景
（東から）



北区天満橋一丁目12－２における建設工事に伴う
天満橋１丁目遺跡C地点発掘調査(TW15－１)報告書

調査個所	大阪市北区天満橋1丁目12－2
調査面積	144㎡
調査期間	平成27年7月6日～7月28日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、櫻田小百合

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は同心町遺跡から南に約300m、天満本願寺跡から北へ約300mの地点に位置する。建設工事に先立ち大阪市教育委員会が行った試掘調査において弥生～江戸時代の遺物を含む地層が確認されたことにより新たに発見された遺跡で、天満橋1丁目所在遺跡C地点とされた。

調査地から現在の天満橋筋を挟んだ西側には豊臣期に寺町が形成され、徳川期にはこの北側に町奉行所や与力・同心屋敷が拡がっていたことが絵図により明らかである。また、1878(明治11)年以前は大川に架かる天満橋が現在の位置よりも一筋東に架けられており、この延長上にあたる調査地東を通る南北道が天満橋筋と呼ばれていた。豊臣期に形成された寺町に近く、主要な交通路に面した調査地における豊臣～徳川期の様相が明らかになることが期待された。

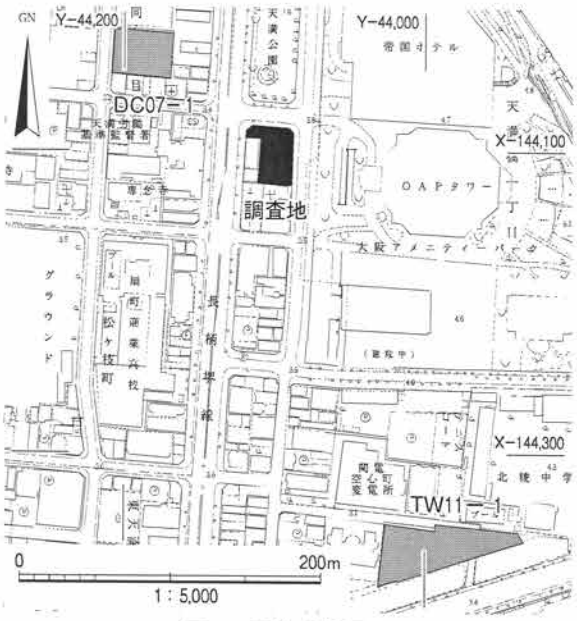


図1　調査地位置図

周辺調査としては、DC07－1次調査があげられる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。この調査では中世および弥生時代中期前～中葉の遺構が確認されている。弥生時代の遺構は、ここ以外に北方の同心町遺跡でも確認されており、今回の調査においても弥生時代の遺構が確認されることが期待された。

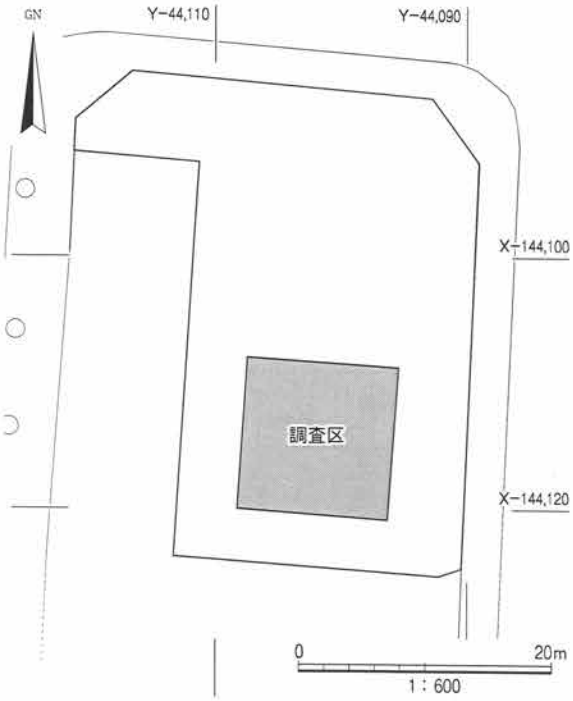


図2　調査区位置図

発掘調査は平成27年7月6日に開始した。南北12m、東西12mの調査区を設定し、第0～2層を重機により掘削し、第3層上面以下の遺構および地層を人力により掘り下げ、TP+0.15mまで調査を行った。これらの作業と並行して実測図の作成および写真撮影による記録作業を行い、7月27日に調査を完了し、28日に撤収した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP+

○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3～5、図版1)

調査地における標高はTP+3.3～3.5mでほぼ平坦である。

第0層　現代の整地層で層厚は30～97cmである。

第1層　19世紀以降の整地層で、第1a層と第1b層に細分できる。第1a層は炭をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)・黒褐色(2.5Y3/2)わずかにシルト質細粒砂、黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルトを主とし、層厚は100cmである。第1b層は黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト、灰黄褐色(10YR4/2)わずかにシルト質中粒～細粒砂、黄褐色(10YR5/6)わずかにシルト質中粒砂からなり、層厚は最大28cmである。

第2層　にぶい黄色(2.5Y6/4)・にぶい黄橙色(2.5Y6/4)粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大27cmである。19世紀の整地層とみられる。

第3層　暗褐色(10YR3/4)・黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂、炭・細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒～細粒砂、炭・細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質中粒砂を主とし、層厚は最大16cmである。19世紀の整地層とみられる。

第4層　にぶい黄褐色(10YR5/4)・にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂を主とし、層厚は最大45cmである。19世紀の整地層とみられる。

第5層　炭・細粒砂質シルト偽礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト、オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～細粒砂、炭・焼土をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR5/3・4/3)・暗褐色(10YR3/3)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大30cmである。19世紀初頭～前葉の整地層で、調査区南端部にのみ分布した。

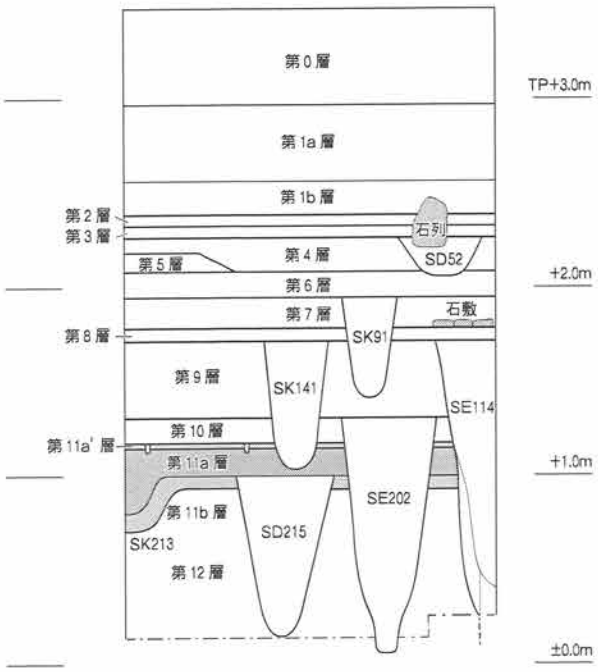
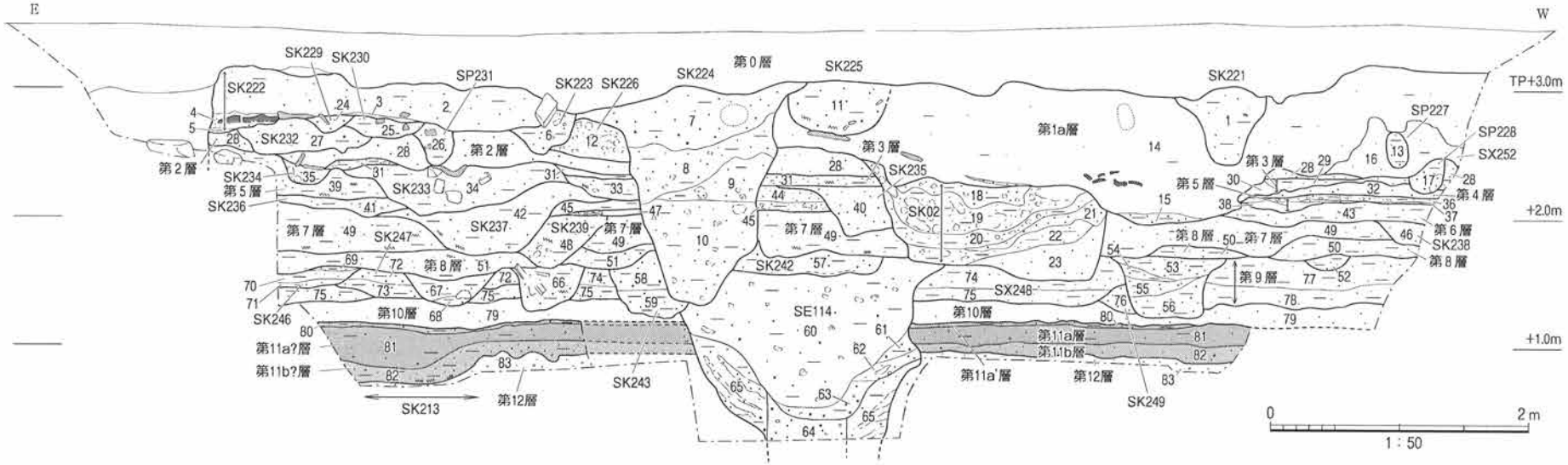


図3　地層と遺構の関係図

第6層　炭・焼土をわずかに含む暗褐色(10YR3/2・3/3)中粒～細粒砂質シルト、炭を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～極細粒砂質シルト、炭・シルト質粗粒～中粒砂偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大28cmである。18世紀後葉の整地層である。

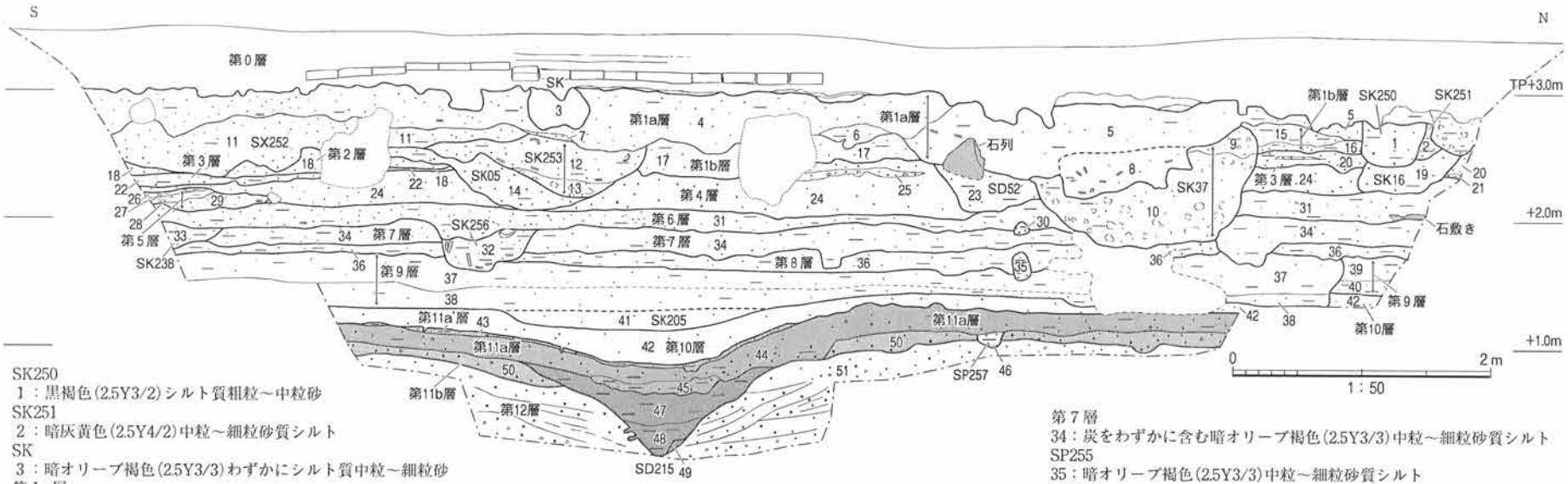
第7層　炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルトからなり、層



SK221
1：炭をわずかに含む黒褐色(10YR3/2)細粒砂～細粒砂質シルト
SK222
2：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂
3：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)わずかにシルト質細粒砂
5：灰オリーブ色(5Y5/2)わずかにシルト質細粒砂
SK223
6：炭・漆喰・極細粒砂質シルト偽礫を含む暗褐色(10YR3/4)シルト質中粒砂
SK224
7：炭をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒～中粒砂
8：細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y3/2)中粒砂質シルト
9：粗粒～中粒砂偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質中粒砂
10：極細粒砂質シルト・細粒砂質シルト偽礫・細礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒～細粒砂質シルト
SK225
11：炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)わずかにシルト質粗粒～中粒砂
SK226
12：炭を含むにぶい黄橙色(10YR6/4)極細粒砂質シルト偽礫
SP227
13：炭をわずかに含む黒褐色(10YR3/2)中粒～細粒砂質シルト
第1a層
14：炭をわずかに含む黒褐色(2.5Y3/2)わずかにシルト質細粒砂
15：黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質シルト
SX252
16：炭をわずかに含む暗褐色(10YR3/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂
SP228
17：第4層偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルト質中粒砂
SK02
18：極細粒砂質シルト偽礫を含む暗褐色(5YR3/4)シルト質中粒砂
19：極細粒砂質シルト偽礫を多量に含むにぶい黄橙色(10YR6/4)細粒～極細粒砂質シルト
20：極細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄橙色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト
21：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂
22：極細粒砂質シルト偽礫を含む褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト
23：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂
SK229
24：炭・漆喰を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂
SK230
25：炭・漆喰を含む褐色(10YR4/4)わずかにシルト質中粒～細粒砂
SP231
26：漆喰を含む暗褐色(10YR3/3)わずかにシルト質中粒砂
SK232
27：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルト質中粒砂
第2層
28：にぶい黄色(2.5Y6/4)・にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒～中粒砂
第3層
29：暗褐色(10YR3/4)わずかにシルト質中粒～細粒砂
30：黒褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂
31：炭・細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒～細粒砂、
炭・細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト
第4層
32：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
SK
33：炭・シルト質細粒砂偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト

図4　南壁地層断面図

SK233
34：10～20cm大の礫・漆喰を含む黒褐色(2.5Y3/2)中粒～細粒砂質シルト
SK234
35：粗粒～中粒砂・中粒～極細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
第5層
36：炭・細粒砂質シルト偽礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト
37：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
38：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～細粒砂
39：炭・焼土をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト
SK235
40：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂
SK236
41：炭・焼土を含む褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト
SK237
42：炭を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～極細粒砂質シルト
第6層
43：炭・焼土をわずかに含む暗褐色(10YR3/2)中粒～細粒砂質シルト
44：炭を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～極細粒砂質シルト
45：炭・シルト質粗粒～中粒砂偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト
SK238
46：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂
SK92
47：焼土を多量に含む暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルト
SK239
48：炭・シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト
第7層
49：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト
第8層
50：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～細粒砂質シルト
51：炭・細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト
SP240
52：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～細粒砂質シルト
SK241
53：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒～細粒砂質シルト
54：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト
55：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂
56：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト
SK242
57：黄褐色(2.5Y5/3)粗粒～中粒砂質シルト
SK243
58：中礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂
59：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～細粒砂質シルト
SE114
60：細礫・細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂(井桁抜取り穴)
61：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒～中粒砂（井桁抜取り穴）
62：細礫・シルト質中粒砂偽礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂（井桁抜取り穴）
63：細礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極粗粒～粗粒砂（井桁抜取り穴）
64：細礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)極粗粒～粗粒砂（井戸側抜取り穴）
65：中粒砂偽礫を含む灰黄色(2.5Y6/2)シルト質粗粒～中粒砂（掘形埋土）SK244
66：炭・瓦を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒～細粒砂質シルト
SK245
67：炭をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～細粒砂質シルト
68：第10層偽礫を含む黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒砂(加工時形成層)
SK246
69：炭をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～細粒砂質シルト
70：炭をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂
71：炭をわずかに含む黄灰色(2.5Y4/1)中粒～細粒砂質シルト
SK247
72：にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかにシルト質粗粒砂
73：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト
SX248
74：細礫をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/4)中粒～細粒砂質シルト
75：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト
SK249
76：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂
第9層
77：細礫をわずかに含む褐色(10YR4/4)中粒～細粒砂質シルト
78：褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂
第10層
79：褐色(2.5Y4/4)中粒砂
第11a'層
80：黒褐色(10YR3/2)細粒～極細粒砂
第11a層
81：細礫を含む暗褐色(10YR3/3)わずかにシルト質粗粒～中粒砂
第11b層
82：細礫を含む黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～中粒砂
第12層
83：細礫をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒～粗粒砂



SK250
1：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒～中粒砂
SK251
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～細粒砂質シルト
SK
3：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂
第1a層
4：炭をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)・黒褐色(2.5Y3/2)
わずかにシルト質細粒砂
5：炭をわずかに含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト
6：炭をわずかに含む暗褐色(10YR3/4)わずかにシルト質細粒砂
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
8：炭・貝を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト
SK37
9：極細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)
シルト質中粒～細粒砂
10：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒～極細粒砂偽礫を多量に含む
褐色(7.5YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト
SX252
11：炭をわずかに含む暗褐色(10YR3/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂
SK253
12：炭を含む暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒～細粒砂
13：14の偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂 [加工時形成層]
SK05
14：黄褐色(2.5Y5/6)わずかにシルト質粗粒～中粒砂
第1b層
15：黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト
16：灰黄褐色(10YR4/2)わずかにシルト質中粒～細粒砂
17：黄褐色(10YR5/6)わずかにシルト質中粒砂
第2層
18：にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒～中粒砂
SK16
19：黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂
第3層
20：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質中粒砂
・黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂
21：灰黄色(2.5Y7/2)シルト質細粒砂
22：暗褐色(10YR3/4)わずかにシルト質中粒～細粒砂
SD52
23：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質中粒砂
第4層
24：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂
25：粗粒～中粒砂質シルト偽礫を含む
にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒～中粒砂
第5層
26：炭・細粒砂質シルト偽礫を含む
暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト
27：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
28：細礫をわずかに含む暗褐色(10YR3/3)粗粒～中粒砂質シルト
29：炭をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR5/3)・暗褐色(10YR3/3)
細粒～極細粒砂質シルト
SP254
30：黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～中粒砂質シルト
第6層
31：炭・焼土をわずかに含む暗褐色(10YR3/3)中粒～細粒砂質シルト
SK256
32：瓦・礫・炭を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト
SK238
33：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂
第7層
34：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト
SP255
35：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト
第8層
36：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～細粒砂質シルト
第9層
37：細礫をわずかに含む褐色(10YR4/4)中粒～細粒砂質シルト
38：褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂
39：細礫をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～細粒砂質シルト
40：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルト
SK205
41：褐色(10YR4/4)中粒砂
第10層
42：褐色(2.5Y4/4)中粒砂
第11a'層
43：黒褐色(10YR3/2)細粒～極細粒砂質シルト
第11a層
44：細礫を含む暗褐色(10YR3/3)わずかにシルト質粗粒～中粒砂
45：黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～極細粒砂質シルト
SP257
46：細礫をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
わずかにシルト質粗粒～中粒砂
SD215
47：黒色(2.5Y2/1)シルト
48：黒色(2.5Y2/1)わずかに粗粒砂質シルト
49：第12層偽礫を含む黒色(2.5Y2/1)シルト[加工時形成層]
第11b層
50：細礫を含む黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～中粒砂
第12層
51：細礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒～粗粒砂・粗粒砂

図5　西壁地層断面図

厚は最大39cmである。18世紀前葉の整地層である。

第８層　にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～細粒砂質シルト、炭・細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大24cmである。17世紀後葉～18世紀初頭の整地層である。

第９層　細礫をわずかに含む褐色(10YR4/4)・オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～細粒砂質シルト、褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂、黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトからなり、層厚は最大43cmである。徳川初期の整地層とみられる。

第10層　褐色(2.5Y4/4)中粒砂からなる河成層である。５世紀以降に堆積したものであるが詳細な時期は不明である。

第11層　弥生時代～古墳時代の古土壌で第11a層と第11b層に細分できる。第11a層・第11b層の上面はいずれも後述するSD215を境に南側がやや低い。第11a層は細礫を含む暗褐色(10YR3/3)わずかにシルト質粗粒～中粒砂、黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～極細粒砂質シルトからなり、この上部に第11a'層としたやや泥質な黒褐色(10YR3/2)細粒～極細粒砂質シルトが堆積する。層厚は、第11a'層は最大７cm、第11a層は最大34cmである。第11b層の古土壌が形成された後にこれを覆う河成層が堆積し、土壌生成された地層である。第11b層は第12層上部に形成された古土壌である。細礫を含む黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大20cmである。第11a層は５世紀、第11b層は弥生時代中期前半の地層である。

第12層　細礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒～粗粒砂・粗粒砂・粗粒砂主の粗粒～中粒砂からなる河成層で、層厚は67cm以上である。本層以下には遺物を含まない。本層上部を一部掘り下げて平面精査を行って流向を確認したところ、北西－南東方向の流向が確認できた。これまで推定されてきたとおり、淀川からの堆積作用により調査地周辺が陸地化したようすが確認できた。

ⅱ)遺構と遺物

遺構検出は第３・４層上面と第５～12層の各上面で行った。

a. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

第12層上面遺構と遺物(図６～８、図版２上)

第12層上面でSP217、SK213・214・218、SD215を検出した。壁面の観察や埋土の特徴から本来の層準はSD215は第11b層上面、SP217・SK214・218は第11b層中、SK213は第12層上面の遺構である。

SK213は東西0.98m以上、南北0.83m以上、深さ0.22mの土壙である。

遺物は弥生土器３～６が出土した。３は広口壺の頸部で櫛描直線文を施す。４は壺の底部である。５は甕で、体部外面は縦方向のハケ調整を施す。６は鉢で、口縁部下から体部上半に櫛描直線文を巡らせ、体部外面にはミガキを施す。これらの土器は畿内第Ⅱ様式に位置づけられる。

SP217は東西0.42m、南北0.22m以上、深さ0.16mの円形の土壙で、埋土は炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質極粗粒～粗粒砂である。遺物は出土していないが、第11b層の年代から弥生時代中期前半の遺構である。

SK214は北西－南東0.48m、北東－南西0.30m、深さ0.05mの浅い土壙で、埋土はわずかにシルト

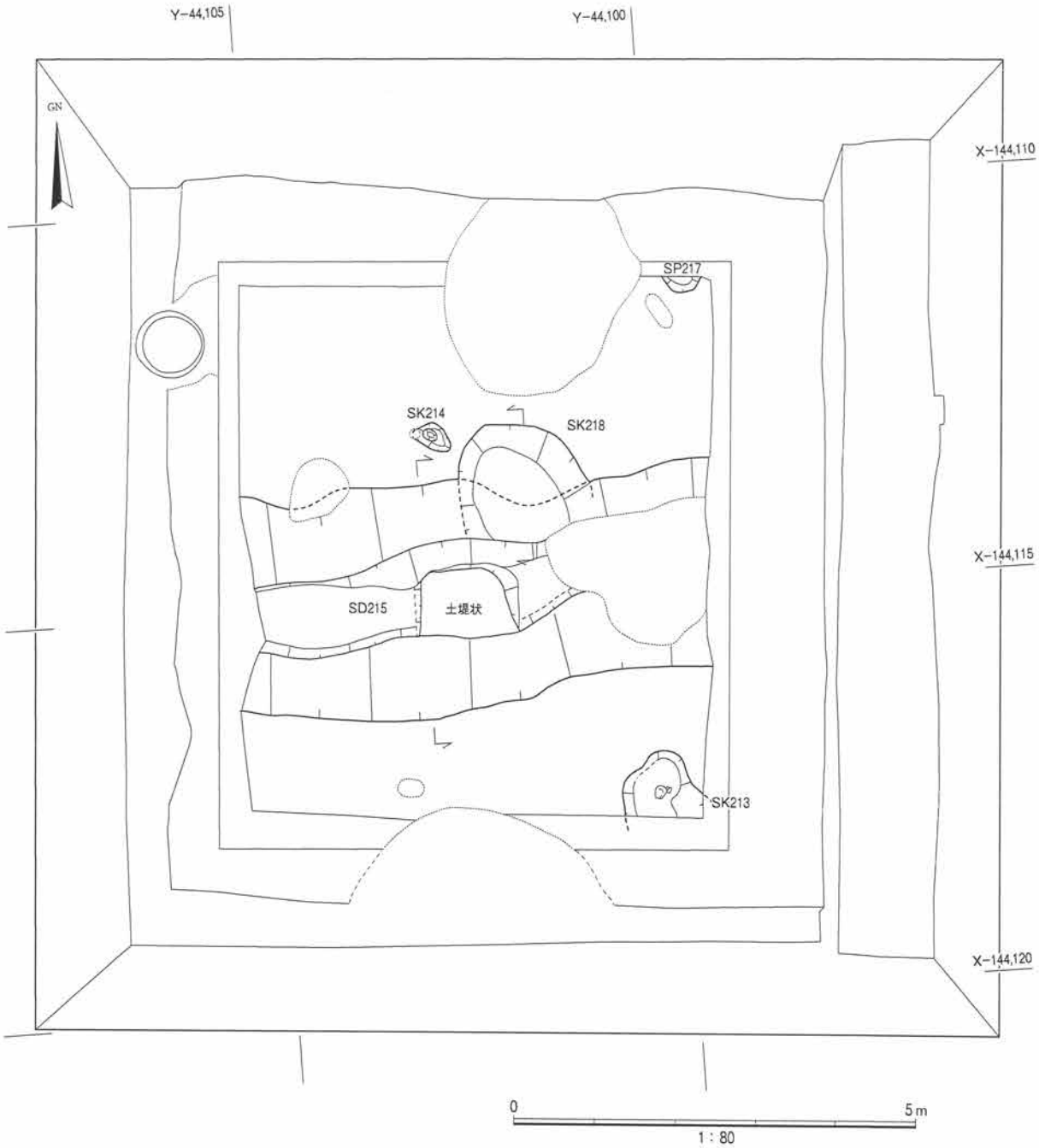


図６　第12層上面遺構平面図

質粗粒～中粒砂である。

SK218は東西1.60m、南北1.42m以上、深さ0.30mの円形の土壙である。SD215と重複しており、これよりも古い遺構である。広口壺の口縁部１が出土している。口縁端部は上下にやや拡張し、端面に櫛描波状文を施す。畿内第Ⅱ様式に属する。

SD215は最大幅3.10m、深さ0.81mの東西方向の溝である。シルトで埋没していることから、水流は弱く徐々に埋没したものとみられる。中央部には土堤状の部分が認められ、溝の底が一定程度埋没した後に第11b層を削り土堤状に盛土されたものと推定され、土橋の可能性がある。

遺物は広口壺２のほか、頸部下端に押捺突帯をめぐらす壺が出土していることから畿内第Ⅲ様式の

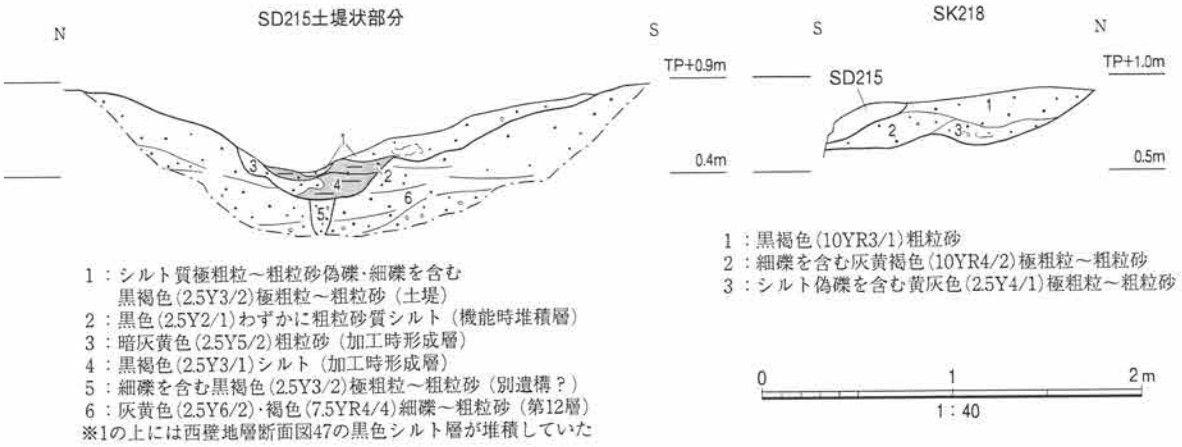


図７　12層上面遺構断面図

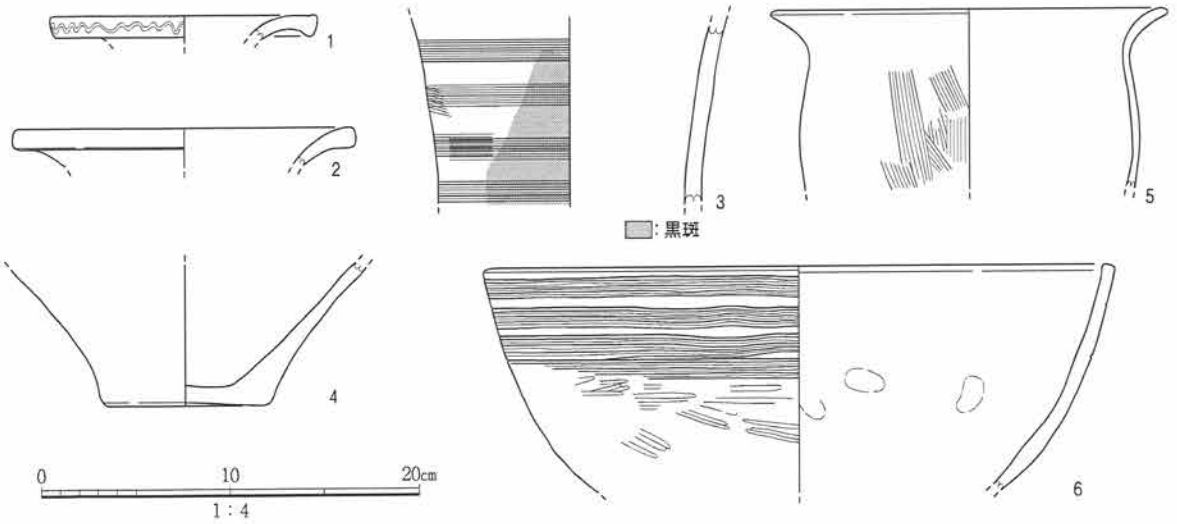


図８　第12層上面遺構出土遺物実測図
SK213(３～６)、SD215(２)、SK218(１)

遺構とみられる。

第11a層上面(図版２中)

第11a層上面では遺構は確認されなかったが、下位のSD215の上部が東西方向の窪みとして残っていた。また、第10層を埋土とする巣穴とみられる生痕が認められた。

b. 豊臣～徳川期の遺構と遺物

第10層上面の遺構と遺物(図９～11、図版２下)

第10層上面でSP189・194・198・199・206・208・209・211・212、SK190・193・200・201・205・207、SE202を検出した。

SP189は直径0.31m、深さ0.30mで、柱痕跡は確認できなかったが柱穴の可能性がある。

SP208は直径0.13～0.15m、深さ0.22mで、杭穴の可能性がある。

SP211は直径0.25m、深さ0.25mで、柱穴の可能性がある。SK205で壊されており、これよりも古い遺構である。

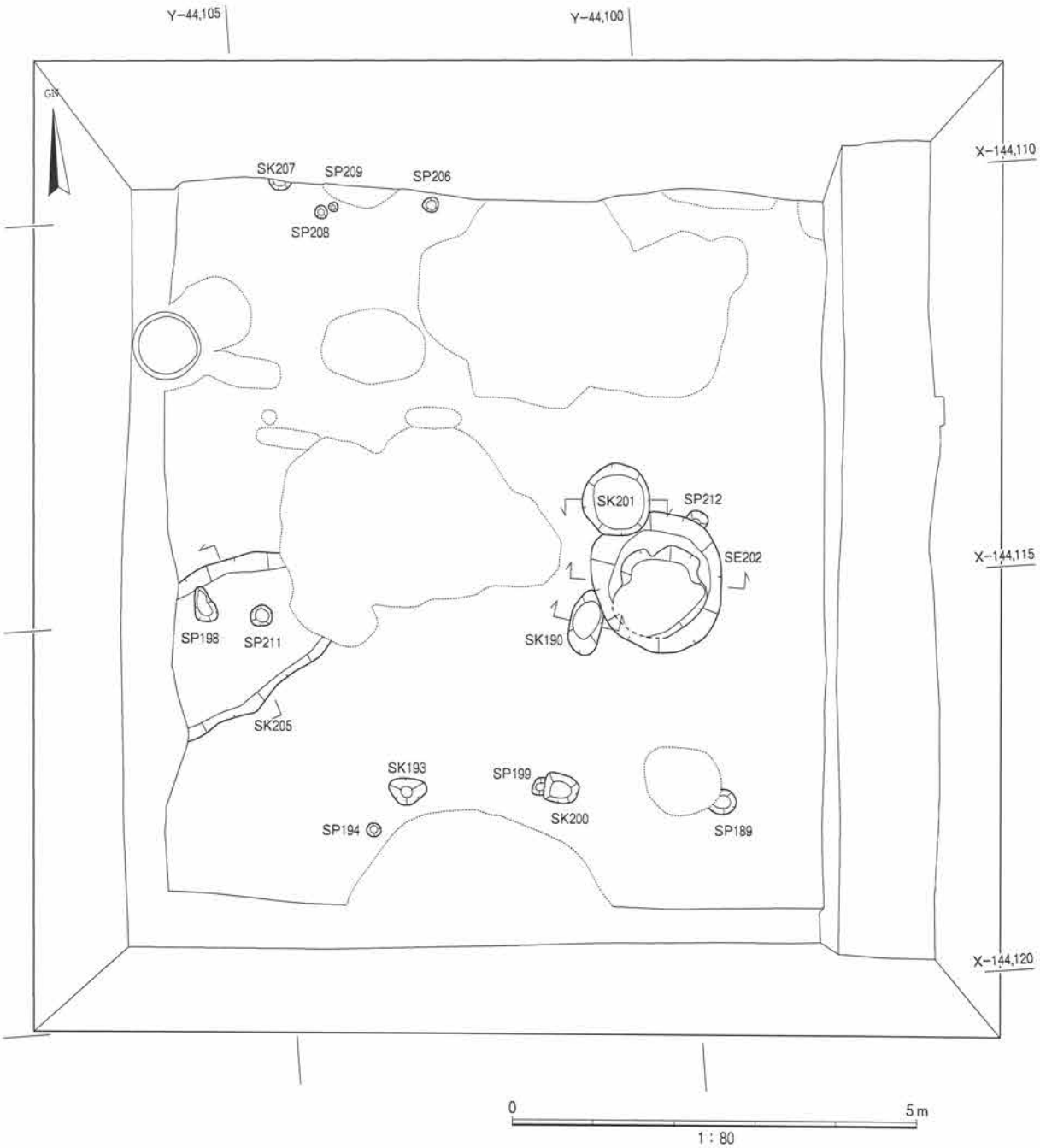


図9　第10層上面平面図

SP194・198・199・206・209・212は小穴である。SP194は直径0.17m、深さ0.08m、SP198は東西0.29m、南北0.42m、深さ0.12m、SP199は直径0.20m、深さ0.09m、SP206は直径0.19m、深さ0.13m、SP209は直径0.10m、深さ0.06m、SP212は直径0.25m、深さ0.17mである。

SK190は東西0.76m、南北0.80m、深さ0.13mの長円形の土壙である。

SK193は東西0.47m、南北0.32m、深さ0.53mの遺構である。比較的規模が大きいことから土壙としたが、深さから柱穴の可能性もある。

SK200は東西0.43m、南北0.36m、深さ0.29mの土壙である。

SK201は東西0.86m、南北0.88mの円形の土壙で、深さは0.27mである。SE202が埋められた後に

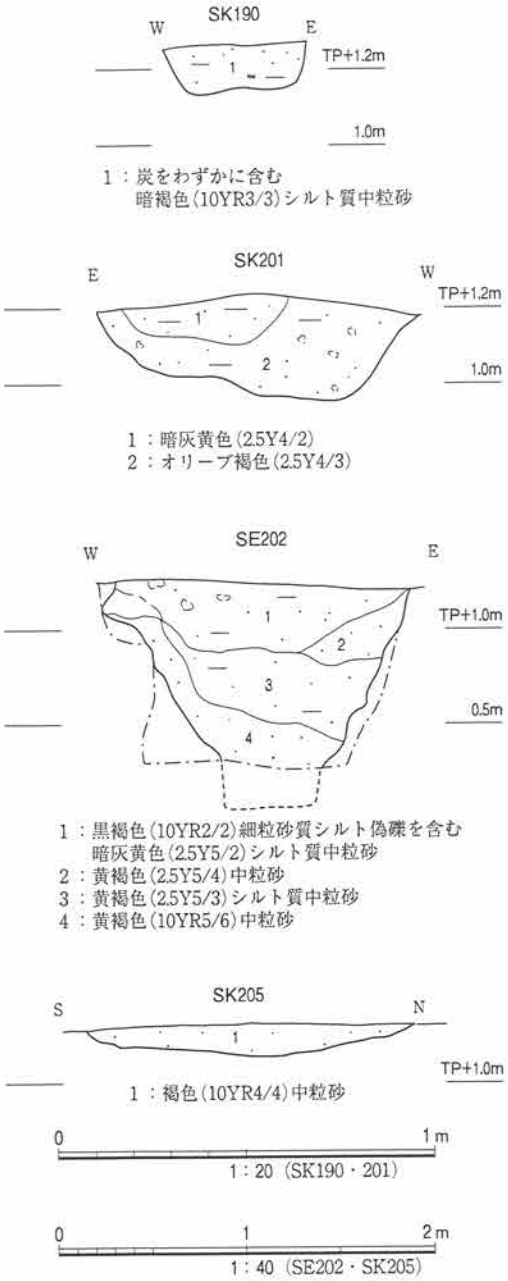


図10　第10層上面遺構断面図

掘られた遺構である。

SK205は東西2.00m以上、南北2.05m以上、深さ0.17mの浅い土壙である。

SK207は東西0.30m、南北0.13m以上、深さ0.16mの土壙である。

SE202は東西1.56m、南北1.75m、深さは1.20mの円形の井戸である。底には直径0.50mの円形の集水施設が認められる。埋土の堆積状況から人為的に埋められたもの考えられる。

遺物は7・8が出土している。7は中国産青花の粗製皿である。底部中央は無釉で、墨書「一」を記す。8は土師器皿ないしは蓋である。以上は豊臣期に属するものであろう。

これらの遺構のうちSE202を除いて時期判定が可能な遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、第11a層よりも新しく、豊臣期よりも古い時期の遺物が希薄であり、SE202と近い時期の遺構である可能性がある。

第9層上面の遺構と遺物(図11～14、図版3上)

第9層上面でSP112・116・118・120・123～126・131・134・145～147・151・155・156・160・165・168・169・174・180・181・184・188・220、SK110・111・113・115・117・119・121・127～129・132・133・135～137・139・142～144・148～150・152～154・157～159・161～164・166・167・170～173・175～179・182・183・185～187・203・204、SE114を検出した。

SP120は直径0.26～030m、深さ0.33mの遺構で、柱抜き取り穴の可能性がある。

SP145・151・155・174・184は杭穴の可能性がある。SP145は直径0.15m、深さ0.38m、SP151は直径0.12m、深さ0.17m、SP155は直径0.18～0.20m、深さ0.25m、SP174は直径0.10m、SP184は直径0.16m、深さ0.32mである。

SP112・116・118・123～126・131・134・146・147・156・160・165・168・169・180・181・188・220は小穴である。SP112は直径0.18～0.19m、深さ0.07m、SP116は直径0.25～0.26m、深さ0.09m、SP118は直径0.27～0.30m、深さ0.19m、SP123は東西0.26m、南北0.35m、深さ0.11m、SP124は直径0.22～0.24m、深さ0.12m、SP125は直径0.28m、深さ0.13m、SP126は直径0.28m、

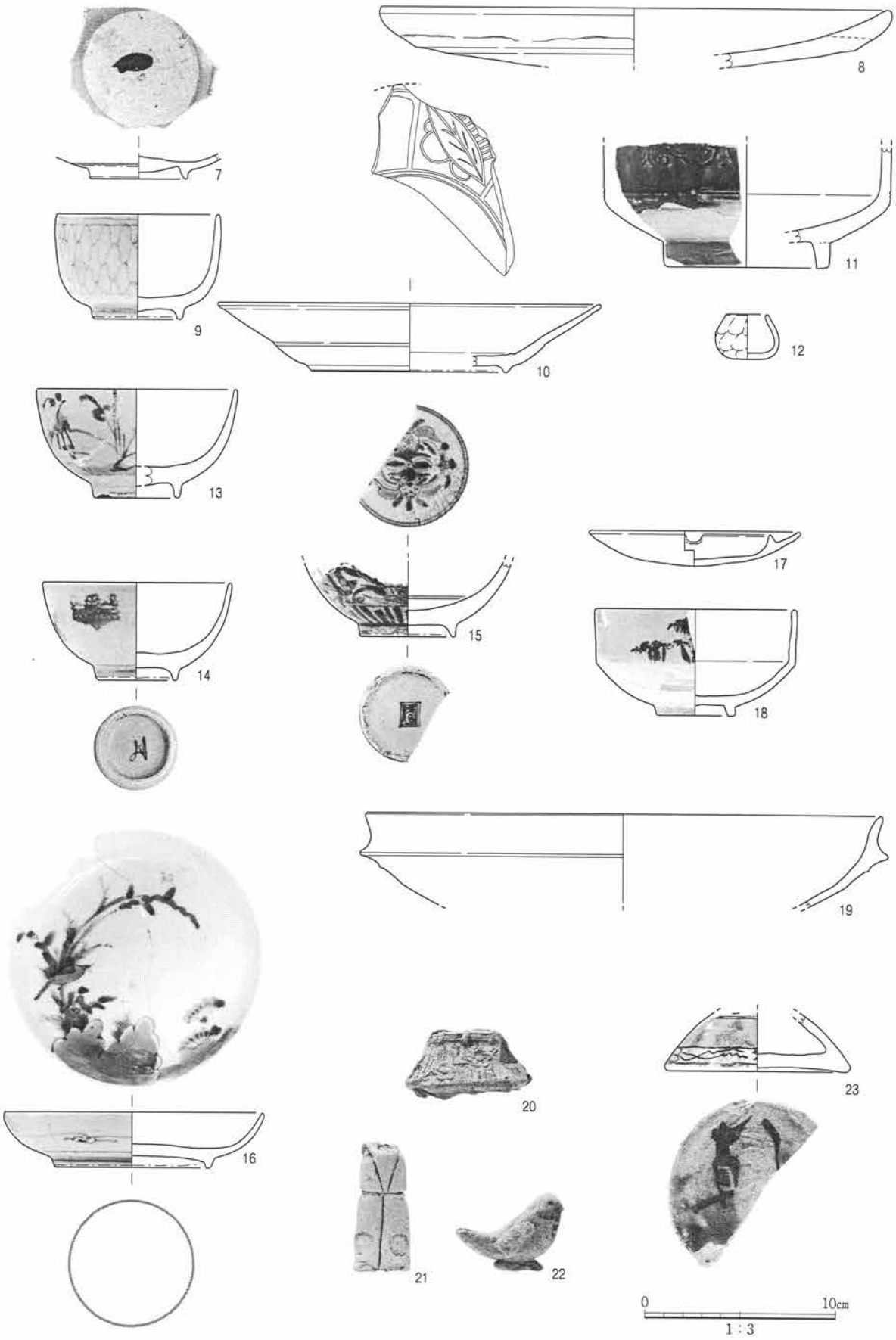


図11　出土遺物実測図

SE202(7・8)、SK128(9～12)、SK91(13～22)、SK95(23)

深さ0.05mである。SP131は直径0.21～0.26m、SP134は直径0.25～0.28m、深さ0.09m、SP146は直径0.38m、深さ0.03m、SP147は直径0.18m、深さ0.08m、SP156は直径0.12m、深さ0.10m、SP160は直径0.36m、深さ0.07m、SP165は直径0.30～031m、深さ0.05m、SP168は直径0.20～0.28m、深さ0.07m、SP169は東西0.27m、南北0.20m、深さ0.16m、SP180は直径0.33m、SP181は直径0.20～0.24m、SP188は直径0.38m、深さ0.11m、SP220は直径0.20～0.24m、深さ0.21mである。

SK110は東西0.22m以上、南北0.40m、深さ0.10mの土壙である。

SK111は東西0.54m、南北0.17m以上、深さ0.15mの土壙である。

SK113は東西0.53m、南北0.41m、深さ0.10mの浅い土壙である。

SK115は東西0.64m、南北0.66m、深さ0.22mの円形の土壙である。

SK117は東西0.54m、南北0.59m、深さ0.16mの土壙である。

SK119は東西0.60m、南北0.65m、深さ0.08mの浅い土壙である。

SK121は東西0.43m、南北0.49m、深さ0.37mの円形の土壙である。

SK127は東西0.30m、南北0.37m、深さ0.13mの土壙である。

SK128は東西0.49m、南北1.30m、深さ0.28mの長円形の土壙である。

遺物は9～12が出土した。9・10は肥前磁器である。9は染付碗で、一重網目文を施す。10は色絵素地とみられる白磁皿で、型押しで宝尽文を施す。11は銅緑釉を施す肥前陶器の鉢である。12は小型の土師器壺で通称「つぼつぼ」である。以上は17世紀後半に属する。SK129と重複しており、これより新しい遺構であることから17世紀後葉の遺構とみられる。

SK129は北西－南東0.72m、北東－南西0.35m、深さ0.10mの浅い土壙である。出土遺物から17世紀後葉の遺構とみられる。

SK132は東西0.30m以上、南北0.24m、深さ0.09mの浅い土壙である。

SK133は東西0.52m、南北0.26m、深さ0.13mの土壙である。

SK135は東西0.83m、南北0.47m、深さ0.13mの土壙である。

SK136は東西0.34m、南北0.43m、深さ0.04mの浅い土壙である。SK137と重複しており、これよりも新しい遺構である。

SK137は直径0.51mの円形の土壙で、深さは0.05mである。

SK139は東西0.82m、南北0.50m、深さ0.08mの浅い土壙である。出土遺物から17世紀後葉の遺構とみられる。

SK142は東西0.52m以上、南北0.46m以上、深さ0.12mの土壙である。SK167と重複しており、これよりも新しい。

SK143は直径0.45～0.47m、深さ0.14mの円形の浅い土壙である。SK144と重複しており、これよりも新しい遺構である。

SK144は東西0.98m以上、南北0.54m、深さ0.05mの浅い土壙である。

SK148は東西0.60m以上、南北0.17m以上、深さ0.13mの土壙である。

SK149は東西0.70m以上、南北0.62m以上、深さ0.10mの土壙である。

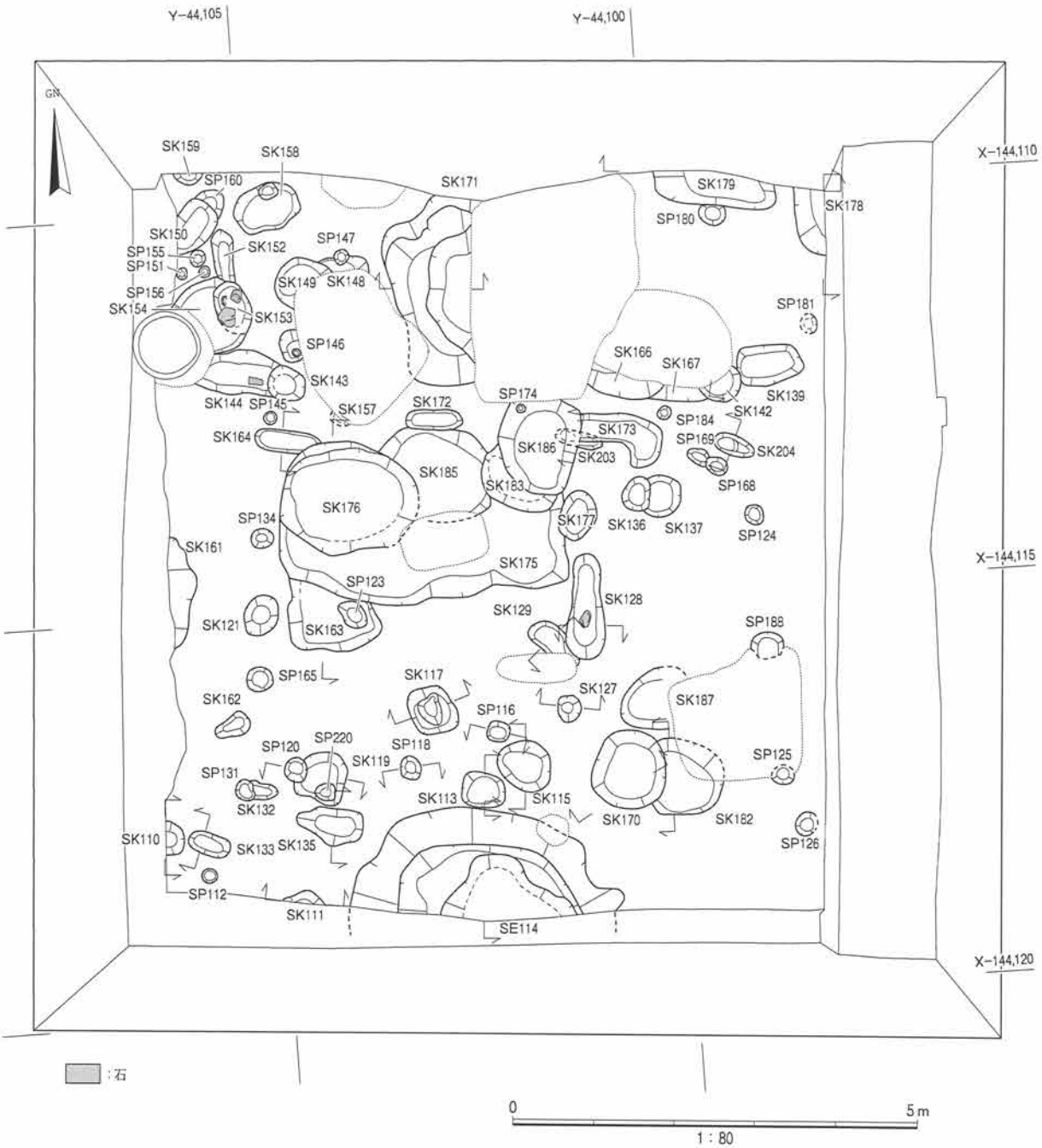


図12　第９層上面平面図

SK150は北西－南東0.47m、北東－南西0.70m以上、深さ0.06mの浅い土壙である。

SK152は東西0.26m、南北0.65m以上、深さ0.06mの浅い土壙である。

SK153は北西－南東0.69m、北東－南西0.43mの長円形の土壙で、深さは0.13mである。土壙の底には10～20㎝程度の礫が出土した。SK154と重複しており、これよりも新しい遺構である。出土遺物から17世紀代の遺構とみられる。

SK154は東西1.00m以上、南北0.96mの円形の土壙で、深さは0.20mである。

SK157は北西－南東0.3m程度、北東－南西0.1m程度の土壙で、深さは0.22mである。出土遺物から17世紀前半の遺構とみられる。

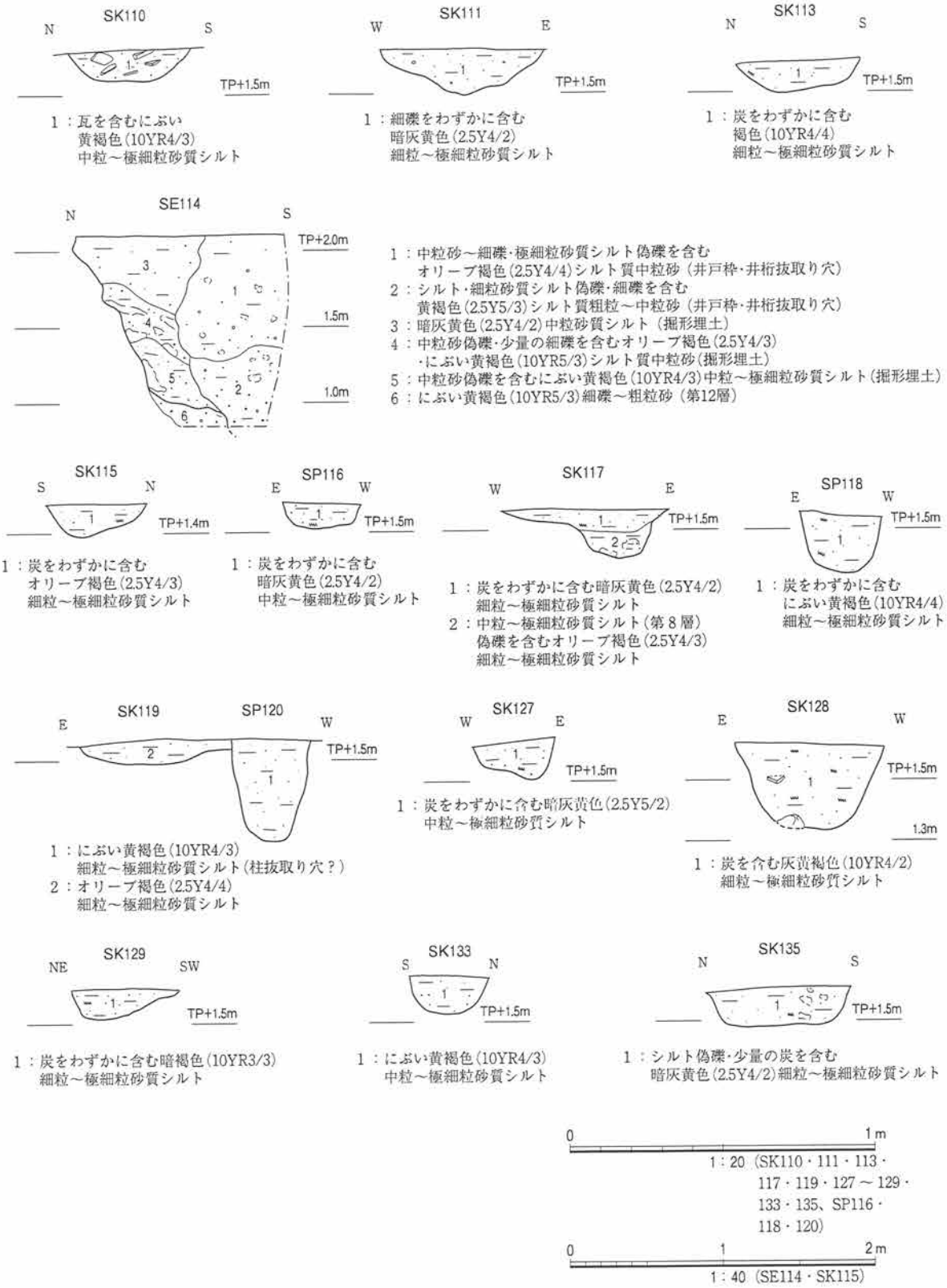


図13　第9層上面遺構断面図(1)

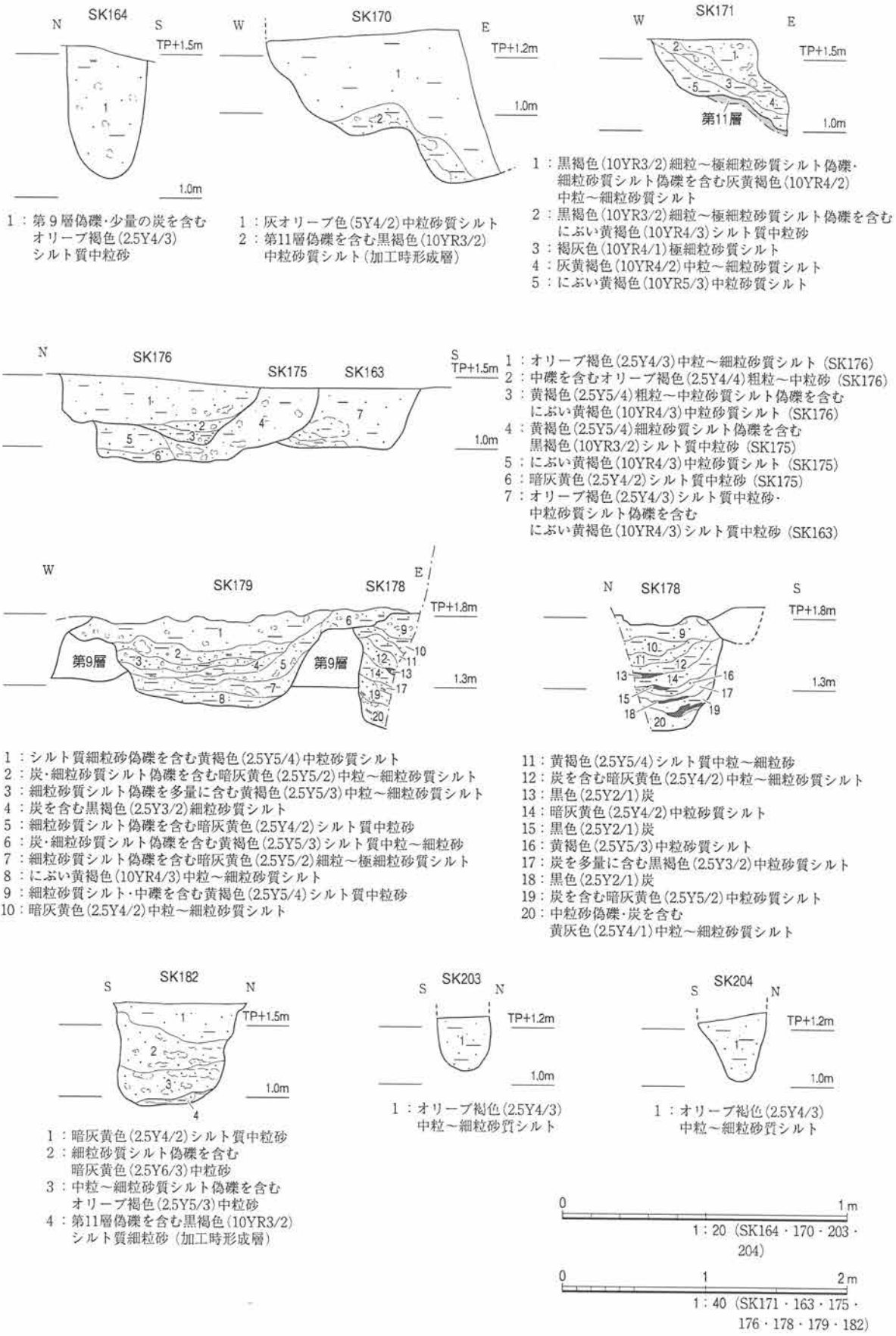


図14　第９層上面遺構断面図(２)

SK158は東西0.82m、南北0.58m、深さ0.08mの浅い土壙である。

SK159は東西0.36m、南北0.15m以上、深さ0.15mの土壙である。

SK161は東西0.34m以上、南北1.37m以上の土壙である。

SK162は東西0.44m、南北0.27m、深さ0.10mの浅い土壙である。

SK163は東西1.15m、南北0.80m以上、深さ0.42mの土壙である。SK175と重複しており、これよりも古い遺構である。

SK164・172・203・204は類似する長円形の土壙で、東西方向にほぼ等間隔に並ぶ。SK164は東西0.82m、南北0.28m、深さ0.44mで、埋土には偽礫を含み人為的に埋められている。SK172は東西0.70m、南北0.25m、深さ0.41m、SK203は東西0.59m、南北0.18mで、深さは西側が深く0.58m、東側は0.42mである。SK204は東西0.54m、南北0.25mで、深さはSK203と同様に西側が深く0.60m、東側は0.41mである。いずれも一定の深さがあることや、東西方向に一定の間隔で並ぶこと、SK203・204は西半が深いことから、柱穴の可能性がある。

SK166は東西0.96m以上、南北0.30m以上、深さ0.37mの土壙である。

SK167東西0.75m以上、南北0.18m以上、深さ0.10m以上の土壙である。

SK170は直径0.92～0.97m、深さ0.89mの円形の土壙である。SK182と重複しており、これよりも新しい遺構である。

SK171は東西1.10m以上、南北2.33m以上、深さ0.64mの土壙である。出土遺物から17世紀中葉の遺構とみられる。

SK173は東西1.00m以上、南北0.63m、深さ0.09mの土壙である。

SK175は東西3.56m、南北1.17mの土壙で、深さは0.59mである。SK163・176と重複しており、SK163より新しくSK176より古い遺構である。これら3つの土壙の埋土にはいずれも偽礫が含まれており、いずれも人為的に埋め戻されている。

SK176は東西1.67m、南北1.42mの円形の土壙で、深さは0.43mである。

SK177は東西0.45m、南北0.62m、深さ0.06mの浅い土壙である。

SK178は東西0.46m以上、南北0.76m以上、深さ0.78mの土壙である。

SK179は東西2.40m以上、南北0.41m、深さ0.64mの土壙である。埋土はSK178と類似する。

SK182は東西0.88m以上、南北0.94m、深さ0.72mの円形の土壙である。埋土には偽礫を含み、埋め戻されているようすが確認できる。

SK183は東西0.92m、南北0.85m、深さ0.53mの土壙である。SK185・186と重複しており、SK185より新しく、SK186より古い遺構である。

SK185は東西1.32m以上、南北0.98m以上、深さ0.52mの土壙である。SK176·183と重複しており、これらの土壙より古い遺構である。

SK186は東西1.00m、南北1.15m以上、深さ0.16mの土壙である。

SK187は東西0.60m以上、南北0.76m、深さ0.10mの浅い土壙である。

SE114は東西3.34m、南北1.40m以上、深さ1.21m以上の円形の井戸である。遺構断面の観察から

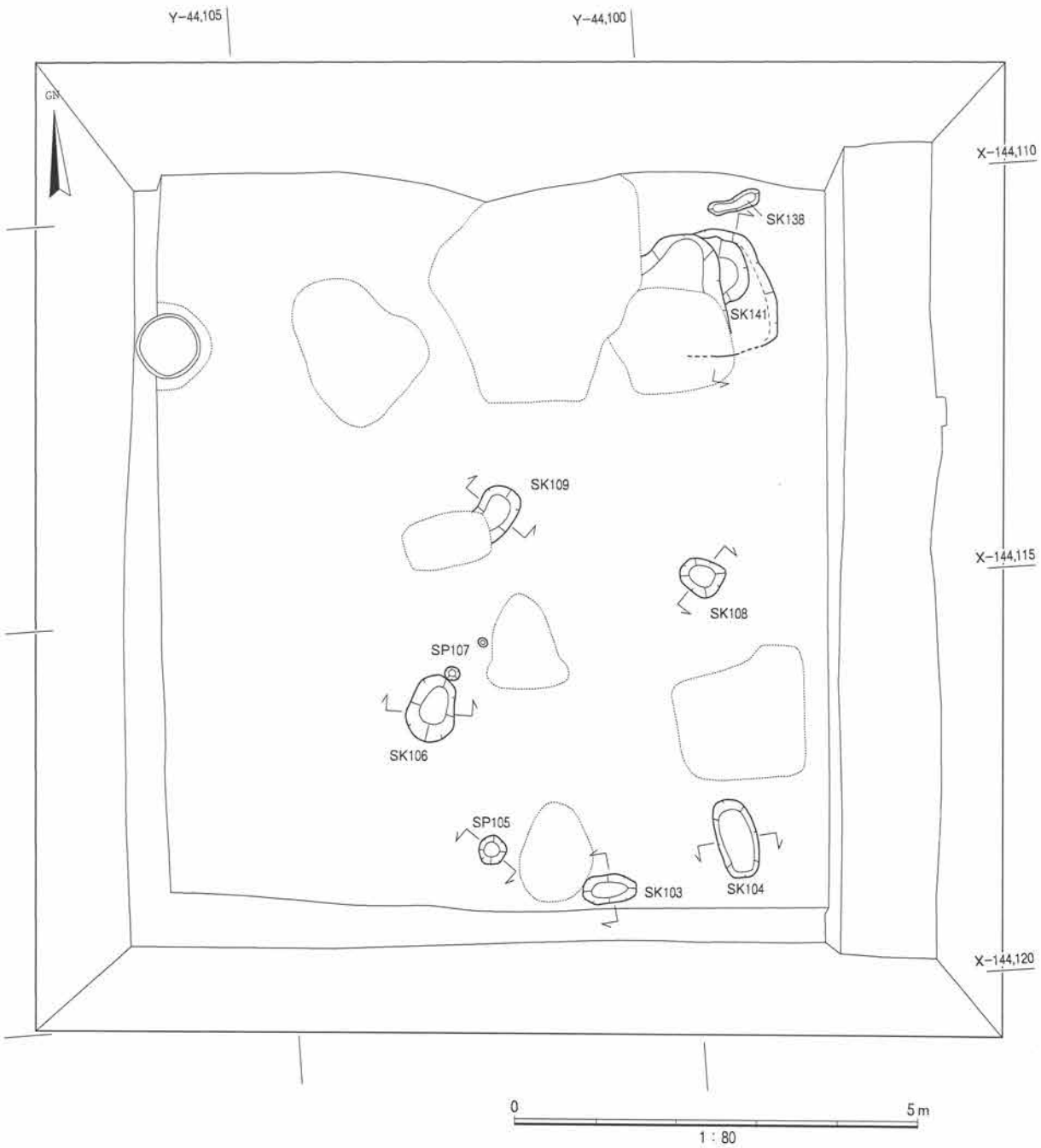


図15　第８層上面平面図

井戸側および井桁が抜き取られたようすが確認できた。

以上の遺構のうち時期について記述のないものについては、時期判定が可能な遺物が出土しておらず詳細な年代は不明であるが、他の遺構の時期からおおむね17世紀代の遺構とみられる。

第８層上面の遺構と遺物(図15・16、図版３中)

第８層上面でSP105・107、SK103・104・106・108・109・138・141を検出した。

SP105は直径0.36m、深さ0.11mの小穴である。

SP107は直径0.18m、深さ0.18mで、杭の抜き取り穴の可能性がある。

SK103は東西0.66m、南北0.35m、深さ0.11mの土壙である。出土遺物から17世紀末～18世紀初頭

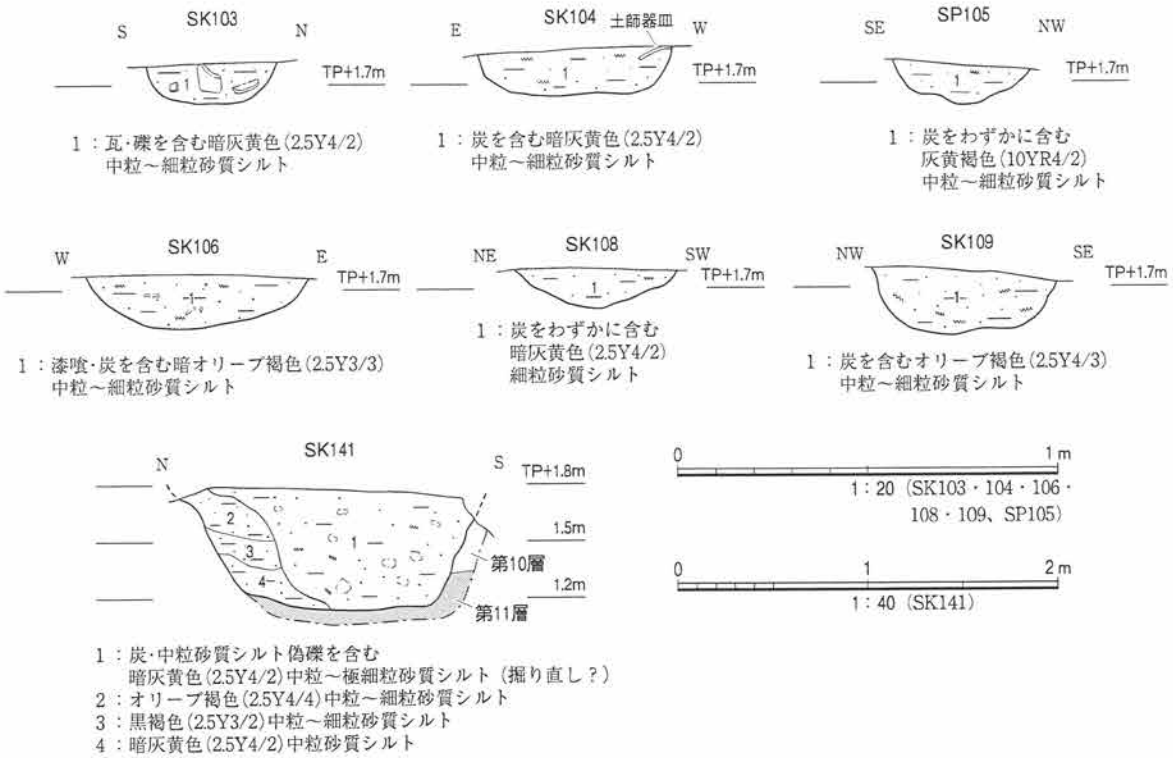


図16　第８層上面遺構断面図

の遺構とみられる。

SK104は東西0.51m、南北0.98m、深さ0.12mの土壙である。

SK106は東西0.61m、南北0.83m、深さ0.14mの土壙である。

SK108は北西－南東0.52m、北東－南西0.42m、深さ0.10mの土壙である。

SK109は北西－南東0.48m、北東－南西0.50m以上、深さ0.17mの土壙である。出土遺物から18世紀前葉の遺構とみられる。

SK138は東西0.68m、南北0.20mの土壙である。

SK141は東西1.74m以上、南北1.56m、深さ0.61mの土壙である。遺物から17世紀末～18世紀初頭の遺構とみられる。

以上の遺構は、おおむね17世紀後葉～18世紀前葉の遺構である。

第７層上面の遺構と遺物（図11・17・18、図版３下）

第７層上面で**石敷**、**礎石**ａ～g、SP85・96・100、SK77～82・86・87・89～95・97～99・101・102を検出した。これらの遺構の多くに炭や焼土が含まれており、第７層が18世紀前葉の整地層とみられることから妙知焼けに伴うものと推定される。

石敷は調査区北端部の西端および東端で検出した遺構で、上面が平な15～25cm大の花崗岩が敷き詰められている。遺構の性格については不明である。

礎石ａ～dは35～46cm大の上面が平な石で、東西方向に並んで検出されたことから礎石と推定される。これらの礎石と組み合う礎石が北側や南側に認められないことから、東西方向の塀の基礎の可能性が考えられる。

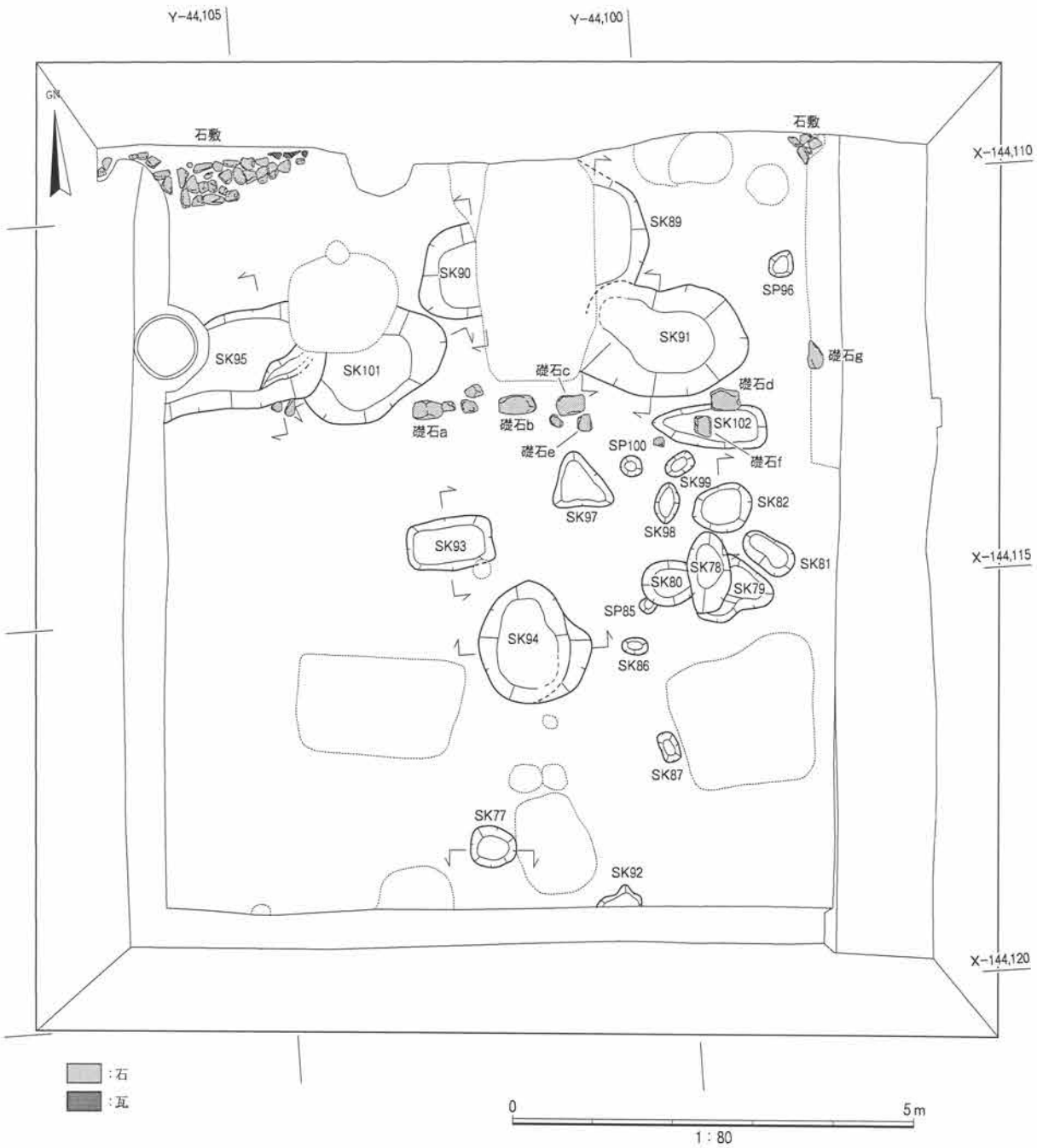


図17　第７層上面平面図

このほか、構築物としての組合い関係は不明であるが、礎石e～gを検出した。

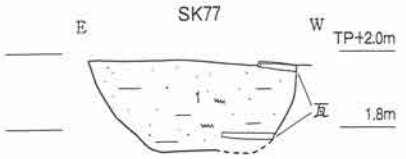
SP85は直径0.20m、深さ0.08mの小穴、SP96は直径0.28～0.34m、深さ0.15mの小穴、SP100は直径0.26～0.27m、深さ0.07mの小穴である。

SK77は東西0.55m、南北0.50m、深さ0.24mの円形の土壙である。

SK78は東西0.54m、南北1.00m、深さ0.16mの長円形の土壙である。SK79・80と重複しており、これらの遺構よりも新しい。出土遺物から18世紀中葉の遺構とみられる。

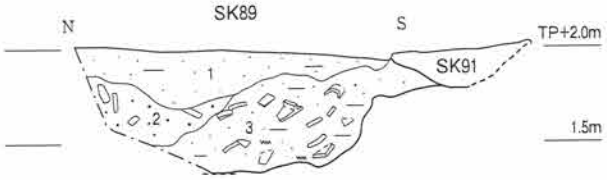
SK79は東西0.95m以上、南北0.83m、深さ0.11mの土壙である。

SK80は東西0.58m以上、南北0.56m、深さ0.08mの土壙である。出土遺物から18世紀前葉の遺構と

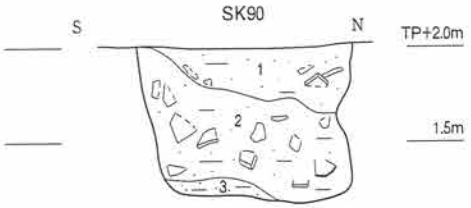


1：炭・焼土をわずかに含む
黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト

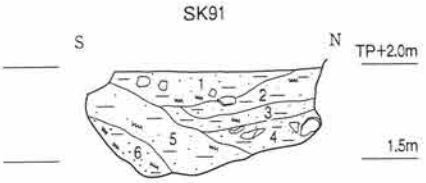
1：炭・焼土を含む灰黄褐色(10YR4/2)
細粒砂質シルト



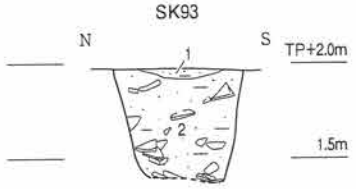
1：焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)わずかにシルト質細粒砂
2：多量の瓦を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)極粗粒～粗粒砂
3：炭・多量の瓦を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト



1：極細粒砂質シルト偽礫・少量の瓦を含む
にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂
2：多量の瓦・少量の炭を含む褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト
3：炭をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルト



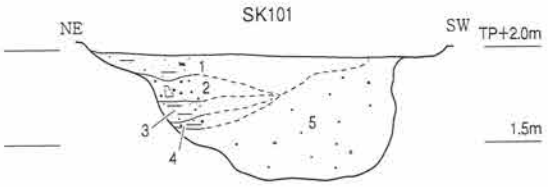
1：貝・炭・陶磁器・瓦を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト
2：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト
3：炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト
4：瓦・礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト
5：炭・焼土をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト
6：炭・焼土をわずかに含む黒褐色(2.5Y3/2)中粒～細粒砂質シルト



1：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂
2：焼土・瓦を多量に含む褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト

1：焼土・瓦を多量に含む褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂

1：炭・焼土をわずかに含む
にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～極細粒砂質シルト



1：炭を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト
2：細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)極粗粒～中粒砂
3：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒～細粒砂質シルト
4：黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒～中粒砂
5：細礫をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極粗粒～粗粒砂

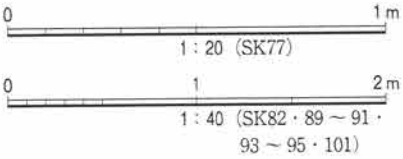


図18　第7層上面遺構断面図

みられる。

SK81は北西－南東0.70m、北東－南西0.40m、深さ0.18mの土壙である。焼けた瓦・焼土を含む。

SK82は東西0.70m、南北0.56m、深さ0.22mの円形の土壙である。

SK86は東西0.32m、南北0.20m、深さ0.03mの浅い窪みである。

SK87は東西0.20m、南北0.37m、深さ0.05mの浅い土壙である。

SK89は東西0.68m以上、南北1.88m以上、深さ0.65mの土壙である。炭・焼土・多量の瓦を含み、瓦を廃棄したごみ穴とみられる。SK91と重複しており、これよりも古い遺構である。

SK90は東西0.76m以上、南北1.14m、深さ0.82mの土壙で、多量の瓦が廃棄されていた。出土遺物から18世紀後葉の遺構とみられる。

SK91は東西2.00m以上、南北1.26m、深さ0.56mの土壙である。炭・焼土・陶磁器・貝を比較的多く含んでいることからごみ穴とみられる。

遺物は13～22が出土している。13～16は肥前磁器の染付である。13～15は碗で、13は草花文、14はコンニャク印判による桐文を施す。15は高台内に渦福銘が見られる。16は皿である。17は備前焼の灯明受皿である。18は関西系陶器の半筒碗である。19は口縁部下端が外方へ突出する土師器焙烙である。20～22は土人形で、家・人物・鳥を模る。以上はおおむね18世紀前～中葉に属し、15が最も新しい様相を示す。このほかわずかに18世紀後葉の遺物を含むことから遺構の年代は18世紀後葉とみられる。

SK92は東西0.58m、南北0.20m以上、深さ0.02mの浅い窪みで、焼土を多量に含む。

SK93は東西1.06m、南北0.68m、深さ0.60mの土壙で、焼けた瓦・焼土を多量に含むことから、火災により生じた不要な瓦を廃棄したごみ穴と考えられる。

SK94は東西1.38m、南北1.52mの土壙で、深さは0.32mである。焼けた瓦や焼土を多量に含む。出土遺物から18世紀中～後葉の遺構とみられる。

SK95は東西2.00m、南北1.23m、深さ0.25mの土壙である。SK101と重複しており、これよりも新しい遺構である。23は器形不明の関西系陶器で、底部内面にも施釉している。外面には白泥と鉄絵で文様を施し、底部外面に「乾」字を鉄絵で記すことから乾山焼とみられる。器種は盃台であろう。18世紀中葉の遺構とみられる。

SK97は東西0.78m、南北0.68m、深さ0.05mの浅い土壙である。

SK98は東西0.28m、南北0.50m、深さ0.06mの浅い土壙である。

SK99は北西－南東0.24m、北東－南西0.38m、深さ0.08mの土壙である。

SK101は東西1.75m以上、南北1.47m以上、深さ0.64mの土壙である。出土遺物から18世紀前葉の遺構とみられる。

SK102は東西1.40m、南北0.54m、深さ0.14mの土壙である。

これら第７層上面の遺構はおおむね18世紀前～後葉の遺構である。

第６層上面の遺構と遺物(図19～21、図版４上)

第６層上面で礎石h～j、SP46・48・53～61・66～69・73・76・258～266、SK47・49・62・63・

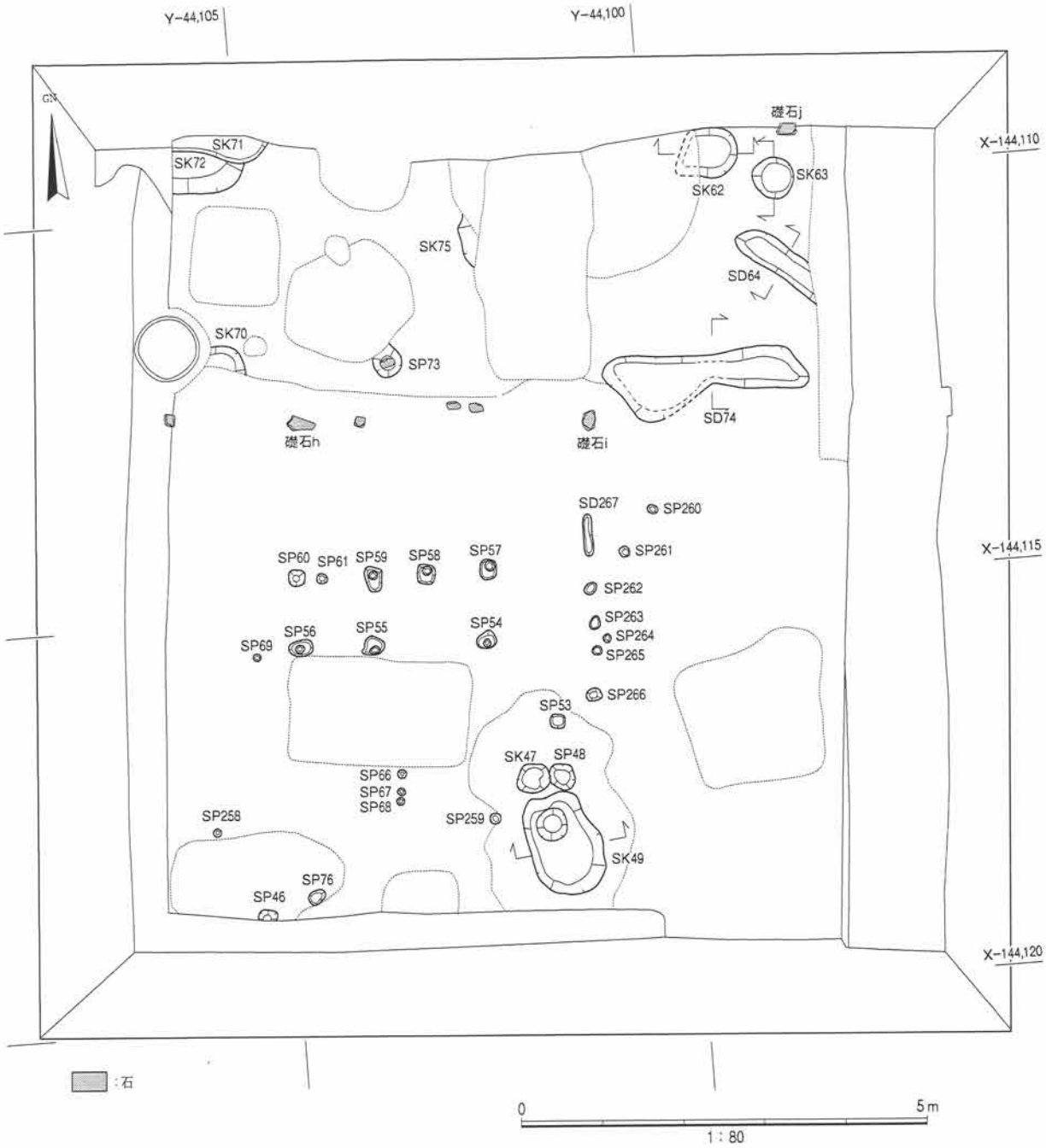


図19　第６層上面平面図

70～72・75、SD64・74・267を検出した。

礎石h・iは第７層上面で検出した礎石a～dとほぼ同位置で東西方向に並んでおり、南北に建物として組合う礎石が認められないことから、同様に塀の基礎の可能性がある。

このほか調査区北端部で礎石jを検出した。

SP46・SP53～61・66～69・76は第４層の中粒砂を埋土とする。いずれも柱や杭の抜取り穴の可能性がある。

なかでもSP54～60は一定の深さがあり、またSP60以外は底に直径0.10m程度の柱痕跡が確認できたことから柱穴とみられ、規則的に配置されていることから建物遺構と推定される。SP54は直径0.22

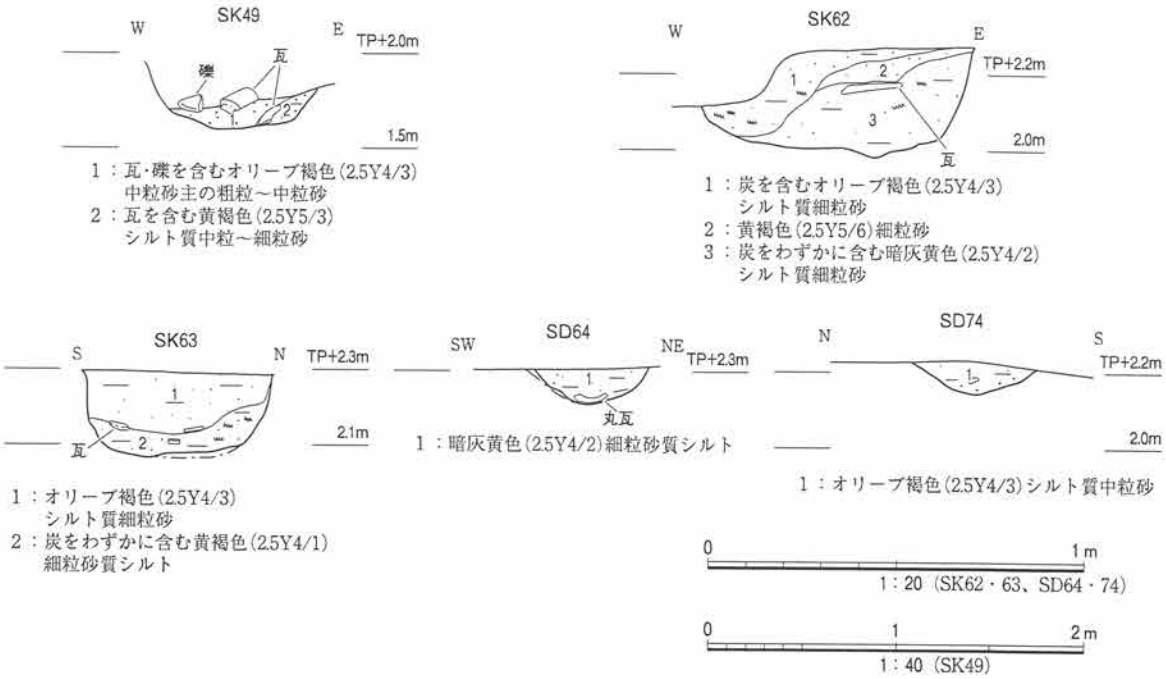


図20　第６層上面遺構断面図

～0.25m、深さ0.41m、SP55は直径0.23～0.25m、深さ0.53m、SP56は直径0.20～0.28m、深さ0.82m、SP57は直径0.20～0.25m、深さ0.34m、SP58は直径0.22～0.24m、深さ0.29m、SP59は直径0.20～0.32m、深さ0.43m、SP60は直径0.20m、深さ0.47mである。

このほかSP46は直径0.22m、深さ0.36m、SP53は直径0.18m、深さ0.14mである。SP61は直径0.12m、深さ0.21m、SP66は直径0.10m、深さ0.11m、SP67は直径0.10m、深さ0.13m、SP68は0.08m、深さ0.11m、SP69は直径0.09m、深さ0.13m、SP76は直径0.17～0.20m、深さ0.09mである。

SP48は直径0.30m、深さ0.23mで、陶磁器を多く含む。24・25は肥前磁器の染付碗と同皿で、ともに草花文を施す。25の底部内面中央にはコンニャク印判による五弁花文が見られる。これらの遺物は18世紀前半に属するが、第６層が18世紀後葉の整地層とみられることからこれ以降の遺構である。

SP73は直径0.37～0.40m、深さ0.16mで、底には根石が確認された。

SP258～266は小穴である。SP258は直径0.08m、深さ0.07m、SP259は直径0.10m、深さ0.08m、SP260は直径0.10m、深さ0.06m、SP261は直径0.10m、深さ0.05m、SP262は直径0.10～0.15m、深さ0.06m、SP263は直径0.12～0.17m、深さ0.04m、SP264は直径0.08m、深さ0.01m、SP265は直径0.10m、深さ0.05m、SP266は直径0.15～0.18m、深さ0.08mである。

SK47は直径0.34～0.40mの円形の土壙で、深さは0.30mである。埋土は第４層の中粒砂である。

SK49は東西0.90m、南北1.25m、深さ0.40mの土壙である。

SK62は東西0.73m、南北0.60mの円形の土壙で、深さは0.29mである。

SK63は東西0.50m、南北0.51mの円形の土壙で、深さは0.23mである。

SK70は東西0.50m以上、南北0.28m以上の土壙で、深さは0.16mである。

SK71は東西1.18m以上、南北0.34m以上、深さ0.06mの土壙である。SK72と重複しており、これよりも新しい。

SK72は東西0.88m以上、南北0.52m以上、深さ0.15mの土壙である。

SK75は残存部分がわずかであるが、東西0.22m以上、南北0.66m以上の土壙で、深さは0.06m以上である。

SD64は最大幅0.37m、長さ1.15m以上の北西－南東方向の溝である。深さは0.10mである。

SD74は最大幅0.80m、長さ2.55mの東西方向の溝で、深さは0.09mである。

SD267は幅0.10m、長さ0.50、深さ0.04mの南北方向の小溝である。

これら第６層上面遺構はおおむね18世紀後葉～19世紀初頭の遺構とみられる。

第３・４層上面遺構と遺物（図21～25、図版４中・下）

第３・４層上面では**石列**、**礎石**k～o、SP07・13・17～21・23～25・30・32・38・41・45・65・219、SK01～06・08～12・14～16・26～29・31・33～37・40・42・43・50、SD51・52を検出した。このうちSK37は第1b層上面の遺構である。これと類似する埋土のSK02も第1b層上面遺構と推定され、SK02との重複関係からSK01・SP13についても第1b層上面以上の遺構であろう。また、SK28は第1a層上面に属する遺構である。

石列は第６・７層上面で礎石が並んで検出されたのとほぼ同位置で検出した。花崗岩を使用し、北に面をもつことから敷地境の石垣と推定される。

礎石k・oは花崗岩の礎石で、SD51の埋まった後に据えられている。

礎石lは花崗岩の礎石で第３層上面に据えられている。

SP07は直径0.17～0.22m、深さ0.14mの小穴である。

SP13は直径026～029m、深さ0.14mの小穴である。

SP17～21･30･32･38は第１層に類似する埋土の遺構である。SP17は直径0.31～0.44m、深さ0.28mである。SK36と重複しており、これより新しい遺構である。SP18は直径0.24～0.25mで、SK36と重複しており、これより新しい。SP19は直径0.18～0.20m、深さ0.12mで、SP20は直径0.25m、深さ025m、SP21は直径0.40m、深さ0.13mである。SP30は直径0.20mで、SK36と重複しておりこれより新しい。SP32は直径0.22m、深さ0.14mで、SK04と重複しており、これより古い遺構である。SP38は直径0.37～0.39m、深さ0.26mで、SD51より新しい遺構である。

SP23～25は小穴である。SP23は直径0.18m、深さ0.10m、SP24は直径0.15m、深さ0.09m、SP25は直径0.14～0.16m、深さ0.12mである。

SP41は直径0.28～0.32m、深さ0.32mである。一定の深さがあることから柱穴の可能性がある。

SP45は北西－南東0.44m、北東－南西0.25m、深さ0.57mである。柱穴の可能性がある。

SP65は直径0.28～0.42mで、深さは0.34mである。SD52と重複しており、これよりも新しい遺構である。

SP219は直径0.15mである。

SK01は東西3.30m、南北1.14m以上、深さ0.40mの土壙である。SK02と重複しており、これよりも新しい遺構である。出土遺物の年代から19世紀前～中葉の遺構とみられる。

SK02は東西0.95m、南北0.56m以上、深さ0.63mの土壙である。

図21　出土遺物実測図

SP48(24・25)、SK15(26～32)、SK16(33～37)

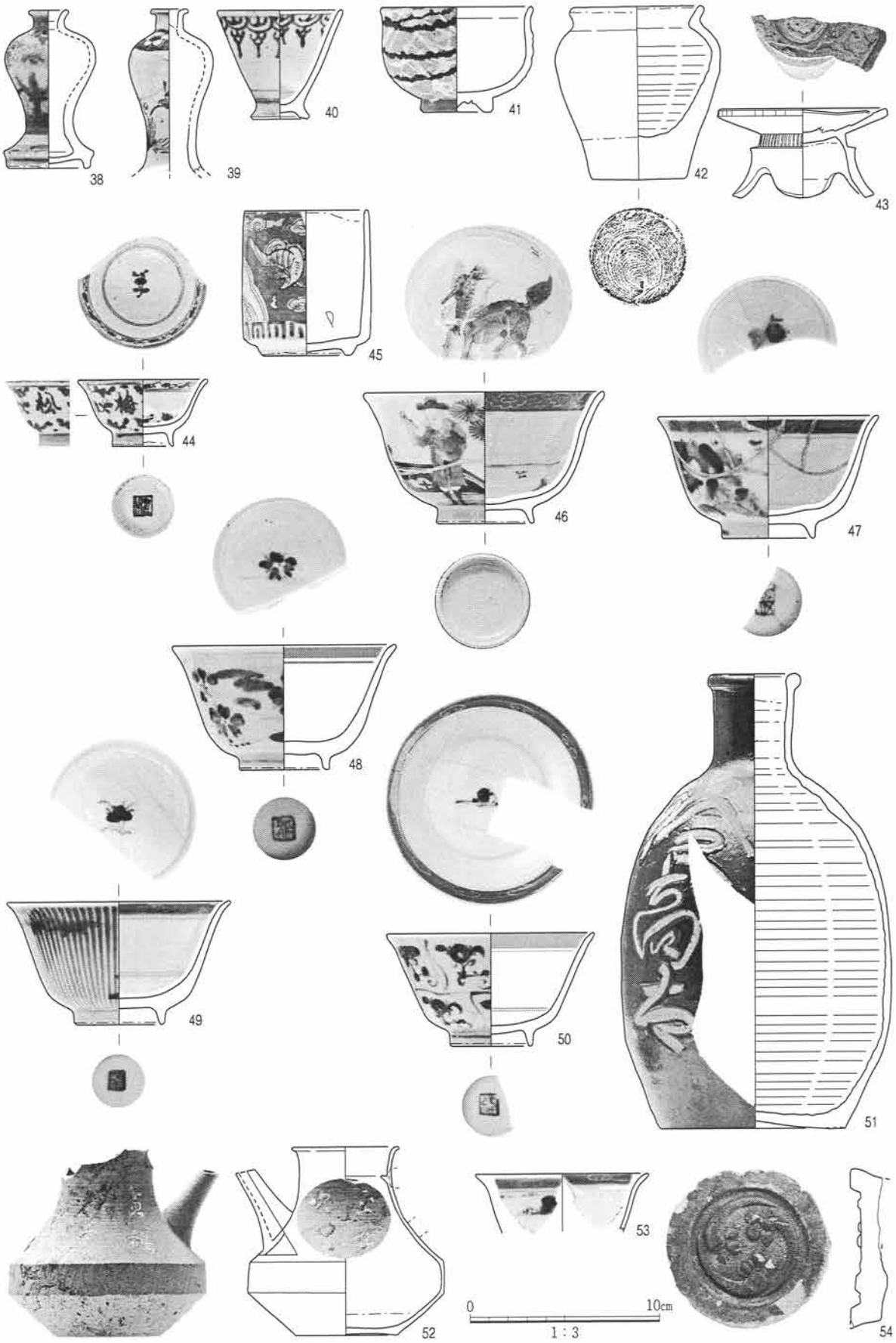


図22　出土遺物実測図

SK04(38～52)、SK28(53・54)

SK03は東西1.84m、南北2.57m以上、深さ0.32mの土壙である。SK04と重複しており、これよりも古い遺構である。

SK04は東西1.75m、南北1.59m、深さ0.32mの土壙である。

遺物は38～52が出土した。38・39は肥前磁器で色絵の御神酒徳利である。40は肥前磁器の染付小杯で、口縁部が直線的に広がる。41は萩焼のピラ掛け碗である。42は肥前陶器の飴壺である。43は関西系陶器の盃台で、内面に型押しによる文様が見られる。44は中国産青花の小杯で、口縁部が端反となる。外面には唐草文と「松」「梅」の文字を施すことから、松竹梅の文字を記していたことが知られる。

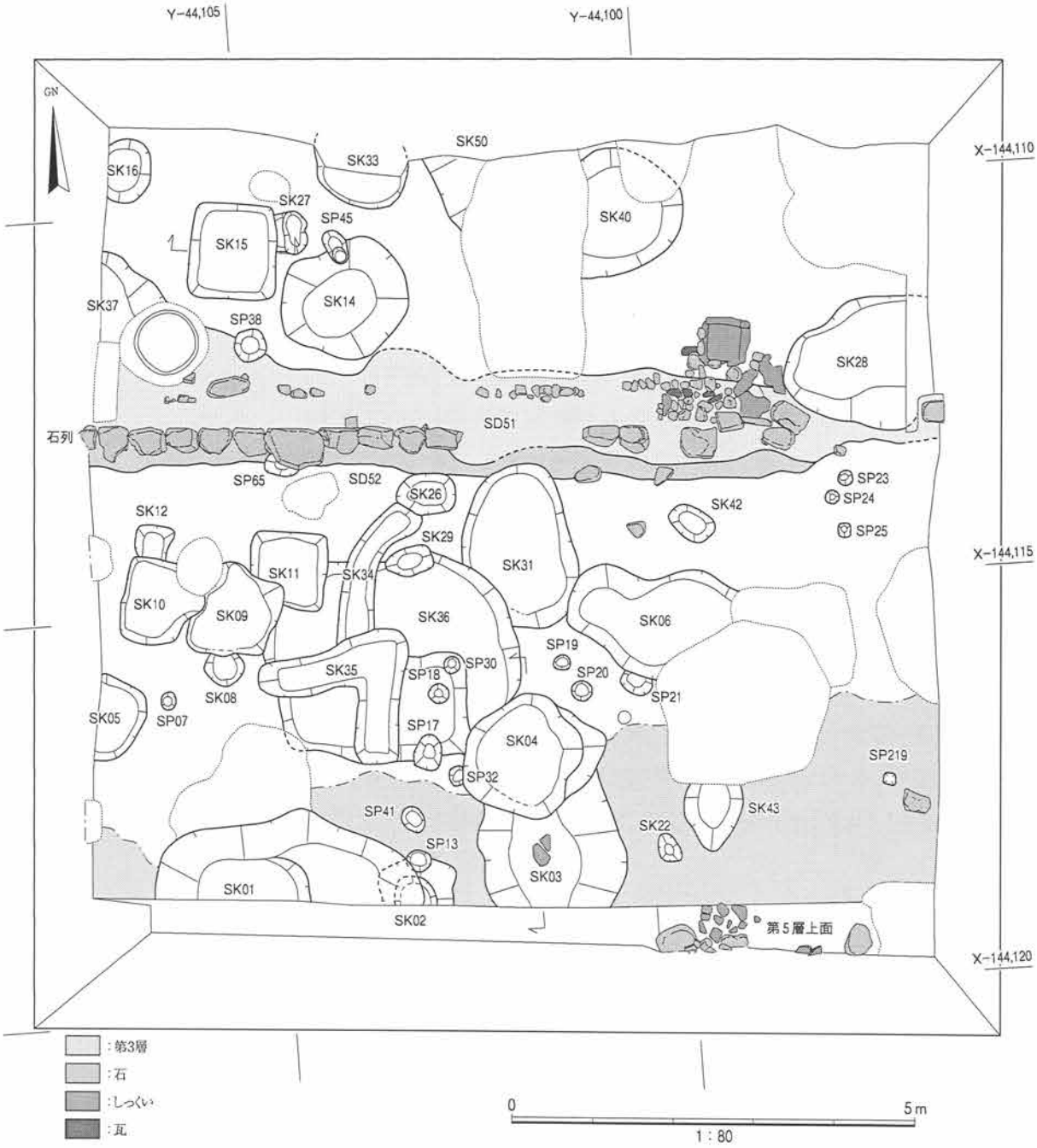


図23　第3・4層上面検出遺構平面図

大阪市内では同一文様の出土例はなく、現地へ特注した品の可能性がある。45は肥前磁器色絵の蓋付湯飲み碗である。46は肥前磁器の染付端反碗で、外面に西洋人を描く。高台内には焼継印がある。47～50は瀬戸美濃焼磁器の染付端反碗である。外面には草花を描く47・48と、縦縞を描く49、仙芝祝寿文を描く50がある。以上の瀬戸美濃焼磁器碗の高台内にはいずれも崩れた「福」字を記す。51は丹波焼の通い徳利である。52は関西系陶器の煎茶急須で、体部外面にはイッチンで文字を施す。以上は瀬戸美濃焼磁器の形態からみて19世紀第２四半期に属するものであろう。

SK05は東西0.6m以上、南北1.10m以上、深さ0.34mの土壙である。

SK06は東西2.10m以上、南北1.22m、深さ0.24mの土壙である。出土遺物の年代から19世紀前半の遺構とみられる。

SK08は東西0.50m、南北0.37m、深さ0.13mの円形の土壙である。SK09と重複しており、これよりも古い。

SK09は東西1.10m、南北1.15m、深さ0.19mの方形の土壙である。SK10・11と重複しており、これらよりも古い遺構である。

SK10は東西1.03m、南北1.06m、深さ0.13mの土壙である。

SK11は東西0.95m、南北0.95mの方形の土壙で、深さは0.15mである。

SK12は東西0.48m、南北0.40m以上の土壙で、深さ0.18mである。

SK14は東西1.57m、南北1.50mの土壙で、深さは0.79mである。

SK15は東西1.10m、南北1.19mの方形の土壙で、深さは0.28mである。

遺物は26～32が出土した。26～30は肥前磁器である。26・27は青磁染付の碗蓋と碗で、いずれも口縁部内面に四方襷文を施す。28は染付の朝顔形碗、29は染付の筒形碗である。30は染付の皿である。31は瀬戸美濃焼陶器の片口鉢で、灰釉を施す。32は関西系陶器の鉄絵平碗である。以上は18世紀後半に属する。第５層の年代が19世紀初頭～前葉に位置づけられることから遺構の年代は19世紀前葉頃とみられる。

SK16は東西0.52m以上、南北0.78m、深さ0.47mの円形の土壙である。

遺物は33～37が出土した。33・34は肥前磁器の染付である。33は朝顔形の碗で、口縁部内面に四方襷文、底部内面中央に手描きの五弁花文を施す。34は笹文を施す紅皿である。35は瀬戸美濃焼陶器のひだ皿である。36は関西系陶器の型押し皿で、内面に鉄絵と呉須で文様を施す。37は土人形で三連の

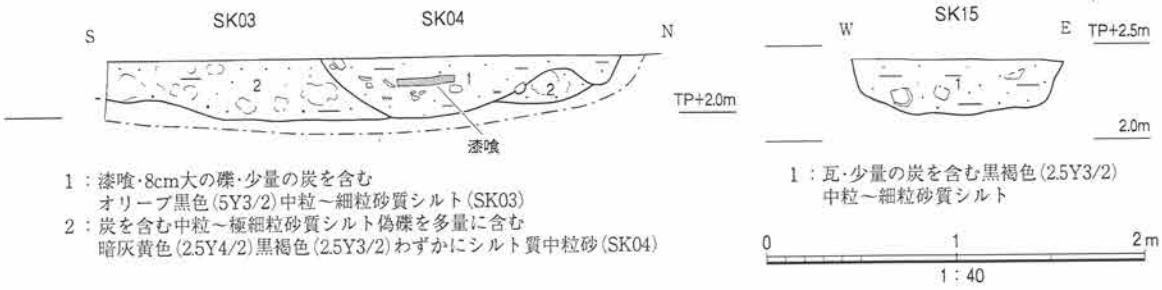


図24　第３・４層上面検出遺構断面図

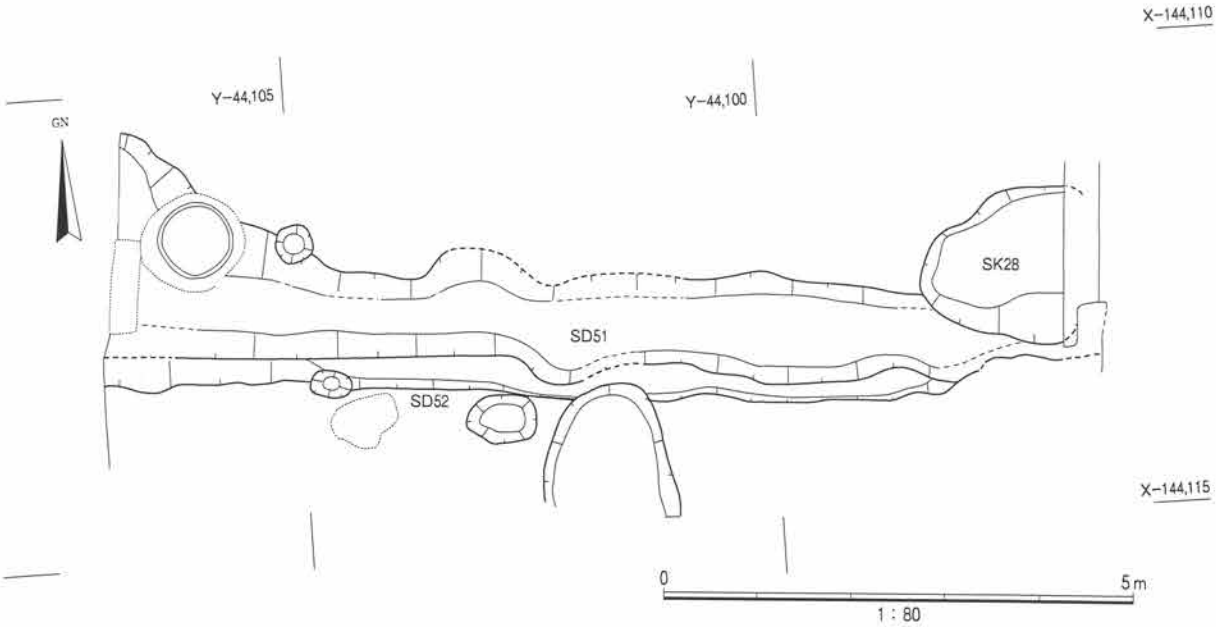


図25　SD51・52平面図

竈を模る。以上は18世紀後半に属するが、遺構の年代は19世紀前葉頃とみられる。

SK22は東西0.27m、南北0.32m、深さ0.17mの小土壙である。

SK26は東西0.72m、南北0.50mの土壙で、深さは0.18mである。

SK27は東西0.38m以上、南北0.52m、深さ0.66mの土壙である。

SK28は東西1.48m以上、南北1.65m、深さ0.26mの土壙である。

遺物は53･54が出土した。53は瀬戸美濃焼磁器の染付端反碗である。54は変形巴文の軒桟瓦である。以上は19世紀前半に属するものであろう。

SK29は東西0.58m、南北0.30m、深さ0.09mの土壙である。

SK31は東西1.40m、南北2.04m、深さ0.07mの土壙である。

SK33は東西1.11m、南北0.42m以上、深さ0.83mの土壙である。

SK34は最大幅0.45mの溝状の土壙で、深さは0.07mである。SK35・36と重複しており、SK35より古く、SK36より新しい遺構である。

SK35は最大幅0.55mのL字状に曲がる溝状の土壙である。深さは0.34mである。

SK36は東西3.18m、南北2.50mの円形の土壙である。深さは0.30mである。

SK37は東西0.90m以上、南北0.90m以上、深さ0.96mの土壙である。出土遺物から19世紀前葉の遺構とみられる。

SK40は東西1.17m以上、南北1.58mの円形の土壙で、深さは0.19mである。

SK42は北西－南東0.55m、北東－南西0.38m、深さ0.17mの土壙である。

SK43は東西0.72m、南北0.80m以上、深さ0.15mの土壙である。

SK50は東西0.80m以上、南北0.90m以上の土壙である。

SD51は最大幅1.22mの東西方向の溝で、深さは0.18mである。石列以前の溝で敷地境の溝の可能

性がある。

SD52はSD51とほぼ同位置で検出した東西方向の溝である。SD51よりも古い溝で、幅は0.50m以上、深さは0.36mである。

このほか第５層上面で礎石とみられる石を検出した。

以上の第３・４層上面遺構はおおむね19世紀前～中葉の遺構とみられる。

c. 地層出土遺物(図26・27)

第11a層から62、第11b層から60、第11層から55～59・61・63・64が出土した。

55～61は弥生土器である。55は壺の頸部で櫛描直線文を巡らす。56・57は壺の体部で、56は櫛描直線文および扇形文を施し、57は櫛描直線文および波状文を施す。58～61は甕である。58は口縁端部を刻み、体部内面はハケ調整である。59は体部内外面ともにハケ調整である。60・61は甕の底部である。これらの遺物は畿内第Ⅱ様式に位置付けられる。

62～64は土師器である。62は椀形の高杯の杯部で、63・64は高杯の脚部である。これらの遺物は６世紀以降に属する。

第９層から65・66が出土した。65・66は肥前陶器の皿である。65は折縁皿で、器壁が薄い。66は口縁部の２箇所に鉄釉を掛けた皿である。これらは17世紀前～中葉に属するものであろう。

第８層から67が出土した。67は肥前磁器の染付碗である。器高は高く、外面には一重網目文を施す。17世紀中葉である。

第７層から68が出土した。68は肥前磁器の染付碗である。外面には草花文を施し、高台内には「大明年製」銘を有する。17世紀末～18世紀初頭であろう。

第６層から69・70が出土した。69は肥前磁器の染付碗で、体部が半球形を呈する。70は瀬戸美濃焼陶器の半筒碗で、鉄釉と灰釉を掛け分けている。以上は18世紀中葉に属するものであろう。

第５層以下の地層から71が出土した。71は土師器焼塩壺である。外面には「御塩壺師堺湊伊織」の刻印を有し、内面には粗い布目圧痕が見られる。18世紀前半であろう。

第３・４層上面で73が出土した。73は関西系陶器の筆立で、３本の竹を模る。19世紀に属するものであろう。

この他に遊離資料として中国産青花の端反碗72が出土している。外面には仙芝祝寿文を施す。18世紀末～19世紀初頭に属するものであろう。

なお、各地層の年代はｉ)に示したとおりである。

3)まとめ

今回の調査では、弥生時代中期前半および豊臣～徳川期の遺構を検出したほか、６世紀以降の古土壌を確認した。以下に調査地における遺構や地層の変遷を示してまとめとする。

調査地は淀川の堆積作用によって運ばれた第12層の堆積により離水し、これにより弥生時代中期前半に人間活動が開始される。これに伴い、弥生時代中期前半の古土壌である第11b層が形成されるが、淀川の堆積作用の影響を受けて砂礫が堆積し弥生時代中期前半の遺構面は埋没する。その後６世紀以

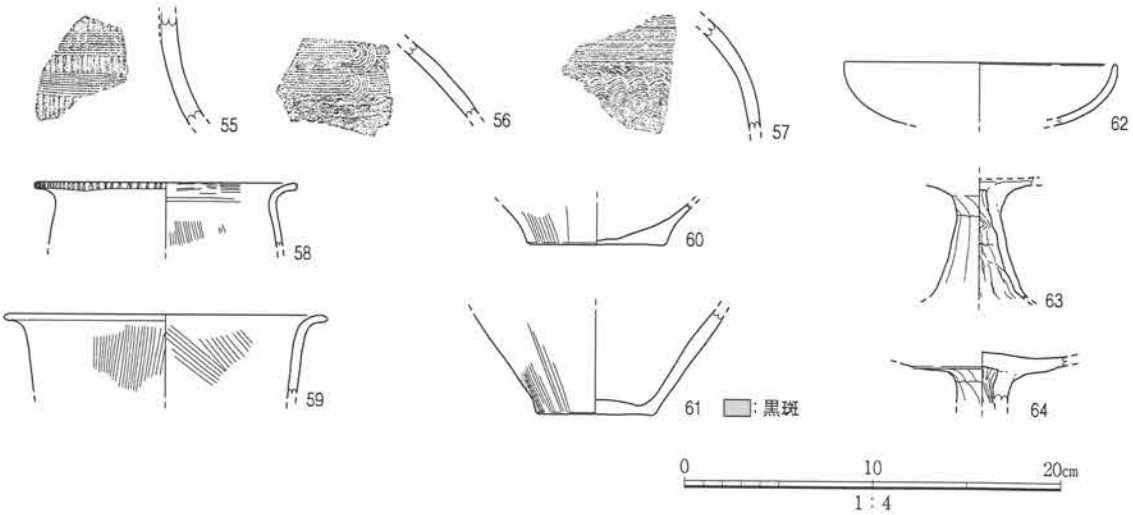


図26　第11層出土遺物実測図

第11a層(62)、第11b層(60)、第11層(55～59・61・63・64)

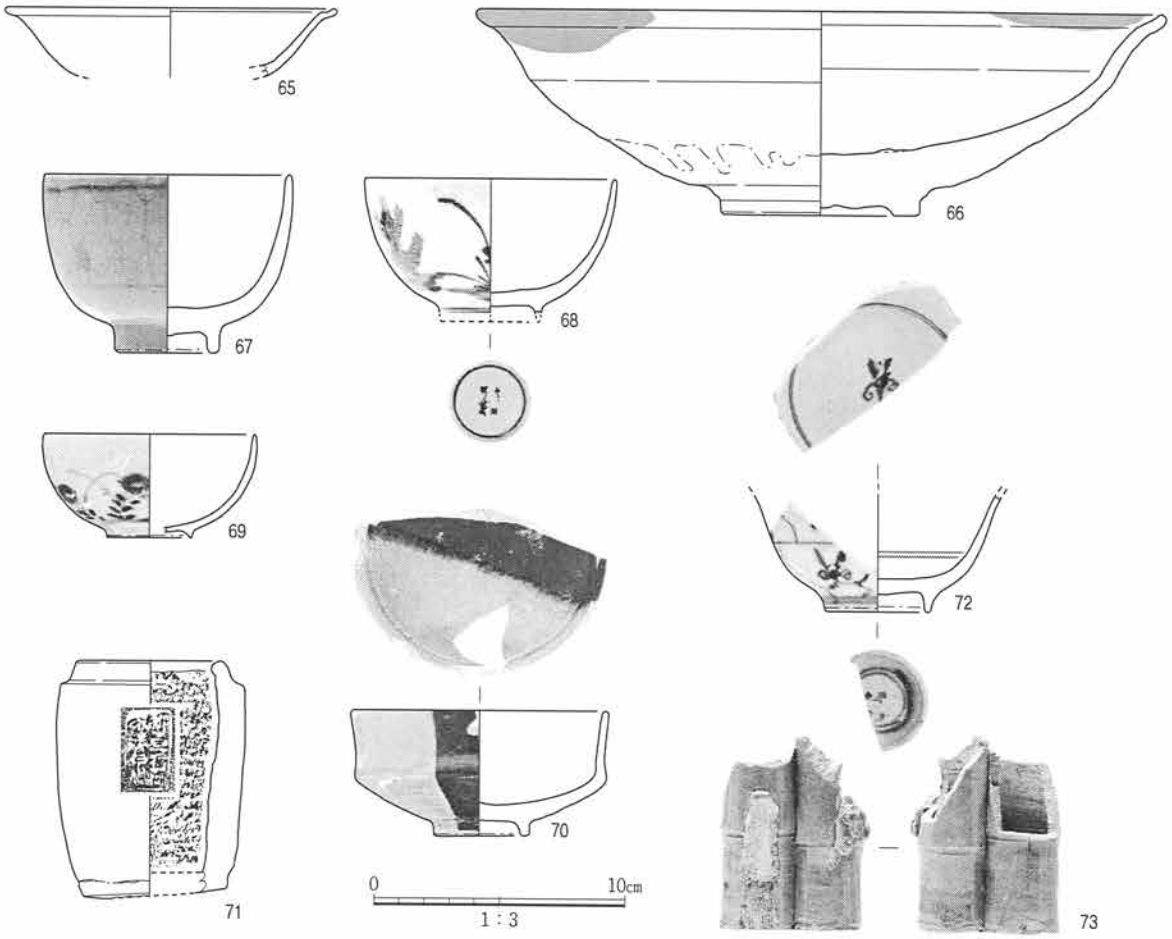


図27　地層出土遺物実測図

第9層(65・66)、第8層(67)、第7層(68)、第6層(69・70)、第5層以下(71)、第3・4層上面(73)、遊離資料(72)

降にはこの砂礫層を母材とする古土壌第11a層が形成されるが、調査地においてはこの時期の遺構の形成は認められなかった。この後、再び淀川の影響を受けて第10層の中粒砂が運ばれる。第11a層上部の第11a'層が泥質であることやこの上面に巣穴状の生痕が確認できることから、第10層堆積時には

調査地は水に浸かった状態であったと推定される。その後再び離水し、第10層上部が風成する。豊臣期になるとこの上面に遺構が形成され、天満本願寺や寺町の形成に伴い調査地付近も活動域となったことが窺えるが、井戸や土壙といった遺構が中心で建物遺構や区画施設などは認められないことから、人々の活動領域ではあるが屋敷地のような積極的な利用はされていなかったようである。その後徳川期に入ると、第９層上面でみられた柱穴とみられる遺構や、第６・７層上面でみられた塀の基礎とみられる礎石、第３・４層上面で検出したSD51・52や石列などほぼ同位置に東西方向の敷地境が認められることから、17世紀前葉以降、屋敷地として利用されるようになったものと推定される。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「同心町遺跡D地点発掘調査（DC07－１）報告書」：『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.３－11

大阪市文化財協会1997、『天満本願寺跡発掘調査報告Ⅰ』

2003、『天満本願寺跡発掘調査報告Ⅴ』

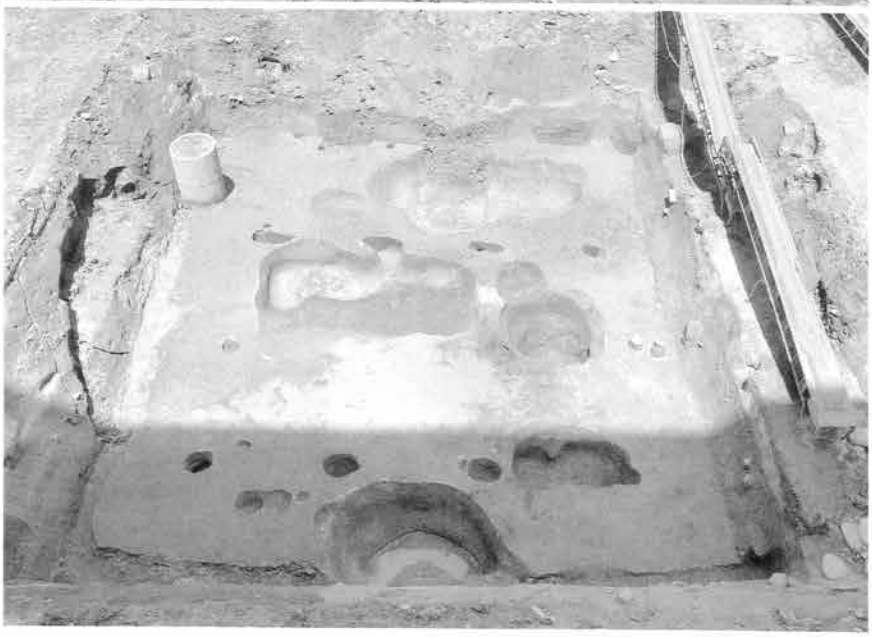
南壁地層断面(北から)

東壁地層断面(北西から)

第12層上面全景
（南から）

第11層上面全景
（南から）

第10層上面全景
（南から）

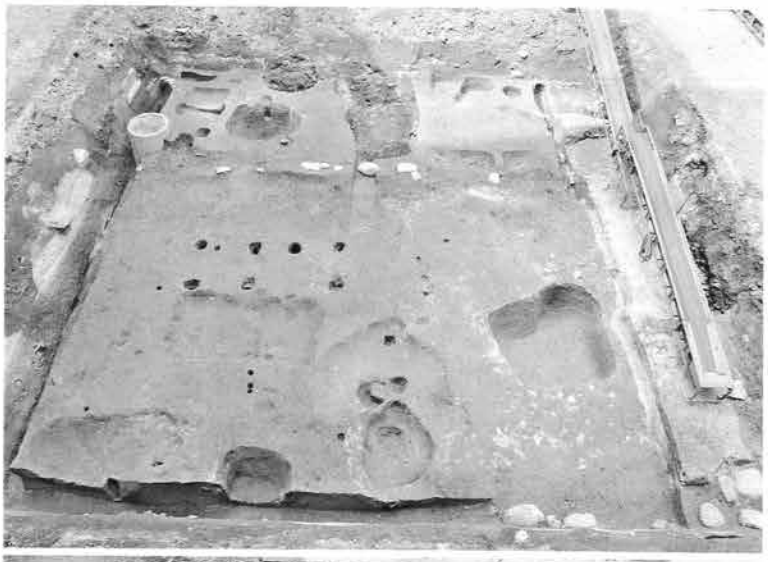


第９層上面全景
（南から）

第８層上面全景
（南から）

第７層上面全景
（南から）

第６層上面全景
（南から）



第３・４層上面全景
（南から）

石列（西から）

福島区玉川三丁目68における建設工事に伴う
野田城跡伝承地発掘調査(NO15－１)報告書

調 査 個 所	大阪市福島区玉川３丁目68
調 査 面 積	48㎡
調 査 期 間	平成28年２月22日～２月25日
調 査 主 体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	大阪文化財研究所 調査課長　清水和明、南秀雄

1)調査に至る経緯と経過

野田城跡伝承地は、JR大阪環状線野田駅の東方、福島区玉川3・4丁目に広がる埋蔵文化財包蔵地である。野田城は大川河口の低地に立地し、大坂本願寺や大坂城と海を結ぶ戦略上の拠点にあった。野田城の端緒は、細川晴元と三好元長の抗争の際、永享4(1531)年に三好方が野田・福島に陣取った陣地(砦)にさかのぼるという(『細川両家記』)[渡辺武1995]。野田城が日本史上、大きな役割を果たしたのが、元亀元(1570)年の三好三人衆と織田信長との合戦である。三好勢は、野田・福島の砦の堀を広げ、城壁(土塁)を築き、矢倉を建て、周囲の川の浅いところに乱杭・逆茂木を打って八千人が立て籠り、大坂本願寺と連動して信長を敗走させた(『信長公記』)。ここに10年に及ぶ石山合戦が始まる。その後、野田城は信長の手に落ち、大坂冬ノ陣では大坂方が使用した。元亀元年の合戦記事などから、野田城は大阪市内の戦国時代の城のなかで相当の規模を誇っていたことがわかる。

江戸時代後期の野田村は、奥ノ町・東ノ町・城ノ内町・弓場町・堤町・北ノ町の六町から成り、明治20年頃の地図には、奥・村東・城ノ内・弓場・堤・大北の字名がある。城にちなむ地名、街区の形態、水路(井路)の位置、現地表の高低などから、[渡辺1995]・[藤三郎2012]によって野田城の大まかな復元案が示されている。野田城跡伝承地では、2007年以来3件の本調査がある。それらも含めると、これらの復元案は今後の野田城の調査研究の指針になり得、将来の発掘調査によって、史上重要な野田城の実態に迫れる可能性は十分にある。

当遺跡の初の本調査であるNO07－1次調査では、17世紀初頭までに埋められた深さ2m以上の堀状遺構を検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、櫻井久之2008]。これは野田城の北東外縁付近の防御施設の可能性がある。NO11－1次調査では、野田城築城以前の15世紀代の遺構・

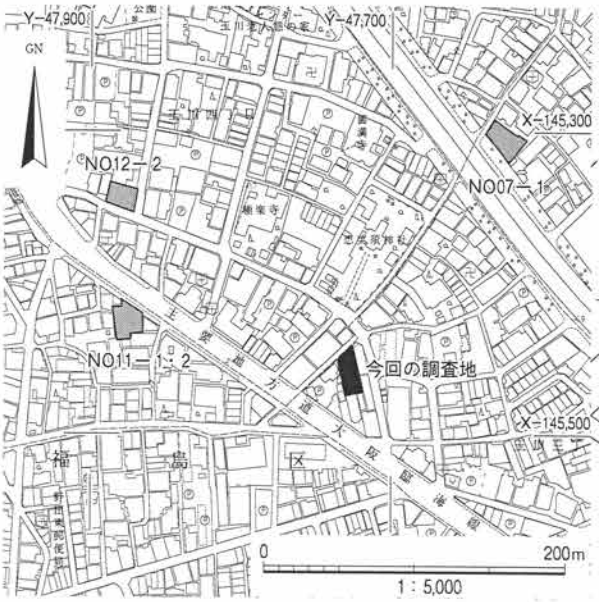


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

遺物を検出した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。野田城期の遺構面はさらに高く、近現代に失われたと推定される。調査地点は字大北にあり、中心部ではないが城内の可能性がある。NO12－２次調査では、16世紀以降の南北の堀状遺構を検出した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。調査地点は字城ノ内と字奥の間にあり、東隣の道は明治38年等の地図にある南北の井路の場所である。堀状遺構は、井路に痕跡をとどめた郭を画する堀かもしれない。

今次の調査地点は恵美須神社の南至近に当る。敷地の前の道は井路を埋めたものである。大阪市教育委員会の試掘では、地表下1.8m以下で中世以前の遺物を検出したことから、２月22日より本調査を実施した。南北８ｍ、東西６ｍの調査区を設定し、地表下約1.6mの第５層上面から第９層上面の間を平面的に調査し、以下は調査区南東部を深掘りして約3.6mの深さまでの地層を観察し、遺物を採集した。

基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

現代の盛土を除いた地層は以下の通りである。

第１層：黄灰色(2.5Y4/1)粘土の偽礫からなる近代の盛土で、最大層厚55cmである。

第２層：灰オリーブ色(5Y4/2)中粒～粗粒砂層で、最大層厚25cmである。近世以降の作土層である。

第３層：シルトの小偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/1)中粒～粗粒砂層で、層厚は30～55cmである。近世以降の作土層である。

第４層：黒色(2.5Y2/1)シルト質中粒砂層で、層厚は15～20cmである。近世以降の作土層である。

第５層：オリーブ黒色(５Y3/1)シルト質中粒砂層で、層厚は10～20cmである。第５層から瀬戸美濃磁器染付碗12と関西系陶器土鍋13が出土した(図６)。19世紀中頃の作土層で、本層下面にSD501～505がある。

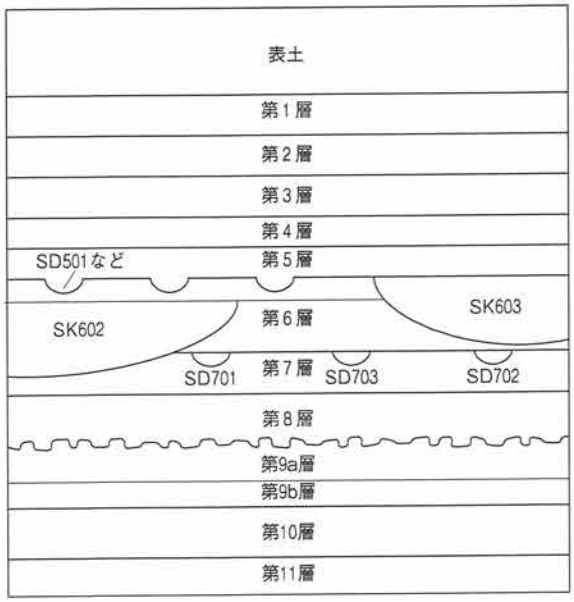


図３　地層と遺構の関係図

第６層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)中粒砂質シルト層の上層と暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂質シルト層の下層からなり、層厚は30～35cmである。第６層上面でSK601・603、第６層下部上面でSK602を検出した。第６層からは肥前磁器染付碗６・蓋７・皿８、肥前陶器擂鉢５が出土した。下限が19世紀初めの作土層である。

第７層：一部にオリーブ灰色(5GY5/1)細粒砂の薄層を挟む灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト層で、層厚は15cmである。水成層を母材として耕作され

た地層と観察した。上面でSD701～704を検出した。時期不明の土師器片のほかは出土していない。

第８層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂質シルト層で、層厚は30～40cmである。水成層だが、植物の根による擾乱のためラミナをほとんど留めない。本層からは瓦器椀２、土師器皿３、瀬戸美濃焼灰釉輪花皿４が出土した。４は16世紀後半のものである。

第９層：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土層の9a層と同色の細粒砂質粘土層の9b層から成り、層厚は50～60cmである。湿地の堆積層で、葦などの根の痕跡が多数ある。原因はよくわからないが、上面の凹凸が激しい。遺物は出土していない。

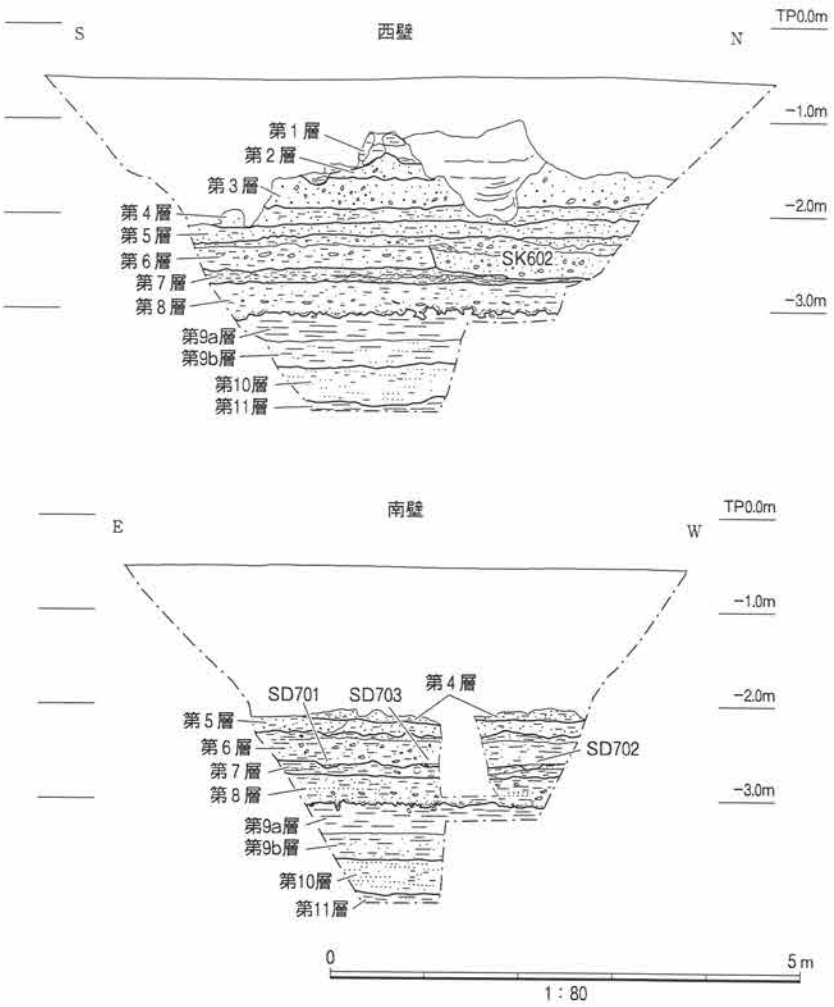


図４　地層断面図

第10層:灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂層で、層厚は35～40cmである。葦などの根の痕跡が多数あり、ラミナが続かない。近世の平瓦片２点が出土し、図６の１には滑り止めの櫛目がある。

第11層：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土層で、層厚は15cm以上である。湿地の堆積層で、遺物は出土していない。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

ａ.第７層上面の遺物

第７層上面で小溝SD701～704を検出した。平面的に検出したのはSD701のみで、幅0.10～0.20m、深さ0.03mである。SD704は第７層上面の帯状の土の違いから、SD702・703は南壁断面で把握した。SD702は幅0.23m、深さ0.06m、SD703は幅が同様で、深さ0.04mである。上層のSD501～505と同じく、現在の敷地の方向である。埋土は、いずれも第７・６層と異なるシルト偽礫混りオリーブ灰色(2.5GY5/1)極細粒砂である。畠の畝間ではないかと考えられる。

ｂ.第５層下面・第６層の遺構と遺物

第５層下面で検出したSD501～505は、第５層の畠に伴う鋤溝である。幅は0.15～0.35mで、ごく

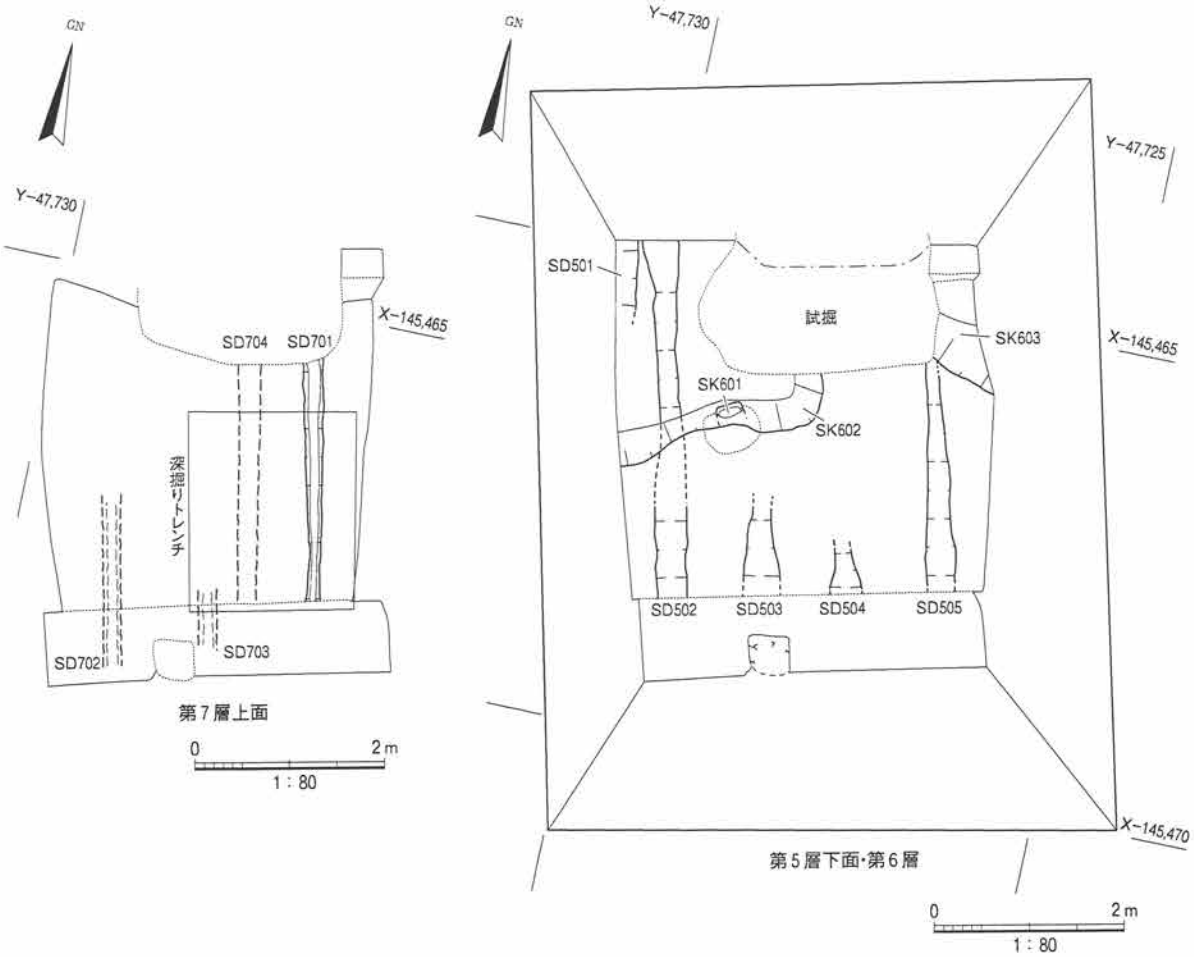


図5　遺構平面図

浅い。方向は現在の敷地と同じである。

第6層上面ではSK601・603を検出した。SK601は残存長0.30m、深さ0.05mである。SK603は調査区北東に一部が残存し、深さ0.40mである。第6層の偽礫とオリーブ黒色(5Y3/1)中粒～粗粒砂で埋められている。SK603からは18世紀末の肥前磁器染付碗11が出土した。第6層下部上面でSK602を検出した。SK602は南北2.35m以上、東西2.15m以上あり、深さ0.35mである。灰色(10Y4/1)細粒～中粒砂等で埋められている。SK602からは19世紀初めの肥前磁器染付広東碗9と、関西系陶器土鍋10が出土した。

c.他の調査地との対比

第10層出土として報告した瓦は、江戸時代のものでまちがいないと考える。第10層を江戸時代の地層とすると、野田城期の地層はその下になり、これまでの調査地点の遺構面と大きな高低差が生じる。野田城期の遺構面は、城内と推定されるNO12－2次調査でTP－2.0m、NO11－1次調査でTP－1.8+αmであり、今回の調査地点はTP－4.0m以下であるから、少なくとも2m低い。北東のNO07－1次調査の堀状遺構の高いところはTP－3.0mで、そこより1m低い。第10層では他にも江戸時代とみられる近世の瓦が出土している点から、混入とは判断しがたい。第5層→6層→8層と出土遺物がしだいに古くなっていることから、仮に第10層の出土遺物を混入としても、第9層や第8層とNO12－2・

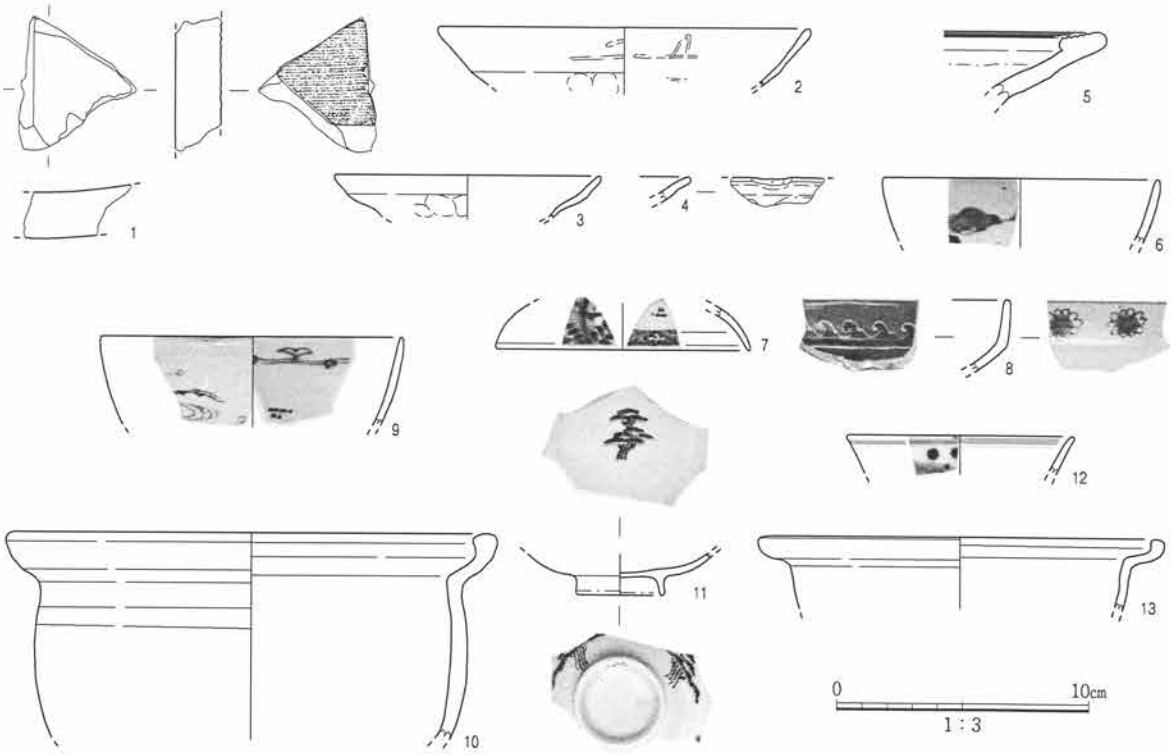


図6　遺物実測図

第10層(1)、第8層(2～4)、第6層(5～8)、SK602(9・10)、SK603(11)、第5層(12・13)

11－1次の野田城期の遺構面とは依然、高低差がある。

本調査地では、第8層以下は湿地状の堆積が続いており、第7～6層と高くなって畠に利用される。敷地の前の道はかつての井路を埋めたもので、調査地点から北の恵美須神社、その隣の極楽寺へと現地表は高くなっていく。渡辺武氏らの復元案とこれらを勘案すると、調査地点は野田城の堀に入っており、恵美須神社との間に堀と城本体との境がある可能性がある。堀の中であれば、その底は第11層以下にあり、もともとあった自然の低い湿地を利用した幅の広いものであった可能性がある。

3)まとめ

今回の調査では、地表から3.6m(TP－4.0m)までの地層と遺構を把握した。それによれば、第8層(TP－2.7m)まで湿地状の堆積が続き、第7～6層と高くなった江戸時代後半以降は畠に利用される。

既調査の野田城期の遺構面と比較すると、今回の当該期の地層はかなり低く想定でき、野田城の堀に入っていた可能性がある。今回の調査成果は、野田城の南東外縁などを推定するための資料となる。

参考文献

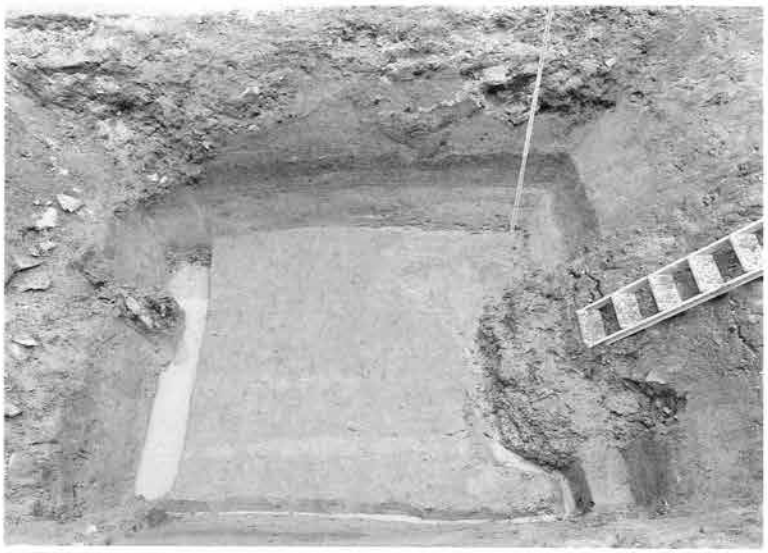
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「野田城跡伝承地発掘調査(NO07－2)報告書」:『平成19年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.15－23

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「野田城跡伝承地発掘調査(NO11－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.137－144

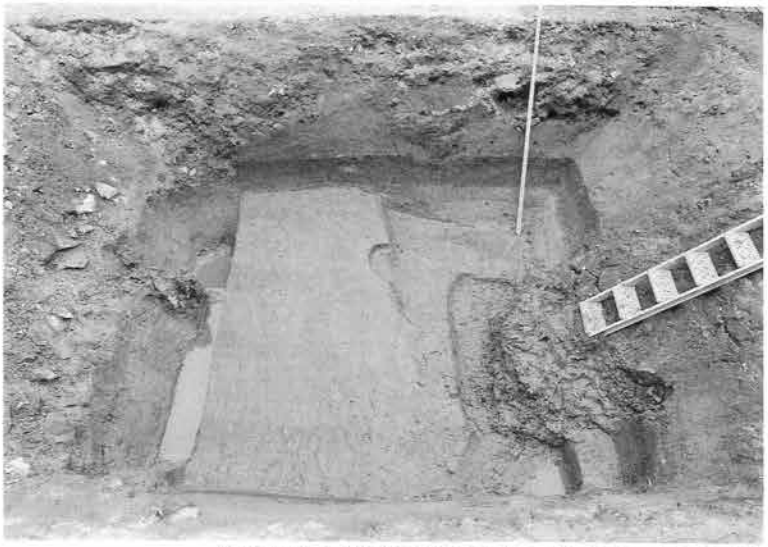
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「野田城跡伝承地発掘調査(NO12－2)報告書」:『平成24年度大阪市内

埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 7－14
岡倉光男1973、「幻の野田城－その由来と戦略」：『野田新報』第７号
櫻井久之2008、「福島区野田城伝承地　初の本格調査」：大阪市文化財協会編『葦火』135号、pp. 4 － 5
藤三郎2012、「野田城と戦国三好一族」：福島区歴史研究会編『なにわ福島ものがたり』、pp.52－74
渡辺武1995、「幻の野田城を探る」：『大阪春秋』第24巻第３号、pp.21－25

第７層上面遺構検出状況
（東から）



第５層下面・第６層の遺構
（東から）



南壁地層断面
（主に第５～10層）

中央区日本橋一丁目７－27・８－13における建設工事に伴う
日本橋１丁目所在遺跡発掘調査(NP15－１)報告書

調 査 個 所　中央区日本橋1丁目7－27・8－13
調 査 面 積　約111㎡
調 査 期 間　平成27年5月18日～5月27日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　清水和明　市川 創　櫻田小百合

1)調査に至る経緯と経過

当調査地は大阪市における南北方向の主要道路の1つである堺筋に面し、同じく東西方向の主要道路である千日前通から北へ約100mほどの地点に位置する。このうち堺筋については、日本橋以南は徳川期においては紀州街道であり、長町と呼称される両側町を伴っていた[平凡社地方資料センター編1986]。調査地は徳川期においてはこの両側町に属する。徳川期の長町については、宿泊施設が建ち並んでいたことが知られる[宇佐美英機1996・加藤政洋2004]。また、発掘調査成果などに基づいて作成された古地理図では、縄文時代後期には上町台地西側に形成されていた砂州A上に立地する[趙哲済ほか2014]。

周辺での既往の調査としては、SI11－1次調査が調査地の北方約330mで、SI04－1次調査が北西約360mで、KD07－1次調査およびNP05－1次調査が南東約580mで行われている(図1)。このうちSI11－1次調査では、TP+2.2m以下で海浜砂層を検出し、徳川初期以降の遺構と遺物を検出している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。SI04－1次調査では、TP+0.2m以下で水成の砂層を検出し、18世紀以降の遺構と遺物を検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。KD07－1次調査では、TP+1.0mで湿地的な堆積環境を示す泥層を、TP+0.9m以下で海成ないし風成の砂層を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。NP05－1次調査もKD07－1次調査とほぼ同様の堆積状況を示すが、泥層より13世紀後半頃の瓦器椀が出土しているほか、TP+0.8m以下には上町台地から流下してきた堆積物を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。

今回の調査に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、地表下約2.0m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする弥生時代末～古墳時代と目される遺物包含層が検出された。今回の調査は、この地層の年代や遺構・遺物の分布状況などを把握し、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

ることを目的に発掘調査を実施した。

調査は平成27年５月18日に10m×10mの調査区を設定して開始した。後述する第１層まで重機で掘削し、第２層以下を人力で掘り下げ、遺構面の精査と遺物の採集、写真撮影、実測などを行った。こうした調査の過程で弥生時代末頃の遺構が認められ、当該期の地形を追求するため、教育委員会の指示を受け、11㎡を拡張し、攪乱を利用して地層の観察を行った。調査は５月26日まで行い、翌27日には機材撤収を含むすべての作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP＋○mと記した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。古式土師器の理解については、[杉本厚典1999]を参照しつつ、器形等の名称を含め基本的な理解は[西村歩2003]に拠った。

2)調査の成果

i)層序(図３・４、写真１・２)

当調査地は、上町台地の西側に当り、台地裾から海岸部へと下る緩傾斜面に立地している。周辺の標高は、TP＋3.8m前後である。今回の調査では、現地表下3.2mまでの地層を６層に区分した。

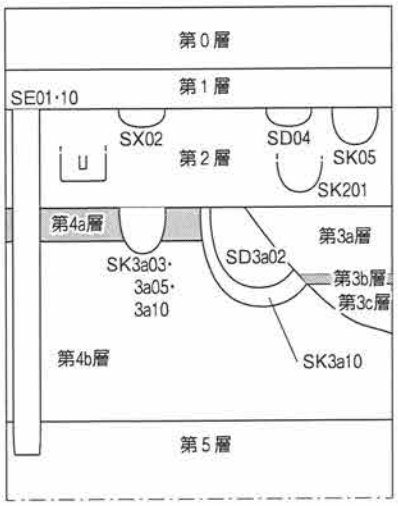


図３　地層と遺構の関係図

第０層：現代の盛土層および攪乱の埋土である。層厚は平均的には140cm程度であるが、部分的に300cm以上に及ぶ。

第１層：近代の盛土層である。層厚は最大で20cmで、第０層によりそのほとんどが削剥されていた。

第２層：豊臣～徳川期の盛土層である。暗褐色の細粒砂～細礫からなり、層厚は最大で40cmであった。本層の上面では大別して２時期の遺構を検出しており、18世紀以降の遺構としてSE01・10、SX02など、豊臣後期から17世紀の遺構としてSD04、SK05・17・18などがある。また、層内でもSP203・

写真１　攪乱部地層北壁断面

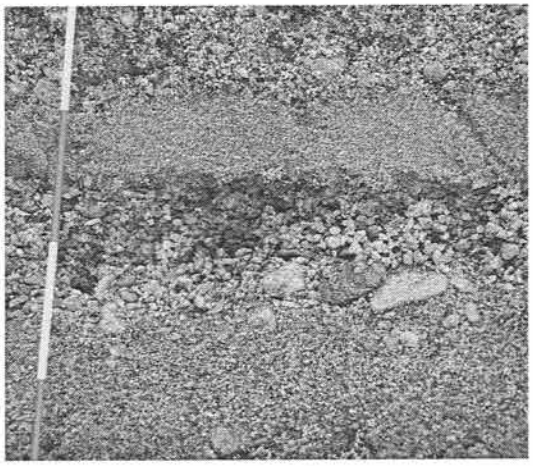


写真２　第５層の覆瓦構造(南から撮影)

205、SK201・204・208・213・317など豊臣後期から17世紀の遺構を検出しているが、これらは本来は上面に属するものであろう。本層からは土師器・須恵器・瓦質土器・金属器・動物骨などが出土している。

第３層：上位から第3a～3c層に細分した。第3a層はにぶい黄色の細粒～粗粒砂からなる自然堆積層である。下位と比べ上位は淘汰が悪く、風成層を含む可能性が高い。層厚は最大で48cmである。第3b層は灰黄褐色のシルト質細粒～粗粒砂からなる古土壌である。層厚は最大で８cmである。第3c層はにぶい黄色の細粒～極粗粒砂からなる自然堆積層で、後述する第４層を削剥する。層厚は最大で20cmであった。このうち、第3a層から土師器および須恵器の細片が出土している。図19－48に図示した須恵器により、年代の１点は８世紀頃に求められる。

第４層：上位から第4a・4b層に細分した。第4a層はにぶい黄褐色のシルト質細粒～粗粒砂からなり、第4b層の上位に形成された古土壌である。層厚は14cmであった。本層上面ではSD3a02のほか、SK3a01・3a03～3a05・3a10を検出した。本層からは、庄内期の土器が出土している(図19)。第4b層はにぶい黄色の細礫質細粒～極粗粒砂からなる自然堆積層である。層厚は52cmであった。本層から遺物は出土していない。

第５層：にぶい黄褐色の砂と礫の互層からなる自然堆積層である。調査区南部の攪乱を利用して観察を行った(写真１)。層厚は100cm以上あり、いわゆる難波砂堆を構成する地層である。礫には覆瓦

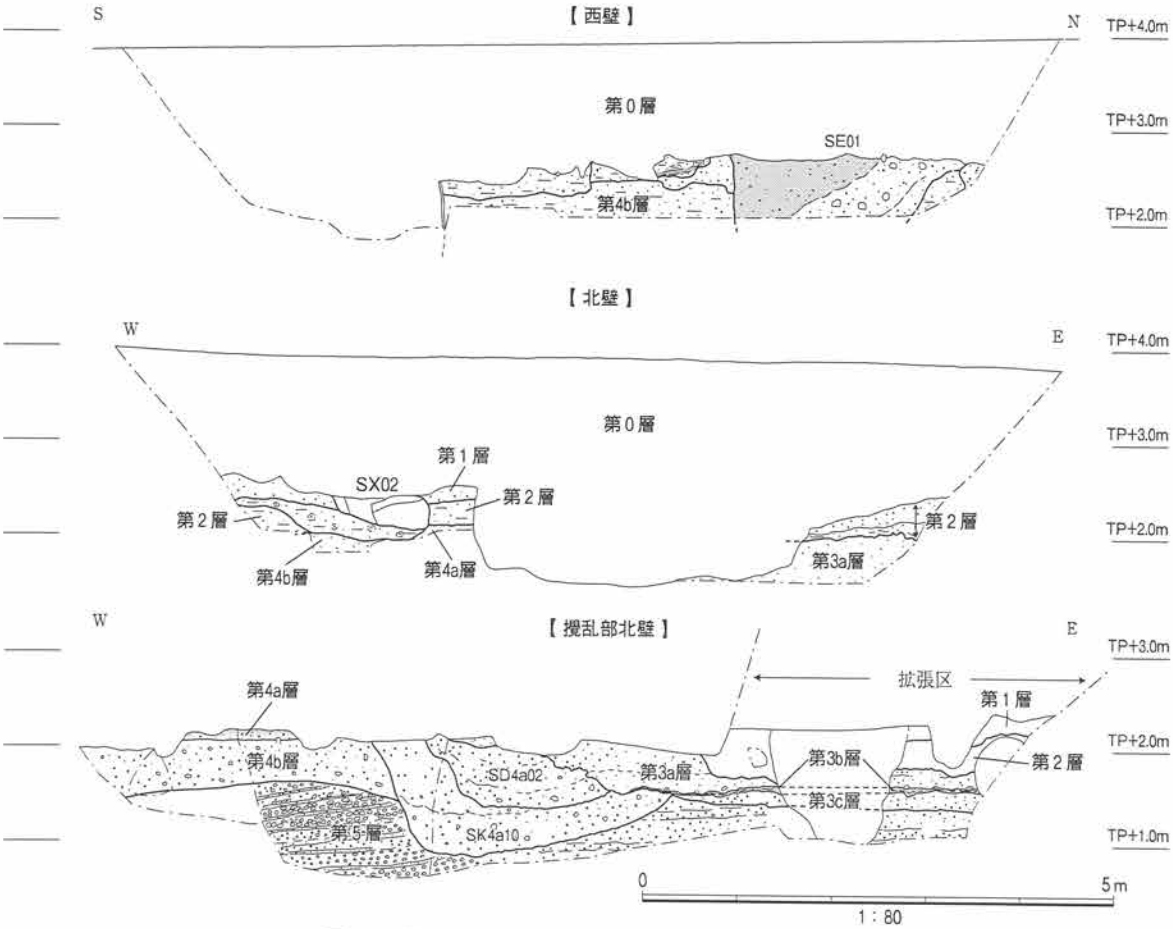


図４　地層断面図(攪乱部北壁の作図位置は図２参照)

構造が認められ、本層を形成した古流向の一部が西→東であったことがわかる(写真２)。本層から遺物は出土していない。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．庄内期～古墳時代の遺構と遺物(図５)

第4a層の上面において、SD3a02のほか、SK3a01・3a03～3a05・3a10を検出した。

SD3a02　南北方向に延びる溝で、調査区の東端で検出した。後述するSK3a10を破壊し、SK3a01に切られ、第３層により削剥される。幅2.0以上、長さ3.2m以上で、検出面からの深さは0.6mであった。溝の東端は調査区外にある。埋土は黄褐色のシルト質細粒砂～細礫であり、流水・滞水の痕跡は認められなかった(図６)。

当遺構からは、古式土師器・須恵器・土錘が出土した(図７)。１～８は古式土師器で、１～３は弥生形甕Ａ類である。１は器高13.0cmで、外面にはタタキ痕があるものの、ナデなどで消そうとしている。内面は板ナデ調整である。２のタタキ整形は左上がりで、底部は上げ底状となり裏面に木の葉圧痕が

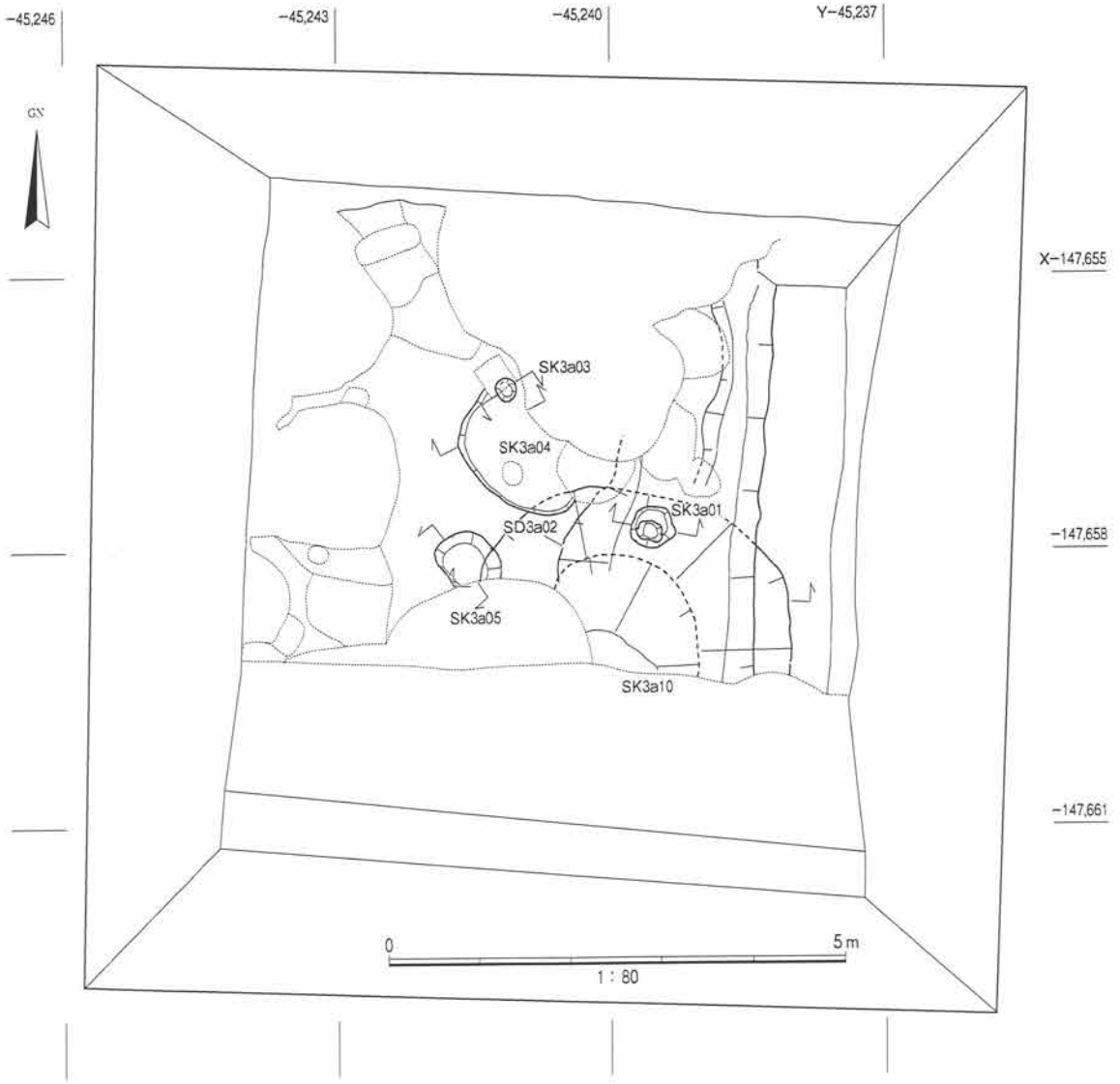


図５　庄内期～古墳時代の遺構平面図

ある。内面はナデ調整である。3の内面はハケ調整である。4は甕の口縁部であり、形態からみて古墳時代前期以降に下るものであろう。外面にはススが付着する。5～7は高杯の脚部である。5は横方向のヘラミガキを施す。内面には棒状の工具による刺突痕が認められる。6は円形のスカシ孔を有し、内面はハケ調整である。7も円形のスカシ孔を開け、内面・外面ともハケ調整である。8はミニチュアの鉢か。手づくねにより成形している。9・10は管状土錘であり、10の端面にはタタキ痕が認められる。なお、本調査で出土した土錘については、表1に計測表を示した。

SK3a01　調査区の東南部で検出した。第3層により削剥される。直径約0.5mの不定形な土壙で、検出面からの深さは0.2mであった。埋土は偽礫化した第4a層である(図6)。当遺構からは古式土師器と思われる細片が出土している。

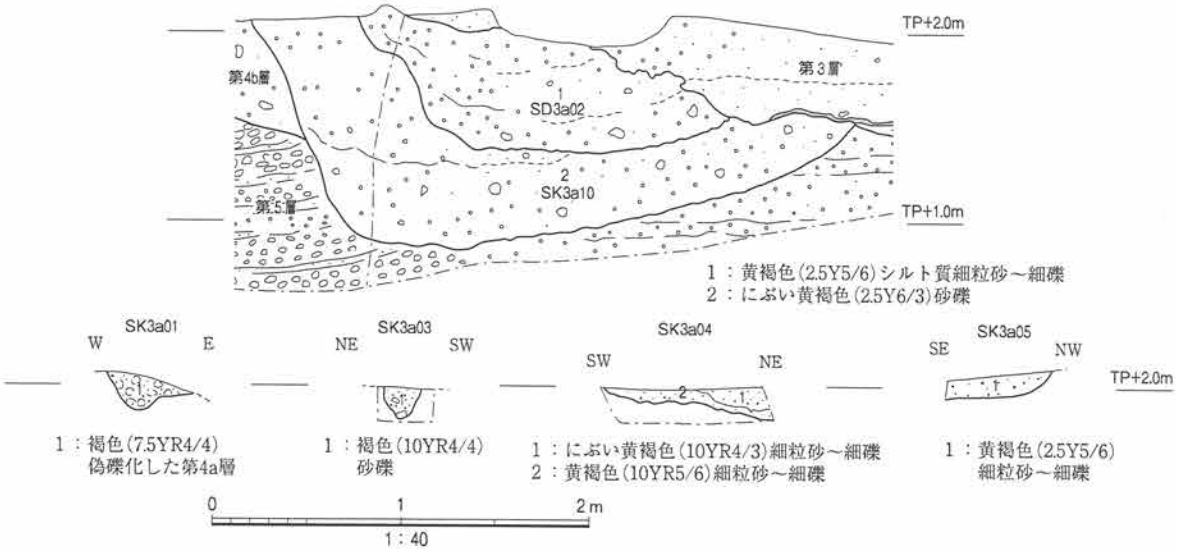


図6　SK3a01・3a03～3a05・3a10・SD3a02断面図(作図位置は図5参照)

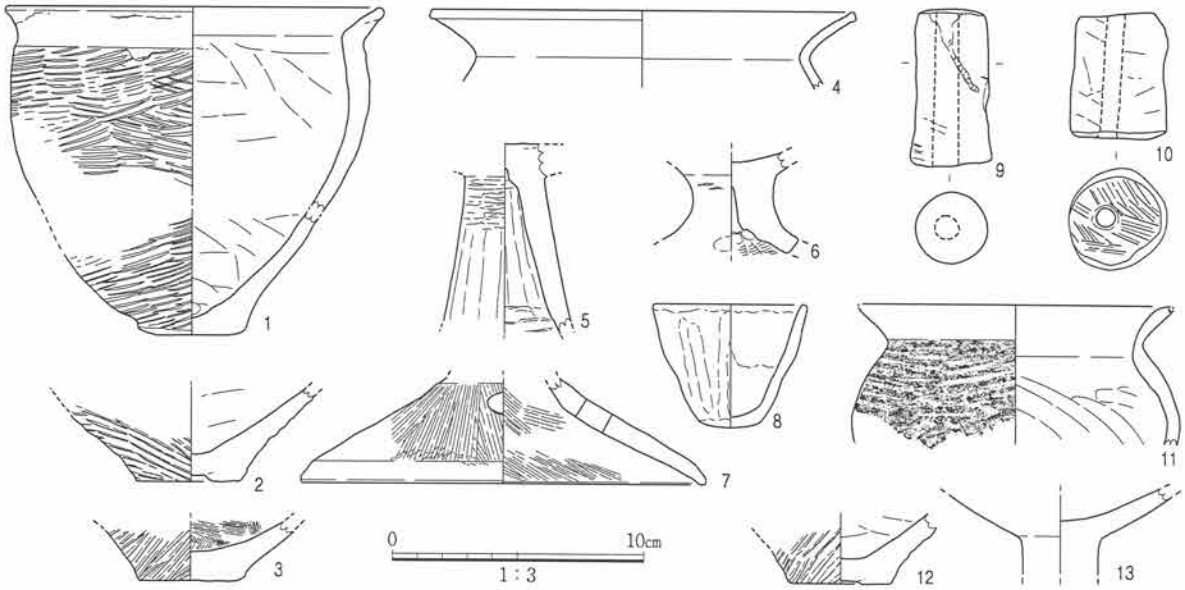


図7　SD3a02・SK3a03・04出土遺物実測図
SD3a02(1～10)・SK3a03(11・12)・SK3a04(13)

SK3a03　調査区の中央部で検出した。SK3a04を破壊していた。直径0.2mの土壙で、検出面からの深さは0.2mである。埋土は褐色の砂礫である(図6)。当遺構からは古式土師器が出土した(図7)。このうち11・12は弥生形甕A類で、11の内面調整はナデ、12は底面が上げ底状となる。

SK3a04　調査区の中央部で検出した。直径1.6mの土壙で、検出面からの深さは0.15mである。埋土は上半がにぶい黄褐色の細粒砂～細礫、下半が黄褐色の細粒砂～細礫であった(図6)。当遺構からは、古式土師器が出土した(図7)。このうち13は高杯の脚部である。胎土は長さ2㎜以下の長石・石英・チャートを含み、粗い。

SK3a05　調査区の西南部で検出した。直径0.7mほどの土壙で、SK3a10を破壊していた。検出面からの深さは0.1mで、埋土は黄褐色の細粒砂～細礫である。古式土師器の細片が出土している。

SK3a10　調査区の南部で検出した。第4a層上面検出遺構のうち、切合い関係からみて当遺構がもっとも古い。直径は3.6mほどで、検出面からの深さは1.2mである。埋土はにぶい黄色の砂礫で、下半

表1　管状土錘計測表

掲載番号	遺存状態	出土遺構	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	焼成	備考
9	完形	SD3a02	6.2	3.3	1.0	73.9	土師器質	－
10	完形	SD3a02	5.0	3.8	0.7	93.2	土師器質	・端面にタタキ痕 ・使用痕あり
20	完形	SK3a10	5.6	3.5	1.0	83.5	土師器質	－
21	完形	SK3a10	6.2	3.9	0.7	106.6	土師器質	・端面にタタキ痕 ・使用痕あり
56	ほぼ完形	SK17	7.5	3.3	1.0	92.8	土師器質	・黒斑あり

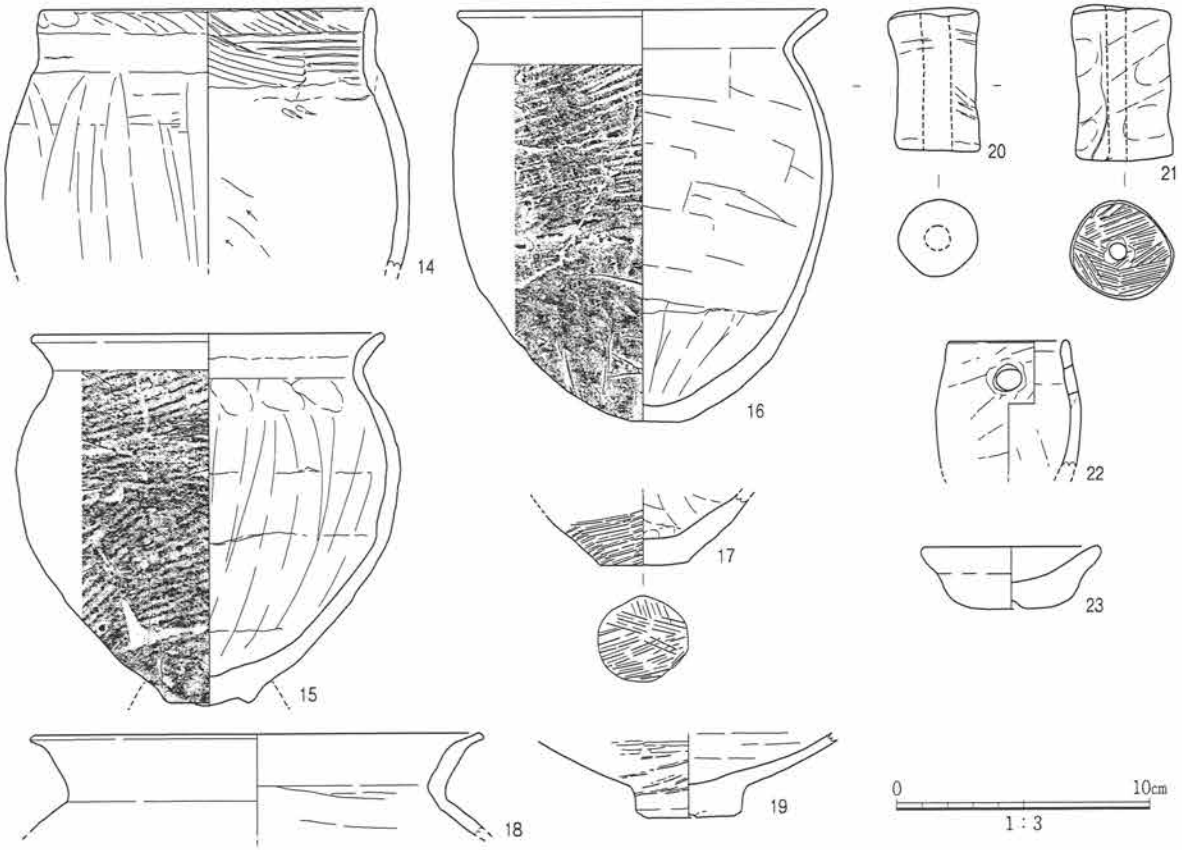


図8　SK3a10出土遺物実測図

は礫を多く含む。

当遺構からは、古式土師器・土師器・製塩土器・土錘・イイダコ壺などが出土した(図８)。このうち壺14は、外面をハケののち板ナデ、内面を板ナデで調整する。胎土は長さ１㎜以上のチャートなどを含み、粗い。近隣の遺跡では同様の形態をもつ資料は出土しておらず、搬入品である可能性も考えられよう。15～17はともに弥生形甕で、いずれも外面にはススが付着する。15は分割成形されており、内面はナデ調整である。底部には剥離痕があり、台付甕である可能性が高い。16の内面調整は、上半部が板ナデ、下半部がナデである。外面は下半部にナデ調整を施す。17は底部裏面にもタタキ痕がある。18は土師器の甕で、口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はナデ調整である。形態・調整からみて古墳時代中期以降の資料である。古墳時代以降に下る資料はこの１点のみであり、SD3a02から混入した可能性がある。19は平底の壺底部である。外面はタタキで整形したのち、横方向のヘラミガキを施す。内面調整はナデである。20・21は土錘で、２点とも黒斑を有する。21の側面には粘土板の接合痕が観察でき、棒状のものに粘土板を巻きつけて成形したのち、側面はナデ、端面にはタタキを施したことがわかる。22はイイダコ壺で、円孔を穿ち、内面・外面ともナデ調整である。23は鉢状の小型品で、ミニチュアなどと思われる。

これら第4a層上面検出遺構から出土した土器群は、庄内期に属するものを主体とし、SD3a02では古墳時代中期以降の資料をわずかに含む。多くの遺構が庄内期に機能し、SD3a02などはその後、古墳時代頃に埋没したものと考える。

b．豊臣後期～17世紀の遺構と遺物(図９)

第２層の上面でSD04およびSK05・17・18、層内でSP203・205、SK201・204・208・213・317

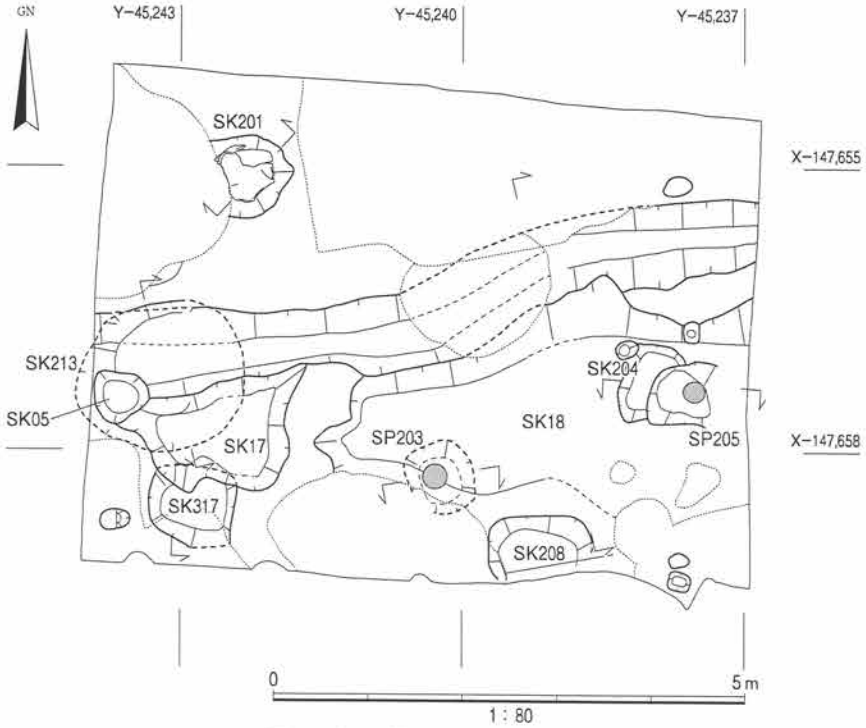
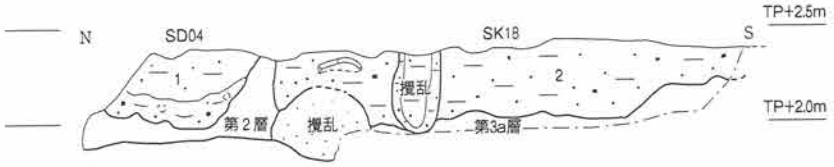


図９　豊臣後期～17世紀の遺構平面図



1：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂礫
(下部にシルトの偽礫および炭が混る)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)含炭シルト質砂礫

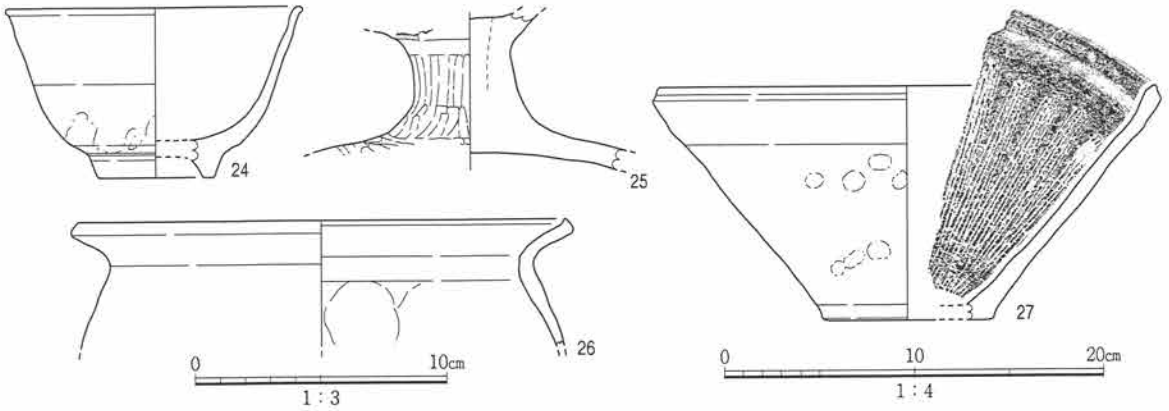


図10　SD04・SK18断面図およびSD04出土遺物実測図

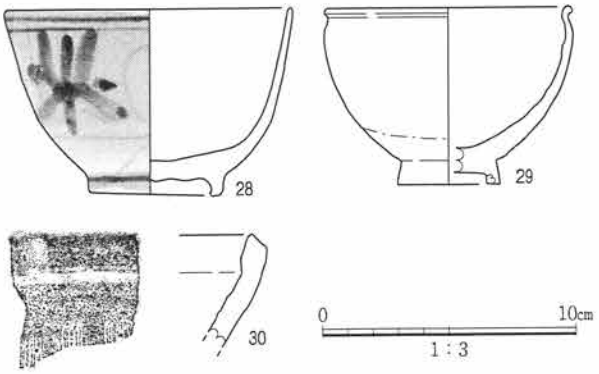


図11　SK05出土遺物実測図

などを検出した。

SD04　東西方向の溝で、東でやや北に振る方向に延びる。後述するSK17・18により破壊される。幅は0.8m、長さは7.2m以上で、検出面からの深さは0.45mである。埋土は灰黄褐色のシルト質砂・礫で、下部にはシルトの偽礫および炭を含む(図10)。

当遺構からは、土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器のほか、銭貨やスラグが出土している。このうち、肥前陶器24、瓦質土器25、土師器26、丹波焼27を図示した(図10)。24は碗で、外面の下半は無釉である。25は瓦灯の脚部であり、外面にはヘラミガキを施す。甕26は口縁端部が上方に肥厚する。擂鉢27は口縁端部が上方に肥厚し、擂目は櫛状の工具で施す。これらは17世紀前半に属する資料である。

SK05　調査区の西部で検出した。長辺0.5mほどの土壙で、検出面からの深さは0.4mであった。埋土はシルト質砂礫である。当遺構からは、土師器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器のほか、ウシの肋骨を中心とする動物遺存体が出土した(写真3、註1)。ウシの肋骨は、切断された骨端部(写真3－左下)が大部分を占め、中央部はわずかである。中央部は長さ約5cmに統一されていることから(写真3－左上)、この中央部を取得するための加工作業が当調査地ないし近隣で行われていたと考えられる。なお、骨端部には切断の失敗痕跡が認められるものもある(写真3－右)。

当遺構から出土した陶磁器類のうち、肥前磁器28、肥前陶器29、丹波焼30を図示した(図11)。28は染付碗で、全体的に歪みが大きい。29は碗で、外面の体部下半を無釉とし、口縁端部を外反させる。

写真３　SK05出土の骨細工素材
左上：目的材
左下：肋骨端部
右上：切断失敗痕跡(▼部)

擂鉢30はヘラ状の工具で擂目を施し、全面に自然釉が付着する。これらは17世紀前半～中頃の資料であろう。

SK17　調査区の西南部で検出した。不定形で、東西は2.0m、南北は1.2mほどである。検出面からの深さは0.2mであった。当遺構からは、土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・肥前磁器のほか、土錘が出土している。

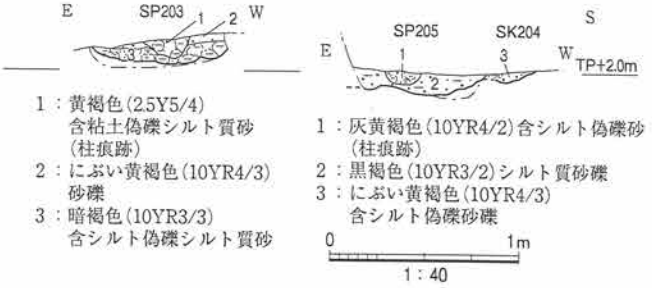


図12　SP203～205断面図

SK18　調査区の東南部で検出した。大型の土壙で、東西4.5m以上、南北3.2m以上の規模がある。検出面からの深さは0.4mで、埋土はオリーブ褐色の含炭シルト質砂･礫である(図10)。当遺構からは、土師器・瓦質土器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器のほか、金属器が出土している。

SP203・205　調査区の南半で検出した柱穴であり、SK18により上部を破壊されていた。平面形は不整形ながら一辺0.8mほどの方形を呈する。柱痕跡は直径0.2mほどであり、柱間隔は2.9mである。掘形の深さは0.2mで、埋土は砂・礫を主とし、シルトの偽礫などを含む(図12)。SP205から土師器・肥前陶器が出土している。２基の柱穴が組み合う可能性もあるが、建造物を明確に復元することはできない。

SK201　調査区の西北部で検出した。直径0.8mほどの土壙で、検出面からの深さは0.4mであった。遺構内からは備前焼の壺32が横位で出土し(写真４)、ほぼ完形に復元することができた。埋土は砂・礫を主体とし、炭などを含む(図13)。

当遺構からは、先述の備前焼のほか、スラグや魚骨が出土している。このうち備前焼31・32を図示した(図13)。31は小型の壺で、外面の下半にはヘラケズリ、上半には回転ナデを施す。内面には茶褐色の付着物が認められ、鉄漿壺として使用された可能性もある。32は壺で、環状の双耳を有する。外面の体部下半には「干」状の窯印を有する。「く」の字状に屈曲する口縁部形態からみて、17世紀代の資料と考えられる。なお、32内部の土を洗浄したが、何も出土しなかった。

写真4　SK201検出状況

SK208　調査区の南部で検出した。南半は攪乱により破壊される。東西の規模は1.0mで、検出面からの深さは0.2mであった。当遺構からは、土師器・肥前陶器・肥前磁器が出土した。このうち焼塩壺35を図示する(図15)。粘土塊を刳り抜き外面はナデ、内面は板ナデで調整するC2類であり[積山洋1999]、17世紀に属する資料である。

SK213　調査区の西端で検出した。上部はSD04

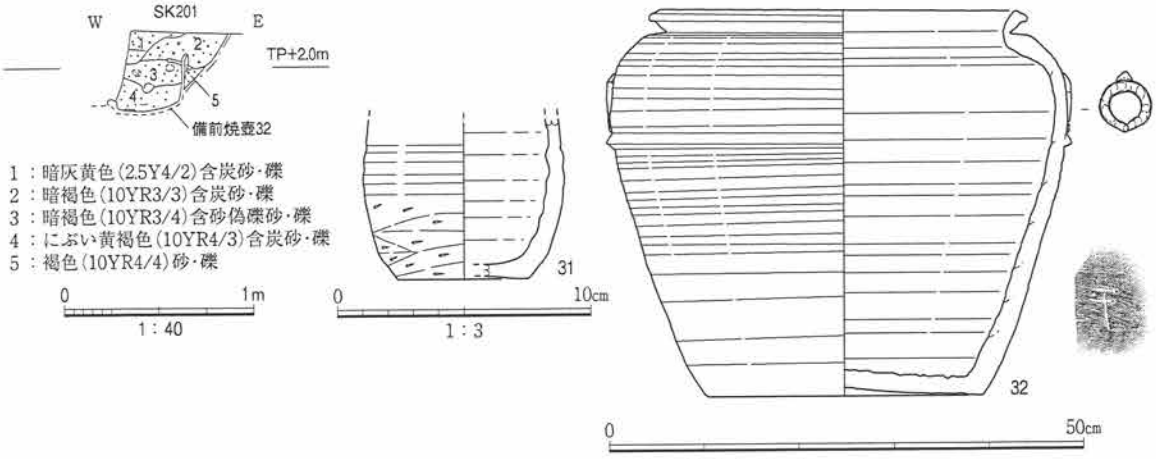


図13　SK201断面図および出土遺物実測図

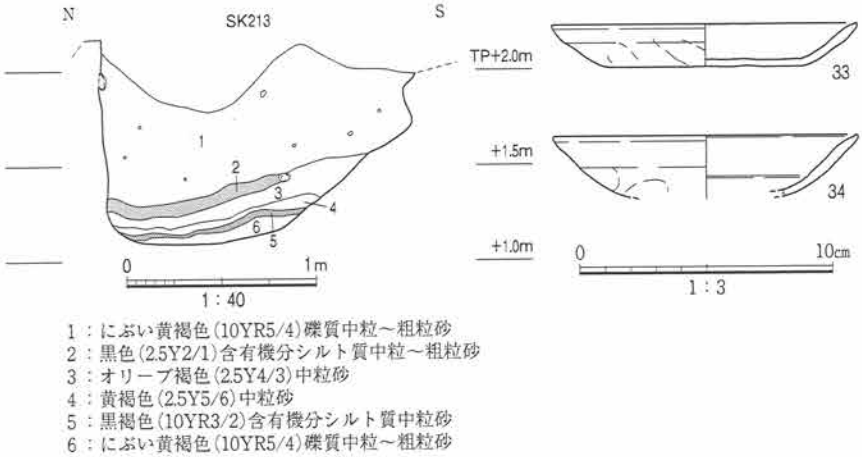


図14　SK213断面図および出土遺物実測図

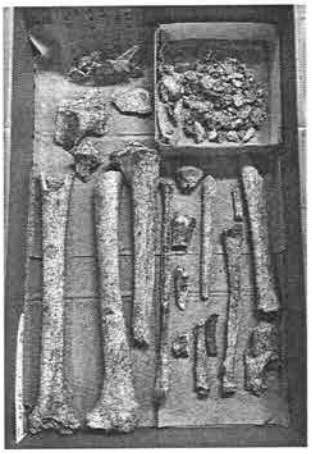


写真5　SK213出土人骨

およびSK17により破壊されていた。平面形は直径1.6mほどの円形を呈し、検出面からの深さは1.1mである。埋土は砂礫を主体とし、下部には有機分に富んだシルト質中粒～粗粒砂の薄層が認められる(図14)。この薄層からは人骨が出土しており(写真５)、有機分が人体に由来する可能性がある。ただし、木質の痕跡などは認められなかったことから、当遺構は墓ではなく投棄土壙であると考える。ｆ項で後述するように頭骨は遺存しておらず、頭部を欠いた状態で当遺構に投棄されたのだろう(註２)。

当遺構からは、人骨や土師器・備前焼・丹波焼・瓦・塼・壁土・鉄釘のほか、混入品として須恵器が出土している。このうち、土師器皿33・34を図示した(図14)。２点とも手づくね成形であり、内面の底部と口縁部の境には沈線を巡らせる。33は口縁部にススが付着することから、灯明皿として使用されたことがわかる。34は外面にススが付着する。形態からみて、豊臣期～徳川初期に属する資料であろう。

SK317　調査区の西南部で検出した。北端はSK17により破壊されていた。東西・南北とも0.9mほどの規模で、検出面からの深さは0.2mである。当遺構からは土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・瓦が出土し、このうち土師器皿36を図示した(図15)。36は手づくね成形で、内面の底部と口縁部の境に沈線を巡らせる。口径は11.8cmである。形態からみて、豊臣期～徳川初期に属する資料であろう。

ｃ．18世紀以降の遺構と遺物(図16)

第２層の上面において、SE01・10、SX02などを検出した。

SE01　調査区の西北隅で検出した。直径1.0mの石製井戸側を有する井戸で、遺構の上部は廃絶時に破壊されていた。井戸側は火山礫凝灰岩(いわゆる豊島石)製で、検出面からの深さは0.5m以上ある。埋土は黒褐色の砂・礫で、焼土および漆喰を多く含んでいた。

当遺構からは、土師器・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・中国産青花・瓦・金属器(鉄釘・銭貨)・動物骨などが出土した。このうち、埋立て土から出土した中国産青花37、関西系陶器38、肥前陶器39、軒平瓦40を図示した(図18)。37は碗で、体部に文様はなく、外面底部には字款「大明成化年製」を有する。高台端部には施釉しない。日本における出土例が少ない時期の資料であるが、難波宮跡(NW08－３次)のSK404から出土した良好な一括資料の中に見られる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。38は腰折碗であり、外面体部の下部は無釉である。刷毛目鉢39は、高台端部および底部外面を無釉とする。40はいわゆる橘唐草文の定型化に先立つ文様である。これらの遺物からみて、当遺構の廃絶は18世紀中頃であろう。

SE10　調査区の南端で検出した。掘形の直径は1.2m、瓦製井戸側の直径は0.8mであった。検出面からの深さは0.8mである。井戸枠内の埋立て土は黄褐色の粗粒砂～細礫で、炭およびシルトの偽礫を含む。掘形の埋土はにぶい黄褐色のシルト質中粒砂～細礫であった(図17)。当遺構からは、土師器・瓦質土器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦などが出土している。

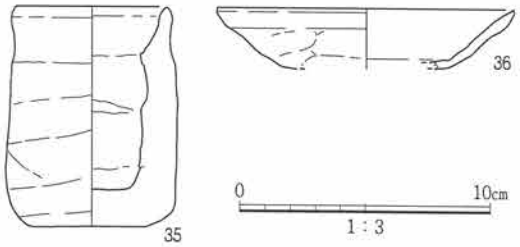


図15　SK208・317出土遺物実測図
SK208(35)、SK317(36)

SX02　調査区の北西部で検出した。SE01廃絶に

伴う井戸側の抜取り穴によって、西部を破壊されていた。直径1.0mほどの範囲を掘り窪め、その中に粘土を貼っていた。粘土の表面は焼結している。構造からみて、竈である可能性が高いだろう。当遺

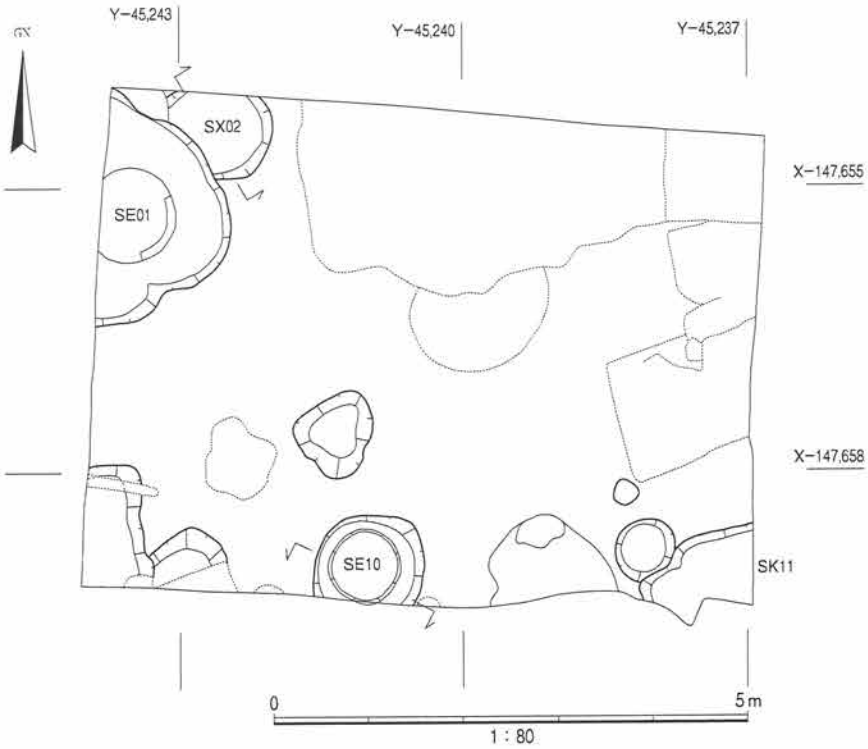


図16　18世紀以降の遺構平面図

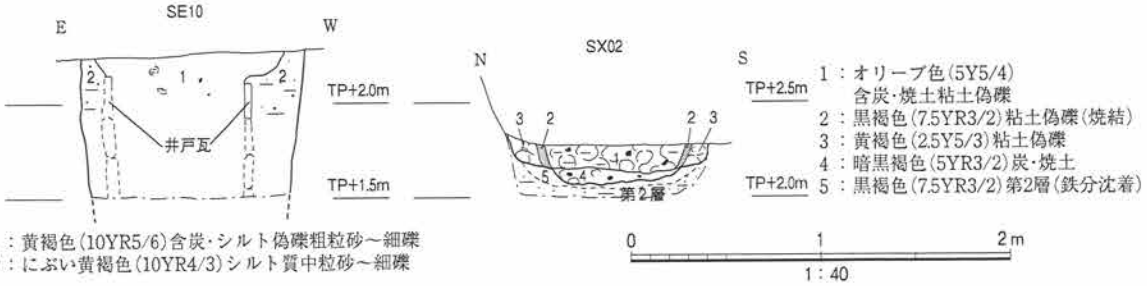


図17　SE10・SX02遺構断面図

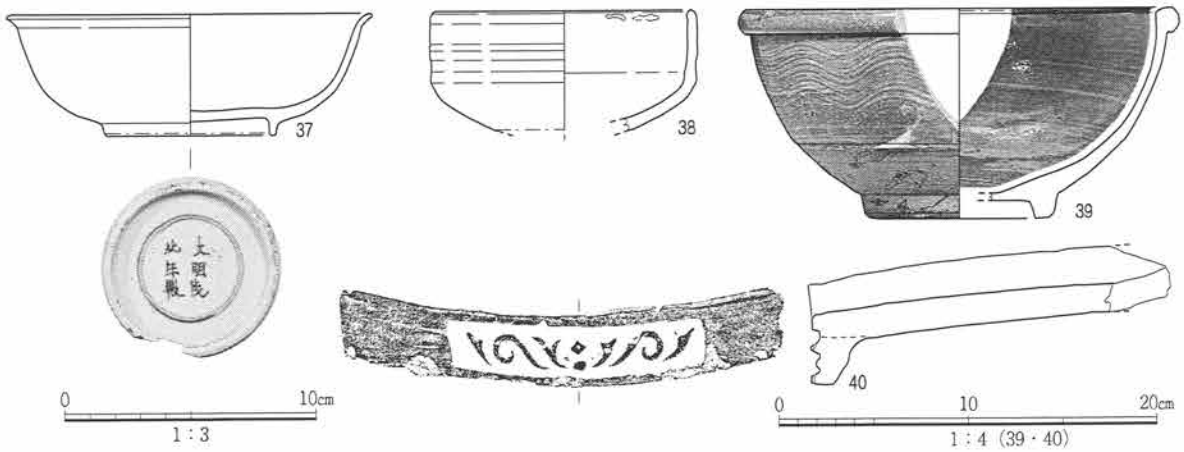


図18　SE01出土遺物実測図

構からは土師器片が出土している。

d．各層出土遺物(図19)

各層から出土した遺物のうち、特徴的な資料について述べる。

第4a層出土資料では、弥生形甕41・42、脚部43、高杯44～46、壺47を図示した。41・42は底部で、42の外面にはタタキ痕が残る。また、底部はやや上げ底状である。43はタタキののちシボリによって脚部を整形している。形態および整形技法からみて製塩土器であろう(註3)。44は椀形高杯である。調整は不明である。脚部45・46のうち、45は中空、46は中実である。46は外面にタタキメがあり、黒斑を有する。47は広口壺の口縁部である。内面にはヘラミガキを施している。

第3a層出土資料では、須恵器杯B蓋48を図示した。細片であるが、本層の形成が8世紀以降に下ることを示唆する。

第2層出土資料には、瀬戸美濃焼49、土管50などがある。49は柿釉を施す天目碗である。50は瓦質に焼成され、端部が受け口状を呈する。これら第2層出土資料の下限は、徳川初期である。

51～57には、古式土師器のうち攪乱および第2層以上の遺構・地層から出土した遊離資料を示した。51は製塩土器で、外面にはタタキを施す。52は弥生形甕の口縁部で、体部内面はハケ調整である。胎土に結晶片岩を含み、紀伊などから搬入された可能性がある。53～55は弥生形甕の底部で、いずれも外面にはタタキを施し、底面は上げ底状である。内面調整は53・54はナデ、55はハケである。56は管状土錘で、外面には黒斑を有する。57は高杯の脚部である。

58～64はいずれも弥生土器で、本調査に先だち調査区外で実施された試掘調査のうち、西側の試掘壙で出土した資料を中心に図示している。58は壺の口縁部で、口縁端部には刺突列点文を2段に施し、その下位に櫛描きの波状文を施す。広口壺59は口縁端部に凹線文を巡らせる。60も広口壺で、器壁の荒れが著しいが、口縁端部下端にはキザミメが認められる。61・62は高杯の口縁部である。61は器壁の摩耗が著しいが、62にはヘラミガキが認められる。63は小型の甕で、口縁部を面取りしない粗製品である。64は甕の底部で、外面にはススが付着する。これら試掘調査出土資料は、弥生Ⅳ様式を中心とする。なお、当調査出土の古式土師器と比較した場合、器壁の劣化が明らかに進行している。

e．動物遺体について

今回の調査では、17世紀前半～中頃と思われる土壙SK05から、多量の動物遺存体が出土した。先述したようにこれらは、ウシの肋骨の骨端を切除し、長さ5cmほどの材を得ることを目的とした加工により生じた残滓と考えられる。大坂でこれまでに知られている骨細工はいずれも大腿骨などを素材としており、屈曲が強く、また緻密質層の薄い肋骨を素材とする例は知られていなかった。どのような製品を目的とする材であるのか興味がもたれるところであるが、今回の調査ではこの先の工程を示す資料は出土していない。

そこで図20には、今回出土した材を利用した可能性のある製品を図示した。299・341・342はいずれも大坂城下町跡(OJ92－24次)で出土した資料である[大阪市文化財協会2004]。図示した3点のうち、299は骨を薄い板状に加工したもので、長さ5.0cm、幅1.6cm、厚さ2mmである。平面を半月状に成形している。端面は薄く面取りされ、刃状になっている。片面には骨の内側の海綿状組織が残され

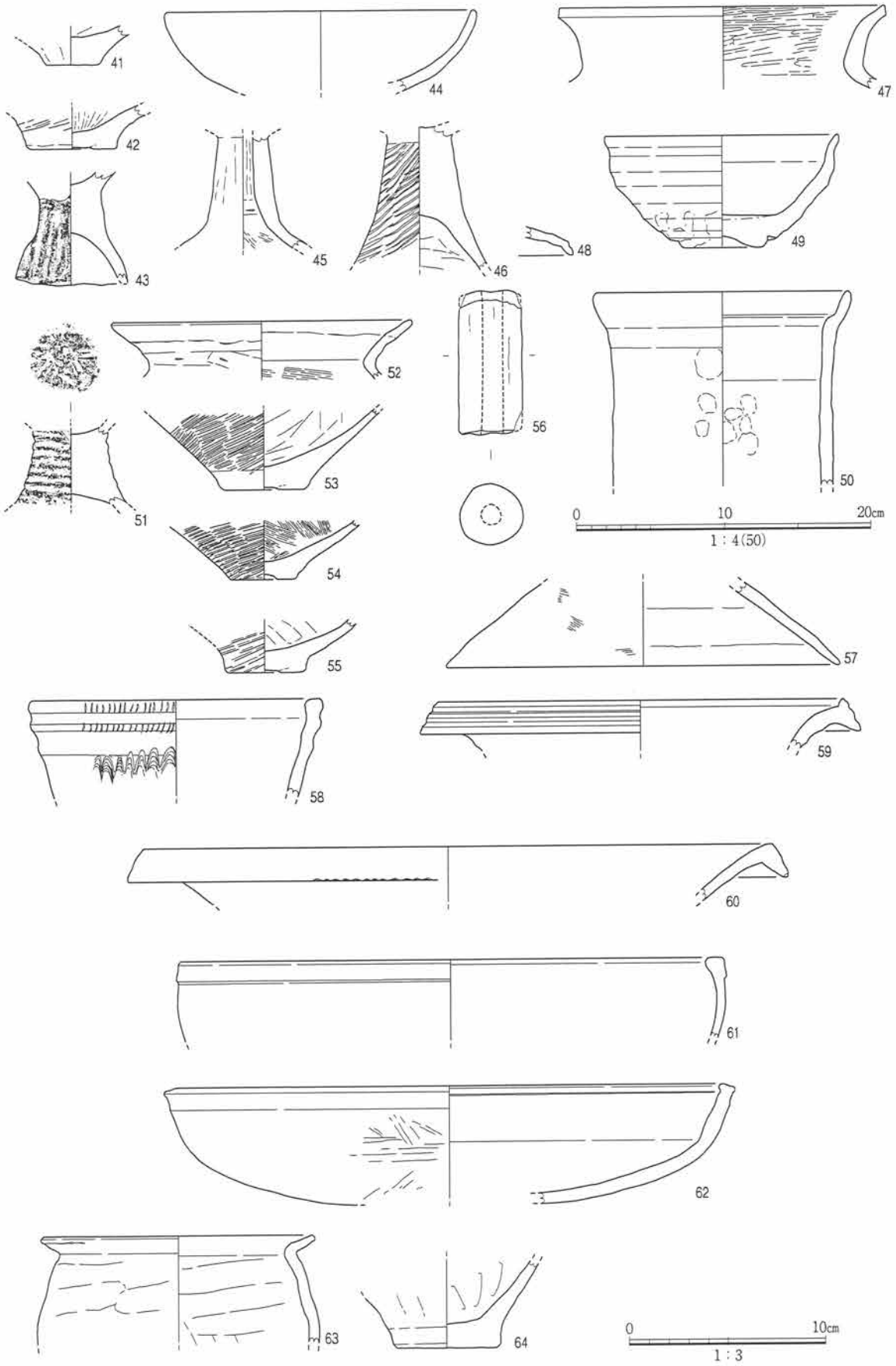


図19　包含層ほか出土遺物実測図

第4a層(41～47)、第3a層(48)、第２層(49・50)、撹乱および遊離資料(51～57)、試掘壙(58～64)

ている。341はその破損品と思われるが、342は材の方向が上記２点とは異なっており、未製品の可能性があるだろう。299はSK429、341・342は第4c層から出土しており、このうちSK429の時期は17世紀前半である。これらの骨製品は用途不明であるが、製品の寸法および裏面の状態が資料と酷似しており、今回の調査で出土した資料がこうした製品を目的の１つとしていた可能性があるだろう。

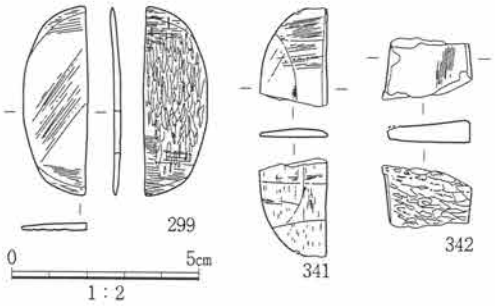


図20　OJ92−24次出土骨製品

ｆ．SK213出土の人骨について

出土部位は鎖骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨と腓骨などの四肢骨のみで、頭骨は遺存していない(図21)。出土部位で重複している箇所は無く、出土骨全体の観察から１体と推定される。性の判定ができる部位は出土していないが、年齢は寛骨耳状面[J. E. Buikstra, D.H.Ubelaker1994]より、20歳前後と推定された。

骨計測ができた骨は右橈骨、左尺骨、左右の大腿骨と脛骨であり、このうち身長の推定に用いる最大長が計測できたものは橈骨のみであった(表２)。身長の推定には藤井の式[藤井明1960]を用い、性の判定ができなかったため男女両方の推定を行った。その結果、男性の場合の推定値が155.1cmで、女性の場合では150.6cmであった。

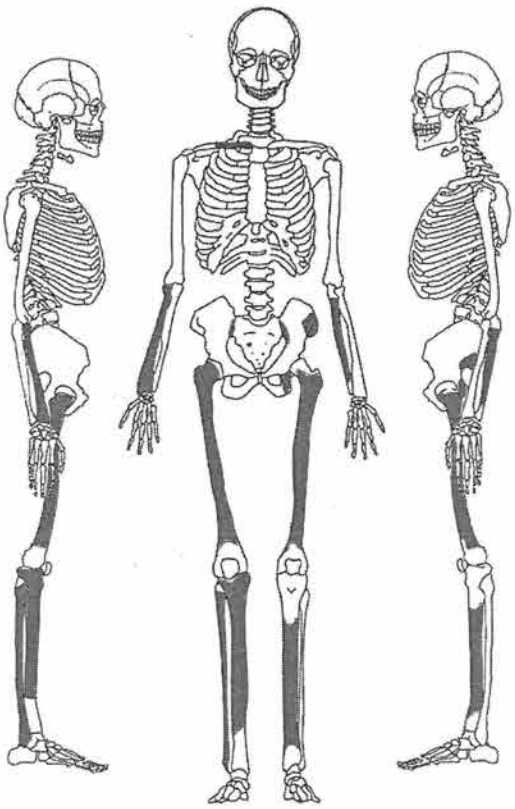


図21　出土人骨の遺存部位

表２　出土人骨の計測表

計測項目			左	右
橈骨	1	最大長	−	219.28
	2a	生理学長	−	209.12
	3	骨体最小周	−	43.00
	4	骨体矢状径	−	17.24
	4a	骨体中央横径	−	16.09
	4(1)	骨頭横径	−	−
	5(1)	骨頭矢状径	−	20.64
	5(3)	頭周	−	−
	5(6)	下端幅	−	30.38
尺骨	11	骨体矢状径	13.44	
	12	骨体横径	17.00	
大腿骨	7	中央横径	28.23	28.44
	8	中央周	27.24	26.95
	21	上顆幅	87.00	85.00
	9	上部横径	-	
	10	上部矢状径	32.74	33.98
	13−01	上投影幅	25.27	26.66
脛骨	3	上端幅		70.37
	8	中央最大径	28.03	30.26
	9	中央横径	21.25	20.93
	10	中央周	76.00	77.50
	8a	栄養孔位矢状径		32.34
	9a	栄養孔位横径		22.45
	10a	栄養孔位周		87.00

3）まとめ

以下では今回の調査の意義について、古い時代から順にまとめる。

まず試掘壙からは、弥生時代中期の土器が出土した。当地の陸化と人間による利用の開始を考えるうえで、重要な資料である。

次に、第4a層上面では庄内期に属する多くの遺構・遺物を検出した。遺物のうち甕にはいわゆる庄内甕を含まず、弥生形甕で占められるという特色がある。また、土錘やイイダコ壺、製塩土器の出土は、海浜部に位置する当地での生業を示すものと評価してよいだろう。土器類には胎土に結晶片岩を含むものがあり、紀伊地方から搬入された可能性を示すことも興味深い。ただ、これらの遺物を伴う遺構からは古墳時代中期以降の遺物も少数ながら出土しており、遺構の埋没時期を示すものと考えられる。

古墳時代後期から中世にかけては、遺構や遺物がほとんど認められなかった。この間、第3c層が第4a層を削剥したのち、第3b層、第3a層がその窪地を埋積する。このうち第3a層からは8世紀の須恵器が出土している。

調査地で再び活発な活動が認められるのは、豊臣後期から17世紀にかけての時期である。当該期のSD04は現在の堺筋とは異なる方位に延びており、堺筋沿道における敷地の変遷を考えるうえで興味深い。またこの時期には、ヒトを含む動物骨の出土が特徴的である。とりわけウシの肋骨を素材とした骨製品生産に関する遺物が得られたことは重要で、大坂周辺の生業変遷を考えるうえで重要な資料となろう。なお、18世紀以降の遺構からは骨製品生産に関する遺物は出土していないので、当地における生産は17世紀で終了したようである。

18世紀以降の遺構には井戸や竈があり、絵図などに見えるとおり、当地は町屋として推移したようである。このうちSE01の井戸側はいわゆる豊島石製である。近年、徳川期の大坂における豊島石製品の分布について集成が行われたが[吉田悠歩2015]、本例により新たな事例を加えることができた。

以上、今回の調査では、各時代にわたって重要な成果を得ることができた。とりわけ弥生時代中期・終末期の資料が得られたことは重要で、今後、周辺における調査成果の蓄積により、大阪湾沿岸における地形発達と人間活動の相関を追及する必要があるだろう。

註）

（1）動物遺存体については、東海大学海洋学部の丸山真史氏にご教示を賜った。

（2）人骨については、大阪市立大学大学院医学研究科の安部みき子氏にご教示を頂くとともに、ⅱ）－ｆ項について玉稿を賜った。

（3）製塩土器については、岩本正二氏にご教示を賜った。

参考文献

宇佐美英機（校訂）1996、喜田川守貞（著）『近世風俗志（守貞謾稿）』一　岩波書店

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2005、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査（SI04－1）報告書」：『平成16年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調

査報告書』、pp.19－20

2006、「日本橋２丁目所在遺跡発掘調査（NP05－１）報告書」：『平成17年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33－35

2009、「高津御蔵跡発掘調査（KD07－1）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.53－62

2010、「平成20年度難波宮環境整備事業に伴う難波宮跡発掘調査（NW08－２）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2008、pp.33－56

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2013、「島之内２丁目所在遺跡発掘調査（SI11－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2011、pp.375－384

大阪市文化財協会2004、「OS88－82次およびOJ92－24・92－36・94－16次の調査」：『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.281－314

加藤政洋2004、「大阪最初のスラムクリアランスとその帰結－「木賃宿的長屋」地区の形成をめぐって－」：『立命館大学人文科学研究所紀要』83号　立命館大学人文科学研究所、pp.１－22

杉本厚典1999、「崇禅寺遺跡出土土器の特徴と編年」：『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ　大阪市文化財協会、pp.17－28

積山洋1999、「大坂の土師質土器－主要器種を中心に－」：『関西近世考古学研究』Ⅶ、pp.41－53

趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也

2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」『平成21～25年度　独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）　大阪上町台地の総合的研究－東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型－』　大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、巻頭図版１－７・pp.９－22

寺井誠1999、「管状土錘からみた操業形態の復元」：大阪市文化財協会編『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』、pp.32－34

西村歩2003、「古墳出現期における和泉地域の土器様相と集落の動向」：『古墳出現期の土師器と実年代』（シンポジウム資料集）　大阪府文化財センター、pp.５－38

藤井明1960、「四肢長骨の長さと身長の関係に就いて」『順天堂大学体育学部紀要』3、pp.49－61

平凡社地方資料センター編1986、『大阪府の地名』Ⅰ（日本歴史地名大系 第28巻）　平凡社

真鍋篤行1996、「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」：『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』Ⅸ、pp.55－163

吉田悠歩2015、「大阪市内の火山礫凝灰岩B類製石製品」：『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.135－148

J. E. Buikstra, D.H.Ubelaker, 1994, Standards for data collection from human skeletal remains, Arkansas archeologigcal survey research series, 44.

調査区北壁地層断面
（南西から）

庄内期～古墳時代の
遺構（東から）

豊臣後期～17世紀の
遺構（東から）

中央区本町三丁目24－１・24－10における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ15－１)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区本町３丁目24－１・24－10
調 査 面 積　60㎡
調 査 期 間　平成28年２月８日～２月17日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　清水和明

1）調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の西部に位置し、三休橋筋と本町通の交差点東南部に当り、一帯では多くの調査が行われている。古地理に関する所見も蓄積され、[趙哲済ほか2014]の古地理復元によれば、上町台地西側に堆積した難波砂州の一部である河口州１により弥生時代後期には離水した地域とされている。東側150mのOJ02－２次調査地[大阪市文化財協会2003]、南東側120mのOJ12－１次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2014]で見つかった弥生時代後期の遺物は、この一帯の人間活動の嚆矢でろう。古墳時代以降古代には活動領域が調査地の西側にも及び、南西側150m付近のOJ95－８次[大阪市文化財協会2004]・99－２次[大阪市文化財協会2002a]・03－３次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]や、西側130mのOJ00－４次調査地[大阪市文化財協会2002b]で遺構・遺物が散見されるほか、北側130m付近のOJ98－８次調査地[大阪市文化財協会2001]では奈良時代の建物跡が見つかっている。中世では後半を中心にOJ99－2次・03－３次調査地で土壙や溝、またOJ00－４次調査地で瓦が出土している。豊臣後期～徳川初期には周辺のほとんどの調査で遺構が見つかっている。大坂冬ノ陣の焼け面はOJ08－３次調査地の例がある程度だが、17世紀代に一帯の開発が進んだことが、活発な整地活動と大量の出土遺物から察せられる。

大阪市教育委員会が行った試掘調査では中世以前の遺構面および遺物包含層が見つかり、当該地における発掘調査が行われることとなった。

調査は平成28年２月８日から開始した。調査地の西部に東西６ｍ、南北10mの調査区を設定し(図２)、地表下1.8mまでを重機で、その後は人力で掘削した。層序に応じて順次遺構・遺物を検出し、実測や写真撮影によって記録しながら、海浜砂層を起源とする第３層までを掘削して調査した。２月17日には現地における全作業を終了した。

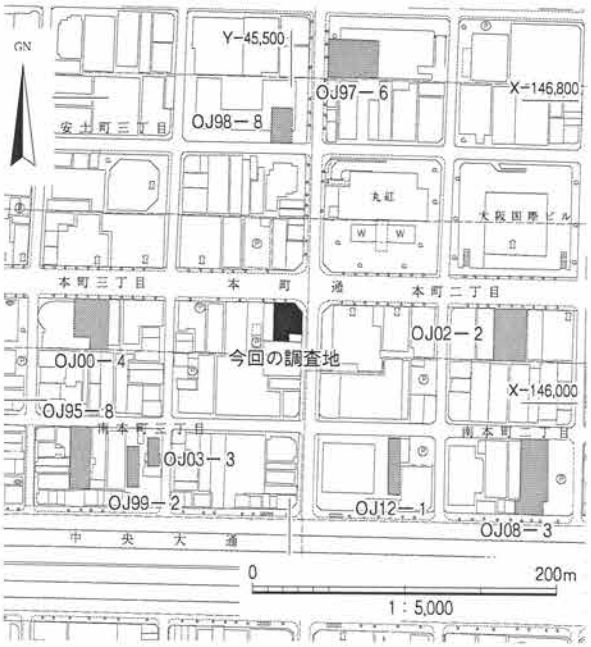


図１　調査地位置図

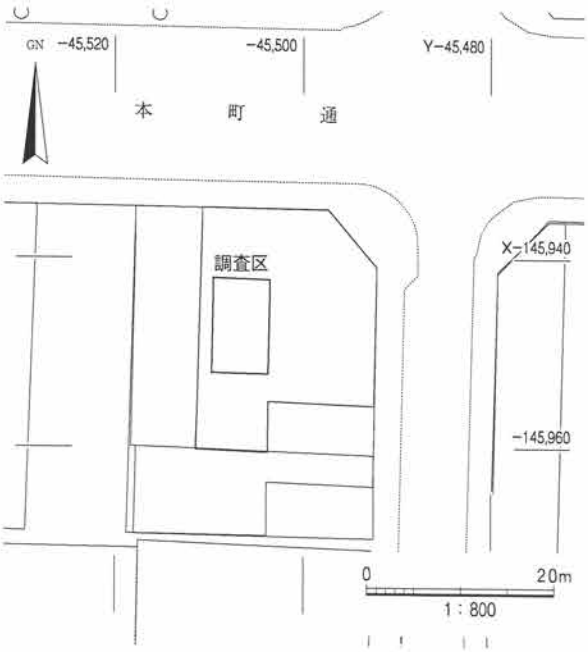


図２　調査区配置図

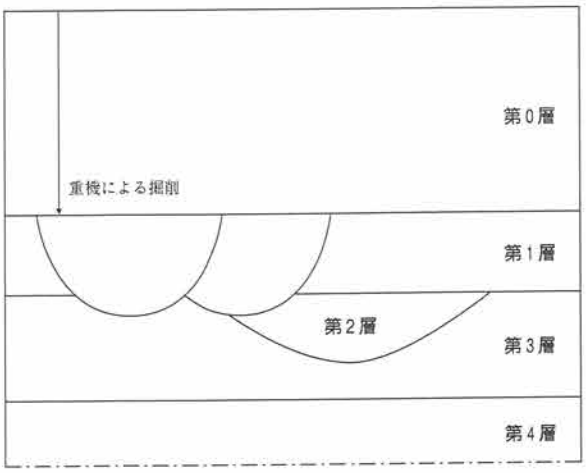


図3　地層と遺構の関係図

また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地内の現況標高はTP＋2.4m付近で、周辺も含め、地表はほぼ平坦になっている。

現代の盛土層である第0層を除き下位の地層は計4層に分かれた。調査区の西壁・南壁の状況から以下にそれぞれを記す。

第0層　暗灰褐色礫質粗粒砂層で、層厚は180～210cm、ガラス片などを含む現代の整地層である。

第1層　にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかにシルト質細粒～中粒砂層で、層厚は最大45cmである。平安時代の遺物が出土しているが、第2層の年代から、本層は古代～中世に相当するとみられる。本層上面で17世紀代の徳川期の遺物を含む多数の遺構を検出した。

第2層　にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかにシルト質細粒～中粒砂層で、層厚は最大40cmである。第3層上面遺構の埋土として確認した。奈良時代のほか中世に下る可能性のある遺物が出土している。

第3層　中部から上部にかけては明黄褐色(10YR6/6)で極粗粒砂層から細粒砂層へ上方細粒化する。下部は明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂である。層厚は最大60cmである。ラミナは認められなかったが海浜砂層である第4層の上部が擾乱を受けた自然堆積層とみられる。飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器片が出土している。

第4層　にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫～粗粒砂で、南西から北東へ傾斜するラミナが顕著である。上町台地西側に堆積した海浜性堆積層である。出土遺物はない。

ii)遺構と遺物(図5～10)

各層準の遺構を古いものから順に記述する。

a．中世以前(図5～7)

第3層上面遺構

調査区の北部で東西に並行する2条の溝SD204･205や、中央部で土壙SK202･203などを検出した。

SD204・205は平面での検出時に第3層をやや削り込んだため、調査区西壁の地層断面で幅と深さを確認した。南側のSD204は幅約0.85m、深さ約0.40mで、北側のSD205は幅約1.20m、深さ約0.45mで、調査区西壁の地層断面で確認すると、両者は同時に存在したとみられる。埋土はわずかにシルト質な中粒～粗粒砂で均質であり、両者ともに機能時堆積層は確認できなかった。東部ではSD204はやや北向きに曲っているが、SD205は第1層上面遺構で壊され、方向が不明である。おもな出土遺物に

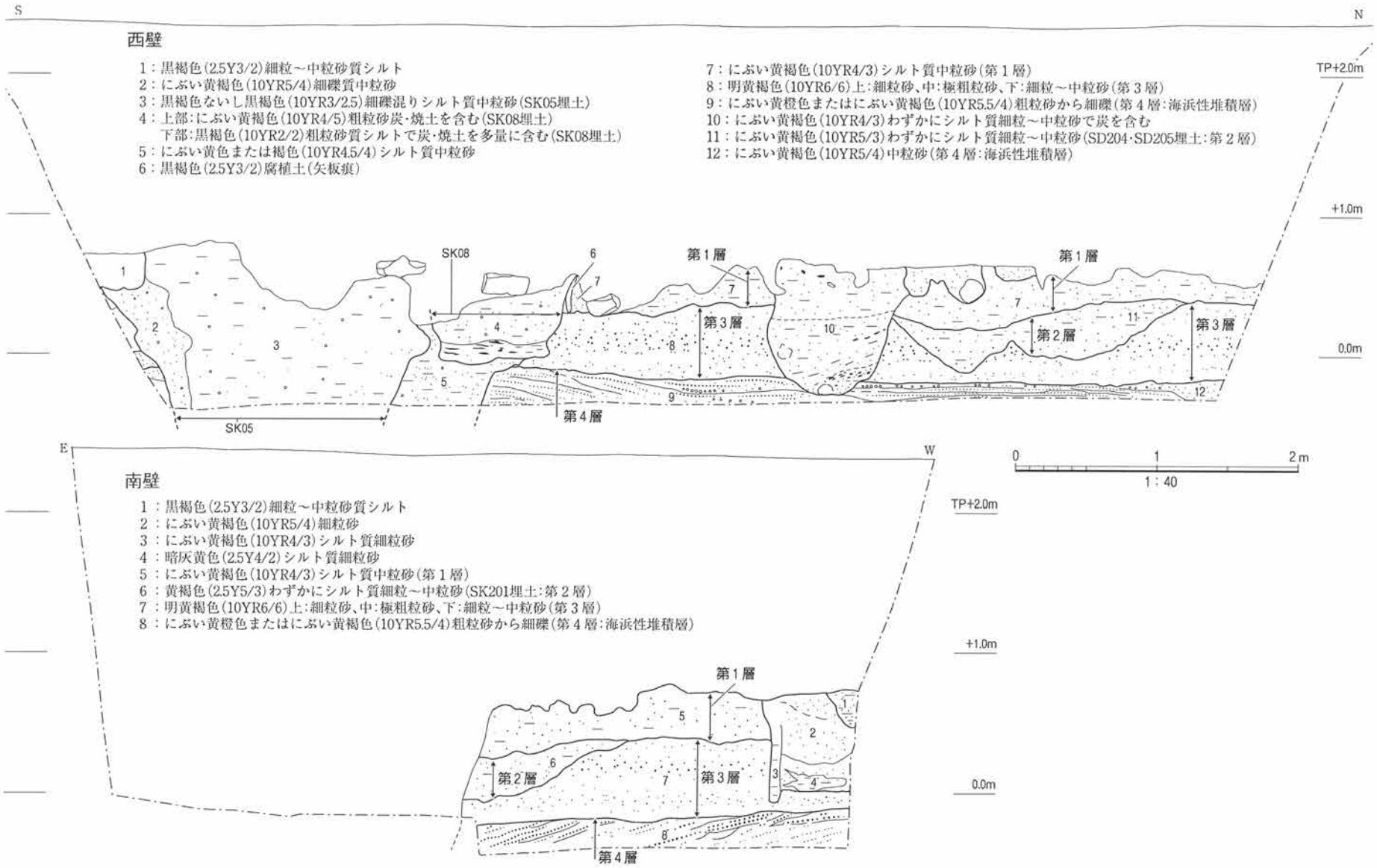


図4　調査区西壁・南壁地層断面図

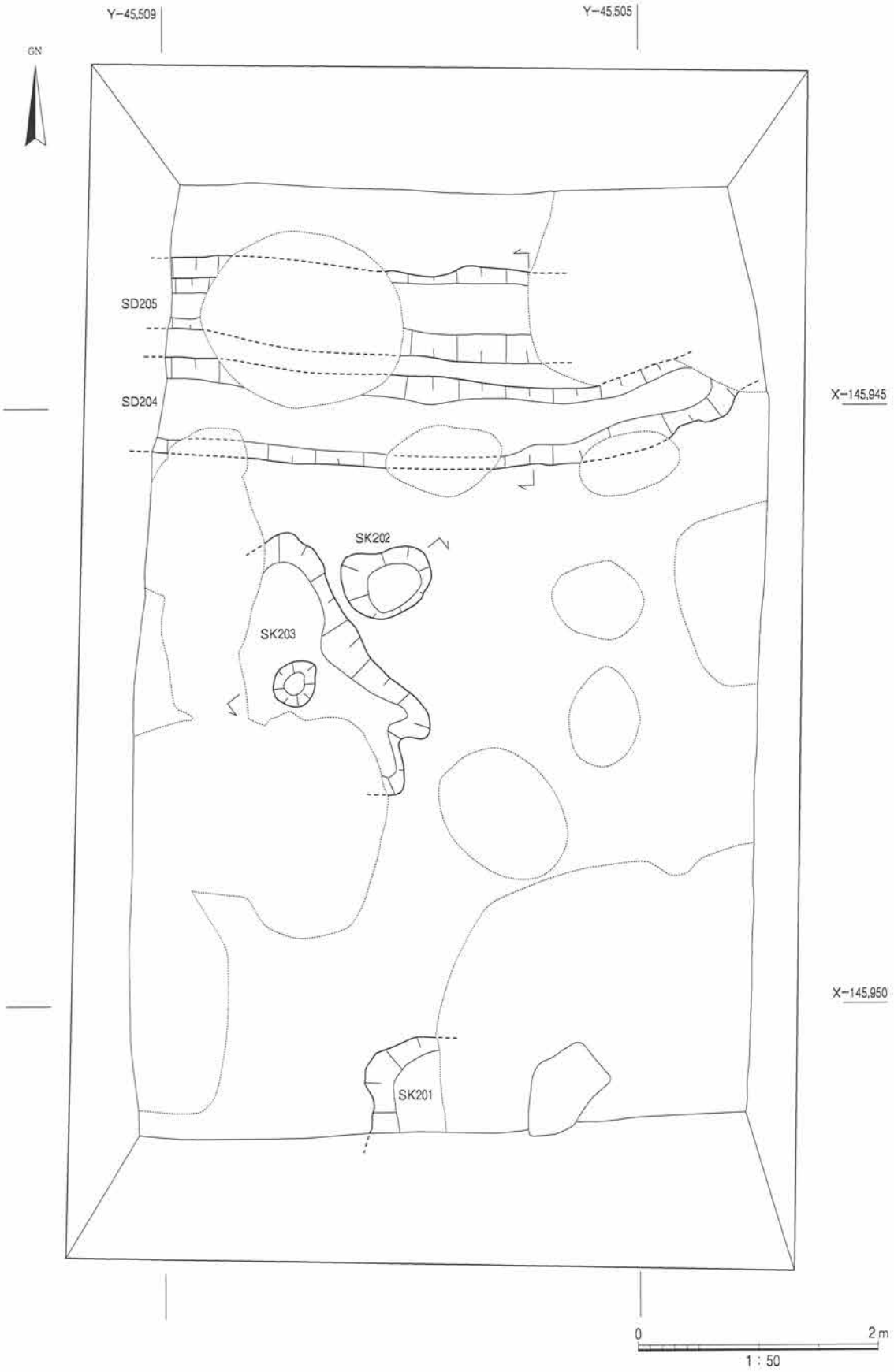
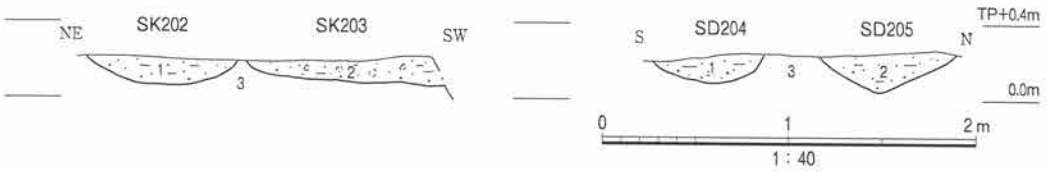


図5　第3層上面遺構平面図



1：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかにシルト質中粒～粗粒砂
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒～粗粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒～極粗粒砂(第3層)

1：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかにシルト質中粒～粗粒砂
2：黄褐色(12.5Y5/2)わずかにシルト質中粒～粗粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒～極粗粒砂(第3層)

図6　第3層上面遺構断面図

はSD204の東部から見つかった土師器杯3、須恵器甕4・杯5などがある。3は杯か皿で口縁端部をわずかに内側へつまみ上げ、内面および外面の口縁部下をヨコナデ、外面体部にはユビオサエの痕が残る。4は口縁端部を下方に垂下させ、内外面を回転ナデで仕上げている。5は杯Bで底部外面の外縁付近に高台を巡らす。これらは奈良～平安時代に属するものである。

SK202・203は調査区中央付近にあり、SK202は長軸0.7m、深さ0.15m程度、SK203は上位の遺構で壊されているものの長軸2.4m、深さ0.15m程度の不定形な土壙である。埋土はわずかにシルト質な中粒～粗粒砂で均質であり、両者ともに機能時堆積層は確認できなかった。出土遺物は細片のため図化していないが、SK202からは土師器・須恵器の細片のほか内面に布目が残る燻し瓦が、SK203からは土師器細片に口縁部が「ての字」となる皿が出土した。これらのことから、SK202・203は古代末から中世に下るものと考えられる。

地層出土遺物

第3層上面遺構のほか、第3層および第1層も中世以前の遺物を包含する。第3層からは土師器皿1、須恵器杯蓋2、第1層からは須恵器杯B6・甕7などが出土した。1は皿Aで口縁端部をやや外につまみ上げ、内外面はナデで仕上げている。2は杯Bの蓋で中央のつまみは失われている。

b．近世(図8～10)

第1層上面遺構

調査区のほぼ全面にわたって遺構が検出された。

調査区中央やや南側で、東西に直線状に打ち込まれた矢板の列が2条見つかった。矢板の幅は20cm以下で、後述の土壙群に壊されていることから徳川初期より遡る可能性があるが、時期は不詳である。

そのほかは徳川初期から肥前磁器が出現して以降の17世紀代を中心とする遺構群で、水溜SX27以外はゴミ穴と考えられる土壙である。敷地の奥を日常生活の残滓処理に利用したものであろう。

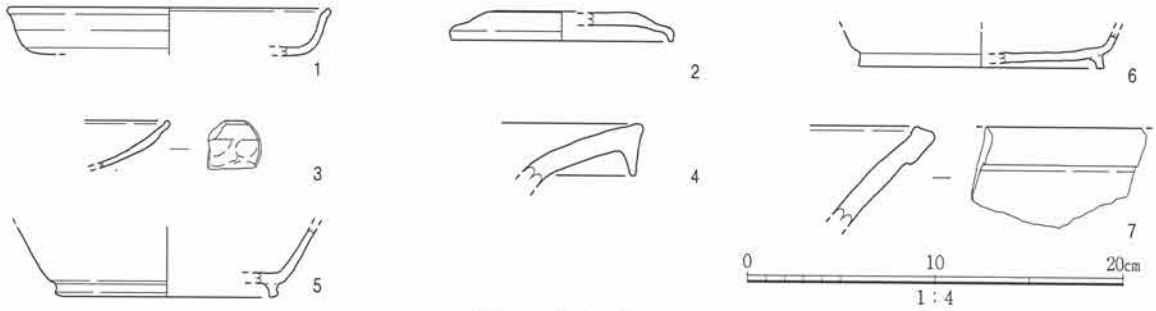


図7　中世以前の遺物

SD204(3～5)、第3層(1・2)、第1層(6・7)

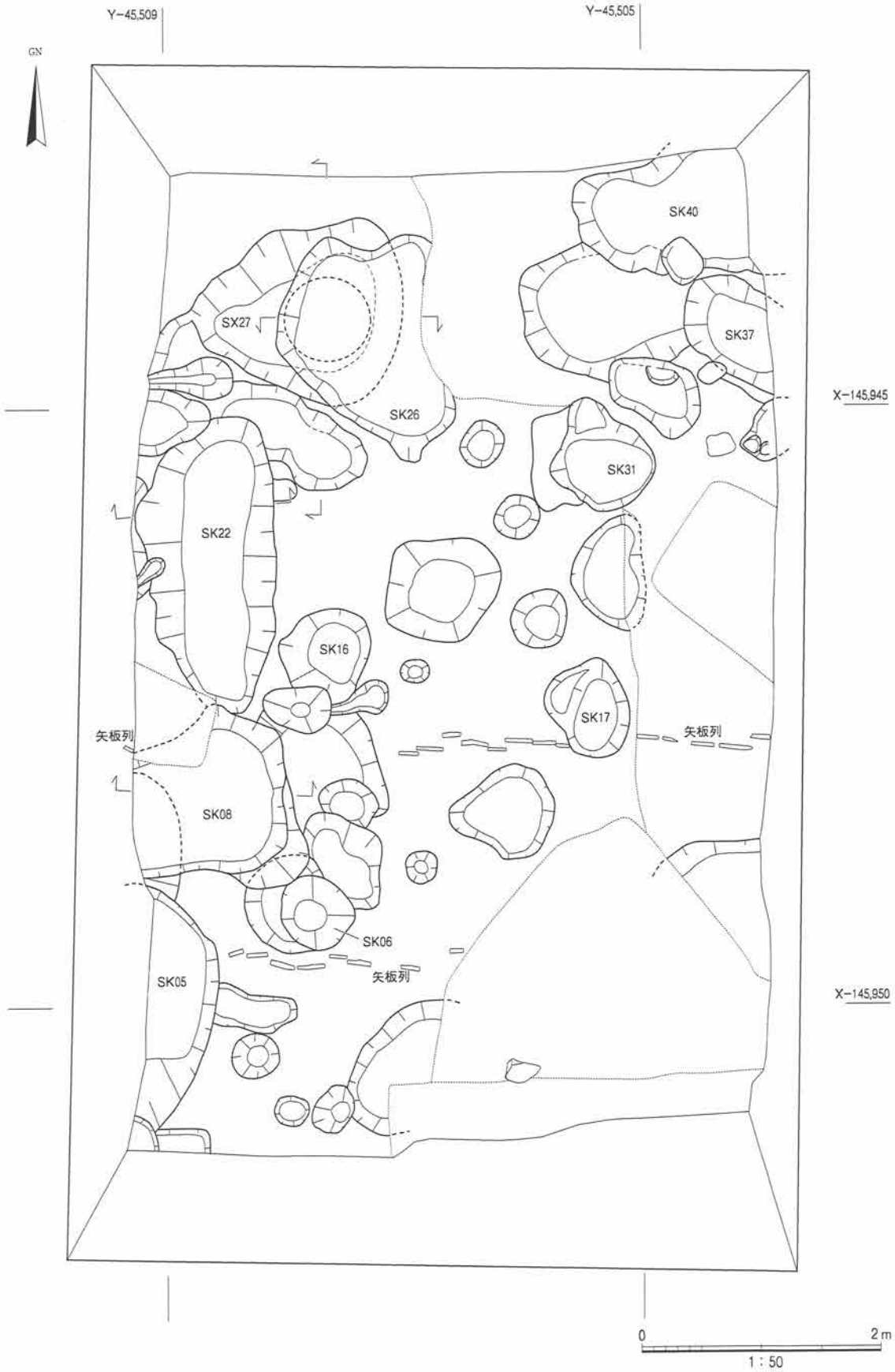


図８　第１層上面遺構平面図

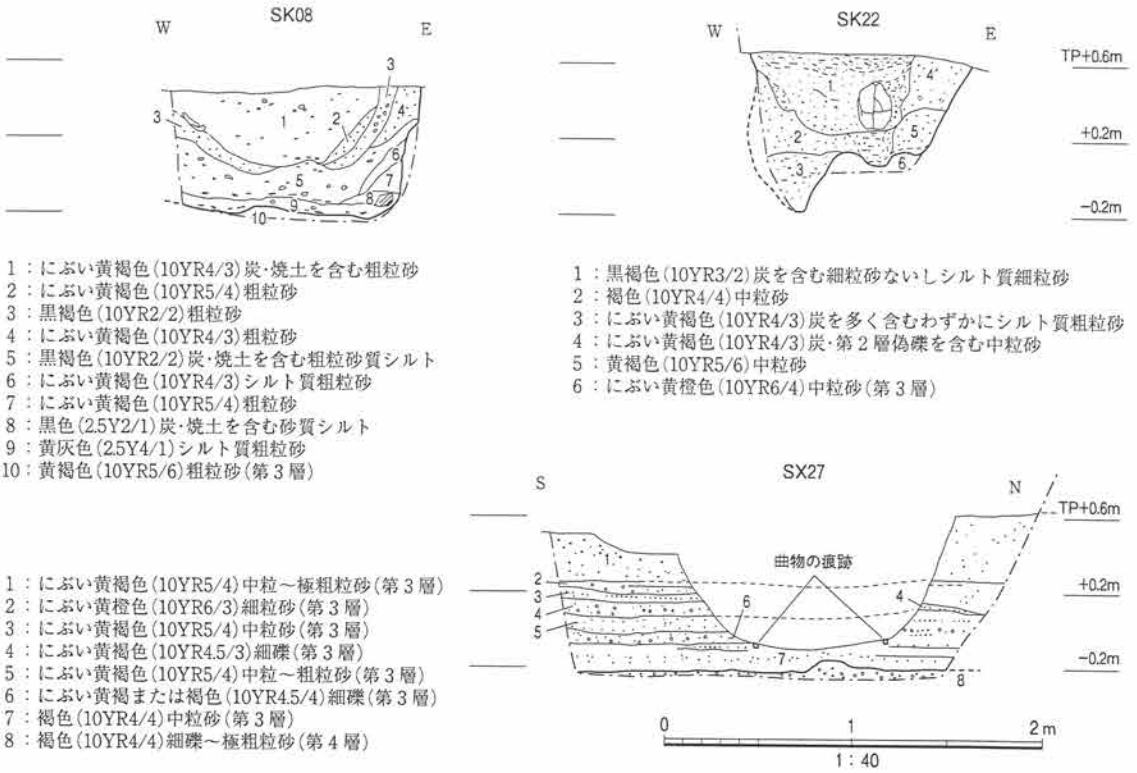


図9　第1層上面遺構断面図

土壙のうち西側に位置するものがやや大型である。そのうちSK08・SK22・SX27について記述する。

SK08は調査区西南部にあり、東西1.5m以上、深さ0.8m程度の平面形が不定形な土壙である。炭や焼土の偽礫を含む黄褐色ないし黒褐色粗粒砂などで埋められている。出土遺物には土師器8～11、肥前陶器12～14・17、九州産とみられる陶器31のほか、図化していないが肥前磁器などがある。8～10は口径7～8cm程度の小皿で、やや凹面となる狭い底部から上方へ広がる体部はユビオサエ、口縁部はヨコナデで仕上げている。10は灯明皿である。11は口径約11cmでやや大きく、調整は同じだが底部は平坦である。12は口縁部を外反させた小碗、13は体部が直立し口縁部がわずかに外反する小碗である。14は口径に比して背が高い碗である。17は口縁部をやや内側に立ち上げた丸皿である。31は壺とみられ、口縁端部を広く平坦に作り、そこに残る密な目痕が特徴的である。

SK22は調査区中央の西側にあり、長軸2.5m、幅1.2m、深さ0.8m程度の土壙である。炭を含む黒褐色粗粒砂ないしシルト質粗粒砂、褐色または黄褐色中粒砂、炭を含むにぶい黄褐色シルト質粗粒砂ないし中粒砂などで埋められている。出土遺物には土師器20・25、肥前陶器16、肥前磁器21～23、備前焼26、フイゴ羽口33などがある。20は皿で、口縁部を強いヨコナデで仕上げ、底部内面との境に段が生じている。25は焙烙C類[難波洋三1992]で体部と底部の境に掻き上げ痕が残る。16は碗で体部は丸みを帯びている。21・22は染付碗、23は染付皿である。26は擂鉢で、底部内面とわずかに内湾する体部に斜格子状に擂目を付けている。33は孔先端の口径1.2cmで、周囲にガラス質が熔着している。

SX27は東西1.8m、南北1.6m弱、深さ0.7mで、底に曲物で直径0.7mの水溜を設けている。水溜の高さは不明であるが、埋土に井戸側の跡は確認できず、一段のみの構造と考えられる。

以上のほか、別の遺構から出土した遺物を図化した。土師器にはSK31から出土した焙烙24がある。

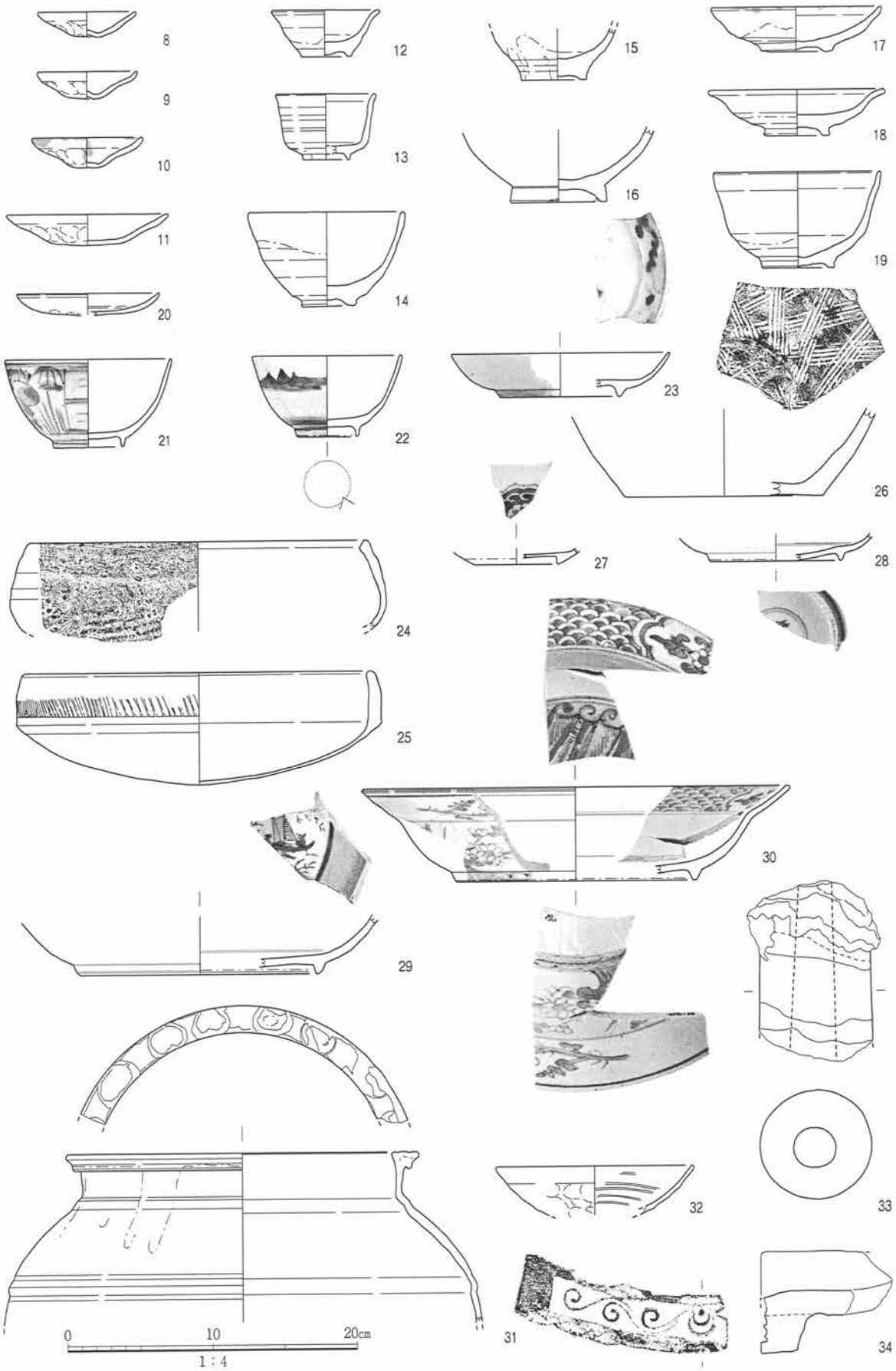


図10　第1層上面遺構の出土遺物実測図

SK06(29)、SK06・17(30)、SK08(8～14・17・31)、SK16(34)、SK22(16・20～23・25・26・33)、SK26(32)、SK31(18・19・24)、SK37(15)、SK40(27・28)

外面の体部と底部の境界付近にタタキメが施された焙烙A類[難波1992]である。肥前陶器にはSK37から出土した碗15、SK31から出土した皿18・碗19などがある。中国産青花にはSK40から出土した皿27・28、SK06から出土した大皿29・30などがある。30は同一個体の破片がSK17からも出土した。

以上の出土遺物は豊臣期～徳川初期以降の17世紀代に当り、第1層上面の遺構群の時期を示している。大坂冬ノ陣の焼け面は、本調査地では確認できなかった。敷地奥を調査しており焼失するような建物が存在しなかったためとも考えられるが、戦災後の片付けに係ると考えられる遺構は見つかっていない。これらのほかに遊離資料としてSK26から瓦器椀32が出土している。また、SK16から宝珠を中心飾りとする唐草文軒平瓦34が出土し、これには豊臣期のものに類似例がある。

3)まとめ

今回の調査では周辺の既往の調査と同様に、古代から近世に至る遺構と遺物を検出することができた。以下、おもな成果を時代順に列挙する。

・古代では奈良時代の東西に延びる溝や土壙を検出したが、遺物の出土量は多くない。

・続く中世も同様の傾向にある。

・一帯は上町台地西側の大阪海岸低地では早くに離水した地域であるため、周辺では古代から中世の遺構が確認されている。本調査地の状況を判断するには、なお周囲の調査を重ねる必要があろう。

・豊臣期に遡る遺構や大坂冬ノ陣の焼け面、片付けに係ると推測される遺構は確認できなかった。

・徳川期に入るとゴミ穴と考えられる土壙が繰り返し掘られ、水溜も存在する。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2001、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1998年度―』、pp.96－102

2002a、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.135－149

2002b、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.166－175

2003、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、pp.83－89

2004、「OJ95－4次および95－8次の調査」:『大坂城下町跡Ⅱ』、pp.337－346

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「大坂城下町跡発掘調査(OJ03－3)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.133－146

2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08－3)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.105－114

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「中央区南本町二丁目27－3における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ12－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.109－116

趙哲済ほか2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』大阪文化財研究所、pp.9－22

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究　第九』、pp.373－400

西壁地層断面
（北東から）

第３層上面
遺構検出状況
（南東から）

SD204・205
断面
（東から）

第１層上面
遺構検出状況
（南から）

SK08断面
（南から）

第１層上面
遺構掘削状況
（南東から）

中央区久太郎町三丁目40－７における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ15－２)報告書

調査個所	大阪市中央区久太郎町３丁目40－７
調査面積	48㎡
調査期間	平成28年２月29日～３月11日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明

1）調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の西南隅に当り、心斎橋筋と御堂筋に挟まれて中央大通に北面する街区に位置する。付近では、これまで多くの調査が行われている（図１）。

古地理に関する所見では、[趙哲済ほか2014]の古地理復元によって、上町台地西側に堆積した難波砂州の一部である河口州１により弥生時代後期か古墳時代には離水した地域とされている。調査地の北側のOJ95－８次調査地では、海浜性堆積層内から庄内～布留式土器が出土したほか、埴輪片も見つかっている。また、顕著な遺構はないが奈良・平安時代の遺物も出土している。中世後期には瓦質土器や瓦器を含む幅５ｍの大型の溝が見つかり、東西の方位に合わせていることから集落や施設を画する機能が推測されている[大阪市文化財協会2004]。豊臣期には土壙などの遺構は存在するが顕著な遺構はない。東に近接するOJ99－２次調査地でも同様の傾向がある[大阪市文化財協会2002]。

一方、調査地の南側ではOJ09－１次調査地で庄内～布留式期の集落の一部が見つかっている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。ここでは豊臣期の遺構は少ないが徳川期には多くなる。OJ07－11次調査地では中世にわずかな遺構・遺物があるものの活発になるのは徳川期に入ってからである[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。それに対してOJ05－９次調査地では豊臣後期から多くの遺構が作られるようになり[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]、豊臣期の段階では城下町周縁部に近い場所で開発状況の差が大きいとみられる。

大阪市教育委員会が行った試掘調査で中世～近世の遺構面および遺物包含層が見つかり、当該地における発掘調査が行われることとなった。

調査は事業者により地表下2.3mまで重機により掘削された状態で、平成28年２月29日から開始した。調査地の南部に東西４ｍ、南北12mの調査区を設定し（図２）、さらに1.6m程度の深さを人力で掘

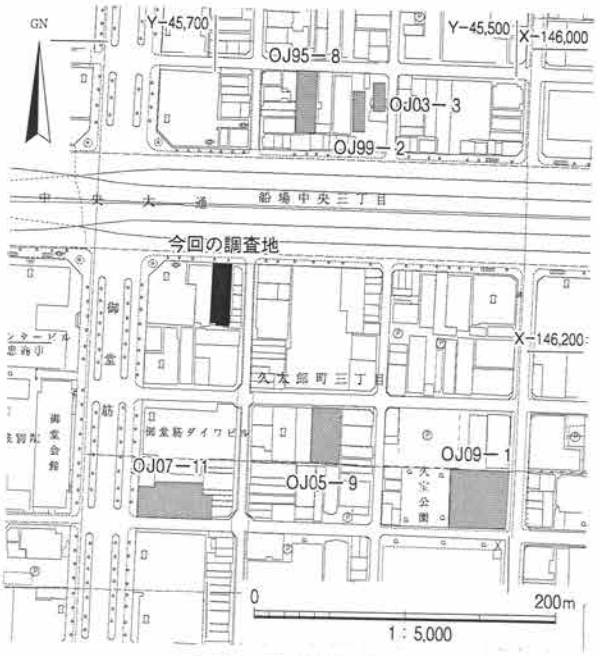


図１　調査地位置図

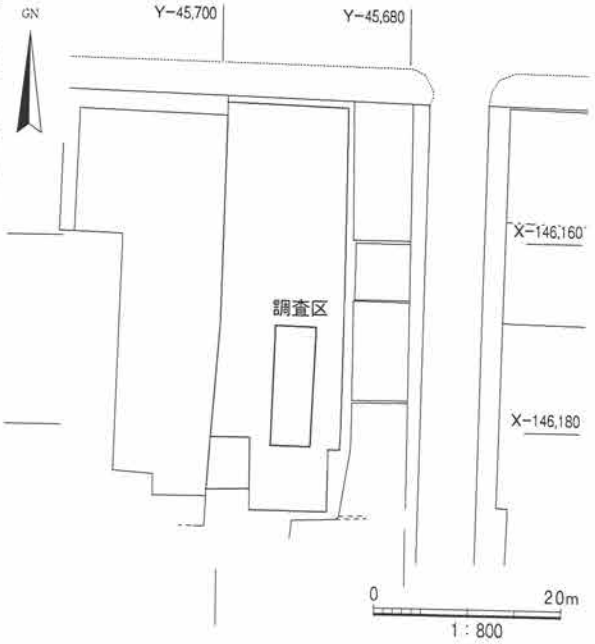


図２　調査区配置図

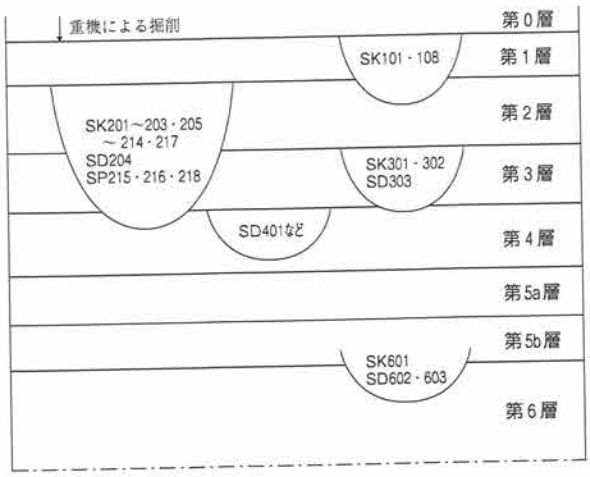


図3　地層と遺構の関係図

削した。層序に応じて順次遺構・遺物を検出し、実測や写真撮影によって記録しながら、海浜性堆積層である第6層までを調査し、3月11日には現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。

また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地内は重機掘削によりTP+0.4m付近でおおむね平坦となっていた。

第0層を除き下位の地層は計6層に分かれた。調査区東壁・北壁の状況から以下にそれぞれを記す。

第0層　黄褐色粗粒砂層で、残存する層厚は20cm以下である。重機による掘削で攪乱されているが、18世紀代の陶磁器を含み、徳川期に属する可能性もある。

第1層　黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層ないしオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層を主体とする整地層で、層厚は15cm以下である。本層上面で17世紀代から18世紀に下る徳川期の遺構を検出した。

第2層　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒～粗粒砂層ないし暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層を主体とする整地層で、層厚は最大25cmである。本層上面で徳川初期から17世紀後葉にかかる遺構を多数確認した。

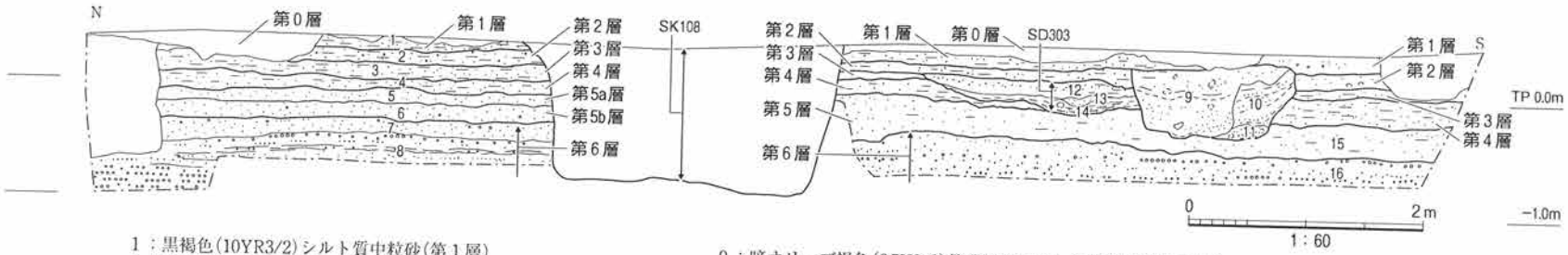
第3層　黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂層の整地層で、層厚は最大20cmである。本層から肥前陶器細片が出土したが混入の可能性もある。本層上面で検出された遺構からは豊臣期までにおさまる遺物が出土している。

第4層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層の整地層で、層厚は最大25cmである。本層からは丹波焼・備前焼のほか瓦器が出土し、中世の地層である。本層上面で南北に延びる溝を検出した。

第5層　調査区北半では5a・5b層に細分される整地層である。上部の第5a層は暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂層で、下部の第5b層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂層である。北壁では第6層上面の標高が東側が高く、西が低い。第5b層の観察から東から西に向かって整地が進んだ状況が確認でき、層厚も30cm程度となる。本層内で南北に延びる溝を確認し、整地の途中段階で東から西へ段を造成していたことが考えられる。南半では黄褐色(2.5Y5/3)細粒～粗粒砂層で細分しがたい。第5層の出土遺物には古代の遺物も散見されるが、第5a層からは瓦器細片が出土し、第5層内遺構からも中世の遺物が出土することから、下限を中世に求めることができる。

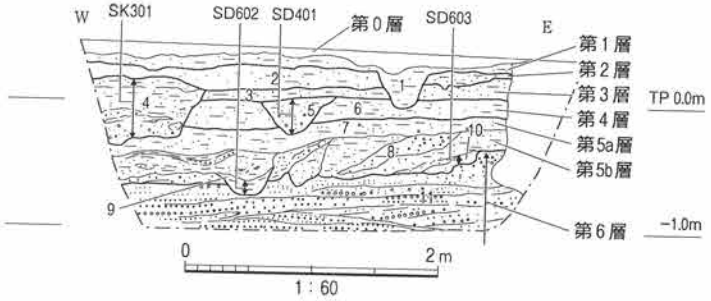
第６層　上部はにぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質細粒砂層、下部はにぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質細粒～細礫層の自然堆積層で、層厚は最大70cm以上を確認した。古墳時代から古代とみられる土師器・須

調査区東壁



1：黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂(第１層)
2：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒～粗粒砂(第２層)
3：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂(第３層)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(第４層)
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂(第5a層)
6：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂(第5b層)
7：にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質細粒砂(第６層上部)
8：にぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質細粒～細礫(第６層下部)
9：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)偽礫混りシルト質細粒砂(遺構埋土)
10：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂(遺構埋土)
11：オリーブ褐色(2.5Y4/3)偽礫混り粗粒砂(遺構埋土)
12：暗灰黄色(2.5Y4/2)わずかにシルト質中粒砂(SD303)
13：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂(SD303)
14：黒褐色(2.5Y3/2)偽礫混りシルト質中粒砂(SD303)
15：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～粗粒砂(第５層)
16：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒～粗粒砂(第５層)

調査区北壁



1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(第１層)
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂(第２層)
3：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂(第３層)
4：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂～偽礫混り細礫質粗粒砂(SK301)
5：黄褐色(2.5Y5/3)細礫混りシルト質中粒砂(SD401)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(第４層)
7：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂(第5a層)
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂ないし細礫質中粒砂(第5b層)
9：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト(SD602)
10：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト(SD603)
11：にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質粗粒砂～灰黄色(5Y6/3)極粗粒砂(第６層)

図４　調査区東壁・北壁地層断面図

恵器が出土した。南北方向ではほぼ水平に、調査区の北壁断面観察からは東西方向では大阪湾から陸地側へ向かって傾斜している。上町台地の西海岸に堆積した海浜砂が形成する砂州で、[趙哲済ほか2014]では「河口州1」から「砂州Ｂ」付近に相当するとみられ、離水時期は古墳時代に想定されている。本層上面で土壙や溝を検出したが、同じ断面観察からは上位の第５層内遺構と考えられる。

ⅱ)遺構と遺物(図５～10)

各層準の遺構を古いものから順に記述する。

ａ．中世以前(図５～７)

第５層内遺構

調査区西北部で土壙SK601と南北に延びる溝SD602・603を第６層上面で検出した。SK601は南北2.3m以上、深さ0.3mの土壙である。断面の観察からは第５層内遺構とみられ、瓦質土器鉢６が出土した中世の遺構である。SD602は前述の通り北壁断面で第５層内遺構と確認された。幅0.2～0.4m、

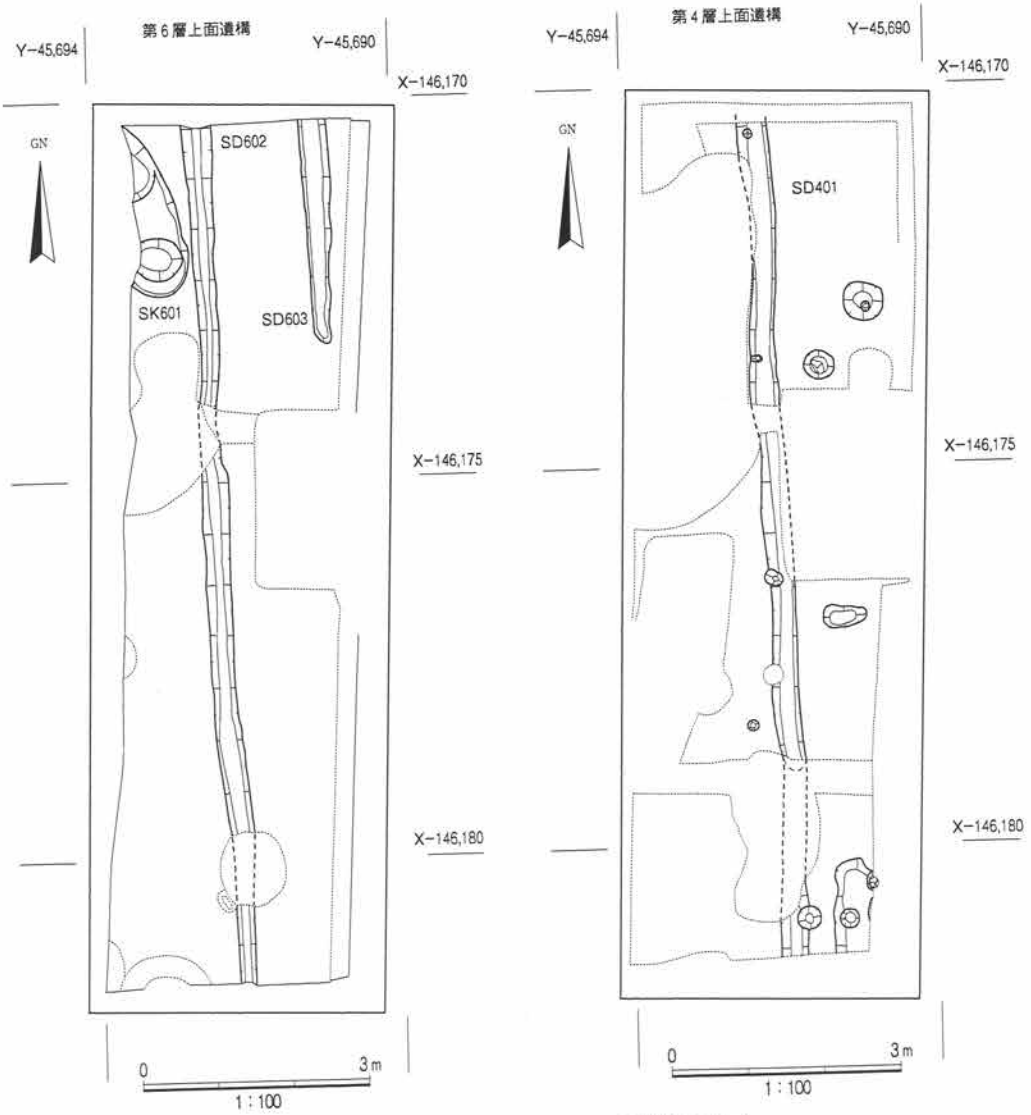


図５　第６層上面・第４層上面遺構平面図

深さは0.04～0.15mで底は凹凸があるが、全体として北側がわずかに低くなっている。方位はN－2°－Wである。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト層で、ラミナは確認できなかったが埋めた土ではなく、機能時堆積層であろう。須恵器壺の口縁部片1が出土した。SD603は南端が途切れるがSD602に平行し、形状や埋土も同じである。SD603が先行し、整地の過程でSD602が再掘削されたものであろう(図4)。これらの溝は第6層上面が西へ低く傾斜する地形に対して直交する方向で掘削され、低い段を造成したものの可能性があるが、南北方位にほぼ合わせている点が注目される。

第4層上面遺構

SD401は下位のSD602と同一の方位で掘削された南北溝で、規模もほぼ同一である。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)細礫混りシルト質中粒砂層で、やはり機能時堆積層と考えられる。後述する第4層から16世紀代に下る遺物が出土しているため、SD401もそれ以降で豊臣期までの時代に相当する。これまでもOJ95－8次調査地のSD801のように東西に方位を揃えた中世の溝が見つかっており、SD602・603やSD401も広範囲にわたって企画された遺構の可能性も考えらる。そのほか小さな円形の柱穴や土壙が検出された。

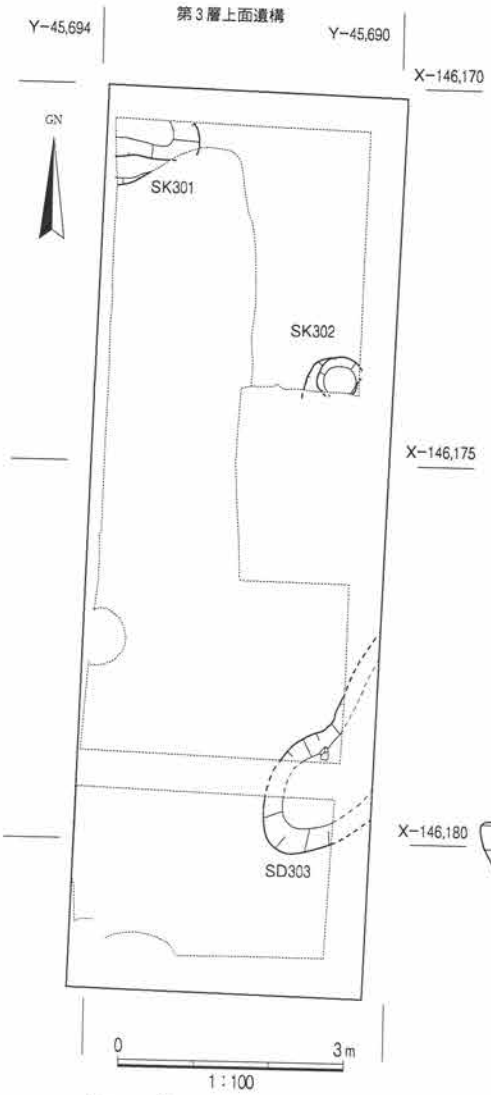


図6　第3層上面遺構平面図

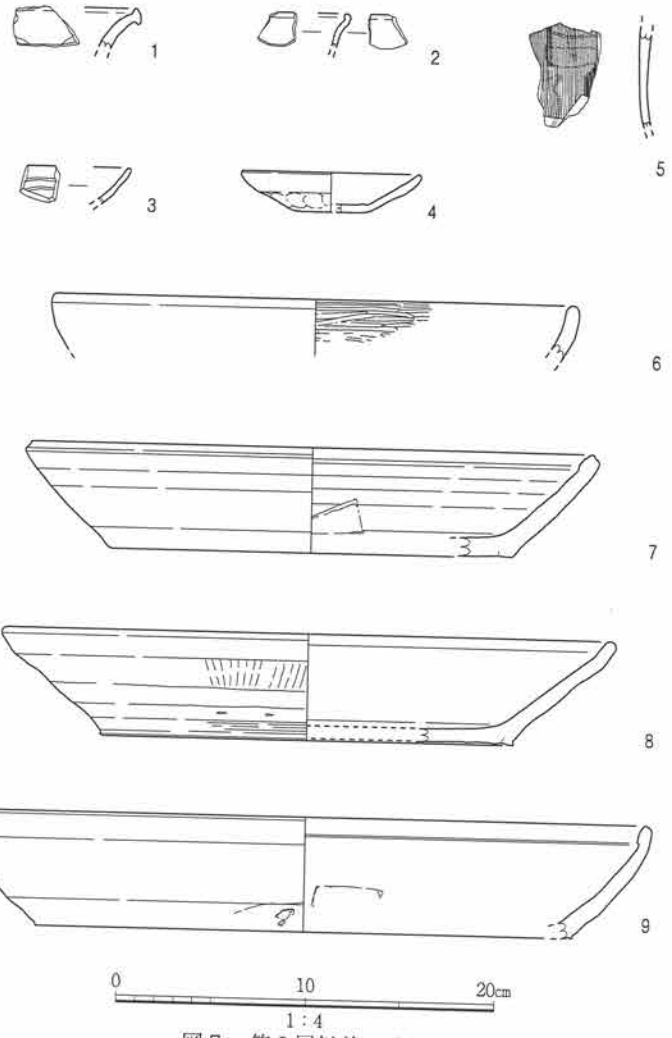


図7　第3層以前の遺物

SK601(6)、SD602(1)、SK301(4・8)、SK302(9)、第5層(2)、第5a層(3)、第4層(7)、遊離資料：SK205(5)

第４層以下の出土遺物

上記の遺物のほか、第５層から土師器杯２、第5a層から瓦器椀３、第４層から丹波焼平鉢７が出土した。２は古代に遡るが、３は14世紀、７は豊臣期までにおさまるものであろう。また、近世のSK205から人面墨画土器の破片５も出土し、古代の遊離資料として本項で記載する。

ｂ．近世(図８～10)

第３層上面遺構

SK301・302は形状や規模の不明な浅い土壙である。調査区南部ではSD303が見つかったが、時期は不詳である。SK301からは土師器小皿４、丹波焼平鉢８が、SK302からは丹波焼平鉢９が出土した。

第２層上面遺構

調査区のほぼ全面にわたって遺構が検出された。西壁沿いに南北溝であるSD204が見つかったほかは楕円形または不定形な土壙や小穴である。楕円形の土壙には長軸を南北とするものが多い。SK205・208に代表されるように、一定期間開口して機能時堆積層の形成後に地表に残る凹みを埋めたものと考えられ、屋敷地の奥で日常的な残滓処理を行うためのゴミ穴であろう。

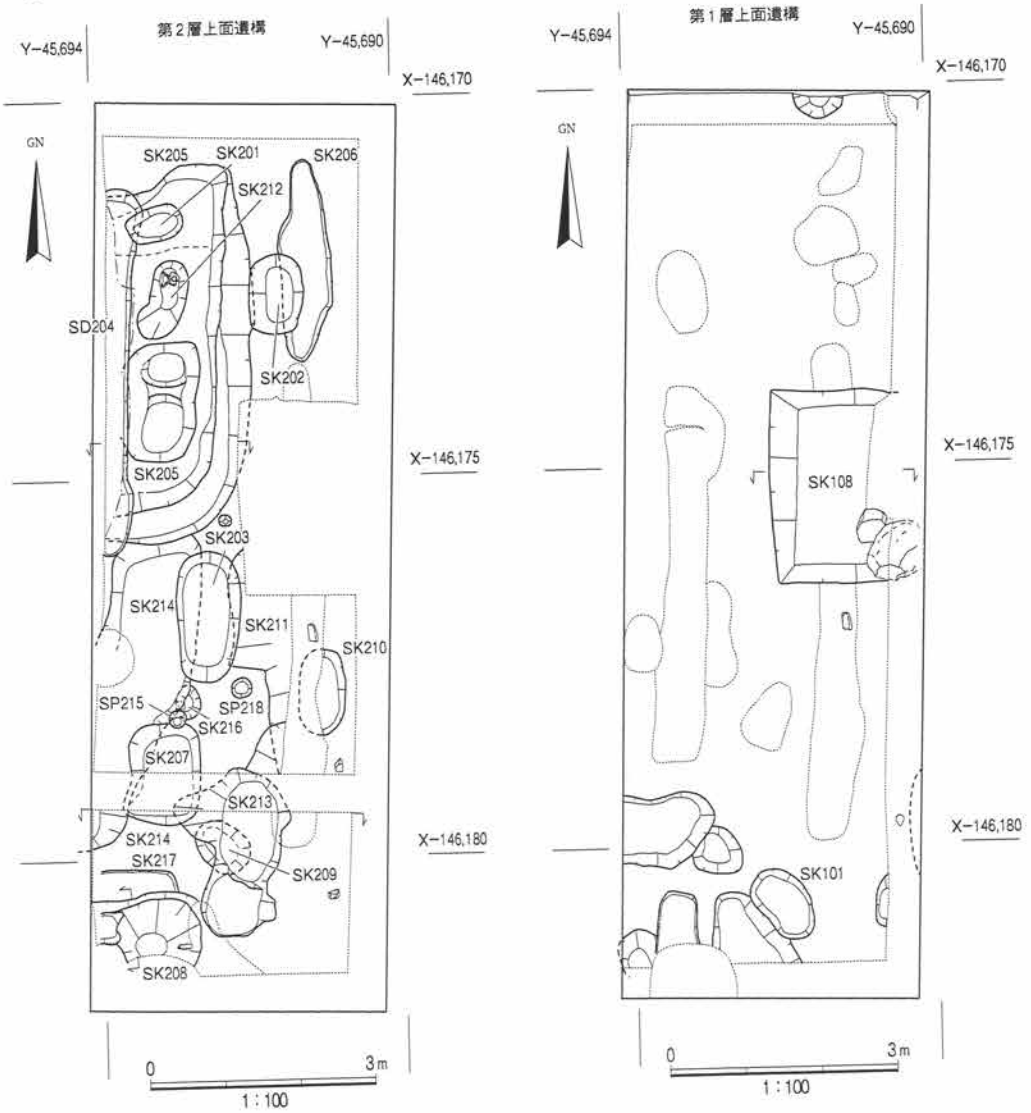
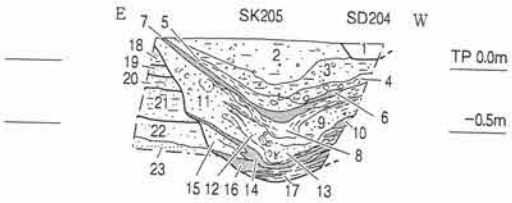


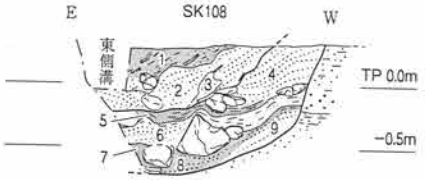
図８　第２層上面・第１層上面遺構平面図

SK205は調査区の北半で検出された南北5.0m、東西2.1m程度、深さ1.1mの大型土壙である。底から0.7m弱まで機能時堆積層である炭を多く含むシルト層や細粒～中粒砂層で埋まり、最後はシルト質中粒砂層ないし粗粒～極粗粒砂層で埋められていた。出土遺物は多く、土師器10～13・22・27、肥前陶器14～19・丹波焼26のほか、肥前磁器32・35などがある。10～13は皿で、丸みを帯びた底部の外面はユビオサエ、口縁部から内面はやや強いヨコナデで底部との境が明瞭である。12・13は口縁部に煤が付着し、灯明皿に使われたものであろう。14・15は碗で口径に比してやや背の高い器形である。16・19は皿、17・18は溝縁皿である。26は擂鉢で口縁部をやや肥厚させている。擂目は4条1単位である。22は焼塩壺で、輪積成形の直立する体部から口縁部をわずかに外反させている。27は火鉢で、内面に煤が残っている。底部外面の脚は粘土を貼り付けて指で整形した簡易なつくりである。32は口縁部を屈曲させ外面はソギで凹凸をつけた碗で、「福」字を染付しているが、偏と旁が逆になっている。同一個体の破片がSK203からも出土している。肥前磁器の出現初期の資料である。35は草花文の染付

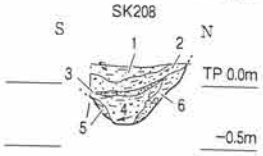
1：黄褐色(2.5Y5/4)偽礫混りシルト(SK213)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)偽礫混りシルト質細粒砂(SK213)
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)炭混りシルト質細粒砂(SK213)
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(SK213)
5：オリーブ褐色(2.5Y4/3)偽礫混りシルト質中粒砂(SK213)
6：灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質中粒砂(SK207)
7：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂(第3層)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(第4層)
9：黄褐色(2.5Y5/4)わずかにシルト質中粒～粗粒砂(第5層)
10：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂(第5層)
11：黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒砂(第6層)
12：暗灰黄色(2.5Y4/2)わずかにシルト質中粒砂(SD303)
13：黒褐色(2.5Y3/1)炭混りシルト質細粒砂(SD303)
14：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂(SD303)
15：黒褐色(2.5Y3/2)偽礫混りシルト質中粒砂(SD303)



1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(SD204)
SK205埋土(上部:埋めた地層)
2：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒砂で暗黄灰色シルト質中粒砂偽礫混る
3：黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～極粗粒砂ないしシルト質中粒砂
SK205埋土(下部:機能時堆積層)
4：黒褐色(2.5Y3/2)偽礫混りシルト
5：黄灰色(2.5Y4/1)偽礫混りシルト
6：黒色(2.5Y2/1)炭
7：黒褐色(2.5Y3/1)シルト
8：灰色(5Y4/1)シルト
9：灰オリーブ色(5Y4/2)偽礫混り中粒砂
10：黒色(2.5Y2/1)炭
11：暗灰黄色(2.5Y4/2)偽礫混り中粒砂でシルト薄層を挟む
12：灰色(5Y4/1)偽礫混り中粒砂
13：灰色(5Y4/1)シルトないし中粒砂
14：黒色(2.5Y2/1)炭質シルト
15：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂
16：黒色(2.5Y2/1)炭質シルト
17：灰オリーブ色(2.5Y4/2)シルトおよび黒色(2.5Y2/1)炭質シルト
18：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒～粗粒砂(第2層)
19：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂(第3層)
20：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(第4層)
21：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂～シルト質細粒砂(第5層)
22：にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質細粒砂(第6層上部)
23：にぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質細粒～細礫(第6層下部)



1：暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混りシルト質粗粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/4)中粒～粗粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～粗粒砂
4：にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂(ラミナあり)
5：灰黄褐色(10YR4/2)シルト(機能時堆積層)
6：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～極細粒砂
7：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂
9：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂



1：黒褐色(2.5Y3/2)炭混りシルト質中粒砂
2：黒褐色(2.5Y3/4)炭が多く混るシルト質中粒砂
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂偽礫が多く混る中粒砂
4：灰オリーブ色(5Y4/2)炭混りシルト質中粒～粗粒砂
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂
6：オリーブ黒色(5Y3/2)偽礫混りシルト質細粒砂

0　2m
1：60

図9　第2層上面・第1層上面遺構断面図

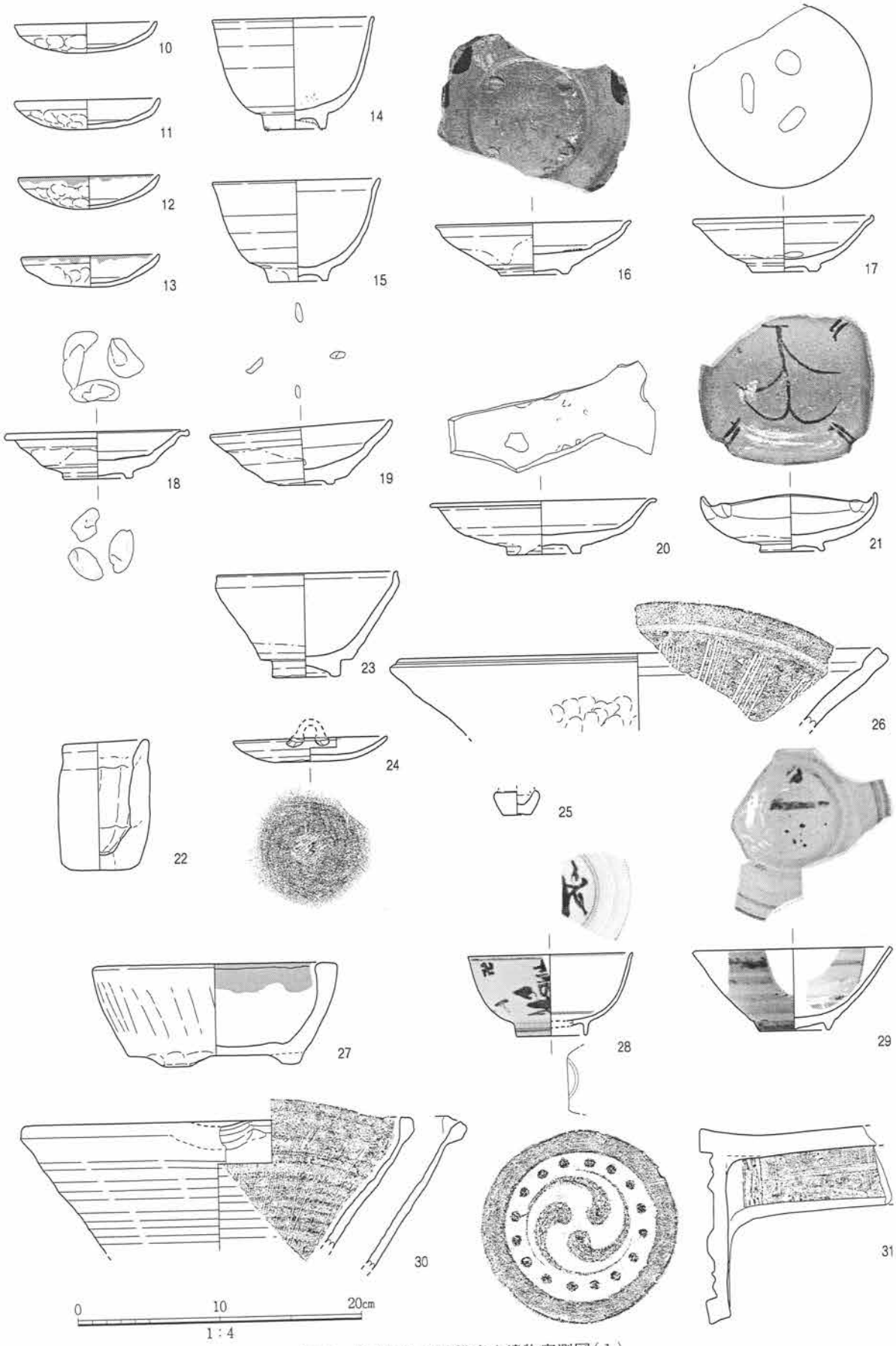


図10　第２層上面遺構出土遺物実測図（１）

SK203(23～25)、SK205(10～19・22・26・27)、SK213(21・30)、SK214(28・29)、SK216(31)、SK217(20)

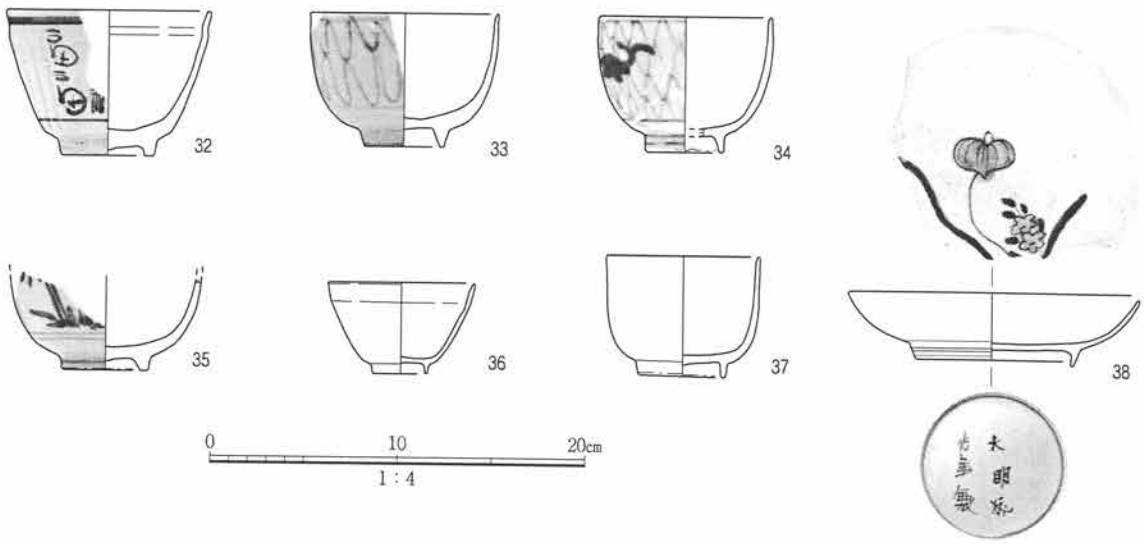


図11　第２層上面遺構出土遺物実測図（２）
SK203・205(32)、SK205(35)、SK208(34・36)、SK211(37)、SK213(33・38)

碗で、17世紀後葉のものであろう。

SK208は調査区南端にあり、東西1.2m、南北1.0m、深さ0.5mほどの土壙である。埋土は最上部が人為的に埋めた土であるほかは機能時堆積層の砂質シルト層である。肥前磁器34・36などが出土した。34は一重網目文の染付碗、36は直線的に開く体部と口縁部との境が屈曲する白磁小杯である。

ほかの遺構出土遺物には、SK203の瀬戸美濃焼23、軟質施釉陶器25、備前焼24、SK211の肥前磁器37、SK213の肥前陶器21、丹波焼30、肥前磁器33・38、SK214の中国産青花28・29、SK216の三巴文軒丸瓦31、SK217の肥前陶器20などがある。23はやや背の高い鉄釉の天目碗、25はミニチュアの壺である。24は１箇所に把手をつけた皿で、底部外面は手持ちで削って整形し、ベンガラとみられる暗赤褐色の塗土を施している。口縁部に煤が付着しているため、灯明皿と考えられる。37は体部が直口する白磁碗、33は粗雑な一重網目文の染付碗、38は皿で高台外面に「大明成化年製」銘を模している。21は絵唐津の向付、30は擂鉢で擂目は８本１単位である。28は草花文、29は直線的に開く体部に濃淡のある縞文様をつけている。31の筒部内面にはコビキBが認められる。20は口縁部を外反させた浅い皿である。

以上の出土遺物は徳川初期以降の17世紀代に当り、第２層上面の遺構群の時期を示している。大坂

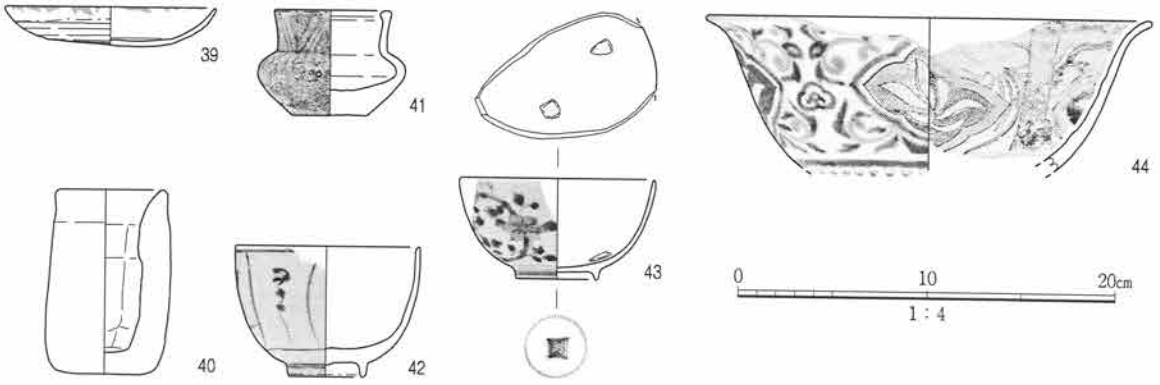


図12　第１層上面遺構出土遺物実測図
SK108(39・43・44)、SK101(40～42)

冬ノ陣の焼け面は、本調査地では確認できなかった。

第１層上面遺構

調査区中央部で平面形が方形となるSK108と、南部でSK101などの円形ないし不定形の土壙を確認した。SK108は南北2.5m、深さ1.0mで、埋土の下半(図９－４～９)は機能時堆積層とみられるが、その後、一度掘りなおしており、図９－４のにぶい黄褐色中粒砂層のラミナは３のオリーブ褐色中粒～粗粒砂層によって切られている。下半の埋土内には石垣に使用された可能性のある石が捨てられていた。出土遺物には備前焼39、肥前磁器43・44などがある。39は灯明皿に利用されており、把手がない点を除けばSK203出土の24と類似する。43は草花文の染付碗で底部内面に目痕が残っている。44は大型の色絵碗で、内外面とも型で文様の凹凸を陽刻し彩色している。図化していないが肥前磁器染付には二重網目文の碗、雨降文の仏飯具なども出土している。このほか、SK101からは産地不明陶器41、肥前磁器42、土師器40などが出土した。41は壺で、直口する口縁部から体部上半にかけてソギで綾杉文を線刻している。42は染付碗、40は焼塩壺で体部は直立し口縁部をわずかに外反させている。

以上の出土遺物から本層上面の遺構は17世紀代後葉から18世紀代の時期が当てはまる。

3)まとめ

今回の調査では周辺の既往の調査と同様に、古代から近世に至る遺構と遺物を検出することができた。以下、おもな成果を時代順に列挙する。

・古代ではわずかな遺物が出土したが、遺構はない。人面墨画土器が注目される。

・中世では南北に方位を揃えた溝が繰り返し掘削されており、一帯の土地開発に何らかの規格が働いていた可能性を考えさせる。

・豊臣期の大坂冬ノ陣の焼け面や復興に係る遺構は確認できなかった。

・徳川期に入るとゴミ穴と考えられる土壙が繰り返し掘られている。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「大坂城下町跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1999・2000年度―』、pp.135－149

大阪市文化財協会2004、「OJ95－４次および95－８次の調査」:『大坂城下町跡Ⅱ』、pp.337－346

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城下町跡(OJ05－９)発掘調査」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.173－182

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「中央区北久宝寺町三丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ07－11)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.57－84

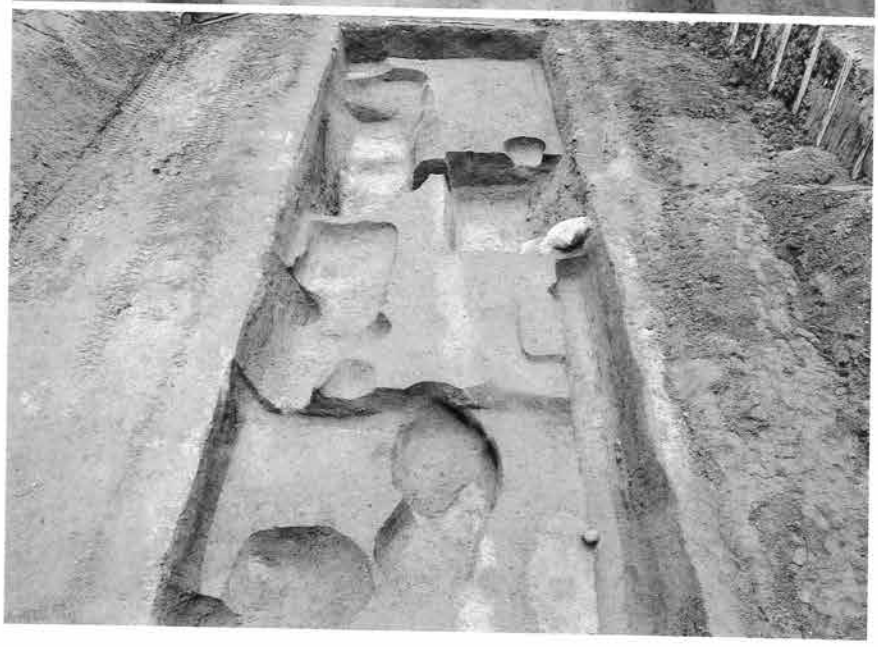
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「大坂城下町跡発掘調査(OJ09－１)報告書」:『平成21年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.15－22

趙哲済ほか2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』大阪文化財研究所、pp.９－22

北壁地層断面
（南から）

第５層内
遺構検出状況
（南から）

第４層上面
遺構検出状況
（南から）



第２層上面
遺構掘削状況
（南から）

SK205断面
（北東から）

第１層上面
遺構全掘状況
（南から）

中央区平野町三丁目17における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ15－３)報告書

調査個所	大阪市中央区平野町３丁目17
調査面積	61㎡
調査期間	平成28年２月22日～２月25日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	大阪文化財研究所 調査課長　清水和明、積山洋

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期の船場城下町の遺跡である大坂城下町跡の西部に位置する(図1)。

当該地において再開発が計画されたため、平成28年1月5日、大阪市教育委員会が試掘調査を行い、地表下約1.75m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする遺物包含層が検出された。今回の調査は、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として実施された。

調査は平成28年2月22日に開始した。比較的遺跡の遺存状態が良いと見込まれた敷地の北部に東西5m・南北8mの調査区を設け、機械力で掘削を始めたが、予想に反して遺構・遺物包含層の残りが悪く、大阪市教育委員会と協議の上、2回にわたって南側に調査区を拡張した。その結果、試掘調査の位置にて包含層が良好に遺存することを確認し、調査はその地点のみに絞られることとなった(図2、第2トレンチ)。同月25日、現地作業を終了し、撤収した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。また、本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。

2)調査の結果

i)層序と遺構(図3・4)

調査地の層序はTP+2.0m以下、TP−0.5mまでの範囲で観察した。各層の詳細は図4のとおりであり、第9層より上はすべて整地層、第10層は自然堆積層に由来する地層である。最下層の第10層上面

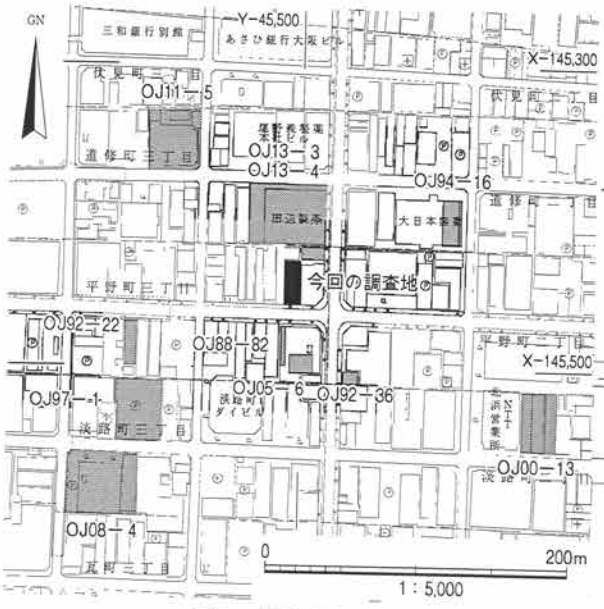


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

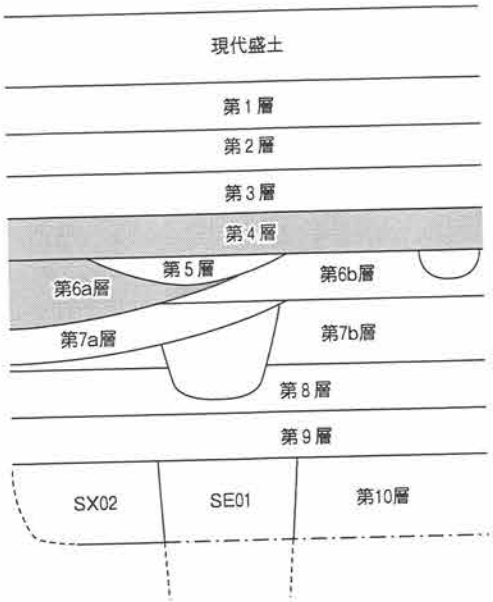
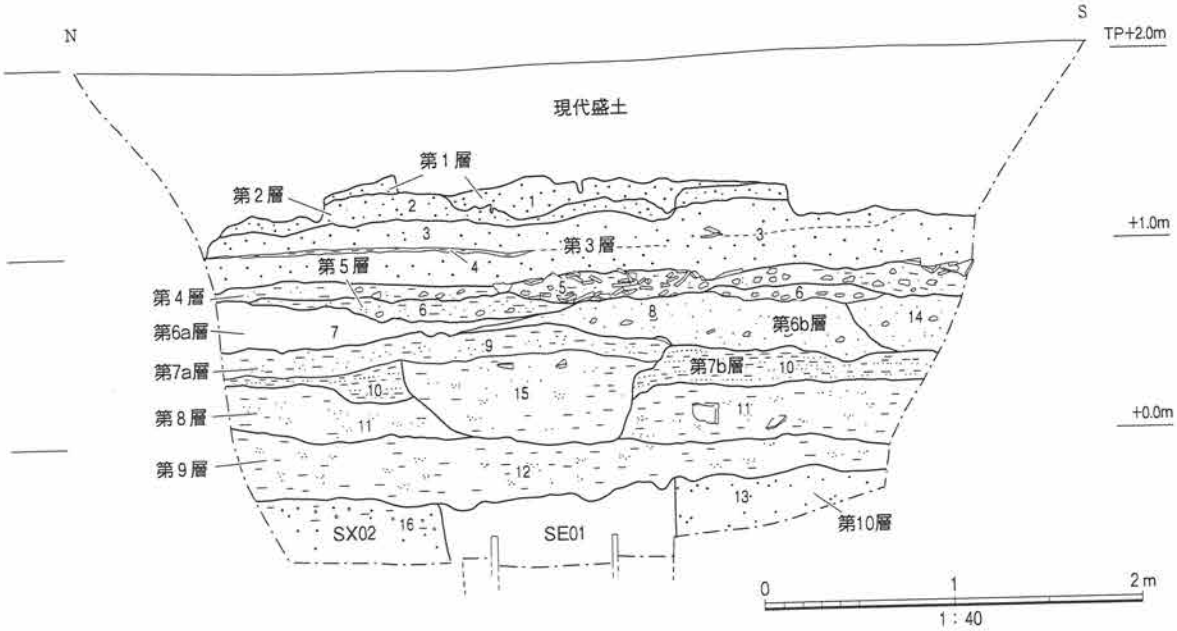


図3　地層と遺構の関係図

から掘り込まれた井戸SE01は瓦質の井戸側を用いていたため、江戸時代でも19世紀のものである。また、これに切られるSX02からは丹波焼・土師器皿および小型の坩堝が出土している。したがって、第9層より上は近世末を中心とし、上位層は近代まで降る可能性が高い。

また、第6a層と第4層は焼土層であり、部分的に前者が後者の直下に位置している。これは時間的に近接して2度の火災があったとみられる反面、第4層は焼土塊が混在するという層相なので、第6層の再堆積の可能性もある。

なお、図4の層序番号14・15はそれぞれ第2トレン



1：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂：(第1層)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3.5)または褐色(7.5YR4/3)シルト混り中粒～粗粒砂：(第2層)
3：にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒砂：(第3層)
4：にぶい黄褐色(10YR4.5/4)または褐色(7.5YR4/3)シルトなど偽礫の薄層：(第3層)
5：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂混りシルト(焼土の偽礫を含む)：(第4層)
6：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂混りシルト(シルトなどの偽礫など含む)：(第5層)
7：暗褐色(10YR3/3)砂・シルトを含む焼土：(第6a層)
8：褐灰色(10YR3.5/1)または黒褐色(10YR3/2)砂(シルト偽礫を含む)：(第6b層)
9：黒褐色(10YR3/2)砂混りシルト(砂の偽礫を含む)：(第7a層)
10：灰黄褐色(10YR4/2)砂・シルト等の薄層の集積：(第7b層)
11：灰黄褐色(10YR3.5/2)または黒褐色(10YR3/2)シルト(砂の偽礫を含む)：(第8層)
12：にぶい黄褐色(10YR3.5/3)砂混りシルト(砂の偽礫を含む)：(第9層)
13：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂：(第10層)
14：にぶい黄褐色(10YR3.5/3)または暗褐色(10YR3/3)粗粒砂(シルト偽礫を含む)：(遺構埋土)
15：黒褐色(10YR3/2)シルト(砂の偽礫を含む)：(遺構埋土)
16：褐色(7.5YR4/3)シルト・礫混り粗粒砂：(SX02埋土)

図4　第2トレンチ東壁地層断面図

チ東壁断面で検出した遺構埋土であるが、形状など平面的な把握はできなかった。

ⅱ)出土遺物(図5)

今回の調査はほとんど断面調査に限定された結果、出土遺物は少なく、また実測できた遺物も、その出土層や遺構の年代を直接示すものではない。

1・2はSE01掘形出土である。1は平安時代初期(9世紀前半)の黒色土器椀である。A類(いわゆる内黒土器)で、外面も一部黒色である。2は瓦質土器火入れの体部である。3は第7層出土の肥前磁器青磁碗である。17世紀後半のものであろう。4は第6a層出土の肥前磁器染付碗である。底裏銘は「製」かとみられ、そうであれば「大明年製」銘であった可能性が高い。高台のつくりなどから17世紀後半～末ごろのものとみられる。

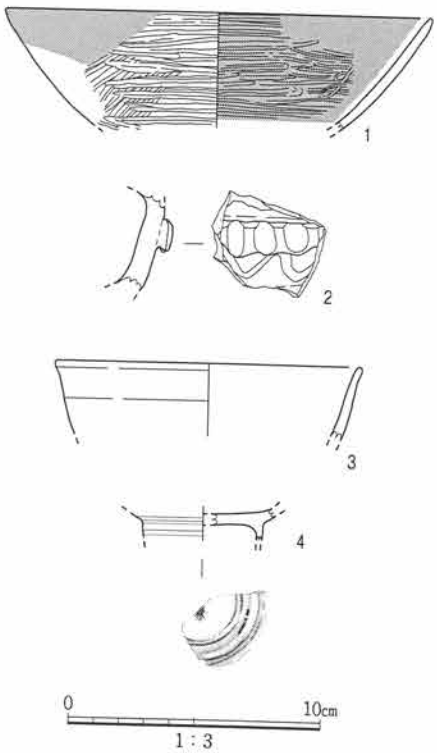


図5　出土遺物実測図
SE01(1・2)、第7層(3)、第6a層(4)

3)まとめ

今回の調査は、大規模な近代・現代の攪乱によって、かなり限定された調査となった。

第6a層と4層の焼土が大規模な火災痕跡であるとすれば、19世紀に船場の平野町が被災した大火としては天保8(1837)年の「大塩焼け」がある[大阪市消防局1968]が、遺物の年代観からこれを裏づけることはできなかった。

黒色土器は、今回は近世の井戸からの出土であったが、もともと8世紀末～9世紀前半の土器は調査地の一帯で広く出土しており、道路をはさんだ南側のOS88－82次[大阪市文化財協会2004]、また調査地北隣のOJ13－3・4次[大阪文化財研究所2015a・b]などの例をあげることができる。船場ではそれより古い奈良時代の遺構は非常に少ないのに対し、8世紀末以後、ほぼ大阪湾の汀線に近いこの地に人々が居住するようになったことを示すものであろう。

今後とも平野町や道修町における地道な調査の継続が望まれるところである。

参考文献

大阪市消防局1968『大阪市消防の歴史』pp.59～60

大阪市文化財協会2004『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.281～314

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a、「大坂城下町跡発掘調査(OJ13－3)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.217－234

2015b、「大坂城下町跡発掘調査(OJ13－4)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.235－244

調査地全景
（南西から）

第２トレンチ東壁地層断面
（西から）

SE01
（西から）

中央区南船場二丁目30における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ15－４)報告書

調査個所	大阪市中央区南船場２丁目30
調査面積	384㎡
調査期間	平成28年３月７日～平成28年４月20日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、大庭重信・積山洋

1)調査に至る経緯と経過

調査地の南船場２丁目所在遺跡D地点は、大坂城下町跡の南部、大坂城三ノ丸の造成に伴って開発された船場地区の南側に位置しており、近世には1622(元和８)年に開削された長堀川(現長堀通)の北側、東西の安堂寺橋通と南北の難波筋が交差する北西側の敷地内に当る(図１)。周辺の調査は多くはないが、南西約200mのOJ07－５・６調査地では、豊臣期船場城下町の推定南限を超えた位置で豊臣後期の遺構が検出されており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]、城下町の拡がりを考える上で注目される地域である。また、東側15mのOJ10－１次調査地でも、17世紀後半の遺構が検出され、町場の形成が遅くとも17世紀前半に遡る可能性が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。

大阪市教育委員会が行った試掘調査により、地表下約1.3m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする古代から近世にかけての遺構面および遺物包含層が検出されたという結果をうけ、調査が行われることとなった。

調査は平成28年３月７日から開始した。試掘調査により比較的遺跡の遺存状態が良いと判断された敷地内の南半を対象に、東西24m、南北16mの調査区を設け(図２)、近代以降の地層を重機により掘削した。しかし、予想に反して大半が現代の掘返しにより削平を受けており、比較的遺存状態が良好な調査区北西部を除いて地山である第３層上面まで掘削し、遺構の検出作業を行った。また、地山である第３層上面の標高がTP＋2.0m前後と周辺の調査地と比べて高く、調査地が上町台地西側の砂州上に立地することが予想されたことから、検出遺構の記録を終えた調査の終盤に、調査区の中央に東西方向のトレンチを設け、TP±０mまでの基盤の砂州堆積物の観察と記録を行った。４月20日には

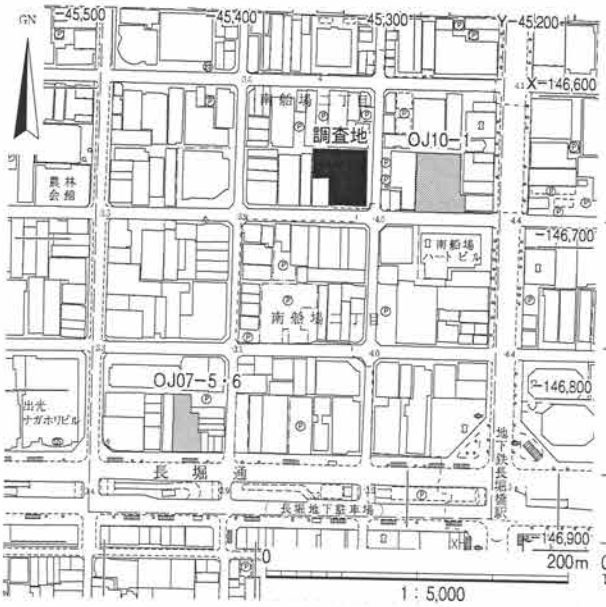


図１　調査地位置図

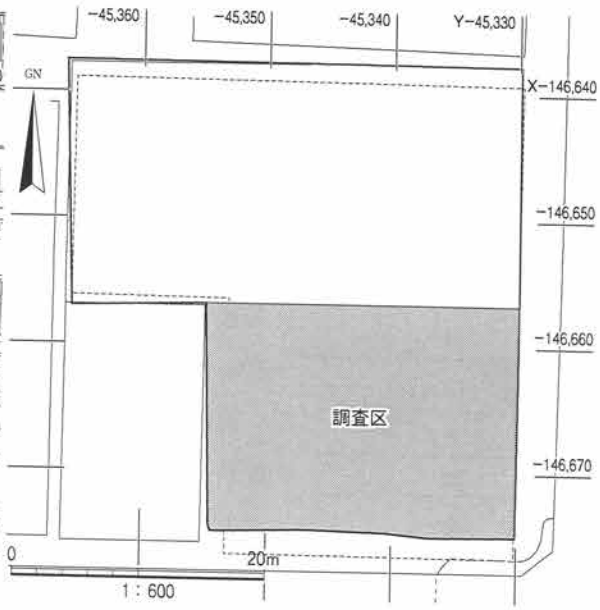


図２　調査区位置図

現地での作業を終え撤収し、調査を完了した。

本報告で用いた基準点の測量は株式会社島田組が行い、方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±0mと記した。

なお、報告書の作成にあたり、出土遺物の整理と原稿執筆を調査課学芸員小田木富慈美が担当し、動物遺存体の同定と報告を東海大学海洋学部海洋文明学科丸山真史氏にお願いした。

2)調査の結果

i)層序

調査地の標高はTP+3.5m前後とほぼ平坦であり、現地表下3.5mまでの地層を第0～3層に区分した(図3・4)。

第0層：近現代の盛土および攪乱埋土である。

第1層：近世の整地層で、第1a層・第1b層に細分できる。

第1a層はにぶい黄色礫混り細粒～中粒砂、明褐色中粒～粗粒砂と焼土層の互層からなる整地層で、層厚は最大35cmある。上面は近代以降に削平され遺存していない。本層からはほとんど遺物が出土していないが、平面で検出した遺構の年代から17世紀後葉以降に整地された可能性がある。

第1b層は下部が焼土層、上部が炭･焼土を含む明褐色シルト質中粒～粗粒砂層で、層厚は20cmある。第1b層上面は被熱により赤～黒色化しており、調査区南西端で小型の礎石とSK30を検出した。上面の標高はTP+2.2mである。本層からはほとんど遺物が出土していないが、第1b層下部上より掘られたSK27から豊臣後期の肥前陶器が出土していることから、第1b層下部の焼土層は大坂冬ノ陣の際のもので、第1b層は大坂冬ノ陣後の整地層の可能性がある。

第2層：褐色シルト質細粒～中粒砂からなり、植物の根等による擾乱を受けた古土壌である。層厚は15cmあり、調査区南壁で部分的に確認した。上面の標高はTP+2.05mである。遺物は出土していない。

第3層：難波砂州を形成した海浜堆積層で、第3a層～第3c層に細分できる。第3b・3c層は調査区中央に設定した深掘りトレンチで確認した。

第3a層はにぶい黄色細粒～粗粒砂からなり、場所によっては細礫を含む。調査区南壁で確認し、層厚は0.3m前後ある。上位層からの擾乱により構造がはっきりしない。

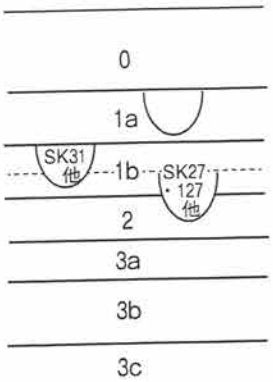


図3　遺構と層序の関係

第3b層は粒径のそろった灰白色細粒～粗粒砂層の互層堆積からなる淘汰のよい地層である。西側(沖側)にやや傾斜しており、汀線近くの波打ち際で波の影響で運ばれた離水直前の堆積物と判断される。層厚は最大80cmある。

第3c層はにぶい黄橙色の細粒砂と粗粒砂～礫からなる粗粒堆積物の互層からなり、後者は上方細粒化する淘汰の悪い地層である。TP±0mまで確認し、層厚は100cm以上ある。第3b層と同様、やや西側に傾斜しており、礫層が下位層を削って堆積し、一部で扁平な中礫が沖側に傾いて並ぶインブリケーションが見られる。こうしたことから、粗粒物質は波

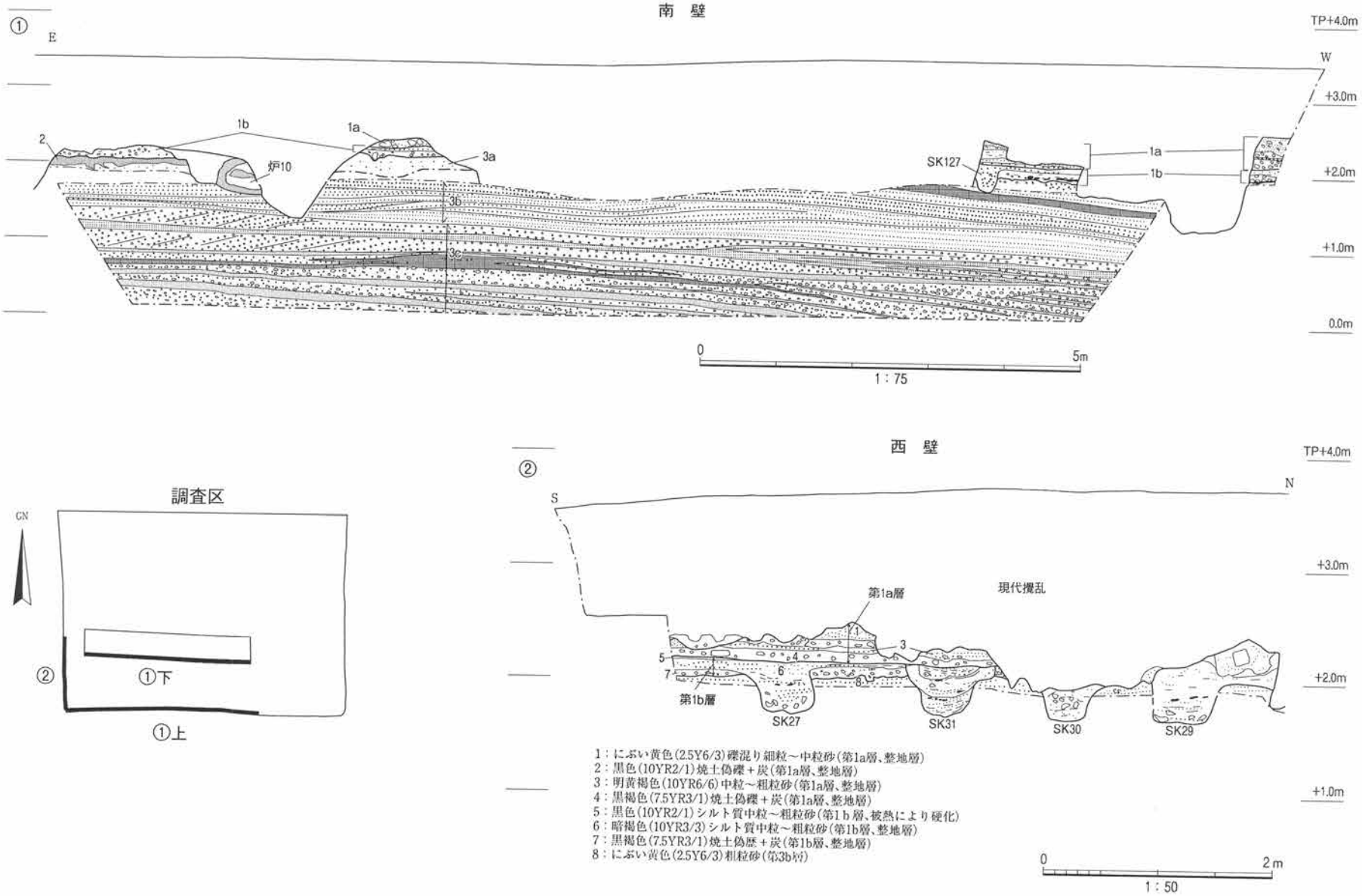

南　壁
①
E
W
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
+1.0m
0.0m
1b
1a
2
炉10
3a
3b
3c
SK127
0
5m
1：75
西　壁
②
S
N
現代攪乱
第1a層
第1b層
SK27
SK31
SK30
SK29
1：にぶい黄色(2.5Y6/3)礫混り細粒～中粒砂(第1a層、整地層)
2：黒色(10YR2/1)焼土偽礫＋炭(第1a層、整地層)
3：明黄褐色(10YR6/6)中粒～粗粒砂(第1a層、整地層)
4：黒褐色(7.5YR3/1)焼土偽礫＋炭(第1a層、整地層)
5：黒色(10YR2/1)シルト質中粒～粗粒砂(第1b層、被熱により硬化)
6：暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒～粗粒砂(第1b層、整地層)
7：黒褐色(7.5YR3/1)焼土偽歴＋炭(第1b層、整地層)
8：にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂(第3b層)
0
2m
1：50
調査区
GN
①下
①上

図4　南・西壁地層断面図

浪によって運ばれ斜面を這い上がるように堆積したもので、下位層を削る箇所は離岸流によって沖側に引き戻された堆積物と判断される。これらの間に堆積した細粒砂は波浪がおさまったときに海底を覆った砂であろう(註1)。

第3層は[趙哲済2014]で復元された砂州Aを形成した海浜堆積層とみられ、年代を示す遺物は出土していないが、TP±0m～TP+2.0mの間で見られること、OS08－5次調査で砂州A西側に形成されたラグーン内から縄文時代後・晩期の土器が出土していること[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]などから判断して、第3層は現在よりも海水準が高かった縄文時代後期以前に堆積したと考えられる。

ii)遺構と遺物

上述したように、調査区のほぼ全域が現代に掘り返されており、近世大坂城下町に関わる多くの遺構は第3層の地山上で確認した(図5)。層序との関係が把握できた遺構は、調査区南・西壁に接するごく一部のものであり、第1層が島状に遺存していた調査区中央～北東にかけても遺構の重複が激しく、調査層序と対比させることができなかった。そこで、一部で確認した層序と遺構の関係、遺構の重複関係、出土遺物の年代から、豊臣後期から肥前磁器出現以前までの徳川初期に相当する16世紀末～17世紀初頭、肥前磁器出現以降の17世紀前～後葉、18世紀代の3時期に分けて遺構・遺物を報告する。また、調査の対象外であるが、近代に廃絶した井戸についても、調査域の敷地割の変遷を考える上で参考になることから、併せて報告する。

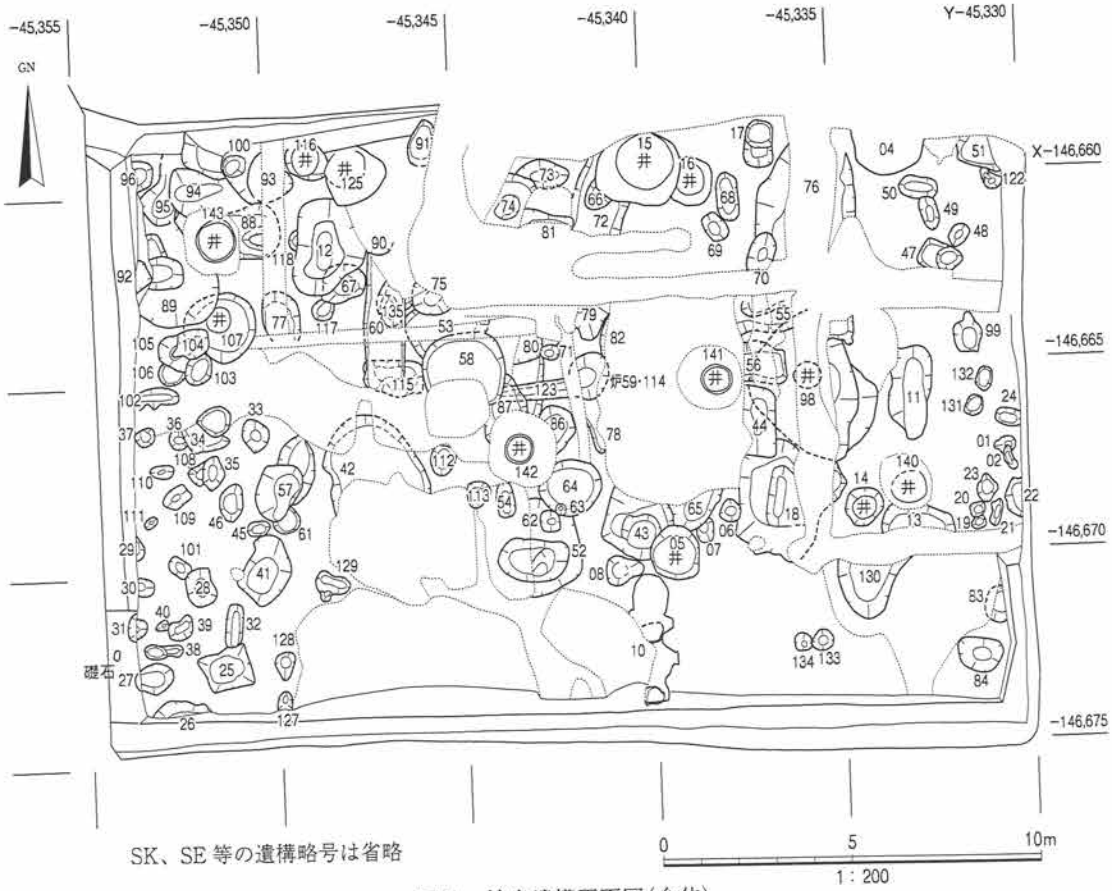


図5　検出遺構平面図(全体)

a）16世紀末～17世紀初頭の遺構（図６）

遺構の分布は、調査区の西部にSE107、東部にSE98の２基の井戸が存在し、SE107の南および東側、SE98の東側に大小の土壙群が集中しており、１つの井戸を単位として調査区の東西にそれぞれ別の屋敷地があった可能性がある。

SE107は掘形が直径2.0mと大型で、直径約1.1mの木製の井戸側が残存していた。SE98は現代の建物基礎に破壊されて遺存状態が悪いが、掘形が直径約3.5mと大型で、中央で瓦製の井戸側を確認した。

SE107の南側の土壙は、北半と南半とで異なる特徴があり、南半には平面が１m未満、深さが0.3m前後の不整形な土壙が密集しており、埋土中に焼土偽礫を多く含むという共通性がある（SK27・30・32・38・39・127・128・129）。このうちSK27・127は第1b層内から掘られており、これらの土壙は大坂冬ノ陣後の片づけの際に掘り返されたものの可能性がある。一方、北半には、平面が１m未満と小型で炭を含む黒褐色土を埋土とするSK36・37・46・108・109・112や、平面が２m前後と大型のゴミ穴と考えられる比較的遺物を多く含むSK34・35・41・57などが分布する。後述するように、銅碗（SK57）、骨製櫛払（SK108）、土製の錘（SK41・57）などの特徴的な遺物が出土する。また、SE107東側のSK117は直径0.6mの円形土壙で、内部に桶を据えた痕跡がある。

SE98東側の土壙は、調査区東辺に沿って南北に並ぶように分布し、南端のSK83・84および北端のSK51は平面が1.0m前後、深さが0.6m以上と規模が大きいが、その間の土壙は深さ0.2m前後と浅い。

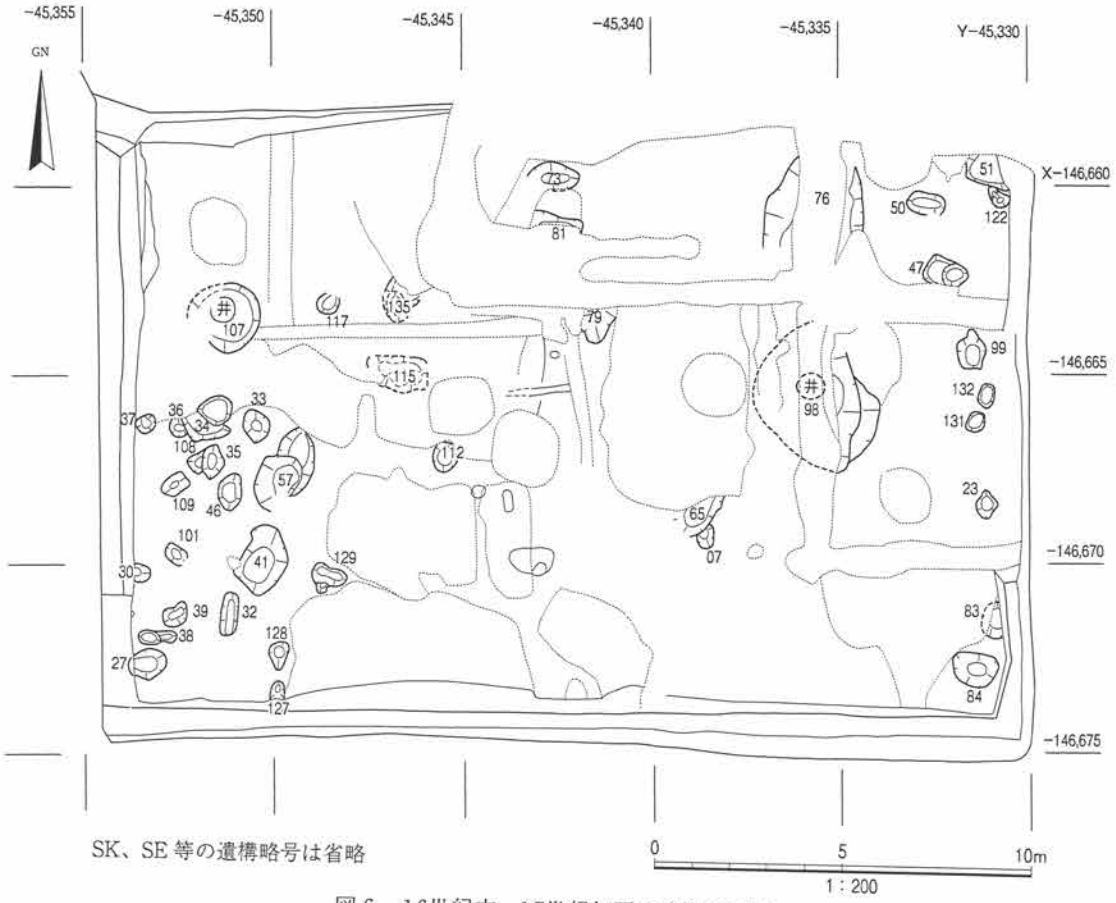


図６　16世紀末～17世紀初頭の遺構平面図

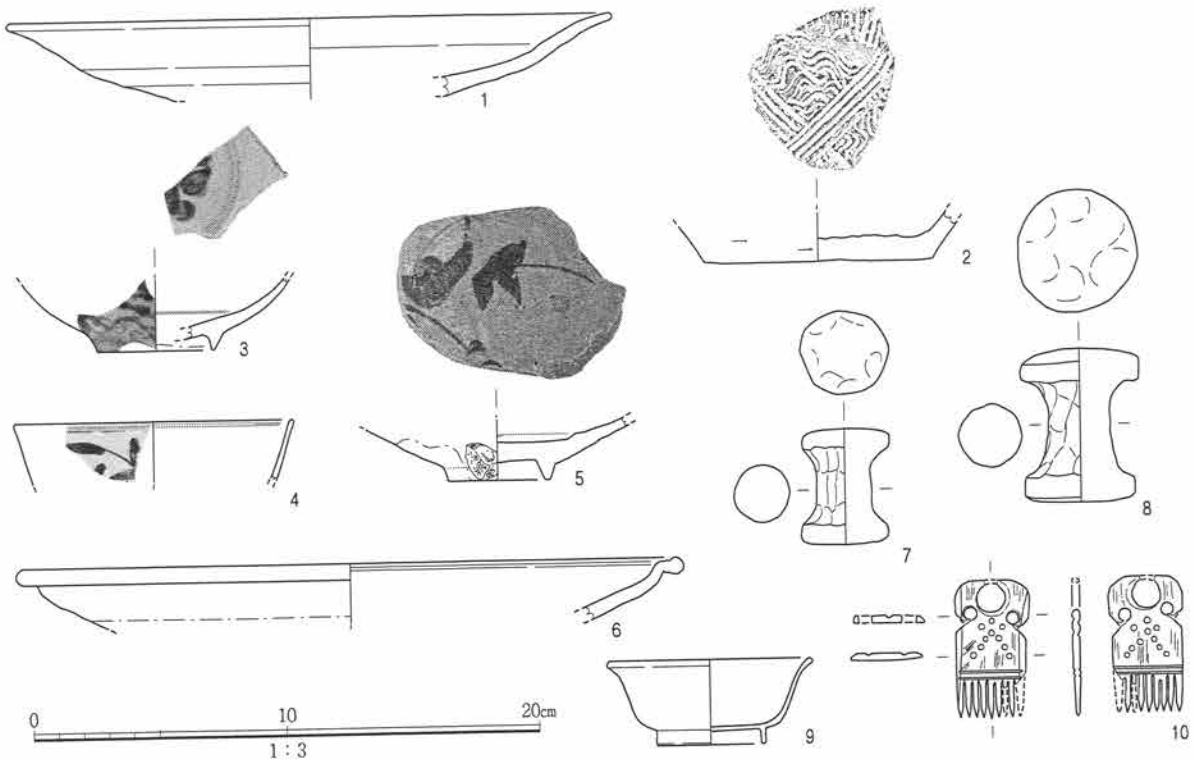


図７　16世紀末～17世紀初頭の遺構出土遺物
SK76(１・２)、SK41(３～８)、SK108(10)、SK57(９)

また、現代の攪乱による破壊で詳細が不明であるが、SE98の北側にも東西2.4m、南北3.0m以上の大型のSK76が存在する。SK76からはSK108と同様の骨製櫛払が出土した。

b)16世紀末～17世紀初頭の遺構出土遺物(図７)

SK76　中国産磁器・朝鮮半島産磁器・肥前陶器・備前焼・瀬戸美濃焼・丹波焼・軟質施釉陶器・瓦質土器･土師器のほか瓦、古代以前の須恵器、骨製櫛払が出土した。１は朝鮮半島産白磁の皿である。器壁が厚く、陶質に近い胎土である。２は器種不明の土師器底部で平底である。内面は黒灰色を呈し、櫛描きが見られる。擂鉢の可能性がある。

SK41　中国産磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・信楽焼・備前焼・瓦質土器・土師器のほか、瓦・土製品が出土した。３･４は中国産青花碗である。３は蓮子碗、４は饅頭心タイプになると思われる。５･６は肥前陶器皿で、５は鉄絵を施す。７･８は土製品である。７は小型で瓦質、８は大型で土師質である。これらは筵などを編む際の錘ないしは窯道具の可能性がある。

SK108　中国産青花・備前焼・土師器のほか、16世紀末～17世紀初頭の特徴を有する骨製櫛払10が出土した。

SK57　中国産青花・肥前陶器・備前焼・土師器のほか、瓦・金属製品・銅銭・貝が出土した。９は完形の銅碗で、仏具であろう。また、本遺構からはSK41と同様の土製品が２点出土している。

c)17世紀前～後葉の遺構(図８～10)

この時期の遺構が最も多く、井戸１基、炉２基のほか、多数の土壙を検出した。遺構の分布は、調査区中央の北端にSE16、調査区中央の南端に炉10、その北側約５mに炉59があり、これらの周囲に土壙のまとまりが複数認められる。

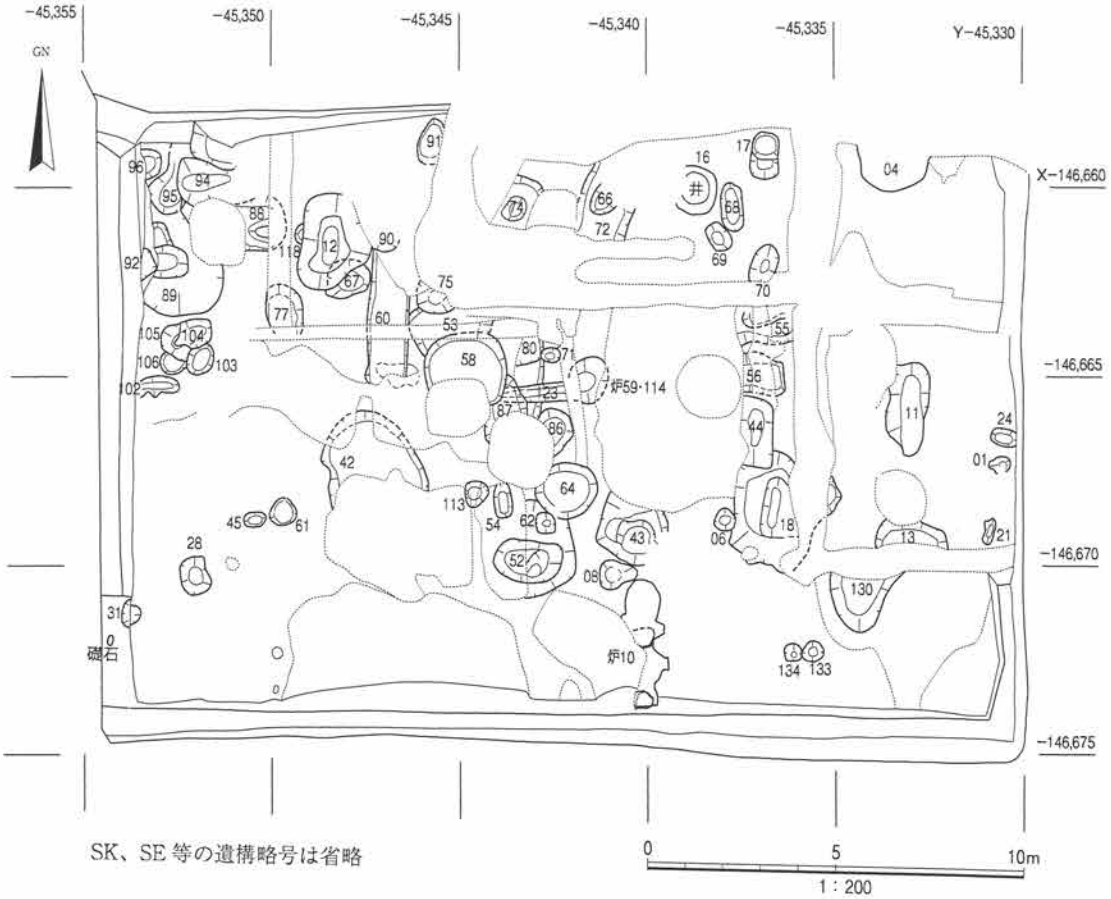


図８　17世紀前～後葉の遺構平面図

SE16は直径1.3mの掘形をもち、内側で直径0.8mの井戸側の痕跡を確認した。一部を掘り下げたのみであるが、17世紀前～中葉頃の瓦質土器の破片が出土したことから、この時期の遺構と判断した。

炉10は調査区中央の南端で検出した第1b層上面の遺構である。上部は削平され基底付近のみ残っており、南北3.4m以上、東西約1.0mの範囲に炉の下部構造とみられる焼土・炉壁片・焼けた瓦を敷き、その上にスサ入りの粘土で南北0.4m、東西0.6m以上の小型の方形の炉を1.1m離して２基構築していた(図９)。構築面である第1b層上面から約0.5m下に炉の底があることから、地下式の炉とみられ、西側が近代以降の攪乱により深く掘り下げられているが、本来ここに作業場となる掘込みがあった可能性がある。

炉59は径約1.3mの範囲で被熱により赤色化しており、上部は削平され、中央は掘り返されていたが、部分的に炭と砂を互層に敷いた炉壁の底を確認した(図９)。炉の底は第1b層上面のレベルとほぼ一致することから、地上式の炉であった可能性がある。炉59の北側にも、被熱により赤色化した部分が２箇所見られた。後述するように、炉内および周辺から17世紀中～後葉の遺物が出土している。

炉10の北側にはSK06・08・64、炉59の西側にはSK58・60・75・67など、炉から出た焼土や炉壁・炭を廃棄したとみられる大小の土壙が存在する。SK58は直径2.0m、深さ2.0mの深い竪穴で、ほぼ焼土・炉壁・炭で埋められていた(図10)。SK67からは炉10と共通する小型の方形の炉壁の破片が出土した。SK60は1.0m、深さ0.3m、長さ3.5m以上の細長い竪穴の底と側面に砂を充填したあと焼土や瓦の破片を詰めており、単なる廃棄土壙ではない可能性がある。炉10・59が使用された17世紀前～後葉の時

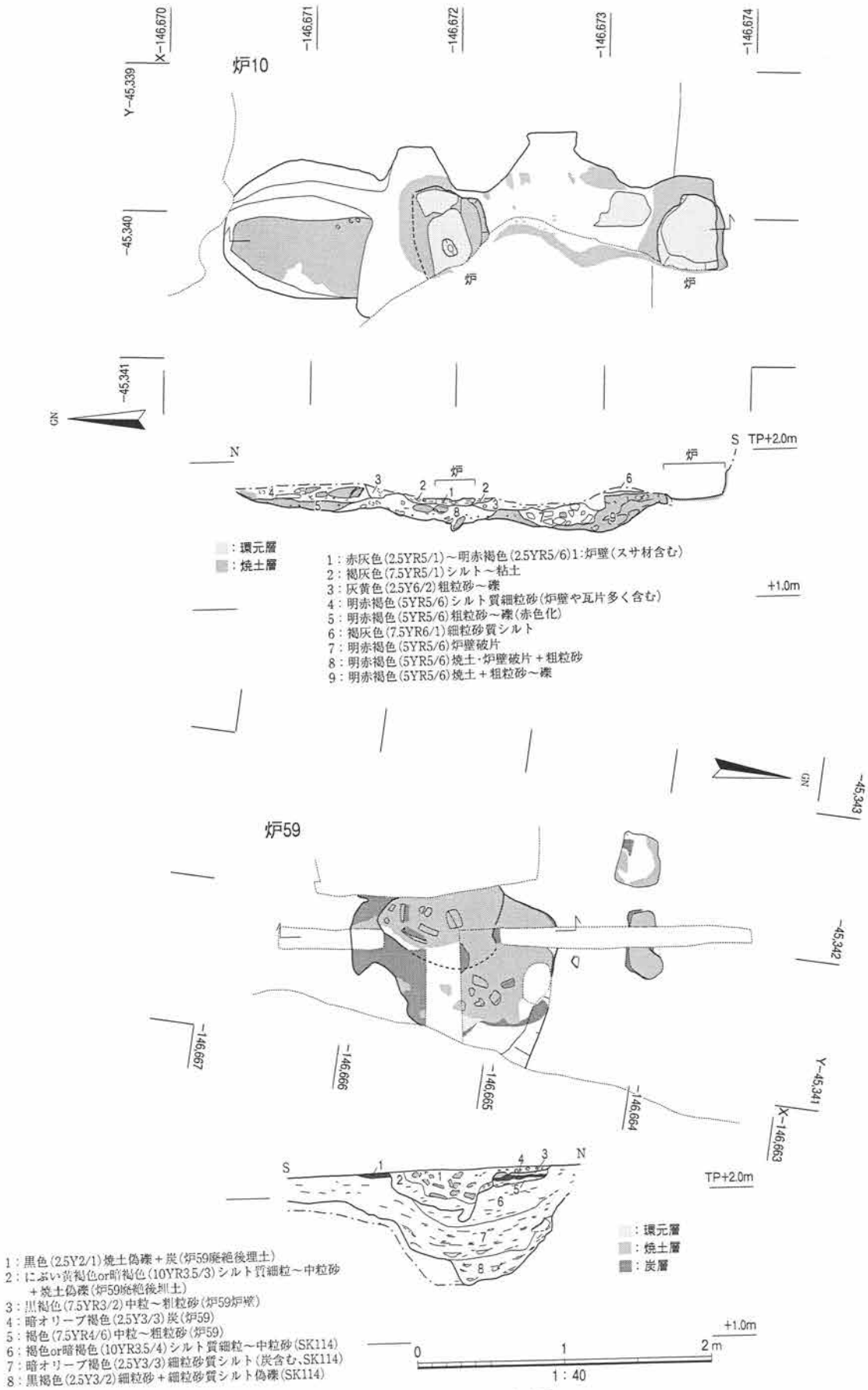


図9　炉10・59平・断面図

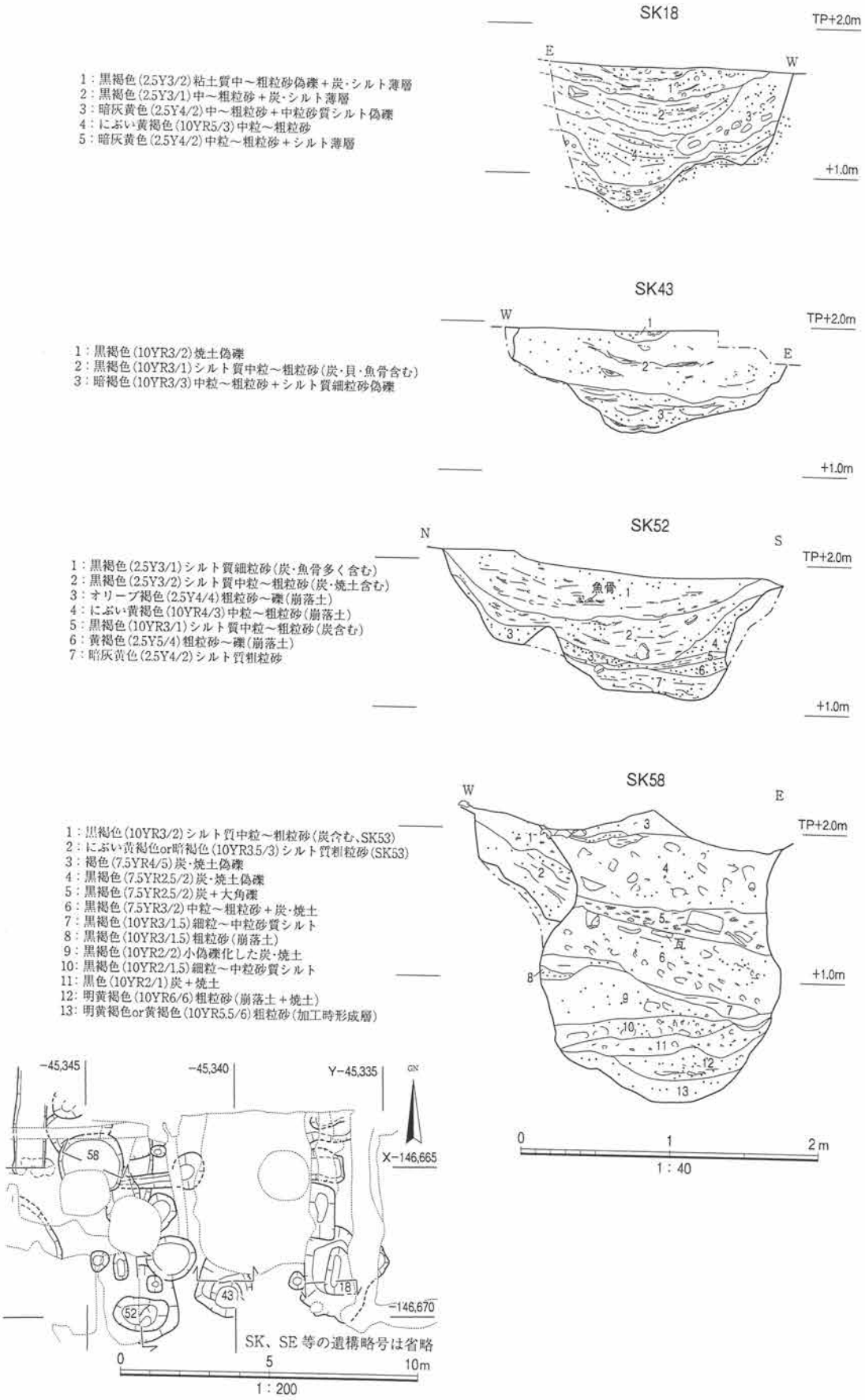


図10　SK18・43・52・58断面図

期の他の遺構からは、金属生産・加工を思わせるような遺物の出土が顕著でないため、調理と関連した炉の可能性がある。

日常生活残渣物を捨てたゴミ穴とみられる土壙は、炉10・59の間に東西に並ぶ一群(SK42・52・43・18)、この東端のSK18の北側に南北に並ぶ一群(SK44・56・55・70、69・68・17)、および調査区北西端の一群(SK88・89・92・94～96・102～106)の3箇所のまとまりがある。東西に並ぶ土壙のSK42・52・43・18は平面が2～3m、深さが0.7m以上と大型で、出土遺物から17世紀前～中葉に掘られたと考えられ、上述した炉から生じた焼土や炭等を廃棄したSK64はやや規模が小さく、SK52を切って掘られ、出土遺物は17世紀中～後葉に下る。また、南北に並ぶ土壙は南北に軸をそろえる長さ1～2m、深さ0.5m以下のものが主体で、SK44・69・68・17からは17世紀中～後葉の遺物が出土するなど東西に並ぶ土壙より時期がやや下り、南北列の北側に移動しつつ小型化する傾向がある。調査区北西端の土壙は、南半に17世紀前～中葉の遺物が出土する小規模なSK102～106が、北半に深さ0.6m以上と深く掘られたSK88・89・92・94～96が存在し、SK94が17世紀前～中葉、それ以外が17世紀中～後葉に下る時期の遺物が出土する。以上から、敷地内の空閑地がゴミ捨て場として継続して利用され、調査区中央の東西から南北へ、そして調査区の北西端へ移動していったようである。なお、これらの土壙を調査中に目立って魚骨・貝等が出土したSK18・43・44・52・66については、埋土を水洗してこれらを捕集した。このうち動物遺存体については後述し、貝類の内訳はSK44がハマグリ34点、シオフキ3点、SK52がハマグリ113点、ハイガイ1点、アカニシ1点、アカガイ1点とハマグリが大半を占め、上記土壙群の位置から離れた調査区中央北端で検出したSK66からは、シジミ649点、ハマグリ7点、アカガイ4点、イボキサゴ1点とシジミが多く出土した(註2)。

これらの遺構のまとまりとはずれるように、調査区の東端と北西部で、焼土や大量の焼けた瓦を埋めたSK04・SK11・12を検出した。いずれも17世紀中～後葉の土器・陶磁器を含んでおり、17世紀後葉に敷地が火災に遭い、その後の片づけに伴うものと考えられる。

d)17世紀前～後葉の遺構出土遺物(図11～14)

17世紀前～中葉、17世紀中～後葉の2時期に分けて報告する。17世紀前～中葉の遺構出土遺物は以下のとおりである(図11・12)。

SK52　中国産青花・青磁、肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・瓦質土器・土師器、瓦・土製品のほか、金属製品・鋳造関連遺物・軽石・貝・骨が出土した。11～13は肥前陶器で、11・12は碗、13は皿である。11は鉄釉を施したのち、長石由来の白釉、いわゆるイッチンで文様を描く。武雄市向家高麗窯産とみられる。12・13は灰釉を施す。14は丹波焼の大平鉢である。15は土師器焙烙である。16は瓦を二次加工した用途不明の円盤状製品で、中央部に貫通しない円穴を有する。

SK67　中国産青花・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・土師器のほか、鞴羽口・骨製品が出土した。17は肥前磁器染付碗である。18～20は土師器である。18は三脚の火入れである。19は灯明皿で、体部内面に圏線状のナデを施す。20は焙烙である。32はウシの肋骨を薄い板状に加工した半月状の骨製品である。OJ16－1次調査地ほか、大坂城下町跡で類例が見られる[大阪文化財研究所2016、市川創・丸山真史2016]。

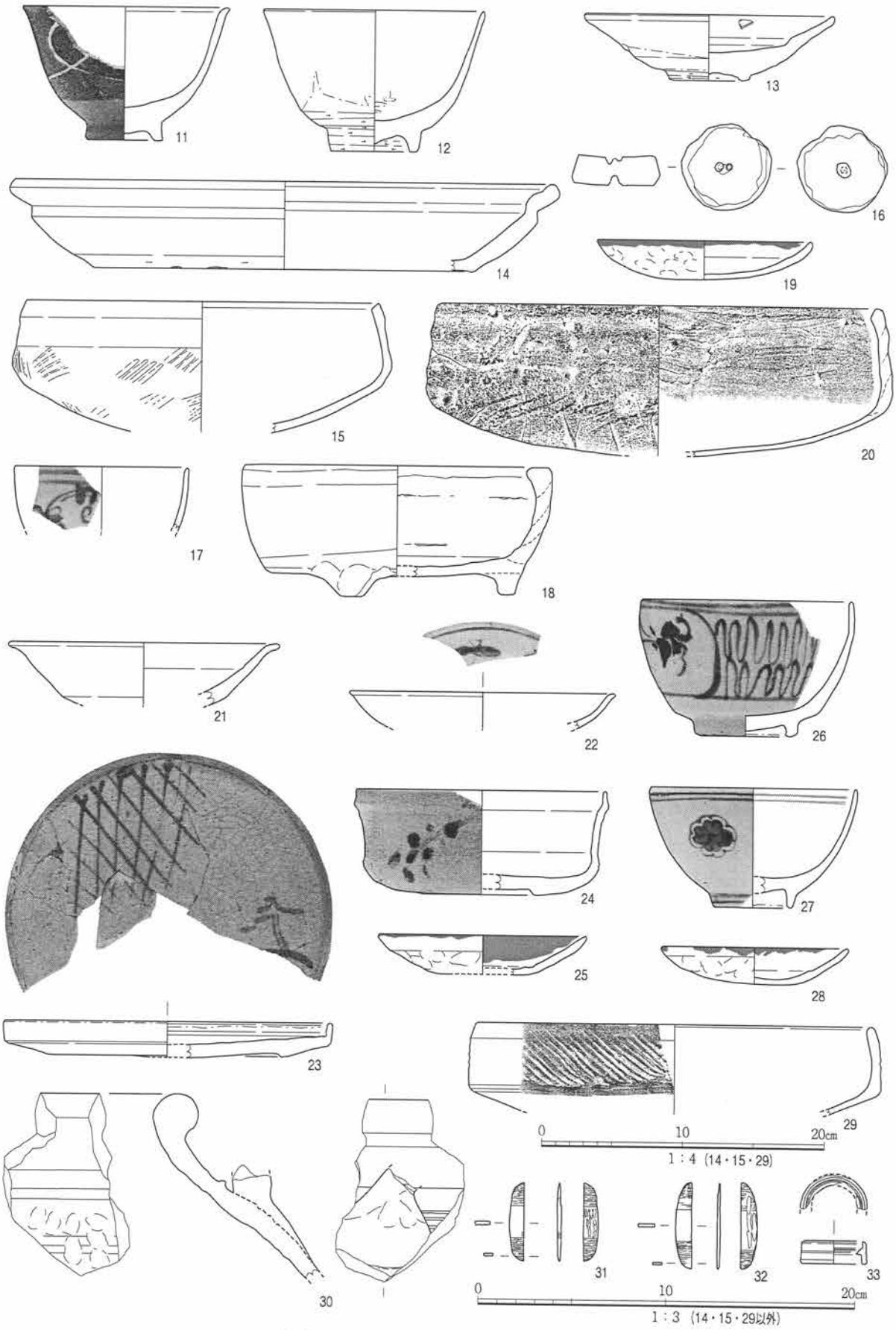


図11　17世紀前～中葉の遺構出土遺物

SK52(11～16)、SK67(17～20・32)、SK42(21～25)、SK43(26～29)、SK80(30)、SK86(31)、SK55(33)

SK42　朝鮮半島産白磁のほか、肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・瓦質土器・土師器が出土した。21は朝鮮半島産白磁皿である。22は肥前磁器染付皿である。23は瀬戸美濃焼志野で、鉄絵を施す皿である。24は肥前陶器の向付である。25は土師器皿で、内外面に煤が付着し、灯明皿として使用している。底部は平坦で、体部との境に明瞭な圏線が見られる。以上は、一部に豊臣後期～徳川初期に遡るものを含むが、他は17世紀前半に属する。

SK43　肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・土師器・瓦・金属製品・貝が出土した。26・27は肥前磁器染付碗である。28は灯明皿として使用した土師器皿で、体部内面に圏線状のナデを有する。29は土師器焙烙である。

SK80　中国産磁器・タイ産陶器・肥前磁器・肥前陶器・備前焼・丹波焼・瓦質土器・土師器・瓦・金属製品が出土した。30はタイ産陶器の四耳壺である。

SK86　肥前磁器・肥前陶器・土師器・焼壁・瓦・砥石・金属製品・骨製品が出土した。31は32と同様の骨製品である。

SK55　中国産青花・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・土師器・砥石・骨製品・金属製品が出土した。33は筒状の骨製品で、内側に突起を有する。

SK18　中国産青花・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・丹波焼・土師器・金属製品・魚骨・貝が出土した。34は肥前磁器の染付碗、35は肥前陶器の碗である。36・37は土師器皿である。ともに底部内面に圏線状のナデを施す。38は菊花状を呈する銅製の紅皿である。39は煙管の雁首である。

17世紀中～後葉の遺構出土遺物は以下のとおりである(図12～14)。

SK44　肥前磁器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・土師器・瓦質土器・丹波焼・瓦・石製品・金属製品・銭・骨・貝が出土した。40は肥前磁器の染付碗である。41は肥前陶器の皿で、刷毛目文を施し、二彩手である。42・43は瀬戸美濃焼で、42は天目碗、43は鉄釉を施し、体部外面の2箇所に円環を付ける鉢である。44・45は土師器皿と焙烙である。46は黒色の碁石で、整形は見られない。47は黒色の安山岩?を鋸状に加工した用途不明製品である。両端は折れている。

SK17　肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・土師器・瓦質土器・瓦・砥石・金属製品・骨が出土した。48は肥前磁器染付碗である。49は瀬戸美濃焼天目碗である。50は肥前陶器碗である。51は土師器焙烙で、口縁部外面に掻き上げ痕が見られる。

SK60　中国産青花・肥前磁器・肥前陶器・備前焼・土師器・瓦質土器・瓦・銭・砥石が出土した。52は中国産青花で漳州窯産の鉢である。53は肥前磁器染付碗で寿字文を施す。54は肥前磁器染付鉢で、唐草文を施す。

SK11　中国産磁器・朝鮮半島産磁器・肥前磁器・肥前陶器・瓦質土器・土師器のほか、焼けた瓦が多く出土した。55は中国産青花小碗で、漳州窯産である。56は朝鮮半島産白磁の皿である。57は肥前磁器染付碗で一重網手である。

SK04　焼けた瓦を捨てた土壙である。58は巴文軒丸瓦である。59は小型の巴文軒丸瓦で、珠文帯を有さない。60は唐草文軒平瓦である。

SK12　SK04と同様に焼けた瓦が多く出土する土壙である。ほかには肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美

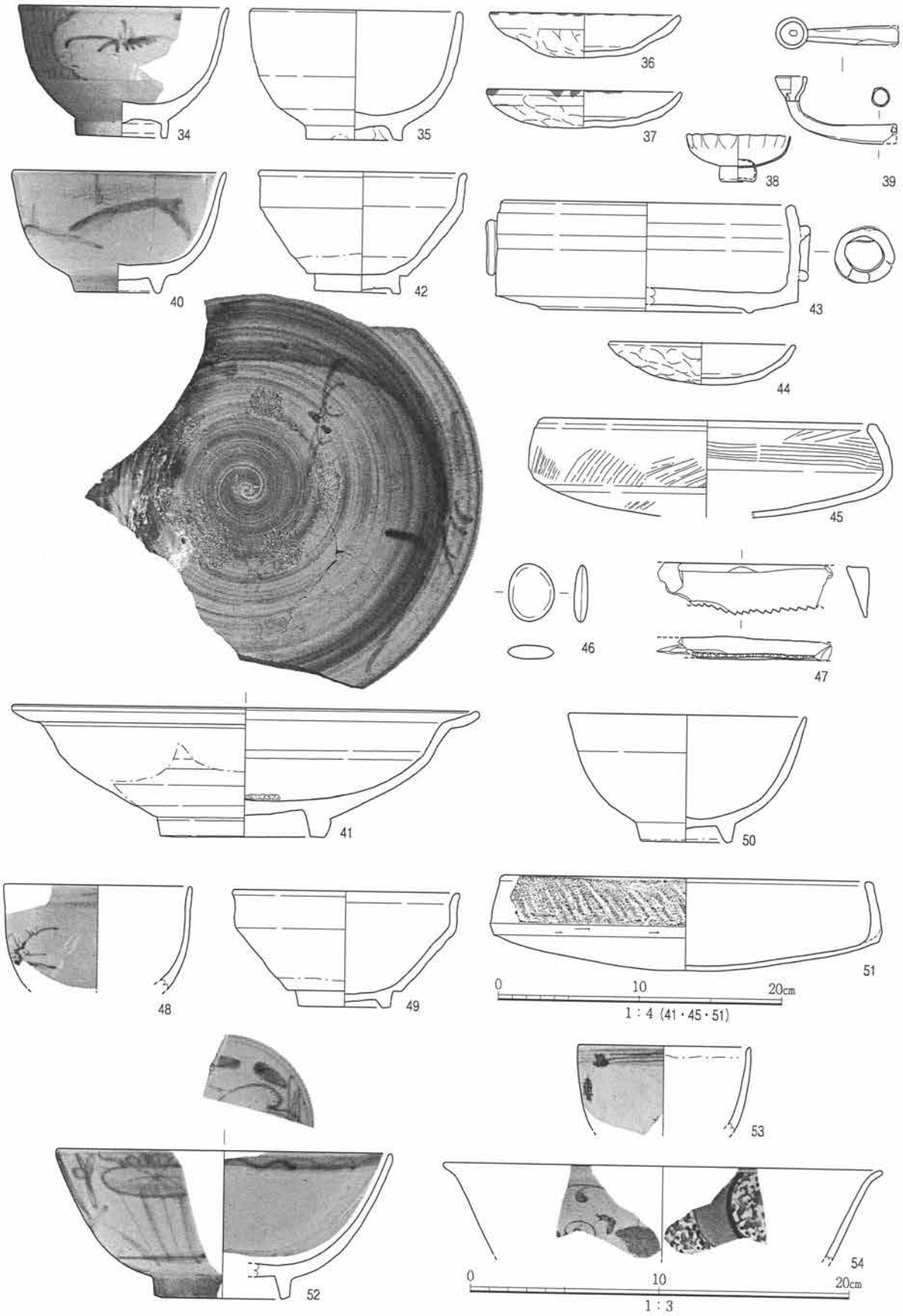


図12　17世紀前～後葉の遺構出土遺物

SK18(34～39)、SK44(40～47)、SK17(48～51)、SK60(52～54)

濃焼・備前焼・丹波焼・土師器・金属製品が見られ、なかでも土師器皿がまとまって出土している。61・62は肥前磁器染付碗である。63は肥前陶器壺で、外面に鉄釉を施す。64～71は土師器皿である。いずれも完形品で、灯明皿に転用している。64～69は口径6～7cmで、底部外面中央がわずかに窪む。整形は粗く、口縁部が歪んでいる。70・71は口径10.4cm程度で、体部内面に圏線状のナデがわずかに認められる。71は底部外面に板状の工具による調整痕を有する。72は巴文軒丸瓦の瓦当部分で、半円形を呈する。73は唐草文軒平瓦である。

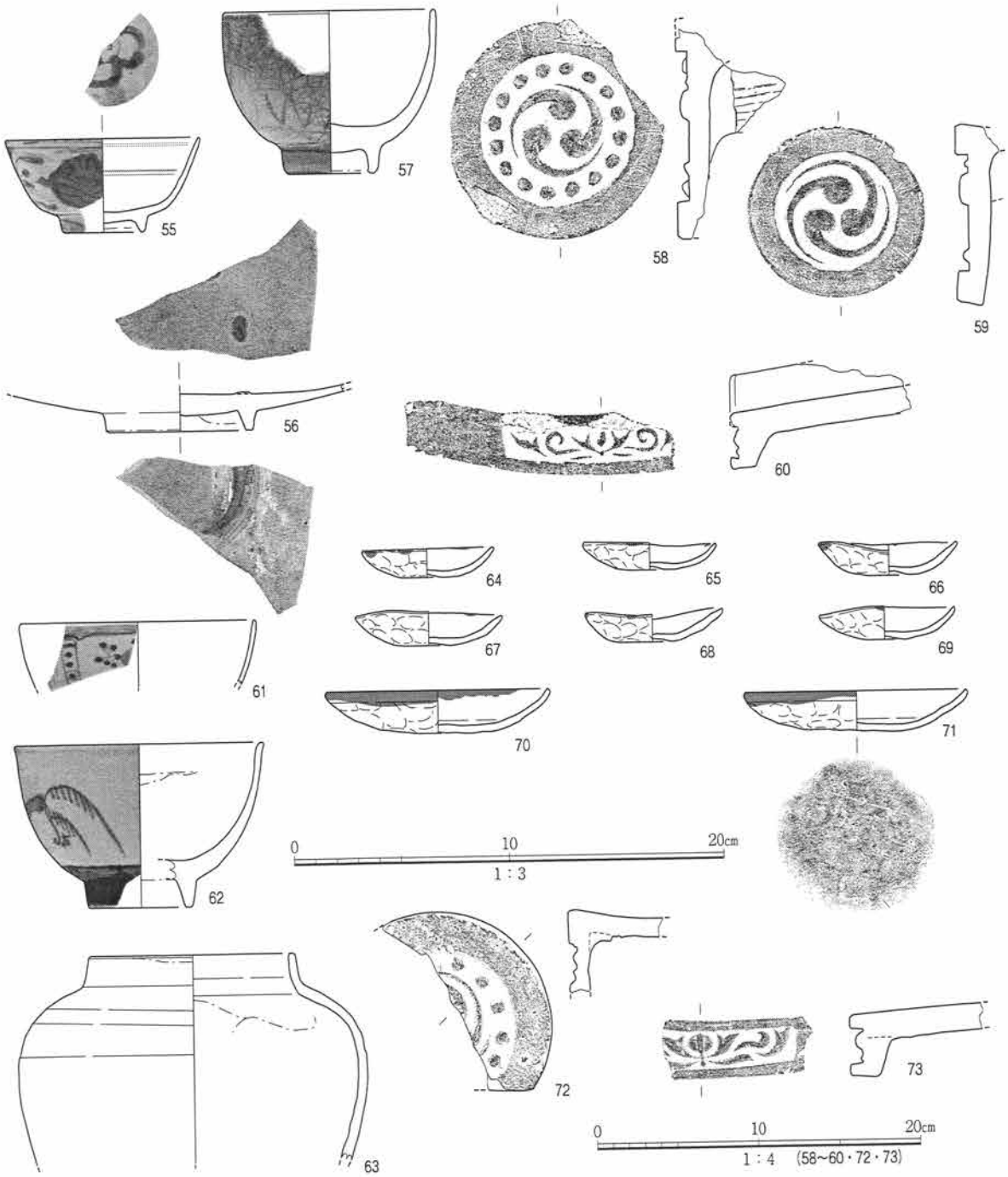


図13　17世紀中～後葉の遺構出土遺物
SK11(55～57)、SK04(58～60)、SK12(61～73)

炉59　肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・土師器・砥石・金属製品が出土した。74は肥前磁器染付皿で、口縁部が輪花となる。75は肥前陶器の火入れで、銅緑釉を施す。このほか、炉59のベースとなる地層から、陶器の植木鉢86が出土した。86は低い三脚を有し、底部中央には焼成前に小孔を穿つ。底部外面にはオリーブ褐色の釉が付着し、胎土には黒色砂粒を多く含む。中国南方産の可能性がある(註3)。一般に植木鉢の専用器が盛行するのは18世紀中葉以降である。本例は専用器としてはかなり古い17世

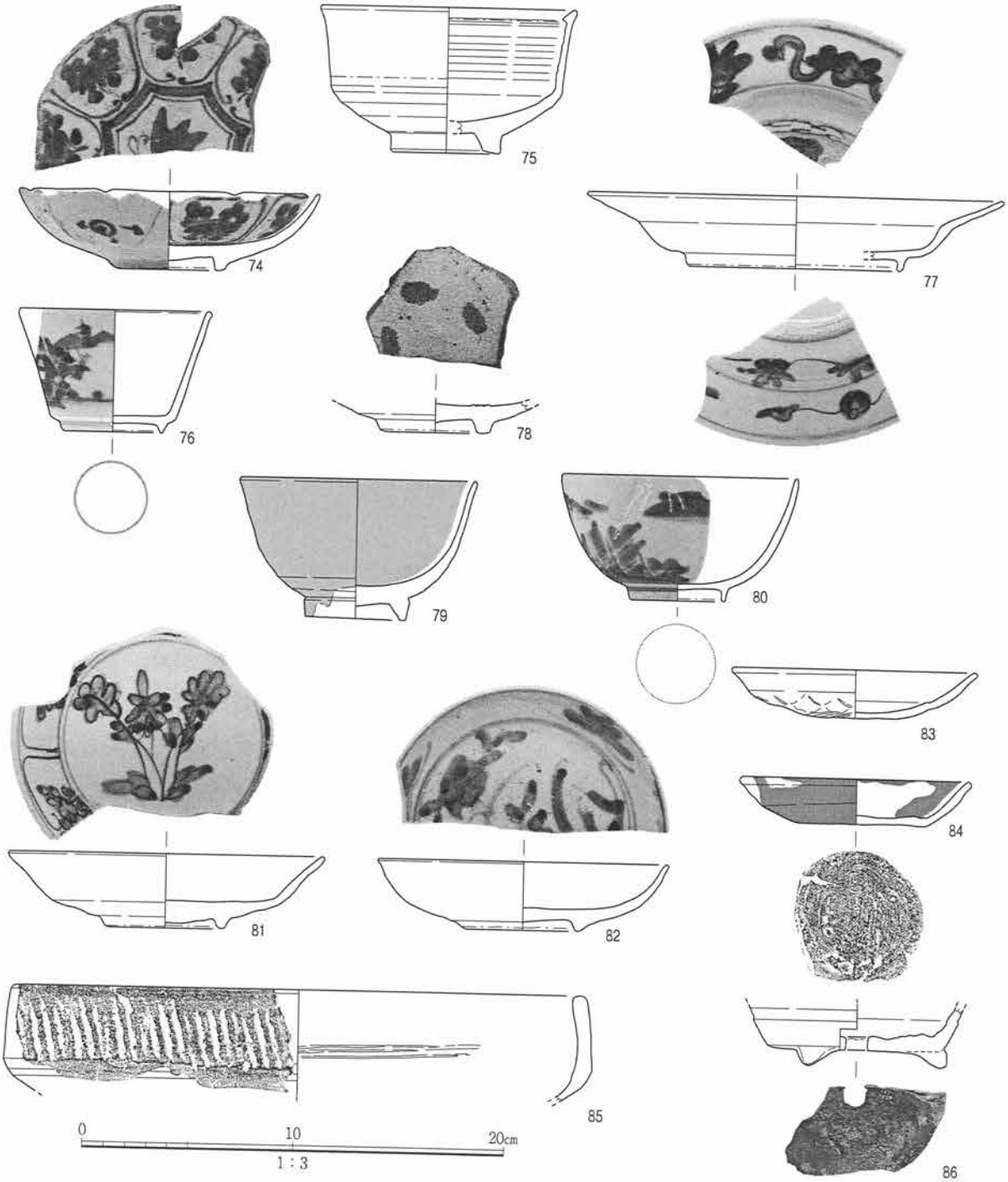


図14　17世紀中～後葉の遺構等出土遺物
炉59(74・75)、SK66(76)、SK69(77)、SK88(78)、SK89(79～85)、炉59のベース土(86)

紀前半の例で、輸入品としても希少な例といえる。

SK66　中国産磁器・肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・備前焼・瓦質土器・土師器・土人形・瓦・骨・貝・金属が出土した。76は肥前磁器染付の猪口で、低い高台を有する。

SK69　瓦を多く捨てた土壙である。このほか中国産磁器・備前焼・瀬戸美濃焼・土師器が出土した。77は中国産青花皿で、口縁部が外折して開く。高台には砂が付着する。遺構の時期に遡る17世紀前葉のものである。

SK88　豊臣～徳川初期に遡る朝鮮半島産白磁皿78のほか、肥前磁器・肥前陶器・備前焼・土師器・丹波焼・瓦・金属製品が出土した。

SK89　タイ産陶器・肥前磁器・肥前陶器・備前焼・丹波焼・軟質施釉陶器・瓦質土器・土師器・瓦・金属製品・骨・焼壁が出土した。79～82は肥前磁器である。79は青磁碗で、高台内は無釉である。80～82は染付である。80は碗である。81・82は皿で、高台径が小さく、古相を呈する。83～85は土師器である。83・84は皿である。84は底部外面に糸切痕がある。85は焙烙である。

以上、17世紀前～後葉の遺物には、国産陶磁器・土器類に加え、中国産陶磁器・朝鮮半島産磁器・東南アジア産陶器類が含まれており、徳川初期以前に輸入されたとみられる朝鮮半島産磁器の出土が目立つ。また、出土遺物のなかでも、中国南方産とみられる植木鉢86や、肥前陶器の素麺手茶碗と呼ばれる黒唐津の碗11、銅製の紅皿38は、この地に文人と呼ばれる階層で、比較的富裕な人間が居住していたことを示唆する資料である。このほかに、生業を示す可能性のある資料としては、SK17・55・60・80、炉59から砥石が出土しているが、出土比率を他の地点と比較しておらず、今後の検討を要する。

e）18世紀代の遺構（図15）

この時期の遺構は、前時期と比べて格段に少なくなる。特にゴミ穴とみられる土壙がほとんど見られなくなる。検出した遺構は井戸５基、土壙２基、およびネコの埋葬壙１基である。

井戸は調査区の北西端にSE116・125、調査区中央の北端にSE15、同南部にSE05、調査区南東部にSE14が存在する。いずれも完掘していないが、SE116のみ上部に瓦製の井戸側が遺存していた。SE116・125からは18世紀前葉、SE05・15からは18世紀中～後葉の遺物が出土している。また、SE125はSE116と隣接してこれより新しく掘られ、SE15は前時期のSE16と一部重複しており、これらは同じ位置で掘り直され継続して使用されたものと考えられる。さらに、SE14は幕末から近代にかけて使用されたSE140と隣接している。こうした井戸の配置と変遷から、調査区の東西で南側の道路に面した別個の敷地があり、西側では敷地奥に井戸が作られてSE116→SE125と変遷し、西側では前時期から継続して敷地奥にSE15が掘られたのち、南側へ移動しSE05が掘られ、その後、東側のSE14へ移動したと考えられる。

土壙は調査区西部の北端でSK93、同南端でSK25を検出し、SK93と重複してネコの埋葬壙SK100を検出した。SK93は18世紀前葉の土器・陶磁器のほか、魚骨が多く出土した。前時期から続くゴミ穴域の一角にあり、18世紀前葉までこのエリアがゴミ捨て場となる空閑地であったと考えられる。SK100は素掘りの小規模な竪穴を掘ってネコを埋葬したもので、検出中に一部破壊してしまったがほぼ全身骨格が残っており、左の前・後足を投げ出したようにうつ伏せて、丸まった状態で埋葬され

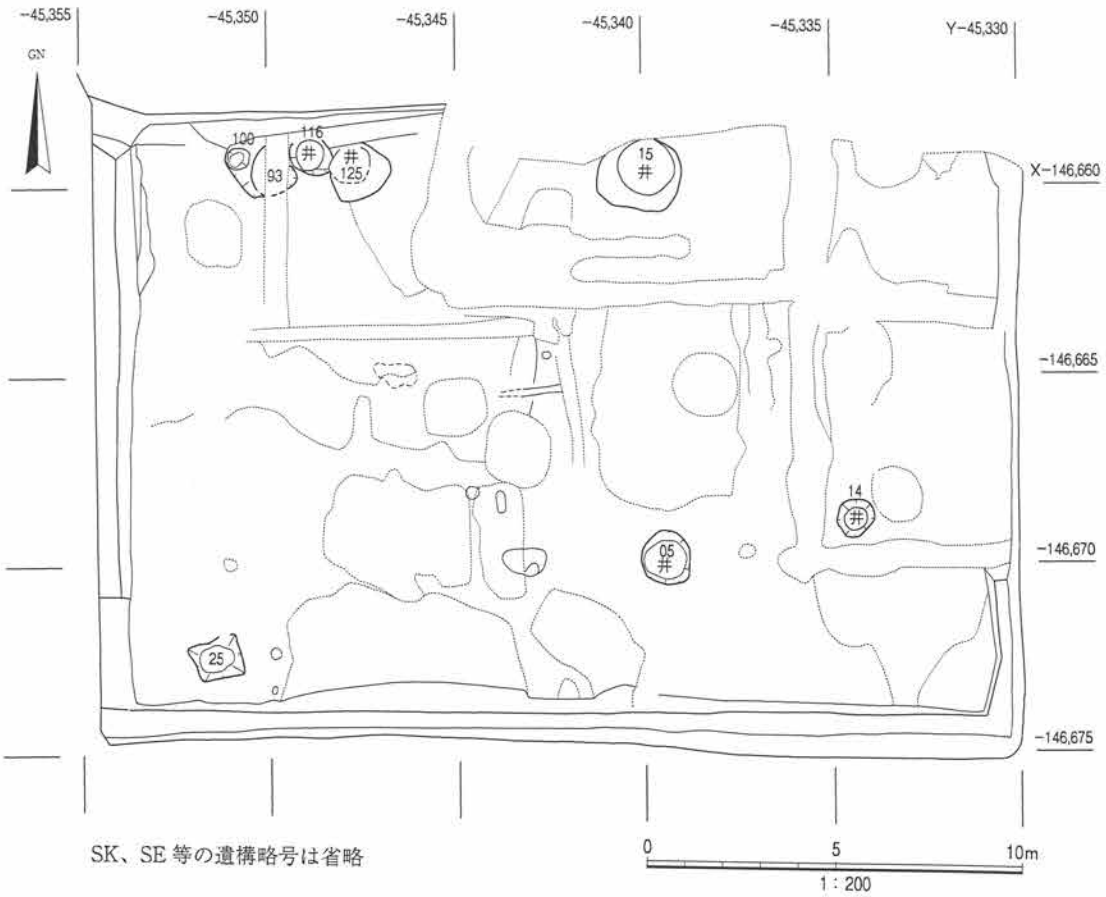


図15　18世紀代の遺構平面図

ていた(図16)。SK93の上から掘られており、またSK93とほぼ同時期の遺物が出土するSE116が隣接することから、18世紀前葉のなかで、それまでゴミ捨て場として使われていた空閑地にネコを埋葬し、ほどなくして井戸が掘られた、という変遷を経たと考えられる。SK25は1辺1m前後の方形の浅い竪穴で、埋土中に細かな焼土塊を多く含み、礎石に使用されたとみられる平石を廃棄していた。

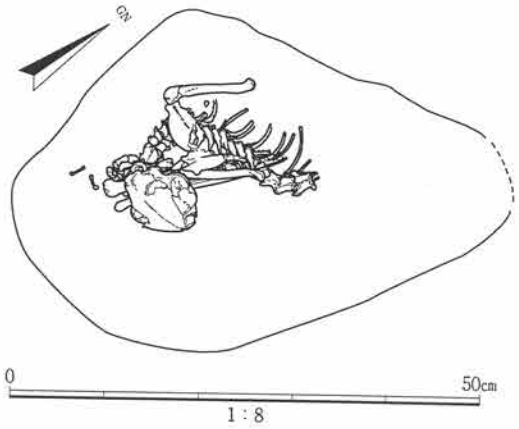


図16　SK100平面図

f)18世紀代の遺構出土遺物(図17・18)

18世紀前葉と18世紀中～後葉の2時期に分けて報告する。18世紀前葉の遺構出土遺物は以下のとおりである(図16)。

SK116　肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・丹波焼・備前焼・軟質施釉陶器・土師器・瓦・瓦製円盤・土人形・金属製品・砥石・骨が出土した。87は肥前磁器の染付で香炉であろう。88～94は肥前磁器の染付である。88～92は碗で、92以外はコンニャク印判を施す。93は鉢である。94は蓋物である。95は肥前陶胎染付の碗である。96・97は肥前陶器で、刷毛目文を施す碗である。98は瀬戸美濃焼の鬢水入れである。99は丹波焼の甕である。

SK93　中国産磁器・タイ産陶器・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・瓦質土器・土師器・

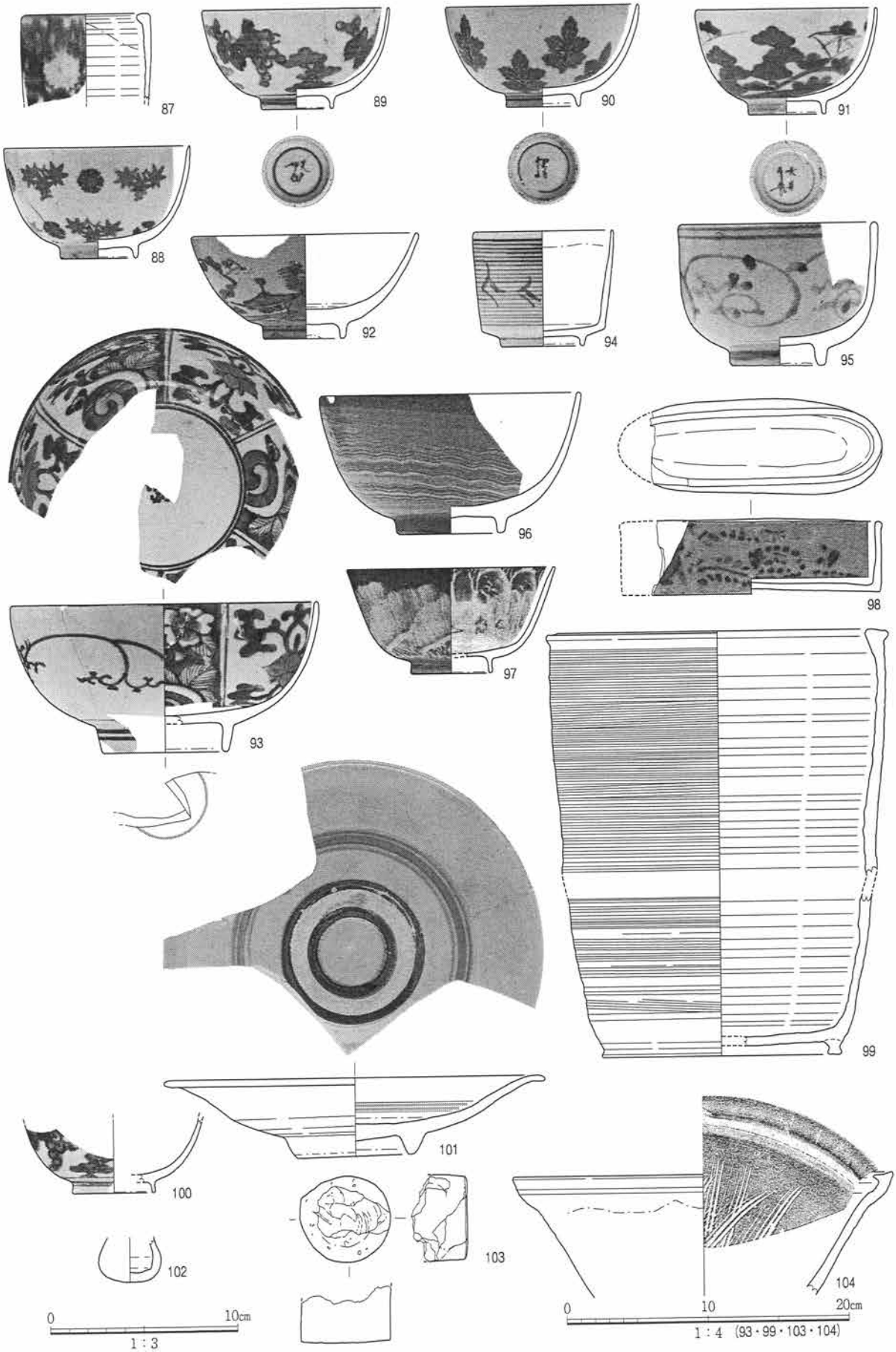


図17　18世紀代の遺構出土遺物
SK116(87～99)、SK93(100～104)

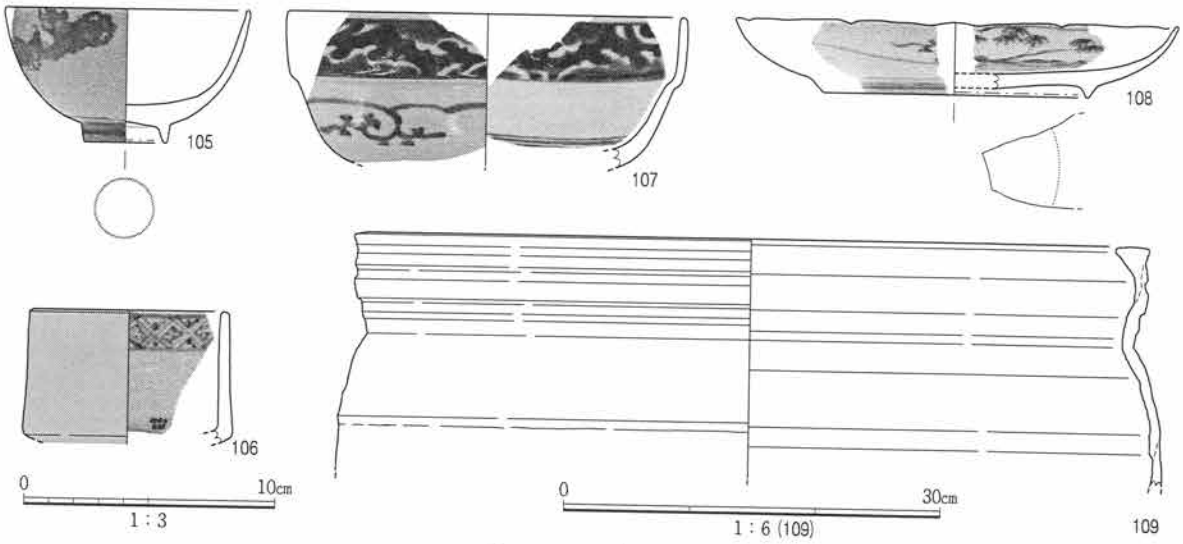


図18　SK05出土遺物

土製品・瓦・銭・鉱滓・軽石・砥石・貝・骨が出土した。100は肥前磁器の染付碗で、コンニャク印判による施文を有する。101は肥前磁器の青磁皿で、鉄絵と呉須で圏線を描く。102はつぼつぼと呼称される土製品である。103は用途不明の土製品で、円柱状を呈し、被熱している。104は17世紀前半に遡る肥前陶器の擂鉢である。

18世紀中～後葉の遺構出土遺物は以下のとおりである(図18)。

SK05 肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・関西系陶器・土師器・瓦・土製品が出土した。105～108は肥前磁器の染付である。105は外面にコンニャク印判による施文を有する碗である。106は青磁染付の筒茶碗である。107は鉢である。108は輪花皿である。109は丹波焼甕で、便槽として使用したものである。

g) 19世紀以降の遺構(図19)

SE140～143からは近代の遺物が出土するため、調査対象外としたが、調査区の敷地割を復元する際の参考になるため、報告する。SE140は調査区の南東部、SE141は中央東寄り、SE142は中央西寄り、SE143は北西部にそれぞれ位置する。SE141～143の井戸側はコンクリート製の近代になってからの井戸で、SE140は井戸側に瓦を使用していることから幕末から使用されていた可能性がある。また、SE141・142は井戸内を焼土や炭で埋めており、大阪空襲の際に廃絶した可能性がある。

図19には、1911(明治44)年の大阪地籍地図に示された敷地の境界を示しており、この当時は調査区域が東西２つの敷地に分かれており、この区画は先行する1890年の大阪詳細図でも認めることができる。上記の井戸はそれぞれの屋敷地に伴うもので、近代になってそれぞれ敷地内で場所を変えて掘りなおされたとみることができる。井戸の配置と変遷から、近代の敷地割は18世紀代まで遡る可能性があろう。

3)出土動物遺存体

i)概要

当調査では、近世の多数の土壙や井戸から動物遺存体が出土している。今回報告するのは、17世紀前～中葉のSK18・43・52、17世紀中葉～後葉のSK44・66、18世紀前葉のSK93・100の７基の土壙

図19　19世紀以降の遺構平面図

から出土した動物遺存体である。同定した資料の大部分は魚類であり、哺乳類と鳥類が少量含まれるほか、ネコの埋葬がある。

ⅱ)時期別の出土状況

a)17世紀前～中葉

SK18　魚類42点、哺乳類1点、計43点が出土している。マダイが最も多く、前頭骨3点、椎骨、歯骨(左)、舌顎骨(左)が2点ずつなど、計17点が出土している。マダイの前頭骨はいずれも切断されている。次にマダイを含むタイ科が多く、顎骨から遊離した歯など5点が出土している。これらタイ科に続くのはカツオであり、椎骨2点など計4点が出土している。これらの他、コチ科、アジ科、アマダイ属、ソウダガツオ属、マグロ属が2点ずつ、ハモ属、ナマズ属、ギギ科、ボラ科、サバ属、ウシノシタ科が1点ずつ出土している。マグロ属は1mを越える大型個体である。ハモ属の椎骨は被熱して白色を呈する。サバ属やアジ科の椎骨1点ずつは体長20cmに満たない小型個体が含まれる。

哺乳類は、ネズミ科の寛骨(右)1点が出土している。

SK43　魚類のみが出土しており、27点が出土している。シイラが最も多く、椎骨、角骨(左1右1)、方骨(左1右1)2点ずつなど、計8点が出土している。次にカツオが多く、椎骨6点など、計7点が出土している。次にボラ科が多く、椎骨6点が出土している。いずれも体長20cm以下と推定される小型個体である。これらの他、ニシン科3点、ハモ属2点、ブリ属1点が出土している。

SK52　魚類が653点、両生類が1点、鳥類2点、哺乳類が1点、計657点が出土している。コチ科

表1　種目名

脊椎動物門　Vertebrata
硬骨魚綱　Osteichthyes
ウナギ目　Anguilliformes
ハモ科　Muraenesocidae
ハモ属の一種　Muraenesox sp.
ニシン目　Cluperiformes
ニシン科　Clupeidae
ニシン科の一種　Clupeidae gen. et sp. indet.
ナマズ目　Siluriformes
ナマズ科　Siluridae
ナマズ属の一種　Silurus sp.
ギギ科　Bagridae
ギギ科の一種　Bagridae gen. et sp. indet.
ボラ目　Mugiliformes
ボラ科　Mugilidae
ボラ科の一種　Mugilidae gen. et sp. indet.
カサゴ目　Scorpaeniformes
コチ科　Platycephalidae
コチ科の一種　Platycephalidae gen. et sp. indet.
スズキ目　Percidae
アマダイ科　Malacanthidae
アマダイ属の一種　Branchiostegus sp.
シイラ科　Coryphaenidae
シイラ　Coyphaena hippurus
アジ科　Carangiae
ブリ属の一種　Seriola sp.
アジ科の一種　Carangiae gen. et sp. indet.
タイ科　Sparidae
マダイ　Pagrus major
タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet.
サバ科　Scombridae
サバ属の一種　Scomber sp.
ソウダガツオ属　Auxis sp.
カツオ　Katsuwonus pelamis
マグロ属の一種　Thunnus sp.
カレイ目　Pleuronectiformes
ヒラメ科　Bothidae
ヒラメ　Paralichthys olivaceus
ウシノシタ科　Cynoglossidae
ウシノシタ科の一種　Cynoglossidae, gen.et sp. indet.
両生綱　Amphibia
無尾目　Anura
無尾目の一種　Anura fam., gen. et sp. indet.
鳥綱　Aves
キジ目　Galliformes
キジ科　Phasianidae
ニワトリ　Gullus domesticus
哺乳綱　Mammalia
齧歯目　Rodentia
ネズミ科　Muridae
ネズミ科の一種　Muridae gen. et sp. indet.

が最も多く、前鰓蓋骨(左31右28) 59点、角骨(左26右28) 54点、歯骨(左25右26) 51点など、計567点出土している。椎骨(第1腹椎)のうち8点には切傷や切断の痕跡が見られる。次にマダイが多く、前頭骨5点、上後頭骨4点、歯骨(左2右1)と前鰓蓋骨(左1右2)が3点ずつなど、計44点が出土している。前頭骨、上後頭骨、上擬鎖骨の1点ずつに切断された痕跡が見られる。次にサバ属が多く、椎骨9点、前上顎骨(右)と角舌骨(左)が1点ずつ、計11点が出土している。これらの他、ボラ科8点、ハモ属とタイ科6点、ブリ属5点、ニシン科とマグロ属が3点ずつ出土している。

魚類の他には、両生類のカエル類の寛骨(右)が1点、哺乳類のネズミ科の遊離歯(上顎切歯、左)が1点出土している、その他に、種不明の鳥類の脛足根骨、趾骨が1点ずつ出土している。

b) 17世紀中～後葉

SK44　魚類22点、鳥類1点、哺乳類2点、計25点が出土している。マダイが最も多く、歯骨(左1右1) 2点など、計5点が出土している。次にアジ科が多く、椎骨3点など、計4点が出土しており、体長20cm以下の小型個体を含む。これらの他、シイラ、タイ科、サバ属が3点ずつ、ニシン科、ハモ属、ブリ属、ヒラメが1点ずつ出土している。

魚類の他には、鳥類のニワトリの烏口骨(左)が1点、哺乳類のコウベモグラの上顎骨と下顎骨(左)が1点ずつ、計2点が出土している。ニワトリの烏口骨の最大長(GL)は69.1mm、コウベモグラの下顎骨の最大長は27.0mmを測る。

表2　SK18出土の魚類遺存体集計表

	主上顎骨		前上顎骨		歯骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ハモ属															1		1
ナマズ属																胸鰭棘(右1)	1
ギギ科																擬鎖骨(左1)	1
コチ科				1												副蝶形骨1	2
ボラ科												1					1
アジ科															3		2
マダイ			1		2	1									2	※1	17
タイ科															1	歯3擬鎖骨(左)1	5
アマダイ属	1		1														2
サバ属															1		1
カツオ		1													2	舌顎骨(右1)	4
ソウダガツオ属															2		2
マグロ属			1												1		2
ウシノシタ科															1		1
計																	42

※1：上後頭骨1前頭骨3基後頭骨1口蓋骨(右1)舌顎骨(左2)間鰓蓋骨(右1)上擬鎖骨(左1)基鰭骨(左1)

表3　SK43出土の魚類遺存体集計表

	主上顎骨		前上顎骨		歯骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ニシン科															3		3
ハモ属															2		2
ボラ科															6		6
ブリ属									1								1
シイラ				1	1		1	1	1	1					2		8
カツオ															6	尾骨1	7
計																	27

表4　SK52出土の魚類遺存体集計表

	主上顎骨		前上顎骨		歯骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ニシン科															3		3
ハモ属															6		6
ボラ科									1				1	1	4	下鰓蓋骨(左1)	8
コチ科	24	19	23	23	25	26	26	28	24	20	31	28	19	11	13	※1	567
ブリ属					1	1							1			間鰓蓋骨(左1) 角舌骨+上舌骨(右1)	5
マダイ	1	1	1	1	2	1	1	1		2	1	2	1		8	※2	44
タイ科			1								1				3	角舌骨(左1)	6
サバ属				1											9	角舌骨(左1)	11
マグロ属						1									2		3
計																	653

※1：前頭骨(左15右9)鋤骨25副蝶形骨13基後頭骨23角舌骨(左22右18)上舌骨(左13右10)口蓋骨(左20右18)擬鎖骨(左1右8)舌顎骨(左18右14)

※2：前頭骨5上後頭骨4鋤骨1副蝶形骨1基後頭骨1角舌骨(左1)尾舌骨1口蓋骨(左1右1)擬鎖骨(左1)上擬鎖骨(左1)舌顎骨(左2右1)

表5　SK44出土の魚類遺存体集計表

	主上顎骨		前上顎骨		歯骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ニシン科															1		1
ハモ属																前上顎骨-篩骨-鋤骨板1	1
ブリ属															1		1
アジ科															3	擬鎖骨(左1)	4
シイラ															3		3
マダイ					1	1				1			1			擬鎖骨(左1)	5
タイ科															3		3
サバ属													1		1	鋤骨1	3
ヒラメ															1		1
計																	22

表6　SK66出土の魚類遺存体集計表

	主上顎骨		前上顎骨		歯骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ハモ属									1								1
ナマズ属															1	擬鎖骨(右1)	2
タラ科		1															1
マダイ			1								1						2
カツオ															1		1
計																	7

表7　SK93出土の魚類遺存体集計表

	主上顎骨		前上顎骨		歯骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
ナマズ属																胸鰭棘(左1)	1
ボラ科														1		下鰓蓋骨(右1)	2
マダイ	2	2	3	3	4	2	3	3	2		3	2	5	5	21	※1	102
タイ科													3	2		上擬鎖骨(右1)	6
サバ属															4		4
カツオ															3		3
マグロ属															1		1
計																	119

※1：前頭骨6上後頭骨4副蝶形骨1基後頭骨1後側頭骨(右2)口蓋骨(左3右2)肩甲骨(左2右1)擬鎖骨(左3)上擬鎖骨(左1右3)下鰓蓋骨(左2右2)間鰓蓋骨(左4右1)舌顎骨(左3右1)

SK66　魚類のみ、7点が出土している。ナマズ属とマダイが2点ずつ、ハモ属、タラ科、カツオが1点ずつ出土している。

c) 18世紀前葉

SK100　ネコの頭蓋骨、下顎骨、椎骨、主要な長管骨、指骨など、ほぼ全身骨格が出土しているが、尾椎、左の踵骨、距骨、手根骨、足根骨の一部は取り上げられていない。うつ伏せで首を体側の左に向けて、背を丸めた状態で見つかっており、埋葬個体と考えられる。雌雄は不明であるが、歯が生え揃った6ヶ月以上の成体である。また、上顎犬歯が磨滅しているほか、左

表8　ネコ下顎骨計測値

	左	右
1	-	61.1
2	-	50.4
3	-	53.0
4	-	50.9
5	19.6	19.3
7	7.5	7.1
8	-	27.6
9	11.5	11.6
10	9.5	9.7

計測値はmm、Driesch(1976)に倣う。

表9　ネコ臼歯計測値

		P3		P4		M1	
		左	右	左	右	左	右
上顎	歯冠長	6.1	6.3	9.9	9.4		
	歯冠幅	3.5	3.4	5.8	5.5		
下顎	歯冠長	5.0	5.1	6.61	6.1	7.1	7.1
	歯冠幅	2.6	2.5	3.1	3.1	3.1	3.1

表10　ネコの四肢骨計測値

		左	右			左	右
肩甲骨	GLP	13.1	13.4	寛骨	LA	12.2	-
	SLC	12.9	12.5	大腿骨	GL	108.6	109.5
上腕骨	GL	97.8	-		Bp	20.3	20.3
	Bp	15.8	15.7		Bd	18.1	18.3
	Bd	19.6	19.6		SD	8.5	-
	SD	7.1	7.4	脛骨	GL	112.6	-
橈骨	GL	92.3	92.9		Bp	19.6	20.1
	Bp	8.8	8.8		Bd	14.3	-
	Bd	12.5	12.6		SD	7.3	7.3
	SD	6.3	6.49	踵骨	GL	-	29.0
尺骨	GL	108.6	109.3		GB	-	13.4
	DPA	11.3	12.9	距骨	GL		15.6
	SDO	10.1	9.9				

の上腕骨には骨病変が見られ、骨体に棘状の突起がみられる。

SK93　魚類119点、哺乳類１点、計120点が出土している。魚類は、マダイが最も多く、椎骨が21点、主鰓蓋骨(左５右５)10点、前上顎骨(左３右３)と歯骨(左４右２)が６点ずつなど、計102点が出土している。主鰓蓋骨(左３右５)8点、椎骨５点、前頭骨４点などに切断の痕跡が見られる。次にマダイを含むタイ科が多く、主鰓蓋骨(左３右２)5点、擬鎖骨(右)１点、計６点が出土している。次にサバ属が多く、椎骨が４点出土している。これらの他、カツオ３点、ボラ科２点、ナマズ属とマグロ属１点が出土している。

種の同定には至らないが、小型哺乳類の椎骨１点も出土している。

iii) 魚類の利用

いずれの時期の遺構でも、淡水魚より海水魚が種類数、出土量ともに多く、海産物が多く利用されたと考えられる。出土した魚種は、従来の魚市場跡を含む大坂城下町跡の調査で出土しており、大阪湾や瀬戸内海などの近海で漁獲できるものが大部分である。それにカツオ、ソウダガツオ属、マグロ属など外洋性回遊魚は、太平洋や日本海側からの搬入されたものと考えられる。

特筆されるのは、SK52ではコチ科が破片数で90.2%を占め、最小個体数にして31個体を数え、特定の種類に集中した廃棄を示していることである。SK93ではマダイが85.7%と高比率を占めるが、マダイは骨が大きく、頑強なため、肉食動物の食害にあいにくいなどの理由から、大坂城下町跡の従来の調査でもマダイの比率が高い地点は珍しくない。それに対してSK52のようにコチ科の比率が高いことは稀である。また、コチ科の出土部位は前頭骨や鰓蓋骨などの頭部が多く、胴部の椎骨が極めて少ない。さらに、椎骨の大部分は切断された第１腹椎であり、頭部と胴部が切断されたことを示しており、切断した頭部だけをSK52に廃棄したのである。肉量の多い胴部は、当地で調理して残滓である椎骨は調査区外のゴミ穴に投棄したことや、当地から他所へ持ち出した可能性もある。短期間に廃棄されたものであるとすれば、コチ科だけで31個体分が消費されたことは一般的な家庭の食事とは考えがたく、17世紀前葉～中葉の当屋敷地において、同じ料理を大量に準備する宴会料理、あるいは料理屋があったことが想定される。

iv)まとめ

当調査で出土した動物遺存体の大部分は魚類であり、すべて食料残滓と考えられる(註4)。淡水魚は少数であり、近海物が多く、遠隔地からの搬入品も含まれる。SK52では、コチ科が大量に出土しており、一般家庭の食料残滓としては不自然な廃棄状況であり、17世紀前葉～中葉には、屋敷における宴会や、当地に料理屋が存在した可能性がある。また、18世紀前葉に埋葬されたネコの出土により、近世には庶民にも馴染みの動物となっており、当屋敷地で大切に飼育していたことを想起させる。

4)まとめ

今回の調査成果は以下のとおりである。

・基盤の海浜堆積層の観察・記録を行い、砂州の形成プロセスに関する情報を得ることができた。

・豊臣後期にさかのぼる明確な遺構は抽出できなかったが、第1b層下部の焼土層が大坂冬ノ陣の際のものと考えられることから、当地域での城下町の形成が豊臣後期に始まる可能性を指摘できる。

・17世紀以降、当地が継続して町屋として利用されていたことが判明した。後世の削平がひどく、建物の配置などは不明であるが、井戸や炉・ゴミ穴の配置から以下のような変遷が想定できる。まず、16世紀末～17世紀初頭には調査区の東西に別の屋敷地があり、17世紀前～後葉になると、調査区の中央に2基の炉を配し、広い敷地に変化したようである。また、18世紀になると調査区のほぼ中央を境に敷地が東西に分かれ、これが近代にまで引き継がれたと考えられる。

・17世紀前～後葉の遺物には、中国産陶磁器・朝鮮半島産磁器・東南アジア産陶器のほか、黒唐津の碗や銅製の紅皿などが含まれており、比較的裕福な階層の人間が居住していたことが推測できる。

・食料残渣とみられる海水魚を主体とした多くの動物遺存体が出土し、当地での魚消費の一端が明らかになった。特にSK52にはコチ科の頭部が大量に廃棄されており、同じ料理を大量に準備する料理が屋敷内で行われたことが指摘できる。また、ネコの埋葬例は、大坂城下町跡では初例であり、城下町での愛玩動物の普及を示す興味深い資料である。

註

(1)大阪市立自然史博物館学芸員中条武司氏に現地でご教示を得た。

(2)二枚貝の数は左右の判別を経ていない全体数である。

(3)小田原市教育委員会藤掛泰尚氏のご教示による。

(4)SK52およびSK93の魚類遺存体の同定は、東海大学部生の八木浩太朗の協力を得た。ここに謝意を表す。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「中央区南船場二丁目における埋蔵文化財発掘調査(OJ07－6)報告書」『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37－40

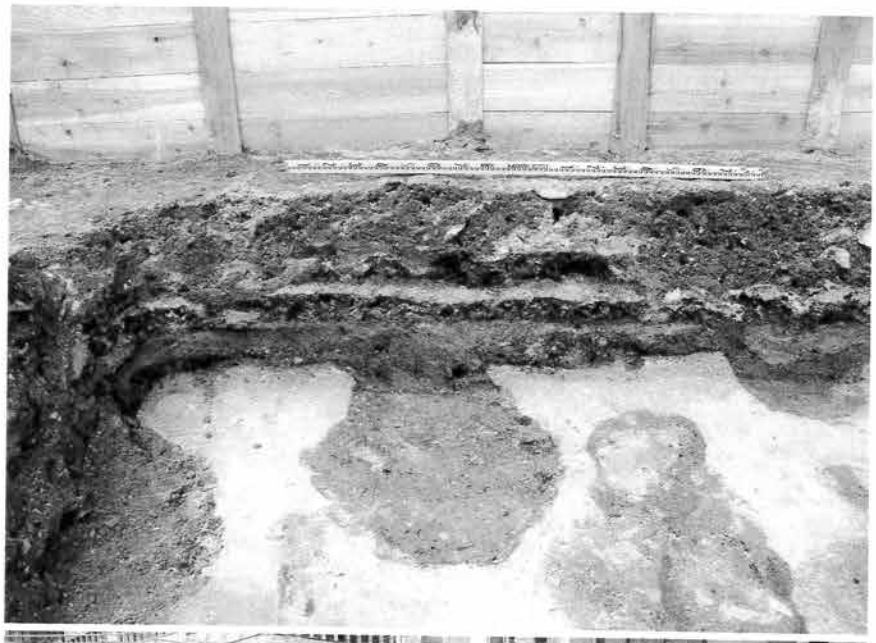
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城発掘調査(OS08－5)報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.183－198

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「南船場二丁目所在遺跡B地点発掘調査(OJ10－1)報告書」『大阪市内

埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.137－144
趙哲済2014、「難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚え書」公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』、pp.23－36
大阪文化財研究所2016、『中央区瓦町三丁目9･10における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ16－1)報告書』
市川創・丸山真史2016、「日本橋1丁目の骨細工」：大阪文化財研究所編『葦火』180号、pp4－5

図版一

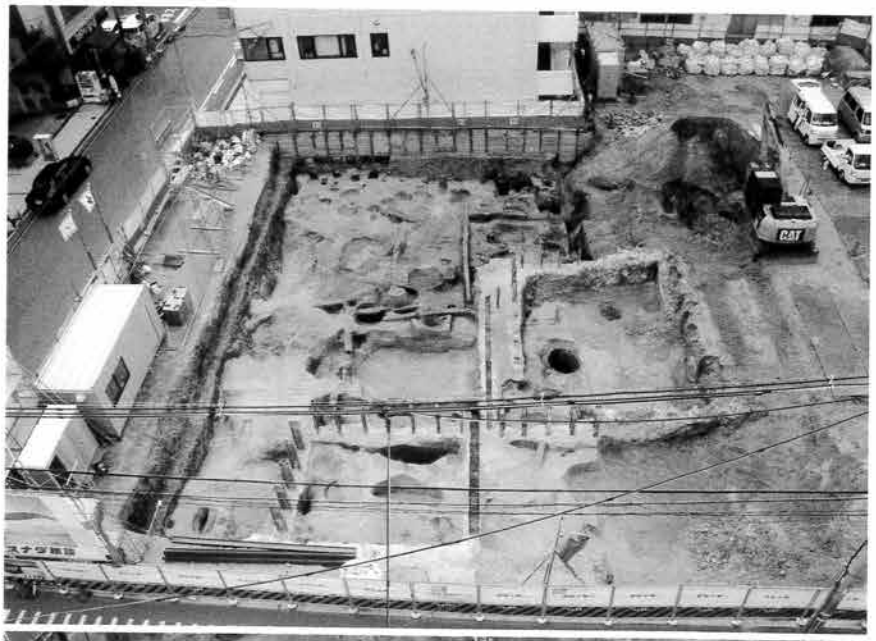
西壁地層断面
（東から）



南壁地層断面
（北西から）

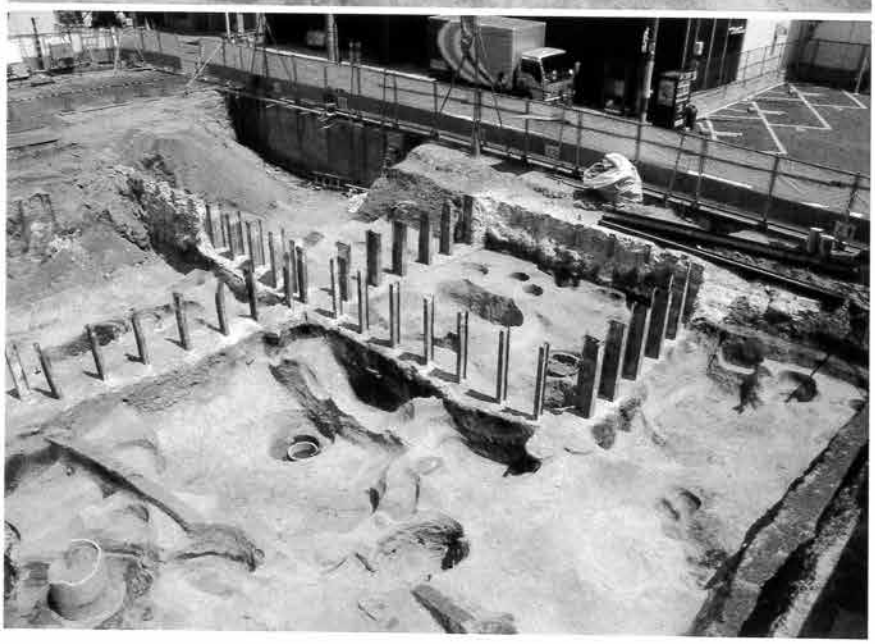
南壁地層断面下半
（北西から）

調査区全景
（東から）



調査区西半遺構検出状況
（南から）

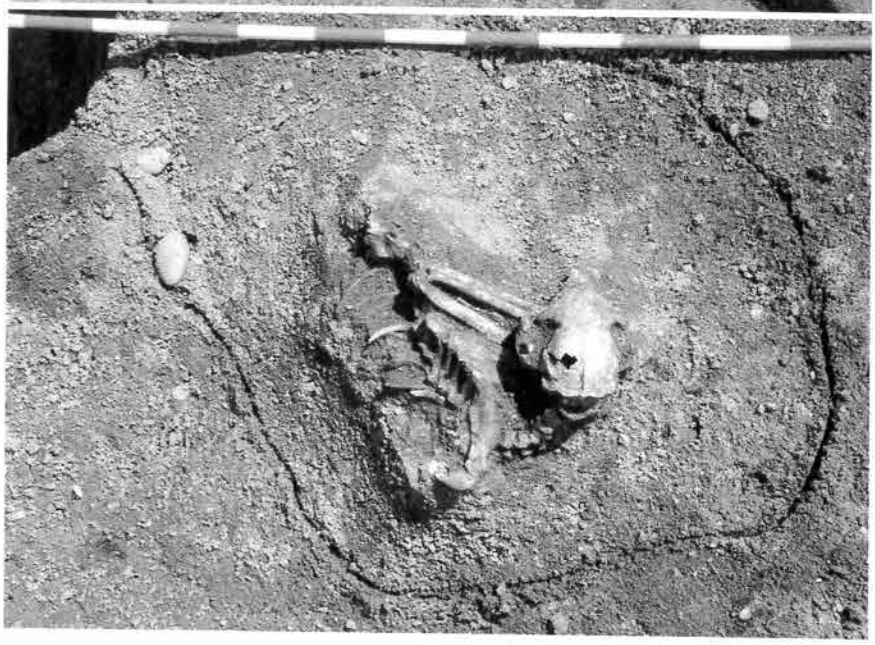
調査区東半遺構検出状況
（南西から）



炉10部分（西から）

炉59検出状況
（北東から）

SK100ネコ検出状況
（西から）



中央区本町橋31における建設工事に伴う

大坂城跡発掘調査(OS15－１)報告書

調査個所	大阪市中央区本町橋31
調査面積	42㎡
調査期間	平成27年4月21日～4月27日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、田中裕子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側縁辺の豊臣期大坂城惣構内西部に位置する。調査地の南は徳川期の西町奉行所跡が存在した場所で、大坂本願寺期の町屋跡や徳川期の浜の御蔵、1724年の享保の大火(妙知焼)で焼けた御塩噌蔵・奉行所跡の遺構が検出されている[大阪府教育委員会1986]。また、東側のOS08－5次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]では縄文土器や弥生土器が出土しており、古代～中世の遺構も確認されているほか、東隣のOS85－36次調査[大阪市文化財協会2003a]や南隣のOS07－15・16次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]をはじめとする周辺の調査地において、大坂町中屋敷替えに伴うとみられる盛土、大坂夏ノ陣の焼土層、豊臣期や徳川期の遺構が検出されている(図1)。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.4m以下の深さで、本格的な発掘調査を要する近世以前と考えられる遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査はこうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に実施された。

調査区は敷地東半の東西7m、南北6mの42㎡で設置した(図2)。2015年4月21日より着手し、後述の第2層までの盛土を重機で除去したのち、近世以下の各層を人力で調査した。遺構や遺物の検出を行い、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、調査区西北部に深掘トレンチを設置し地層の確認を行った。4月27日には現地における作業を完了し撤収した。

本報告で用いた水準地はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mと表記した。また、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

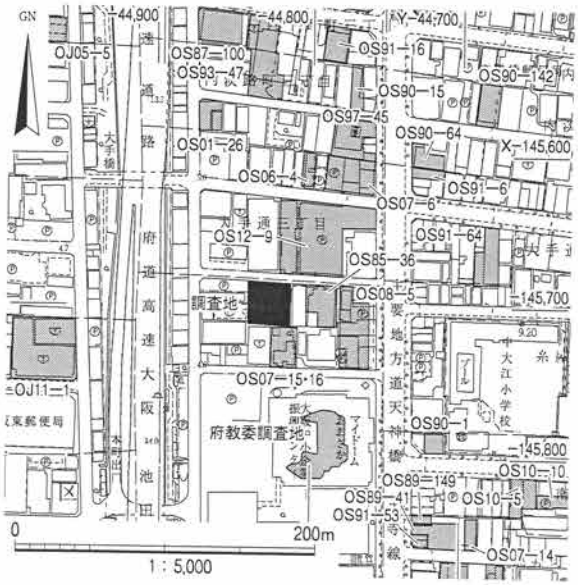


図1　調査地位置図

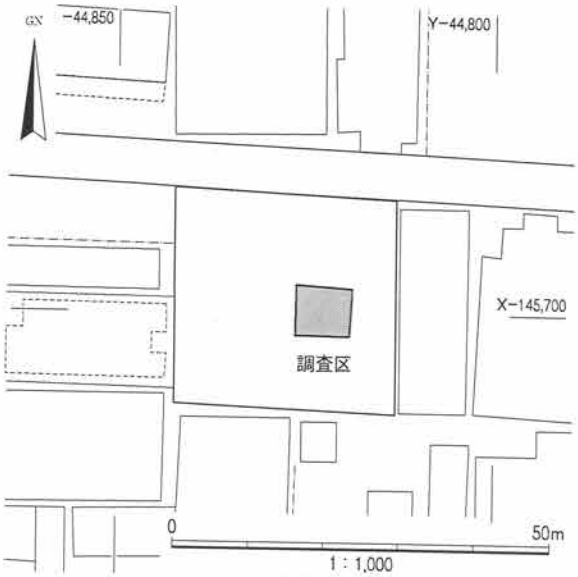


図2　調査区位置図

2)調査の成果

i)層序(図3・4)

調査地周辺の標高はTP+5.3mで、西側に位置する東横堀川に向かって低くなる。本調査区では現地表下－4m、TP+1.2mまでの地層を観察し、第0～第8層に区分した(図3・4)。なお第7c層以下は調査区西北部に設置した深掘トレンチで確認した。

第0層：現代の盛土層である。下部に第二次世界大戦に由来する焼土層がある。

第1層：近代の盛土層である。第1a・1b層に区分できる。第1a層は、灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂と黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂の互層で、層厚は20～40cmである。第1b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂からなり、層厚25～40cmである。

第2層：近世の盛土層である。層厚は15cmで、にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質中粒砂からなる。本層まで重機で除去した。

第3層：近世の盛土層で、第3a・3b層に細分される。第3a層は層厚10～16cm、浅黄色(2.5Y7/4)細礫質中粒砂からなる。第3a層上部は部分的に焼土が拡がり、火災の罹災面である。焼土層をはずすと17世紀後葉～18世紀初頭の遺構が検出された。この火災は時期的にみて、享保9(1724)年の妙知焼の可能性がある。第3b層は層厚8～28cm、オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂からなる。

第4層：黄橙色(10YR7/8)細粒砂からなる近世の盛土層で、層厚5～35cmである。肥前磁器染付碗などが出土し、17世紀中～後葉に属する。

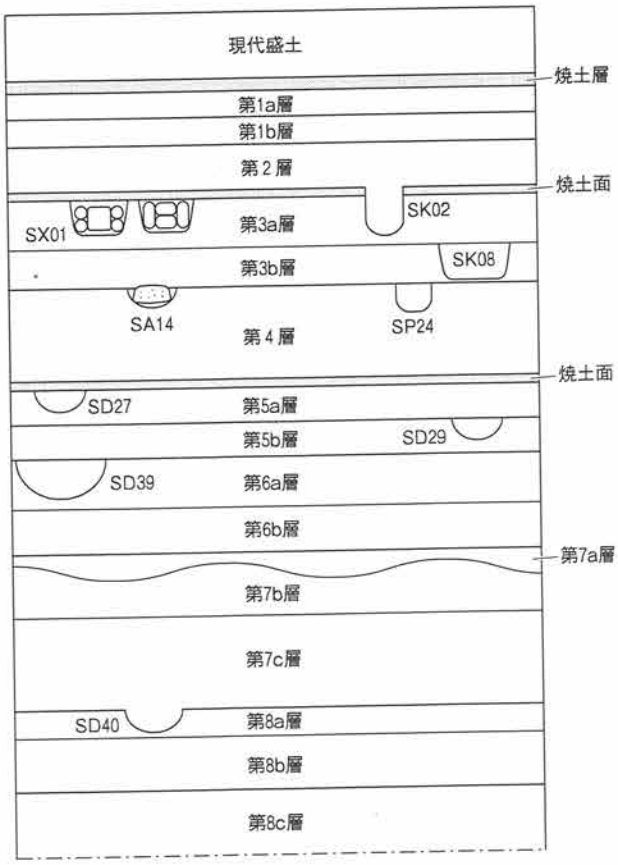
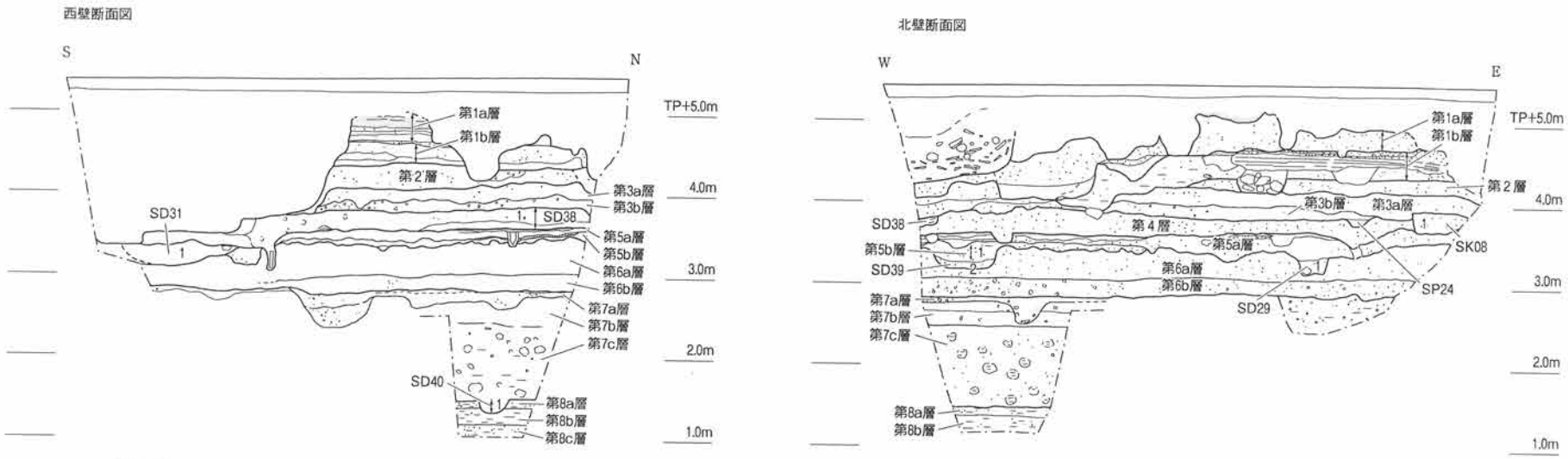


図3　地層と遺構の関係図

第5層：第5a・5b層に細分される盛土層である。第5a層は層厚8～22cm、灰オリーブ色(5Y6/2)細粒砂からなり、上部は焼土・炭層が拡がる。焼土面から被熱した肥前陶器皿26や平瓦28が出土した。下部上面は大坂夏ノ陣の罹災面である。第5b層は層厚4～10cm、黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂からなり、上部は一部炭層が確認できる。部分的に拡がるもので、火災などの可能性がある。

第6層：豊臣後期に属する盛土層であり、第6a・6b層に細分される。第6a層は層厚10～50cm、黄橙色(10YR7/8)細粒砂からなる。第6b層は層厚16～20cm、黄褐色(10YR5/6)中粒砂からなる。瀬戸美濃焼天目碗22、太平通寶23などが出土した。

第7層：豊臣前期に属する盛土層である。第7a～7c層に区分できる。第7a層は、中礫



[SK08]
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂(炭・焼土含む)

[SD29]
1：黄褐色(10YR5/6)細粒砂

[SD31]
1：黄褐色(2.5Y5/6)シルト質中粒砂

[SD38]
1：灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂(シルト偽礫含む)

[SD40]
1：灰オリーブ色(5Y6/2)中粒砂質シルト

[SD39]
1：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂(機能時堆積層)

0　5m
1：80

図4　西・北壁断面図

を含むオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極粗粒～中粒砂からなり、層厚6～35cmで、不整形の落込み状に拡がる。下層との境界も不明瞭であり、人為的なものではなく水溜りか倒木痕跡の可能性がある。第7b層は中礫を含む灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト質極粗粒～中粒砂からなり、層厚30cmである。本層の上部より瀬戸美濃焼天目碗21が出土した。第7c層はシルト偽礫含む灰オリーブ色(5Y6/2)中粒砂質シルトからなり、層厚100cmである。出土遺物はない。

第8層：大坂本願寺期以前に属する作土～自然堆積層である。第8a～8c層に分けることができる。第8a層は層厚10cmで、黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトからなる作土層である。第8b層以下の自然堆積層を耕起して生成されている。古代の土師器甕、常滑焼の破片、備前焼擂鉢などが出土した。第8b層は層厚20cm、暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質粘土からなる自然堆積層である。遺物の出土はない。第8c層は層厚15cm以上、オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質粘土からなる自然堆積層である。

ii)遺構と遺物

a.大坂本願寺期以前の遺構(図4)

第8a層上面で溝を検出した。

SD40　幅0.6m、深さ0.2mの東西方向と思われる溝である。灰オリーブ色(5Y6/2)中粒砂質シルト(第7c層)で埋まる。調査区西北部に設置した深掘トレンチの西壁断面で確認した。耕作に伴う溝とみられる。常滑焼や備前焼擂鉢の破片が出土しており、大坂本願寺期に属するものであろう。

b.豊臣期の遺構(図5)

第5・6層に関わって豊臣後期の遺構を確認した。

・第6層上面の遺構

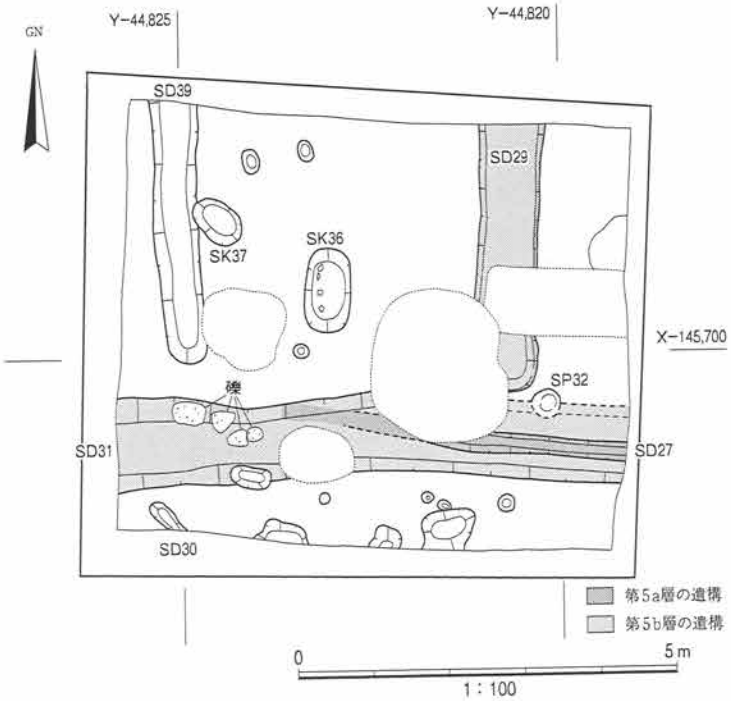


図5　豊臣後期の遺構平面図

第6層上面の遺構はSD39・30やSK36・37、SP32などがある。

SD39　幅0.6m、長さ3.5m以上、深さ0.3mの南北方向の溝である。北に向かって深くなっている。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂で炭が混じる。泥と砂の水漬きの堆積で、機能時堆積層とみられる。上位は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂で第5b層に相当する。遺物の出土はない。

SK36　長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.3mの楕円形を呈し、オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂の瓦廃棄土壙である。土師器皿・

丸瓦・平瓦が出土した。

SK37　長軸0.7m、短軸0.45m、深さ0.2mの楕円形の土壙である。炭混り暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂で埋められていた。肥前陶器皿のほか、土師器皿・丸瓦・平瓦が出土した。

SP32　直径0.4m、深さ0.2mの小穴である。埋土は白色シルト質偽礫混りオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂で、平瓦が出土した。同様の埋土で埋まる小穴が複数確認されたが、柱列や建物としては組み合わなかった。不明瞭だがSD31を壊している可能性もある。

・第5b層上面の遺構

第5b層上面の遺構は、SD29のほかその可能性がある遺構としてSD31がある。

SD31　幅1.1m、長さ7.0m以上、深さ0.2mの東西方向の溝である。埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質中粒砂からなり、部分的に鉄分が析出する。本来もう少し深い溝であったが削平され、底の部分のみが検出されたと考えられる。溝内に被熱した礫が点在するほかは、遺物の出土はなかった。

SD29　幅0.9m、長さ3.5m以上、深さ0.2mの南北方向の溝である。北に向かって深くなる。黄褐色(10YR5/6)細粒砂で埋められており、備前焼擂鉢のほか、豊臣期の大量の瓦が出土した。

・第5a層の遺構

第5a層上部は大坂夏ノ陣焼土層であった。焼土層をはずして検出された遺構はSD27のみである。幅0.3m、長さ3.5m以上、深さ0.1mの東西方向の浅い溝である。東に向かって深くなっている。東部ではSD31を切っている。埋土は炭混り暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトからなる。出土遺物は備前焼甕、丸瓦・平瓦である。

c.徳川期の遺構(図6～9)

第3a・3b・4層上面で徳川期の遺構を検出した。

・第4層上面の遺構

第4層上面の遺構は17世紀中～後葉に属する。

SA14　東西方向に礎石が並ぶ。礎石は地面を掘りくぼめ据え付けてあった。一部が近代の井戸によって壊されているが、柱間は西から2.4m、1.3mである。北側にも礎石とみられる礫3点が確認できたが、SA14とした礎石列とは組み合わなかった。また、さらに南側にはこの柱列と並行して、SP15・16が並ぶ。いずれも直径0.2mで、SP15は深さ0.2m、礫を埋めていた。SP16からは肥前陶器碗が出土している。

SD38　幅0.8m以上、長さ6.0m以上、深さ0.3mである。埋土はシルト偽礫混り灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂で、西側の上端は未確認で、西へ拡がる落込みの可能性もある。

SK09　東西1.0m、南北1.0m、深さ0.5mの方形の土壙である。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂からなり、土師器皿10点以上が廃棄されていた。そのうち2点(1・2)を図示した。ともに口径は9.8～10cmで、口縁部の内外面をヨコナデしており、底部との境に段をなす。体部外面はユビオサエである。17世紀中～後葉に属する。

SK23　東西0.7m、南北0.8m、深さ0.3mのほぼ円形の土壙である。黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂で埋められていた。出土遺物は瓦質土器・丸瓦・鉄片である。

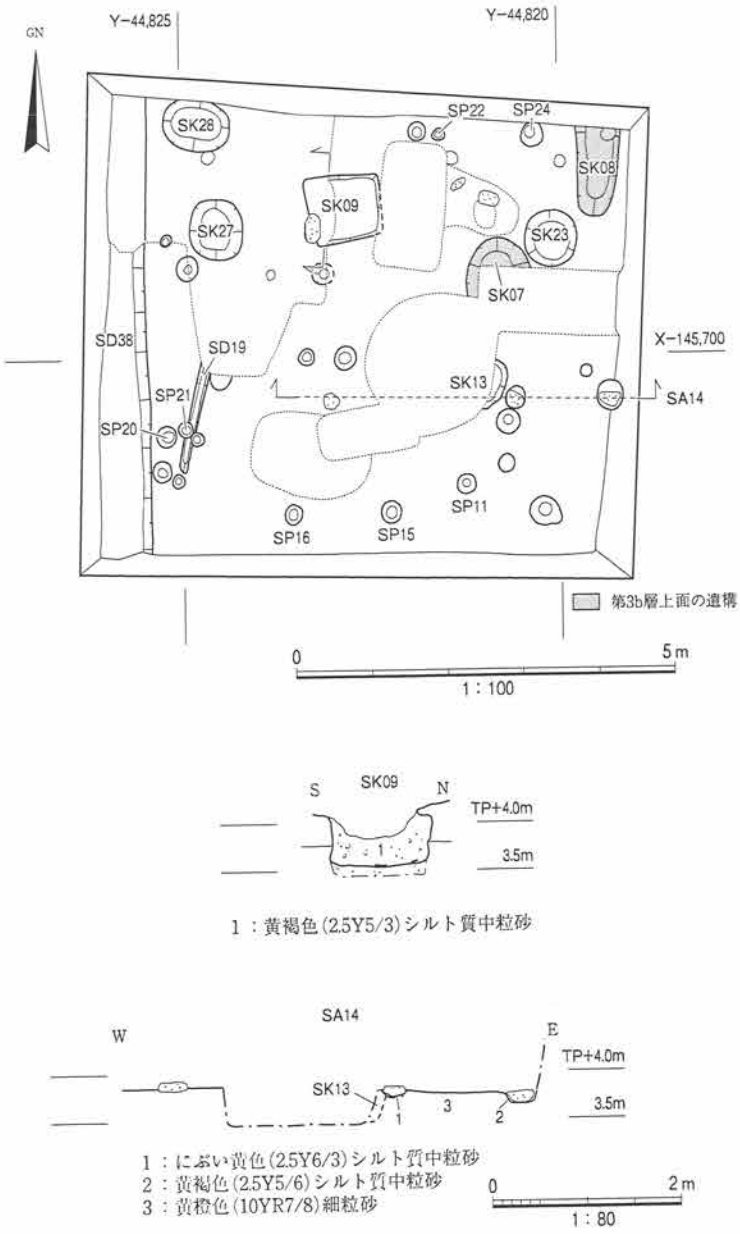


図6　徳川期(第3b・4層上面)の遺構平面・断面図

SK27　東西0.7m、南北0.8m、深さ0.3mの楕円形の土壙である。オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒砂で埋められていた。出土遺物は瀬戸美濃焼志野向付3のほか、土師器皿4、巻貝、鉄塊である。3は底部内面に目痕がある。4は口縁部に煤が付着する。これらの遺物は17世紀中葉頃に属する。

SK28　東西0.9m、南北0.7m、深さ0.2mの楕円形の土壙である。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒砂である。出土遺物は土師器皿、丸瓦・平瓦である。

柱穴は複数確認されたが、並ぶものとしては上記のSP15・16と東側の小穴のみであった。そのほかの組み合わせは確認できなかった。以下、主なものを述べる。

SP22　直径0.2m、深さ0.2m、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質中粒砂である。胎土目痕の残る肥前陶器皿や土師器皿、平瓦が出土した。

SP24　直径0.3m、深さ0.1m、埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂で、肥前陶器碗が出土した。

・第3b層上面の遺構

第3b層上面で検出したSK07・08はいずれも炭・焼土混り黄褐色シルト質細粒砂からなる。17世紀後葉頃に属するとみられる。

SK07　直径0.8m、深さ0.06mである。出土遺物には肥前白磁仏飯具や丹波焼壺のほか、土師器皿・火入類、丸瓦・平瓦がある。

SK08　東西0.6m、南北1.0m以上、深さ0.3mである。遺物の出土はない。

・第3a層の遺構(図7・8、写真1)

SX01　大型の3連の石組み竈である。第3a層上部の焼土層を除去したのち検出された。妙知焼以

前に廃棄された遺構である。旧地表面を0.3mほど掘りくぼめ、シルト偽礫を主体とするにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質細粒砂を敷き基礎としていた。その中に礫を並べ、3基の竈を構築している。竈は東側からSX01－a・b・cとする。SX01－a・bは同様の構造であり、北を奥に礫をコの字状に並べ薪を燃やす燃焼室とし、南側に薪をくべる焚口を配置する。礫の上には焼土が厚く堆積しており、鍋釜をかける竈口を構成していたとみられる(註1)。竈口は崩落しており確認できなかった。

SX01－a　燃焼室の石組み部分は長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.3mである。焚口部分の被熱範囲は東西0.3m、南北0.6mであった。燃焼室内からは土師器皿の破片が出土した。

SX01－b　燃焼室の石組み部分は直径0.7m、深さ0.3mである。焚口部分の被熱範囲は東西0.5m、南北0.7mである。礫を覆う焼土の範囲は直径0.9mの円形である。SX01－bの燃焼室底部は焼土偽礫

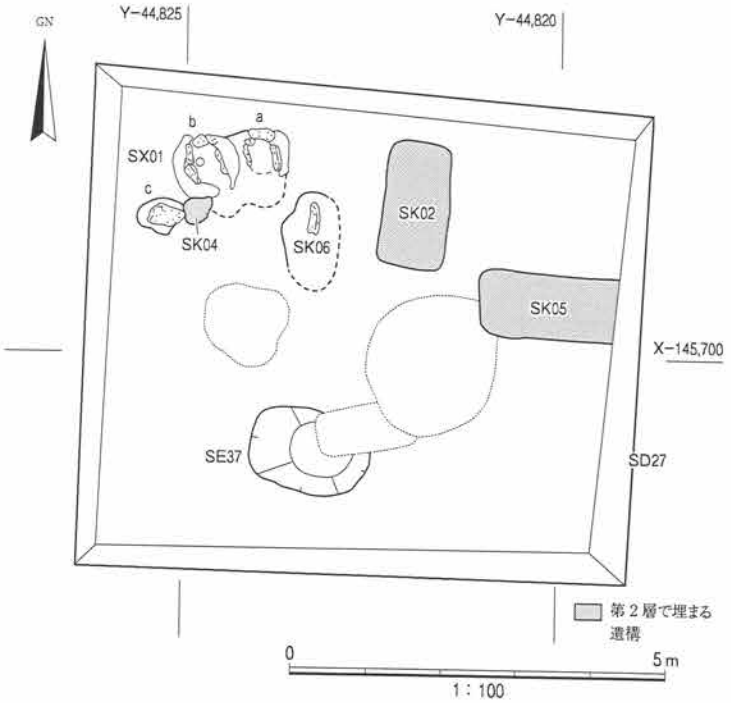


図7　徳川期(第3a層)の遺構平面図

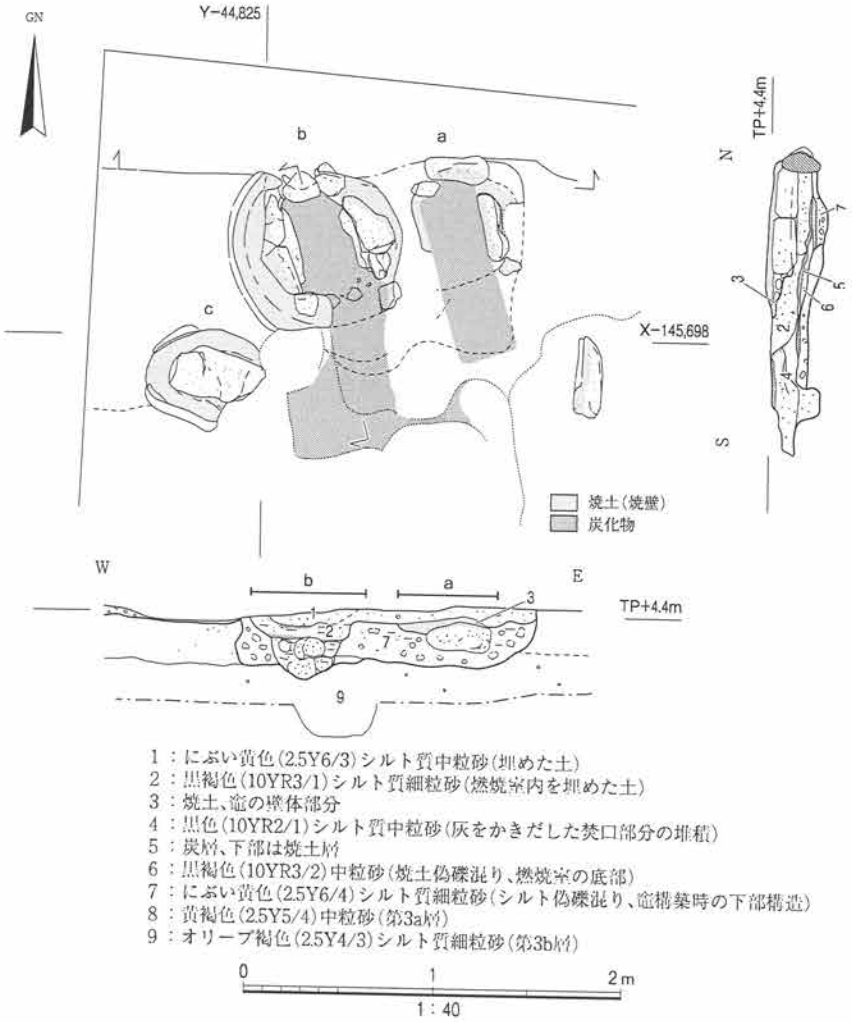


図8　SX01平面・断面図

写真1　SX01(北から)

が混り、その上に炭層が拡がっている(図8の5)。炭層の上は埋められており(図8の2)、土師器皿の破片が大量に出土したほか、その上面には完形の土師器皿5が伏せた状態で置かれていた。竈を廃絶する際の祭祀の可能性もある。

そのほか燃焼室内からは肥前白磁碗・土師器皿、焚口部分からは肥前磁器染付碗・土師器皿が出土した。図示した遺物は中国産青花碗6、土師器皿7・8である。6・7は焚口部分より出土し、8は炉内からの出土である。7は口縁部に煤が付着する。口縁部をナデているが底部との境に明瞭な段はなさない。

SX01－c　長軸0.5m以上、短軸0.5mの楕円形の範囲がわずかに掘りくぼめられ、その上に0.3m×0.4mの石が据えられ被熱していた。周囲には焼土が拡がっていた。東側の部分は壊されており、詳細は不明である。SX01－a・bとは構造が異なっており、別の作業が行われたとみられる。図示した遺物は肥前陶器皿9で、燃焼室内より出土している。砂目積で、底部に「一」とみられる墨書がある。

竈を構築する基礎の部分からは、底部内面に鉄絵のある肥前陶器碗10のほか、不明土製品11などが出土した。11は直径8.6cm、高さ5.6cm、重さ434g、スサ入り粘土を焼成しており、上部が抉れ、中央に孔が貫通する。何らかの錘などの可能性も考えられるが、用途不明である。

SX01と同様の徳川期の竈は住友銅吹所跡や墨作りの工房跡が検出されたOS91－64次調査地[大阪市文化財協会2003b]などで確認されている。一般の家庭用というより工業的な煮沸用のものの可能性がある。

・第2層で埋まる遺構

第3a層の焼土上面で検出された遺構である。第2層で埋められていて、18世紀中葉～19世紀初頭に属する。

SK02　東西0.9m、南北1.7m、深さ1.0mの方形の土壙である。ゴミ穴であろう。出土遺物は肥前磁器のほか、関西系陶器、丹波焼、明石擂鉢、軟質施釉陶器、土師器皿、巴文鬼瓦・丸瓦・平瓦、土人形、貝、鉄塊などである。図示した遺物は肥前磁器染付小杯12、蓋13、大皿14、色絵碗15である。12はガラスによる焼継がある。14は底部内面にコンニャク印判、底部外面に崩れた渦福銘がある。同形のものが3点以上出土し、組になるとみられる。これらの遺物は18世紀後葉～19世紀初頭に属するものである。

SK04　東西0.4m、南北0.4mの不整形の土壙である。SX01の上から掘り込まれていた。出土遺物は肥前磁器染付碗16、土師器皿17、ミニチュア土製品18である。18は内面にキラ粉が付着する。飯事道具とみられる。18世紀中～後葉に属するとみられる。

SK05　東西1.8m以上、南北0.9m、深さ1.0m以上で底に達することができなかった。方形の土壙で、SK02と似た形状のゴミ穴である。出土遺物は肥前磁器のほか、関西系陶器、土師器皿、平瓦などが出土した。図示した遺物は肥前磁器染付碗19・20である。19は体部内・外面に輪宝繋文が、20は体部

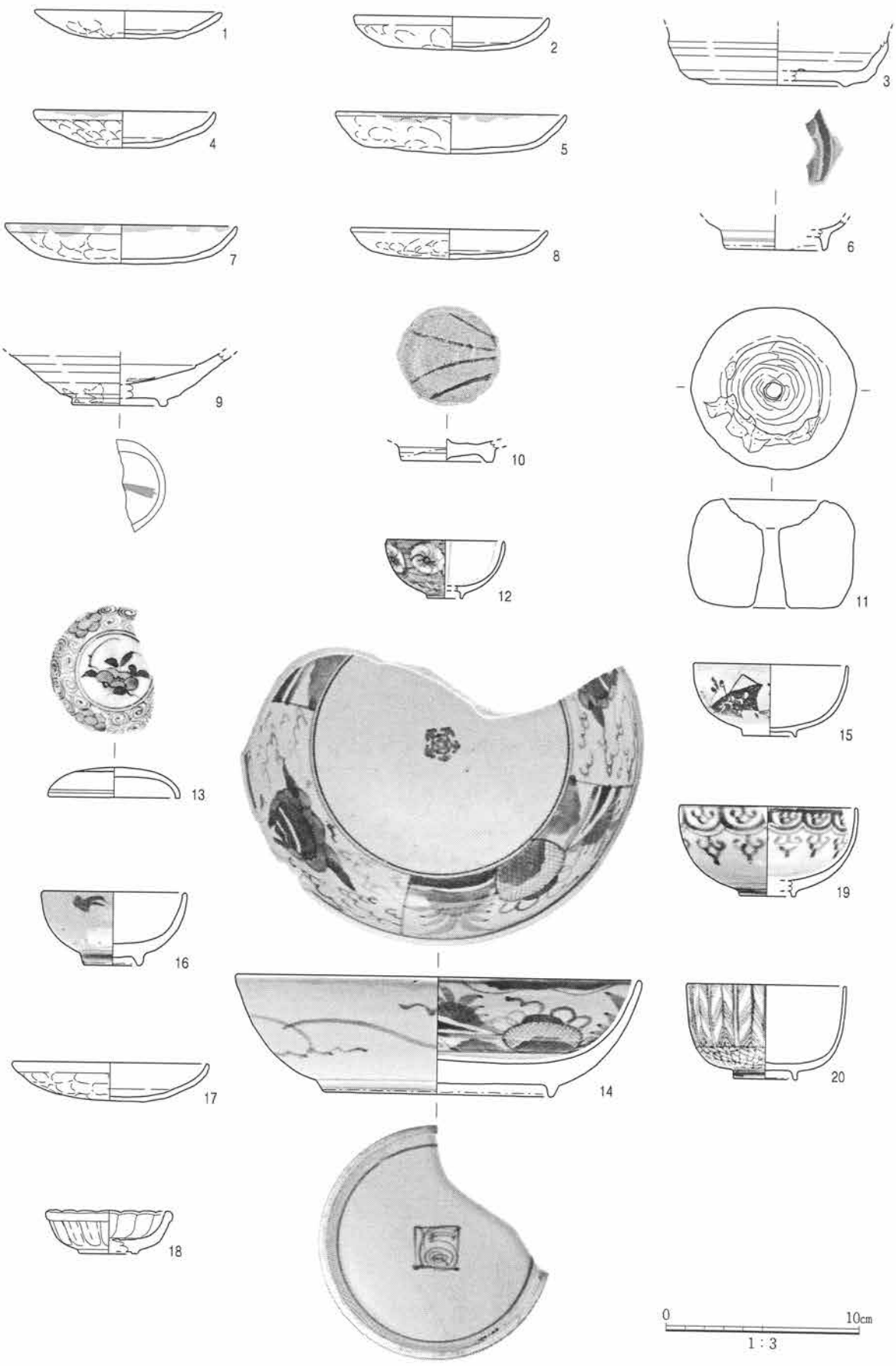


図9　遺構出土遺物

SK09(1・2)、SK27(3・4)、SX01(5～11)、SK02(12～15)、SK04(16～18)、SK05(19・20)

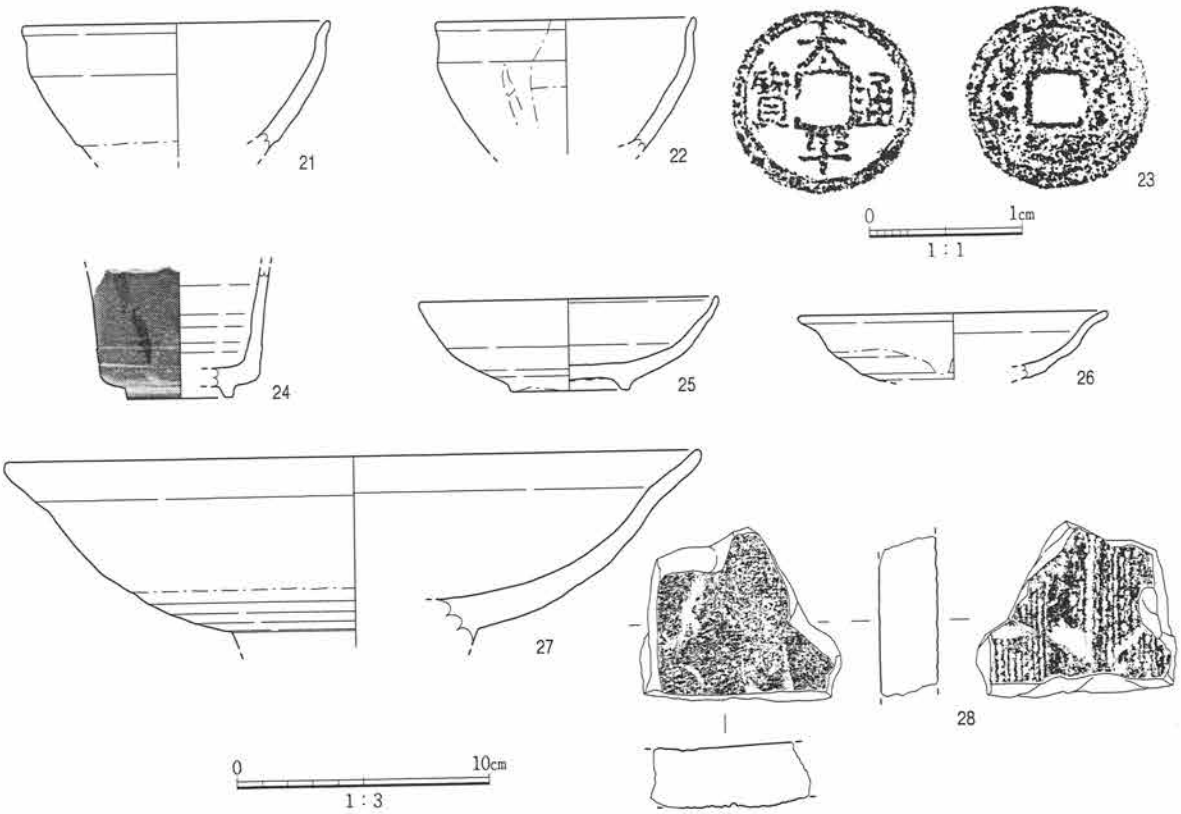


図10　第7b～5a層出土遺物

第7b層(21)、第6b層(22・23)、第5a層(24～28)

外面に矢羽根文が描かれる。18世紀後葉に属するとみられる。

d.各層出土の遺物(図10)

第7b層から瀬戸美濃焼天目碗21のほか、土師器皿、丸瓦・平瓦、鉄釘が出土した。

第6b層からは瀬戸美濃焼天目碗22のほか、北宋銭23、丸瓦・平瓦が出土した。23は太平興国年間(976～983年)に鋳造された太平通寶である。

第5a層からは肥前陶器向付24、皿25・26、鉢27が出土した。24は筒形で、体部外面に鉄絵を有する。25は丸皿で高台にモミガラが付着する。26は口縁部が外反する。これらの遺物は豊臣後期に属する。

そのほか縄目タタキを施す奈良時代の平瓦28が出土している。

3)まとめ

今回の調査において、以下の発見があった。

・大坂本願寺期以前とみられる作土を検出した。

・大坂夏ノ陣の罹災面が検出された。

・18世紀前葉に廃棄された石組みの竈を検出した。

周辺の調査地で確認された大坂本願寺期よりも前の遺構を検出することはできなかったが、豊臣期以降周辺が城下町として利用され続けた様子を確認できた。

註）

（1） 竈の各部位の名称は『住友銅吹所跡発掘調査報告』［大阪市文化財協会1998］を参照した。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大坂城跡発掘調査（OS07－16）報告書」：『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.41－48

2010、「中央区本町橋における大坂城跡発掘調査（OS08－5）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2008）』、pp.183－198

大阪市文化財協会1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』

2003a、「OS85－36次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.291－298

2003b、「OS91－64・93次調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.275－290

大阪府教育委員会1986、『大坂城惣構・西町奉行所跡発掘調査概要』

図版一

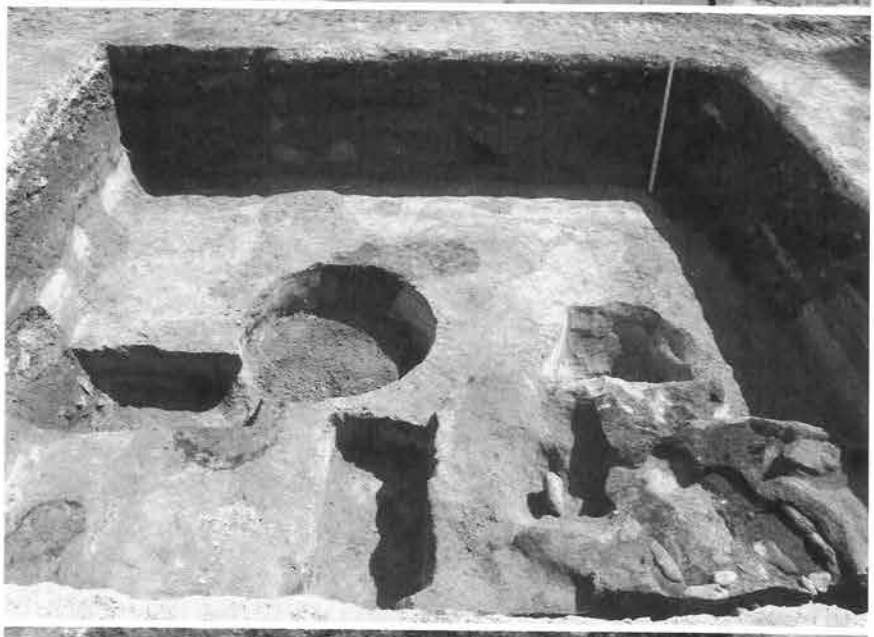
西壁地層断面
（深掘トレンチ）
（東から）

豊臣後期（第６層上面）
の遺構完掘
（北から）

豊臣後期（第5a層上部）
焼土面の検出
（北から）

17世紀中～後葉
（第４層上面）の遺構完掘
（北から）

17世紀後葉（第3b層上面）
の遺構、検出
（北から）



18世紀中葉～19世初頭
（第２層で埋まる）の
遺構完掘
（北から）

中央区常盤町二丁目32・33における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS15－２)報告書

調査個所	大阪市中央区常盤町二丁目32・33
調査面積	66㎡
調査期間	平成27年6月1日～6月10日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、田中裕子

1）調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側縁辺の豊臣期大坂城惣構内西部に位置する。調査地は台地の西縁部にあり、北には西南西方向の深い開析谷（本町谷）が復元されている（図１）。周辺の調査では奈良時代の井戸（OS87－18次調査地）や奈良時代～中世の遺物包含層（OS89－23次調査地）、また豊臣期の背割り下水（OS87－14次調査地）など、奈良時代～豊臣・徳川期の遺構・遺物が多数見つかっている［大阪市文化財協会2003］。

調査地では事前に大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、地表下1.6m以下の深さで本格的な発掘調査を要する近世の遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査はこうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に実施した。

調査区は敷地東部の東西８ｍ、南北６ｍで、面積48㎡の範囲である。2015年６月１日より着手し、第１層まで盛土を重機で除去したのち、第２層以下の各層を人力で掘り下げ、遺構や遺物の検出を行い、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。調査区内は地山が高く、西南部でのみ近世初頭に遡る遺構が確認されたため、大阪市教育委員会と協議の上、調査区の西側８㎡（東西２ｍ、南北４ｍ）と南側10㎡（東西５ｍ、南北２ｍ）の拡張を行った（図２）。拡張区の図面の作成や写真撮影を行い、６月10日に埋め戻しを含む現地における作業を完了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP+○ｍと記した。

2）調査の成果

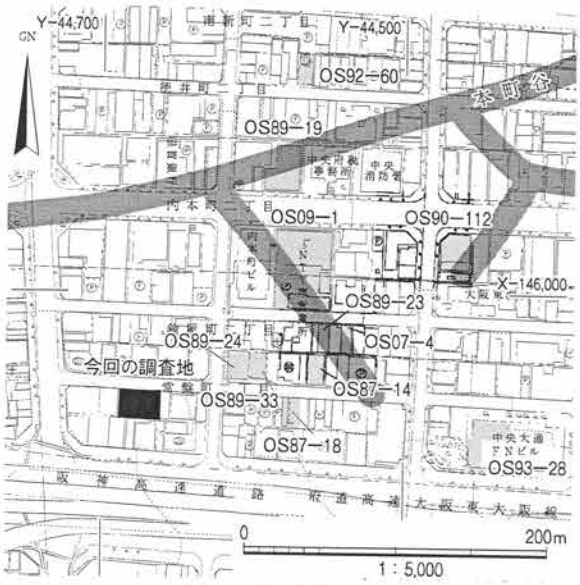


図１　調査地位置図

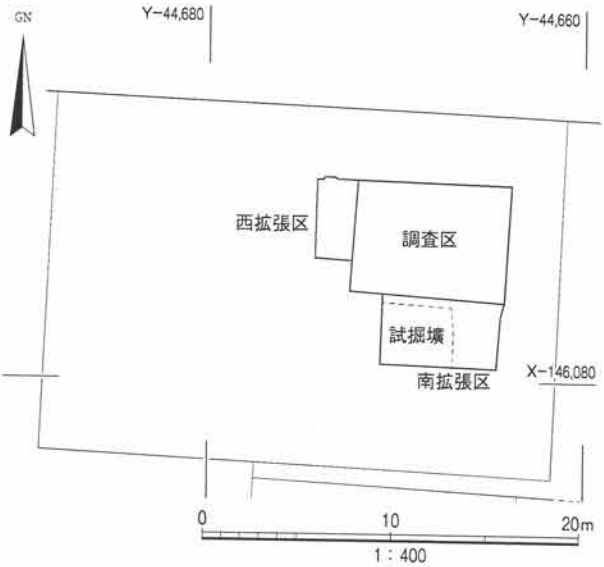


図２　調査区位置図

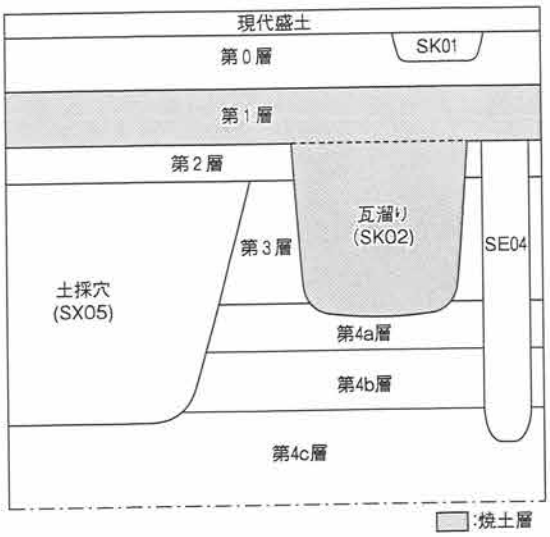


図3　地層と遺構の関係図

ⅰ)層序(図3・4)

調査地周辺は西に向かって低くなる地形をしている。

第0層　層厚は8～100cm、明黄灰色(2.5Y7/6)細粒砂からなる近代盛土層である。南側で厚くなっている。西壁で検出されたSK01からは瀬戸美濃焼磁器染付碗27が出土している。また、西拡張区では礫を並べた近代の建物基礎が検出された。

第1層　層厚10～32cm、明赤褐色(5YR5/8)中粒～細粒砂からなる近世盛土層である。調査区西北部に分布し、焼土を含む。西壁で確認されたSK02は本層で埋められた瓦溜りである。西拡張区からは肥前磁器染付火入れ26や焼継のある染付碗、関西系陶器の土鍋などが出土し、19世紀前半に属する。

第2層　層厚10～60cm、にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒砂からなる近世盛土層である。中国産青花や肥前陶磁器など18世紀代の遺物を含む。本層の上面の遺構として井戸・瓦溜りなどが検出された。

第3層　層厚30～120cm、にぶい黄褐色(10YR6/3)極粗粒～細粒砂で、北から南へ向うフォアセットラミナが確認される水成堆積層である。遺物の出土はなく、砂粒は風化しており、低位段丘構成層の可能性がある。本層上面より豊臣後～徳川初期の土採り穴が検出された。

第4層　段丘構成層である。第4a～4c層に細分できる。

第4a層　層厚20～50cm、にぶい黄橙褐色(5YR3/6)細粒砂質シルトからなり、巣穴とおぼしき生痕化石が顕著に観察できる。

第4b層　層厚15～25cm、明褐色(7.5YR5/8)粘土質シルトからなる。

第4c層　層厚30cm以上、暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂質シルト～シルト質粘土からなる。

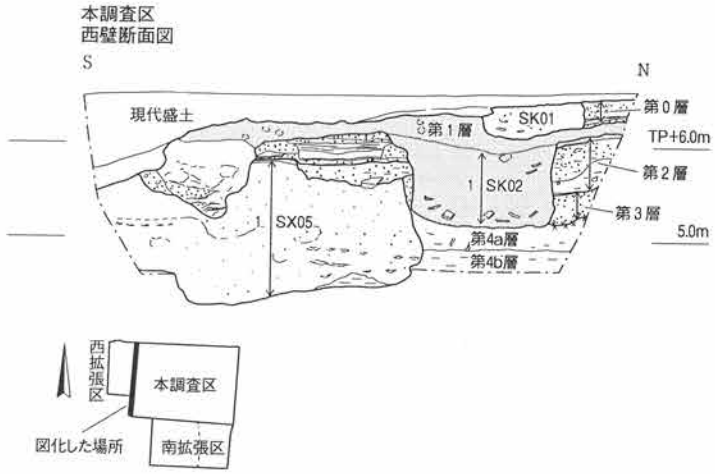
ⅱ)遺構と遺物

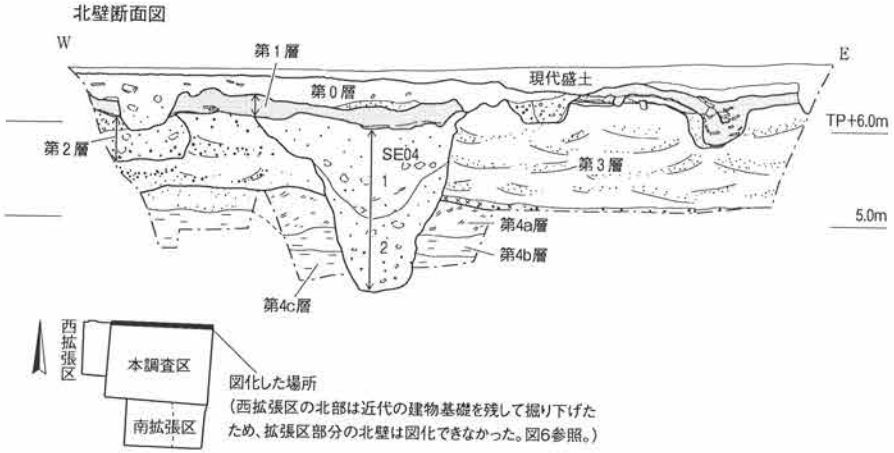
a.豊臣後～徳川初期の遺構(図5・7)

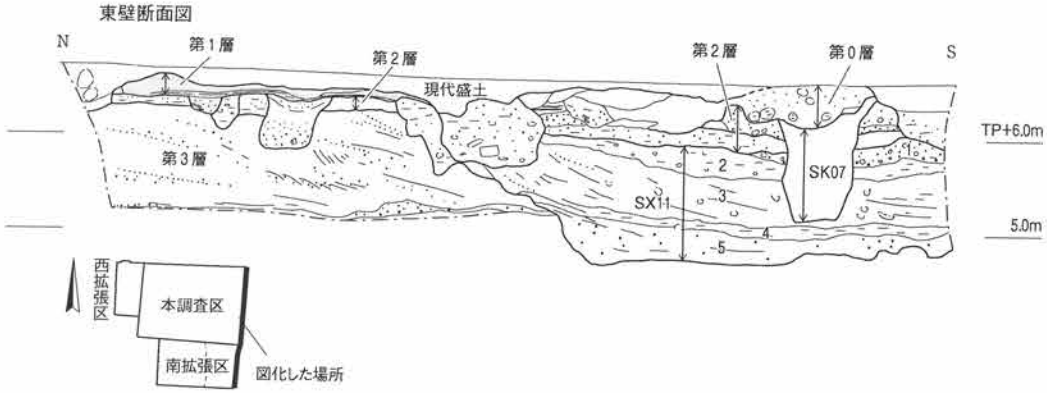
第3層上面で土採り穴SX05・11を検出した。

SX05　調査区西南部に位置する東西9m以上、南北7m以上、深さ1.5mの不整形の土壙である。埋土は第3層に由来する明黄褐色(10YR6/6)中粒～細粒砂で一度に埋められており、下部に第4a層由来の偽礫を含む。第4a・4b層を採取する目的で掘られた土採り穴とみられ、第4c層の上部で掘下げは止まっている。出土遺物は瀬戸美濃焼志野向付1、平瓦である。そのほか、混入品として須恵器器台2がある。

SX11　調査区東部に位置する東西0.5m以上、南北4.0m以上、深さ1.2mの土壙で、壁際に一部がかかっている。SX05と同様の土採り穴とみられる。埋土は図4の東壁断面図に示すように、1層：にぶい黄褐色(10YR6/7)粗粒～中粒砂、2層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂、3層：灰黄







[SK02]
1：明黄褐色(10YR6/8)中粒～細粒砂

[SE04]
1：にぶい黄褐色(10YR5/6)中粒～細粒砂
2：褐色(7.5Y4/6)粗粒～中粒砂

[SX05]
1：明黄褐色(10YR6/6)中粒～細粒砂(下部に第4a層由来の偽礫含む)

[SX11]
1：にぶい黄褐色(10YR6/7)粗粒～中粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂
3：灰黄色(2.5Y6/2)極粗粒～中粒砂
4：灰色(5Y4/1)シルト
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒～中粒砂

0　5m
1：80

図4　西壁・東壁・南壁断面図

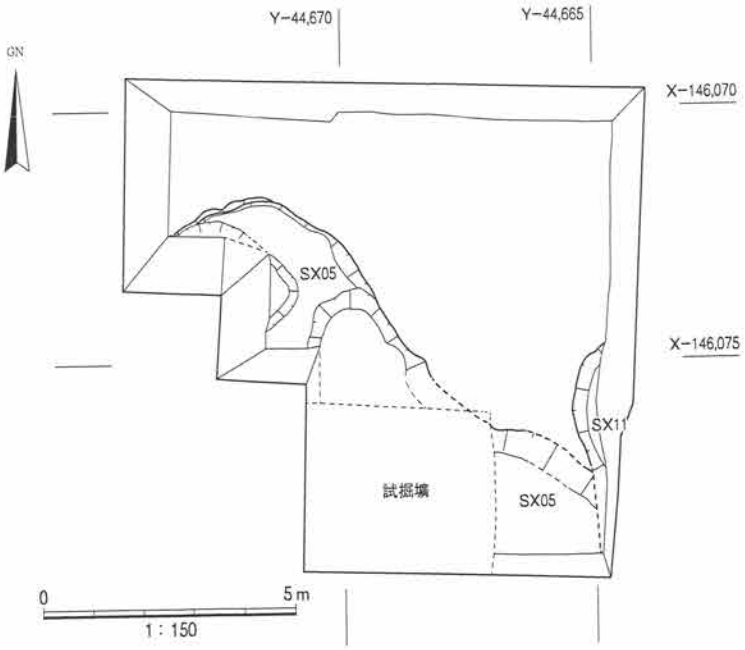


図5　豊臣～徳川初期(第3層上面)の遺構平面図

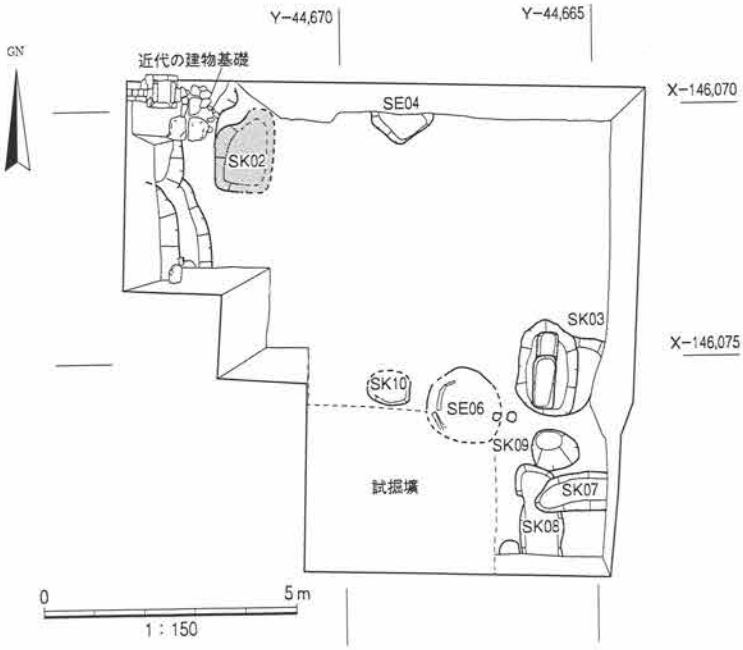


図6　徳川期(第2層上面)の遺構平面図

色(2.5Y6/2)極粗粒～中粒砂、4層：灰色(5Y4/1)シルト、5層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒～中粒砂からなり、2～5層にはラミナが見られた。本土壙を掘った後、しばらく開口していた間に溜まった機能時堆積層と思われる。埋土中より砂目積みの肥前陶器碗3が出土した。

上記の遺構は豊臣後～徳川初期に属するといえよう。

b. 徳川期の遺構(図6～8)

徳川期の遺構として井戸・土壙・瓦溜りを検出した。

SE04　調査区北部に位置する。直径1.2m、深さ1.9mの素掘りの井戸で、井戸側内はにぶい黄褐色(10YR3/4)中粒～細粒砂と褐色(7.5YR4/6)粗粒～中粒砂で埋められていた。埋土中より石製の硯4が出土したほか、豊臣期以降とみられる平瓦5が出土した。

SE06　南拡張区に位置する。掘形の直径1.3m、深さ1.6m以上の井戸である。井戸側は井戸瓦が用いられており、井戸側内の埋土は灰黄色(2.5Y4/1)シルトからなる。井戸の廃棄後はゴミ穴として利用されており、井戸側内からは肥前陶磁器、土師器焙烙、瓦、スラグ類などがまとまって出土した。図示した遺物は肥前磁器色絵紅猪口6で、体部外面に「いろはに」と赤で上絵付けされている。出土遺物は18世紀後半に属する。

SK03　調査区東部に位置する東西1.6m、南北1.9m、深さ0.9mの楕円形の土壙である。底部がさらに楕円形に掘り込まれており、木片混りのシルトで埋まっていた。木屑を廃棄した土壙とみられる。小片のため図示しえないが、肥前陶磁器や土師器皿が出土した。

SK07　南拡張区に位置する東西1.5m以上、南北0.7m、深さ0.9mの土壙である。埋土はにぶい黄

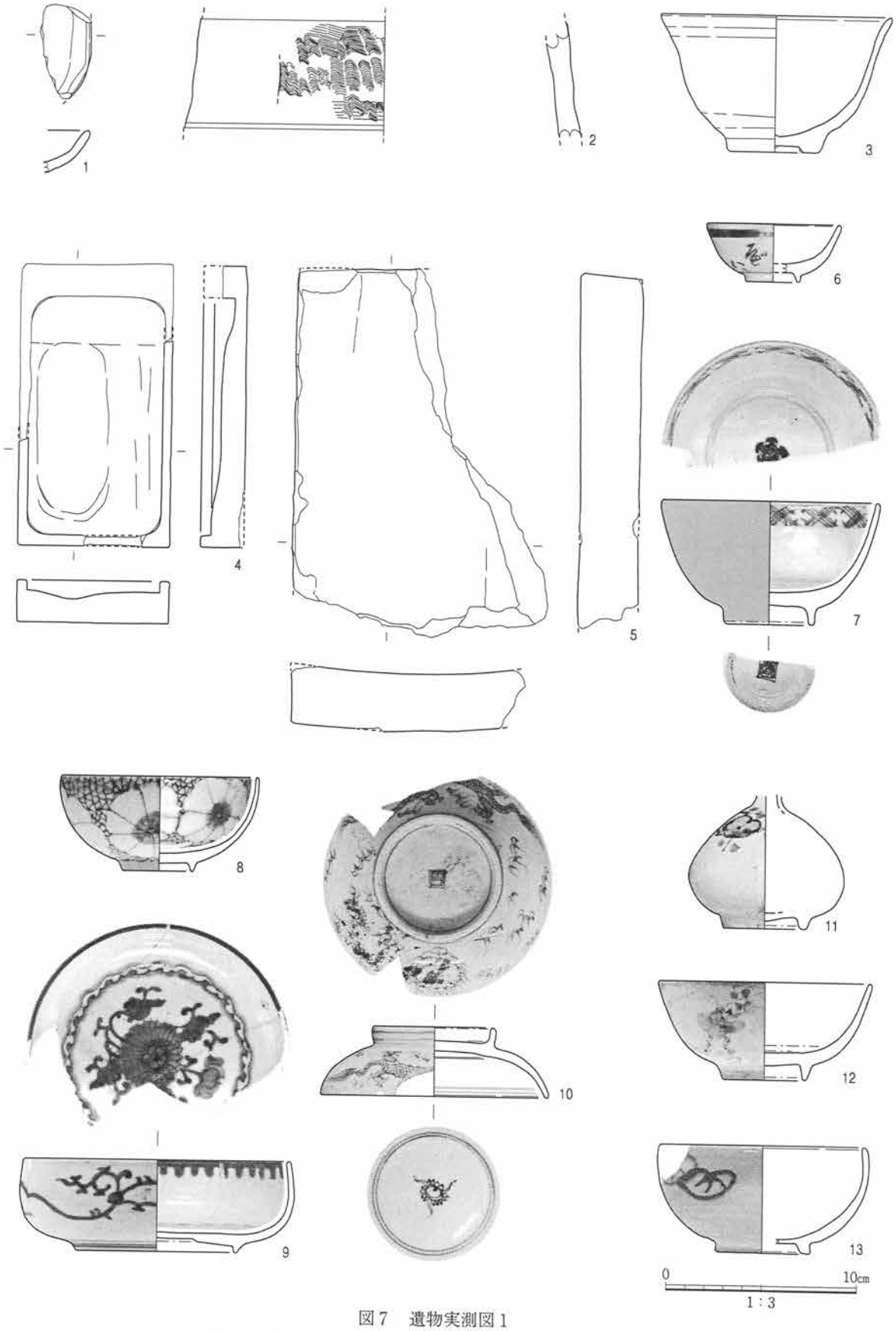


図7　遺物実測図1

SX05(1・2)、SX11(3)、SE04(4・5)、SE06(6)、SK07(7～13)

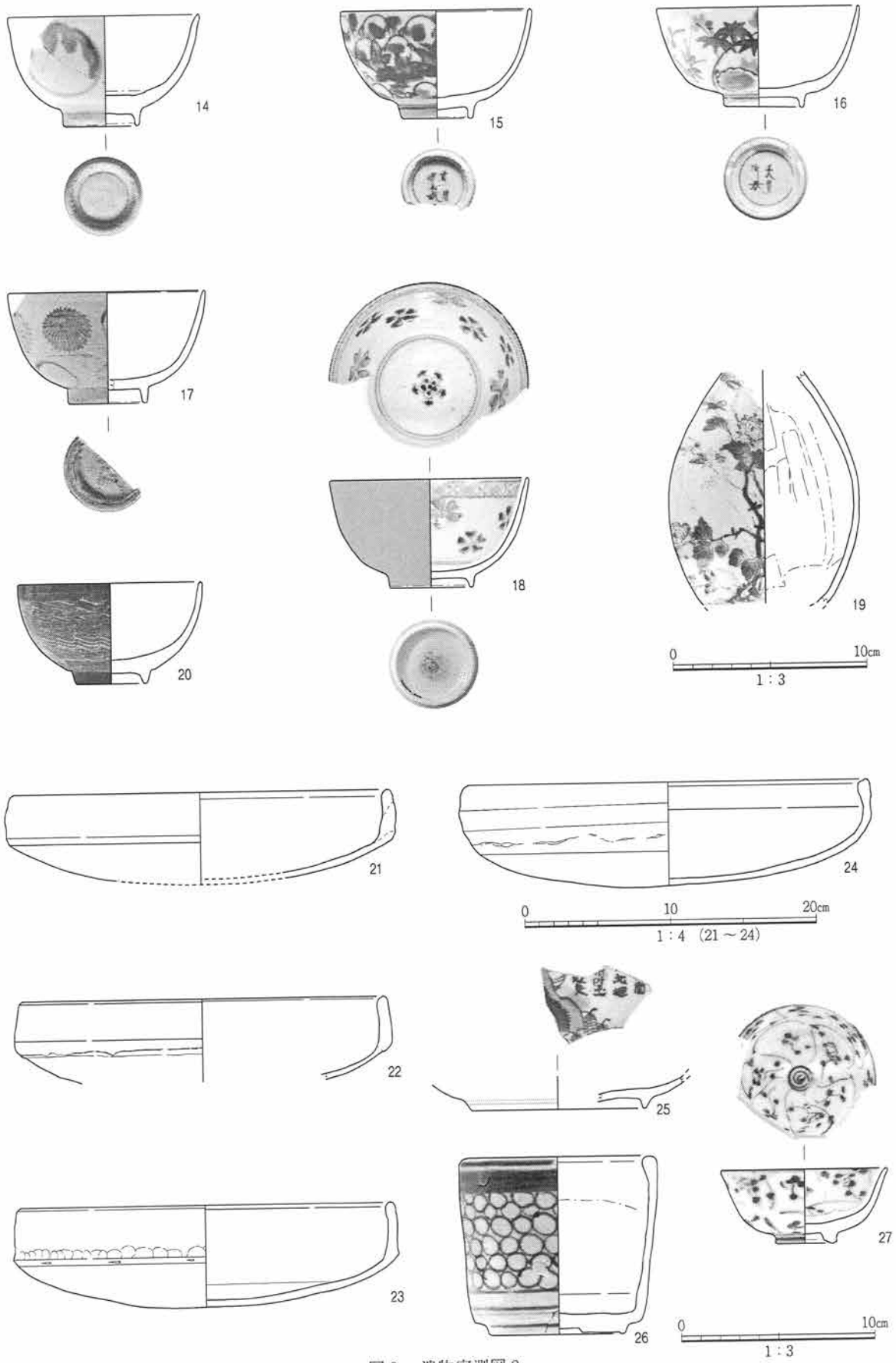


図8　遺物実測図2

SK10(14～24)、第2層(25)、第1層(26)、第0層(27)

色(10YR4/3)シルト質細粒砂からなり、陶磁器、瓦がまとまって出土した。図示した遺物は肥前磁器青磁染付碗7、染付碗8・12、鉢9、蓋10、油壺11、関西系陶器碗13である。7は底部内面にコンニャク印判による五弁花文、底部外面に崩れた渦福銘がある。8は体部内外面に菊花散らし文、10は外面に宝珠と龍を素描し、高台内には銘がある。これらの遺物は18世紀後半～19世紀前葉に属するとみられる。

SK10　南拡張区に位置する。東西0.9m、南北0.6m、深さ0.9mに復元されるゴミ穴である。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトからなる。図示した遺物は肥前磁器染付碗14～17、青磁染付碗18、色絵瓶19、肥前陶器刷毛目碗20、土師器焙烙21～24である。14は体部外面に丸文が描かれ、底部内面を蛇の目釉剥ぎする。15・16は底部外面に大明年製銘がある。17はコンニャク印判で体部外面に菊花文を押す。18は体部内面に桜花文、底部内面に五弁花文を施す。焙烙は21～23に図示したD類と24に示したE類[難波洋三1992]の2種類がみられる。これらの遺物は18世紀後半頃に属するといえよう。

そのほかSK08、SK09も同様の18世紀後半の遺物を含むゴミ穴である。

c.各層出土の遺物(図8)

第2層　図示した遺物は中国産青花皿25である。ほか肥前磁器染付碗や関西系陶器碗、備前焼鉢、土師器焼塩壺蓋などが出土した。

第1層　西拡張区より出土した肥前磁器染付火入れ26を図示した。体部内面は上部3分の1のみ施釉される。ほか、肥前磁器端反碗や焼継のある染付皿、瀬戸美濃焼磁器染付皿などがあり、遺物の年代は19世紀前～中葉に属するとみられる。

第0層　第0層上面の遺構として西壁で確認したSK01より瀬戸美濃焼磁器染付碗27が出土した。明治時代以降の遺物とみられる。

3)まとめ

本調査区では豊臣前期以前の遺構や包含層を確認することはできなかった。調査地は上町台地上に位置し、地山が高く、遺構面は削平されてしまったとみられるが、豊臣後～徳川初期の土採り穴が遺存していることがわかった。土採り穴からは遊離資料ながら須恵器の出土があり、近隣に古墳時代の遺跡が存在していた可能性を示している。

徳川期では、井戸やゴミ穴群がみとめられ、18世紀以降の遺物が出土した。調査地付近が町屋として本格的に開発されるのはこの頃以降であるとみられる。

引用文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.373～400

北壁断面および
豊臣後～徳川初期の
遺構(SX05)完掘
(南から)

SX11とSK07
遺構断面
南拡張区(西から)

SE04遺構断面
(南から)

中央区玉造一丁目12－１・12－２における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS15－３)報告書

調査個所	大阪市中央区玉造1丁目12－1・12－2
調査面積	48㎡
調査期間	平成27年8月3日～8月5日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、京嶋 覚

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城の東南に当る「玉造口」の北側に位置にする。南に150m離れた地点で行われたOS89－146次調査[大阪市文化財協会2002]では、豊臣期の南北方向の堀が確認され、大坂城惣構堀の一部と推定されており、さらに下位層では弥生時代の遺構・遺物も出土している。また、その50m北で行われたOS10－２次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012a]でも一連の堀の可能性のある落ち込みが確認されている(図１)。

教育委員会が行った事前の試掘調査により、GL－1.6m付近で上面に炭層が堆積する灰色砂質シルトの整地層が確認されたため、その上面での遺構・遺物の分布状況や年代を明らかにするための調査し、さらにそれ以下GL－3mまで地層観察を行うことになった。

調査区は敷地中央の８m×６mの範囲である。８月３日に重機により表土を掘削したところ、GL－1.2mで近世の遺構面とみられる褐色細粒砂質シルトが検出され、試掘壙付近の上面で炭層が確認されたため、この面で平面的な調査を行うことにした。翌日にはこの面の調査作業が終了し、８月５日に調査区中央で2.5m角の深掘り調査を行った。掘削はGL－3mまで行ったが、壁面からの湧水が激しくGL－2.7mまでの地層観察を行うにとどめ、現場での記録作業をすべて終了した。

以下にその結果を報告する。なお、基準点および水準点は国土交通省が設置した都市街区多角点および節点を与点として測量した。図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP＋○mと省略した。

2)調査の結果

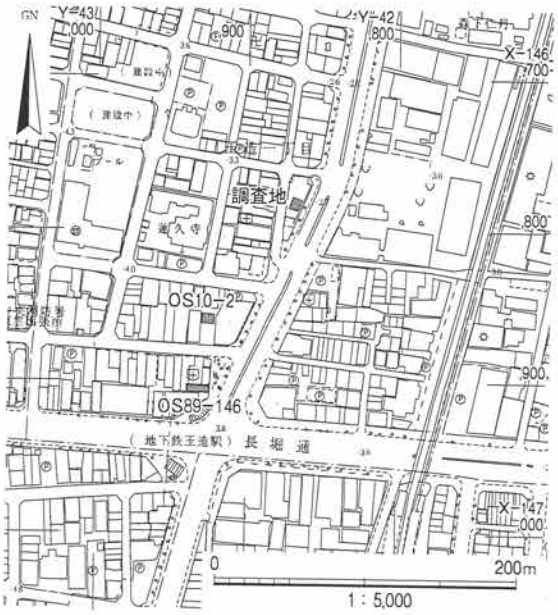


図１　調査地位置図

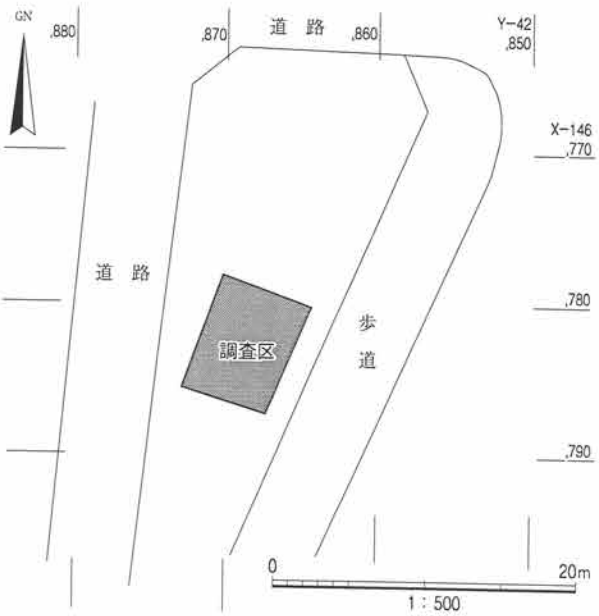


図２　調査区位置図

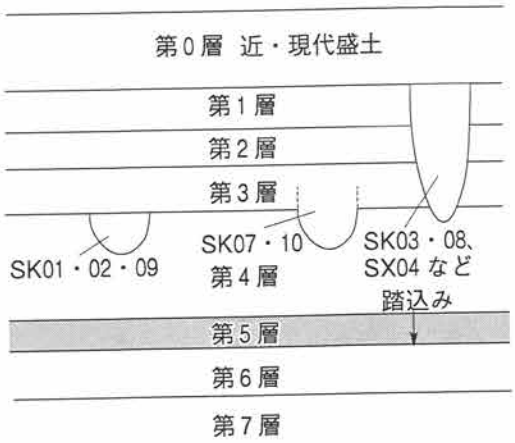


図3　地層と遺構の関係図(トーンは作土層)

i)層序(図3・4)

現地表面はTP+3.6mで平坦であった。

第0層：近・現代の盛土層で、煉瓦・コンクリートが多く含まれる。

第1層：暗灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細粒砂からなる整地層である。層厚は20cmで調査区東北部のみに遺存する。西・東壁断面の地層観察からSK03・08、SX04は本層上面から掘られており、SK03・08と埋土が共通するSK05・06も同じ層準と考えられる。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)～黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂層で、黄白色や灰色のシルト質粘土の偽礫を多く含む整地層である。層厚は約25cmである。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y 3/3)小礫混りシルト質細粒砂層で、炭粒を含む整地層である。層厚は20～30cmである。

第4層：上部はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトの整地層で、北東に向かって厚くな

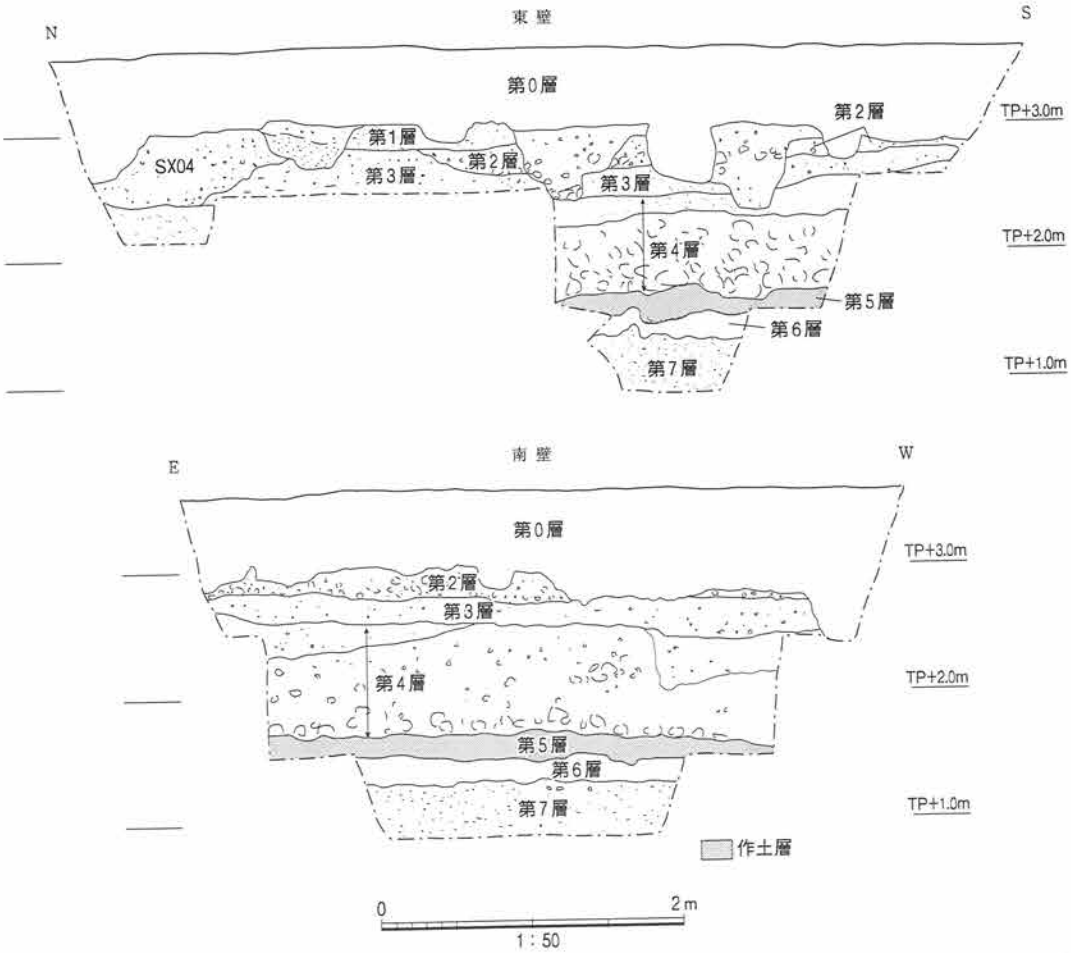


図4　西・南壁断面図

り、最大厚は30cmである。下部は灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルト層で、偽礫を主体とする盛土層である。層厚は60～90cmである。西北部の上面でSK01・02・09を検出し、その北側には炭・焼土が薄く分布していた。

第５層：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトからなる作土層で、下部に鉄酸化物の沈着が見られる。遺物は出土しなかった。

第６層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土の自然堆積層で、上面に第５層からの踏込みがあり、本来上面にごく薄く堆積していた水漬きの中粒砂も第５層とともに踏み込まれている。

第７層：褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂の自然堆積層で、上部は鉄・マンガンの酸化物による汚れが顕著である。

以上の層序のうち平面的な調査対象とした遺構面をなす第４層と作土層と推定される第５層は、調査地の北東200mで行われたOS10－９次調査における、最大層厚80cmの徳川期前半の盛土層(第３層)と、その直下の中世から豊臣後期まで耕された水田作土層(第４層)にそれぞれ類似している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012b]。標高では１m近く今回調査の地層が高いが、考慮すべき資料と言えよう。また、第５層は今回の調査地同様に上町台地東裾の低地に位置する細工谷遺跡B地点の調査で確認されている中世後期以降の作土層(第５層)に岩相や標高が近似している[大阪文化財研究所2014]。

ii)遺構と遺物(図５～７)

重機により第３層まで掘削したため、第４層上面でそれ以上の各層準からの遺構や攪乱を検出した。

第４層上面の遺構としては、SK01・02・09がある。SK01・02は一連の土壙と思われ、SK02は長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.1mの溝状の土壙で、SK01も幅・深さは同程度と推定される。埋土はいずれもオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒～中粒砂である。

これらの遺構から丹波焼、肥前陶磁器などが出土した。

SK09は直径0.8m、深さ0.15mの円形の土壙である。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)～

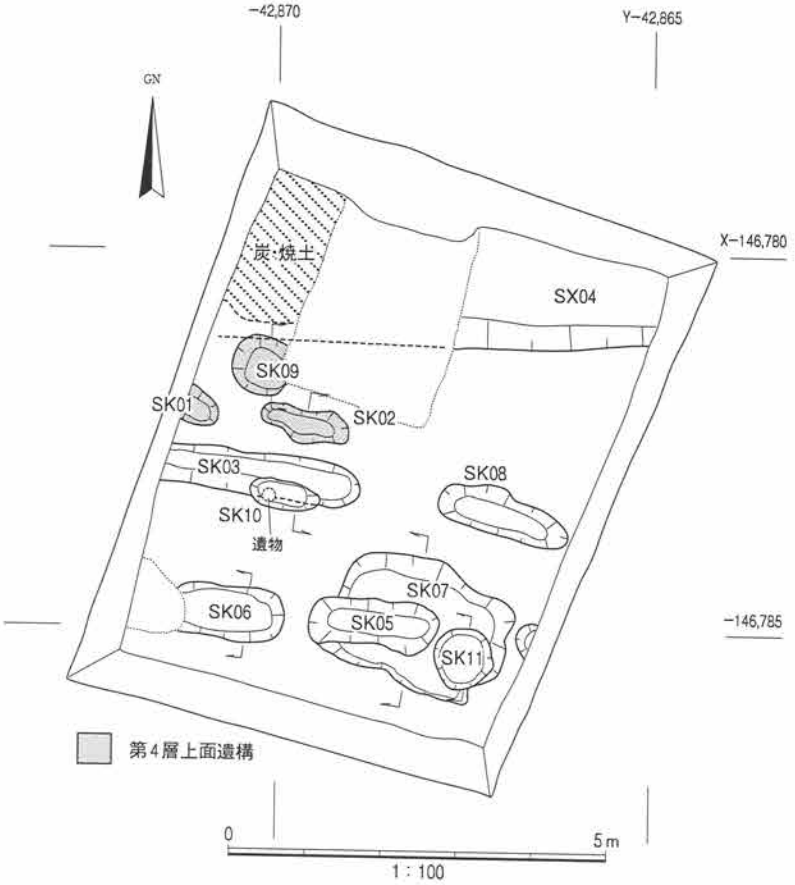


図５　第１～４層上面遺構平面図

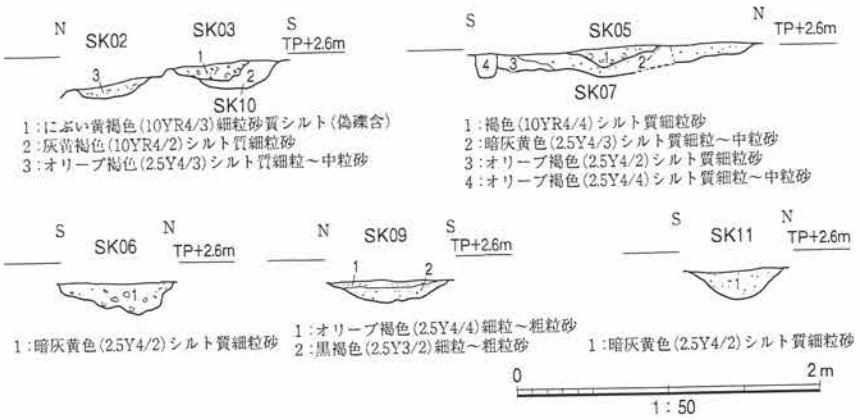


図6　遺構断面図

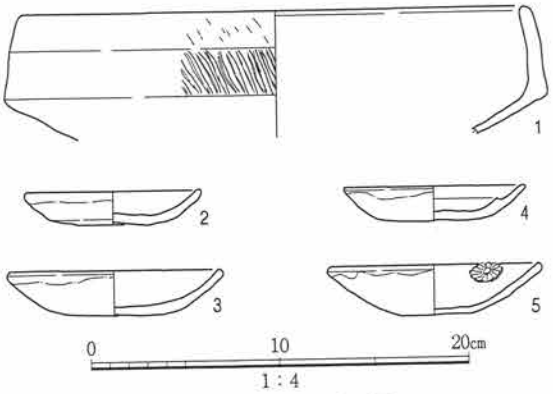


図7　出土遺物実測図
SK09(1)、SK10(2～5)

黒褐色(2.5Y3/2)細粒～中粒砂で、炭粒を多く含む。

出土遺物にはC類[難波洋三 1992]の完形に近い土師器焙烙1が割れた状態で出土したほか、備前焼擂鉢、瀬戸美濃焼天目碗、肥前陶器鉢、丸瓦などの細片がある。

これらの遺物は概ね17世紀代におさまるものである。

また、これらの遺構に近接する調査区西北部の第4層上面では薄い炭層の堆積や部分的に被熱した粘土が確認されており、竈などの痕跡とみることもできる。試掘調査の際に注目されたのはこの地点の炭層と考えられる。

上記以外は、より上位の層準からの遺構である。SK07はSK05・11に壊される土壙で、東西2.3m、南北1.5mの小判形を呈し、深さは0.2mである。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂である。土師器焙烙、丹波焼徳利、肥前陶器碗、肥前磁器染付皿などが出土した。SK10はSK03に壊される土壙で、長軸1.0m、短軸0.4mの楕円形で、深さは0.2mである。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂で、軟質施釉陶器灯明皿2・3・灯明受皿4、関西系陶器蓋・灯明皿5、肥前磁器染付蓋などが出土した。2～4は外底面に糸切り痕が残り、3の内面には「赤茂」のスタンプがある。5は内面に灰緑色の釉が施されており、口縁付近に菊花文が貼り付けられている。灯明皿はいずれにも灯芯油痕が認められる。

これらは後述の第1層上面からの遺構の出土遺物とあまり変わらないが、切合い関係からみて第2・3層に属する可能性もある。

第1層上面と考えられる遺構にはSK03・05・06・08・11がある。SK03・05・06・08は幅0.5～0.7m、深さ0.15～0.20mで、埋土がいずれも粘土質シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトと共通しており、SK03・08とSK05・06は平行して東西に連なる一連の土壙と考えられる。SK11は直径0.8m、深さ0.2mの土壙である。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂である。

以上の遺構からの出土遺物には、土師器小皿・焙烙、軟質施釉陶器灯明皿、丹波焼擂鉢、堺擂鉢、肥前陶器皿・鉢、関西系陶器蓋、肥前磁器染付碗・仏飯器、土人形があり、18世紀末から19世紀代の時期と思われる。

SX04は調査区北端の東部で検出された東西溝ないし、北側への落込み状遺構である。埋土は暗灰色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂～細礫で少量の中礫や中粒砂の偽礫を含む整地層である。本層は西部では重機掘削に際して消失していたが、西壁断面の観察により続きが確認できた。上端はほぼ正東西をなしている。南側との整地土が異なり、敷地境になる可能性も考えられる。

3)まとめ

本調査の目的であった上面に炭層が堆積する地層は第4層であり、上面では竈痕跡の可能性のある焼土面や小土壙を検出した。これらの時期から本層はOS10－9次調査における第3層と同様の大坂ノ陣後の盛土層と考えられ、大坂城東部における徳川期の開発の一端をうかがわせると共に、それ以前が耕作地であったことを改めて確認することができた。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012a、「中央区玉造一丁目における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS10－2)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.17－22

2012b、「中央区玉造一丁目540－1ほか12筆における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS10－9次)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』pp.211－248

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』Ⅵ

大阪文化財研究所2014、『細工谷遺跡B地点発掘調査報告』

難波洋三 1992、「 徳川氏大坂城時期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

南壁断面
（北から）

第４層上面全景
（南から）

SK10遺物出土状況
（北から）

平成27年度特別史跡大坂城跡豊臣期石垣公開事業にかかる
発掘調査(OS15－４)報告書

調査個所	大阪市中央区大阪城　大阪城公園内　本丸地区
調査面積	459㎡
調査期間	平成27年8月18日～平成28年2月23日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、京嶋 覚

1)調査に至る経緯と経過

調査地は特別史跡大坂城跡の本丸地区に位置する。徳川期天守の南東に位置し、現存する金蔵(重要文化財)の東に当る(図1・2)。本調査地北側では、1984年に配水管埋設工事に伴って、南北2つの調査区を設定してOS84−17次調査が行われた[大阪市文化財協会1985・2002]。両調査区では豊臣期大坂城詰ノ丸の外周を巡る石垣が検出され、また北区では詰ノ丸の石組溝、南区では中ノ段の遺構が検出された。この調査は、豊臣期大坂城を知る上で極めて重要な成果となった。

大阪市により、上記の豊臣期大坂城の石垣を再発掘して一般市民に公開するための整備事業が計画され、2012年度に試掘調査が行われた。その結果、本格的な発掘調査を実施して徳川期の遺構の状況を確認するとともに、豊臣期石垣の現況確認を行うことが必要と判断された。これにより、2013年度にOS13−11・38次の2調査が、2014年度にはOS14−4次の調査が実施された(図2)。

OS13−11次調査では徳川期大坂城の金蔵に係わる区画施設とみられる南北方向の石列と石組溝が検出されたほか、瓦廃棄土壙群が検出され、三葉葵文鬼瓦など徳川期大坂城の瓦が多数出土した[大阪文化財研究所2014a]。

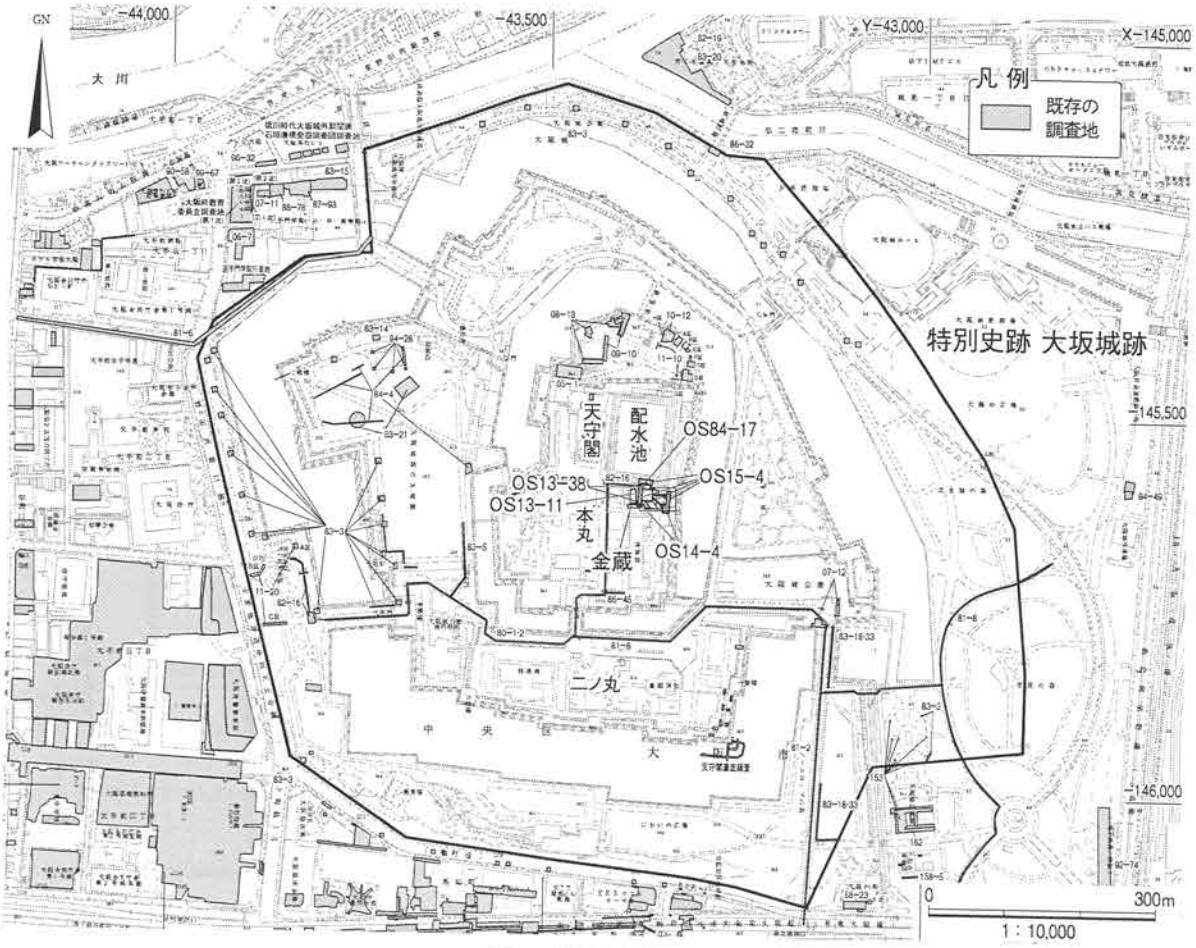


図1　調査地位置図

OS13－38次調査では、豊臣石垣の再発掘調査とOS13－11次調査で検出された金蔵の区画施設とみられる石列および石組溝の南側への延伸状況確認のための発掘調査が行われるとともに、豊臣期大坂城中ノ段と下ノ段を区画する石垣の位置を確認するための動的コーン貫入検査が行われた[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015b]。この調査により、金蔵の区画施設に係わる石列の南の延長部分を検出したほか、金蔵南側において東西方向の石組溝が新たに検出された。また、コーン貫入検査では豊臣期大坂城中ノ段の石垣あるいは裏込石が検出された。

これらの調査結果をもとに、工事予定範囲の徳川期の遺構確認と記録保存のためにOS14－４次の調査が行われ、西調査区では金蔵に係わる南北方向の石列の南側への延長状況および東西方向の石組溝の西側への延長部分を確認するとともに、東調査区では小石や瓦細片を敷詰めた徳川期の舗道遺構が新たに確認された。これは1783(天明３)～1848(嘉永元)年の大坂城を描いた『浪華城全図』に描かれた通路施設であると判断され遺構保存することになったため、建設予定施設の大幅な設計変更を行うことになった。

今回の発掘調査は、この設計変更の検討作業に伴い新たに遺構確認が必要になった箇所を含めた１～４区の４箇所を対象にして行った。

調査は2015年８月18日に準備工を開始し、翌19日から１区の本格的な調査を開始した。１区の調査が９月28日に完了したが、すでに９月２日から並行して調査を始めていた２区では、石列の西側で大型の柱穴が新たに３基確認され、コンクリート基礎撤去後にさらに２基確認された。OS13－38次

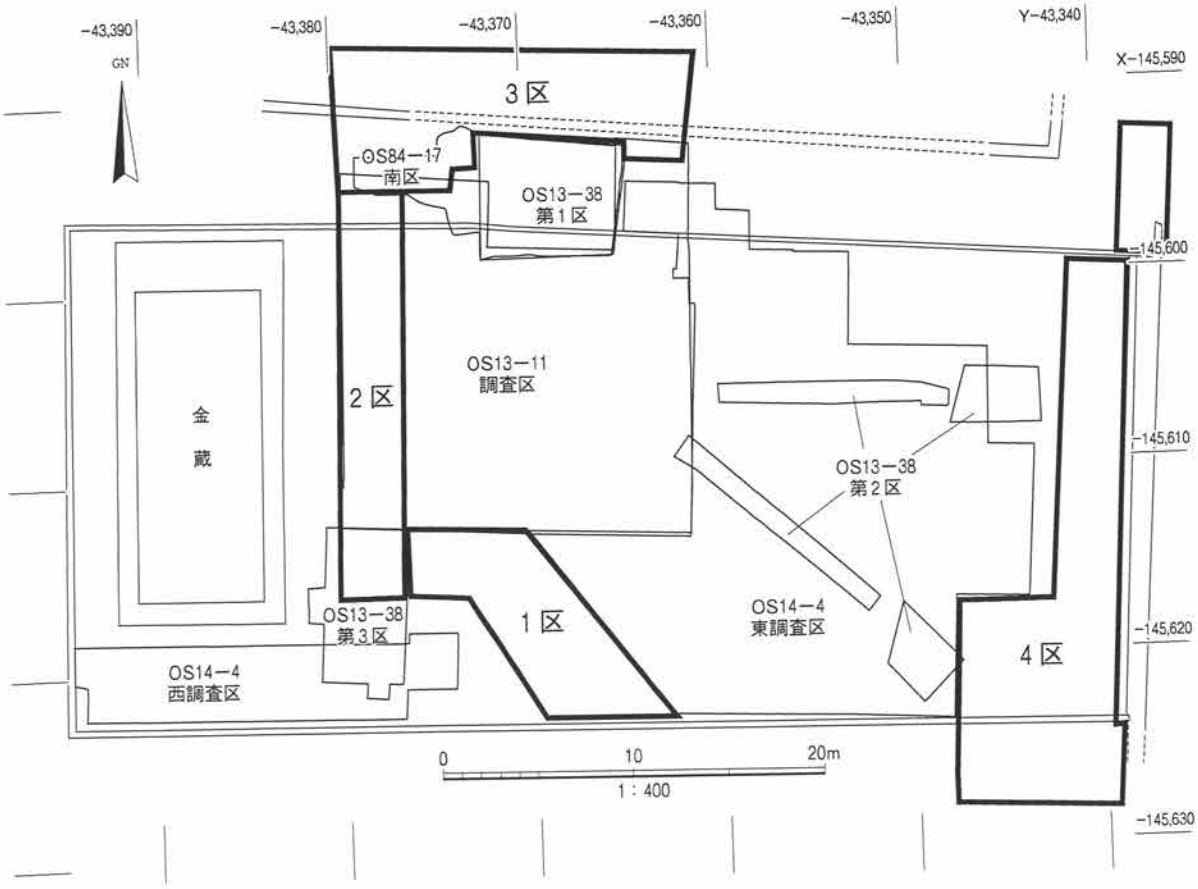


図２　調査区配置図

調査ですでに確認されていた1基を合わせて6基の柱穴が南北に並んで確認されることになった。また、この作業と並行して石列の石材の移動に伴う石材調査を行い、石材カードを作成して工事完了後の復元に備えた(9月2日～11日)。石材の取上げ、移動作業を行ったのち、コンクリート基礎撤去作業および、保存することになった柱穴以外の石列検出面以下の調査を行った。2区の調査は10月15日に完了した。

当初1区から4区までを順次調査していく予定であったが、大手前配水池敷地内に位置する3区での作業開始の手続きが遅れたため、4区の調査を10月6日に先行して開始した。4区の調査では雁木近くで石垣普請に伴うとみられる栗石堆積を含む盛土が確認され、雁木に平行する柱穴列なども検出された。10月31日・11月1日の2日間、2区と4区を対象に現地公開を行い、1,450名の見学者があった。4区の調査は11月11日に完了したが、この時点でも3区での開始手続きが未了であったため、市教委の指示により現場作業を一旦休止し、機材等の撤収を行った。3区の調査開始まで、室内で1・2・4区の調査記録や出土遺物の整理作業を進めた。

3区の調査開始は年明けの1月6日からとなり、配水池敷地の機械警備および、街灯配線の移設作業、鉄柵の撤去と樹木の伐採および搬出作業ののち、水道管の沈下調査のための試掘および観測用視準点の設置を行って、18日から法面裾の石垣を撤去しつつ表土掘削を開始した。東半部は徳川期の舗道遺構延長部、西半部は豊臣期の詰ノ丸石垣上面まで確認して2月12日に調査作業を終えた。また、4区北側では雁木の北延長を確認するための調査を2月1日から3日まで行い、記録を取った後すぐに埋め戻した。全体の埋め戻し復旧は3区の調査と並行して順次行い、機材等の撤収、ガラ類の搬出作業を行って現場での作業をすべて完了した。2月6・7日には3区を対象にした現地公開を行い3,400名の見学者があった。

各調査区は遺構保存の部分と3区の豊臣期石垣の検出部分を除いて、本丸再築時の一括盛土(第3d層)上面まで掘削して調査し、終了後は保護砂で養生して埋め戻した。

なお、今回の調査で使用した基準点は、OS13－11次調査においてMagellan社製ProMark 3により測位した基準点を用いた。本報告で使用した方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP＋○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3～8、図版1・2上、表1)

調査地の標高はTP＋30.6～30.8mとほぼ平坦であるが、4区南半の南部は一段高くなっており、TP＋31.2mである。

層序は、OS13－11・38次およびOS14－4次調査における成果に準じ、現代の整地層を第0層、近代の整地層を第1層、戊辰戦争で生じた焼土を多量に含む整地層を第2層、これよりも下位の徳川期の地層を第3層とした。

第0層：現代の整地層で、層厚は20～65cmである。

第1層：近代の整地層で、1区ではOS13－11・38次調査の層序と対比できる地層として、配水

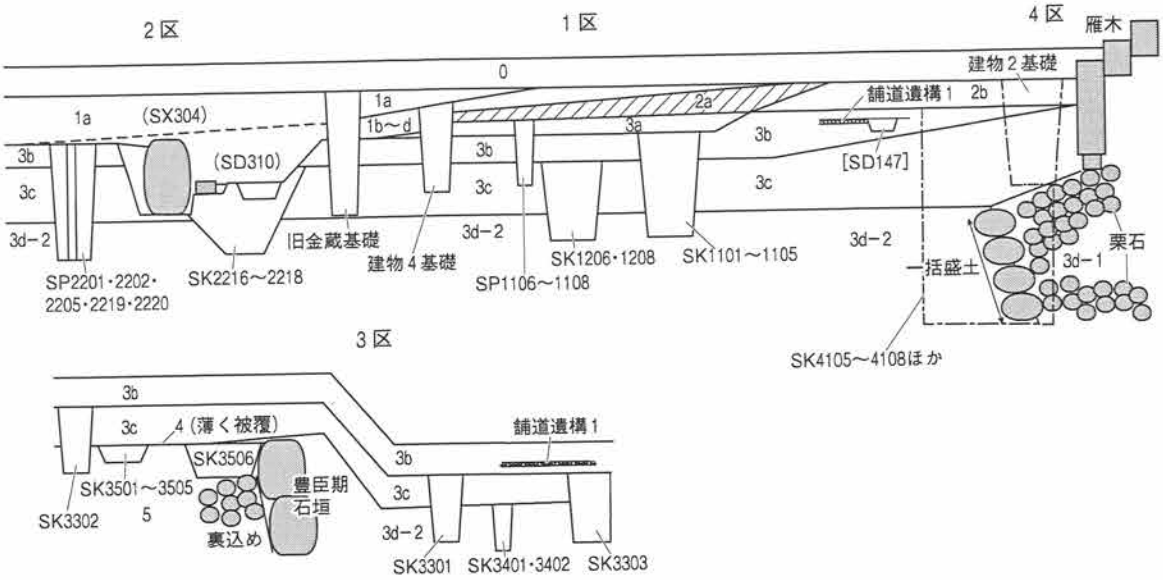


図3　地層と遺構の関係図

池工事に先立つ旧金蔵の移築時の整地層である第1a・b層、OS13－11次調査の石列SX304や石組溝SD310付近のみに分布する第1c・1d層を確認した。これ以外に煉瓦積建物SB103(以下**建物4**とする)に伴う整地層とみられる第1e層を1区南部のみで確認した。

第1a層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)～暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒～粗粒砂で、漆喰や炭を含む。層厚は10～38cmであった。第1b層は暗灰黄色(2.5Y5/2)～明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質細粒～粗粒砂で、旧金蔵基礎の内側のみに分布する。層厚は最大で15cmである。第1c層は灰黄色(2.5Y6/2)～黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトで部分的に還元されて青みを帯びている。第1d層は黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトである。いずれも層厚は最大で10cmほどで1区西端のOS13－11次SD310近くに分布する。第1e層は黄褐色(2.5Y5/3)～オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで焼土・炭粒を含む。**建物4**の基礎付近が最大で、15cmの厚さで堆積する。

第2層：戊辰戦争時の火災で生じた焼土や焼けた瓦を主体とする整地層である第2a層と、焼土・炭を含む細粒砂層の第2b層に細分される。

第2a層は暗褐色(7.5YR3/4)シルト質細粒～中粒砂で焼土・焼け瓦を多量に含む。層厚は最大で15cmで、1区の**建物4**西辺基礎から東側のみで確認された。第2b層は灰褐色(7.5YR4/2)～褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで、炭・焼土粒を多く含むほか漆喰も少量含む。層厚は最大で28cmである。4区南半の西壁付近のみで確認された。

煉瓦積の**建物4**の東辺基礎付近から西側に第2a層が厚く分布しており、これより東側には第2b層が主として分布することが報告されている。

第3層：徳川期の整地層および盛土層である。徳川初期の一括盛土である第3d層とこれ以降の第3a～3c層の4つに大きく細分できる。4区では後述するように一括盛土とは異なる本丸石垣構築に際しての盛土が確認されたため、これを第3d－1層とし、従来の一括盛土を第3d－2層として区別した。

第3a層は褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂・黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトの整地層で、層厚は最大10cmである。1区の**建物4**西端基礎付近から東側に分布する。本層上面の遺構としてはSP1106～

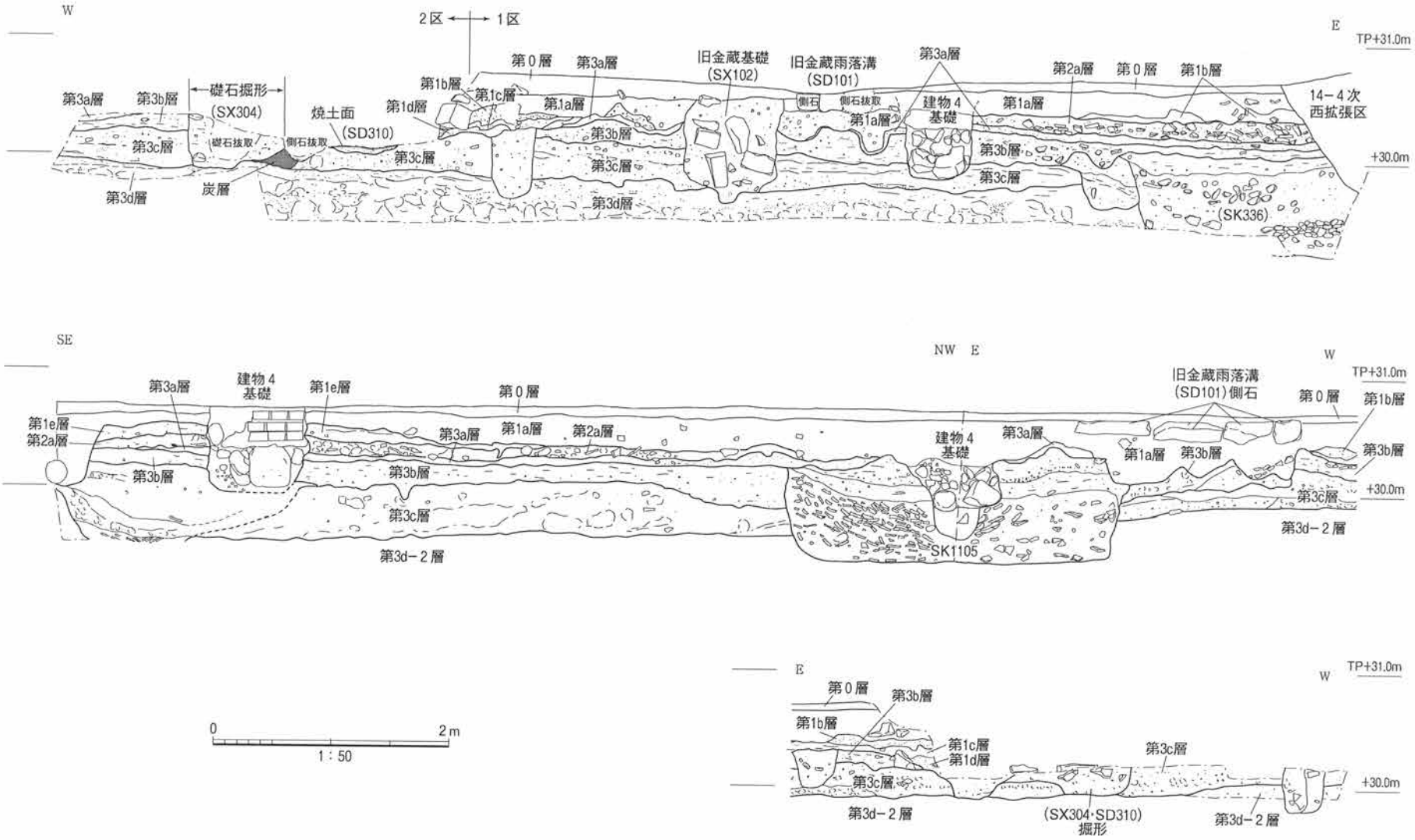


図4　1区北・南壁地層断面図

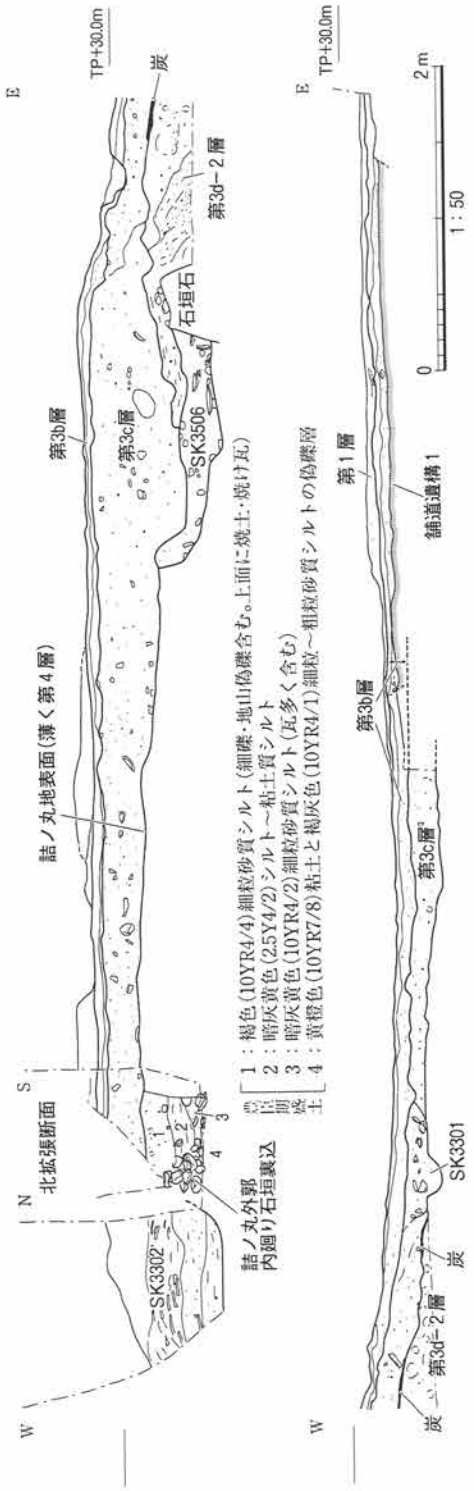


図5　3区北壁地層断面図

1108がある。

第3b層はにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質細粒砂ないしオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～粗粒砂質シルトなどからなる整地層で、層厚は最大で36cmである。1・2・4区に分布する。1区で瓦廃棄土壙、2区の石列西側の上面で石列掘形や控柱柱穴を検出した。4区西南部の舗道遺構の延長部分では、細粒砂とシルトが薄く互層をなしていた。

第3c層は炭や焼土を含み、シルトや砂礫の偽礫を主体とする黄褐色(2.5Y5/4)～にぶい黄褐色(10YR4/3～5/4)細粒砂質シルトの整地層で、層厚は1・2区が20～40cm、4区が最大で60cmである。1・2区で瓦廃棄土壙が検出された。

第3d層は大坂城再築時の盛土で、本丸一括盛土の第3d－2層と、石垣構築に伴う盛土である第3d－1層に細分できる。

第3d－1層は4区で確認された盛土で、栗石を主体としつつ、炭・漆喰粒を少量含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒～中粒砂で、一部に灰色(5Y5/1)細粒砂質シルト層が挟在する地層である。層厚は150cm以上である。4区南半では最上部に栗石層があり、雁木基礎石の根石下に続いていくが、北半では最上部に栗石層は見られない。

第3d－2層は大坂城再築時の本丸一括盛土で、1・2・4区で確認された。1・2区では黄褐色(2.5Y5/4～10YR5/6)細粒砂やシルトの偽礫層である。4区では灰オリーブ色(5Y5/3)～黄褐色(2.5Y5/4)極細粒砂質シルトや粘土質シルトの偽礫層で、上面から50cm下に層厚1～3cmの、鉄酸化物が沈着して明黄褐色(10YR6/6)を呈する細粒砂層が直線的に介在する。全体の層厚は110cm以上である。

第4層は3区の豊臣期大坂城詰ノ丸盛土上面で薄く確認された大坂夏ノ陣の火災により生じた焼土や炭、焼け瓦などを主体とする整地層である。1620(元和6)年の徳川秀忠による大坂城再築が始まるまでに整地されたと思われる。

第5層は3区の詰ノ丸地表面をなす盛土層である。下部は上町台地の地山層上部と思われる黄色粘土質シルト偽礫を主体とし、上部は灰白色粘土質シルト・褐色シルト質中粒～粗粒砂層が明瞭な境界

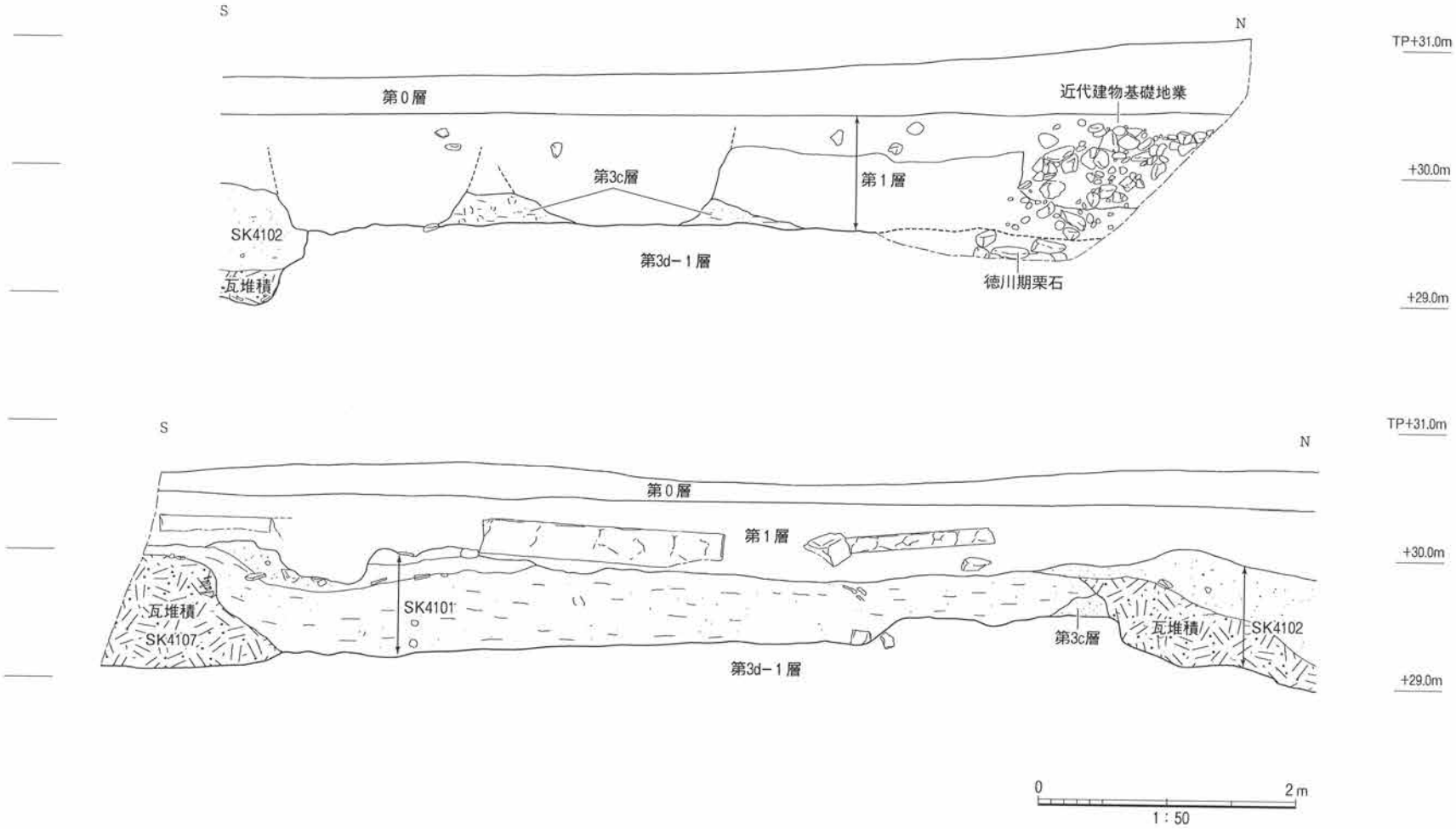


図6　4区北半西壁地層断面図

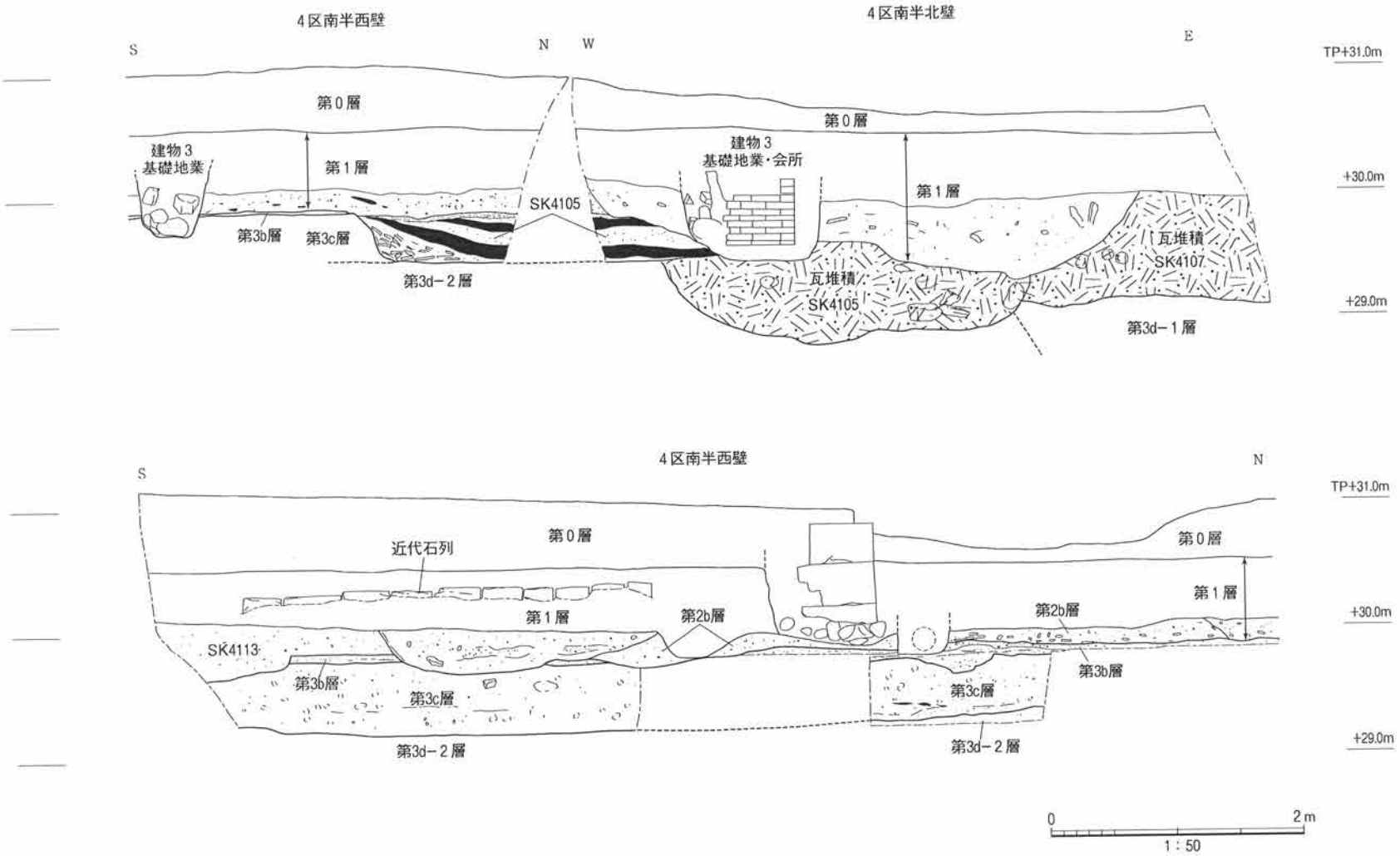


図7　4区南半北・西壁地層断面図

表１　地層番号対照表

OS84－17		OS13－11		OS13－38		OS14－4		OS15－4				大坂城の歴史	
第１層	明治時代以降の整地層	第０層	現代盛土	第０層	現代盛土	第０層	現代盛土	第０層	現代盛土		第０層		昭和大正
		第1a層	旧金蔵に伴う整地	第1a層	旧金蔵移築時整地	第１層	近代盛土	第1a層	旧金蔵移築、建物１建設時など	旧金蔵高槻移築1929(昭和４)年以降、建物２1914(大正３)年以降	第1a層	天守閣・師団司令部1931(昭和６)年	
		第1b層	煉瓦建物(SB103)に伴う整地	第1b層	旧金蔵移築時基礎工事の整地	第1b層		第1b層	旧金蔵移築時基礎工事の整地	配水池竣工1892(明治25)年以前	第1b層	陸軍第四師団1888(明治21)年	明治
				第1c層	(SX304)・(SD310)を埋める整地			第1c層	(SX304)・(SD310)を埋める整地		第1c層		
				第1d層				第1d層			第1d層		
				第1e層	明治以降の地層	第1e層		第1e層	建物４に伴う整地	大阪実測図1887(明治20)年以前	第2a層	大阪鎮台1871(明治４)年	
第２層	戊辰戦争焼土層	第２層	戊辰戦争焼土による盛土	第２層	戊辰戦争焼土による盛土	第2a層	戊辰戦争焼土による盛土	第2a層		戊辰戦争1868(慶応４)年直後の整地	第2b層		
	天守閣焼失焼土層など					第2b層		第2b層			第2c層		
		第3a層	(SX304)以東に分布する整地層	第3a層	幕末ごろの盛土	第3a層	幕末ごろの整地層	第3a層	第2a層と一連の整地		第2d層	戊辰戦争1868(慶応４)年	
		第3b層	石列(SX304)構築時の整地層	第3b層	石列(SX304)構築時の整地層	第3b層	舗道遺構19世紀前半の整地	第3b層	新金蔵・区画塀(SX304)舗道遺構	大坂城絵図1793(寛政５)年～浪華城全図1848(嘉永元)年	第3a層	新金蔵1751(宝暦元)年	19世紀
	大坂城再建時盛土	第3c層	大坂城再築当初の地表をなす盛土	第3c層	大坂城再築当初の地表をなす盛土	第3c層	大坂城再築当初の地表をなす盛土	第3c層	大坂城再築当初の地表をなす盛土	第２期本丸普請1624(寛永元)年～竣工1629(寛永６)年	第3b層	大坂城再築1620(元和６)年～1629(寛永６)年	18世紀 徳川期
								第3d－1層	石垣普請盛土		第3c層		
		第3d層	大坂城再築一括盛土	第3d層	大坂城再築一括盛土	第3d層	大坂城再築一括盛土	第3d－2層	本丸一括盛土		第3d層		17世紀
第３層	大坂夏ノ陣焼土層							第４層	大坂夏ノ陣焼土層	1615(慶長20)年～1624(寛永元)年	第４層	大坂夏ノ陣1615(慶長20)年	
	秀吉築城時盛土							第５層	豊臣期大坂城詰ノ丸盛土	大坂城築城1583(天正11)年	第５層	大坂城築城1583(天正11)年	豊臣期

をなして盛られている。

これまでの地層に関する調査所見はOS13－11次調査で設定された層準を基本にして、各調査での新知見を追加していくものであったが、それぞれ限定された範囲での所見であり、今回の調査所見を踏まえた総合的な層準を表１に提示しておきたい。

従来の所見と異なるのは、豊臣期の大坂城詰ノ丸盛土を第５層とした点、徳川期大坂城再築時の一括盛土と別に石垣普請に伴う盛土を新知見として加え、幕末の地層とされた第3a層が直上の焼土層の整地である第2a層と同じ分布を示すことから、戊辰戦争直後の大阪鎮台設置に伴う第２層の整地とした点である。近代の地層では、第1e層を煉瓦建物建物４に関連する整地層と判断して第２層の範疇に含めた点、第1a層と第1b層の区分を雁木際の大型倉庫建物２建設(大正以降)→旧金蔵の高槻移築(昭和４年)→車庫の建物１建設後の終戦までの整地と、陸軍第四師団への改編後の旧金蔵移築に伴う整地と解釈した点である。

ii)遺構と遺物

a．豊臣期大坂城詰ノ丸の遺構(図９～11、図版２・３上)

３区西半部で豊臣期大坂城の詰ノ丸東南隅の上面を検出した。OS84－17次調査の南区で発見された石垣および裏込め部分を再発掘し、さらにその北側を幅約２mの範囲で豊臣期盛土上面を検出した。

OS84－17次調査で南面石垣の裏込め幅は約2.0mと判明しており、そこから北側は盛土のみとなっ

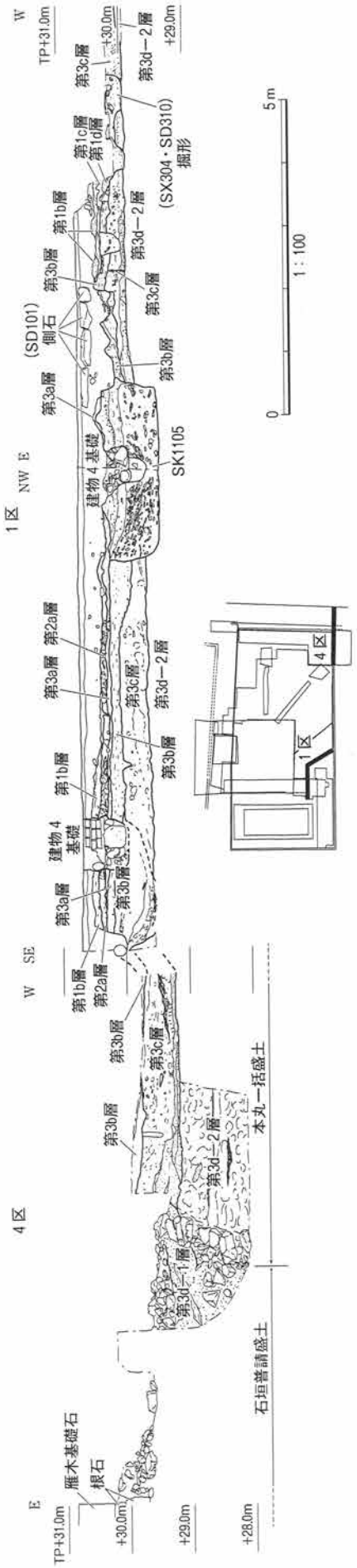


図8　東西地層対比図

ていた。

一方、東面石垣の裏込め幅は北壁際トレンチ部で約1.5mとやや狭い。東面石垣石の最上部は新たに2石確認したが、いずれも南面石垣に比べて小ぶりの石が使われており、このことが裏込め幅の違いに関係しているかもしれない。東面石垣の一番北の石は表面の風化が顕著で剥落しているが、直径約80cmの柱座状の加工があり、礎石の転用材の可能性がある。

また、OS84－17次調査の北区で確認されている詰ノ丸外郭内廻り石垣の裏込め幅は、北に掘り進んだトレンチ調査で最大約1mであることを確認した。

裏込め部分は後述のとおり夏ノ陣後に掘り込まれており、豊臣期の地表面は失われていたが、盛土上面はごく薄く焼土(第4層)で被覆され、焼土や焼けた瓦片や石が入る土壙SK3501～3506が検出された。

SK3501　東西1.4m、南北1.1m、深さ0.19mの不整形の土壙である。一部掘削したところ、埋土はにぶい赤褐色(5YR4/4)シルトの多くの焼土が含まれ、焼け瓦のほか焼壁片や備前焼擂鉢片が出土した(図9)。中井家『大坂御城小指図(本丸図)』や『大坂冬の陣図屏風』(東京国立博物館蔵)によってこの地点にあったとされている隅櫓の礎石抜き取り穴などの可能性がある。

SK3502　東西1.0m、南北1.1mの土壙で、SK3501と埋土が類似しており、同様の遺構と思われるが、未掘である。

SK3503～3505　北壁際で検出されたいずれも未掘の遺構である。瓦・石などが廃棄されており、埋土に焼土・炭が多く含まれる。SK3504は後述のSK3401と同じく壁面が被熱し、炭層を伴う遺構であり、次項の徳川期大坂城本丸普請期に降る可能性がある。

SK3506　東面石垣裏の焼土・炭や焼け瓦を含む土壙であり、北壁際のトレンチ調査の底面で裏込石が検出された。再利用のため裏込石を掘り出した後、焼け瓦などを廃棄したと思われる。東面石垣東側の徳川期一括盛土(第3d－2層)は石垣石を薄く被覆してSK3506埋土上にも及んでいる。一括盛土の施工以前に戦災瓦礫の整理などが行われたことを示して

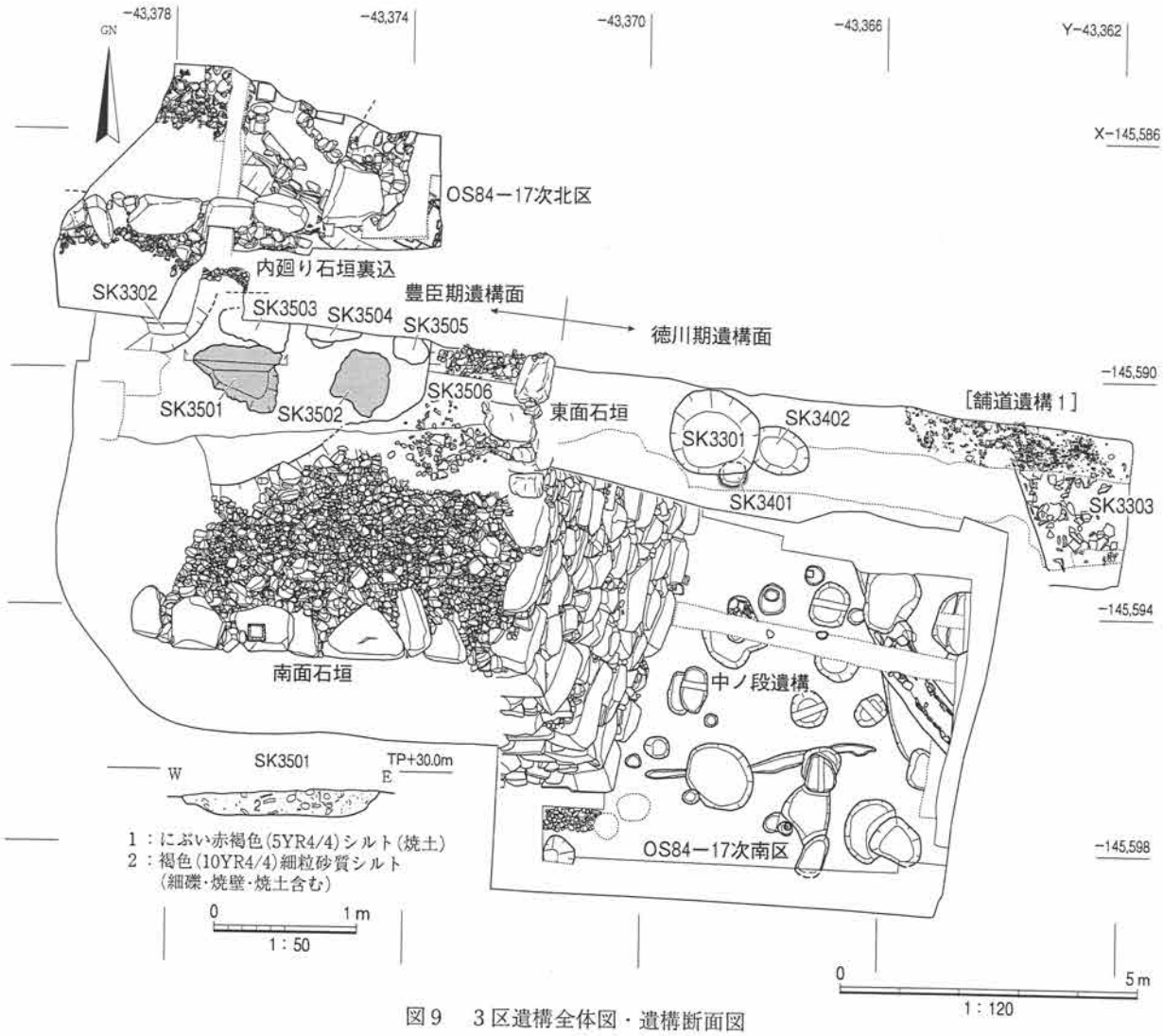


図９　３区遺構全体図・遺構断面図

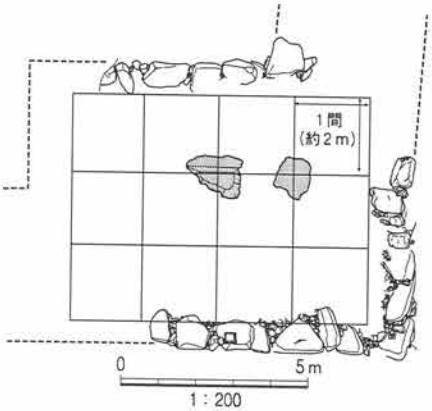


図10　櫓建物柱位置推定図

いる。

b．徳川期大坂城本丸普請期の遺構(図11～15、図版４・５)

３区中央部の第3d－２層上面で土壙SK3401・3402を検出した。

SK3401　直径0.3m、深さ0.12mの正円形の小土壙で、底面に厚さ約５cmの薄い炭層が堆積し、その上は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂質シルトで埋められていた。壁面より数cmの厚さの範囲が一様に被熱により赤変しており、一括盛土の施工直後の竈や炉などと思われる。この10mほど西の豊臣期盛土上面にも未掘だが類似した遺構SK3504があり、これも第3d－２層上面遺構に相当する可能性がある。

SK3402　東西1.0m以上、南北0.8m、深さ0.15mの浅い土壙である。埋土は炭・焼土粒と多くの瓦片を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、上面には炭を多く含む暗褐色(10YR3/3)細粒～中粒砂質シルトが薄く堆積していた。

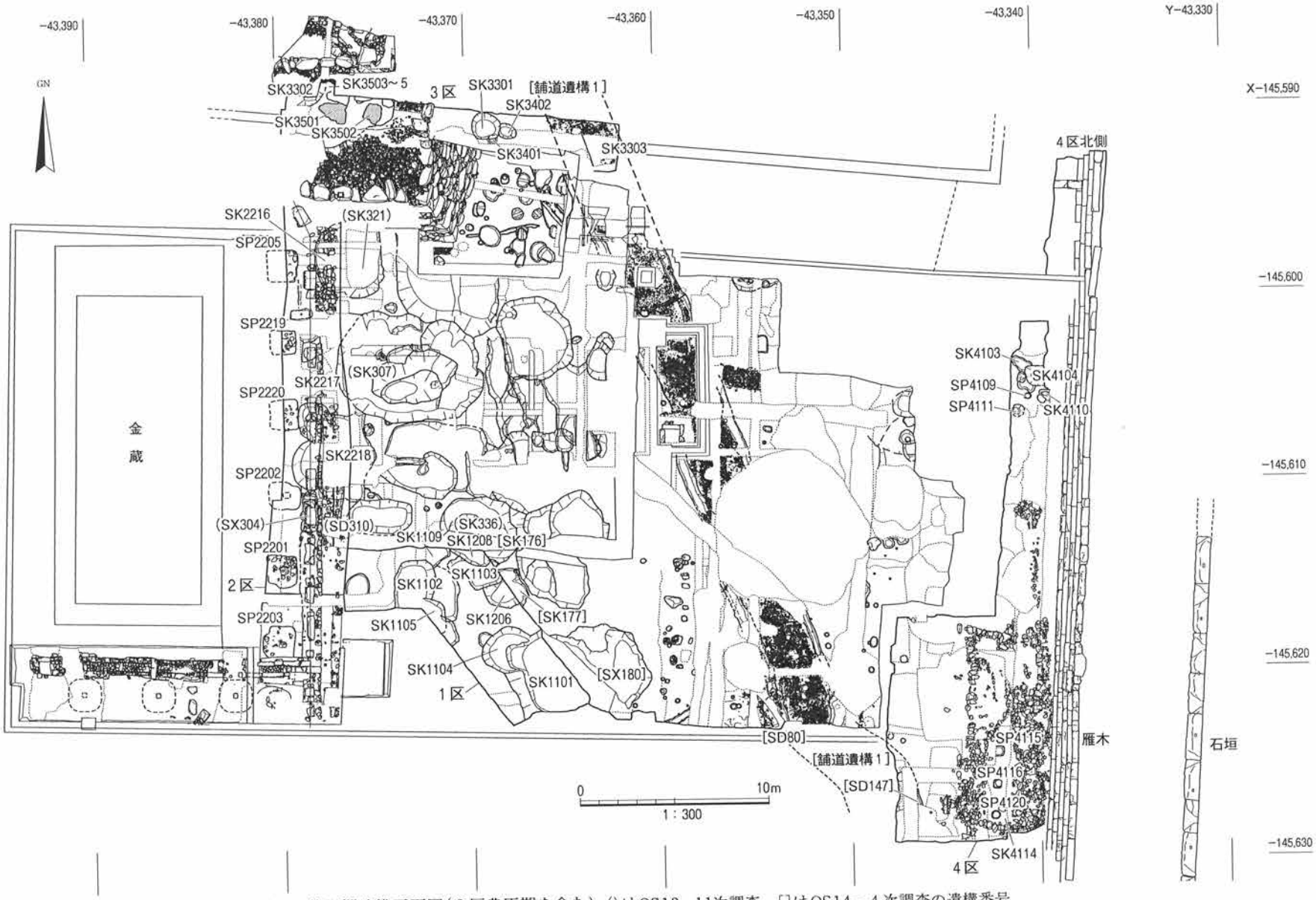


図11　徳川期遺構平面図（3区豊臣期を含む）（）はOS13−11次調査、[]はOS14−4次調査の遺構番号

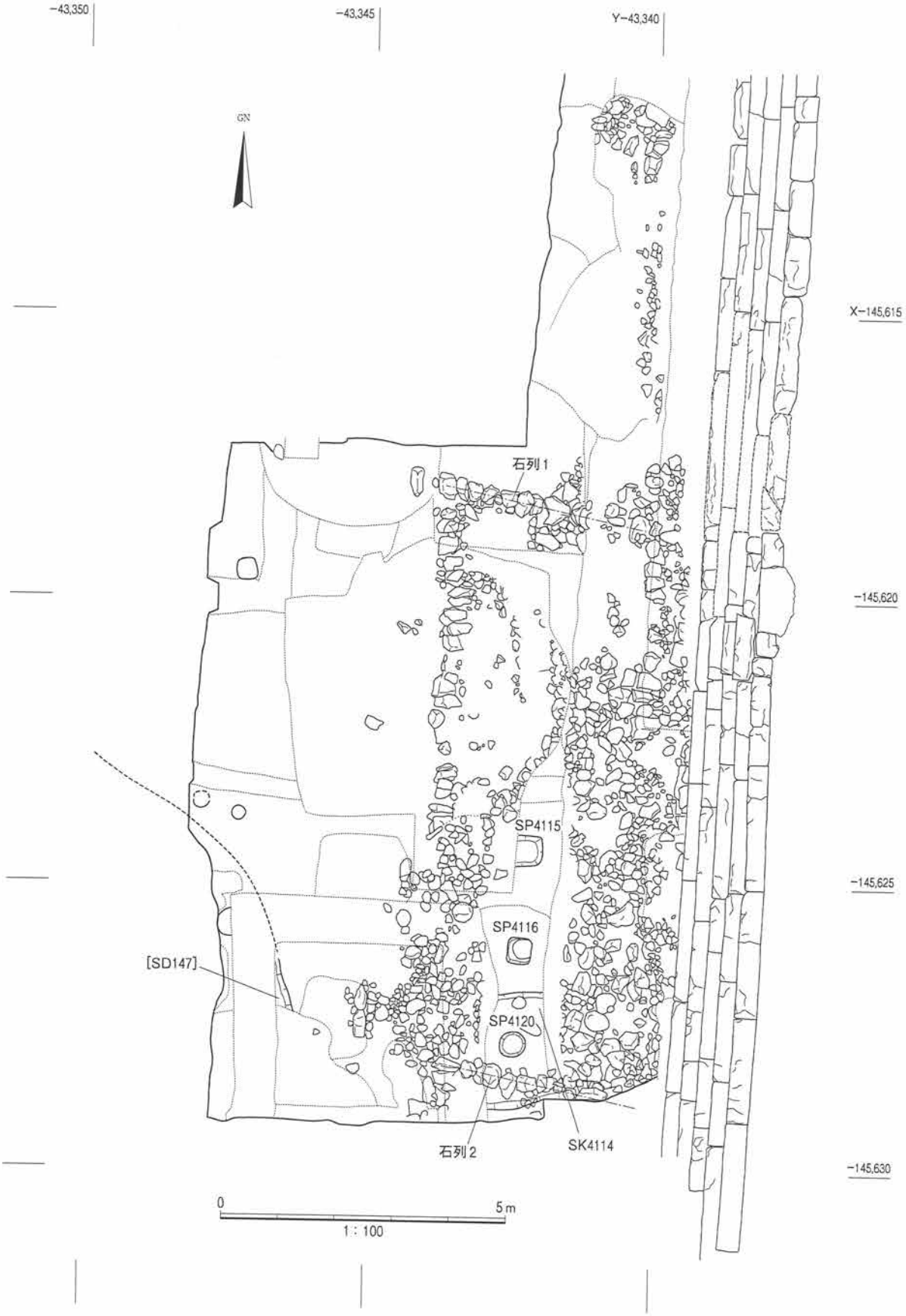


図12　4区南半徳川期遺構平面図
[]はOS14－4次調査の遺構番号

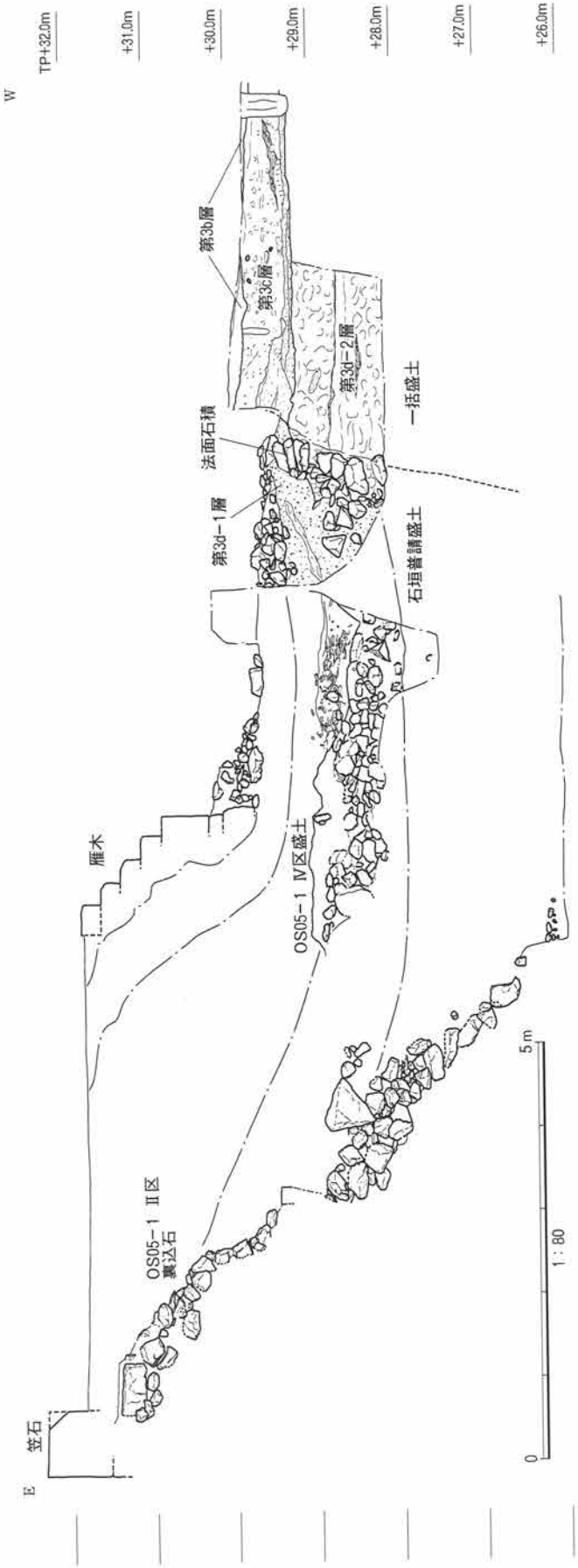


図13　4区南半徳川期盛土断面図

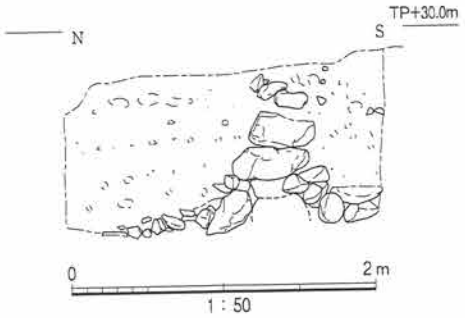


図14　石列1断面図

これらの遺構は徳川期一括盛土の施工直後で、本丸築造時の遺構と考えられる。

4区南部で、従来、徳川期一括盛土としてきた第3d－2層と、その法面の石積および栗石層を含む石垣普請に伴う盛土第3d－1層を新たに検出した。また、4区東辺の雁木基礎石の状況を部分的に確認すると共に、4区北側に埋没している雁木の北延長部分を7mにわたり確認した。

石垣普請盛土　4区南部の近代土壙SK4106などの断面および底面で、一括盛土と栗石層を含む石垣普請に伴う盛土の施工状況を確認することができた(図12・13)。第3d－2層の東端は南北方向の直線をなしており、これより東には石垣普請に伴う第3d－1層の盛土地業がなされている。第3d－2層東端の盛土法面の勾配は約75°で、40～50cmの石を積み上げて法面を押さえていた。この法面の石は第3d－2層の土で固定されているが、最上部では第3d－1層で固定しているように見える部分もある。盛土を行いながら石材を固定して養生したことを示す。南半部では石垣普請の盛土の最上部に約50cmの厚さで栗石層があり、その下に数10cmの厚さで黄褐色シルト質細粒～中粒砂層が介在し、さらに栗石層が下位に続く。

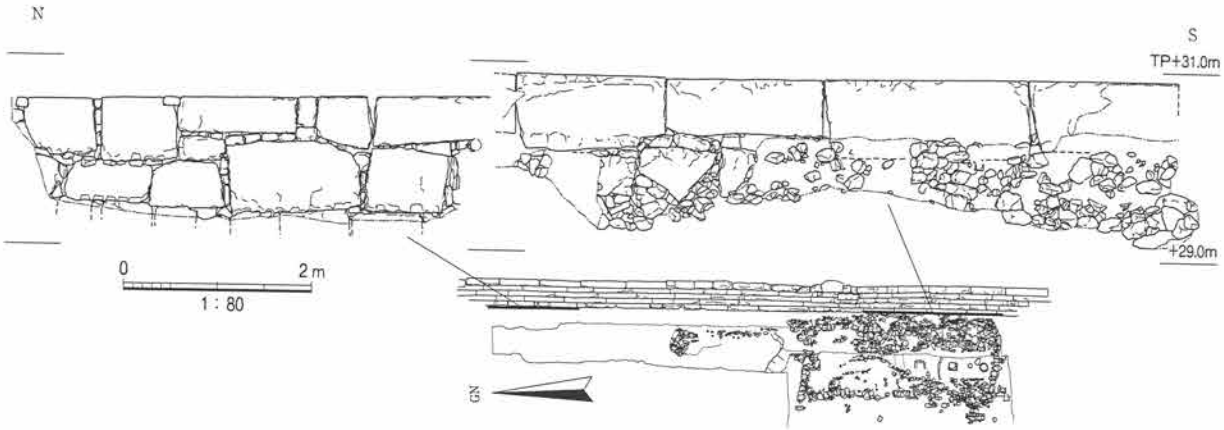


図15　雁木基礎石立面図

この盛土の状況は本丸北西の山里出桝形におけるOS05－１次調査Ⅳ区で観察された盛土に類似している。同調査Ⅱ区の石垣裏込石とともに図13にはめ込むと、この盛土の上に雁木および多聞櫓の盛土がなされていると推定できる。ただし、４区北部では最上部に栗石層がなく、南部と異なる。石垣普請の盛土施工が一律でないことを示している。

第3d－１・２層の南北境界線は石垣から約12.5mに位置し、この地点での徳川期石垣が豊臣期の「古石垣」から約６間(12m)離れていると推定されている[中村博司2010]ことから、第3d－２層の一括盛土は豊臣期本丸の下ノ段石垣ラインから中ノ段全域を埋め立てていると考えられる。

石列１・２　４区南部の最上部栗石層の上面で大型の石を積み上げた東西方向の石列が２箇所で検出された(図12・14)。一括盛土東端から雁木に向かって2.5m確認され、さらに雁木まで続く可能性がある。雁木に直行する東西軸より西でやや北に振る方位で平行しており、間隔はほぼ10mで５間である。大坂城再築の丁場割を示した国立国会図書館蔵の『大阪御城之図』[木越隆三2012]によれば、馬印櫓から北側の石垣普請は福岡藩黒田家の北の丁場で、櫓南東角から15間４尺６寸８分で約31mまでとなり、南側の**石列２**はほぼその位置に当たる。石列が丁場割を示す可能性を示唆しているが、次の臼杵藩稲葉彦六の丁場が４間４尺で約9.1mと、**石列１**との距離に合わないことから、丁場割を示すのではなく、５間間隔に設置された何らかの施工基準の標示である可能性もある。

雁木基礎地業　４区の北端と南部で雁木の基礎地業を確認した(図15)。北端部では上部４段の雁木石の下に、幅80～140cmの切石を２段に積み上げて高さ1.1～1.3mとしていた。その下位には幅70cm未満の切石が並んで確認された。さらに下位に存在する栗石の上に切石を積み上げて基礎石の高さを合わせたと推定される。地上に出る上段の石材の外面は平滑に仕上げている。これらの石材には矢穴が認められるものがある。

一方、南部の基礎石は幅160～220cm、高さ60～80cmの切石で、その下に高さを調整する根石となる石が栗石面上に置かれていた。根石には下端を尖らせて栗石に突き刺すように固定したものが見られる。

使用される基礎石の大きさやそれ以下の仕様の違いは、丁場の違いに起因するものと思われる。

c．18世紀中葉～19世紀前半の遺構(図11・16～19、図版６・７)

第3c層上面では、１～４区で瓦などの廃棄土壙であるSK1206・1208・2216～2218・3301～

3303・4114が検出された。

1区　SK1208はOS13－11次調査のSK336およびOS14－4次調査のSK176と、SK1206はOS14－4次調査SK177と同じ遺構で、SK1208は円礫が主体で廃棄されていた。

2区　SK2216・2217はOS13－11次調査のSK321・307と同じ遺構で、SK2218もOS13－11次調査で一部検出されている。いずれもOS13－11次調査の石列SX304や石組溝SD310が構築される以前の瓦廃棄土壙である。1751(宝暦元)年に一部が金蔵に改築された長屋建物の解体に伴う不用瓦等の廃棄土壙の可能性がある。

3区　SK3301は中央部で検出された直径1.5m、深さ0.55mの瓦廃棄土壙で、埋土は黄褐色(2.5Y5/7)細粒砂質シルトである。菊丸瓦を含む瓦の小片を中心に廃棄されていた。

SK3302は西北端で検出した土壙で、埋土は上部が暗灰黄色(2.5Y4/2)炭・漆喰が混る細粒～中粒砂質シルト、下部はにぶい黄褐色(10YR5/4)～褐色(10YR4/6)細粒～粗粒砂質シルトで、上部下半に瓦片が多く含まれていた。東西1.0m以上、南北1.2m以上、深さ0.75mで、OS84－17次調査の北区南西部にも及んでいたと推定される。

SK3303は東端の舗道遺構の下位で検出されたため未掘である。東西2.0m以上、南北1.5m以上で、舗道遺構1はこの上に構築されている。

4区　南部の南東隅で検出されたSK4114がこの層準の遺構と考えられ、第3c層上面の他の瓦廃棄土壙から多く出土する菊丸瓦を含む瓦と漆喰を主体とする浅い廃棄土壙である。

第3b層上面では各地区で下記の遺構を検出した。

1区　瓦などを廃棄した土壙であるSK1101～1105を検出した。SK1101はOS14－4次調査で19世紀前半以降で戊辰戦争前とされたSX180と同じ遺構で、鬼瓦を含む瓦や陶磁器類が多量に出土した。SK1102～1105は2～3mの小規模の瓦廃棄土壙である。

2区　OS13－11次調査の石列SX304を礎石とする塀の控柱の柱穴SP2201・2202・2205・2219・2220を検出した(図16)。また、OS13－38次調査で確認されていた柱穴を再検出し、SP2203とした。さらに礎石の掘形や塀に伴うOS13－11次調査SD310を再調査した。

石列SX304は1793(寛政5)年の『大坂城絵図』に描かれた新旧の金蔵がある敷地を囲う塀の礎石に当たると推定されていた。今回の調査では石列西側を掘り下げて柱穴の存在を確認した。柱穴は一辺約1.5mの方形を呈し、深さは断ち割ったSP2202では検出面から約1.5mであった。柱痕跡は20～25cmで、SP2202では垂直に立てられ、下に根石が置かれていた(図17、図版7上)。検出した平面形から角柱であった可能性が高い。掘形埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、花崗岩の割石が多く含まれていた。柱痕跡が確認できたSP2201・2202・2219・2220には焼けて炭化した木材片や焼土が顕著に見られ、火災にあったことが窺える。

柱間隔は約4m(2間)で、石列SX304中心軸からの距離は約1.5m(5尺)である。控柱は本丸桜門両脇の多聞塀の控柱と同じ直立した支柱に塀を支える斜めの板材が取り付けられた構造と推定できる。柱間隔と塀との距離は桜門両脇の多聞塀と一致する。塀の礎石となる石列SX304は幅40～70cm、長さ100～120cmの礎石を0.5～0.7mの間を開けて並べており、控柱の柱穴はその中間の位置にある。

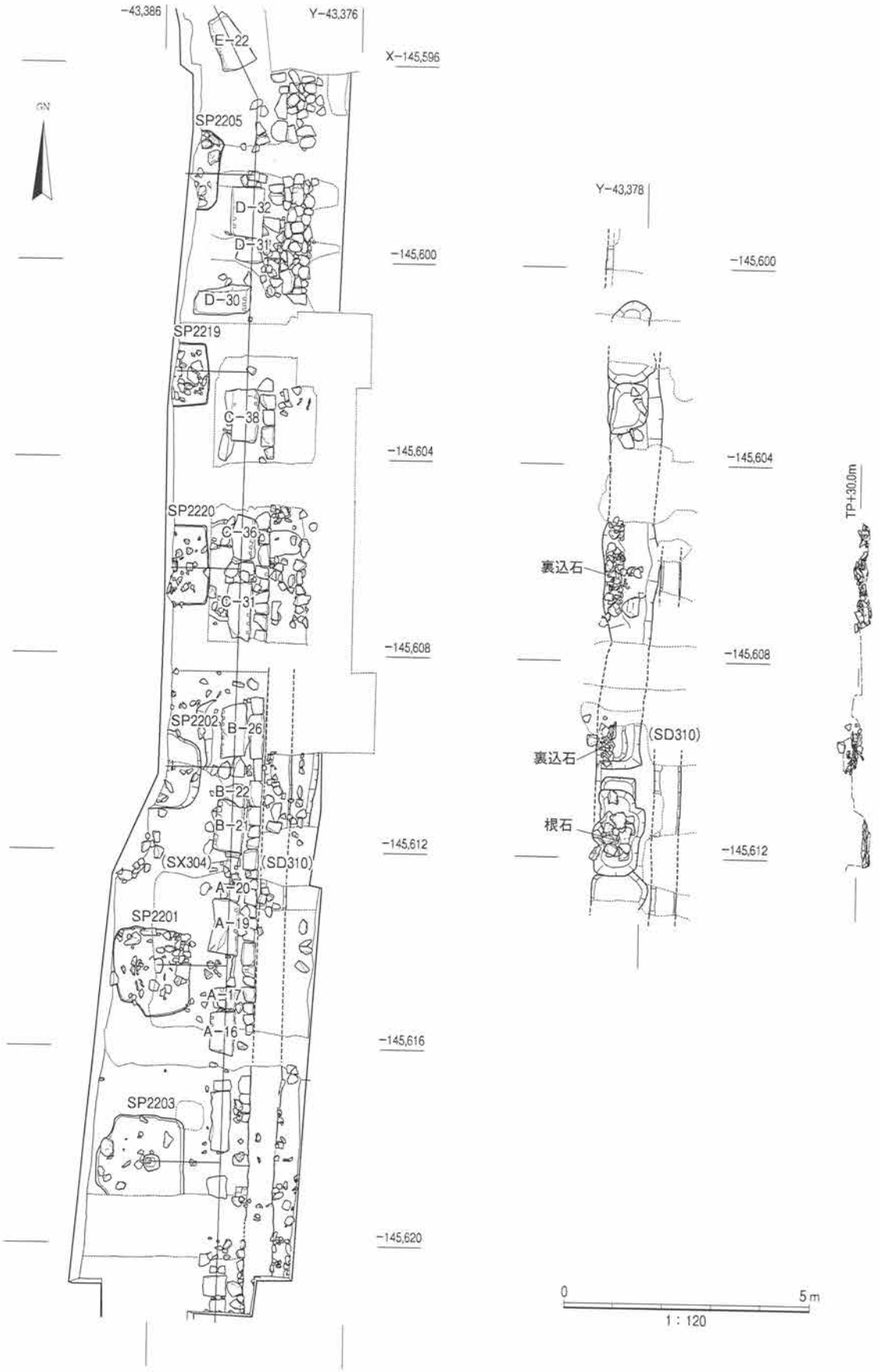
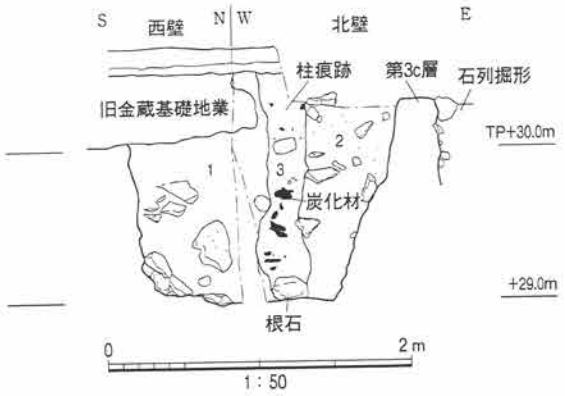


図16　2区塀(SX304)および控柱柱穴平面図
()はOS13－11次調査の遺構番号

また、OS14－４次調査金蔵南側の調査区で方形の柱痕跡が空洞になって３箇所で確認されており、その間隔も約４ｍであった(図11)。この東端の柱痕跡と石列SX304の距離も約４ｍで、石列SX304を基準に割り付けられたと推定されること、『大坂城絵図』で塀が金蔵南で西に曲がっていることから、これらも一連の控柱であると考えられる。



1：花崗岩割石を含む黄褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト
2：細粒砂～中礫および花崗岩割石を含む黄褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト
3：炭化木・焼土を含む暗黄褐色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂

図17　２区SP2202断面図

石列SX304の礎石は幅１ｍ前後の溝状の掘形を掘って設置されていたが、礎石の高さを揃えるためにさらに深く掘削されているものもある(図13)。また、上面の高さと水平を調整するために全体あるいは一部に根石を敷いたり、安定させるために裏込石を詰めたりしている礎石もある(図版７下)。根石や裏込石は柱穴に含まれるものと同じ花崗岩の割石である。

礎石のうちA－19の底面とB－21の南面および西面に刻印があり、B－21西面は不明だが他の２箇所は分銅紋である。また、礎石に焼けた痕跡は認められないが、石組溝SD310の石材のうち17点に被熱した痕跡が確認されでおり、礎石A－19からC－36にかけての範囲で確認された溝の埋土上面は被熱して赤変していた。控柱の焼失に加えて塀が火災に遭ったことを物語る事実といえる。

３区　調査区東部の北壁沿いの第3b層内で、OS14－４次調査で初めて確認された礫や瓦を敷き詰めた舗道遺構１の北延長部分を検出した。南部は近代の掘削によって路面は失われており、既述した下位の第3c層上面の瓦廃棄土壙SK3303が確認され、瓦が廃棄された後に路面が造成されていた(図版３中)。

また、石列SX304がそのまま北に続く可能性があったが石材は確認されず、最北端で北西に軸を変える礎石E－22の東でこれを避

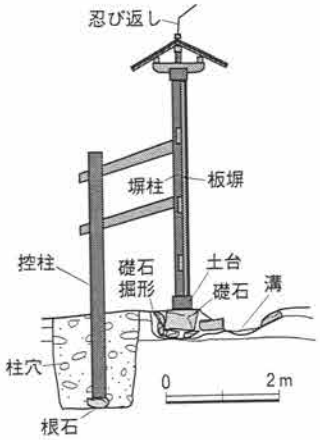


図18　塀復元図

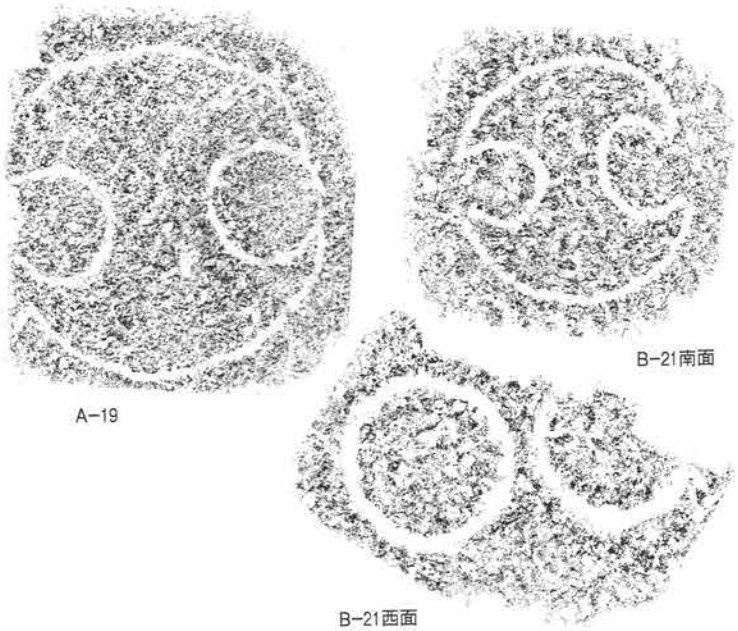


図19　礎石刻印(S＝１／６)

けて掘られた近現代の土壙が確認されたことから、E−22は当初の位置を保っている可能性が高い。

4区　OS14－4次調査の舗道遺構1について、南西部の第3b層に砂とシルトの薄い層が互層となる部分が見られ、その東縁の位置でOS14－4次調査で検出された東側溝SD147の延長部とみられる溝の痕跡を確認した。埋土は炭･焼土粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトである。これによって、舗道遺構1は南に向かってやや東に屈曲してさらに南に屈曲して馬印櫓方向に延びていくと推定され、1783(天明3)～1848(嘉永元)年の『浪華城全図』にあるこの通路が同様に屈曲して描かれている点と符合する。

北端部ではSK4103・4104・4110、SP4109・4111を検出した(図11)。

SK4103・4104は瓦主体の小型の廃棄土壙で、SK4110は丸瓦の隅切瓦を凹面を上にして設置した浅い土壙で、排水用に置かれて使用された可能性がある。SP4109は直径0.37m、深さ0.3mで、埋土は黄褐色(2.5Y5/4)細粒～中粒砂質シルトである。直径10～15cmの柱部分が空洞になっており、平瓦片が落ち込んでいた。SP4111は直径0.7m、深さ1.0mで、近代土壙SK4102に壊されていた。埋土は炭・細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで、下部に40cm前後の石が入れられていた。

これらの遺構は4区北端の狭い範囲に集中し、いずれも第3c層上面で検出した。しかし、4区北半には第3b層が遺存しておらず、この地点がOS14－4次調査で検出された舗道遺構2の延長線上で、『大坂城絵図』や『浪華城全図』に描かれている「同心御番所」の位置に当ることなどから、第3b層上面の遺構として報告する。

南部の雁木と平行してSP4115・4116・4120が南北に並んで検出された(図11・12)。各柱間隔1.8mで、SP4115・4116の掘形は一辺0.5～0.6mの隅丸方形であるが、SK4112により上部が削られていたSP4120は直径0.43mの円形であった。断面を確認できたSP4115は深さ0.4mで埋土は炭・焼土・漆喰粒が混るオリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト質細粒砂であった。SP4116・4120の直径30cmの柱痕跡には炭が詰まっていた。これらは第3b層が遺存していない雁木際の第3c層上面で検出されたが、掘形の周囲が被熱して赤く変色していた。SP4120が、第3c層上面と考えたSK4114が埋まった後に掘られ、SP4115が近代のSK4106に壊されていることから、本層上面の遺構とみて戊辰戦争時の火災により多聞櫓と共に焼失した構造物と考える。

d．近代の遺構(図20、写真1)

従来、幕末期の地層と考えてきた第3a層は第2a層と同じ分布範囲を示していることから、1871(明治4)年に大阪鎮台が置かれた頃の整地の一部と考えられる。本層上面では1区でSP1106～1108が検出された。直径0.4m、深さ0.4～0.6mで、埋土は第3a層の偽礫が多く含まれる暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒～中粒砂などである。SP1108の南側にも断面で同様のピットが確認されており、いずれも建物4の基礎地業で壊されている。SP1106・1107は建物4の基礎地業の南側で検出されている。建物4に先行する建築物があった可能性がある。

第2層上面以上で検出された遺構としてはこれまでの調査で確認されている近代の建物1～4、埋設管とこれに伴う会所を確認したほか、4区のSK4101・4102・4105～4108・4112・4113などの廃棄土壙、地下通路状遺構SX401がある。

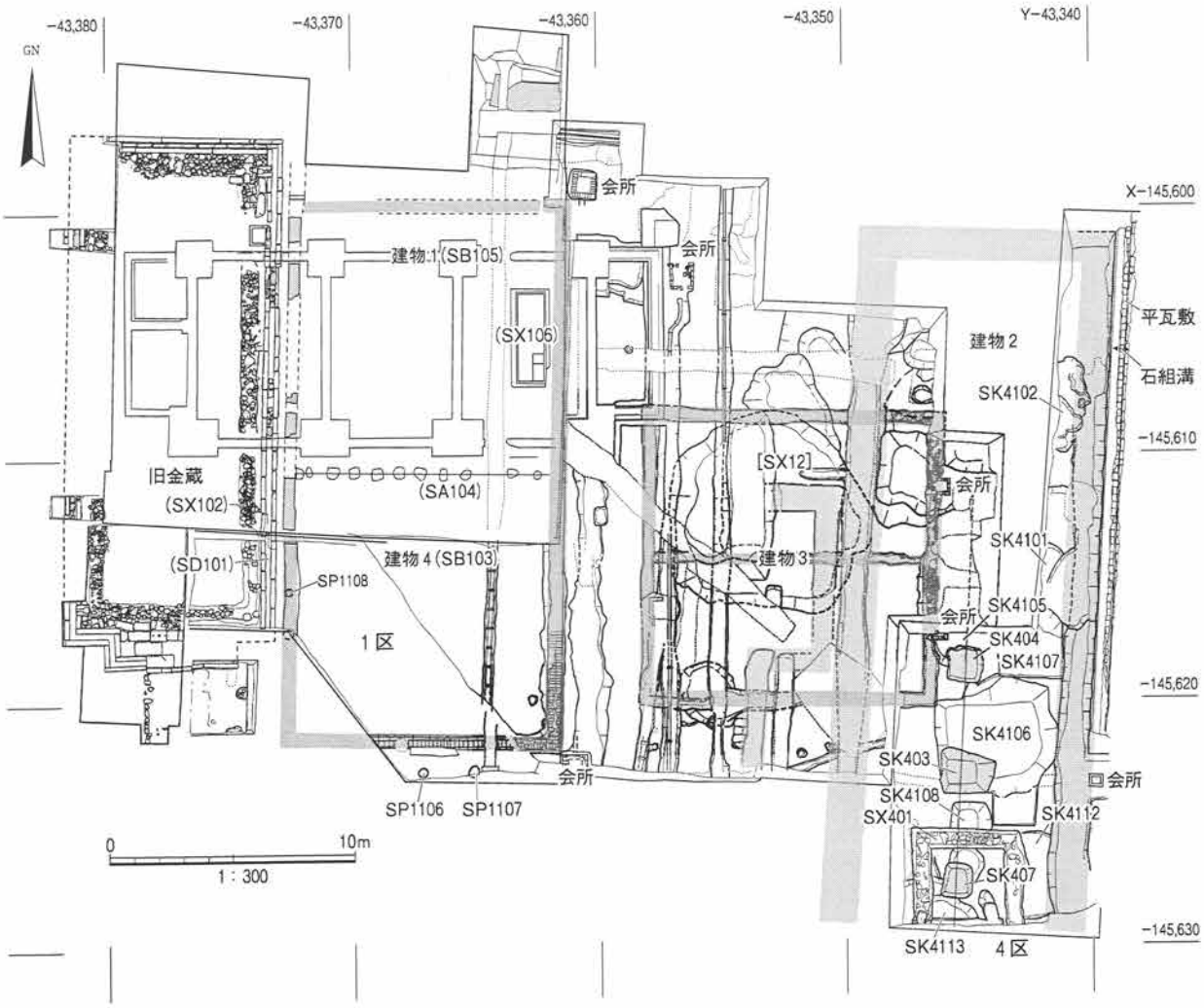


図20　近代遺構平面図

()はOS13－11次調査、[]はOS14－４次調査の遺構番号

建物１　OS13－11次調査で検出されたSB105である。1931(昭和６)年頃から終戦直後まで存在した車庫の鉄筋コンクリートの基礎が２区に残されていたが、今回はこれをすべて撤去した。

建物２　OS14－４次調査で検出されたSD01の基礎地業による建物の東辺の基礎地業を４区の雁木際で検出した。東西9.3m、南北28m以上の南北棟建物で、基礎地業としては他の建物より規模が大きく、南端部では基礎地業の上にコンクリート基礎などが遺存していた。南半部中央には栗石が詰まった方形の土壙SK403・404・407が約５m間隔で南北に並んで検出されており、この建物の中軸線上に位置していることから、建物内部の柱の基礎地業と考えられる。**建物３**を壊して建てられており、方位も**建物３・４**と異なり雁木の方位に揃えている。雁木の基礎石上から建物の間には両側に切石を置き、底に平瓦を敷き並べた雨落溝が作られていた。1931(昭和６)年前後の写真や図に見える、雁木際に建つ大型の倉庫建物に相当すると考えられる。写真・図では西側に突出部があることから、OS14－４次調査でSD01としたコンクリート基礎もこの建物に付随すると考える。

建物３　OS14－４次調査で初めて確認された11.7m四方の正方形建物で、**建物４**と同じ方位を示す。東西中軸線上にSD04とされる基礎地業の溝がある。４区南半部でこの建物の南東角が検出され、角から北に約３mの地点で煉瓦積会所が基礎地業を壊して設けられていた。OS14－４次調査でも北東

角から南に約３ｍの地点に煉瓦積会所が見つかっており、いずれもこの建物に付帯して設計された会所と考えられる。

写真１　建物４基礎地業出土煉瓦

建物４　１区で南西部が検出された東西11.0m、南北22.3mの煉瓦積みの南北棟建物である。基礎事業の溝に栗石を充填した上面にコンクリート基礎を敷き、その上にイギリス積で煉瓦を積み上げている。煉瓦には「×」の岸和田煉瓦製の刻印がある。OS14－４次調査でこの建物の北端と南端が確認され、北東角と南東角に煉瓦積の会所があることが判明している。OS13－11次調査の第２層上面で検出された柱列SA104は、**建物３**のSD04と同じく建物の東西中軸線上に位置しており、この建物に伴う遺構である可能性が高い。基礎地業の栗石に混って㊥の刻印のある厚さ５cm未満の薄手の煉瓦が出土した(写真１)。OS14－４次調査のSX12からも同じ刻印のある煉瓦が出土している。

1887(明治20)年の大阪実測図にある金蔵東側の建物に相当するとみられるが、ここには**建物３**が描かれていないため、**建物３**より先に建てられたと思われる。岸和田煉瓦株式会社の前身である第一煉瓦製造会社の設立が1887(明治20)年であるため、1872(明治５)年創業後で会社設立以前に製造された煉瓦が使用された可能性が高い。

４区で検出されたSK4101・4105～4107・4113はいずれも瓦を主体とする廃棄土壙であるが、煉瓦も少量含まれる。このうちSK4106・4107は平面形が方形で、壁面が垂直に掘られていた。特に、SK4106は東西4.5m、南北4.0mの方形を呈し、深さは約２ｍである。底面もほぼ水平に整形されていた。南辺部に1.5m角で深さ0.5mの方形突出部がある。廃棄土壙としては丁寧な造作であり、近世の穴蔵のような地下倉庫として利用された可能性もある。SK4112は浅く、炭や焼土を多く含んでいた。また、SK4108は漆喰が重層的に堆積する土壙である。SK4106方形突出部を壊している。

SX401は４区南端で検出された「コ」字形に屈曲する溝である。幅0.8mで、深さは0.02～0.68mで南東隅から南西隅に向かって徐々に深くなっている。内部は大小の栗石を含む粗粒砂で埋められていた。底面には破片となった壁土が無造作に敷き詰められ、固く締まっていた。切合い関係では最も新しく、用途は不明だが、**建物２**の南端床下に設けられた地下施設への通路の可能性を提示しておきたい。

３)まとめ

今回の調査は2013年度から行われてきた個々の調査における所見を整理し、整合的な理解を可能にすることを主眼として行った。また、豊臣期大坂城詰ノ丸地表面を確認し、焼土および焼けた瓦や石などが検出され、ここにあったと推定される隅櫓が大坂夏ノ陣の火災により焼失した可能性を示唆する資料を得ることができ、徳川期大坂城再築時の石垣普請の盛土の確認や金蔵東側にあった塀の構造を明らかにする控柱の発見など、徳川期大坂城の重要な資料をも新たに加えることとなった。今後、これまでの成果を遺構・遺物の両面から総合的に整理・検討していくことで、豊臣期および徳川期大

坂城に関わるさらに詳細な知見が得られることを期待したい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2015a、「平成25年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(OS13－11)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.279－305

2015b、「平成25年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(その２)(OS13－38)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.355－371

大阪市文化財協会1985、『特別史跡　大坂城跡』

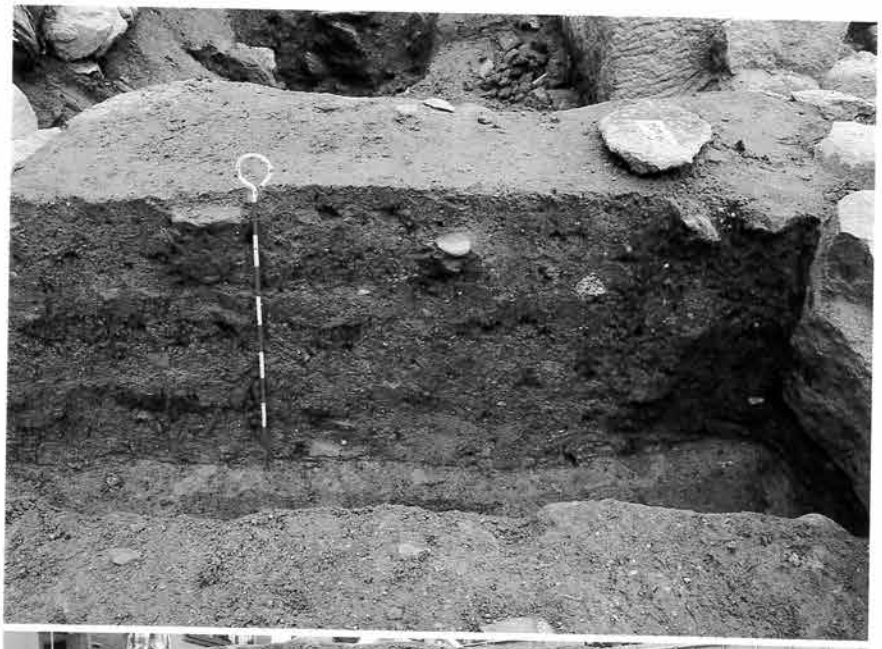
2002、『大坂城跡Ⅵ』

大阪文化財研究所2015、『平成26年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(OS14－４)報告書』

木越隆三2012、「徳川期大坂城普請丁場割図の分類と特徴」：石川県金沢城調査研究所編『城郭石垣の技術と組織』、pp.189－236

中村博司2010、「徳川幕府による大坂城再築の一様相―黒田家丁場における石垣普請を事例に―」：日本城郭史学会編『城郭史研究』30号、pp.36－48

2区石列西側地層断面
（南から）



1区南壁地層断面
（北東から）

4区南半
SK4106南壁地層断面
（北から）

3区北壁地層断面
（東面石垣付近南から）

3区詰ノ丸石垣全景
（南から）

3区詰ノ丸地表面
（西から）

3区
礎石を転用した石垣石
（西から）

3区
舗道遺構1・SK3303
（南東から）

4区北側
雁木検出状況
（南西から）

4区南半
第3c層・第3d層上面全景
（北から）

4区南半石垣普請盛土（左）と本丸一括盛土（北から）

4区南半
栗石石列1（西から）

4区南半
栗石石列2（南から）

4区雁木基礎石下
（西から）

北端部

南半部

1区第3c層上面全景
（東から）

2区柱穴列
（南から）

2区柱穴SP2201
（西から）

2区SP2202(南から)

2区礎石掘形内の根石と裏込石(東から)

中央区大手通一丁目１－３、谷町二丁目８－２・９－１・２・３における
建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS15－７)報告書

調査個所　大阪市中央区大手通1丁目1－3、谷町2丁目8－2・9－1・2・3

調査面積　80㎡

調査期間　平成28年1月6日～1月15日

調査主体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所

調査担当者　調査課長　清水和明

1)調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城跡の西部に位置し、1598(慶長3)年に築城された豊臣期大坂城三ノ丸の西限とも考えられている谷町筋と大手通の交差点西北部に当る。一帯では数多くの調査が行われている。南に近接するOS91－32次調査地ではTP+13.7m付近以下で層厚30～40cmの豊臣前期の整地層(第2層)があり、三ノ丸造成に伴うものと考えられているほか、その下位で瓦器片を含む第3層、奈良時代後半から平安時代の第4a層、古墳～奈良時代の第4b層が堆積しているなど、近世以前の各時代の地層が広がっている[大阪市文化財協会2003b]。

東側の谷町筋では、OS97－1次調査地C区で弥生時代後期の土壙、B・C区で古墳時代の土壙、B・D区で飛鳥・奈良時代の建物や土壙など多数の遺構が見つかっている。豊臣期になると大坂城建設に伴って一帯の開発は進み、OS97－1次調査地A・B・D区で建物や柵列、OS87－133次調査地でも建物が見つかるなど屋敷地として整備されている。

また上記A・B区では北東から南西に向かう開析谷「釣鐘谷」が検出され[大阪市文化財協会1999]、OS87－133次調査地西部でもその続きが見つかっており[大阪市文化財協会2003a]、付近の地形環境に大きな影響を与えていたが、三ノ丸造成に伴う整地事業で大規模に埋められて平坦化されている。

このように当地は難波宮や大坂城と近接しているため、古代および近世において、それぞれとの関連に注意が必要な地域である。

当該地で平成27年10月22日大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約0.5m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査が行われることとなった。

調査は平成28年1月6日から開始した。東西8m、南北10mの調査区を設定し(図2)、地表下1.2

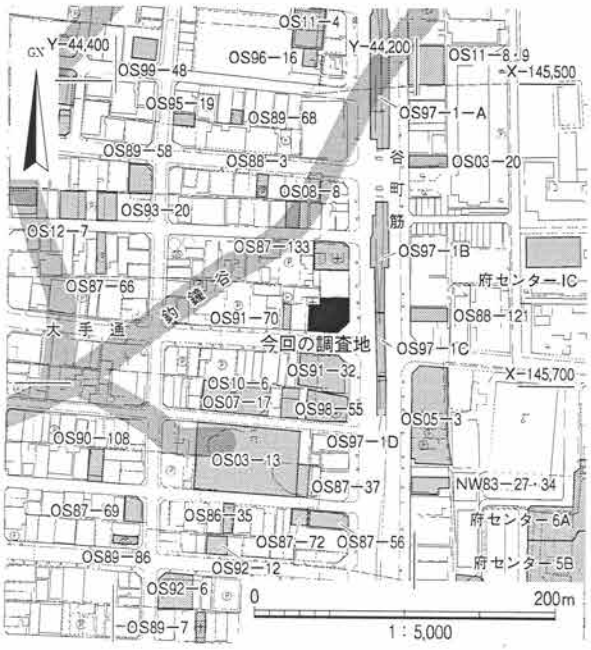


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

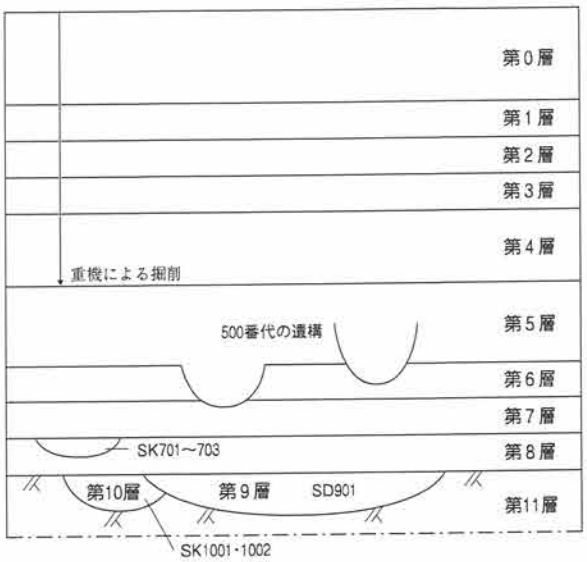


図3　地層と遺構の関係図

から1.4mまでを重機を用いて掘削し、その後、人力による掘削を行った。層序に応じて順次掘り下げて遺構・遺物を検出し、適宜実測図や写真撮影によって記録しながら、段丘構成層の第11層までを調査した。1月15日には現地における全ての作業を終えて撤収し、調査を完了した。

また、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3～6)

調査地内の現況地形はTP＋15.0m強で、周辺も含め、現地表はほぼ平坦になっている。

現代の盛土層である第0層を除き下位の地層は計11層に分かれる。第4層までは重機により掘削したため、それらの岩相は調査区壁面で確認した。以下にそれぞれを記す。

第0層　暗灰褐色礫質粗粒砂層で、層厚は80～150cm、ガラス片・栗石などを含む現代の整地層である。

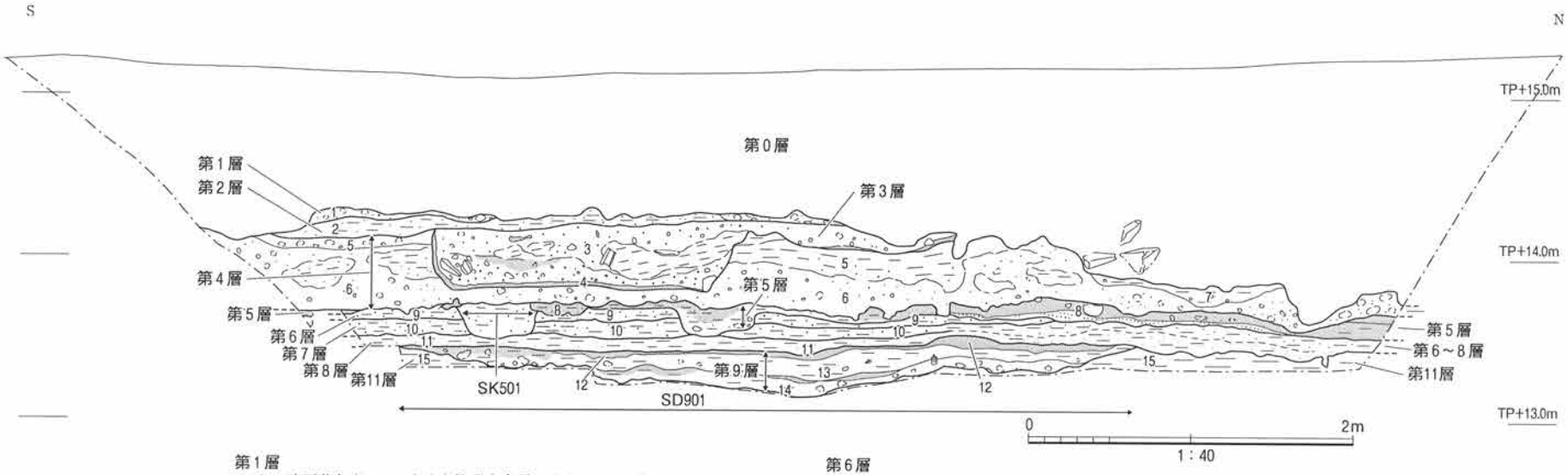
第1層　暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫を多量に含むシルト質中粒砂層で、層厚は10cm弱の整地層である。調査区の西壁でのみ確認した。年代は不詳であるが近現代に含まれよう。

第2層　暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫を多量に含む中粒～粗粒砂層で、層厚は15cmの整地層である。調査区の西壁でのみ確認した。時期は不詳だが近世以降である。

第3層　灰色(10Y5/1)地山偽礫を多量に含む粗粒～極粗粒砂層で、層厚15cmである。調査区の西壁でのみ確認した。断面の観察のみであるが、西壁中央付近で深さ40cmの遺構の埋土となり、基底には焼土・炭層が堆積している。

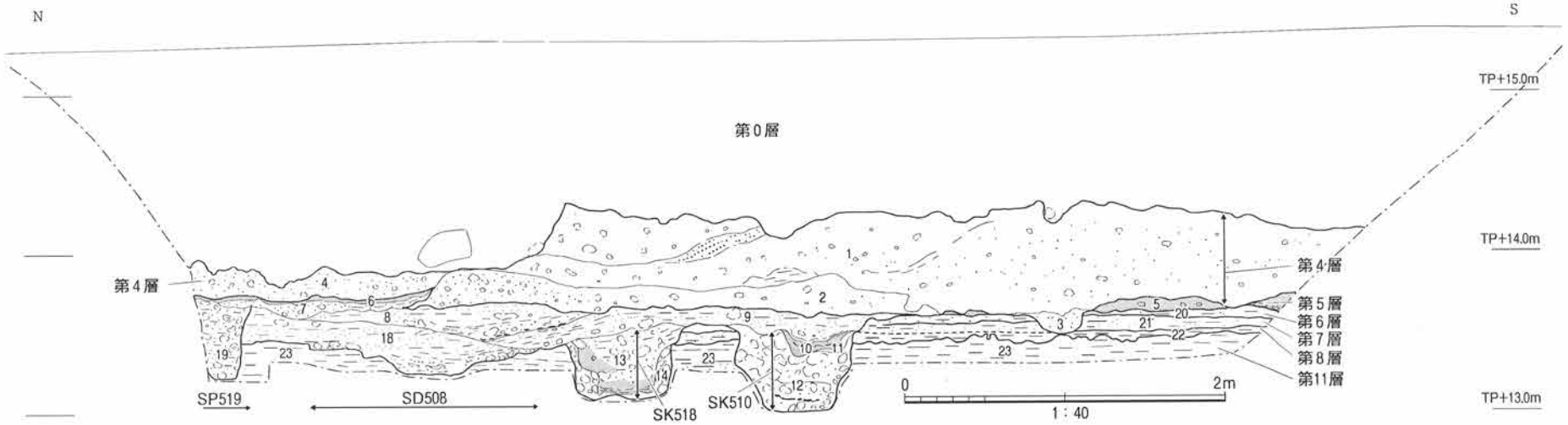
第4層　暗灰黄色(2.5Y5/2)～明黄褐色(10YR6/6)シルト質中粒砂ないし中粒砂層で、下位の第5・11層をはじめとする偽礫を多量に含む厚さ45cmの整地層である。調査区の東壁では南から北へ向かって順次整地した状況が確認される。本層直下の第5層には豊臣前期の遺物が含まれており、第4層は大坂城三ノ丸推定区域外であるが、隣接する地点であり、その造成に関係する大規模な整地層と考えられる。西壁では本層より上位から掘り込まれた火災後の片付けによると思われる土壙があり、火災が大坂夏ノ陣である可能性が考えられる。

第5層　黄灰色(2.5Y4/1)地山偽礫を含むシルト質細粒砂～黒色(5Y2/1)シルト層で上面はTP＋13.7m付近でほぼ平坦であるが、調査区の東および北側では遺構が重なって掘削され、やや厚く堆積している。遺構には溝や土壙のほか柱穴などがあるが、それらが埋没する最終段階で残った凹みに水漬きのシルトや炭化物が堆積している。本層からは豊臣前期の遺物が多く出土した。



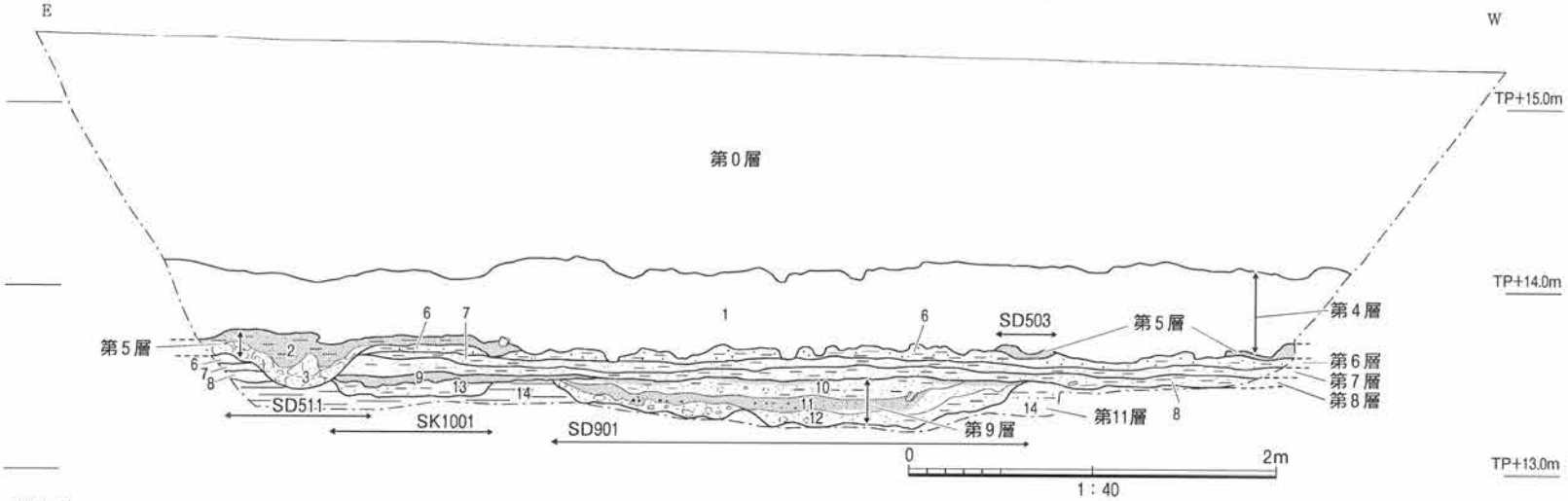
第1層
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫を多量に含むシルト質中粒砂
第2層
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫を多量に含む中粒～粗粒砂
第3層
3：灰色(10Y5/1)地山偽礫を多量に含む粗粒～極粗粒砂
4：焼土・炭の堆積
第4層
5：灰黄色(2.5Y6/2)地山偽礫を含む中粒砂質シルト
6：暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫を含む中粒砂
7：灰色(7.5Y5/1)地山偽礫を含むシルト
第5層
8：黒褐色(2.5Y3/1)上部はシルト、下部は細粒砂(水漬き)
第6層
9：灰色(5Y5/1)シルト質細粒砂
第7層
10：灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質シルト
第8層
11：灰色(5Y5/1)極細粒砂質シルト
第9層
12：灰色(5Y4/1)シルト(SD901埋土)
13：灰色(5Y6/1)地山偽礫を含むシルト(SD901埋土)
14：オリーブ黒色(5Y3/1)地山偽礫を含むシルト質細粒砂(SD901埋土)
第11層
15：オリーブ灰色(5GY6/1)粘土(地山:段丘構成層)

図4　西壁地層断面図



第4層
1：黄灰色(2.5Y5/1)細～中礫および地山偽礫を多量に含むシルト質中粒砂ないし中粒砂
2：明黄褐色(10YR6/6)細～中礫および地山偽礫を多量に含むシルト質中粒砂
3：灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂
4：オリーブ灰色(10Y5/2)地山偽礫を多量に含むシルト質中粒砂
第5層
5：黄灰色(2.5Y4/1)地山偽礫を含むシルト質細粒砂
6：黒色(5Y2/1)シルト
7：オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒～粗粒砂
8：灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂で基底に炭化物が溜まっている
9：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂
10：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(SK510埋土)
11：灰色(5Y5/1)極細粒砂(SK510埋土)
12：灰色(5Y4/1)第6層・地山偽礫を多量に含む細粒砂質シルト(SK510埋土)
13：灰色(5Y4/1)第6層・地山偽礫を含むシルト(SK518埋土：基底は水漬きのシルト)
14：オリーブ灰色(5GY5/1)第6層・地山偽礫を多量に含む細粒砂質シルト(SK518埋土：加工時形成層)
18：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂～細粒砂(SD508埋土)
19：灰色(5Y4/1)地山偽礫を多量に含む中粒砂質シルト(SP519埋土)
第6層
20：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒～極細粒砂
第7層
21：灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト
第8層
22：灰色(7.5Y4/1)シルト～シルト質粘土
第11層
23：オリーブ灰色(5GY6/1)粘土(地山：段丘構成層)

図5　東壁地層断面図



第4層
1：黄褐色(10YR5/6)細～中礫および地山偽礫を多量に含むシルト質中粒砂ないし中粒砂
第5層
2：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂(SD511埋土)
3：灰オリーブ色(5Y5/2)第6層・地山偽礫を多量に含む中粒砂質シルト(SD511埋土)
第6層
6：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒～極細粒砂
第7層
7：灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト
第8層
8：灰色(7.5Y4/1)シルト～シルト質粘土
9：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト～シルト質粘土
第9層
10：灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト(SD901埋土)
11：灰色(5Y6/1)炭化物を含むシルト質極細粒砂(SD901埋土)
12：灰オリーブ色(7.5Y4/2)地山偽礫を含む細粒砂～シルト質細粒砂(SD901埋土)
第10層
13：灰オリーブ色(5Y5/2)地山偽礫を含む極細粒砂質シルト(SK1001埋土)
第11層
14：灰オリーブ色(7.5Y6/2)極細粒砂質粘土(地山:段丘構成層)

図6　南壁地層断面図

第６層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒ないし極細粒砂～灰色(5Y5/1)シルト質細粒砂層で、層厚５～10cmの作土層である。本層からは12世紀末頃の瓦器が出土しており、古代末ないし中世に属するとみられる。

第７層　灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト～灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質シルトで、層厚５～10cmである。奈良時代の遺物が出土しており、古代に属するとみられる。

第８層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルトないしシルト質粘土～灰色(7.5Y4/1)シルトないしシルト質粘土層で、層厚は５～10cmである。地山層の上位で、調査区全体にわたり検出されるのは本層が最も古い。本層の上面で浅い土壙が検出された。出土遺物には奈良時代後半の土師器椀12があり、本層の時期を示している。

第９層　本層は調査区の西南部にあるSD901の埋土としてのみ確認した。上下３層に大別され、灰色(5Y4/1)シルト層、灰色(5Y6/1)シルト質極細粒砂層、オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂層などを主体とする。飛鳥時代の土器のほか、ウマ骨が出土した。

第10層　本層も遺構埋土としてのみ確認した。灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂質シルト層などを主体とする。本調査地で確認された最も古い層準の遺構である。古墳時代のほか弥生時代の土器も出土している。

第11層　オリーブ灰色(5GY6/1)粘土～灰オリーブ色(7.5Y6/2)極細粒砂質粘土層で本調査地の地山となる段丘構成層である。最高所でおよそTP＋13.5m付近である。

ⅱ)遺構と遺物(図７～11)

各層準の遺構を古いものから順に記述する。

ａ．中世以前

第11層上面遺構

調査区の東南部でSK1001を、西北部でSK1002を検出した。SK1001は長径1.5m、短径1.0mの楕円形で、深さは0.1mである。埋土は灰色極細粒砂質シルト層で、黒色シルトの偽礫を含み人為による堆積である。機能時堆積層は確認できなかった。出土遺物には古墳時代の須恵器のほか粗粒砂を多く含む土器片があり、弥生土器の可能性がある。須恵器甕１(図９)は内面に当具の痕跡を明瞭に残す。須恵器壺２は頸部片と思われ、密な波状文を施している。SK1002は長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.4mである。埋土は黄灰色シルト質極細粒砂層で地山の偽礫を多量に含み人為による堆積である。機能時堆積層は確認できなかった。図化していないが須恵器甕・器形不詳の土師器・弥生土器細片などが出土し、埋土の類似性からSK1001と同じく古墳時代の遺構であろう。

第10層上面遺構

SD901は、層準は第10層上面となるが、作業上は第11層上面で検出した。南部は幅2.3m、北部はやや広がって2.7m、深さは南部で0.25m、北部で0.3mである。明瞭ではないが内側の幅1.5m程度に段が認められる。方位はN40°Wである。埋土は先述のとおり大きく３つに細分され、下部はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂を主体に地山の偽礫が多く含まれた加工時形成層で、層厚は10cmである。中部は灰色(5Y6/1)シルト～シルト質極細粒砂で、層内や基底に水漬きによる炭化物やシルトの

ラミナが認められる。層厚は10cmである。上部は灰色(5Y4/1)シルト～極細粒砂質シルトで層厚は10cmである。出土遺物には土師器・須恵器、ウマ骨がある。土師器には杯C3・4・甕10などがある。3は摩耗が進んでいるが底部外面はユビオサエ、体部はヨコナデである。4は底部外面をヘラケズリし、体部外面はヘラミガキを施している。内面には暗文を施すと思われるが状態が悪く図示していない。10は頸部から肩部にかけてやや広がっている。口縁部はやや外反し、端部を上方へ肥厚させている。体部外面は左上がりにハケメ、内面は横にハケメを施している。須恵器には杯G蓋5・6、杯G7・杯H8、漆容器9などがある。5は焼成時に歪んでいるが、復元口径は8.5cm程度と小さい。乳頭状のつまみがつく。6のつまみは宝珠状で、内面の返りは短い。7は器高が低く立ち上がりがやや内湾する。8は口縁部の立ちあがりがわずかに受部よりも高い。9は完形品で、器壁が厚く球形に近い体部外面の上半はヨコナデ、下半は手持ちでヘラケズリを施している。体部外面の上半から外反する口縁部の内外面にかけて黒漆が付着しており、漆容器に使用された壺である。これらは[佐藤隆2000]の難波Ⅲ新段階に該当し、飛鳥時代の前期難波宮期の遺構と考えられる。宮殿域からは北西へ約200mのごく

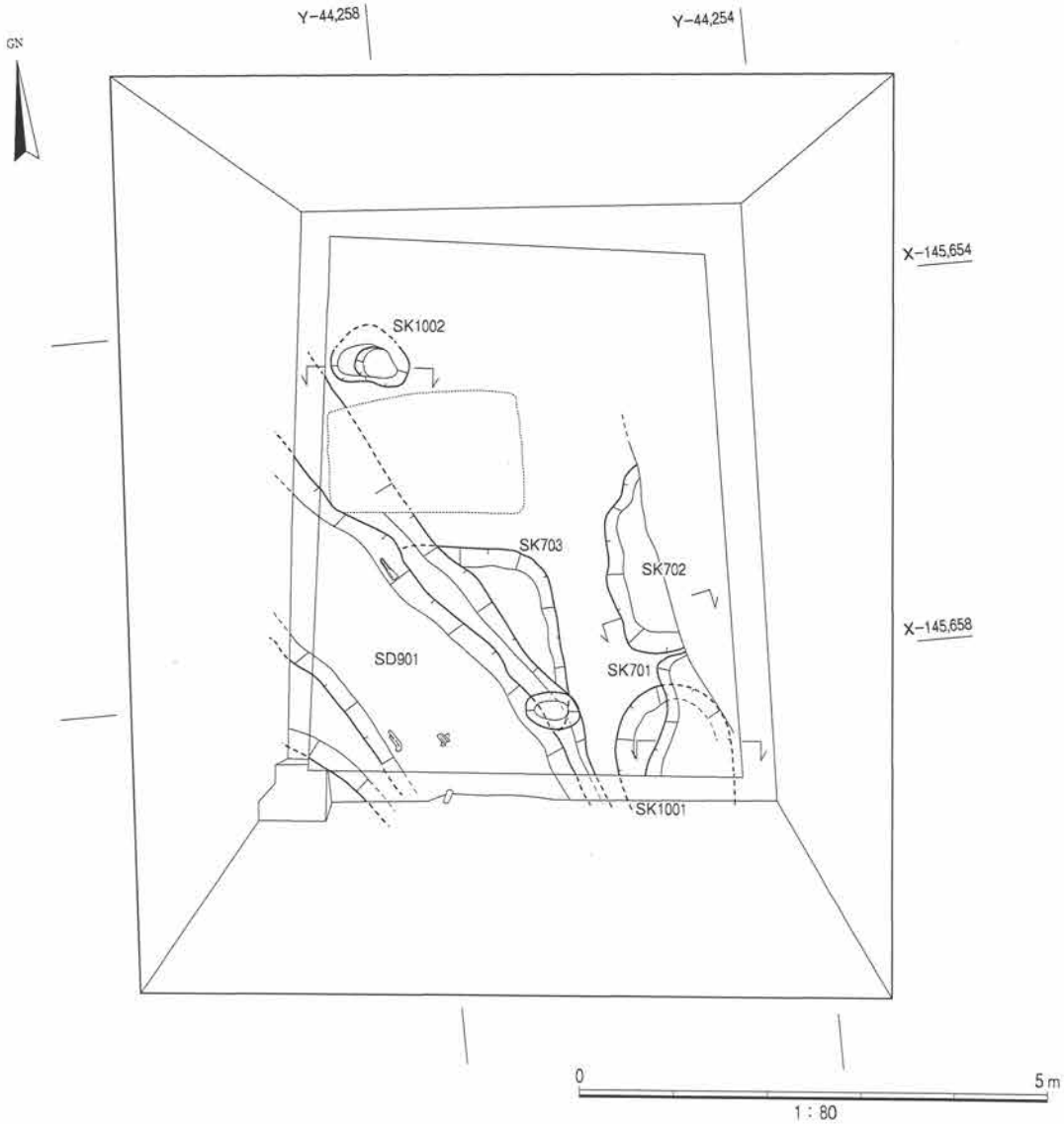


図7　第7層上面以下の遺構平面図

近距離にあるが、SD901は正方位に合致しない。一方、調査地の北側には北東から南西に向かって上町台地を下刻する「釣鐘谷」が存在し、SD901の方位はそれに直交している。基底の高さはほぼ水平で排水などの目的を積極的に想定することは難しいが、地形に則して掘削されたものと考えられる。

第8層上面遺構

SK701～703は第7・8層の判別が困難で同時に掘削したため、第9層上面の可能性もある。いずれも浅く、深さは0.1m以下である。また、SK703は当初SD901の一部と認識していたが、SD901掘削後に別遺構と判明し、埋土の類似性から第8層上面遺構と判断した。SK703からは奈良時代の須恵器杯B11が出土している。

遺物包含層出土遺物

第8層からは土師器椀12が出土した。直線的に開く口縁部に、体部はユビオサエののち斜め上へナデている。奈良時代後半に属する。11・12から第7・8層は奈良時代の地層とみてよいであろう。

第6層からは瓦器椀13・14が出土した。13は高台の断面が台形となる12世紀前葉頃、14は同じく三角形となる12世紀末頃の資料であろう。そこで第6層は平安時代の地層としておくが、上位の第5層が豊臣期に降るため、その間の時代を含んでいる可能性がある。

b．豊臣期

第5層内遺構

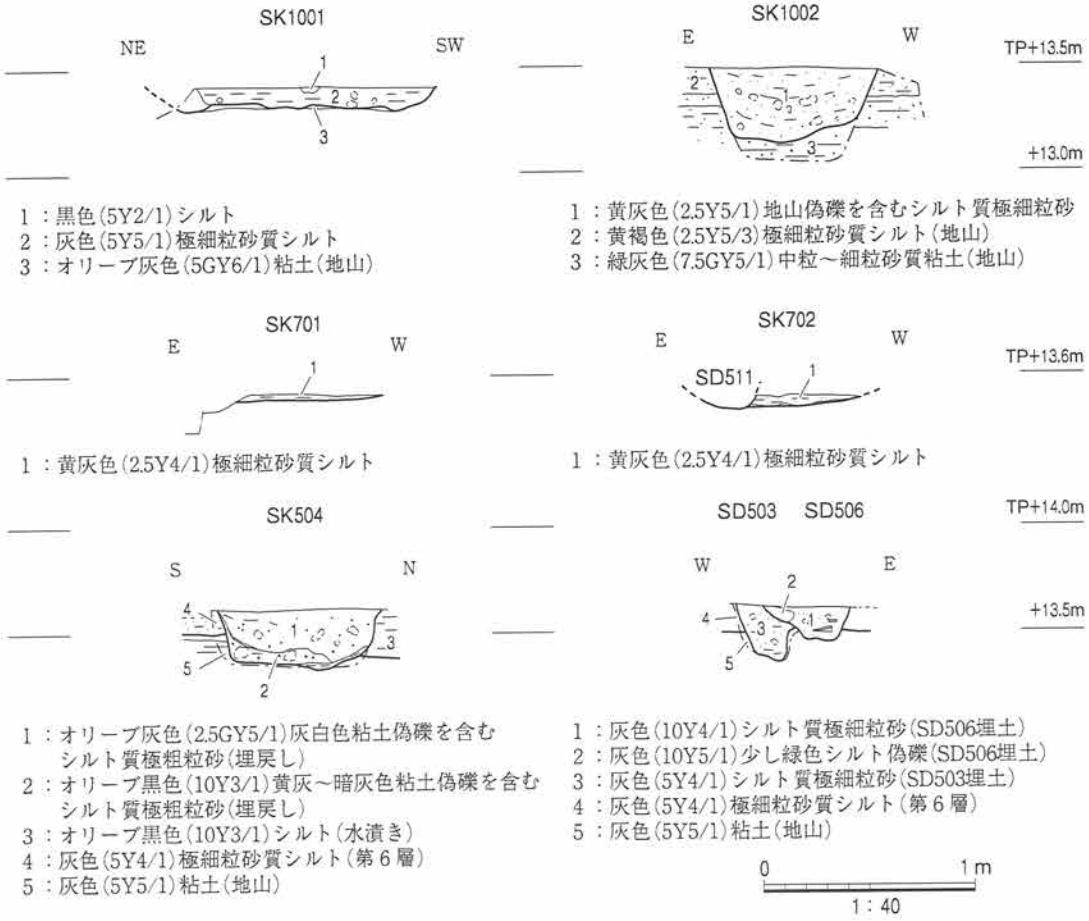


図8　各遺構断面図

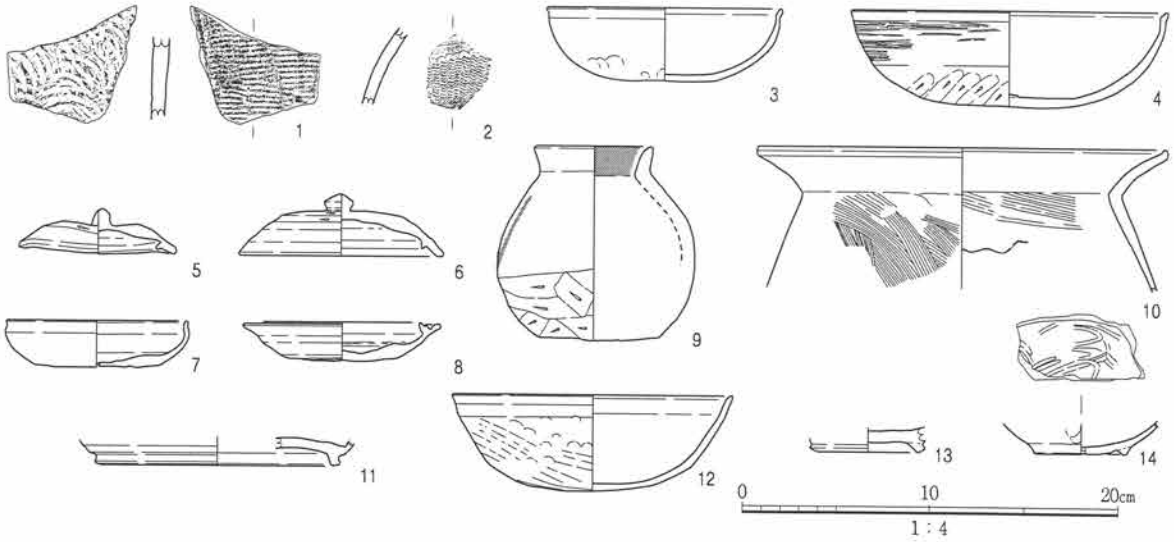


図９　第６層以下の出土遺物実測図
SK1001(１・２)、SD901(３～10)、SK703(11)、第８層(12)、第６層(13・14)

本層内で検出された遺構には柱穴・溝・土壙がある。

SP505・507は調査区北辺付近で東西正方位に並ぶ。SP505は直径0.3m、深さ0.3m、SP507も同規模である。埋土は地山偽礫を主体とする黒色シルトで、太さ８～10cmの柱材が残っていた。柱間の距離は156cmである。

SP516・517は調査区の東辺でＮ２°Ｅの方位で南北に並ぶ。どちらも直径は0.4m、深さ0.5mで、SP505・507と同様の埋土に太さ10～12cmの柱材が残っていた。柱間の距離は196cmである。SP516・517の中間やや北寄りに杭痕があり、SK515に壊された柱穴の可能性がある。SP516・517の間に設けられた補助柱であろうか。SP505・507とSP516・517の柱列がほぼ直交しているため、交わる位置に柱穴は見つからなかったものの掘立柱建物であった可能性がある。

溝は４条見つかっており、SD508がＬ字状に曲がる幅広の溝であるほかは、概ね南北方向に延びる幅の狭い溝である。

SD508は調査区の東北部で検出された。北および東へ延びるＬ字に曲がる溝の角部に当たるが、検出範囲が短いため正確な方位は不明である。幅は北部で0.95m、東部で1.30m、深さ0.20mで、埋土はオリーブ黒色細粒砂～シルト質極細粒砂を主体とする水漬き堆積層である。角部の内側に太さ２cm程度の細い杭痕が並ぶことから、溝の北東側を補強する施設と考えられる。

SD503は調査区のやや西寄りにＮ７°Ｅの方位で掘削された幅0.3m、深さ0.3mの溝で、北部ではSD506によって壊されている。SD506はＮ３°Ｅの方位で、幅0.4m、深さ0.2mである。SD511はＮ２°Ｗの方位で南部がやや西に振っている。幅0.5m、深さ0.3mである。

おもな土壙には調査区の西辺のSK501・504、東辺のSK510・514・515・518、北部中央のSK512などがある。

SK501は長さ1.1m、幅0.8m、深さは0.2mで、埋土は暗灰色シルト質細粒砂である。SK504は直径0.7m、深さ0.3mで、埋土はオリーブ灰色ないしオリーブ黒色シルト質極粗粒砂で地山および下位層の偽

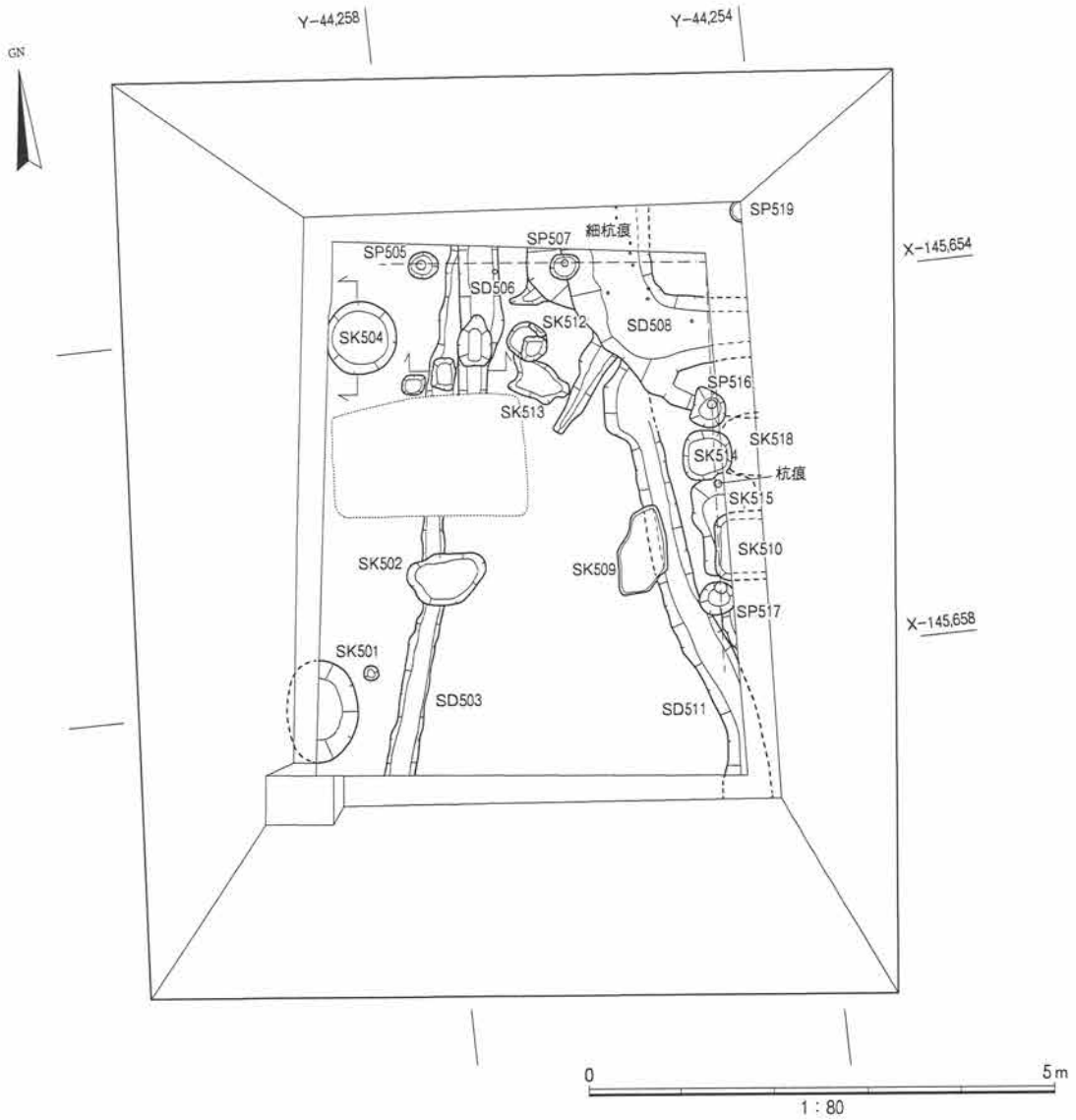


図10　第５層内の遺構平面図

礫を多く含む埋め土である。

SK510は幅0.8m、深さ0.6mで、埋土の大半は灰色細粒砂質シルトで、第６層・地山の偽礫を多量に含んでいる。基底付近に木片が層をなして廃棄されていたが、腐食が激しく木簡、加工材などの判別はできなかった。上部にはオリーブ黒色シルトや灰色極細粒砂の水漬きの堆積層が認められた。

SK518は調査区壁面でのみ確認した。規模はSK510に近く、埋土の基底はオリーブ灰色細粒砂質シルトで地山の偽礫を多く含む加工時形成層で、その直上に灰色シルトを主体とする水漬きの機能時堆積層があり、ある期間開口していたとみられる。

SK514・515はSK510・518の間に重なるように掘削されており、ごく狭い範囲に集中して繰り返し掘削されたことからゴミ捨て穴のような目的が考えられる。SP516・517が掘立柱建物の一部で、中間の杭痕がSK515に壊されたものとすると、SD508、掘立柱建物、土壙群の順番に構築されたことになる。土壙群の廃絶後、水漬きのシルト～粗粒砂(図５　５～９)などが堆積した後に第４層による整地が行われたと考えられる。

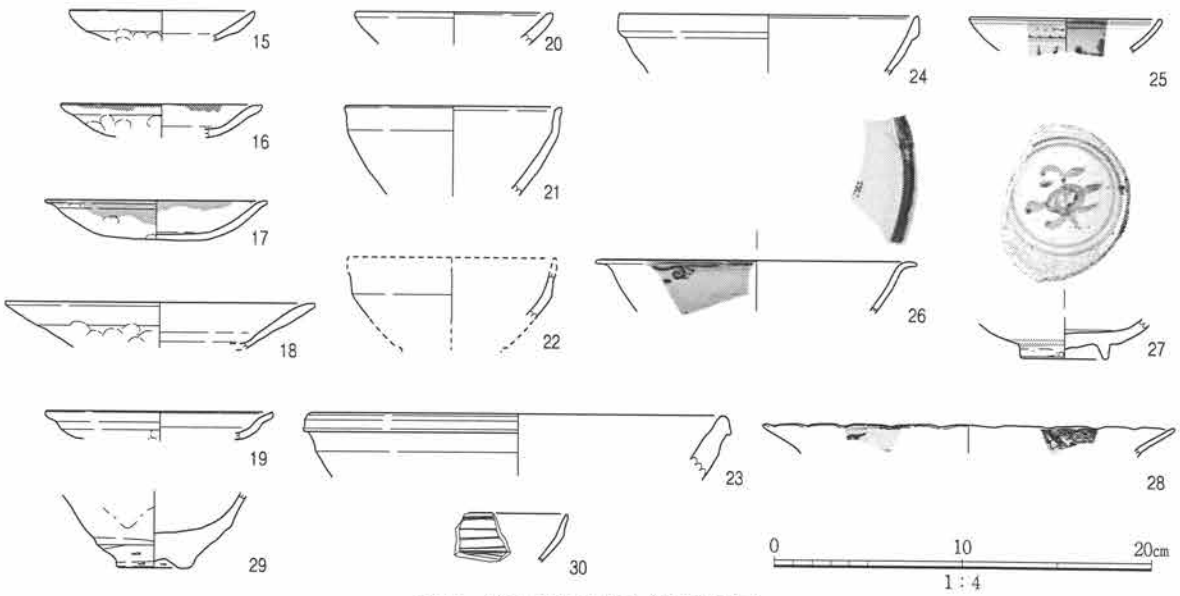


図11　第５層内の出土遺物実測図

SK504(17)、SP505(28)、SD506(18)、SP507(21)、SD508(15･16･20･22～27)、SK510(30)、SK512(19)、第５層(29)

本層準の出土遺物には土師器皿、須恵器鉢のほか、瀬戸美濃焼皿･碗、中国産磁器皿･碗などがある。SD508からは多量の遺物が出土した。土師器15・16、瀬戸美濃焼20・22、中国産白磁24、青花25～27などがある。15は小皿、16は灯明皿である。20は瀬戸美濃焼丸皿、22は鉄釉天目碗である。23は口縁端部を下へわずかに肥厚させた瓦質土器鉢である。24は玉縁の中国産白磁碗、25～27は同青花である。25は口縁がやや内湾する小型の皿で碁笥底になるタイプであろう。26は口縁部が端反となる皿である。27は底部内面に草花文を描く漳州窯産の粗製碗である。ほかの遺構出土遺物にはSK504・512・SD506から土師器皿17～19、SK510から瓦器椀30、SP507から瀬戸美濃焼天目碗21、SP505から中国産磁器青花輪花皿28などがある。これらのうち、瓦器椀や中国産白磁碗は中世の遊離資料であるが、他は豊臣前期に属する資料であり、第５層および関連遺構の時期は豊臣前期と考えられる。したがって、本層の直上になる第４層の厚い整地層は三ノ丸造成に伴うものと考える。造成直前の地表面であった第５層上面の標高(TP+13.7m)も、OS91－32次調査地など釣鐘谷に影響されていない周辺調査地の結果と矛盾しない[大阪市文化財協会2003b]。また、遺構の方位についても同様で、OS87－133次調査地で見つかった豊臣前期の礎石建物の磁北に対する方位はN８～10°E（真北に対してN１～３°E)、OS97－１次調査地のB・D区の礎石建物・柵列の場合はN７～８°E（真北に対してN０～１°E)で、本調査地の柱列と概ね一致している。

また、第５層出土遺物として肥前陶器碗29を取り上げたが、他に本層から肥前陶器は出土していない。大坂城跡・大坂城下町跡などにおける肥前陶器の出現は、豊臣期大坂城三ノ丸造成後(豊臣後期)が多いが、本例は豊臣前期に遡る例と考えておく。

３)まとめ

今回の調査では周辺の既往の調査と同様に、古墳時代から近世に至る遺構と遺物を検出することができた。以下、主な成果を時代順に列挙する。

・遺構では古墳時代後期の土壙が最も古いが、わずかながら弥生土器も出土し、近接するOS97－1次調査地で見つかった弥生時代の遺構の広がりを検討するうえで重要である。

・前期難波宮造営期に並行する時期の溝が見つかった。正方位には揃わず、釣鐘谷へ直交するため地形に即して掘削されたものと考えられる。また、注目される遺物として漆容器のほか、ウマ骨が出土した。

・奈良時代から中世までの遺構・遺物は飛鳥時代に比して少ない。

・豊臣前期になると、建物と目される柱列、溝、土壙などの遺構が増加し、大坂城建設による開発によるものと考えられる。

・調査区地層断面の観察結果から、豊臣前期の地表面を覆う厚い整地層が確認され、三ノ丸造成に伴うものと考えられる。これらの豊臣期の成果は、既往の周辺調査の成果と一致している。

引用・参考文献

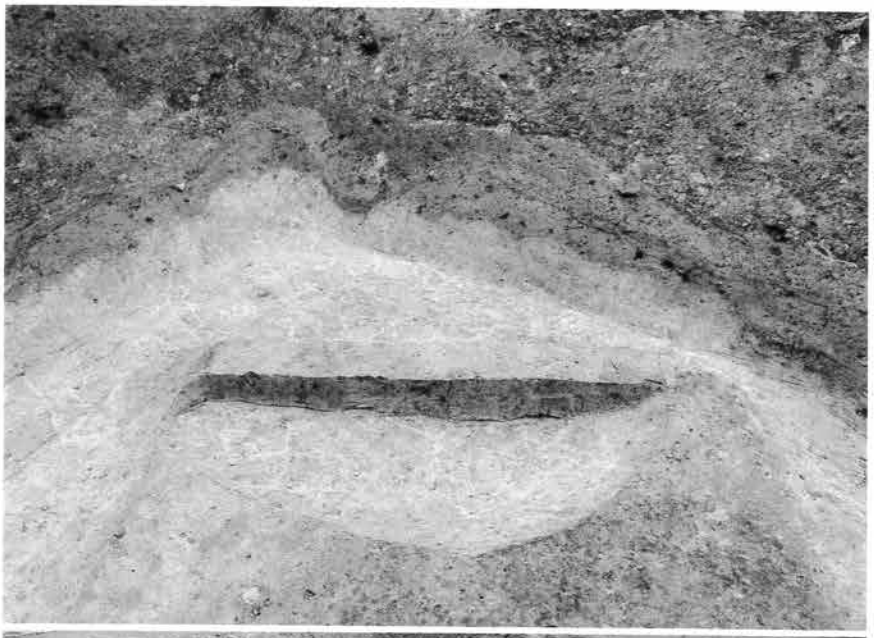
大阪市文化財協会1999、『大坂城跡Ⅳ』、pp.1－139

2003a、「OS87－133次および91－70次調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.143－146

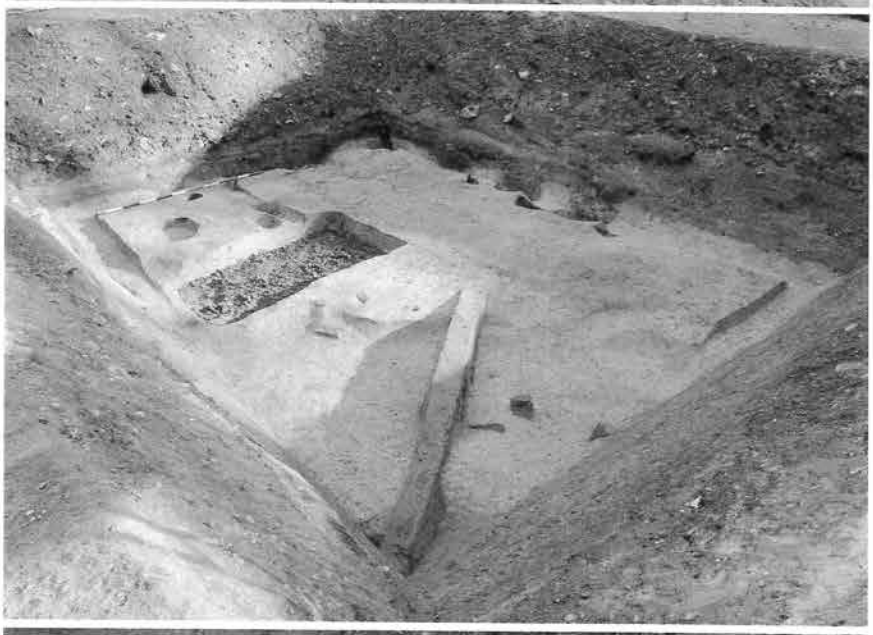
2003b、「OS90－130次および91－32次調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.211－222

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：『難波宮址の研究十一』、pp.253－265

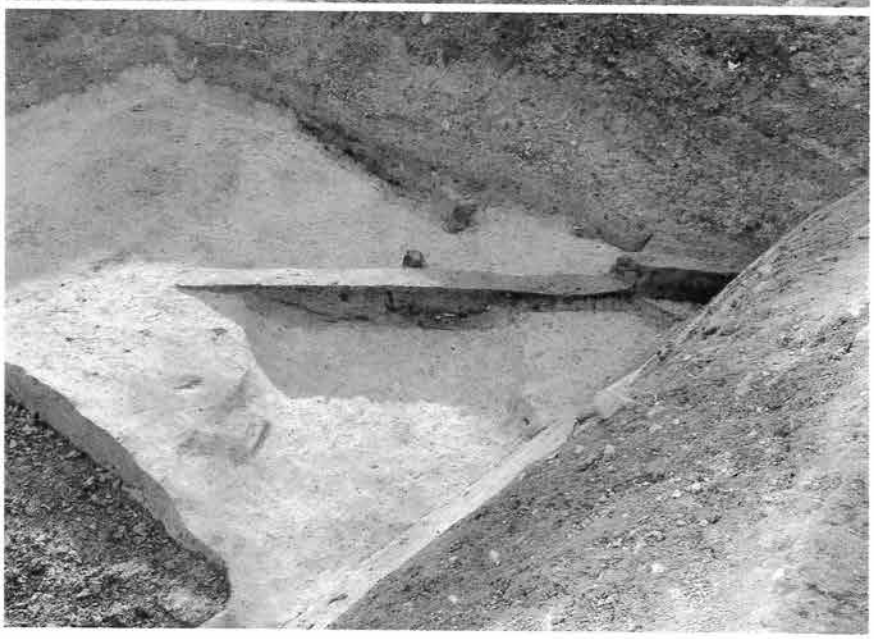
SK1001掘削状況
（北西から）



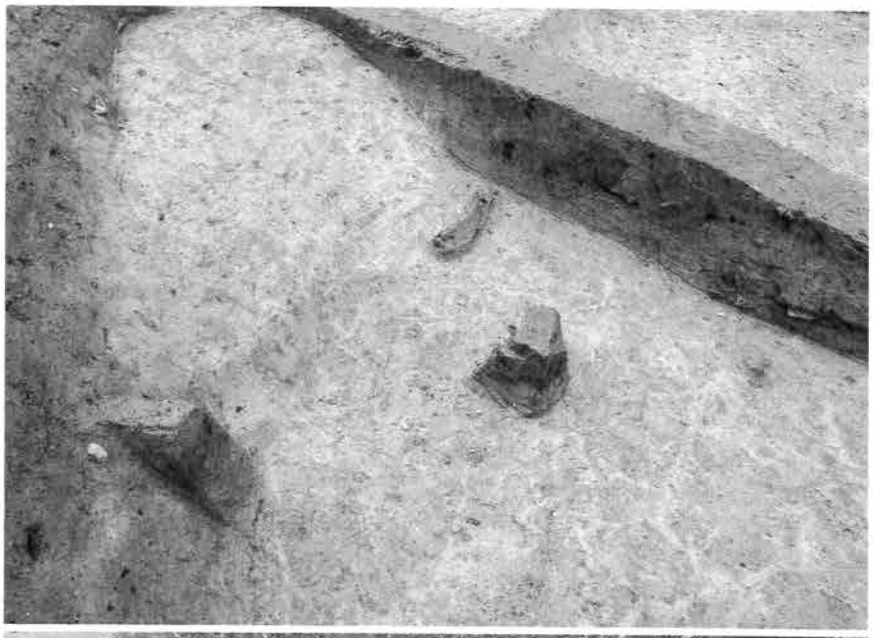
第9層完掘状況
（南西から）



SD901完掘状況
（北西から）



SD901ウマ骨出土状況
（東から）



第７・８層完掘状況
（南から）

第５層完掘状況
（西から）

中央区谷町六丁目14－33における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS15－８)報告書

調査個所	大阪市中央区谷町6丁目14－33
調査面積	86㎡
調査期間	平成28年3月28日～4月13日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明(平成28年度調査課長は高橋工)

1)調査に至る経緯と経過

調査地は長堀通と谷町筋が交わる谷町六丁目の交差点から南南東約200mに位置し、一帯は上町台地の脊梁部に当る。北の竜造寺谷、東の清水谷の谷頭からも離れた比較的平坦な地形が広がる高燥な環境にあった場所で、難波京域内でも難波宮に近い。そのため、これまで周辺で行われた調査で、難波宮に前後する古代の遺構が見つかっている。また、豊臣期では大坂城惣構内に当り、南辺を画する空堀にも近いことからそれとの関連も注意される地域である。

古代では、本調査地の西50m付近のOS99－80次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001]、北北東100mのOS92－57次調査地[大阪市文化財協会2002a]、東200mの上町筋に東面した調査地[OS00－54次:大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、OS06－10次:同2008、OS08－4次:同2010]・[NW135次：大阪市文化財協会1981、OS99－68次：同2002b、OS02－29次：同2003]で飛鳥～奈良時代の柱穴や方位を東西南北に合わせた溝などが見つかっている。ほかに上町筋より東側のOS91－3次調査地では難波宮に先行する7世紀前葉の掘立柱建物8棟、前期難波宮に併行する7世紀中葉の掘立柱建物4棟が見つかり、宮殿南方域での飛鳥時代の開発を顕著に示す地域として注目される[大阪市文化財協会2002c]。近世ではOS99－80次調査地で豊臣期と考えられる柱穴、OS99－68次調査地で豊臣後期の素掘り井戸などが見つかっているほか、顕著な遺構は多くない。

平成28年2月に大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1mで中世以前の遺構面および遺物包含層が見つかり、当該地における発掘調査が行われることとなった。

調査は平成28年3月28日から開始した。当初は東西20m、南北5mの調査区を設定する予定であったが、安全対策のため市教育委員会の了解を得て東西19m、南北約4.5mに縮小した。さらに残土置き場を確保するため西区・東区に2分してそれぞれ掘削と埋戻しを行った(図2)。西区は現代の攪乱が

図1　調査地位置図

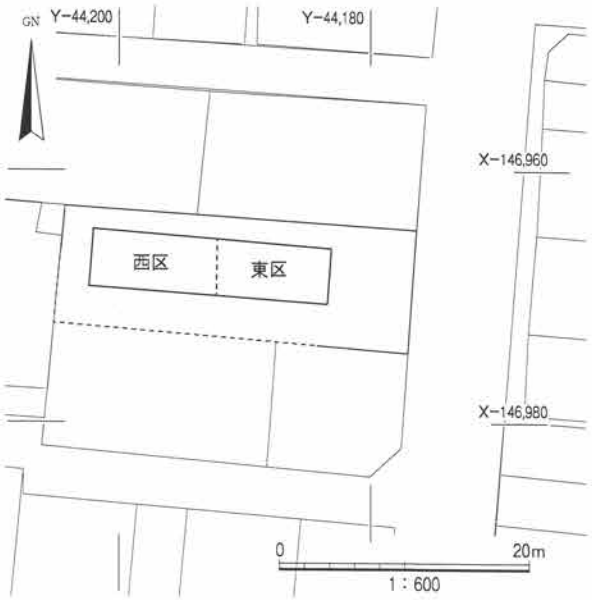


図2　調査区配置図

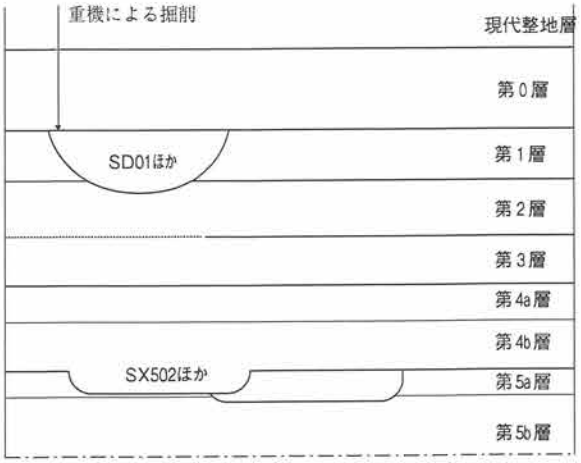


図3　地層と遺構の関係図

著しく、中世以前の地層は東側2.5m程度の範囲でのみ認められたが、東区は全体を調査することができた。地表下約1mまでは重機により掘削し、以下0.8m程度までを人力で掘削した。層序に応じて順次遺構・遺物を検出し、実測や写真撮影によって記録しながら、段丘構成層である第5層上面までを調査し、4月13日には現地における全作業を終了し、資・機材を撤収した。

また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+0mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地内の現況地形はTP+18.5～18.6m付近でおおむね平坦である。厚さ30～80cmの現代整地層を除き地層は計6層に大別され、重機による掘削は第0層まで、以下は人力で掘削した。

調査区北壁・東壁の状況からそれぞれの岩相を記す。

第0層　砂礫を主体とする整地層で、北壁の観察では以下の6層に細分されたが一連の作業によるものと思われる。層厚は約60cmである。出土遺物はないが、下位層が中世末に遡ることから豊臣期の整地層である可能性が考えられ、惣構造成工事に伴う堀の掘削などに成因を求めることも可能であろう。

1：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂層

2：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂層

3：黄褐色(10YR5/6)細礫～極粗粒砂層

4：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂層

5：褐色(10YR4/4)わずかにシルト質中粒砂層

6：灰黄褐色(10YR4/2)ないし黄褐色(10YR5/6)細礫～極粗粒砂層

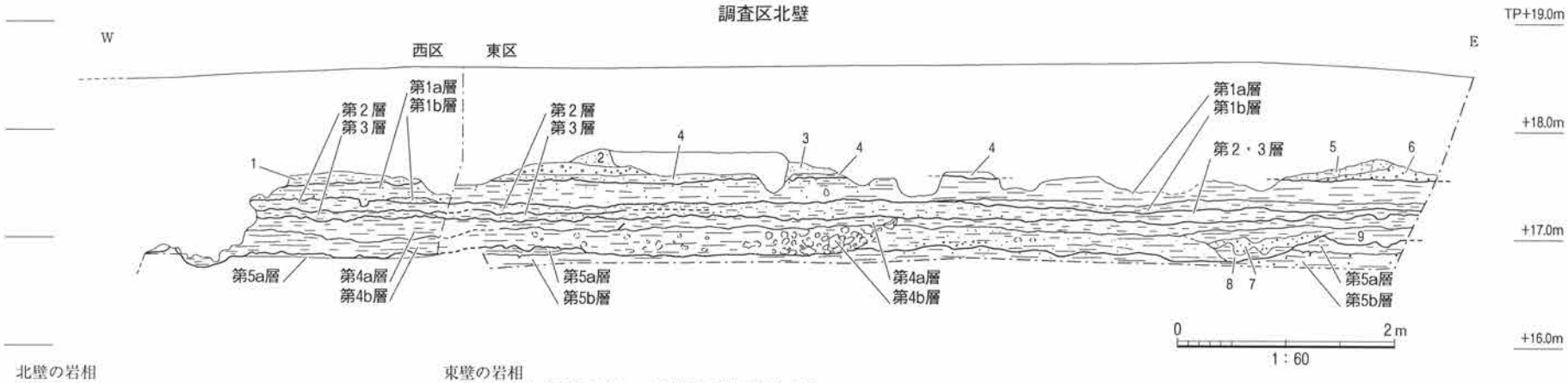
第1層　以下の2層に細分される作土層で、層厚は20～40cmである。瓦質土器羽釜や瀬戸美濃焼灰釉皿26、中国産青花皿27などが出土した本願寺期の地層である。上面でSD01·02などの遺構を検出した。

第1a層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒～粗粒砂を含む粘土質シルト層

第1b層：黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルト層

第2層　褐色(10YR4/4)極細粒砂質シルト～シルト質極細粒砂層で、層厚10cmの作土層である。出土遺物には瓦器椀24、東播系須恵器こね鉢25などがあり、鎌倉時代の地層である。東区東半では下位の第3層との区分が困難となる。

第3層　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質極細粒砂層で、層厚10cmの作土層である。出土遺物には



北壁の岩相

第０層

1：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂(整地層)
2：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂(整地層)
3：黄褐色(10YR5/6)細礫～極粗粒砂(整地層)
4：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂(整地層)
5：褐色(10YR4/4)わずかにシルト質中粒砂(整地層)
6：灰黄褐色(10YR4/2)と黄褐色(10YR5/6)細礫～極粗粒砂(整地層)

第1a層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒～粗粒砂を含む粘土質シルト(作土層)
第1b層：黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルト(作土層)
第２層：褐色(10YR4/4)極細粒砂質シルト～シルト質極細粒砂(作土層)
第３層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質極細粒砂(作土層)
第4a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土(作土層)
第4b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土を主体に地山偽礫を多く含む(整地層)

7：黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂
8：灰色(5Y4/1)粗粒砂質粘土
9：黄灰色(2.5Y4.5/1)粘土

第5a層：黄褐色(10YR5/8)シルト質粘土(地山層)
第5b層：灰黄褐色(10YR6/2)極粗粒砂質粘土(地山層)

東壁の岩相

1：褐色(10YR4/4)シルト偽礫、細礫を含む中粒～細粒砂(整地層)
2：黄褐色(10YR5/6)や黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂(整地層)
3：褐色(10YR4/4)シルト偽礫多く含むシルト質中粒砂(整地層)
4：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト偽礫含むシルト質中粒砂(整地層)
5：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒～中粒砂で下部は細礫を多く含む(整地層)
6：灰黄褐色(10YR4/2)と黄褐色(10YR5/6)細礫～中粒砂(整地層)
9：黄褐色(10YR5/6)と黄褐色(2.5Y5/3)細粒～中粒砂(整地層)
10：暗灰黄色(2.5Y4/2)と灰黄色(2.5Y6/2)礫を含む中粒砂(整地層)
11：黄灰～暗灰黄色(2.5Y4/1.5)シルト(整地層)
12：明褐色(7.5YR5/8)シルト偽礫混り粗粒砂～細礫(整地層)
13：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粗粒砂(SD01埋土)

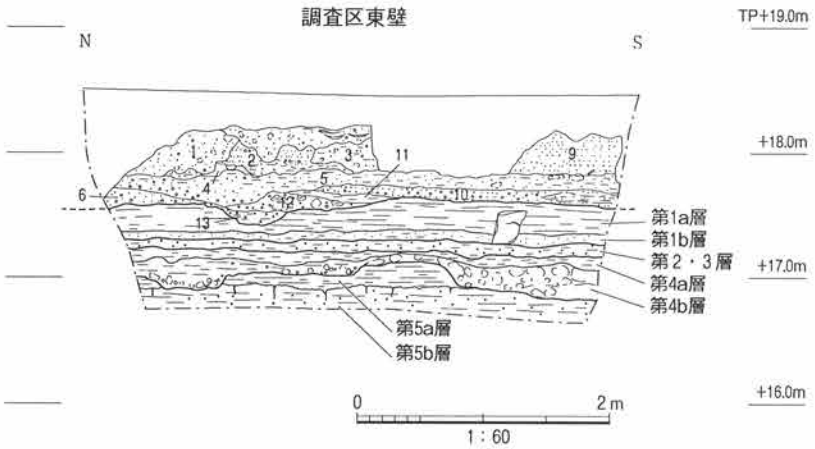


図４　調査区北壁・東壁地層断面図

奈良時代までの土師器・須恵器があり、中世の遺物は出土していないため古代の地層とするが、上位の第２層との時期差は不明であり、中世前半まで下る可能性もある。

第４層　以下の２層に細分される古代の遺構埋土ないし作土層である。上部の第4a層は淘汰のよいシ

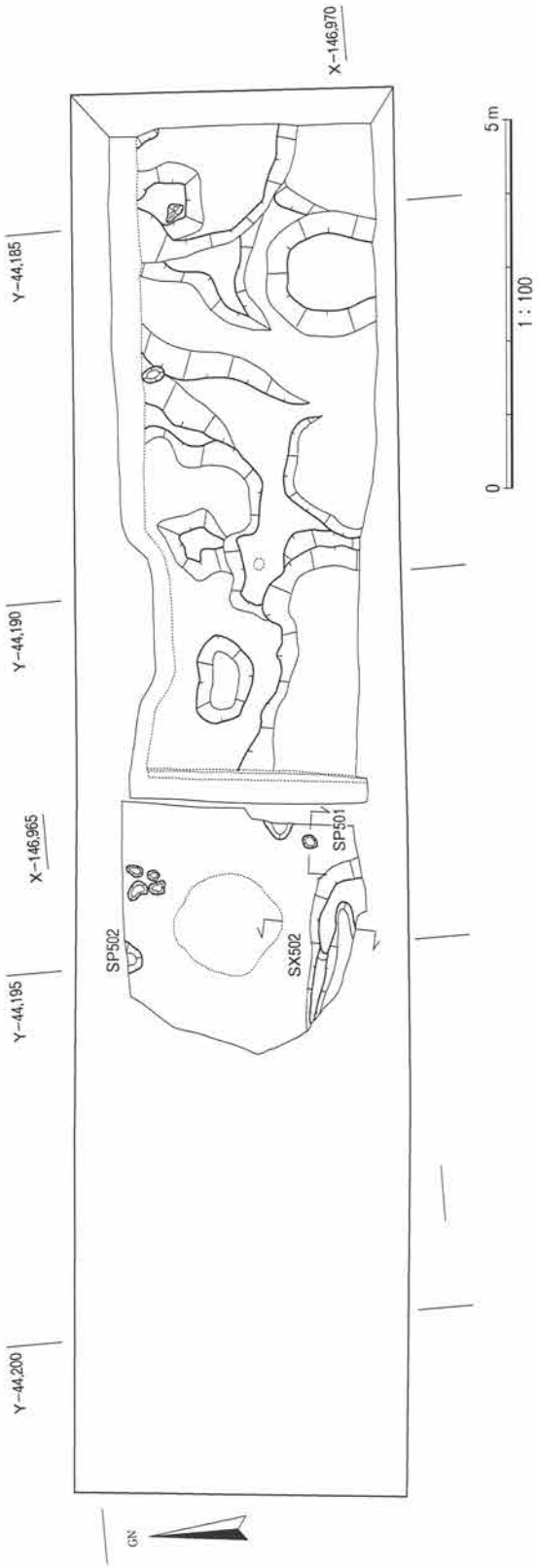


図５　第５層上面遺構平面図

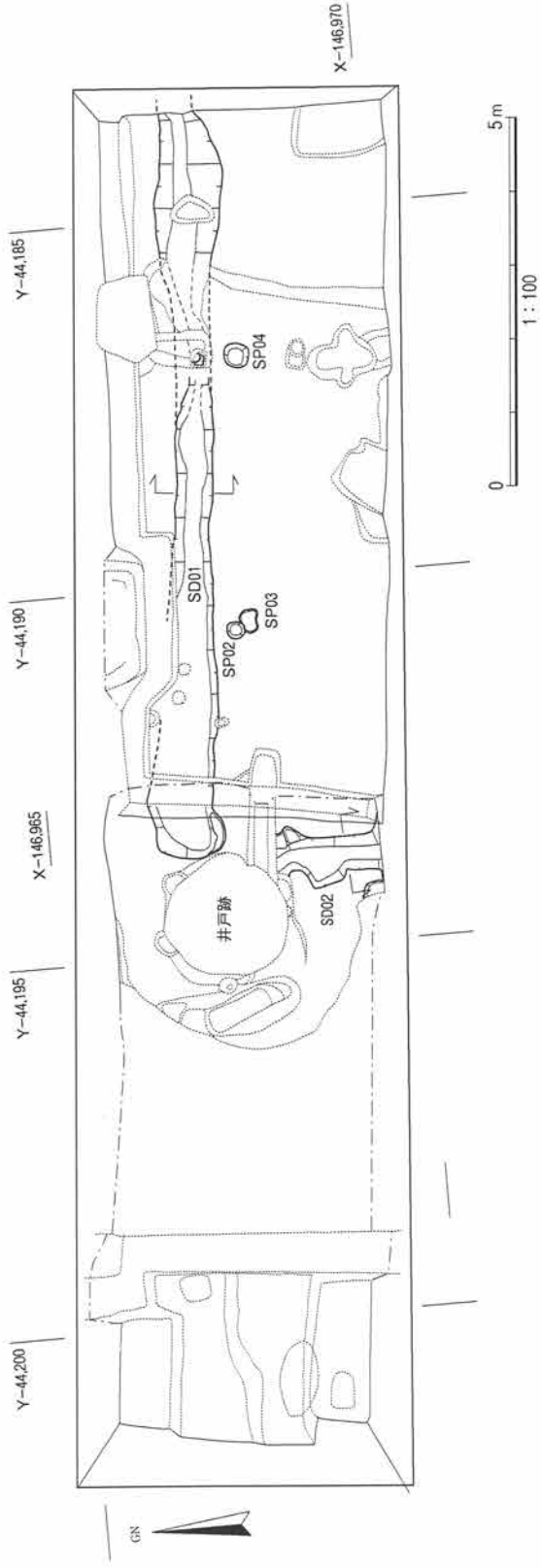


図６　第１層上面遺構平面図

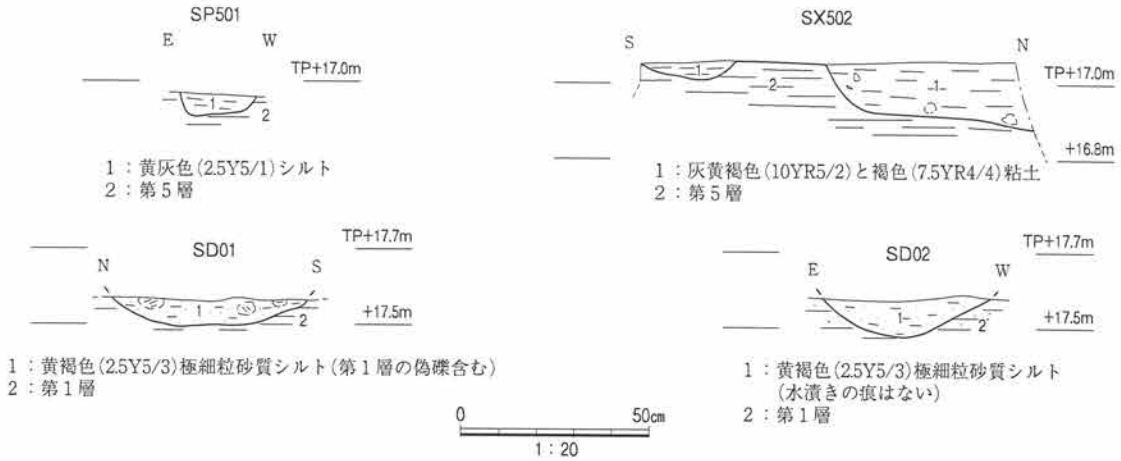


図7　第5層上面・第1層上面遺構断面図

ルト質粘土層を主体とする作土層で、層厚は約10cmである。出土遺物は少なく、第4a層単独で検出できた遺物はない。下部の第4b層は地山である第5層に由来する偽礫を多量に含み、第5層上面の遺構群を埋めた地層で、層厚は約20cmである。出土遺物には飛鳥時代の土師器・須恵器があり、同時期の地層である。第4a層と一括で掘削した第4層の出土遺物もほぼ同様である。

第4a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土層

第4b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土層を主体に地山偽礫を多く含む

第5層　以下の2層に細分される地山層である。中位段丘構成層に相当し、第5a層は層厚約10cm、第5b層は暗色帯で層厚30cm以上を確認した。

第5a層：黄褐色(10Y5/8)シルト質粘土層

第5b層：灰黄褐色(10YR6/2)極粗粒砂質粘土層

ⅱ)遺構と遺物(図5～8)

遺構の検出は第5層、第4a層、第3層、第2層、第1層の各上面で試みたが、第5層および第1層上面以外では顕著な遺構を確認することはできなかった。

a．古代(図5・7・8)

第5層上面遺構・出土遺物

西区SX502のほか調査区全体に不定形な窪みが広がっていた。第5層の上面からの深さは最大で0.2m程度であり、概ね第5b層に達した深度で留まっているようである。砂を含まない第5a層を対象に、掘削と整地を繰り返した状況から、粘土層の採取を目的とした土採り穴と考えられよう。出土遺物には飛鳥時代の土師器・須恵器がある。SX502からは須恵器杯H蓋1、杯G蓋2などが出土した。埋土の第4b層からは、他にも同時期の遺物が多数出土している。須恵器杯B12のように難波Ⅳに下る可能性のある資料も含まれるが、土師器杯C3・4、大型の鉢5、鉢6、高杯7、甕8、須恵器杯H身9、杯G蓋10、杯G11など、これらは前期難波宮開始期に併行する難波Ⅲを中心とする7世紀中葉の遺物であり、難波宮・京造営に伴う一連の作業と位置付けることができよう。

第4層出土遺物

第4a層・4b層を一括して掘削した際の出土遺物も、須恵器杯B蓋18のように難波Ⅳ新段階に下る可能性のある資料も含まれるが、土師器杯C13、高杯16、甕19、須恵器杯G蓋14・17、杯G15、平瓶20など難波Ⅲ期のものが主体で、多くが第4b層に含まれていたと考えられる。

第3層出土遺物

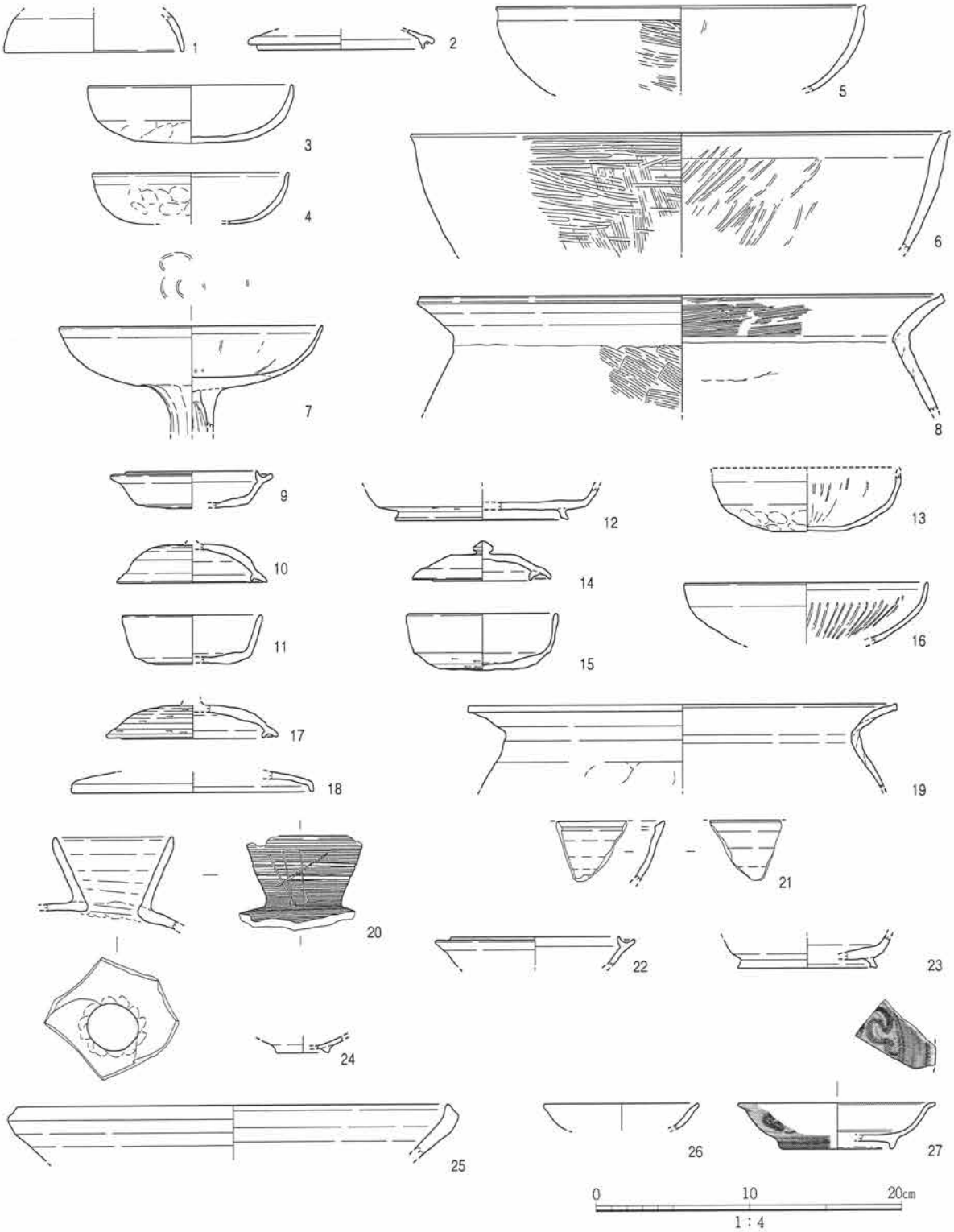


図8　出土遺物

SX502(1・2)、第4b層(3～12)、第4層(13～20)、第3層(21～23)、第2層(24・25)、第1層(26・27)

第３層からの出土遺物には須恵器鉢21、杯H身22、杯B23などがある。古代に属する遺物だが、23のように奈良時代の遺物を含む。中世の遺物は出土していない。

b．中世(図６・７・８)

第２層出土遺物

第２層の出土遺物には東播系須恵器こね鉢25、瓦器椀24などがある。12～13世紀の資料であり、本層は中世後半に属するものである。

第１層上面遺構・出土遺物

溝SD01・02のほか小穴SP02～04を検出した。SD01は最大幅0.9m、深さ0.2mの東西溝で、方位はN－84°－Wである。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルトで、水の流れた痕は確認できなかった。土師器や布目痕のある丸瓦の細片が出土した。SD02はSD01の西端で直交するが、直接は接していない。幅0.7m、深さ0.1mである。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルトで、やはり水の流れた痕は確認できなかった。遺物は出土していない。SP02～04では柱痕跡を確認出来なかった。これらからは鞴羽口・鉱滓のほか土師器・須恵器が出土しているが細片のため図化していない。

第１層からは瀬戸美濃焼灰釉皿26、中国産青花皿27のほか瓦質土器羽釜の細片などが出土した。本願寺期を下限とする資料であり、これらの遺構はそれ以降の時期と考えられる。

3)まとめ

今回の調査では周辺の既往の調査と同様に、古代および中世末頃の遺構と遺物を検出した。

・古代では前期難波宮造営に併行する時期の不定形な穴を検出し、土採り穴と考えられる。

・本願寺期の第１層上面では東西および南北の溝を検出した。

・第１層上面に整地された上位層は、大坂城惣構造成に伴う可能性がある。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、「伊藤基治氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS99－80)報告書」:『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.49－50

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「細田慎平氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS00－54)報告書」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.53－57

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大坂城跡発掘調査(OS06－10)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.27－29

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城跡発掘調査(OS08－4)報告書」:『平成20年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.27－30

大阪市文化財協会1981、「難波京・朱雀大路の調査略報」:『難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6』、p.128

大阪市文化財協会2002a、「上本町西地区の調査」:『大坂城跡Ⅵ』、pp.234－236

大阪市文化財協会2002b、「大坂城跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1999・2000年度―』、pp.90－94

大阪市文化財協会2002c、「清水谷地区の調査」:『大坂城跡Ⅵ』、pp.219－233

大阪市文化財協会2003、「大坂城跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―2001・2002年度―』、pp.79－82

東区
東壁地層断面
（西から）

東区
第５層上面完掘状況
（南西から）

東区
第１層上面検出状況
（東から）

中央区上汐一丁目４における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH15－２)報告書

調査個所	大阪市中央区上汐一丁目4
調査面積	35㎡
調査期間	平成27年11月4日～11月6日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の脊梁部に立地する上本町遺跡の北部に位置する。古代においては難波宮の南に接し、近世では豊臣氏大坂城の南端である惣構堀の南に近接する。これまで周辺地では数多くの調査が行われ(図1)、古代や中世および豊臣期の遺構・遺物が多数見つかっている。特に注目されるのは古代の正方位に合う溝が発見されていることで、そのうちUH12－6・7次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]、UH08－8次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]では条坊ないし坊間に相当する位置に当たるため、難波京を想定する重要な手掛かりとなってきた。また、UN05－1次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]のように中世に降る場合でも、前代から踏襲された可能性があることから同様の論拠となりうるものである。今回の調査地は西二路のラインに当たり、道路側溝等の検出が期待された。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.7m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世～近世の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査が行われることとなった。

後述する第3層までを重機を用いて掘削し、その後、人力による掘削を行い、層序に応じて順次遺構を検出、適宜実測図や写真撮影によって記録しながら地山(第5)層上面まで調査した。

また、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく

図1　調査地位置図
(太破線は難波京条坊想定線、細破線は1/4線[積山 洋2010]
溝は実線が古代、点線が中世以降に属する)

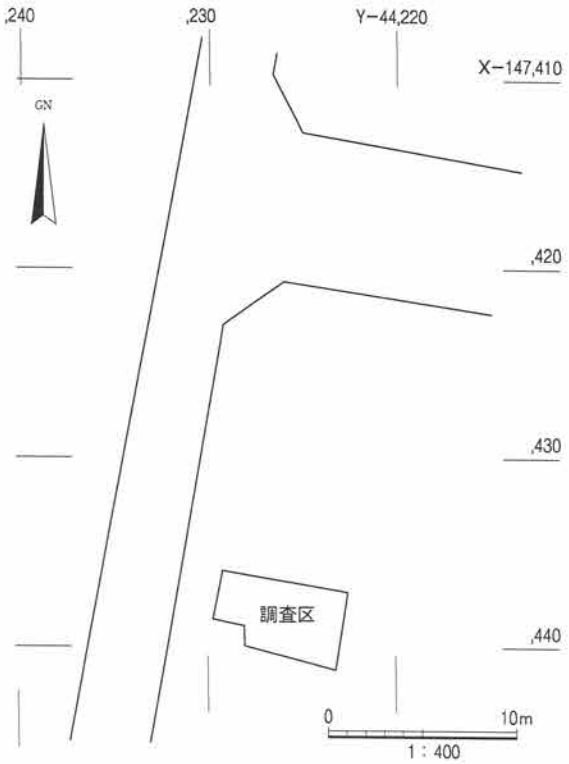


図2　調査区配置図

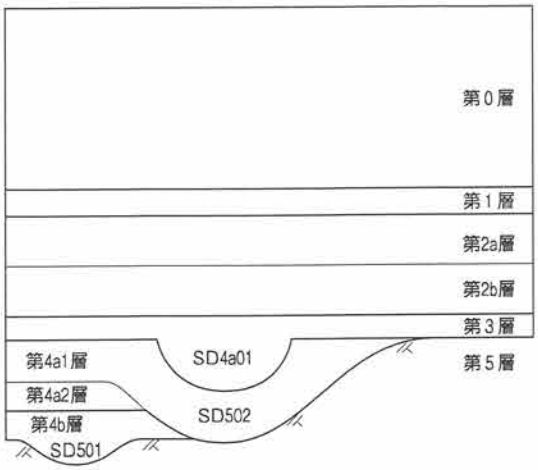


図3　地層と遺構の関係図

座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

2）調査の結果

i）層序（図3・4）

調査地内の現況地形はTP＋22m前後であるが、西側の谷町筋を挟んで形成された寺町へは2m以上の比高で低くなっている。

第0層：明黄褐色（2.5Y7/6）細粒砂～暗褐色シルト質細粒砂で、層厚は100cmを越える。現代の整地層である。

第1層：黄褐色（10YR5/6）炭混りシルト質中粒～細粒砂で、層厚は10cm程度である。第0層で盛土される以前の表土層である。

第2層は岩相によって第2a層、第2b層に2分される。重機で掘削したため詳細な時期は不詳であるが、出土遺物から近世と推定される。

第2a層：褐色（10YR4/4）シルト質中粒砂で、近世瓦を多く含む。層厚は40cm以下である。

第2b層：明赤褐色（5YR5/6）地山偽礫混りシルト質中粒砂で、層厚は20cm程度である。近世の整地層とみられる。

第3層：褐色（10YR4/4）炭混り中粒砂質シルトで、層厚は15cm以下である。本層を埋土とする遺構にSD4a01がある。

第4層は岩相によって第4a層、第4b層に2分され、さらに第4a層は第4a1層・第4a2層に細分された。

第4a1層：明褐色（7.5YR5/6）シルト質中粒～粗粒砂で、層厚は20cm以下である。本層を埋土とする遺構にSD502がある。

第4a2層：灰褐色（7.5YR4/2）細粒砂～シルト質細粒砂で、層厚は20cm以下である。上面は堅くしまり、褐色（7.5YR4/3）極粗粒砂の偽礫を含むため、整地層と判断した。調査区の西端付近にのみ堆積しており、低く傾斜する側に客土して、平坦な地形に整地しようとした意図が窺える。

第4b層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂質シルトを主体とし、層厚は30cm以下である。SD501の埋土としてのみ確認した。

第5層：明黄褐色（2.5Y6/6）細礫質極粗粒砂で、地山層である。東端ではTP＋20.6m、西端ではTP＋19.7mであり、1m近い比高が認められる。

ii）中世の遺構と遺物（図5～7）

室町時代の溝を3条検出した。これらは層序が異なり、古いものから順に記述する。

SD501　幅1.0m、深さ0.2mの南北溝で、第5層上面で検出された。埋土は第4b層で、基底には水漬きのにぶい黄色（2.5Y6/3）シルトが堆積しており、機能時堆積層であることから開口していた溝と判断される。検出範囲で方位を測定するとN－5°－Wとなる。出土遺物には瓦質土器羽釜1・須恵

質の平瓦2がある。1は口縁部がやや内傾し、端部は平坦におさめる。口縁部の内面調整はハケの後ヨコナデである。15世紀第2～3四半期のものである。2は凸面に格子目タタキを施すもので、飛鳥時代のものであろう。

SD502　幅1.3m、深さ0.4mの南北溝で、整地層である第4a2層上面で検出された。埋土は第4a1層で、基底には水漬きのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルトが堆積しており、機能時堆積層であることから

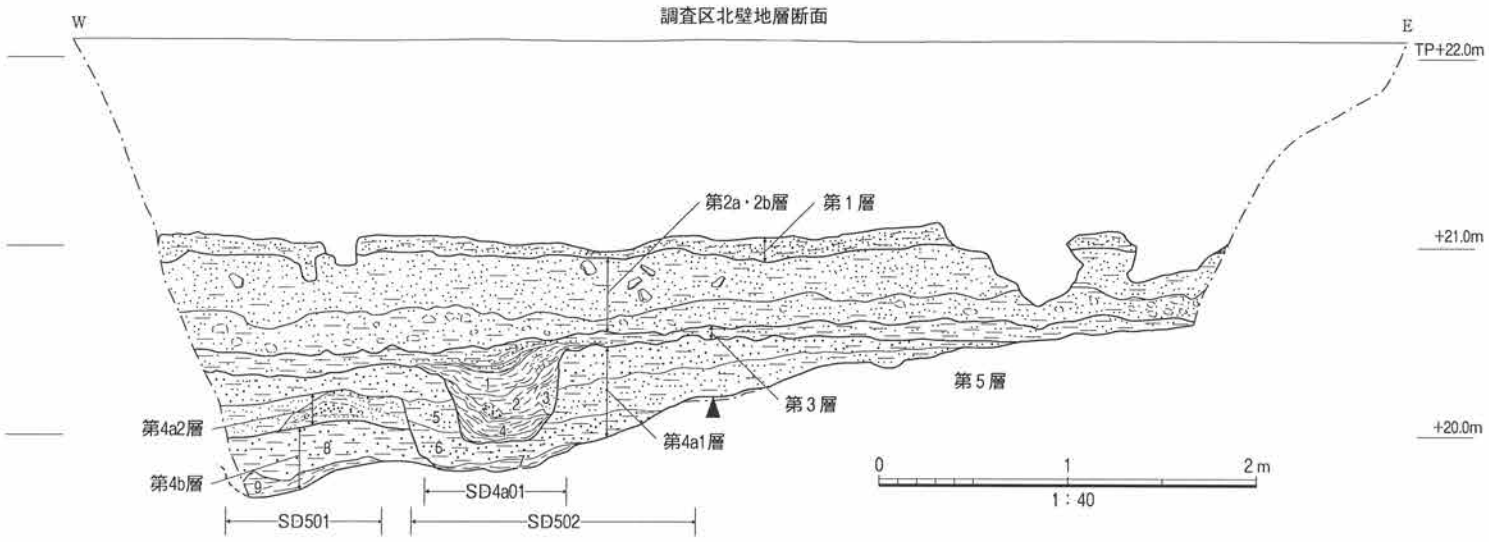


図4　北壁地層断面図

第0層：明黄褐色(2.5Y7/6)細粒砂～暗褐色シルト質細粒砂(整地層)
第1層：黄褐色(10YR5/6)炭混りシルト質中粒～細粒砂(現代土壌)
第2a層：褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂で瓦を多く含む
第2b層：明赤褐色(5YR5/6)地山偽礫混りシルト質中粒砂(整地層)
第3層：褐色(10YR4/4)炭混り中粒砂質シルト
第4a1層：明褐色(7.5YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂
第4a2層：灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂～シルト質細粒砂で褐色(7.5YR4/3)極粗粒砂偽礫を含む(整地層)
第4b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトなど(SD501埋土としてのみ確認した)

SD4a01(埋土は第3層)
1：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト(水漬き)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルト(水漬き)
3：灰褐色(7.5YR5/2)細粒砂(偽礫)
4：黄褐色(2.5Y5/3)シルト(水漬き)
SD502(埋土は第4a1層)
5：褐色(7.5YR4/6)シルト質中粒砂(ラミナ確認できず)
6：黄褐色(2.5Y5/3)粗粒～極粗粒砂質シルト(ラミナ確認できず)
7：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト(SD502基底の機能時堆積層：水漬き)
SD501(埋土は第4b層)
8：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト
9：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト(SD501基底の機能時堆積層：水漬き)

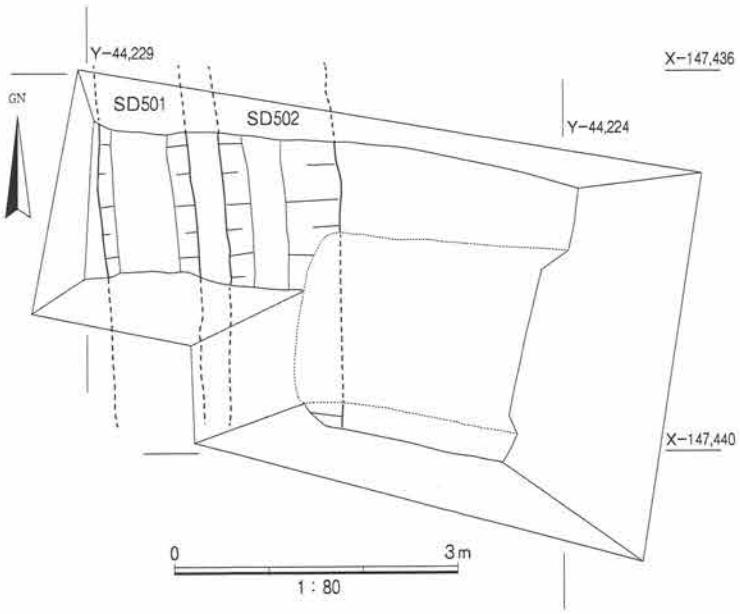


図5　第4層関連の遺構平面図

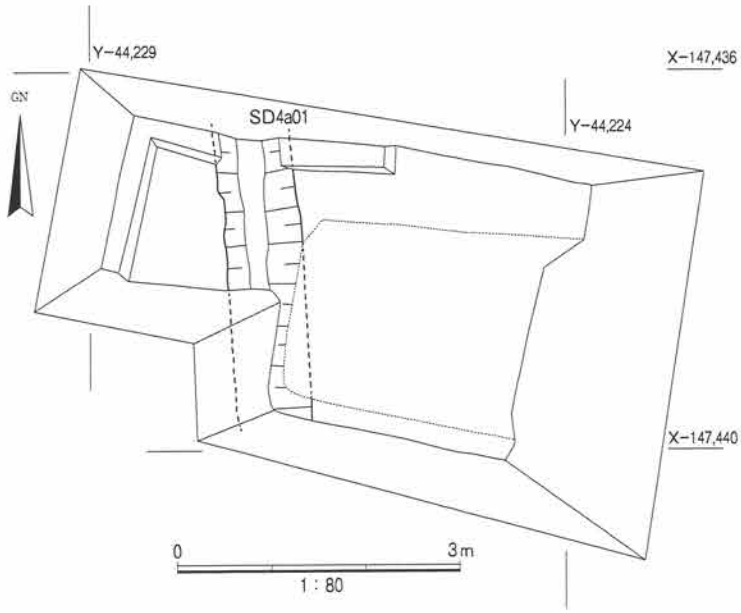


図6　第3層関連の遺構平面図

SD501と同様に開口していた溝と判断される。検出範囲で方位を測定するとN－3°－Wとなる。

SD502からではないが、第4a層から土師器羽釜3、瓦質土器擂鉢4が出土している。3はわずかに内傾する口縁部に短い鍔がつく。口縁部内面の調整はハケの後ヨコナデである。16世紀初ごろのものであろう。4は体部から直線的に開き、内面に擂り目がある。15世紀後半のものである。SD502はSD501より後出するため、3がSD502の時期を示すと考えられる。

SD4a01　幅0.8m、深さ0.4mの南北溝で、第4a1層上面で検出された。位置はほぼSD502と重なっている。埋土は第3層で、大部分が水漬きのにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト～黄褐色(2.5Y5/3)の機能時堆積層であるため、長期間開口していたと推定される。検出範囲で方位を測定するとN－5°－Wとなる。出土遺物には瓦器椀5がある。内面にやや密なヘラミガキを施すが高台は低く、12世紀末～13初のものであるが、前述のとおり下位のSD502・SD501が15世紀～16世紀初に降るため、5は遺構の時期を示すものではない。SD4a01の時期は不詳であるが、先行するSD502と同一の場所に同方位で掘削されていること、16世紀末の豊臣前期にこの一帯が平野町城下町に整備され、その町割りは上町台地の地勢に沿った現代と同じ方位が想定されていることから、平野町城下町の成立以前と想定される。

3)まとめ

今回の調査では室町時代に属する溝が3条見つかった。それぞれの埋土に水漬きの機能時堆積層があり一定期間開口していたこと、ほとんど同じ位置にあることから、古い溝が埋没した後に新たな掘

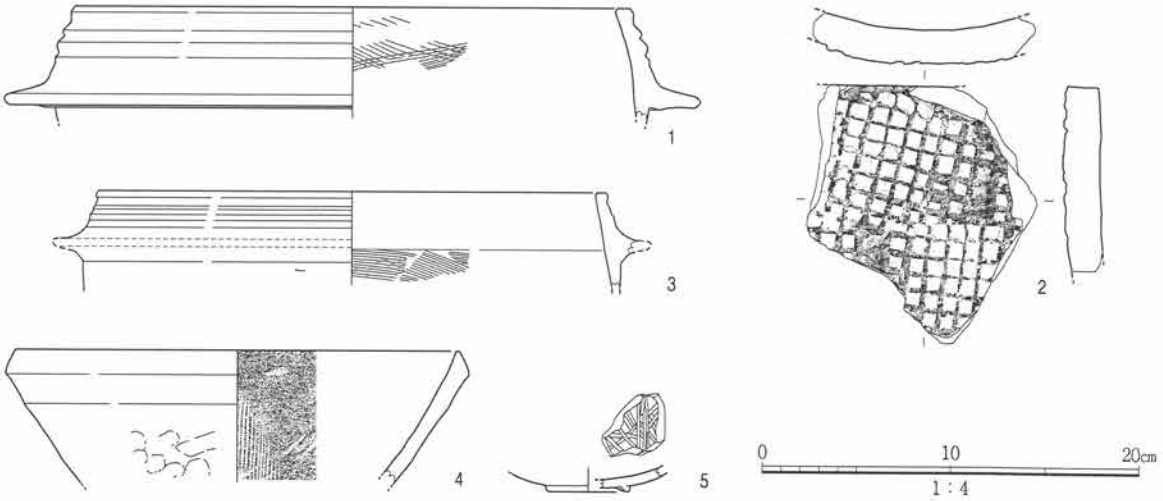


図7　遺物実測図

SD501(1・2)、SD4a01(5)、第4a層(3・4)

削を繰り返した状況が想定される。さらにSD502の場合は整地作業も伴うことが注意される。こうした特徴から何らかの境界を示した遺構と考えられ、始源の時期については不明ながら、正方位の溝であり、想定される条坊の西二坊ラインに合致することから難波京坊路に係る溝である可能性が高い。飛鳥時代に遡る瓦が1点出土したことも古代の状況を検討する資料である。また、当該地では豊臣期の城下町成立まで正方位を指向した町割りが存続した可能性も考えられる。

これまでの周辺調査でも中世後半の遺構は少なく、今回の調査でも溝以外の遺構は見つかっていないが、 今後の調査の積み重ねによって、当該地の古代から近世に至る過程を明らかにすることができよう。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「上本町北遺跡B地点発掘調査(UN05－1)報告書」:『平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.19－25

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「天王寺区上本町四丁目における上本町遺跡発掘調査(UH08－8)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.365－370

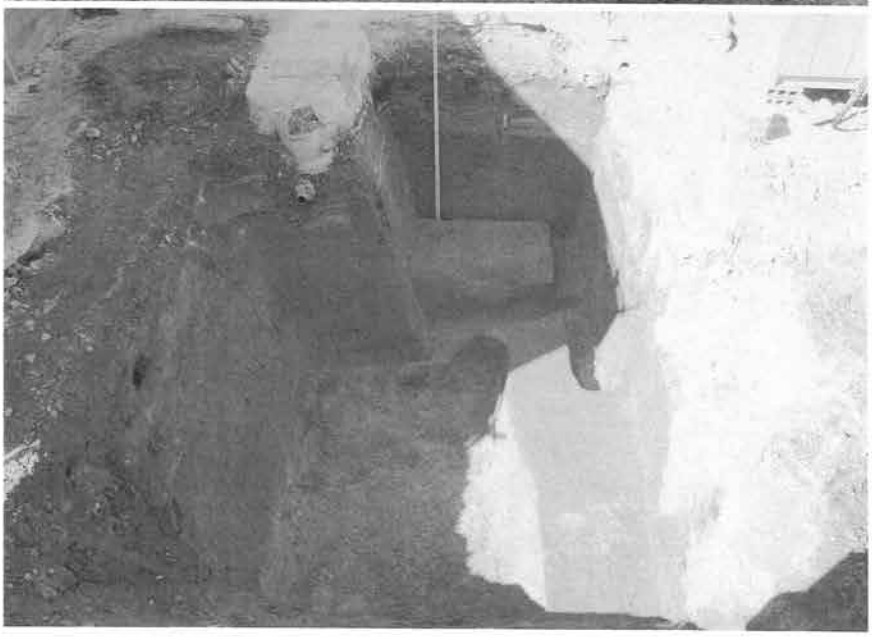
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「上本町遺跡発掘調査(UH12－7)報告書」:『平成24年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.43－54

積山洋2010、「複都制下の難波京」:平成18～21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書『東アジアにおける難波京と古代難波の国際的性格に関する総合研究』、pp.79－86

SD501西部
（調査区北壁内）
（南東から）

SD501・502完掘状況
（南東から）

SD4a01完掘状況
（東から）



中央区西心斎橋一丁目14－２他における建設工事に伴う
西心斎橋１丁目所在遺跡発掘調査(WS15－１)報告書

調査個所	大阪市中央区西心斎橋一丁目14－２他
調査面積	100㎡
調査期間	平成27年12月７日～12月11日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長 清水和明、積山洋

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は、東横堀・西横堀・道頓堀・長堀に囲まれ、元和5(1619)年以後の17世紀前半に開発された「島ノ内」の北西部に位置する(図1)。明暦元(1655)年「大坂三郷町絵図」[大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター2008]以後の町名は「大宝寺町」であり、西横堀に隣接している(図9)。こうした水運至便の立地であったため、この地には遅くとも文化3(1806)年「増修改正摂州大坂地図」以後、多度津藩(丸亀藩の支藩)の蔵屋敷が置かれている。

当該地において再開発が計画されたため、平成27年10月7日、大阪市教育委員会による試掘調査が実施され、地表下約1.8m(江戸時代の地層の下)で遺物包含層が検出された。この結果に基づき、本調査が実施されることとなった(図2)。

調査は平成27年12月7日に開始された。遺物包含層の直上までを機械力で掘削し、それ以後は人力による遺構の検出と掘削、写真撮影、実測、遺物の採集などに務めた。同月11日、現地作業を終了し、撤収した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また、本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

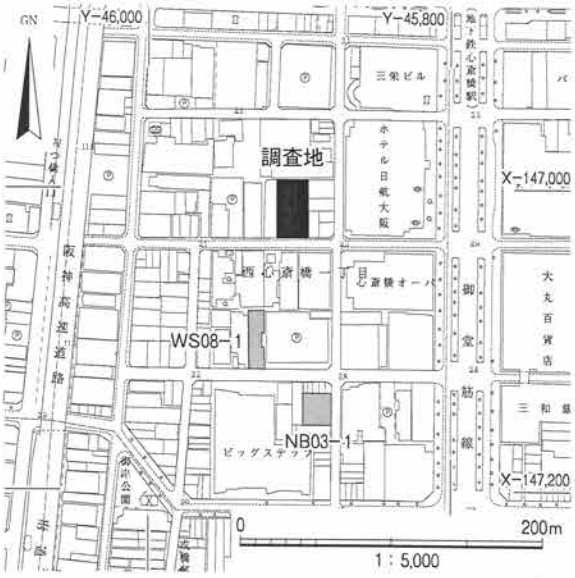


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の地層は大きく4層に区分される。

第1層:近現代の整地層である。第1a層は厚さ40cmほどの砕石を敷いた現代の層準であり、第1b層は近代に属し、盛土の厚さは70cmほどである。

第2層:近世の整地層とそれに挟まれた生活面を一括して第2層とする。厚さは50~60cmである。本層は後述するSD03を境に層相が異なる。東側では3層に細分できる。第2a層は浅黄色

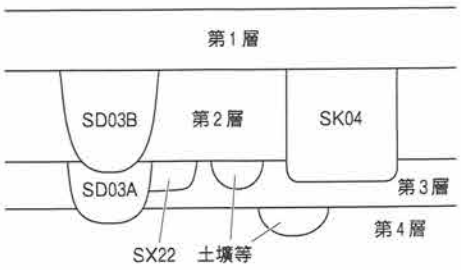


図3　地層と遺構の関係図

(2.5Y3/7)中粒～粗粒砂の整地層で、層厚は最大で約40cmである。第2b層は黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトと砂が互層になっており、生活面を形成するために下位の砂の上に敷かれた層準であり、厚さは10cm以下である。第2c層は暗オリーブ色(5Y4/4)中粒～粗粒砂の整地層で、厚さは10～20cmであった。一方、西側は3～5層に分かれる様相がみられ、東の第2a～2c層と対応させることができないが、灰黄色～黄褐色のシルト・砂混りシルト・シルト混り砂などの整地層が認められた。第2層下面までを機械掘削したため、この層準の細かい年代は不明である。

第3層：褐色(10YR4/4)粗粒砂で、炭や下位の第4層の細礫などを含み、砂を主体とする整地層とみられる。最大層厚は40cmである。年代を示す遺物は出土していないが、この地で最初の整地層であるため、元和5(1619)年に始まる当地の開発に係わるものと推測しておく。

第4層：黄褐色(10YR5/6)の砂礫でTP+1.3m以下の自然堆積層である。本層には遺物は含んでいない。その上部の第4a層は比較的均質な層相であるが、部分的に検出したTP+0.7m以下の第4b層は明瞭な水成層であった。

ii)遺構と遺物(図5～8)

第4層上面

土壙：SK19は調査区の北部で検出された幅0.6m、長さ1.1m以上、深さ0.35mの長方形土壙である。長軸は北北西から南南東の方向をとる。遺物は図化できなかったが、菊花のスタンプ文を施す瓦質火鉢、コビキAの丸瓦や、江戸時代には見られないやや深手の土師器皿などの小破片が出土し、豊臣期に遡る可能性が高い。SK14・15はSK19と同じ埋土の遺構であるが、遺物は出土していない。SK16は重複関係で第3層上面のSK09に先行し、出土した土師器小皿(図8－1・2)は下限が17世紀第1四半期頃のものである。

溝：SD23は調査区の北西部で検出された幅0.6m、深さ0.2mの南北溝である。南は攪乱に破壊されているが、そのさらに南の遺構面では検出されず、小規模な溝だったようである。遺物は出土してい

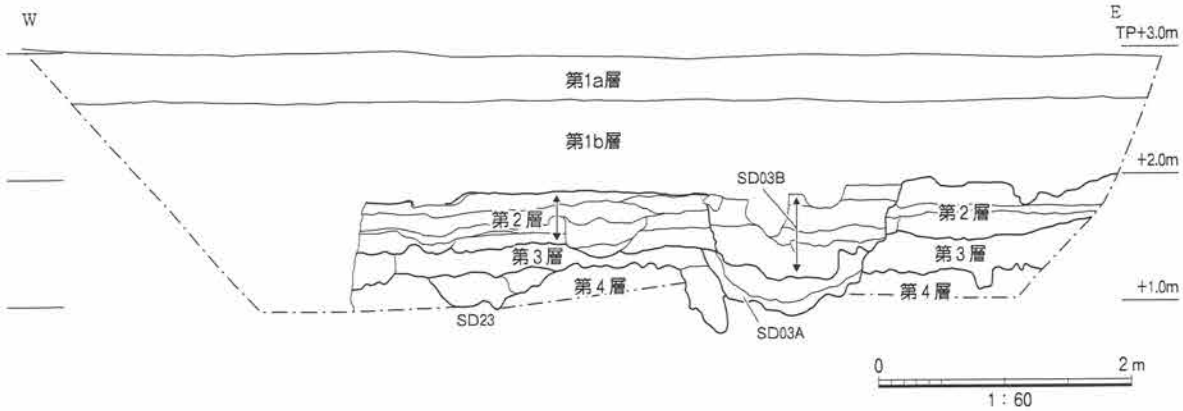


図4　北壁地層断面図

ない。

第３層上面

土壙：SK01は東西約0.8m、南北約1.6m、深さ0.4mを測る長方形の土壙で、肥前磁器染付碗６～８・同青磁皿９、土師器小皿、土師器焙烙E類10～12などが出土している(図８)。17世紀第３～第４四半期の頃に埋まっている。SK02はSK01の南で部分的に検出された土壙で、17世紀後半の肥前磁器

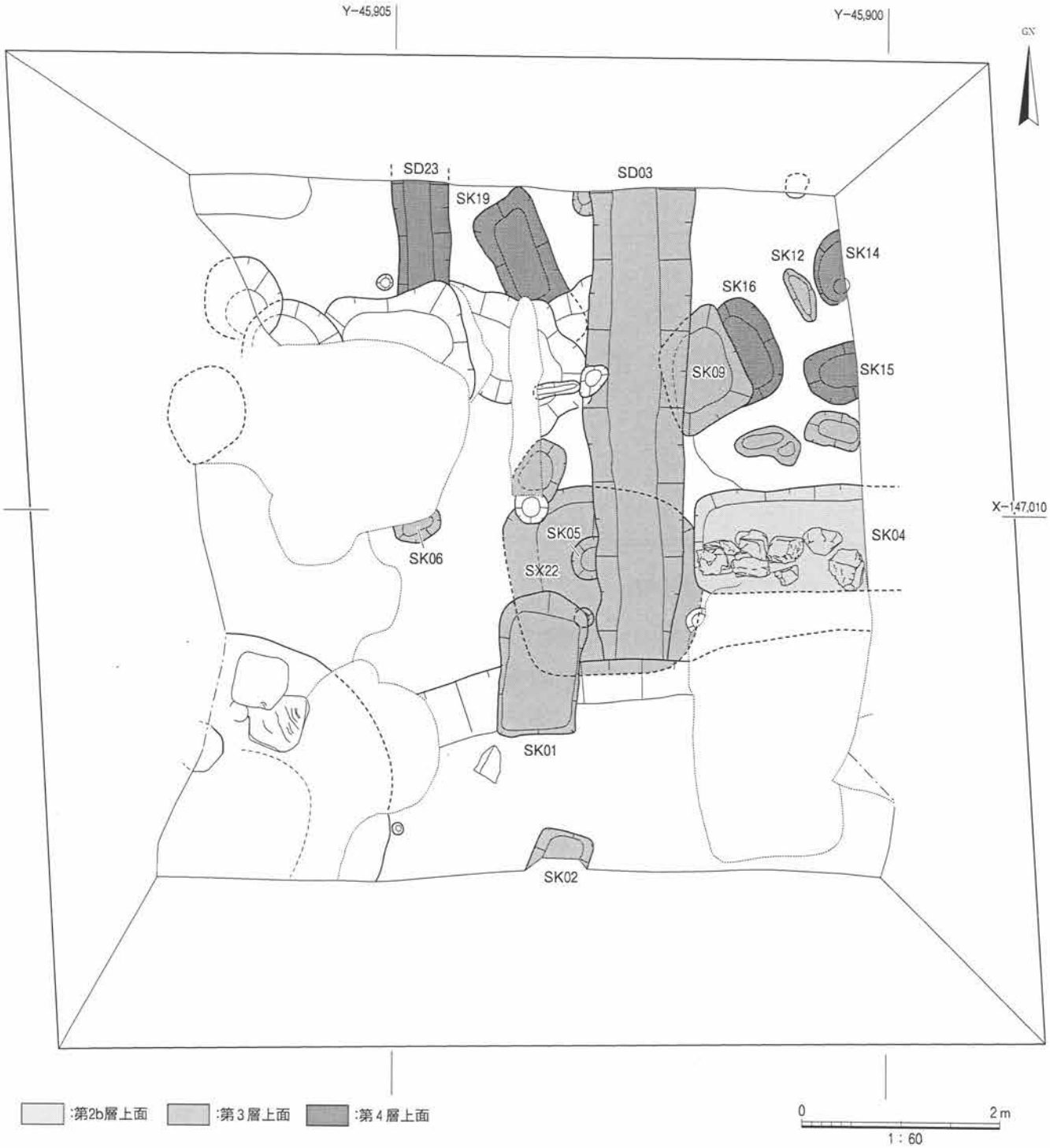


図５　遺構平面図

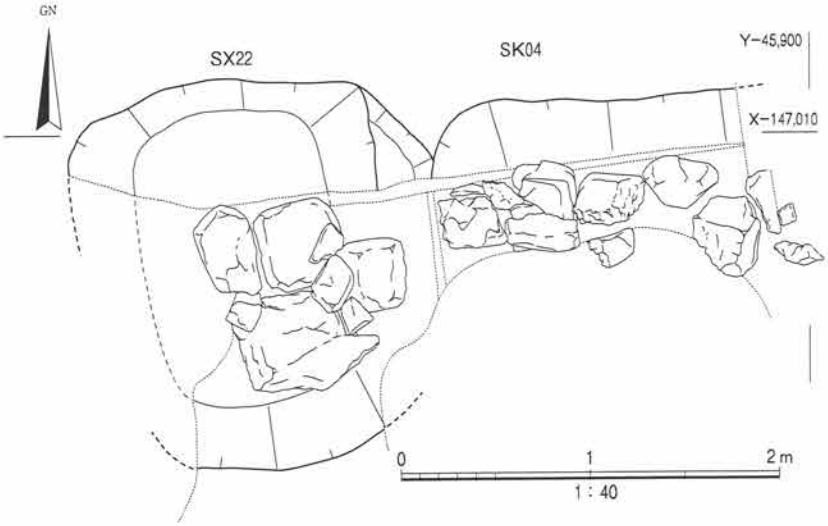


図６　SX22・SK04平面図

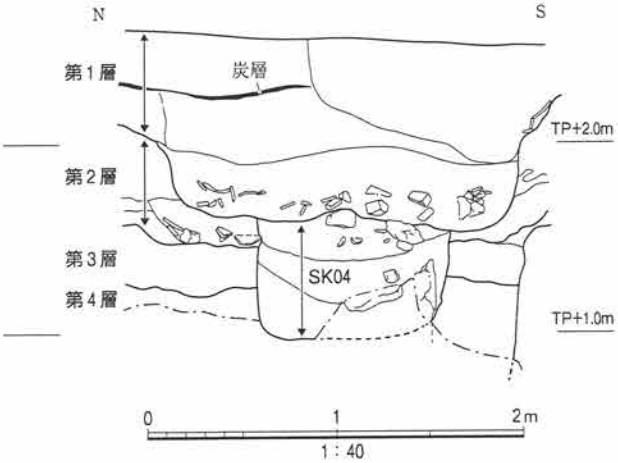


図７　SK04断面図(調査区東壁)

染付碗13が出土した(図８)。SK05はSD03と重複し、かつ先行する南北0.5m足らずの小土壙であるが、肥前磁器碗や肥前京焼風陶器碗などが出土した。17世紀後半である。SK06は東西0.5m、深さ0.2m余りの規模で、内面に釉の掛け分けが見られる肥前磁器染付碗14や同小杯15・土師器焙烙E類16[難波洋三1992]の出土をみた(図８)。肥前白磁の小杯15は古いが、遺構の年代は17世紀後半である。SK09は東西約0.8m、南北1.0m余、深さ0.2m余りの規模で、重複関係はSK16に後出し、SD03に先行する。一重網手文の肥前磁器碗・皿、丹波焼擂鉢、瓦質土器火入れなどが出土し、17世紀中頃～後半頃かとみられる。SK12は南北0.6m足らずで不整形な浅い遺構で、埋土はSK09と同じである。土師器焙烙E類17が出土している(図８)。

溝：SD03Aは最大幅1.3m、深さ0.6mの南北溝である。この溝は直上の第２層段階にも同位置で継続しており(SD03B)、その東西の第２層の層相が異なることなどから、敷地境の溝であろう。埋土から土師器小皿３・４、同焙烙E類５が出土しており(図８)、前者は17世紀前半頃の特徴を有するが、後者は同中頃を上限とする。この溝に先行するSK05の年代などにより、この溝の年代の上限は17世紀後半とみられる。

石組：SX22はSD03・SK05と重複し、かついずれにも先行する遺構である(図６)。第４層上面遺構の可能性もある。東西約2.0m、南北約2.1mの規模で、深さ0.3mほどの土壙の南側に、最大で一辺60cm弱の石材(厚く上面が平たい)を４個敷き、その上に方20cm以下の小石材が４個乗っていたが、本来は北側にも石材があったものと推測される。もとの形状やその性格等は不明である。出土遺物は少なく、年代の詳細も不明である。

第２層上面

土壙：SK04は南北約1.0m、東西長1.7m以上で調査地の東に連続する(図６)。直上に近代の遺構があったので深さは正確にはわからないが、0.6m以上である(図７)。調査区内では北側しか遺存していなかったが、その内部には人頭大より大きな石材(主に花崗岩の割石)が不規則に埋まっていた。年代

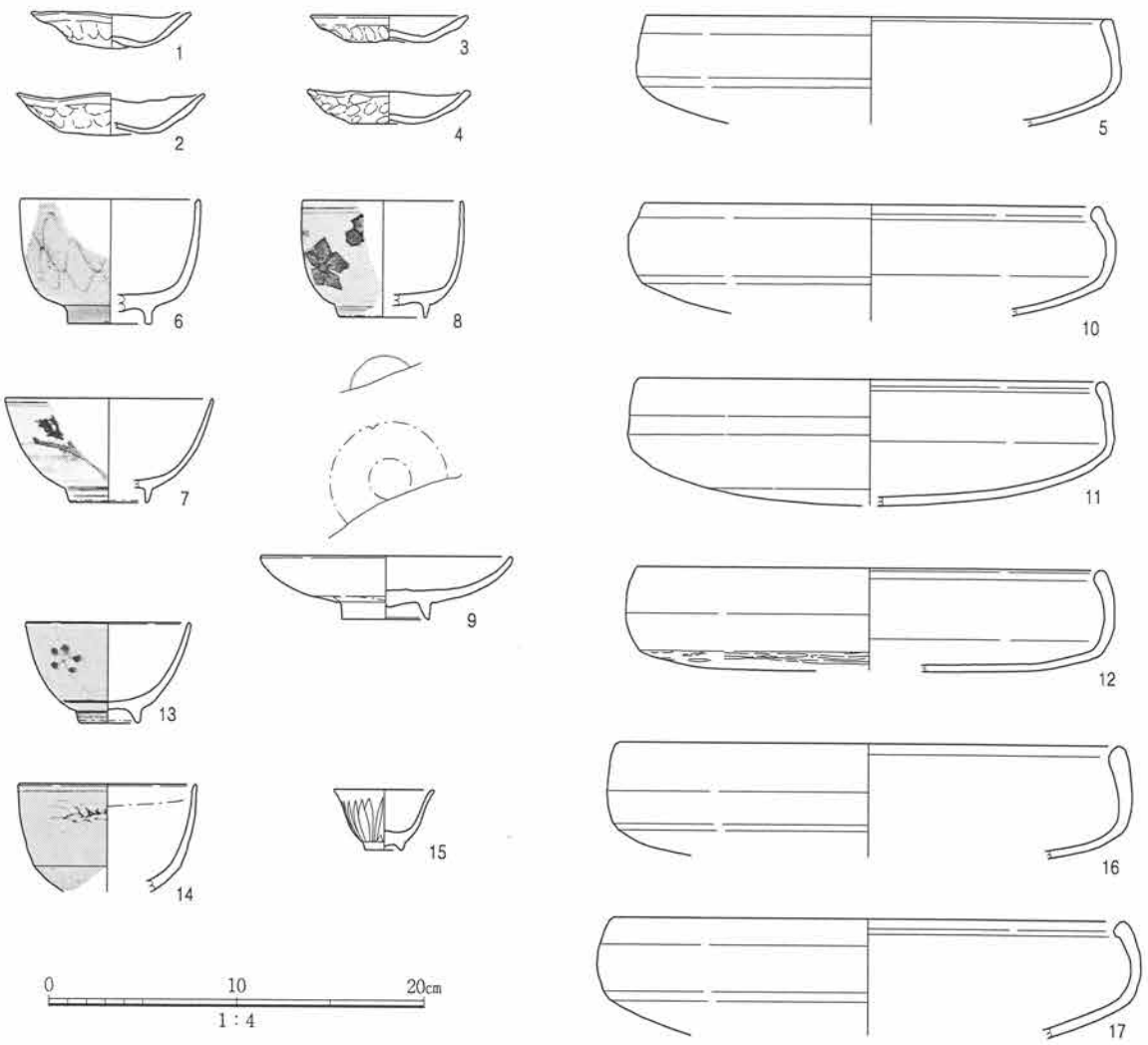


図８　出土遺物実測図

SK16(１・２)、SD03(３～５)、SK01(６～12)、SK02(13)、SK06(14～16)、SK12(17)

を知りうる土器の出土はない。

溝：SD03Bは第３層上面のSD03Aが第２層段階で新しく同位置に再掘削されたもので、継続する溝である。幅はほとんど変わっていないが、深さは約0.8mほどである。

3)まとめ

大坂ノ陣で豊臣氏が滅び、大坂の地が徳川幕府の直轄地になると、城下の復興と大規模な町の拡大が図られた。船場城下町の東方には豊臣期以来の東横堀があり、また元和元(1615)年には道頓堀が完成していたが、同５(1619)年以後、西横堀、長堀の開削工事が相次いで完成し、元和末年には東西南北をこれら四つの堀川で限られた「島ノ内」の市街地が生まれることになる[内田九州男1989]。

当地の旧町名「大宝寺町」については、かつて大宝寺なる寺院があったことによるとされる[大阪町名研究会1977]が、詳細は不明で、本調査地でも瓦の出土は少なく、寺院の存在を窺うことはできなかった。また文化３(1806)年「増修改正摂州大坂地図」以後の絵図に現れる多度津藩蔵屋敷は、当地を含む町割りに位置するが、この町割りは西横堀に面する西半部が炭屋町であり、多度津藩はそちらにあっ

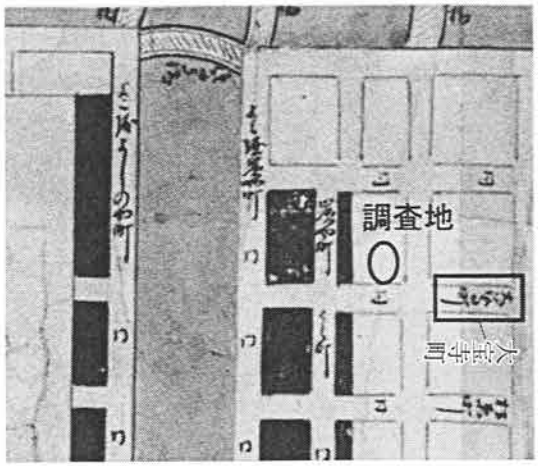


図9　大宝寺町 明暦元年大坂三郷町絵図

たものとみられる。

本調査地でもっとも古い整地層が第3層であり、これを元和5(1619)年に始まる開発によるものと仮定すると、遺構の変遷は矛盾なく理解できる。

第4層上面の遺構(17世紀前半)はそれ以前のものと考えられる。それは土壙や小規模な溝などであるが、元和の開発以前に人の居住があったことを示唆する。

しかし、人々の居住が本格化するのは17世紀後半であり、元和段階とは若干の年代差が生じる。明暦元(1655)年「大坂三郷町絵図」によれば、調査地の西隣、西長堀に沿って南北にのびる炭屋町は武家地(追手御城代家来屋鋪)であり、当初はまず武家地の開発が先行し、やや遅れて町人たちが本格的にこの地に居住したのではないかと想定される。また、敷地境とみられたSD03は、重複関係で先行するSK05に肥前京焼風陶器を含んでおり、その初現が17世紀第4四半期とみられることから、この地の敷地割がこの年代を遡ることはないであろう。

島ノ内の形成については、考古学的にはまだほとんどわかっていない。今後の資料の蓄積が待たれるところである。

参考文献

内田九州男1989、「城下町大坂の誕生」:『まちに住まう　大阪都市住宅史』 大阪市

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター2008、『大阪歴史博物館所蔵　明暦元年大坂三郷町絵図』

大阪町名研究会1977、『大阪の町名』 清文堂　pp.367～368

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の焙烙」:大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

北壁地層断面
（中央のSD03の東西で
層相が異なる）

調査地全景
（東から：中央にSD03）

SK04（右）・SX22（左）
（南から）

西区江戸堀一丁目18－32における建設工事に伴う

江戸堀１丁目所在遺跡B地点発掘調査(ED15－１)報告書

調 査 個 所　西区江戸堀１丁目18－32
調 査 面 積　40㎡
調 査 期 間　平成27年４月21日～４月30日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　清水和明　市川 創　櫻田小百合

1）調査に至る経緯と経過

調査地は、土佐堀川と旧江戸堀川に南北を挟まれた位置に立地する。このうち調査地の南側にあった江戸堀川は、1617(元和３）年に開削され徳川期大坂における水運の一端を担ったが、1955(昭和30）年に埋め立てられ姿を消した。徳川期の調査地周辺は白子裏町と呼称され[平凡社地方資料センター編1986]、蔵屋敷と町屋が混在する地域であった。このうち蔵屋敷については、調査地の北側には1655年から幕末に至るまで一貫して松江藩の蔵屋敷が、東側には1679年以降に三田藩の蔵屋敷が置かれたことが、史料や絵図から推定できる[豆谷浩之2001・佐古慶三監修1970]。また1806(文化３）年の『増修改正摂州大阪地図』には、調査地に相当する場所に「浄光寺」の記載がある[佐古1970]。

周辺ではこれまでに、江戸堀１丁目所在遺跡(ED06－１次)や、萩藩蔵屋敷跡(HA00－１次ほか)に関して調査が行われている。このうち前者では、18世紀と考えられる遺構面を確認し、建物の礎石などを検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。HA00－１次をはじめとする萩藩蔵屋敷跡の調査では、石垣などの構造をもとに蔵屋敷の変遷が考古学的に把握できている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。

今回の調査に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、地表下0.85m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする徳川期と考えられる遺構面および遺物包含層が検出された。こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として、今回の発掘調査を実施した。

調査は平成27年４月21日に10m×４mの調査区を設定して開始した。後述する第１層までを重機で掘削し、第２層以下を人力で掘り下げ、遺構面の精査と遺物の採集、写真撮影、実測などを行った。現地での調査は４月28日まで行い、４月30日には機材撤収を含むすべての作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。また、本報

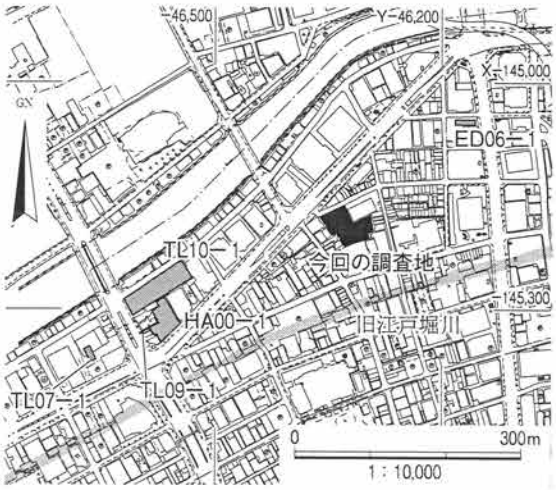


図１　調査地位置図

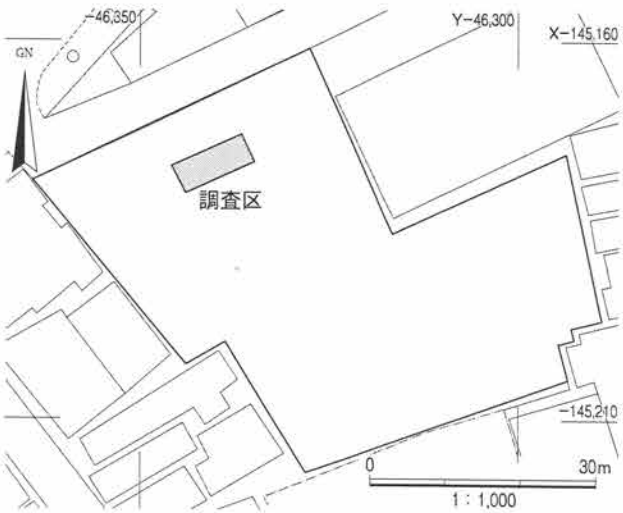


図２　調査区位置図

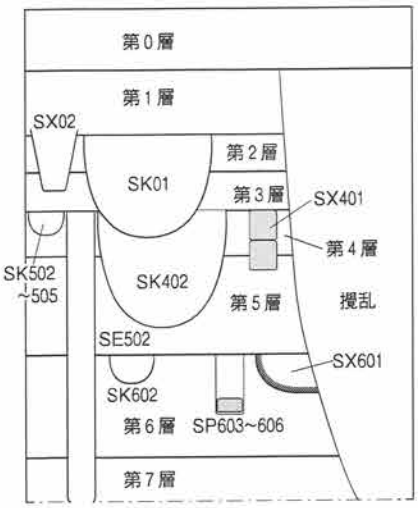


図3　地層と遺構の関係図

告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2)調査の成果

i)層序(図3・4)

調査地の周辺にはTP+1.0m前後のほぼ平坦な地形が拡がるが、工業用水の汲上げなどにより、近代以降に1.6~1.8mほど沈下したことが想定される[林田精郎・三田村宗樹・中川康一1987]。

今回の調査では、現地表下約2.5mまでの地層を7層に区分した。なお、第6層以下は地層の堆積状況確認のために実施した部分的な深掘りで観察したものである。

第0層：現代盛土層であり、層厚は最大で52cmである。

第1層：近代~現代の盛土層であり、層厚は20cmほどである。本層上面から大規模な撹乱が掘り込まれており、調査区東半では後述する第7層より深くまで達していた。このため、地層・遺構の遺存範囲はほぼ調査区西半に限られる。

第2層：徳川期の盛土層である。オリーブ褐色砂礫からなり、わずかにシルトを含む。層厚は14cmであった。本層上面では、SK01やSX02を検出した。また本層からは、軟質施釉陶器・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・土製品が出土した。

第3層：徳川期の盛土層であり、含炭オリーブ褐色シルト質砂からなる。層厚は30cmである。本層上面に遺構は認められなかった。土師器・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・瓦・石製品・金属製品・動物遺体など18世紀後半以降の資料が出土した。

第4層：徳川期の盛土層である。含炭灰黄褐色シルト質砂からなり、層厚は14cmである。本層上面

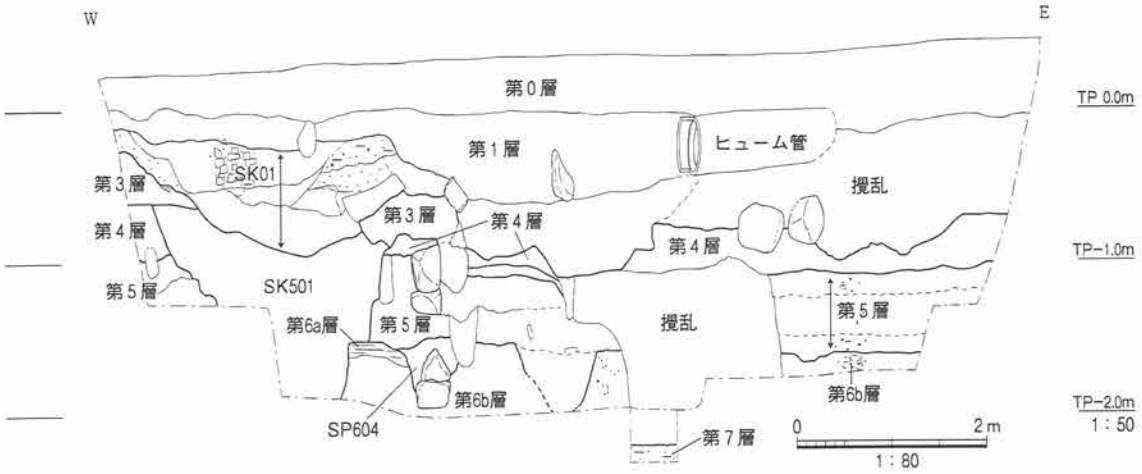


図4　調査区北壁地層断面図

では石列SX401やSK402・502～505を検出した。本層からは、土師器・肥前陶器・肥前磁器・瓦・動物遺体・スラグなどが出土した。出土遺物の多くは、18世紀後半までに位置づけられる資料である。

第５層：SX401設置に伴う盛土層であり、第４層とは一連のものである。オリーブ褐色シルト質砂からなり、壁土や炭を含む。層厚は55cmであった。本層からは、土師器・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦・金属製品・動物遺体・スラグなど、18世紀前半までの資料が出土した。

第６層：徳川期の盛土層である。上下に２分でき、上位を第6a層、下位を第6b層とする。第6a層は褐色シルト質砂からなり、層状をなす。層厚は10cmであった。第6b層はシルトの偽礫および炭を含む褐色シルト質砂からなり、層厚は60cmほどである。第6a層上面ではSP603～606、SK602を、第6b層上面では竈SX601を検出した。第６層からは、備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦・金属製品・動物遺体・スラグなど、17世紀後半頃に位置づけられる資料が出土した。

第７層：徳川期の盛土層で、部分的な深掘り部で確認した。灰オリーブ色シルト質砂からなり、層厚は12cm以上ある。本層からは土師器・瓦質土器・瓦が出土した。瓦のうち丸瓦の凹面にはいわゆるコビキＢの痕跡がある。

ⅱ)遺構と遺物

ａ.17世紀後半～18世紀前葉頃の遺構と遺物

第6a層上面でSX601を、第6b層上面でSP603～606、SK602を検出した(図５)。

SX601　調査区の中央部で検出した(写真図版)。南北0.7m以上、東西0.7m、深さ0.7mの範囲で第6b層を掘り下げ、その底面および側壁部に石材を設置し、これらの石材を粘土で被覆していた(図６)。粘土の表面が被熱しているため、当遺構は竈であると考えられる。底面に使用された石材は暗灰色を呈する火山礫凝灰岩で、いわゆる豊島石である。当遺構廃絶後の埋戻し層から、土師器焙烙のほか肥前陶器・肥前磁器が出土している。また、遺構は第6a層で覆われていた。

SP603～606　SX601よりも西の調査区西部で検出した。いずれの遺構も直径0.6mほどの柱穴の底部に、１辺0.3～0.4mの礎盤石を設置していた。各柱穴の芯々間距離は0.6～1.0mとばらつきがある。SP603～605が建物を構成する可能性を考え、図５には柱筋の復元案を示している。

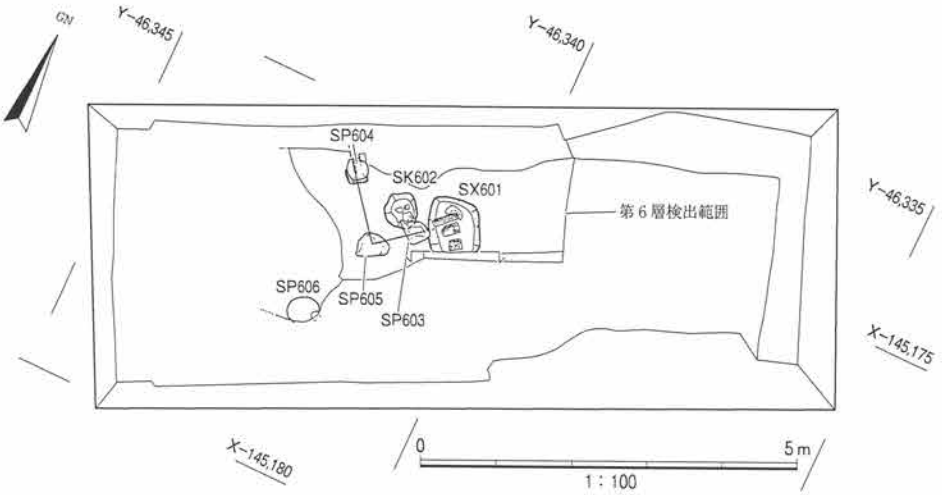


図５　17世紀後半～18世紀前葉頃の遺構と遺物

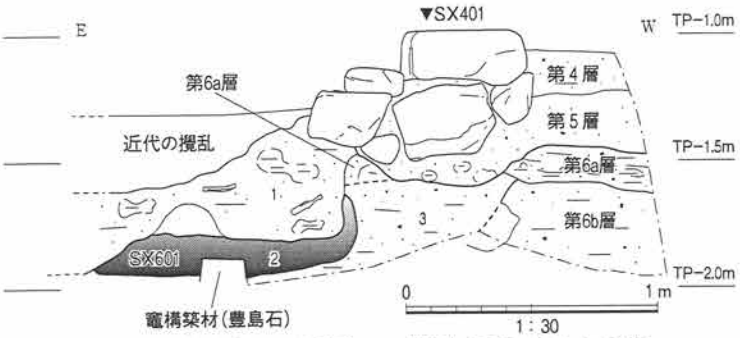
SK602　SX601の西側で検出し、SP603を切っていた。第５層で埋る直径0.4mほどの土壙で、検出面からの深さは0.2mであった。京焼風肥前陶器のほか、瓦が出土している。出土遺物のうち１は京焼風肥前陶器の碗で底部外面には「清水」と記す（図７）。形態からみて、17世紀末葉～18世紀前葉頃の資料であろう。

ｂ．18世紀後半の遺構と遺物

第４層上面では、SX401のほか、SE502やSK501・503～505を検出した（図８）。このうちSE502およびSK501・503～505は第５層上面で検出したが、壁面の地層の検討などから本来は第４層上面の遺構であると判断できる。

SX401　調査区の中央付近で検出した（写真１・２）。南北に延びる石列であり、東側に面をもつ。１辺0.4～0.5mと大ぶりで上面が平坦な石材が芯々間距離0.7mほどで並び、その間に１辺0.2～0.3mほどの石材を置く。石材の設置手順は、まず第６層上面を溝状に掘り下げ、そこに根石となる石材を置く。その後、第５層を敷くとともに、根石上にもう１石を置き、小ぶりな石材で間隙を埋める。最後に、第４層で整地を行っていた（図６、写真２）。構造からみて、当遺構は建物基礎の東辺であろう。なお、当遺構を構成する石材はすべて花崗岩であった。

SE502　調査区の西北隅で検出した。直径0.6mで、検出面からの深さは0.8m以上ある。埋土はオリー



1：含焼土・炭・シルト偽礫にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質砂
2：黒褐色（7.5YR3/2）砂質粘土（竈構築材）
3：含炭黒褐色（2.5YR3/2）シルト質砂

図６　SX601・SX401遺構断面図（作図位置は図８参照）

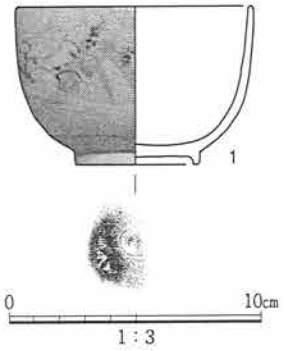


図７　SK602出土遺物実測図

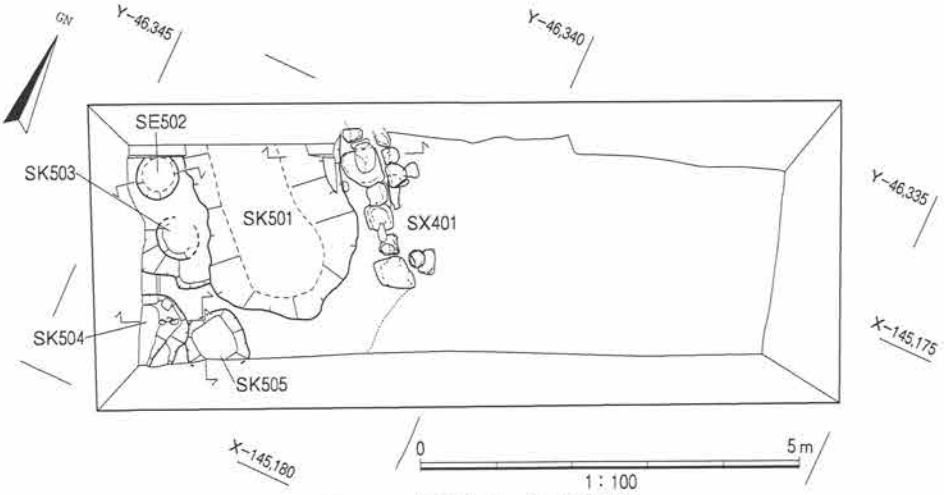


図８　18世紀後半の遺構実測図

ブ褐色シルト質砂で、炭およびシルトの偽礫を含んでいた(図９)。井戸枠の痕跡などは確認できなかったが、垂直に掘り込まれていることなどから、井戸であると考えられる。当遺構からは土師器・肥前陶器・丹波焼・肥前磁器のほか鉄釘が出土した。

SK501　調査区の西半、SX401の西側で検出した。SX401が構成する建物が廃絶したのち、その内側に掘削された廃棄土壙と考えられる。東西約2.0m、南北は2.5m以上ある。検出面からの深さは0.9mほどであった。埋土はオリーブ褐色シルト質砂で、炭・焼土を含む。埋土からは肥前磁器や堺擂鉢のほか、石材(砂岩製砥石・豊島石)が出土した。このうち、図10には肥前磁器碗２を示した。釉薬は不均一で、高台内には崩れた字款を有する。18世紀後半頃の資料であろう。

SK503　調査区の西端で検出した。東西0.9m以上、南北0.7mで、検出面からの深さは0.5mであった。当遺構からは、土師器・肥前陶器・肥前磁器のほか、瓦や銅銭などの金属製品、貝類が出土した。

SK504　調査区の西南隅で検出した。東西0.6m以上、南北0.9m以上の規模がある。検出面からの深さは0.4mで、埋土は上半が含炭にぶい黄褐色シルト質砂、下半が含炭オリーブ褐色シルト質砂であった(図９)。当遺構からは、土師器・肥前陶器・京焼系陶器・肥前磁器・瓦・金属製品・貝類が出土した。

SK505　調査区の西南部で検出した。平面形は１辺0.8m程度の方形である。検出面からの深さは0.3mで、埋土は黒褐色シルト質砂で、炭およびシルトの偽礫を含む。当遺構からは、土師器・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦・動物遺体が出土した。

c．19世紀前半の遺構と遺物

第２層の上面では、SK01・SX02などを検出した(図11)。

図９　SE502・SK504・505断面図(作図位置は図８参照)

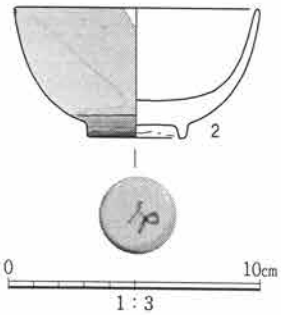


図10　SK501出土遺物実測図

写真１　第４層上面の遺構(南東から)

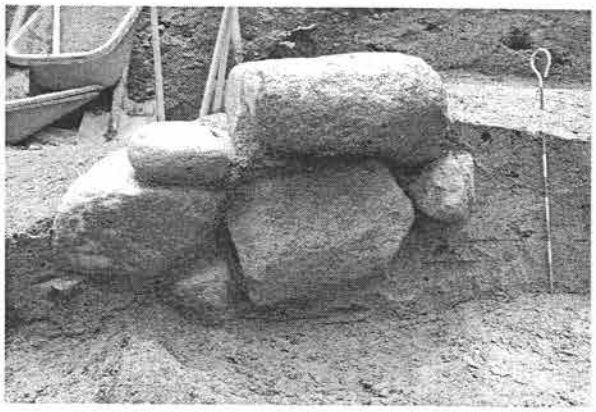


写真２　SX401断面(北から)

SK01　調査区の西部で検出した。南北1.8m以上、東西1.7mで、検出面からの深さは0.8mであった。遺構の最下部には瓦、その上位には漆喰、さらに上位には炭や焼土を含むシルト質砂が廃棄されていた。火災などにより焼失した調査地近隣の建物から生じた廃材が、当遺構に廃棄された可能性が考えられる。

当遺構からは、土師器・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・関西系陶器・肥前磁器のほか、瓦(宝珠文鬼瓦の破片を含む)、土製品、金属製品(鉄釘)、動物遺体などが出土した。図12にはこのうち、肥前磁器3・4、瀬戸美濃焼陶器5、軒平瓦6を図示した。染付碗3は口縁部が外反する。底部内面は蛇ノ目釉剥ぎとし、アルミナを塗布する。また、底部内面にはコンニャク印判で五弁花を描く。染付鉢4は胎土が十分に磁器化しておらず、陶胎に近い。鉢5は口縁部を鉄と灰釉で装飾する。内面底部には4箇所に目跡が残る。瓦当文様が唐草文の6は、一般的な橘唐草文とは異なる意匠である。また、瓦当面の高さは3.2

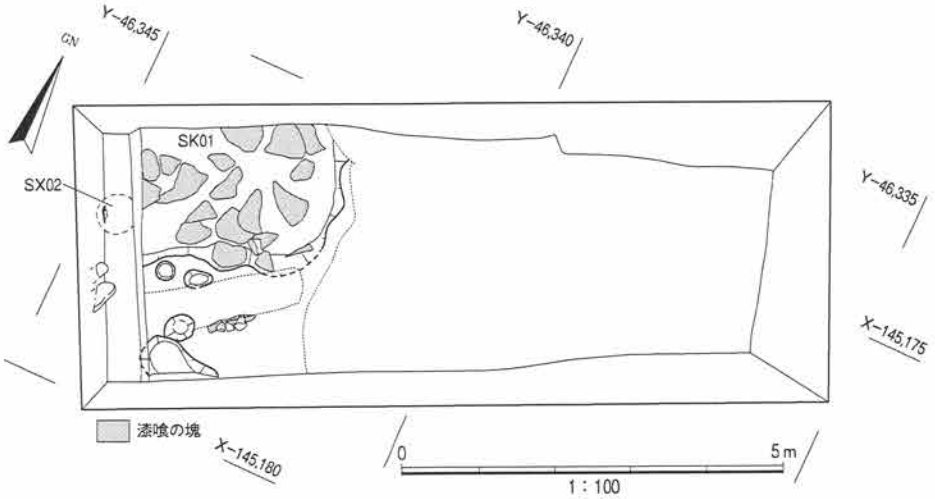


図11　19世紀前半の遺構実測図

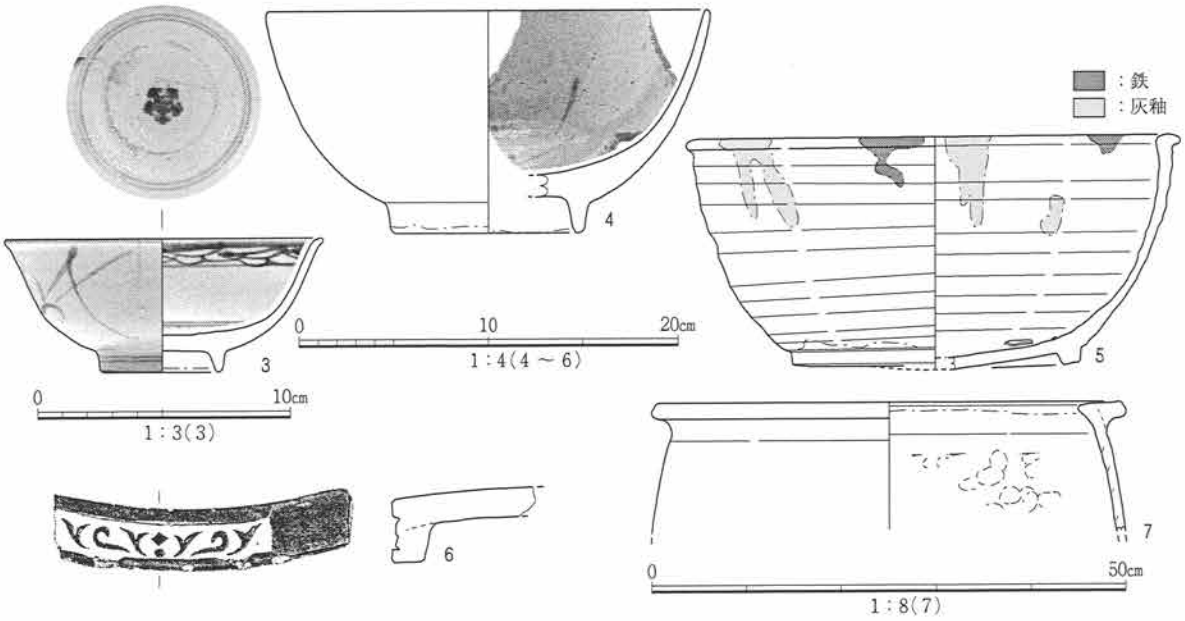


図12　SK01・SX02出土遺物実測図
SK01(3～6)、SX02(7)

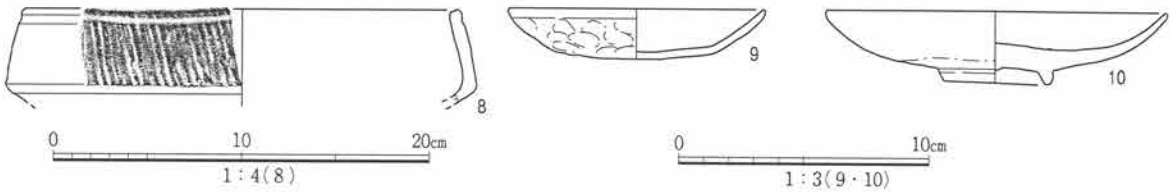


図13　第６層出土遺物実測図

cmと低い。これらの遺物は、３や５からみて19世紀前半に属する資料であろう。

SX02　調査区西端で検出した。常滑焼ないし大谷焼の甕７を埋設した遺構である。内部に白色の付着物が認められることから、便槽である可能性が高い。７は赤褐色に焼成され、口縁部を外側へ拡張する。19世紀前半頃の資料であろう。

ｄ．各層出土の遺物

第６層から出土した資料のうち、特徴的なものを図示した(図13)。層内からは、土師器焙烙８が出土している。外面の口縁部はハケで掻き上げたのち、ナデで調整する。外面の下半にはススが付着する。難波洋三氏による分類のＣ類に該当し[難波洋三1992]、17世紀後半頃の資料である。同層直上では、土師器皿９および肥前磁器皿10が出土した。９は手づくね成形で、内外面ともにススが付着している。10は白磁皿で、内面を蛇ノ目釉剥ぎとし、そこに砂目を置いて重焼きしている。17世紀後半頃の資料である。

３）まとめ

今回の調査では、調査地における徳川期の遺構の変遷が明らかとなった。このうち建物の基礎とみられるSX401については、18世紀の大坂における建築技術を知ることができ注目される。

土佐堀川と江戸堀川に挟まれた当地域は、絵図や文献史料から蔵屋敷と町屋が混在していたことがわかり、武士と町人が接して居住する独特な街並みを形成していた可能性がある。周辺の考古学的調査の進展により、こうした景観が具体的に復元され、ひいては近世大坂の理解の深化に資することが期待できよう。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2002、「株式会社日商エステムによる建設工事に伴う荻藩蔵屋敷跡発掘調査(HA00－1)報告書」：『平成12年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.23－29

2008、「江戸堀１丁目における埋蔵文化財発掘調査(ED06－１)報告書」：『平成18年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.47－50

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2012、「西区土佐堀一丁目における建設工事に伴う土佐堀１丁目所在遺跡発掘調査(TL10－１)報告書」：『平成22年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2010、pp.283－290

佐古慶三監修1970、『古板大坂地図集成』　清文堂出版

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九　大阪市文化財協会、pp.373－400
平凡社地方資料センター編1986、『大阪府の地名』Ⅰ(日本歴史地名大系 第28巻)　平凡社
林田精郎・三田村宗樹・中川康一1987、「地盤沈下累積変動量のブロックダイヤグラム化の試み」:『情報地質』12　日本情報地質学会、pp.177－185
豆谷浩之2001、「蔵屋敷の配置と移転に関する基礎的考察」:『大阪市文化財協会研究紀要』第4号　大阪市文化財協会、pp.239－257

調査区北壁地層断面
（南西から）

第６層上面遺構および
第４層上面遺構
写真左方：SX601
写真右方：SP603・605
写真上方：SX401
（北から）

第４層上面の遺構
（東から）

天王寺区逢阪二丁目17－11・12・13における建設工事に伴う
茶臼山古墳発掘調査(CU15－１)報告書

調査個所	大阪市天王寺区逢阪２丁目17－11・12・13
調査面積	102㎡
調査期間	平成27年5月11日～5月20日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、櫻田小百合

1)調査に至る経緯と経過

調査地は茶臼山の北側に位置し、西方100mには一心寺、東方300mには四天王寺が位置する(図1)。周辺調査としてはCU86－1、98－1、94－2、RJ02－4次調査があげられる。茶臼山にトレンチを掘削して調査を行ったCU86－1次調査では、層位学的な調査により茶臼山が盛土で構成されることが明らかになったものの、茶臼山が古墳であるか否かの結論には至らなかった[大阪市文化財協会1986·趙1986]。その後、前方後円墳と想定された茶臼山古墳の前方部でCU98－1次調査が行われ、古墳時代の遺構・遺物が確認されなかったことから、同地点に前方部が存在しないことが確認された[大阪市文化財協会1998]。

遺跡名となっている茶臼山古墳や古墳時代の遺構・遺物についてはこれまで顕著な成果は少ないが、一方で中世以降では大きな成果が得られている。CU86－1次調査では茶臼山を構成する盛土内から平安～室町時代の瓦が多数出土したほか、大坂冬ノ陣の際に徳川家康が茶臼山に構えた本陣の台所とみられる遺構が確認され、大きな成果が得られている。また、CU98－1次調査においては、中世の井戸21基を含む28基の井戸が検出されている。

調査地北側で行われたCU94－2次調査では中世の土壙や井戸を中心とした中世～近世までの遺構・遺物が確認されたほか、埴輪や縄文時代の石鏃が出土した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]。この西方で行われたRJ02－4次調査では近世の土壙と道路の可能性が想定される瓦敷が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が行った試掘調査において近世あるいはそれ以前と考えられる遺構面が確認されたことから、本調査を実施したものである。調査は平成27年5月11

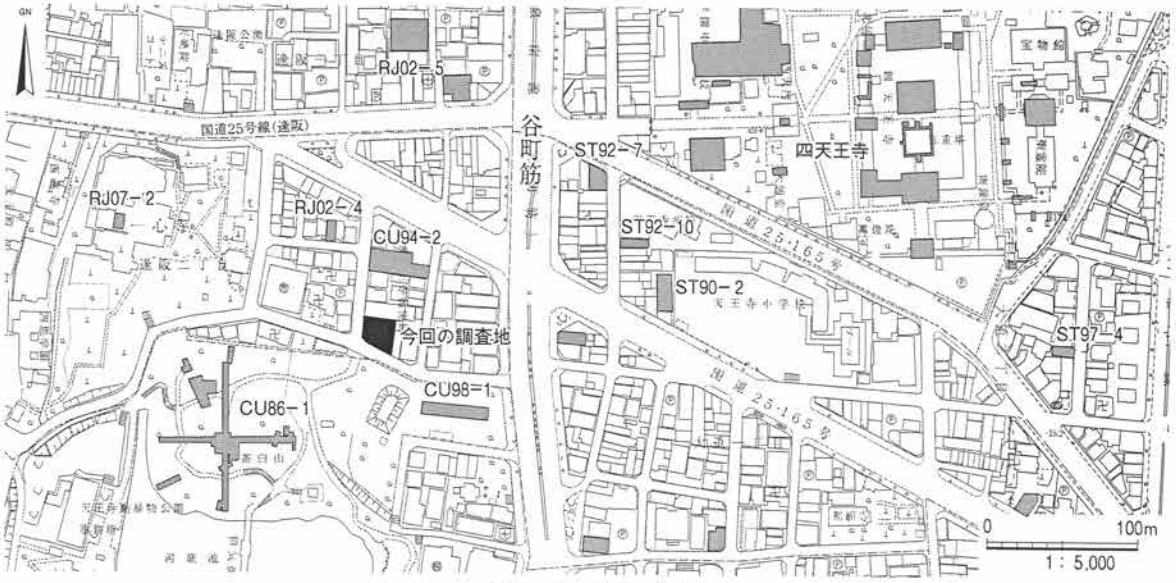


図1　調査地位置図

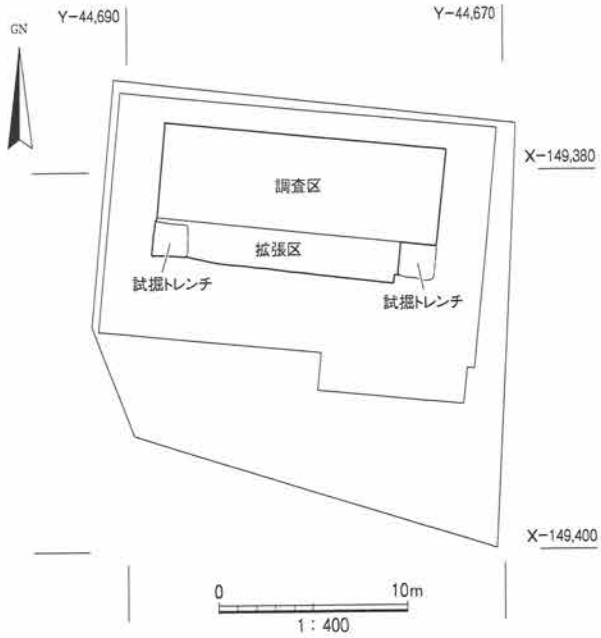


図２　調査区位置図

日に開始した。事前に現地表下約１ｍまで重機掘削が行われていたため、数cmの機械掘削の後、段丘構成層である地山上面で遺構検出を行った。地山上面の標高はTP+15.8～15.9mであった。遺構の掘り下げは人力により行い、井戸の底を確認するために一部重機を併用した。平面図および断面図の作成と写真撮影による記録作業を行い、５月20日に現地における調査を完了した。なお調査は当初75㎡を予定していたが、調査区南端で後述するSD04を検出したことから、大阪市教育委員会と協議して調査区を南に拡張して102㎡を調査した(図２)。

基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP+○mと表記した。

２)調査の結果

ｉ)遺構と遺物(図３～12、写真１～６、図版１・２)

地山上面で溝SD04・14、土壙SK01・06～09・12・15、井戸SE02・05・13、小穴SP10を検出した。

SD04　東西方向の溝である。溝の方位は正東西よりもやや北西－南東方向に振っている。南から北へ３度の掘り直しが行われており、新しい溝から順にSD04a、SD04b、SD04c、SD04dと呼称する。これらの溝は、いずれも自然に埋没した後ではなく、古い溝が埋められた後に掘り直されている。

最も古いSD04dは最大幅2.76m以上、最大深さは0.78mで、調査区を東西に横断してさらに東・西へ延びる。遺構断面のようすは場所によりやや異なるが、西半部では南から北へ埋められているようすが確認できた(図４下)。SD04cは最大幅3.96m以上、最大深さは0.81mである。SD04dと同様に東・西ともに調査区外へ延びる。SD04bは最大幅2.45m、最大深さは0.80mである。調査区西端から東へ5.6m程で途切れるが、西側が深く東側が浅いことから本来はさらに東方へ延びていたものが削平されたことも考えられる。最も新しいSD04aは最大幅2.10m、最大深さは0.34mである。SD04bと同様に東で途切れている。

遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中国産磁器・国産陶器・瓦・塼・井戸側・銅銭・動物歯・石製品・石が出土した。

１～21はSD04dから出土した。１～５は土師器皿である。６は土師器の鉢の可能性があり、体部外面は横方向のケズリを施し、内面は横方向のハケ調整である。７・８は瓦器椀、９～11は瓦質土器の羽釜である。12～15は中国産青磁で、12は小皿、13･14は碗、15は輪花皿である。16･17は備前焼擂鉢、18は古瀬戸で、鉄釉の花瓶である。19は滑石製の石鍋の転用品である。割れた面が磨かれていること

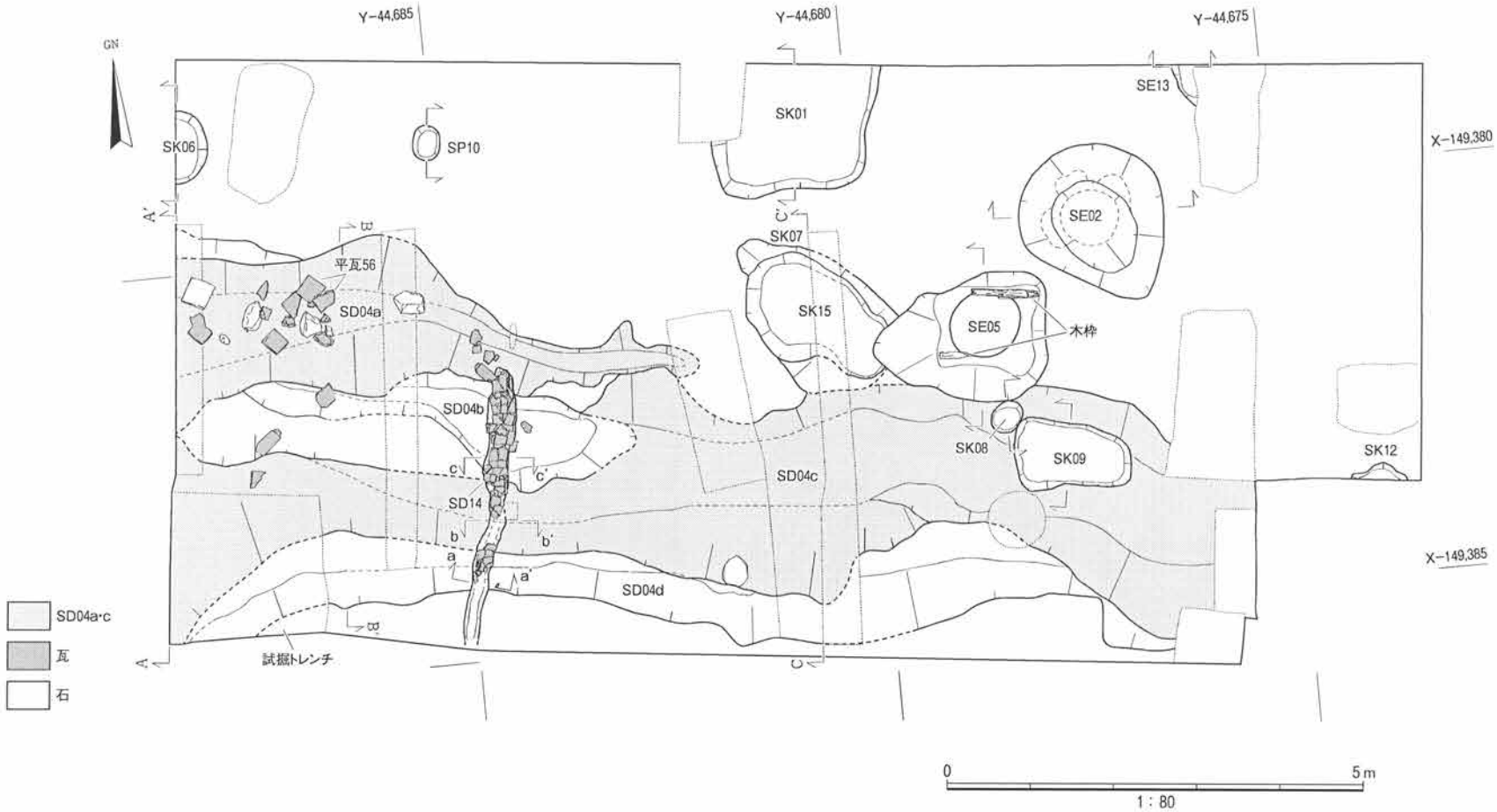
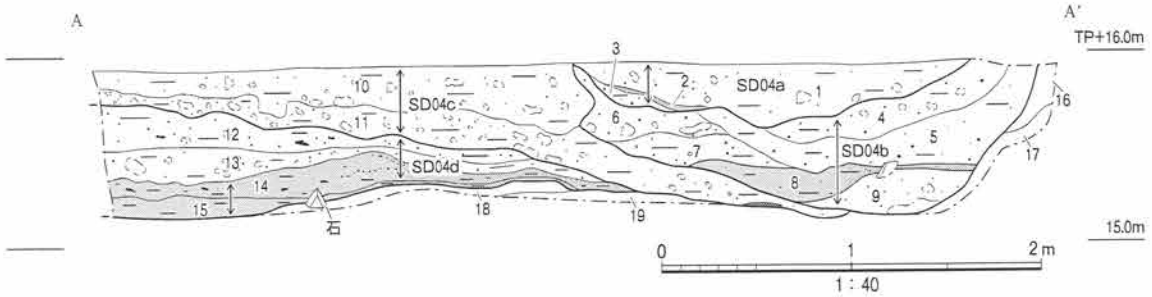
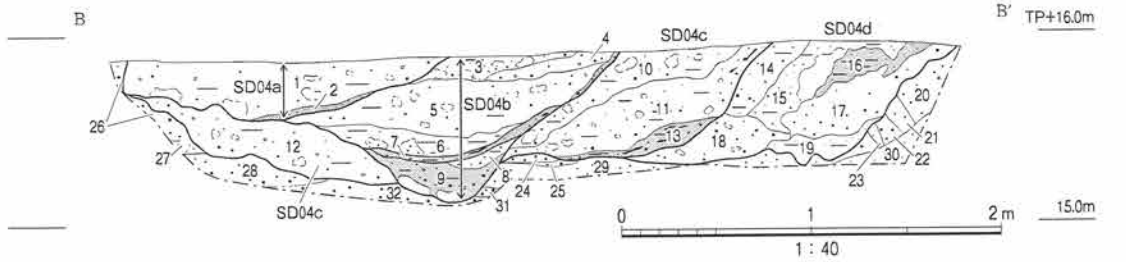

Y−44,685
Y−44,680
Y−44,675
X−149,380
X−149,385
GN
SK06
SP10
SK01
SE13
SE02
SK07
SK15
SE05
木枠
平瓦56
SD04a
SD04b
SD14
SD04c
SD04d
SK08
SK09
SK12
試掘トレンチ
A
A'
B
B'
C
C'
a
a'
b
b'
c
c'
SD04a·c
瓦
石
0
5 m
1：80

図3　遺構平面図



SD04a
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～細粒砂質シルト
2：炭を多量に含む黒色(2.5Y2/1)細粒～極細粒砂質シルト
3：灰黄褐色(10YR4/2)粗粒～細粒砂質シルト
SD04b
4：黄灰色(2.5Y5/1)細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粗粒～中粒砂
5：灰黄褐色(10YR5/2)粗粒～細粒砂質シルト
6：浅黄色(5Y7/3)極細粒砂質シルト偽礫を含む
暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒～中粒砂
7：中～細礫をわずかに含む
にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粗粒～中粒砂
8：黄灰色(2.5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルト[機能時堆積層]
9：灰黄色(2.5Y6/2)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・オリーブ黄色(5Y6/3)細粒～
極細粒砂質シルト(地山)偽礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)極粗粒～粗粒砂[加工時形成層]
SD04c
10：多量の灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細粒砂偽礫・少量の中～
細礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルト
11：多量の灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細粒砂偽礫を含む
暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルト
SD04d
12：灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細粒砂偽礫・炭をわずかに含む
黄灰色(2.5Y5/1)中粒～極細粒砂質シルト
13：灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細粒砂偽礫を含む
黄灰色(2.5Y4/1)中粒～細粒砂質シルト
14：黒褐色(10YR3/1)炭混り極細粒砂質シルト[機能時堆積層]
15：黄灰色(2.5Y4/1)シルト[機能時堆積層]
地山
16：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂
17：灰オリーブ色(5Y6/2)細粒砂
18：暗灰黄色(2.5Y5/2)極粗粒～粗粒砂
19：褐色(10YR4/4)極粗粒～粗粒砂

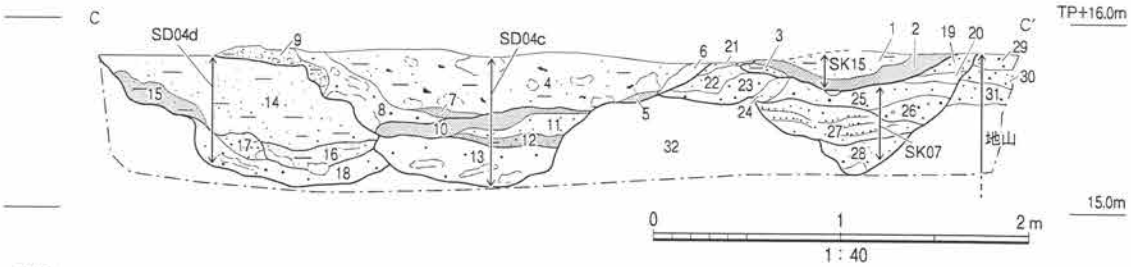


SD04a
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト偽礫・少量の中～細礫を含む
黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粗粒～中粒砂
2：灰黄褐色(10YR4/2)わずかに炭混り細粒～極細粒砂質シルト[機能時堆積層]
SD04b
3：黄灰色(2.5Y4/1)シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒～細粒砂
4：細礫をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒～中粒砂
5：黄灰色(2.5Y4/1)シルト偽礫・灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂質シルト偽礫・
少量の細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかにシルト質粗粒～中粒砂
6：褐色(10YR4/4)粗粒～中粒砂偽礫を含む
灰黄褐色(10YR4/2)細粒～極細粒砂質シルト
7：褐灰色(10YR4/1)わずかに炭混り中粒～細粒砂質シルト[機能時堆積層]
8：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粗粒～中粒砂[加工時形成層]
9：灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂質シルト偽礫(地山偽礫？)・少量の中～細礫を含む
暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒～細粒砂質シルト[加工時形成層]
SD04c
10：灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂質シルト偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒～細粒砂質シルト
11：灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂質シルト偽礫を含む
灰黄褐色(10YR5/2)わずかに炭混り粗粒～細粒砂質シルト
12：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト偽礫・灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂質シルト偽礫
(地山偽礫？)・少量の中～細礫を含むにぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質極粗
粒～細粒砂
13：炭を多量に含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒～中粒砂[機能時堆積層]
SD04d
14：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒～中粒砂
15：灰白色(10YR7/1)極細粒砂質シルト偽礫を含む
灰黄褐色(10YR4/2)中粒～極細粒砂質シルト
16：灰白色(10YR7/1)極細粒砂質シルト
17：にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒～中粒砂
18：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒砂質シルト偽礫を含む
黒褐色(10YR3/1)・褐灰色(10YR4/1)粗粒～中粒砂
19：灰白色(10YR7/1)極細粒砂質シルト
地山
20：褐色(10YR4/6)極粗粒～中粒砂
21：灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒～中粒砂
22：褐色(10YR4/6)極粗粒～中粒砂
23：灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒～中粒砂
24：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂
25：褐色(10YR4/4)極粗粒～粗粒砂
26：灰黄色(2.5Y6/2)・褐色(10YR4/6)極粗粒～粗粒砂
27：灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂
28：灰黄色(2.5Y6/2)粗粒～中粒砂
29：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂
30：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂
31：褐色(10YR4/4)粗粒～中粒砂
32：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂

図4　SD04断面図(1)

や、2箇所に抉りが入れられていることから転用されたことがわかり、口縁部に入れられた抉りの対面にはややへこんだ部分が確認でき、紐の擦れたような痕跡が確認できることから石錘に転用された可能性がある。20は三巴文軒丸瓦で、コビキAである。銅銭21は一部欠損や文字が不鮮明な部分があるものの、「天禧通宝」とみられる。

22～27・29～38はSD04cから出土した。22は東播系須恵器のこね鉢である。25・26は瓦質土器の



SK15
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト
2：炭を多量に含む黒色(10YR2/1)細粒～極細粒砂質シルト
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～細粒砂質シルト
SD04c
4：褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・少量の中～細礫・炭を含む
暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト
5：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト
6：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)極粗粒～粗粒砂
7：黄灰色(2.5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルト
8：灰白色(10YR7/1)細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂
9：灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂質シルト偽礫を多量に含む
灰白色(10YR7/1)細粒～極細粒砂質シルト
10：黄灰色(2.5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルト［機能時堆積層］
11：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂［機能時堆積層］
12：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒砂質シルト［機能時堆積層］
13：灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒砂偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂［加工時形成層］
SD04d
14：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト
15：灰白色(10YR7/1)極細粒砂質シルト
16：灰白色(2.5Y7/1)極細粒砂質シルト偽礫を含む
灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルト［機能時堆積層］
17：灰黄色(2.5Y6/2)粗粒砂質シルト偽礫を含む
褐灰色(10YR4/1)わずかにシルト質粗粒砂［加工時形成層］
18：灰黄色(2.5Y7/2)中粒砂質シルト偽礫を含む
褐色(10YR4/6)極粗粒～粗粒砂［加工時形成層］

SK07
19：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～中粒砂
20：灰黄褐色(10YR4/2)中粒～極細粒砂質シルト
21：褐色(10YR4/4)中粒～細粒砂
22：灰白色(10YR7/1)細粒砂
23：にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂
24：黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂
25：にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒～中粒砂
26：中～細礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)極粗粒～粗粒砂
27：灰白色(10YR7/1)中粒砂
28：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒～細粒砂［加工時形成層］
地山
29：灰白色(2.5Y7/1)粗粒砂
30：黄褐色(2.5Y5/6)極粗粒～中粒砂
31：褐灰色(10YR4/1)極粗粒～中粒砂
32：黄褐色(2.5Y5/4)粗粒～細粒砂

図5　SD04断面図(2)

系譜を引く土師器甕で、体部外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。いずれも口縁部は丸く玉縁状を呈する。27は土師器の鉢とみられ、6と類似する。23・24は瓦質土器で、26は羽釜、27は火鉢で外面に菊花文を施す。29～31は古瀬戸で、29は片口鉢ないしは卸皿、30は卸皿、31は鉄釉の徳利である。32は備前焼擂鉢である。33は蓮華文軒丸瓦、34は巴文軒丸瓦である。35は連珠文軒平瓦、36・37は水波文軒平瓦である。平瓦38は凹面に布目が残り「寺」とみられる文字が施される。凸面は格子タタキを施す。28はSD04dあるいはｃから出土した産地不明褐釉陶器の四耳壺であろう。

39～41・43・45・46・48～54はSD04bから出土した。39・40は土師器皿、41は土師器羽釜、43は瓦器皿である。45は備前焼擂鉢の口縁部で、口縁部下端が下方にわずかに拡張する。46は中国産の白磁皿である。48は三巴文軒丸瓦、49・50は水波文軒平瓦である。51は丸瓦、52～54は平瓦である。53は凸面に「■寺」の文字が施される。

55・56はSD04aから出土した。55は機械掘削時に出土した70と類似する遺物で、いずれも塼の可能性も考えられるがやや弧を描くことから瓦質の井戸側とみられる。側面には菊花文の刻印が押される。56はほぼ完形の平瓦で、縦41.7cm、幅29.4cm、厚み2.9cmである。凹面には「左寺」の刻印が施される。

このほか、土師器甕42・中国産白磁壺47はSD04c・bのいずれか、瓦器皿44はSD04a～dのいずれかの溝から出土した。

これらSD04d～aから出土した遺物の多くは、13～15世紀の遺物で一部これよりも古いものや新しいものを含む。出土遺物からは各溝の間に時期差は認められず、これらの遺構の時期を示す遺物としてはSD04cあるいはbに伴う土師器甕42があげられる。口縁部上端に面をもつことから17世紀初頭頃

図6　SD04d出土遺物実測図

のものであろう。SD04cからはこれよりもやや古い様相を示す、23・24のような口縁部が玉縁状を呈するものが出土しているが、重複関係からSD04cよりも古いSK07から口縁部上端に面をもつ58が出土しており、遺物からSD04bとSD04cの間に時期差は見出せない。

以上のことから、SD04d～aは17世紀初頭頃に掘削され、比較的短期間のうちに埋めと掘り直しが繰り返されたと推定される。出土遺物

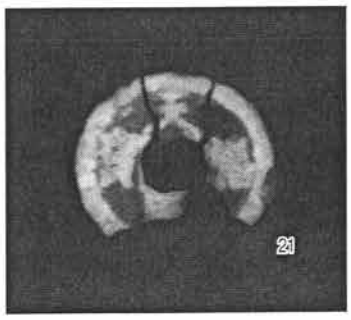


写真1　SD04d出土銅銭

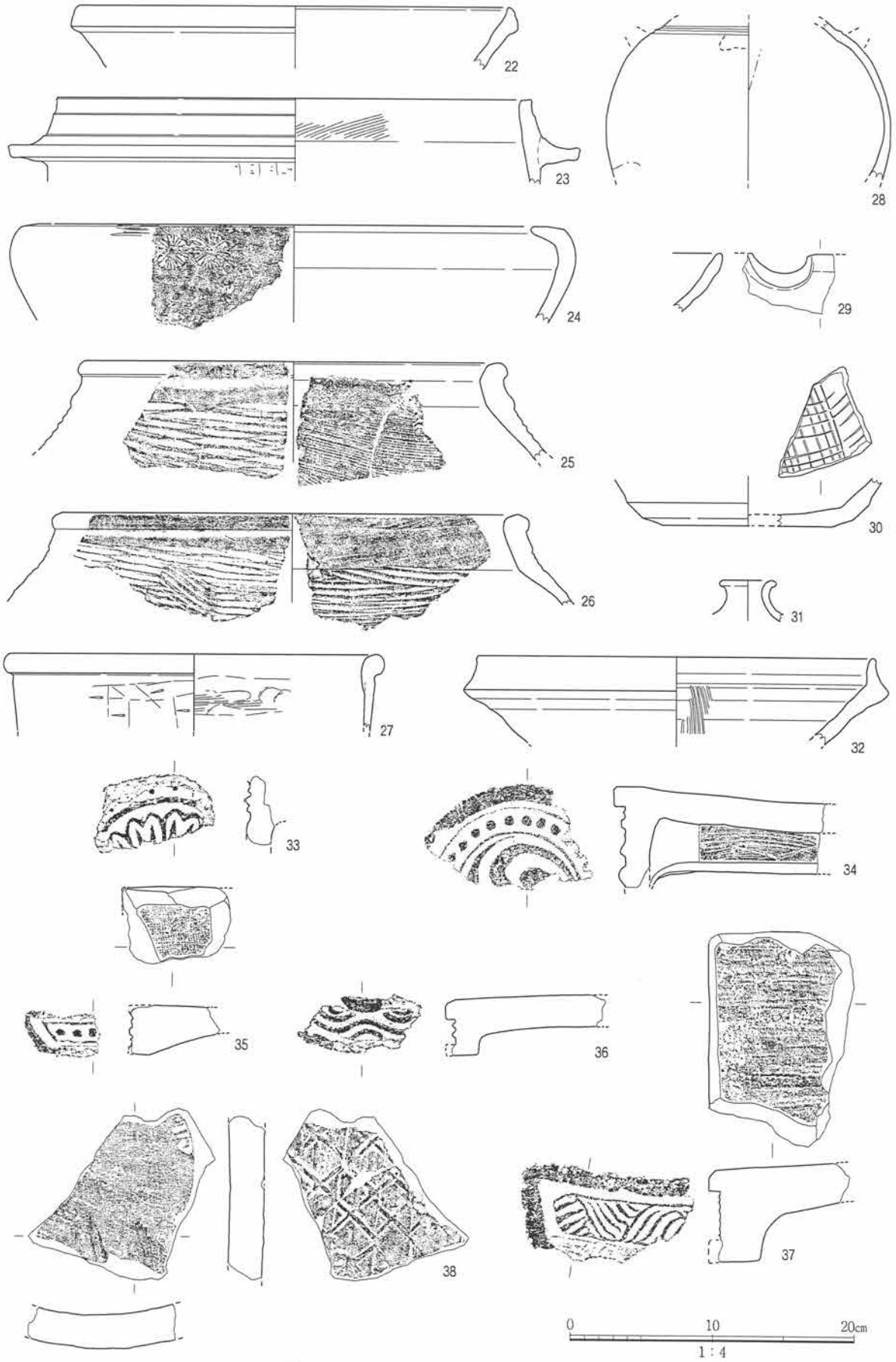


図7　SD04c、SD04d・c出土遺物実測図
SD04c（22～27・29～38）、SD04d・c（28）

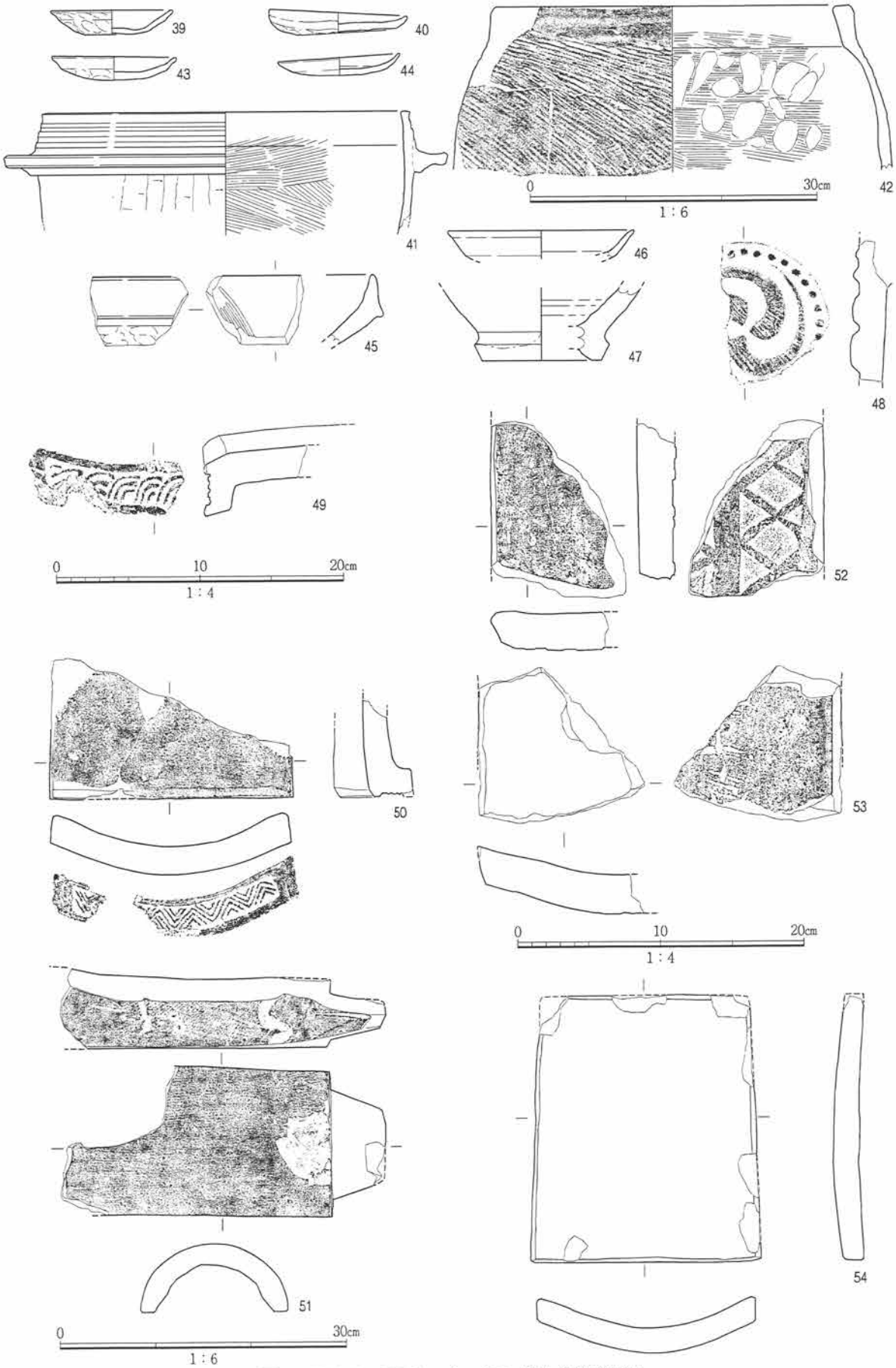


図8　SD04b、SD04c・b、SD04出土遺物実測図

SD04b（39～41・43・45・46・48～54）、SD04c・b（42・47）、SD04(44)

の多くを占めた13～15世紀の遺物は、それ以前の遺構に伴うものと想定される。なかでも瓦の量が多く、京都東寺の別名である「左寺」の刻印を施した瓦も出土している。「左寺」の刻印を施した瓦はCU86－1・98－1次調査でも複数出土している。

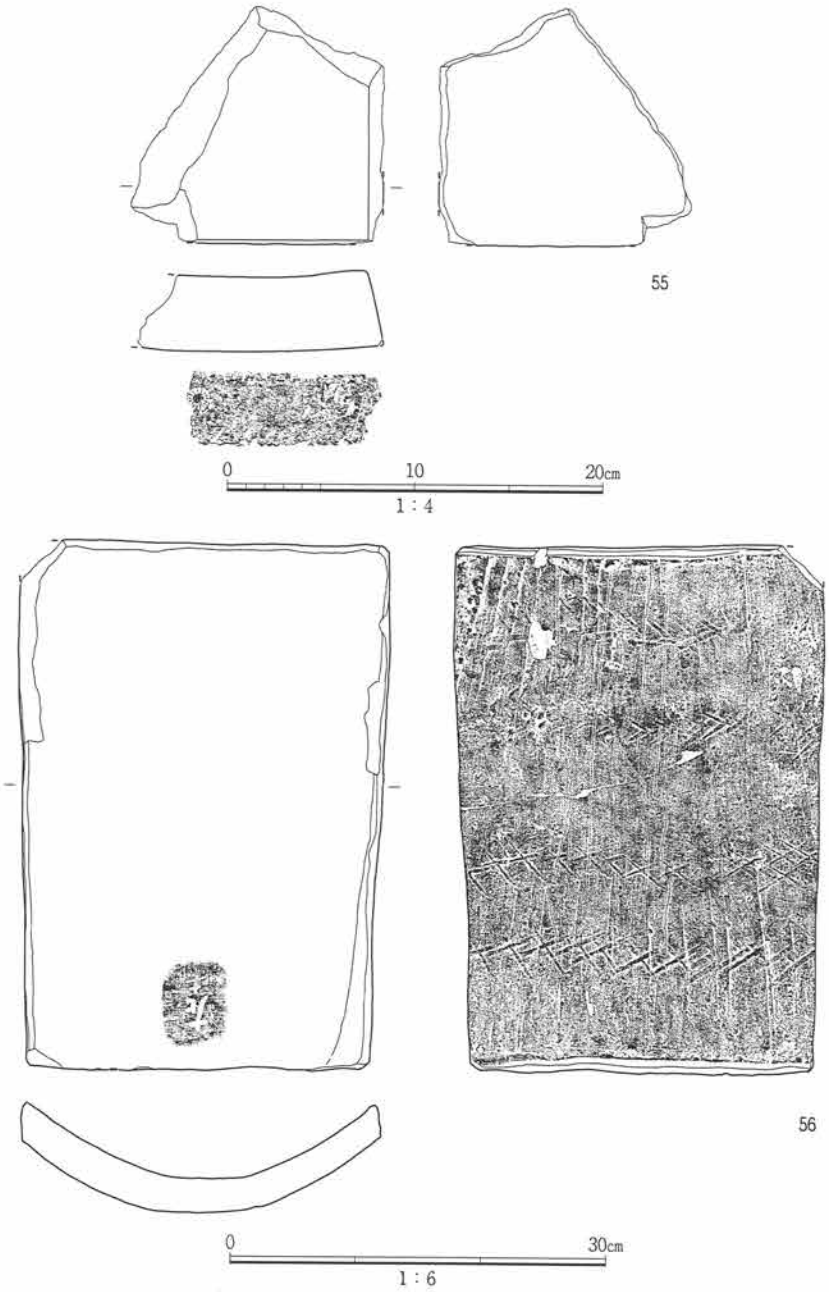


図9　SD04a出土遺物実測図

写真2　SD14断面(北から)

SD14　丸瓦を筒状に組み合わせて南北方向に並べた遺構で、南側が高く北側が低くつくられている。SD04が埋められた後に構築された遺構で、丸瓦よりも一回り幅の広い溝状の掘形を掘削して瓦を埋設している。北側の低い部分は、凸面を下にして並べた瓦を筒の下半とし、この上に凸面を上にして丸瓦を並べて筒の上半をつくり、さらにこの上にもう1段凸面を上にした丸瓦を重ねて並べたつくりになっている。これに対して、南の高い部分は筒の下半にあたる瓦はなく、凸面を上にした瓦が並べられているのみであった。北側から南側に水を流す排水管としての機能が想定される。遺構の構築時期は、SD04が埋められた17世紀初頭以降であるが、掘形や瓦内の埋土からは土師器の小片が出土したのみであり、詳細な構築時期は不明である。

SK01　東西1.85m、南北1.62m以上の方形

の土壙で、深さは0.10mである。土師器皿57、瓦器椀・皿、瓦器三足釜、瓦が出土している。

SK06　東西0.38m以上、南北0.88m以上の土壙で、深さは0.32mである。土師器皿、瓦質土器片が出土した。土師器皿は形態から15世紀に属するとみられ、遺構の時期はこの頃の可能性がある。

SK07　東西1.44m、南北2.32m、深さ0.66mの土壙である。SK15・SD04cと重複しており、これらよりも古い遺構である。土師器甕58、常滑焼とみられる甕、瓦が出土した。土師器甕58は口縁部上端に面をもち、17世紀初頭に属するとみられる。このほか、SK07あるいはSD04cから鬼瓦60が出土した。

SK08　直径0.38mの円形の土壙で、深さは0.05mである。遺物は出土していないが、SD04cが埋められた後の遺構であることから、17世紀初頭以降の遺構である。

SK09　東西1.39m、南北0.90mの浅い土壙である。深さは0.09mである。土師器皿、須恵器片、瓦器椀・皿59、瓦質土器、瓦が出土した。これらの遺物は14～15世紀の様相を呈するが、SK08と同様にSD04cが埋められた後の遺構であることから、遺構の時期は17世紀初頭以降である。

SK12　東西0.68m、南北0.24m、深さ0.04mの浅い土壙で、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒～細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK15　東西1.98m、南北1.24mの不整円形の土壙である。深さは0.22mで、底には炭が多量に含まれていた。SK07と重複しており、これよりも新しい。遺物は瓦、塼が出土した。

SE02　直径1.62～2.02mの平面円形を呈する井戸である。深さは3.0mで、井戸底の標高はTP+12.86mである。検出面から1.12m下がった位置で壁面に、後述するSE05の井桁基底部のようなテラス状の平坦面が確認できたことから、本来はこれより上部に井桁が組まれていたことが推定される。これよりも下部は直径0.7～1.1mの円形に掘られており、井戸側やその痕跡が確認できなかったことから素掘りとみられる。遺構断面の観察から井桁の基底部と想定される付近よりも下位は一度に埋められており、これよりも上部は井桁の抜取り穴で、抜取り後に埋められているようすが確認できた(図10)。

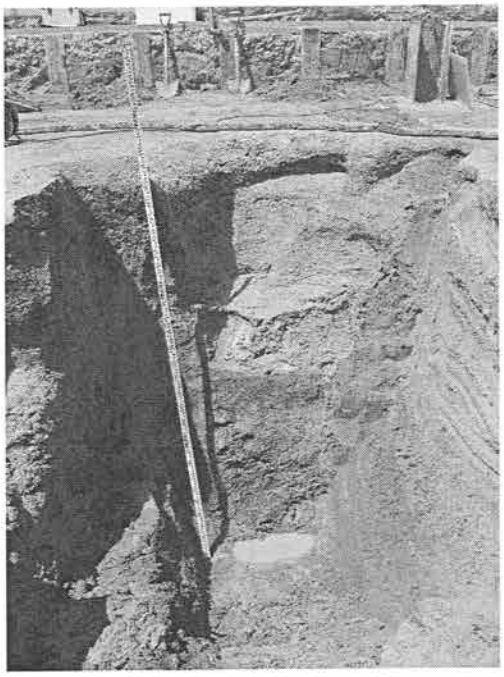
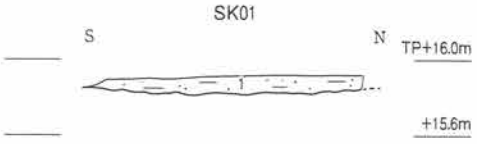


写真3　SE02断面(南から)

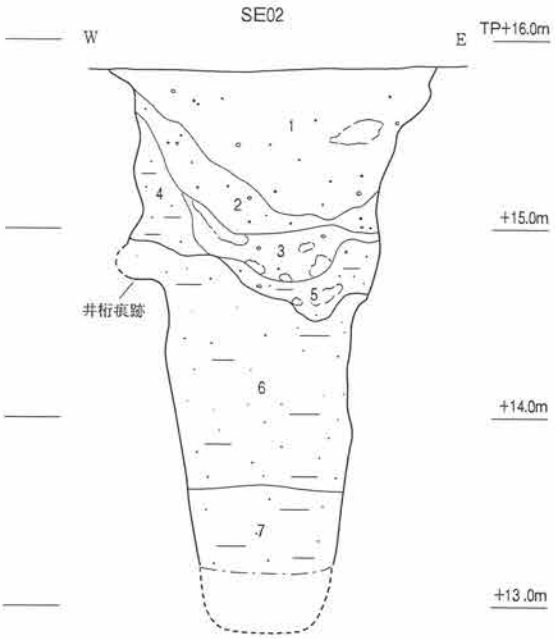
遺物は土師器・須恵器・備前焼・肥前陶器・瓦・塼が出土した。61は土師器皿、62は肥前陶器壺の底部、63は唐草文軒平瓦である。62が17世紀前半に属することから、この頃に埋められたとみられる。

SE05　SD04が埋められた後に掘られた井戸である。上部の形状は東西2.10m、南北1.55mの不整形な円形を呈する。検出面から1.15m下にはテラス状の平坦面があり、この北端と南端に東西方向に置かれた板状の木製品が検出され、井桁の基底部と推定される。これより上部は井桁の抜取り穴であることが遺構断面の観察から確認できる。この平坦面より下部は直径0.50～0.84mの円形を呈し、井戸側やその痕跡は確認できなかったことから

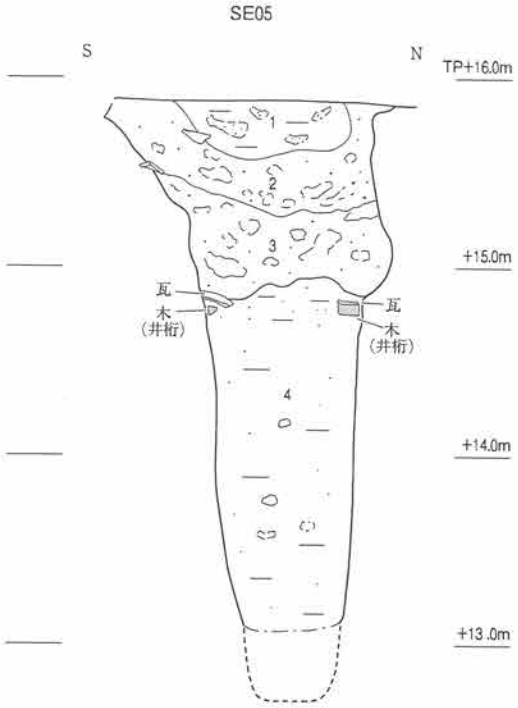


1：黒色有機物片をわずかに含む
にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒～細粒砂質シルト

1：灰黄色(2.5Y6/2)わずかにシルト質中粒砂偽礫・
少量の細礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂
2：灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂(地山)偽礫を含む
にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒～細粒砂



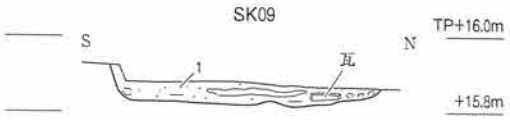
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒～中粒砂偽礫・中～細礫を含む
灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂
2：中～細礫をわずかに含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒～中粒砂
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂偽礫・中～細礫を含む
灰黄色(2.5Y6/2)極粗粒～中粒砂
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂
5：にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒～中粒砂偽礫を含む
暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂
6：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～細粒砂質シルト
7：灰色(10Y4/1)中粒砂質シルト



1：灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒～中粒砂偽礫を含む
暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト
2：灰オリーブ色(5Y5/2)シルト偽礫を含む
にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～中粒砂
3：黄灰色(2.5Y4/1)シルト偽礫を含む
暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～中粒砂
4：褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂偽礫を含む
暗灰黄色(2.5Y4/2・5/2)中粒～細粒砂質シルト

0　1　2m
1：40

1：灰黄色(2.5Y7/2)シルト質細粒砂偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～細粒砂質シルト



1：浅黄色(2.5Y7/3)極細粒砂質シルト偽礫を含む
灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒～細粒砂

0　50cm
1：20

図10　遺構断面図(1)

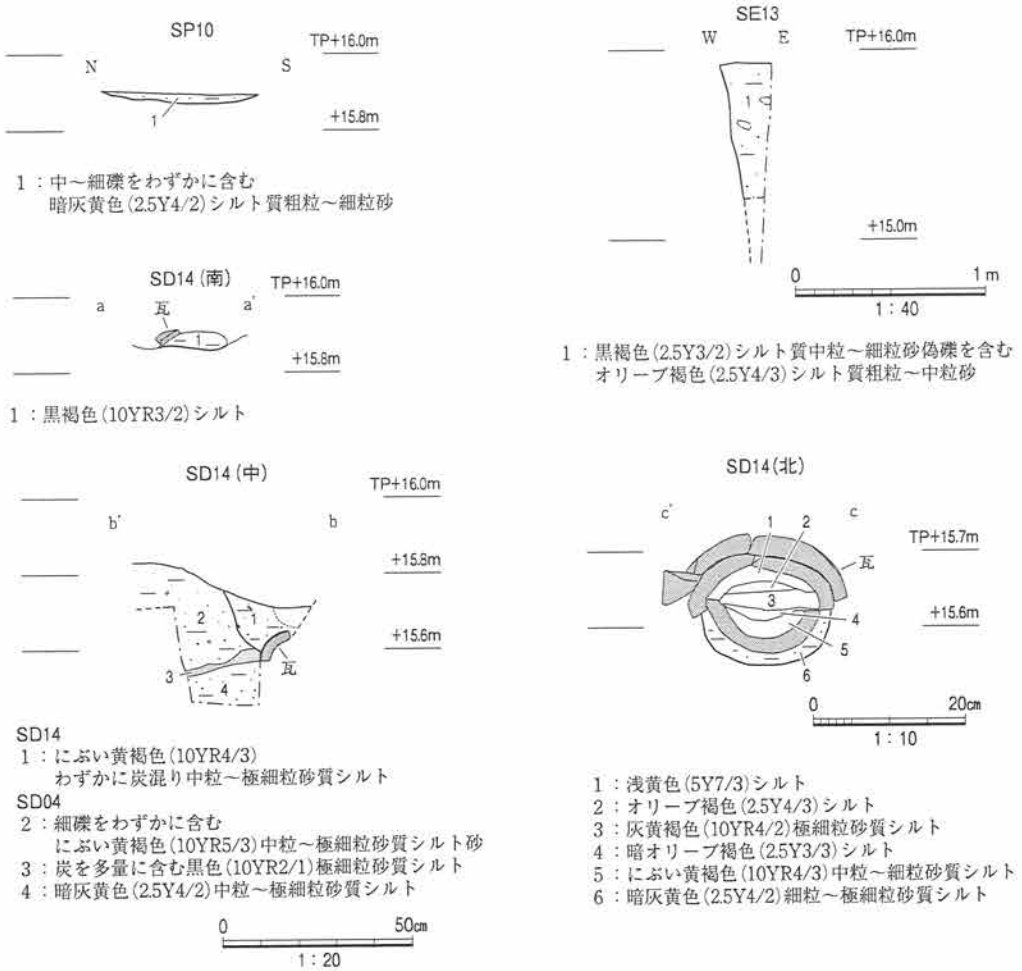


図11　遺構断面図(2)

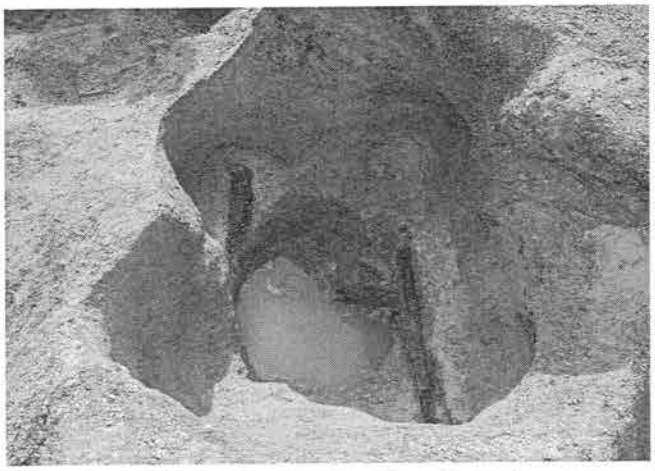


写真4　SE05井戸側出土状況(東から)

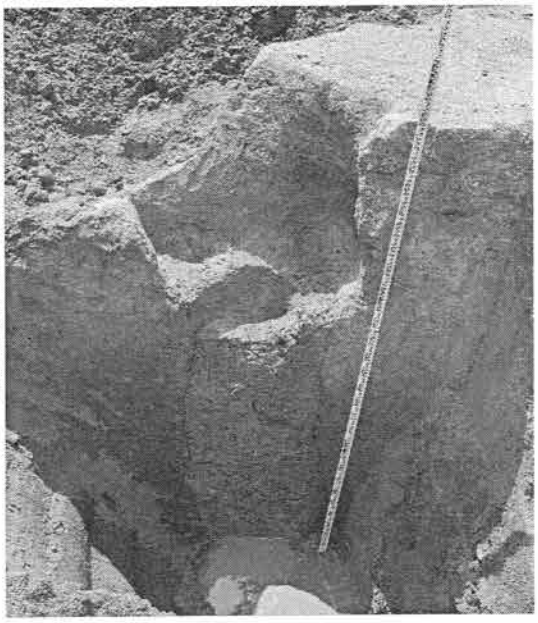


写真5　SE05断面(東から)

素掘りとみられる。井戸の深さは3.18mで、井戸底の標高はTP+12.70mである。井戸側の抜取り穴よりも下部は一度に埋められている。

遺物は土師器・須恵器・丹波焼・肥前陶器・瓦・動物骨・塼が出土した。64は土師器皿あるいは蓋、65は丹波焼擂鉢、66は肥前陶器碗である。67は連珠文軒平瓦、68は平瓦である。68は、凹面には布

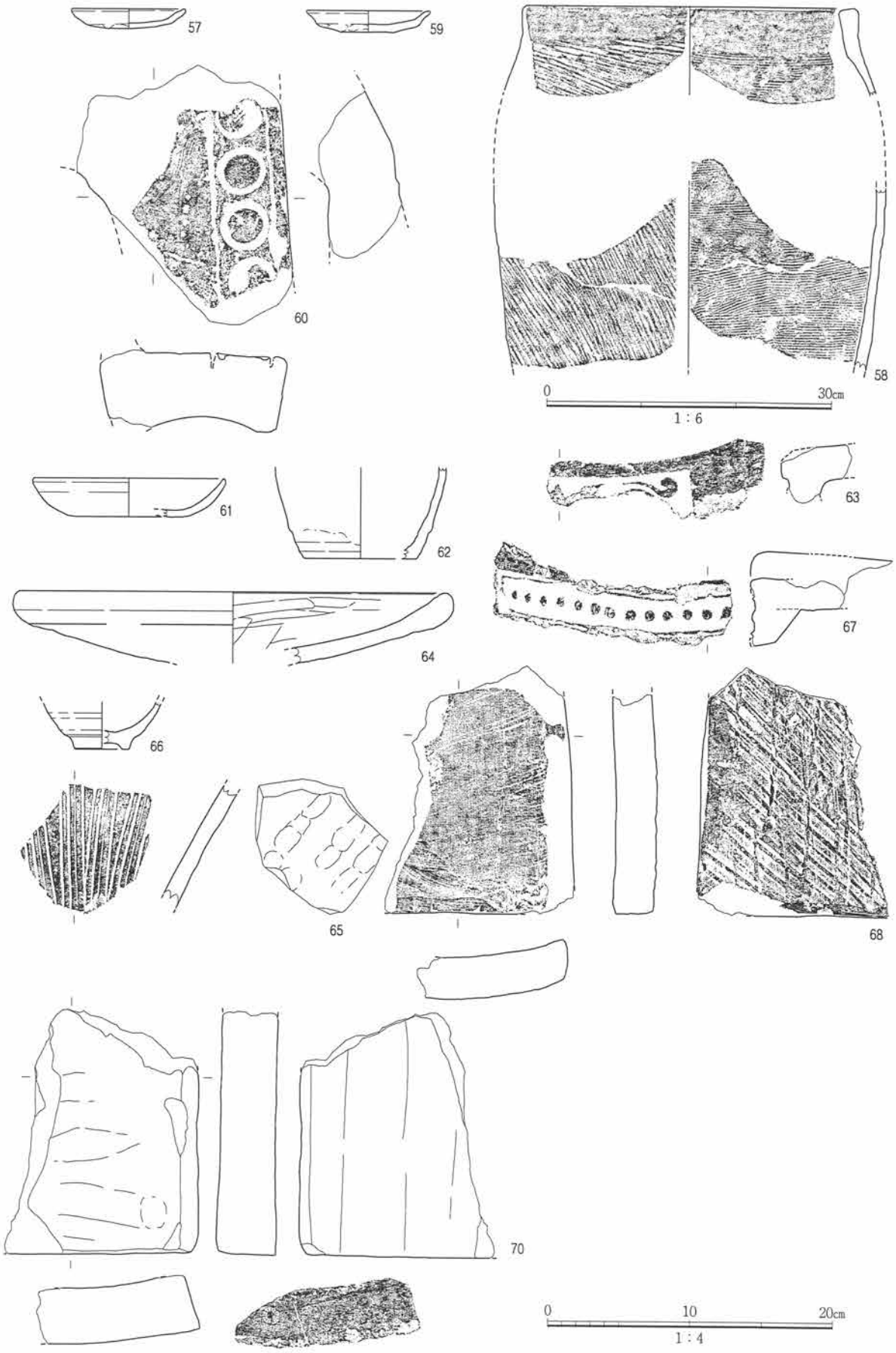


図12　出土遺物実測図

SK01(57)、SK07(58)、SD04c・SK07(60)、SK09(59)、SE02(61～63)、SE05(64～68)、機械掘削(70)

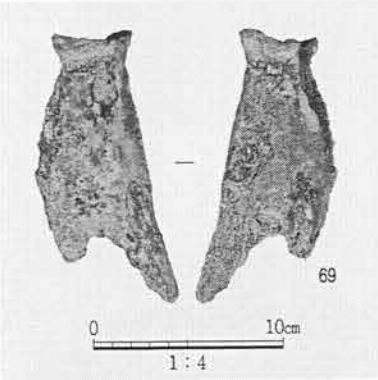


写真6　SE05出土動物骨

目が残り、凸面は格子タタキが施される。69はウマの左肩甲骨で、解体痕などは確認できない。丹波焼擂鉢65の擂目が櫛により施されることから17世紀中葉のものとみられ、SE05はこの時期に埋められたと考えられる。

SE13　東側が攪乱により壊されていたことや、北半が調査区外であったことから正確な規模や形態は不明であるが、直径1.10m以下の円形の遺構と推定される。検出部分がわずかであったことから、遺構の深さについても確認できてはいないが、1.06m以上と深く、また埋土がSE02と類似することから井戸の可能性が高いと考えられる。遺物は出土していない。

SP10　東西0.32m、南北0.42m、深さ0.03mの浅い小穴である。遺物は土師器の小片が出土したのみである。

このほか、機械掘削中に平瓦70が出土した。木口に菊花の刻印を有し、時期は不明である。

3)まとめ

今回の調査では溝、土壙、井戸、小穴が検出された。このうち、SD04は17世紀初頭頃の遺構とみられ、短期間に埋めと掘り直しが繰り返されている。17世紀初頭といえば、大坂冬ノ陣(1614年)では徳川家康が茶臼山に本陣をおき、翌年の大坂夏ノ陣(1615年)では真田幸村が茶臼山に陣を構えている。SD04そのものの機能については不明であるが、遺構の年代や短期間の遺構であることから、大坂ノ陣と関連する遺構であることも考えられる。『武徳編年集成』には茶臼山に構えられた家康本陣について、「山頂狭小ニテ、近臣ノ外居ルベキ地ナク、御番士ハ一心寺ヲ以テ屯トスベシト云々、・・・北ノ麓に庖厨ヲ設ケ、惣台盤所ハ乾堀ノ外タルベシ」と記されており、茶臼山の北の麓で台所跡が確認されたCU86－1次調査の成果と合致する。この記述には、山頂が狭く近臣以外は一心寺にいたことや堀の外にも施設が築かれていたことが記されていることから、調査地付近に関連する遺構がある可能性は十分考えられる。

このほか、SD04から出土した中世の遺物も特筆すべき成果である。なかでも、「左寺」の刻印を施す瓦はCU86－1・98－1次調査でも出土しており注目される。「左寺」は東寺の別名で、東寺においても類似する「左寺」刻印瓦が出土しているほか、明石市大蔵中町遺跡や神戸市出合遺跡でも「左寺」刻印瓦が見つかっている[発掘された明石の歴史展実行委員会2014]。CU98－1次調査では「左寺」刻印瓦とともに「正平十六年」(1361年)と施された瓦が出土しており、SD04から出土した土器・陶磁器の多くが13～15世紀に属するものであったことから、土器・陶磁器と瓦の年代に矛盾がなく、この時期に上記のような瓦を使用する中世寺院や関連施設があった可能性が想定される。四天王寺と地理的に近いことや、CU98－1次調査で出土した「正平十六年」と同種の瓦が四天王寺からも出土していることから、四天王寺とつながりのある施設であったと考えられる。

今後周辺調査の積み重ねにより、SD04やその出土遺物の位置づけを明確にし、より具体的な歴史

的景観を提示できるよう努力していきたい。

[引用・参考文献]

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「㈱戒屋による建築に伴う発掘調査(CU94－２)」:『平成６年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.45－53

2004、「伶人町遺跡・茶臼山古墳発掘調査(RJ02－４)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.45－47

大阪市文化財協会1986、『天王寺公園内茶臼山古墳発掘調査(CU86－１)略報』

1998、『天王寺公園耐震貯水槽設置工事に伴う茶臼山古墳発掘調査(CU98－１)完了報告』

趙哲済1986、「茶臼山古墳」の発掘調査」:『葦火』４号　大阪市文化財協会、pp.１－６

発掘された明石の歴史展実行委員会2014、『明石の古代Ⅱ』

遺構全景
（南東から）

SD04近景（西から）

SD04瓦出土状況・SD14(西から)

SD04断面(調査区西壁面)(北東から)

天王寺区大道一丁目５－５における建設工事に伴う
大道１丁目所在遺跡発掘調査(DA15－１)報告書

調査個所	大阪市天王寺区大道1丁目5－5
調査面積	82㎡
調査期間	平成27年12月1日～12月7日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は中世の集落跡である大道1丁目所在遺跡の中央部に位置し、北は四天王寺旧境内遺跡が隣接して存在する。これまで周辺では比較的多くの調査が実施され、中世を中心に古代～近世の遺構・遺物が検出されている。最近の成果では、南東100mのDA13－1次調査において、平安時代初頭に廃絶する難波京西二路の東側溝と考えられる溝や13～15世紀の遺構群などが確認されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。また、南南西200mの北河堀町所在遺跡での調査(KC12－1次調査)では、正方位に則った7世紀中頃～末と推定される大型建物群が発見され、難波京南端部における土地利用のあり方を考える新たな問題を提起している[大阪文化財研究所2013]。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.2m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする中世～近世の遺構面および遺物包含層が検出され、本調査を実施することになった。

調査は平成27年12月1日に開始し、予め敷地全体が現地表から1.2m掘り下げられた状態であった。平面精査を行ったところ、調査区全域ですでに段丘礫層が露出しているようにみられた。連壁のない敷地南壁の地層を観察したところ、少なくとも地山は70cm削平され、対象となる中世～近世の包含層はすでに除去された状態であることが判明した。この状況を大阪市教育委員会文化財保護課に連絡し、調査区を土置き場以外の敷地全体、東西8.5m、南北9.7mに再設定することとなった。

近現代のゴミ穴、中世の井戸の埋土などの掘り下げはすべて人力により、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。12月7日、以上の調査を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京

図1　調査地位置図

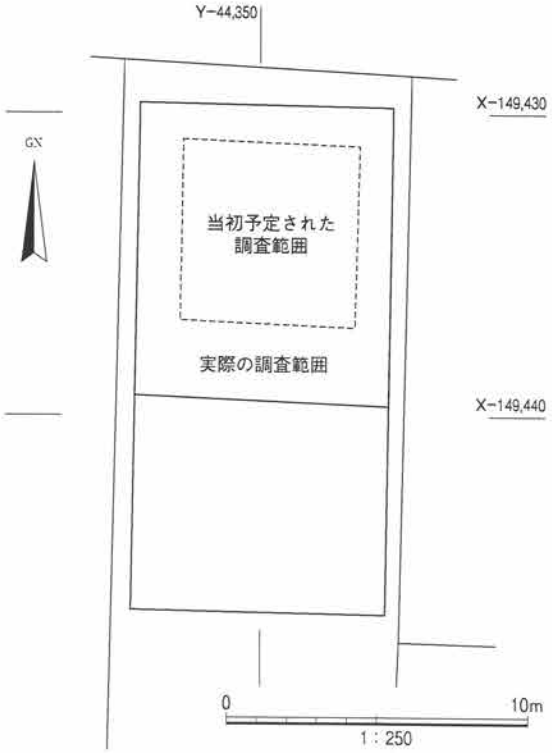


図2　調査区配置図

湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図２は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

２)調査の結果

ｉ)層序

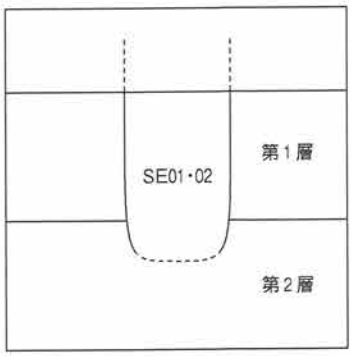


図３　地層と遺構の関係図

調査地の現地表面はTP+16.2m ～16.5mと北に向けてやや高くなる。南面する国道25号線は北西から南東へ1/100の傾斜で下がっている。調査開始面はTP+15.2m前後にあり、井戸SE02の壁面において、TP+12.8mまでの地層を確認し、２層に大別した。

第１層：浅黄色(5YR7/4)を基調とする細礫～粗粒砂からなる地山層(段丘礫層)で、層厚は80cmである。

第２層：灰白色(7.5Y7/1)シルト質粘土からなる地山層で、層厚120cm以上である。

ii)遺構と遺物(図４・５)

調査区南部で２基の井戸を検出した。

SE01　長径1.2m、短径0.9mの平面が楕円形、深さ1.9m以上の井戸である。埋土はすべて井戸枠抜取り後に埋め戻されたもので、大きく２層に分かれる。上位は偽礫を多く含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を基調とする細粒砂質シルト、下位は 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトである。

第１層から、土師器皿１・２、瓦質土器擂鉢３・羽釜４、天目碗５など、15世紀代の遺物が出土しており、廃棄された時期は15世紀中葉と考えられる。

１・２は口縁部が体部半ばで屈曲し、外方に開き、前者は口径9.8cm、後者は口径16.0cmである。３は口径は32.2cmで、口縁端部は立ち上がる。４は口径17.8cm、鍔の最大径は23.8cmで、口縁部は内傾しながら立ち、その端部は平坦な面をなす。以上は15世紀前～中葉のものと考えられる。５は胎土や調整、釉調から中国産とみられるが、小片のため詳細不明である。

SE02　長径2.2m、短径1.9m以上の平面がほぼ円形、深さ2.0m以上の井戸である。埋土はすべて井戸枠の抜取り後に埋め戻されたものである。２層に大別でき、上層(１～３)が偽礫を多く含む灰白色(5Y7/2)細粒砂質シルト、下層(４～６)は 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトである。上層から、土師器羽釜６、中国産青磁小片７、備前焼甕８・擂鉢９、唐草文軒平瓦10、巴文軒丸瓦11など15～16世紀の遺物が出土し、廃棄された時期は16世紀以降と考えられる。

６は口径26.8cm、鍔の最大径は33.2cmで、口縁部は直立気味で、その端部は平坦な面をなす。７は口縁端部をつまみ上げ、皿ないしは盤と考えられる。８は口径31.7cm、９は口径26.2cmである。以上は15世紀後半～16世紀初頭のものである。

３)まとめ

今回は深い遺構である井戸２基の検出に留まったが、その埋土からは中世段階の幅広い多様な遺物

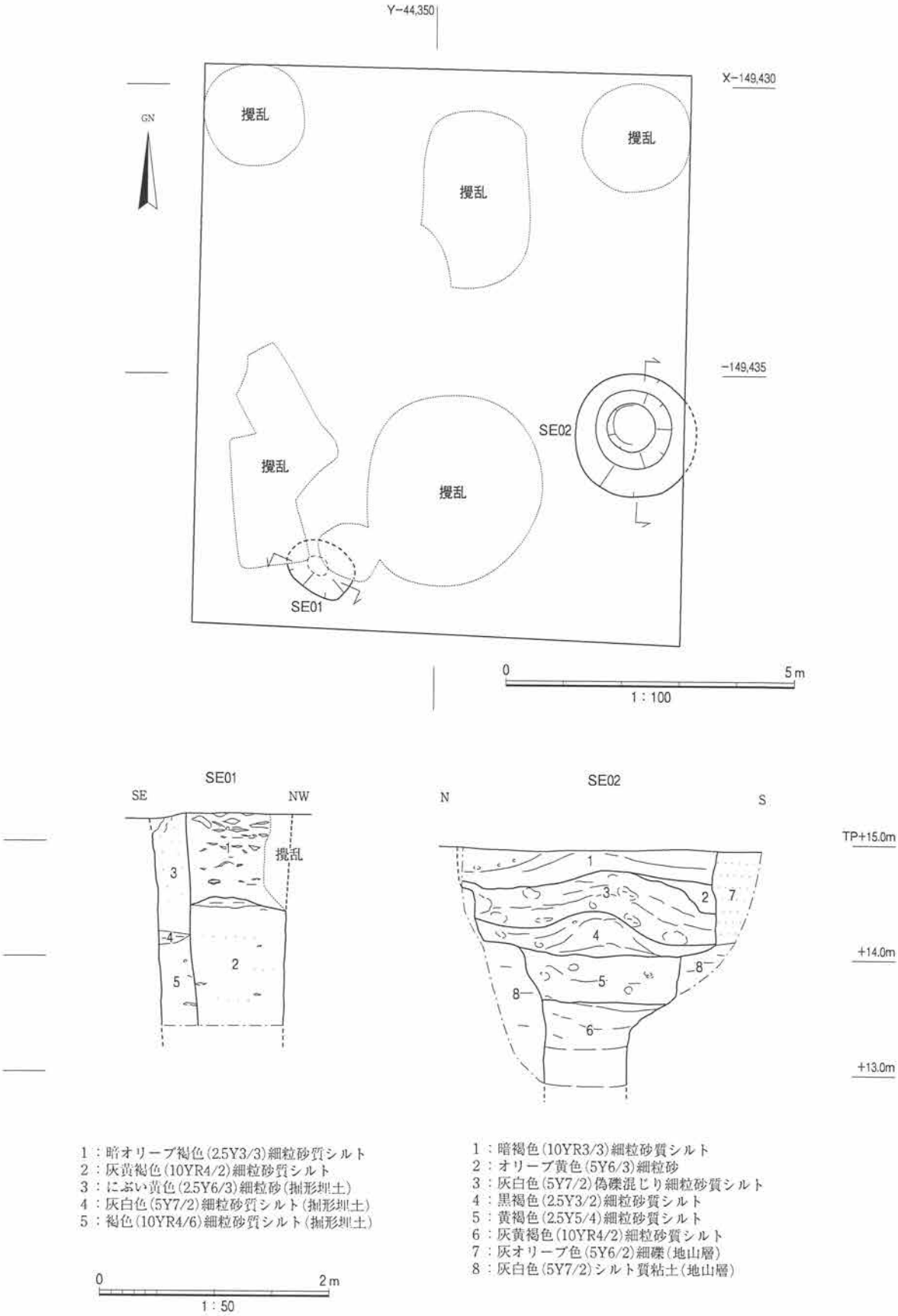

Y−44,350
X−149,430
−149,435
GN
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
SE01
SE02
0
5 m
1：100
SE01
SE
NW
撹乱
3
4
2
5
SE02
N
S
TP+15.0m
+14.0m
+13.0m
1
2
3
4
5
6
7
8
1：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルト
2：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト
3：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂(掘形埋土)
4：灰白色(5Y7/2)細粒砂質シルト(掘形埋土)
5：褐色(10YR4/6)細粒砂質シルト(掘形埋土)
1：暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルト
2：オリーブ黄色(5Y6/3)細粒砂
3：灰白色(5Y7/2)偽礫混じり細粒砂質シルト
4：黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト
5：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト
6：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト
7：灰オリーブ色(5Y6/2)細礫(地山層)
8：灰白色(5Y7/2)シルト質粘土(地山層)
0
2 m
1：50

図4　遺構平面・断面図

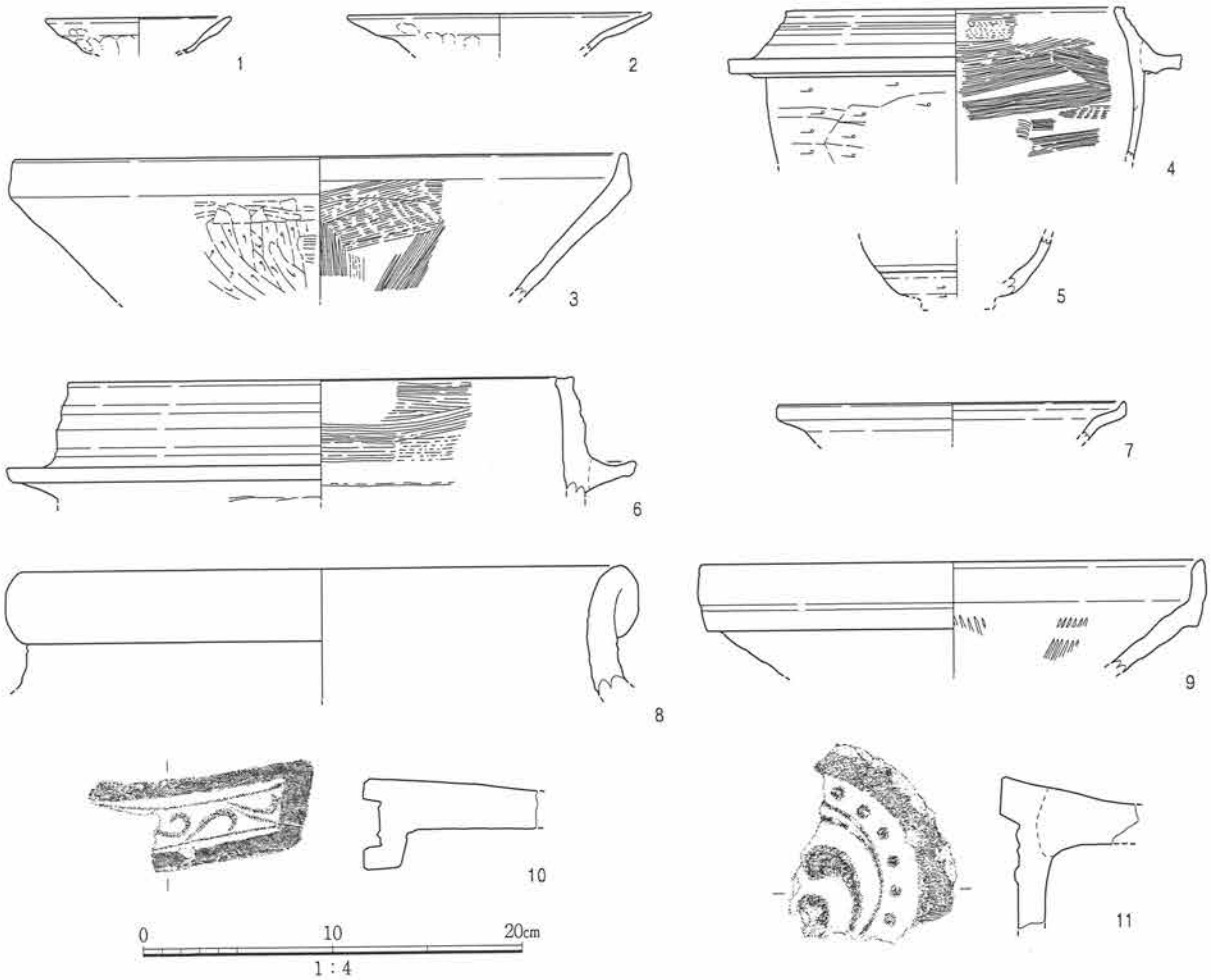


図５　出土遺物

SE01（１～５）・SE02（６～11）

が出土し、四天王寺南方に展開する中世集落の一端をうかがい知ることができた。

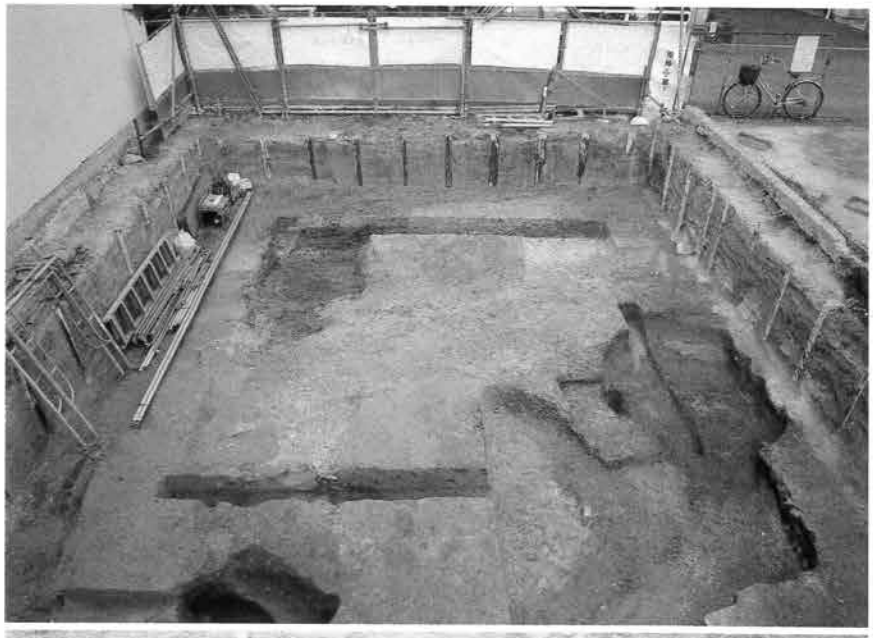
引用・参考文献

大阪文化財研究所2013、『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』

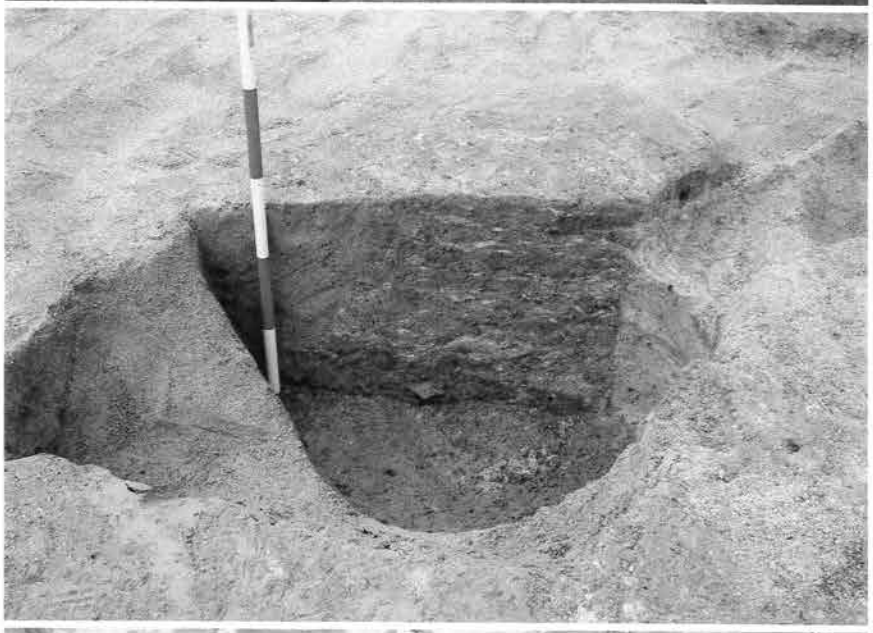
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2015、「天王寺区大道一丁目２番における建設工事に伴う大道１丁目所在遺跡発掘調査（DA13－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2013）』、pp.399－414

調査区全景(南から)



SE01断面(北東から)



SE02断面(西から)

天王寺区玉造本町１－11･12･13における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS15－５)報告書

調査個所	天王寺区玉造本町1－11・12・13
調査面積	42㎡
調査期間	平成27年8月18日～8月21日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城の東南にある「玉造口」の南西側に位置し、上町台地の東麓を下刻する谷である「清水谷」に近接する。これまで付近では、北東100mのOS89－146次調査[大阪市文化財協会2002]で、豊臣期の南北方向の堀が確認され、玉造口の一部とみられている。さらに下位層では弥生時代の遺構・遺物も出土している。また、西方80mのOS14－1次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]では、清水谷の主谷に通じると考えられる斜面が豊臣期あるいは徳川初期に大規模に埋められた状況で確認され、1594年の惣構堀にかかる造成の可能性が指摘されている。

当該地で大阪市教育委員会が2015年7月27日に行った試掘調査の結果、現地表下約1.8mで、江戸時代前半の大坂城跡に関わる可能性のある遺構面および遺物包含層が検出され、本調査を実施することになった。

調査は敷地南側に東西6m、南北7mの調査区を設定し、8月18日に開始した。現代盛土を重機によって掘削し、その後の掘り下げはすべて人力によった。第3、第4層上面で遺構を検出し、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。その後、調査区北部中央を深掘りし、地層観察を行い、8月21日、現地における調査作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図2は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

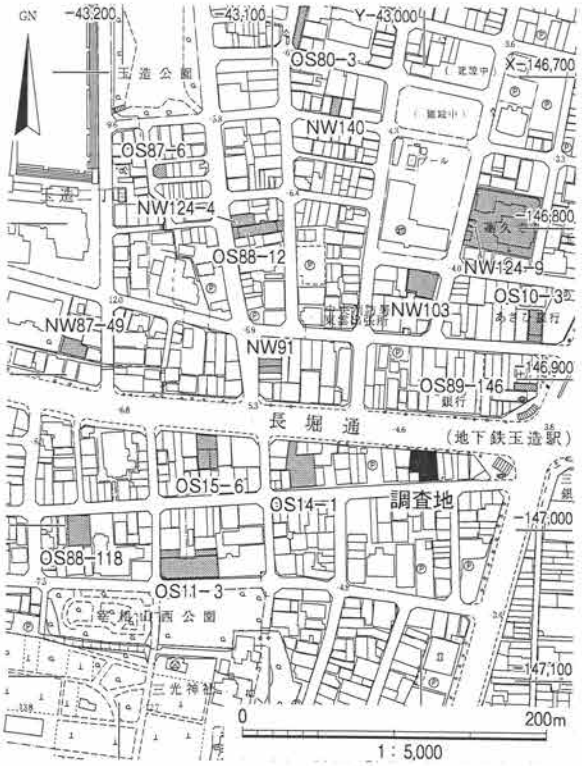


図1　調査地位置図

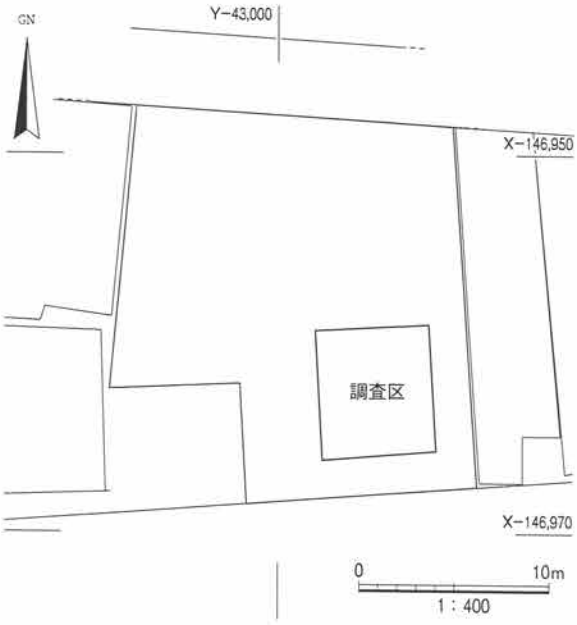


図2　調査区位置図

2）調査の結果

i）層序

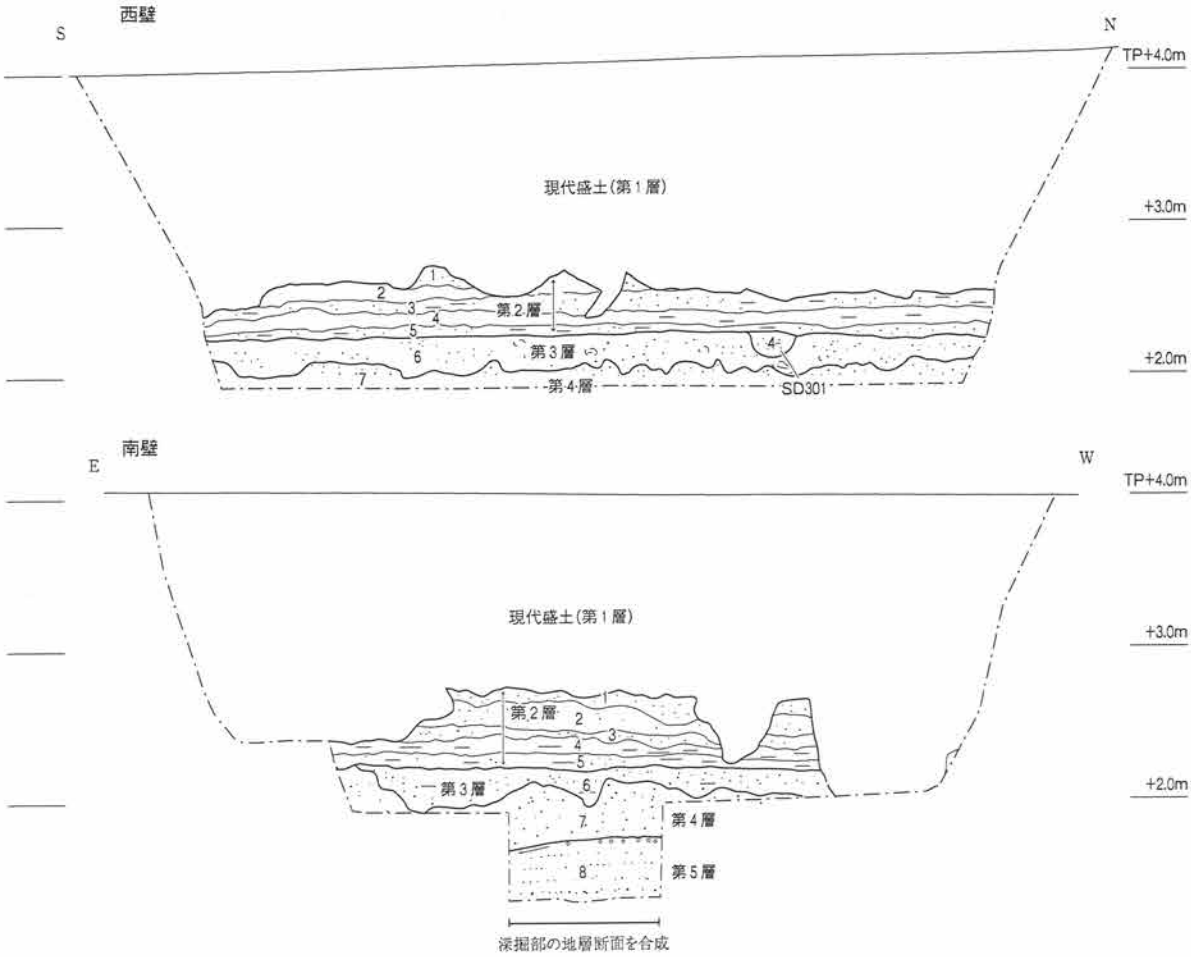
調査地の現地表面はTP+4.0m前後とほぼ平坦であるが、南面道路は西方へ緩く落ちている。調査では現地表下約2.7m（TP+1.3m）までの地層を確認し、5層に大別した。各層の岩相の特徴は次の通りである。

第1層：現代盛土・攪乱層である。層厚は全体的に140cmで、最大200cm以上である。

第2層：暗灰黄色(2.5Y4/2)を基調とする極細粒砂～シルト質粘土からなる作土層で、層厚は最大50cmである。5層に細分でき、層厚はそれぞれ10cm前後である。17世紀後半～18世紀代と考えられる肥前陶器碗、丹波焼擂鉢の小片が出土した。

第3層：細粒～中粒砂偽礫混り黒色(10YR2/1)シルトからなる遺物包

図3　地層と遺構の関係図



1：黄褐色(2.5Y5/4)極細粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト
4：灰黄色(2.5Y5/2)シルト
5：黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト
6：黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂偽礫混りシルト
7：黒色(10YR1.7/1)細粒～中粒砂
8：黄褐色(10YR4/1)～灰黄色(2.5Y5/2)中礫～細礫
9：褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト

0　2m
1：50

図4　地層断面図

含層および遺構埋土で、層厚は最大30cmである。全体に締まりの悪い地層で、弥生土器、飛鳥時代の遺物のみ確認したが、周辺調査の地層の状況や第２層が17世紀後半以降と考えられることから、豊臣期以降に形成された地層の可能性がある。

第４層：黒色(10YR1.7/１)細粒～中粒砂からなる自然堆積層で、層厚は50cmである。弥生土器の小片が１点出土した。

第５層：灰黄色(2.5Y5/2)細～中礫を主体とする自然堆積層で、層厚は40cm以上である。遺物は確認できず、古流向は概ね、南西－北東であった。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

a)第４層上面の遺構と遺物

南北方向の溝SD401～403、土壙SK404～406を検出した。埋土はいずれも下位の第４層に由来する偽礫を多く含む黒色シルト(第３層)で埋め立てられていた。

SD401　当初、幅1.4m、長さ3.2m以上、深さ0.3mの一本の溝と認識したが、断面観察の結果(図５)、SD402、SD403と同様の幅0.4～0.5mの溝が４本ほど重複していることが判明した。埋土からは大型の弥生土器鉢１のほか、土師器杯Ｃ２、須恵器杯Ｇ蓋３、杯Ｇ身４・５を含む、飛鳥時代を中心とする遺物が出土した。１は口縁に円形浮文、一条の凹線を施し、畿内第Ⅳ様式に属する大型の鉢である。２は内面に放射状の暗文を施す。３は復元口径9.9cmで、かえりが口縁端部よりやや上位に位置する。

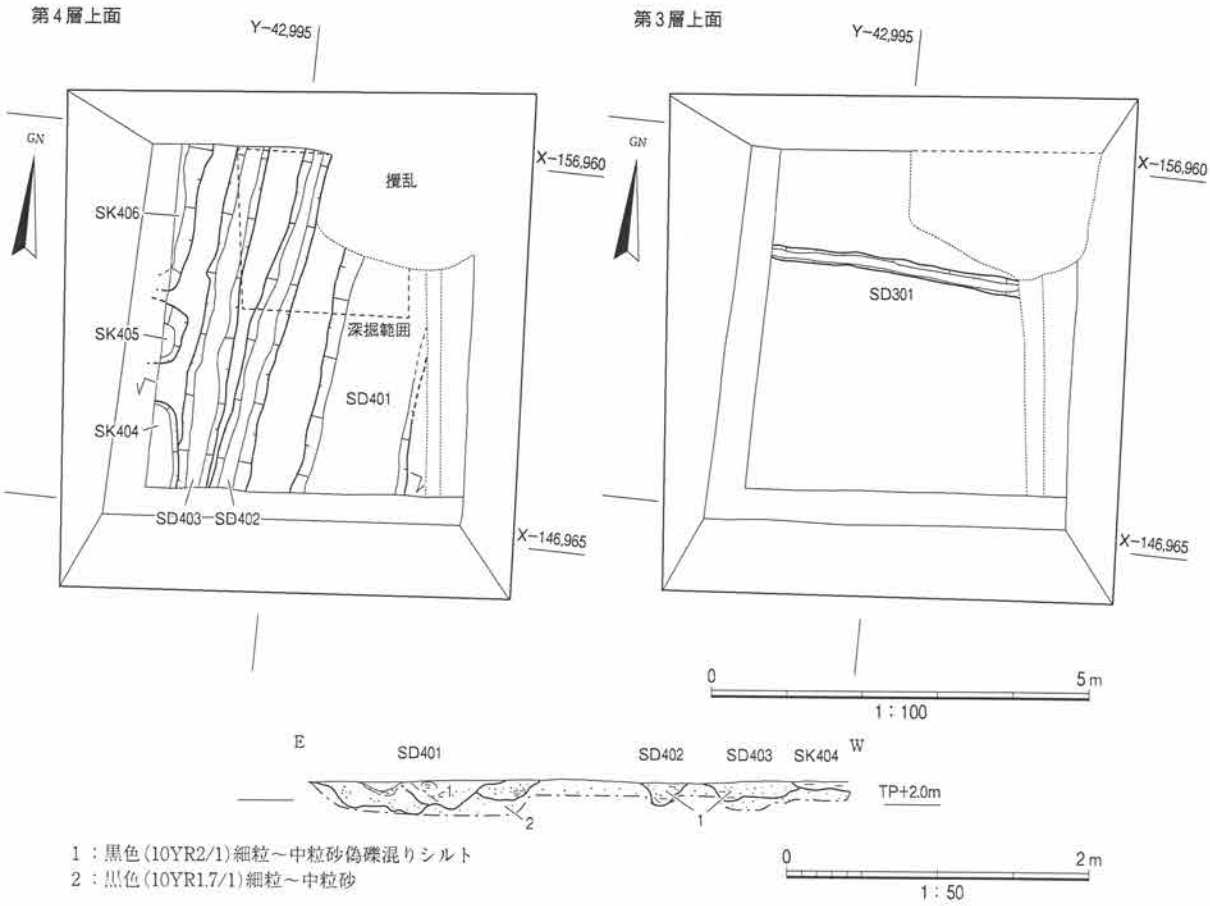


図５　遺構平面・断面図

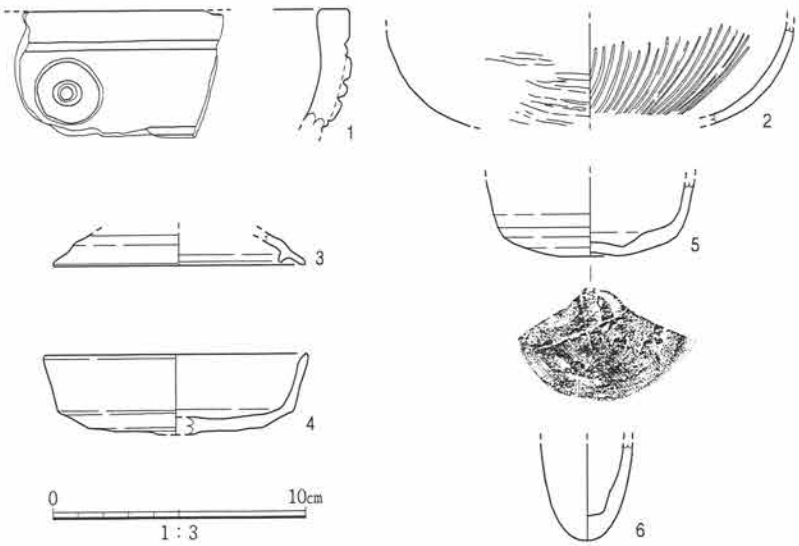


図6　出土遺物
SD401(1～5)、SD403(6)

4は復元口径10.3cm、高さ3.2cm、5は底面に「×」のヘラ記号を施す。2～5は概ね飛鳥Ⅱ～Ⅲ、前期難波宮期に属する。

SD402　幅0.5m、長さ4.6m以上、深さ0.1～0.2mである。土師器甕片が出土した。

SD403　幅0.5m、長さ4.6m以上、深さ0.1～0.2mである。埋土から土師器甕片のほか、弥生時代の飯蛸壺とみられる6が出土した。細長い中空の楕円形状を呈し、残存長3.9cm、外面はナデで仕上げる。

SK404　幅0.3m、長さ1.2m以上、深さ0.3mの土壙である。土師器甕片が出土した。

SK405　幅0.9m、長さ0.3m以上、深さ0.3mの土壙である。

SK406　幅0.3m以上、長さ2.0m以上、深さ0.3mの土壙である。

b)第3層上面の遺構と遺物

SD301　幅0.3m、深さ0.2m、長さ3.8m以上の東西方向の溝である、埋土は第2層と類似する褐灰色細粒砂質シルトであり、耕作に伴う溝と思われる。土師器、須恵器の小片が出土した。

3)まとめ

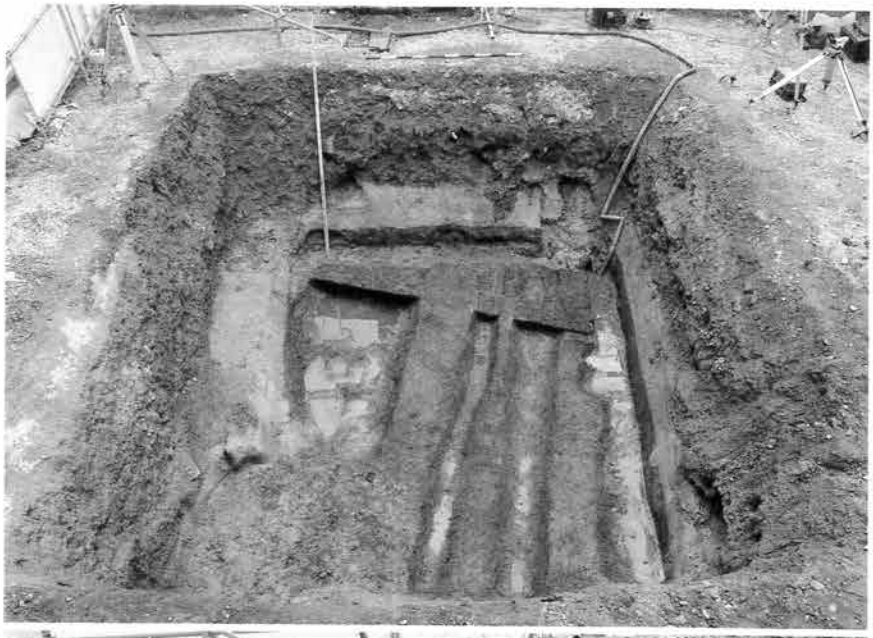
第4層上面の溝群の埋土堆積状況からは、恒常的な滞水あるいは取排水の痕跡が確認できなかった。出土遺物はすべて飛鳥時代以前のものであるが、上位の2層が江戸時代以降であることから、豊臣期以降の客土、掘削で、惣構掘の開発とかかわる可能性も考えられる。その評価については、周辺調査成果の進展をまちたい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』Ⅵ

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、「大坂城跡発掘調査(OS14－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)』、pp.255－262

第４層上面遺構検出状況
（北から）



南壁地層断面
（北から）

深掘部地層断面
（北から）

天王寺区空堀町１－17・１－18における建設工事に伴う

大坂城跡発掘調査(OS15－６)報告書

調査個所	大阪市天王寺区空堀町１－17・１－18
調査面積	42㎡
調査期間	平成27年10月14日～10月19日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城の東南部に位置し、上町台地の東麓を下刻する「清水谷」に近接する。これまで付近では、東60mのOS14－1次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]では、「清水谷」の主谷に通じると考えられる斜面が豊臣期あるいは徳川初期に大規模に埋められた状況で確認され、文禄3(1594)年の惣構堀にかかる造成の可能性が指摘されている。また、東150mのOS15－5次調査[大阪文化財研究所2015]では、飛鳥時代以前の遺物しか出土していないものの、惣構堀の開発とかかわる可能性のある溝群が検出されている。

当該地で大阪市教育委員会が2015年9月2日に行った試掘調査の結果、現地表下約1.8mで、江戸時代前半の大坂城跡に関わる可能性のある遺構面および遺物包含層が検出され、本調査を実施することになった。

調査は敷地南側に東西7m、南北6mの調査区を設定し、10月14日に開始した。現代盛土～第6層までを重機によって掘削し、その後の掘り下げはすべて人力によった。第7層上面、第8層上面で遺構の有無を精査し、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。その後、調査区北部中央を深掘りし、地層観察を行った。10月19日、以上の調査を終え、埋戻しを行い、現地における作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図2は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

図1　調査地位置図

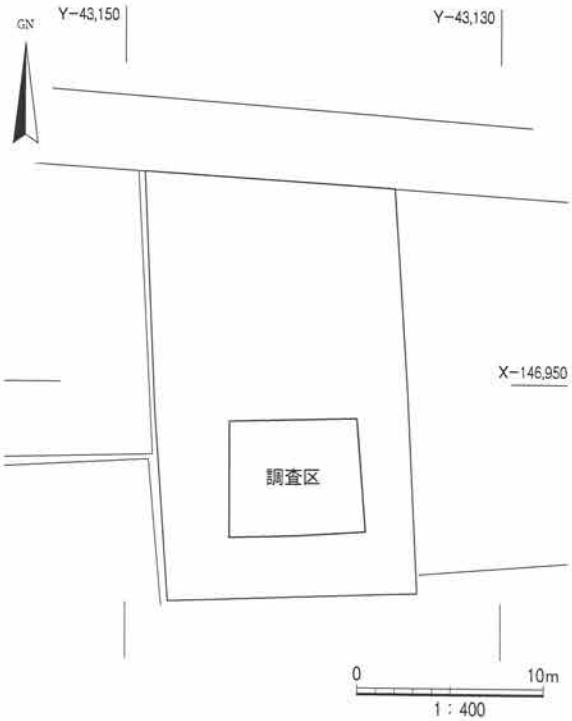


図2　調査区配置図

2)調査の結果

i)層序

調査地の現地表面はTP+6.0m前後とほぼ平坦であるが、南面道路は東方へ緩く落ちている。調査では現地表下3.7m（TP+2.3m)までの地層を確認し、13層に大別した。各層の岩相の特徴は次の通りである。

第0層：現代盛土・攪乱層である。層厚は全体的に60cmで、最大90cmである。

第1層：にぶい黄色(2.5Y6/4)を基調とする細粒砂シルトからなる近現代盛土層で、層厚は20cmである。

第2層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂シルトからなる旧表土である。

第3層：オリーブ黄色(5Y6/3)を基調とする細粒～中粒砂からなる近世盛土層で、層厚は50cmである。締まりが悪く、東から西へ盛土を進行させる状況がよく観察できた。

第4層：a、bの2層に細別した。ともに近世作土層で、第4a層は灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト、層厚10～15cm、第4b層はオリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂、層厚25cm前後である。

第5層：偽礫を多く含み、灰オリーブ色(7.5Y4/2)を基調とする中粒砂からなる近世盛土層である。層厚は最大90cmである。近世瓦片を含む。

第6層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂からなる近世盛土層である。層厚は最大45cmである。

第7層：黒色(2.5Y2/1)シルトを主体とする近世盛土層である。層厚は最大45cmで、全体に締まりが悪く、盛土の単位が明瞭に観察できる。弥生土器を中心に、須恵器杯蓋1、重圏文軒丸瓦2など古墳～奈良時代の遺物が多いが、16～17世紀と考えられる土師器甕3が含まれる。

第8層:オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルトからなる作土層である。層厚は30cmである。鉄製鍬先4が出土した。

第9層：灰色(10Y4/1)細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は15cmである。

第10層：灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は15cmである。

第11層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒～中粒砂からなる自然堆積層である。上方細粒化し、層厚は40cmである。

第12層：黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトからなる自然堆積層である。層厚は20cm以上である。

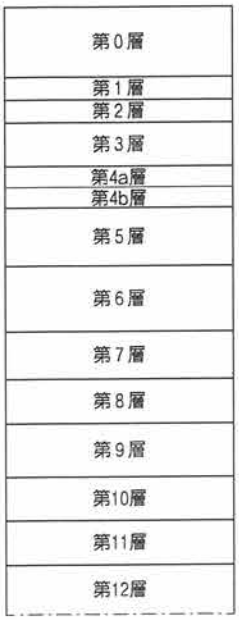


図3　地層と遺構の関係図

ii)遺構と遺物(図4)

第7層、および第8層上面で精査したが、明確な遺構は確認できなかった。しかし、今回の調査で大きな意味をもつのは、第5～7層の盛土層の存在である。第7層から出土した土師器甕3の存在か

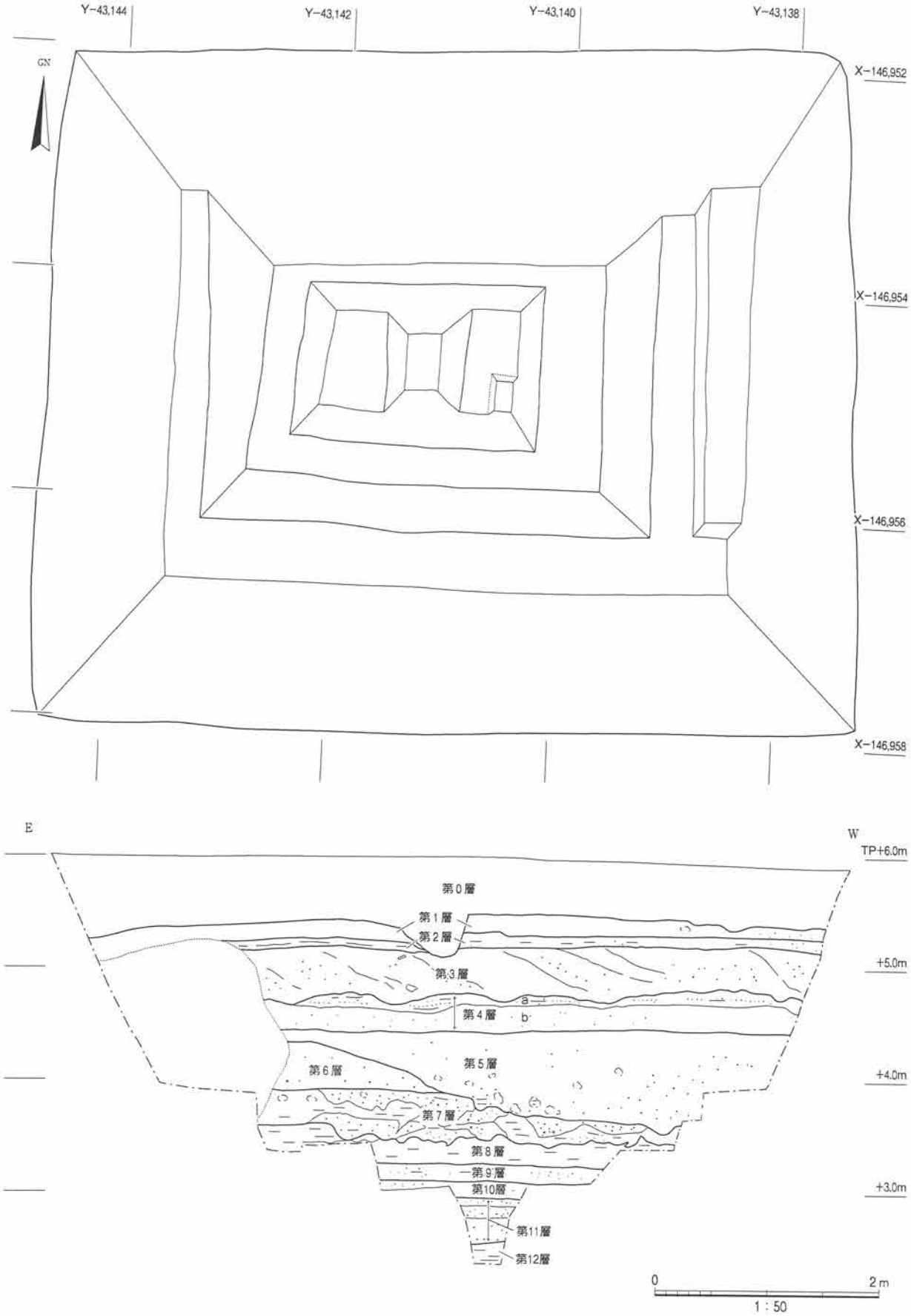


図4　平面および南壁断面図

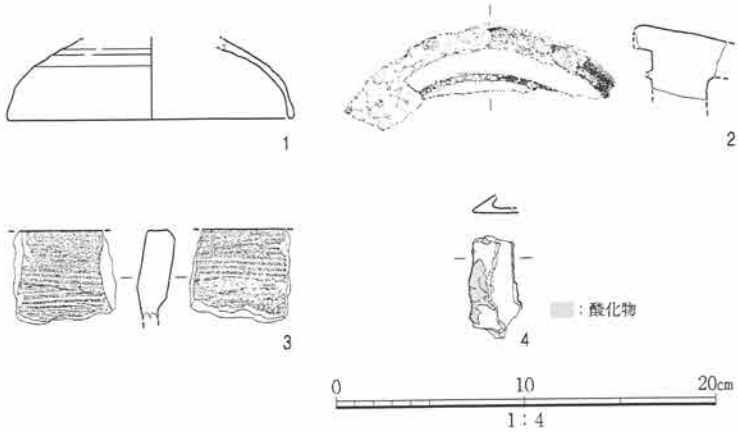


図５　各層出土遺物実測図
第８層（４）、第７層（１～３）

ら、盛土の時期は16～17世紀初頭と考えられ、文禄３(1594)年の惣構堀にかかる造成による可能性が高い。北側に設けられた堀で生じた土砂を堤状に盛り上げた状況が想定できる。

出土遺物はほとんどが第７層からで、弥生土器の小片が多い。中期～庄内期まで幅広い時期を含む。図５には図示可能な遺物を掲載した。１は須恵器杯H蓋で、口径が14.8cm、TK209型式に該当するだろう。２は重圏文軒丸瓦で、外径18.0cmである。３は土師器甕片である。４は鉄製鍬先の一部である。

３）まとめ

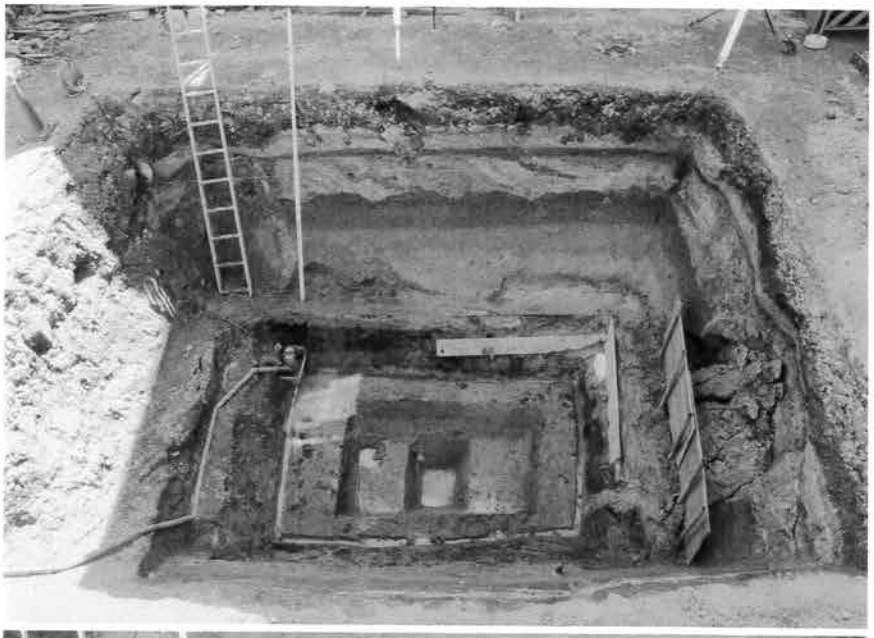
今回の調査では、限られた面積にも関わらず、文禄３(1594)年の惣構堀にかかる造成による可能性が高い盛土層を確認することができた。今後、周辺調査の蓄積によって、より確度の高い地域史像が復元できるものと期待される。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、「大坂城跡発掘調査（OS14－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)』、pp.255－262

大阪文化財研究所2015、『天王寺区玉造本町１－11・12・13における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS15－５)報告書』

南壁地層断面
（北から）



第８層上面検出状況
（北から）

第７層上面検出状況
（北から）

天王寺区四天王寺一丁目30－８における建設工事に伴う

四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST15－１)報告書

調査個所	大阪市天王寺区四天王寺１丁目30－８
調査面積	30㎡
調査期間	平成27年11月16日～11月20日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水 和明

1)調査に至る経緯と経過

調査地は現在の四天王寺境内北にある霊園に北接し、かつての府営椎寺住宅跡地で近年は駐車場に利用されていた。一帯の地形は、上町台地脊梁部から東側にある緩斜面上にあり、その先は真法院谷につながっている。古代では難波京の推定域に当り、上本町遺跡に接する四天王寺旧境内遺跡内の北端付近に位置するため、これまで周辺では数多くの調査が行われ、古代から近世の遺構・遺物が数多く見つかってきた。調査地の付近では中世の正方位となる堀・溝が多く見つかり、なかでも北西200mのUH08－10次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]、西100mのST96－7次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]、北東60mの試掘調査ST95－7次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]、東150mのST94－7次調査地[大阪市文化財協会1996]などでは難波京の条坊想定線に一致しているため、始源が難波京に求められる可能性もある(図1)。

大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、中世の遺構面および遺物包含層が検出され発掘調査を行うこととなった。地表下1.3mまでは開発事業者側により重機掘削が行われ、その範囲内で東西12m、南北2.5mを調査した。調査は平成27年11月16日から開始した。東側へ低く傾斜しているため、確実に18世紀以降となる地層(後述の第1層)が試掘地点よりも厚く30cm以上堆積していたため、調査期間を勘案して重機により追加掘削し、その後、第2層以下を人力により掘削し、層序に応じて順次遺構を検出、適宜実測図や写真撮影によって記録した。第3層までを遺構面で調査し、下位の第4層以下、第8(地山)層までは調査区の南壁・東壁沿いにトレンチを設けて地層断面の記録および遺物の採集を行った。11月20日で現地における全ての調査を終了して撤収した。

また、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

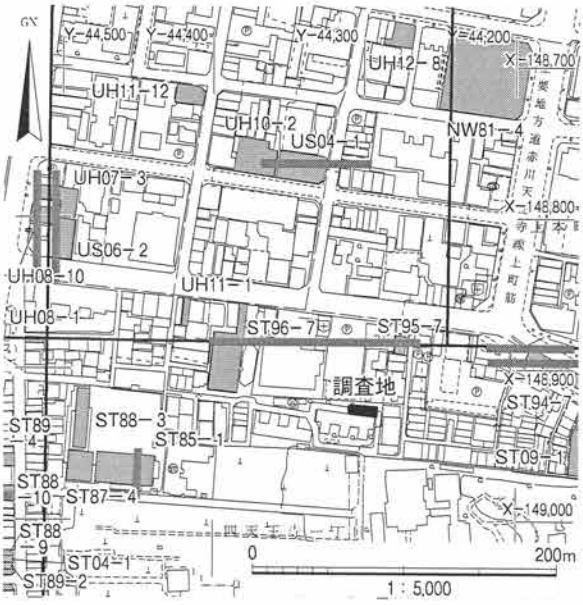


図1　調査地位置図

(黒細線：条坊想定線／灰太線：中世近世堀・溝)

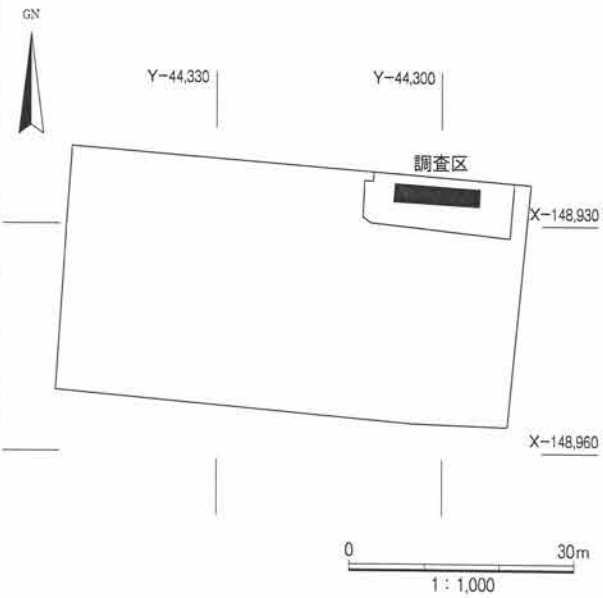


図2　調査区配置図

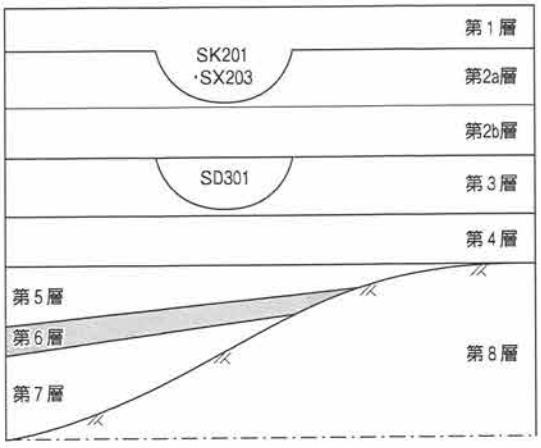


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地は駐車場に利用されていたため平坦であるが、周辺の地形を反映して、敷地西部がTP+18.8m、東部がTP+18.1mで若干東側が低い。

第1層：灰黄褐色(10YR5/2～4/2)炭混りシルト質中粒～粗粒砂層で、層厚は35cm以下で、18世紀以降の近世作土層である。

第2層：豊臣後期～徳川初期の遺物を多く含む整地層で第2a層、第2b層に2分できる。

第2a層：暗褐色(10YR3/3)～暗赤褐色(2.5YR3/2)のシルト質中粒～粗粒砂層で、第8層(地山)の偽礫が多く混じる。層厚は35cm以下で東部がやや厚い。整地層である。本層上面でSK201・SX203を検出した。

第2b層：極暗褐色(7.5YR2/3)細礫質粗粒砂層で、層厚は西部で20cm以下だが東部では薄くなり分布していないため、第2a層の整地前に削平された可能性がある。整地層である。

第3層：灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒～粗粒砂層で、層厚は30cm以下である。上面は西部で20cm程度高くなる。整地層である。遺物は出土していない。本層上面でSD301を検出した。

第4層：黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト層で、層厚は10cm以下である。中世の作土層とみられるが、出土遺物は無い。

第5層：灰色(5Y5/1)～灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒～粗粒砂層で、層厚は東部で厚く45cm以下、西部では第8層(地山)にアバットしている。水成堆積層である。出土遺物は無い。

第6層：黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂質シルト層で、層厚は東端で8cm以下と薄く、調査区の東半で確認した。東へ傾斜する谷内で形成された湿地性堆積物の暗色帯である。本層から下位の第7層にかけて調査区東端で須恵器甕や布目のある平瓦片が出土したことから、古代に遡る地層とみられる。

第7層：黄灰色(2.5Y4/1)極粗粒砂層で、東部で確認し第8層(地山)にアバットしている。水成堆積層である。

第8層：灰白色(10Y7/1)シルト質粗粒砂層で地山層である。

ii)遺構と遺物

a.徳川初期以前の遺構と遺物

詳細な時期は不詳だが、第6層から第7層にかけて須恵器甕や布目のある平瓦片が出土している。細片のため図化していないが古代の遺物と考えられる。

続く中世の可能性のある遺構と豊臣後期～徳川初期の遺物包含層を確認した(図5)。以下、層準に沿って古い遺構から記述する。

第3層上面でSD301を検出した。SD301は調査区西端で幅1.1m以上、深さ0.7mで、東端では幅

0.8m、深さ0.2mと狭小となる。東壁の地層断面図では確認できないが、西壁地層断面図にあるように、南側に当初の溝とその埋土が確認でき、一度埋まった後、再度第３層上面から掘削している。調査では第３層を掘削しながら検出し、調査区西部では下位の第４層・第８層の上面付近でSD301の基底付近を確認した。埋土の基底には暗灰色シルトの機能時堆積層が見られる。出土遺物は少なく、時期不詳の土師器甕片・須恵器甕片のほか備前焼甕片、布目のある瓦片などがあるが細片のため図化していない。また、鋳造関係資料として鋳型片19が出土した(図７)。19は鋳肌面にクロミの一部が残っており、内湾する形状から梵鐘ないし半鐘などの鋳型の一部である可能性がある。

第６・７層が古代と考えられ、次に述べる第２層が豊臣後期～徳川初期に降ることから中世に当る可能性がある。

第２層からは多量の遺物が出土した。土師器10、肥前陶器５、瀬戸美濃焼２～４、備前焼11・12、中国産磁器６～９、軒瓦13～15などのほか、鋳造関係資料として18･20～23などがある。

大型の土師器甕10は、肥厚させた口縁部を直立させ、外面は横方向の粗い平行タタキで整形し、内面はハケ調整である。瓦質土器の系譜を引くものである。５は肥前陶器小碗である。瀬戸美濃焼の２は灰釉碗、３・４は灰釉の丸皿で、４の底部外面にはトチンの痕

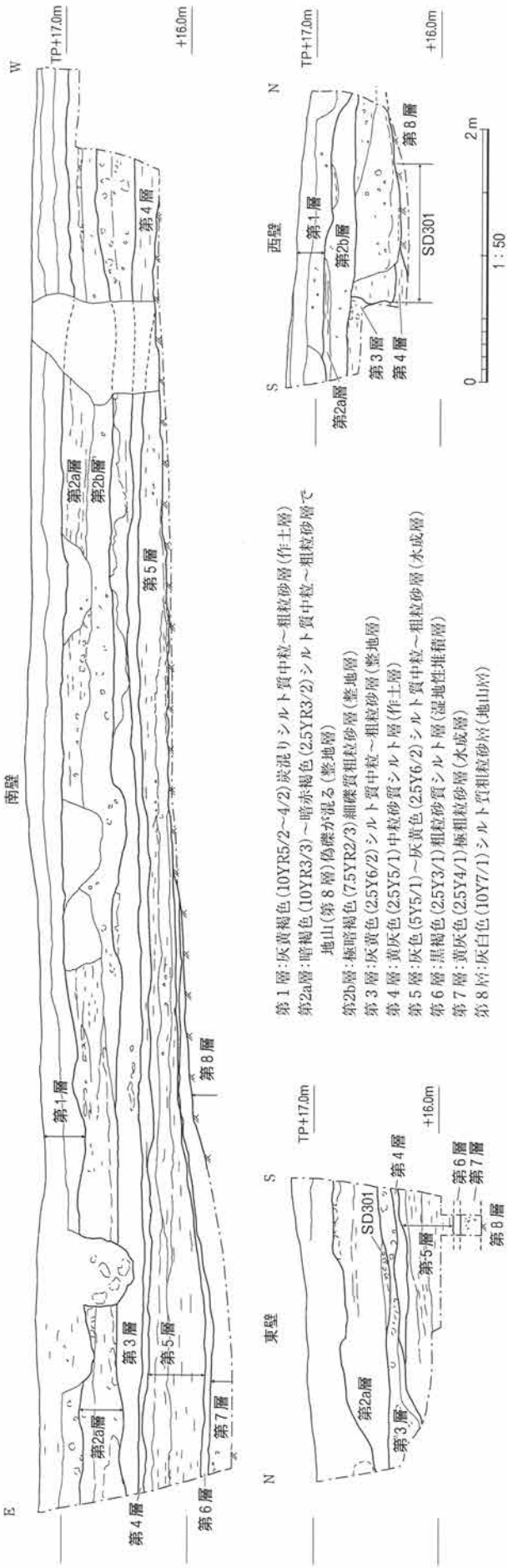


図４　調査区地層断面図

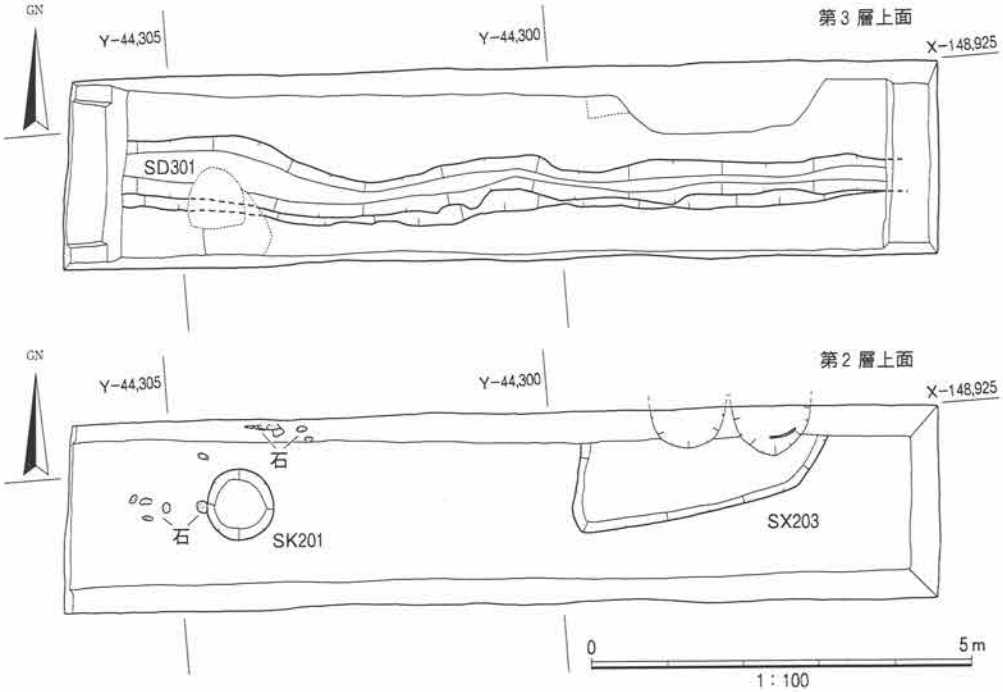


図5　第3層上面および第2層上面遺構平面図

がある。備前焼11・12は擂鉢で、内面の擂り目は斜め上方へ粗く放射状に施している。中国産磁器6～9には青花碗6・7、青花皿8・9などがある。7は漳州窯産の粗製である。8は底部内面に釣り人を描き、9も人物の脚が描かれている。軒丸瓦には巴文軒丸瓦14のほか、「天王寺」文字文軒丸瓦15があり、ST85－1次調査地のSD301から同一文様の軒丸瓦が出土している[大阪文化財研究所2014]。軒平瓦には唐草文軒平瓦13などがある。

これらは豊臣期ないしそれ以前に属するものもあるが、肥前陶器小碗5、備前焼擂鉢11・12などが新しく、第2層は豊臣後期～徳川初期に降ると考えられる。

そのほか、鋳造関係資料には甑炉22・23、支脚18、栓状土製品20、粗型21などがある。甑炉22は内面に発泡したガラス質が厚く溶融しており、炉の底に近い部位と考えられる。緑青を吹いており銅の溶融に使用されたものであろう。一方、23は甑炉の鎰(湯だめ)の一部と考えられ、底に当ると想定された平坦な面に木炭が多量に付着している。銅錆はなく鉄錆のみが認められるため、鉄の溶融に使用されたものの可能性が高い。18は三脚の支脚で、脚径は3.5cm程度である。鋳型焼成に使用されたものと考えられる。20は甑炉の内側に当てて注ぎ口を塞ぐ栓状土製品である。21は環状に復元される粗型で鍋・釜などの回転体の土台となるものである。

こうした鋳造関係資料がまとまって出土した例は四天王寺周辺域では初出であり、豊臣後期～徳川初期以前に付近で銅や鉄を素材とした鋳造業が営まれていたことが明らかとなった。下位のSD301からも鋳型が出土したため、中世に遡る可能性があろう。大阪市内では住吉区の苅田・我孫子周辺に中世鋳物師が活動していたことが判明しているが[大阪市文化財協会2004]、本例の場合は、まず四天王寺との直接的な結びつきが想定される。銅の溶解や、わずかながら梵鐘ないし半鐘の可能性のある鋳型片が認められたことなどは、寺院関連の製品生産に係っていた可能性を示唆するものである。鋳型

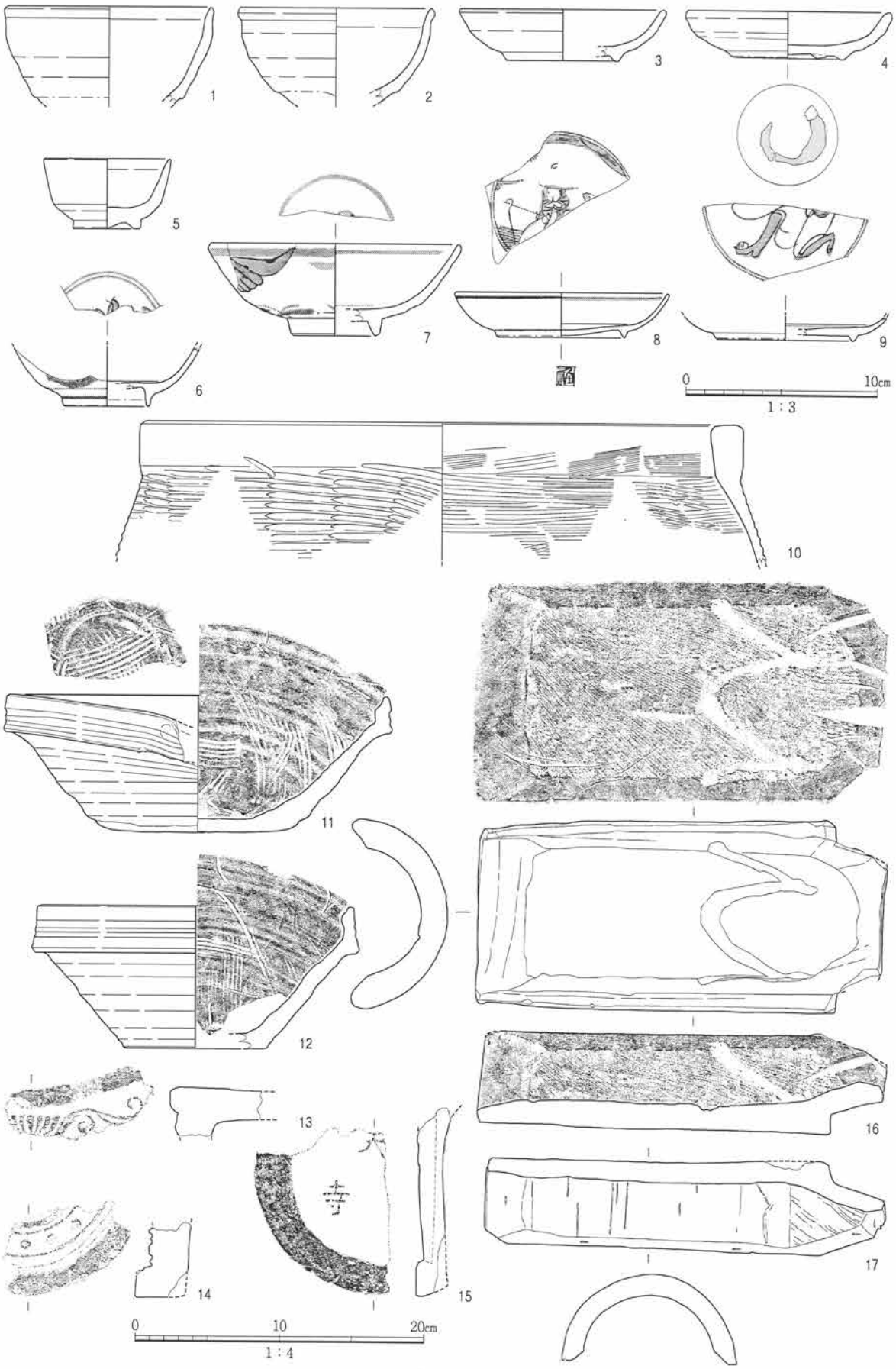


図６　出土遺物実測図

SX203（１・16・17）、第２層（その他）

の出土量が乏しく、その他の具体的な鋳物製品は不明である。また、これらの資料を包含した第２層は整地層で、客土中に中世遺物も含むため、操業時期を限定することは困難であるなど、本例の鋳造業の実態は調査の進展を待つ必要がある。

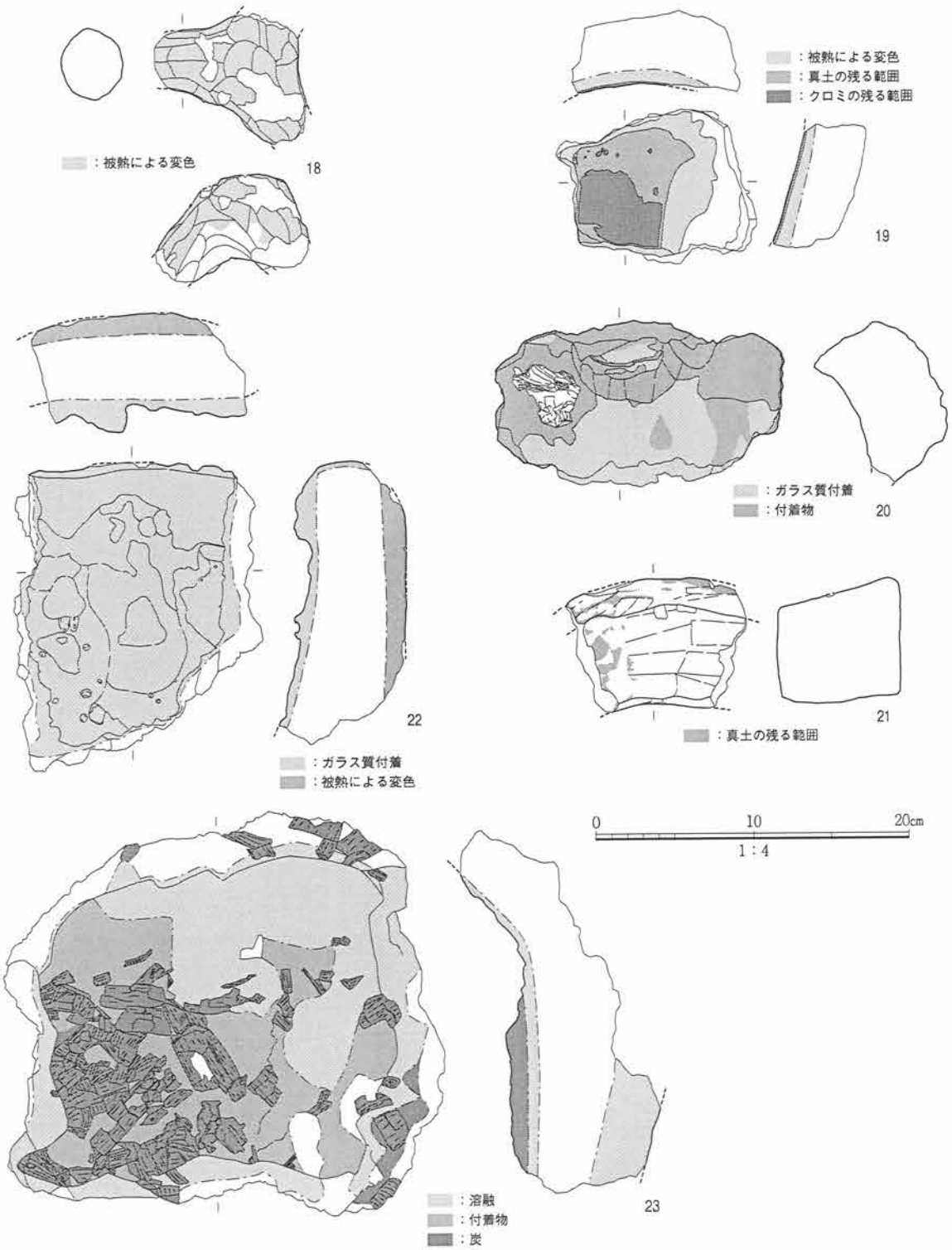


図７　出土遺物実測図
SD301(19)、第２層(その他)

b. 徳川期の遺構と遺物

徳川期の遺構には第2a層上面で検出されたSK201・SX203がある。

SK201は調査区西部で検出された直径0.9m、深さ0.1mの土壙である。近世の瓦細片が出土した。

SX203は調査区東部で検出された土壙で、確認された範囲では東西3.3m、南北1.6m以上、深さ0.1m以下である。出土遺物には瀬戸美濃焼碗1、完形の丸瓦16・17がある。1は鉄釉の天目碗である。16は内面にコビキAの痕があり、強く垂らした吊り紐跡も明瞭に残っている。17はコビキBの痕跡がある。これらは豊臣期に遡る遺物であり、下位の第2層に由来するものであろう。このほか土師器皿・肥前陶器碗以外に肥前磁器碗細片を含むため、SX203は徳川期に下る時期の遺構である。SX203と同じ層準のSK201も同時期の遺構であろう。

3)まとめ

本調査では古代から近世に至る遺物包含層を確認した。そのうち、豊臣後期～徳川初期の遺物包含層からは鋳造関連資料がまとまって出土したことが特に重要である。銅・鉄の溶解炉、鋳型、鋳型焼成用の支脚などが含まれる。遺物は近辺から客土によって持ち込まれたものと考えられ、鋳造に係る遺構を検出することはできなかった。操業時期および生産された製品の詳細などについては今後の周辺調査の進展に期したい。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「ノバ㈱による建設工事に伴う発掘調査(ST96－7)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.63－71

2010、「天王寺区六万体町における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH08－10)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.371－377

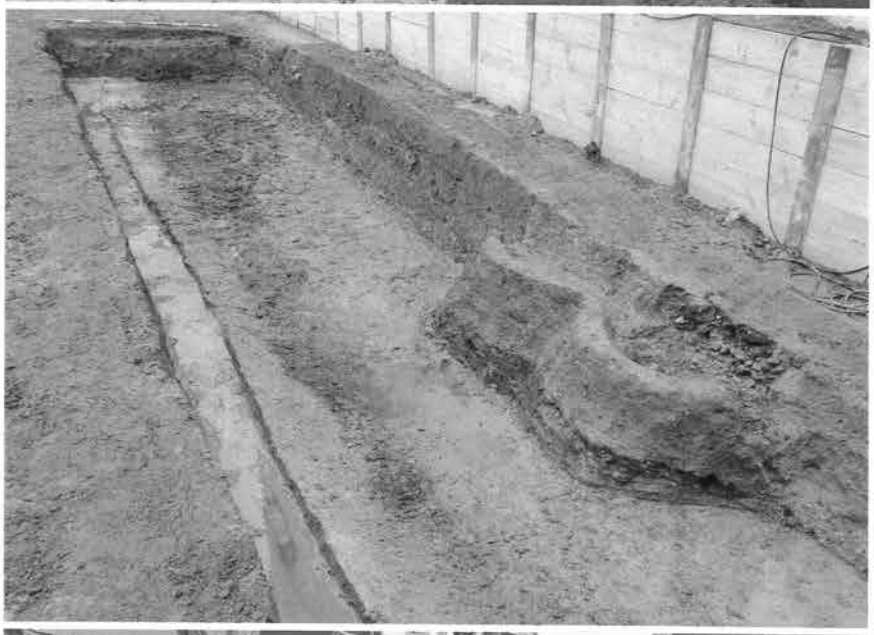
大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅰ』、pp.1－136

2004、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.1－61

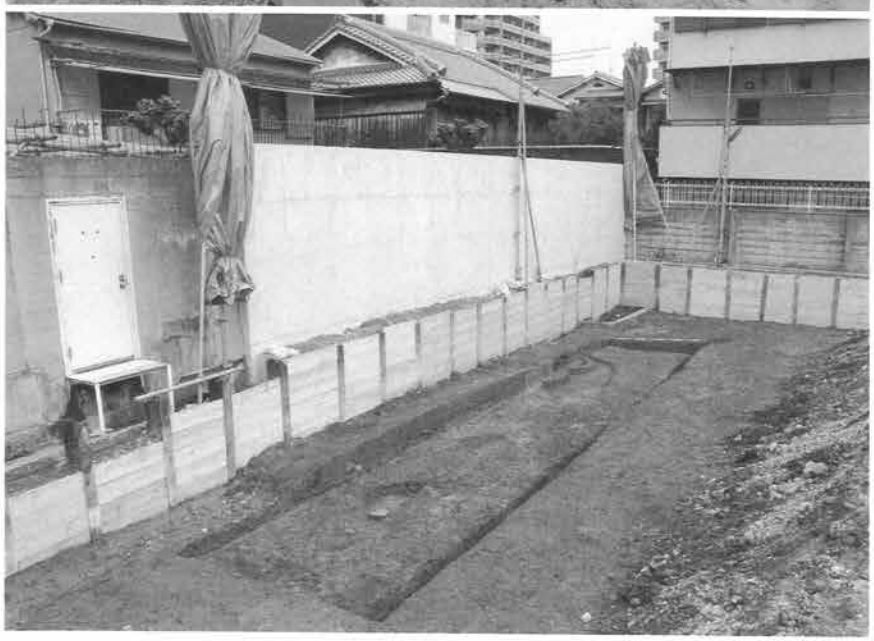
大阪文化財研究所2014、「第7節　天王寺区四天王寺旧境内遺跡」:『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.69－130

調査区東壁地層断面
（西から）

SD301検出状況
（南東から）



第２層上面遺構
完掘状況
（南西から）



天王寺区生玉前町303－２他６筆における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH15－１)報告

調査個所	大阪市天王寺区生玉前町303－２他６筆
調査面積	118㎡
調査期間	平成27年４月14日～４月27日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、趙哲済

1)調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は、上町台地の主稜線付近にある古代～近世の集落遺跡・土採り場跡である。

調査地は主稜線の西側約80mの緩い斜面上にある(図1)。周辺地では、調査地の南南東120mのUS04－2次調査地で奈良時代の東西溝や掘立柱建物が見つかっており、推定幅5mの東西溝は奈良時代中ごろに後期難波宮の造営に係って埋められたと考えられている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。北東約200mのUH13－3次調査地では、鎌倉時代以前に遡る可能性がある南北溝が見つかっている。規模は幅0.4mと小さいが、難波京条坊の西二坊路(註1)の東側溝に当る可能性が示唆されている[大阪文化財研究所2013]。

しかし、これら2地点以外の周辺調査地(UH08－4・08－11・10－3・11－15次など)[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会・2010a・2010b]・[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012・2013]の遺構は、18世紀後半や19世紀前半の土採り穴群が大半であり、古代～中世の遺構は壊されている可能性が高いと考えられていた。平成27年3月6日に本調査地で実施された大阪市教育委員会による試掘調査でも、土採り穴とみられる土壙を検出した。しかし、埋土に近世以前の遺物が含まれていたので、地表下1.3m以下の深さにある土壙底の地山層上面でさらに古い遺物を含む遺構が残存する可能性があると考えられた。また、当該地を難波京条坊の西三坊の坊間路が走ることが推定されていた(図2)。そこで、当該地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として本調査を実施することになった。

4月14日に東西6m・南北18mの調査区を設定して調査を開始したところ、調査区の広い範囲で地山層が地表下0.7～0.8mで検出され、古代～中世の遺構が分布することが明らかとなった。その中に、

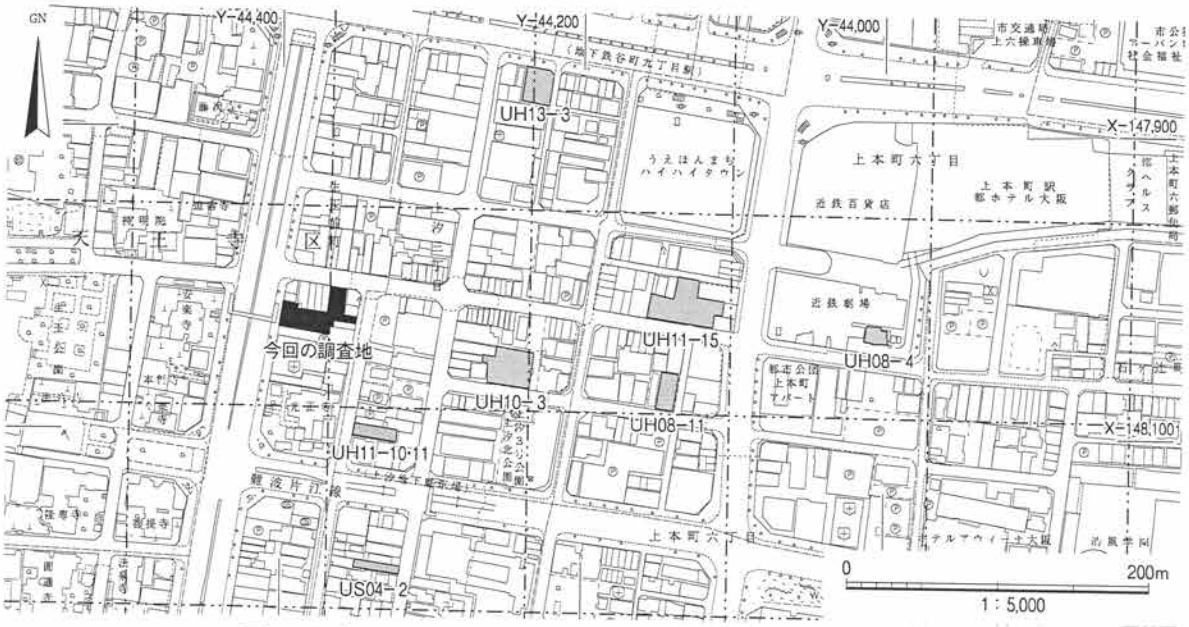


図1　調査地位置図(格子の破線は[積山2013a]に基づく条坊推定線)

図２　調査区配置図

坊間路の東側溝とみられる古代の南北溝も検出された。そこで、４月23日に調査区の南西側を東西５ｍ・南北２ｍ拡張し、坊間路東側溝の対になる西側溝の確認調査を実施した。

調査は27日まで行い、同日撤収して現地調査を完了した。途中、基準点測量を実施したが、ビルの谷間での測位結果は芳しくなかったので、現地で作成した街区図を大阪市デジタル地図に重ね合わせて座標値を得た。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

本報告の遺物の観察と記載および２）－ⅳ)の記述は研究所学芸員・小田木富慈美による。また、遺構の条坊路の検討は同じく積山洋・市川創による。

２)調査の結果

ⅰ)地形と層序

調査地の東側約80mにある上町台地の主稜線はTP+22.2m、西側に接する谷町筋はTP+21.9mで、緩やかな斜面に位置する。調査地はTP+約22mの平坦な造成地である。確認できた地表下2.5mまでの地層を第０～６層の７枚に区分した(図３・４)。

第０層は現代盛土・整地層で、層厚は10～70cmであった。

第１層は近代の盛土・整地層である。第６層由来の地山大～中偽礫を含む黒褐色(10YR3/2)中礫～細礫混り粗粒砂質シルトからなり、層厚は20～30cmであった。上面の遺構は漆喰偽礫・炭・貝殻・煉瓦などを含み、戦後まで下る時期のものがある。

第２層は近世の作土層・盛土・整地層である。上下２層に区分できる。上部の第2a層は褐～暗褐色

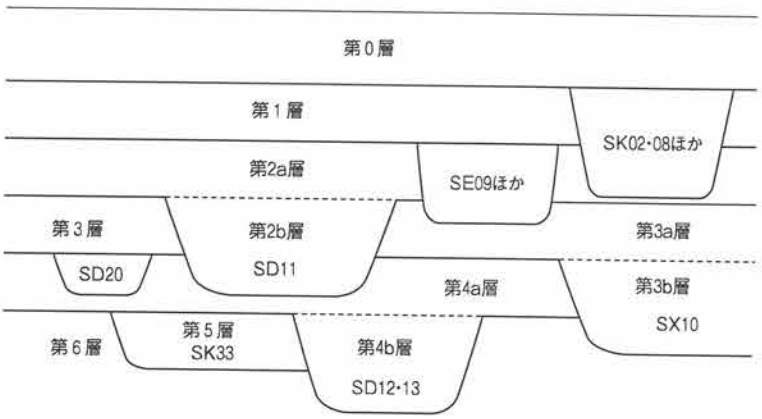


図3　地層と遺構の関係図

(10YR4/4－3/3)細粒中礫～細礫質シルトからなる作土層で、層厚は20cm、調査地北壁で分布を確認した。下部の第2b層は暗オリーブ褐～オリーブ褐色(2.4Y3/3－4/4)中礫～細礫混り粗粒砂質シルトからなる盛土・整地層で、層厚は20～25cmであった。SD11の埋土である。

第3層は中世の作土層・遺構埋土である。上下2層に区分できる。上部の第3a層は炭を含む明黄褐色(10YR6/6)細礫混り粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10～20cmであった。下部の第3b層はにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫・粗粒砂質シルトが主体のSX10の埋土である。

第4層は古代の土壌層･遺構埋土である。上下2層に区分できる。上部の第4a層は暗褐色(10YR3/3－3/4)わずかに粗粒砂質シルトからなる土壌層であり、層厚は15cm前後である。上面はSD20の遺構面である。下部の第4b層は暗褐～褐色(10YR3/4－4/4)粗粒砂質シルトが主体のSD12・13などの埋土である。

第5層は黒褐色(2.5Y3/2)泥偽礫と泥からなるSK33などの埋土である。

第6層は上町台地を構成する更新統の上町層上部であり、いわゆる地山層である。上方細粒化する黄褐色(10YR5/6)シルト～シルト質極粗粒～細粒砂からなる。層厚2m以上分布するのを確認した。

ⅱ)遺構と遺物

a. 古墳時代の遺物(図5・9)

古代以降の溝などから遊離資料として、埴輪片や須恵器などが出土している。図5－1はSK33埋土の第5層から出土した須恵器杯身でTK47型式に属し、5世紀末のものである。図9－14はSD11埋土から出土した須恵器器台の脚部で、長方形スカシ孔を有し、5～6世紀に属する。また、図9－22はSD13埋土の第4b層から出土した円筒埴輪で、円形スカシ孔を有し、無黒斑である。タガは断面形状が低い「M」字状で、外面調整は一次調整のタテハケのみである。5世紀後葉～6世紀であろう。

b. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は調査区南部に多く分布したほか、南北方向の溝が調査地を縦断している(図6～8)。遺構面と埋土の違いから、新旧2群に大別できる。

(1)第6層上面の遺構とその遺物(図5～7)

SK33は調査区東南部に分布した東西1.6m、南北3.2m以上、深さ0.2mの土壙である。東肩だけが検出でき、他は新しい遺構や攪乱で壊されていたので、性格は不明である。埋土は地山偽礫を少量含

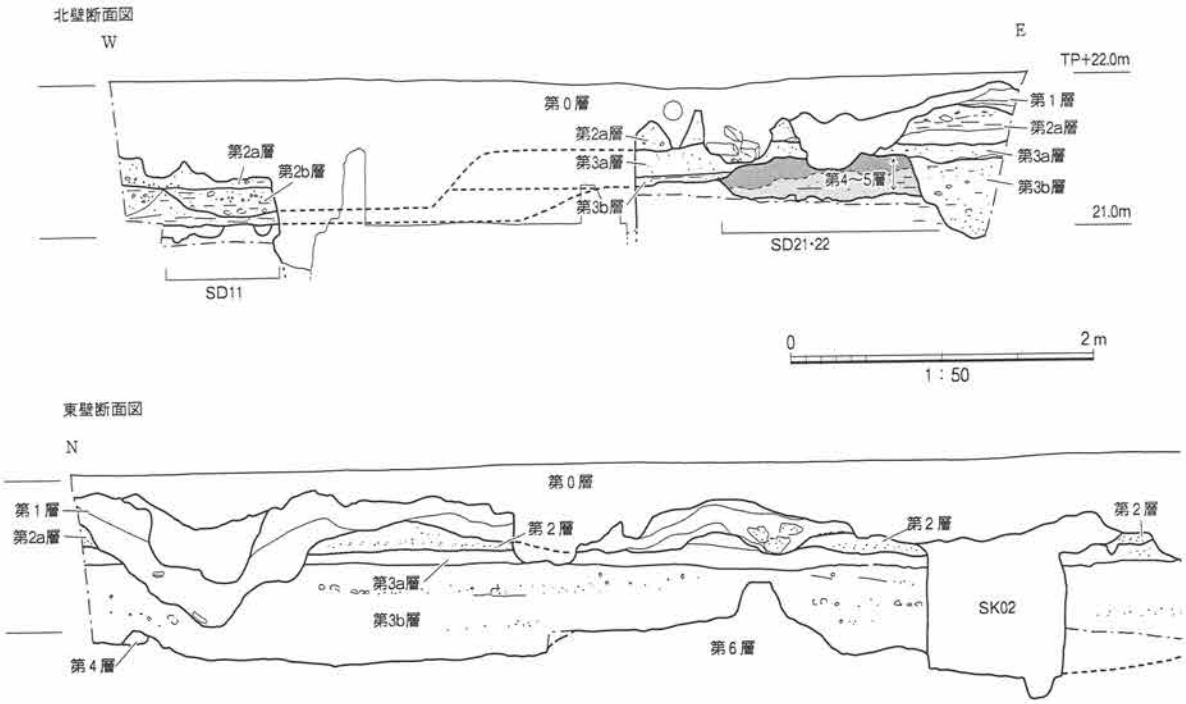


図4　地層断面図

む第5層の客土が主体であるが、下底面に薄くシルト層が分布したことから、客土で埋め立てられる以前の機能時には、一時的にせよ水が溜っていたと考えられる。埋土からは土師器・須恵器のほか焼けた壁土が出土した。須恵器1～4を図示した。1は先述した古墳時代の遊離資料である。2は杯G蓋である。3は提瓶の頸部であろう。肩部にはボタン状の把手が剥離したとみられる痕跡が残る。4は口縁部が直立する壺である。肩部には凹線が巡る。体部は扁平で、外面下半部をていねいにヘラケズリする。底部は平底に近い。

SD28N・Sは調査区西南部に分布した溝状の遺構である。検出時に2箇所の遺構が一連のものと思

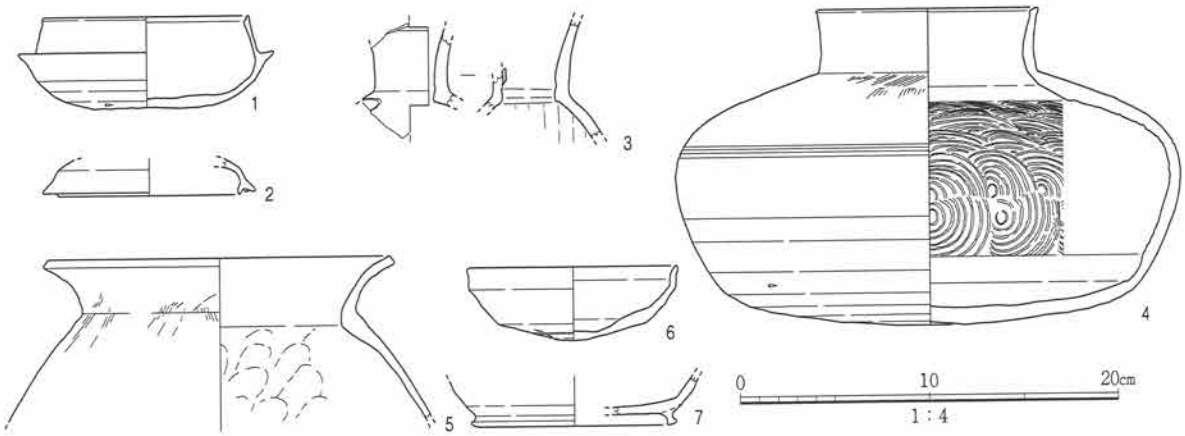
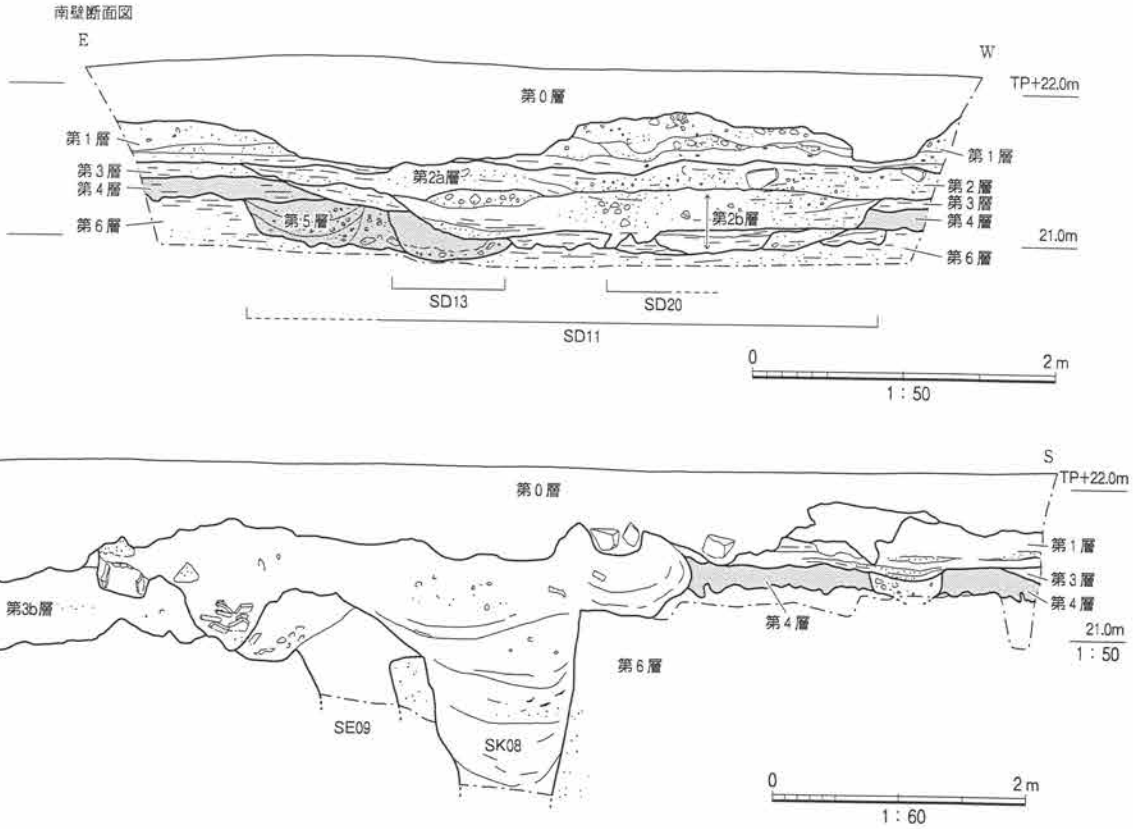


図5　出土遺物実測図(1)
SK33(1～4)、SD16(5・6)、SD28S (7)



われたのでN・Sと付したが、確かではない。SD28Nは南北2.5m以上、東西0.6m、深さ0.1mの土壙状の溝である。南北の中ほどで細くくびれる。SD28Sは南北1.2m以上、東西1.1m、深さ0.1mの土壙状の溝である。埋土はともに第5層である。埋土からは土師器･須恵器が出土した。7は須恵器杯Bで、高台は比較的高く斜めにふんばる。

SD16は調査区中央東部でN65°Eを向く溝である。幅0.57m、深さ0.16mで、長さ2.5m以上である。埋土は暗褐～褐色砂質シルトで、下部に地山偽礫を含む。埋土からは土師器・須恵器片が出土した。5は土師器甕で、頸部から「く」字状に屈曲し、口縁部が外反する。6は須恵器杯G身で、口縁部を直立気味に収める。底部は焼け歪んでおり、外面に「－」のヘラ記号を有する。

以上の遺構から出土した遺物は、SD33・16が難波Ⅲ古～中段階で7世紀前～中葉に属し、SD28Sの出土遺物は難波Ⅳ古段階で7世紀後葉～末に属するものであろう[佐藤隆2000]。

SP29・32は掘立柱建物を構成するとみられる柱穴である。SP29は調査区西南部で検出した柱穴で、掘形の一辺が0.68～0.72mの方形で深さは0.57mあり、掘形埋土は地山偽礫を多く含む細粒砂質シルトである。柱痕跡は太く、直径25cmあり、埋土は地山偽礫と柱が腐朽し残ったとみられる黒色材粒を多く含む細粒砂質シルトである。柱根が段階的に腐朽したとみられ、暗褐色と黒色材粒の多い暗灰黄色の部分が柱痕跡を斜に横切っていた(図7)。SP32は拡張区で検出した柱穴で、攪乱のために形状は不明確であるが、掘形の最大残存長は0.55mで、埋土は暗褐色泥と灰白色泥の地山偽礫が混在する客土の第5層である。柱痕跡の残存直径は16cmであり、埋土は黒色材粒を含む暗褐色泥であった。SP29とSP32の柱間距離は2.7～2.8mであり、柱筋方向はN86°Eである。SP29の埋土からは土師器

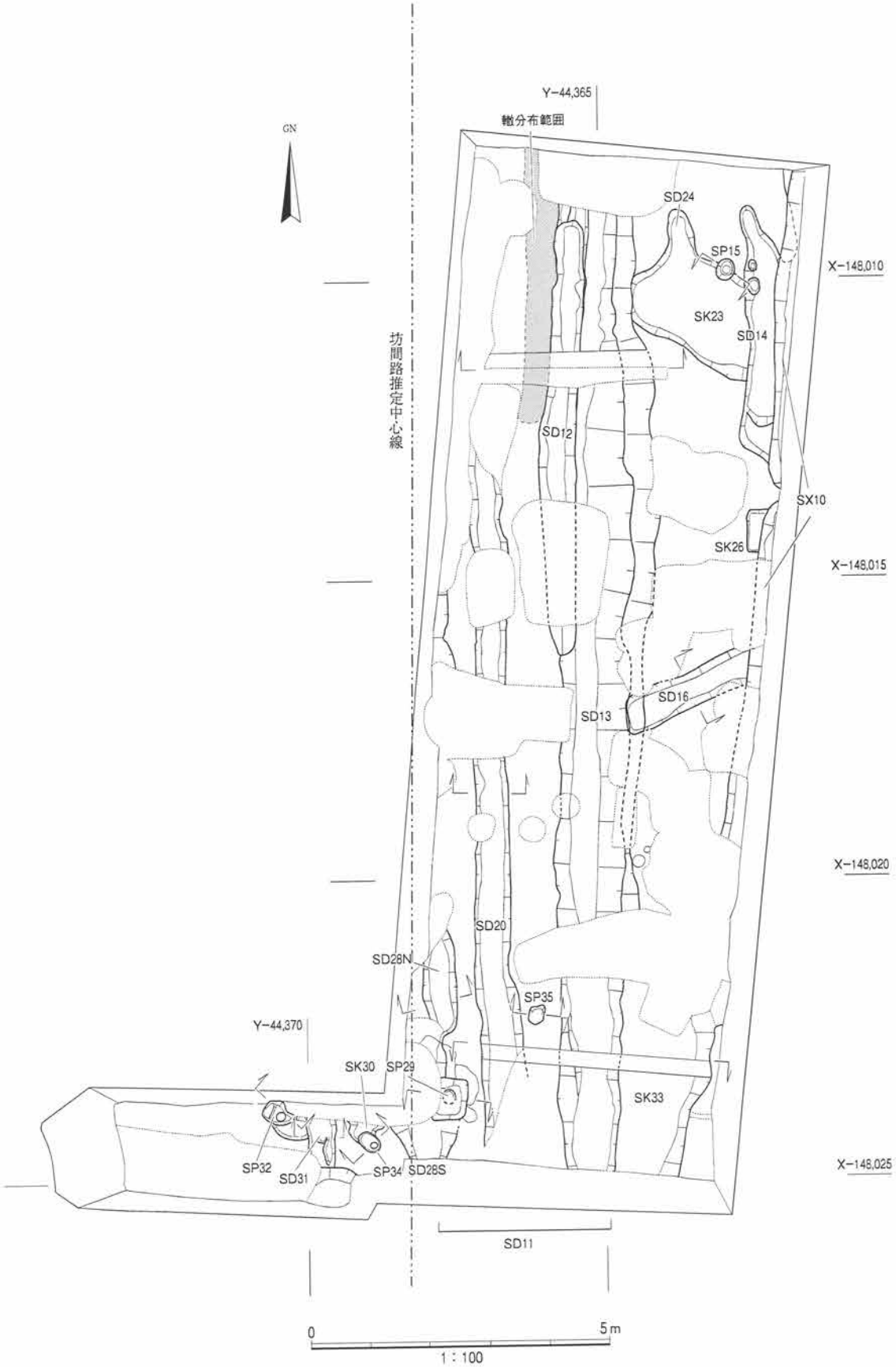


図6　古代・中世の遺構平面図

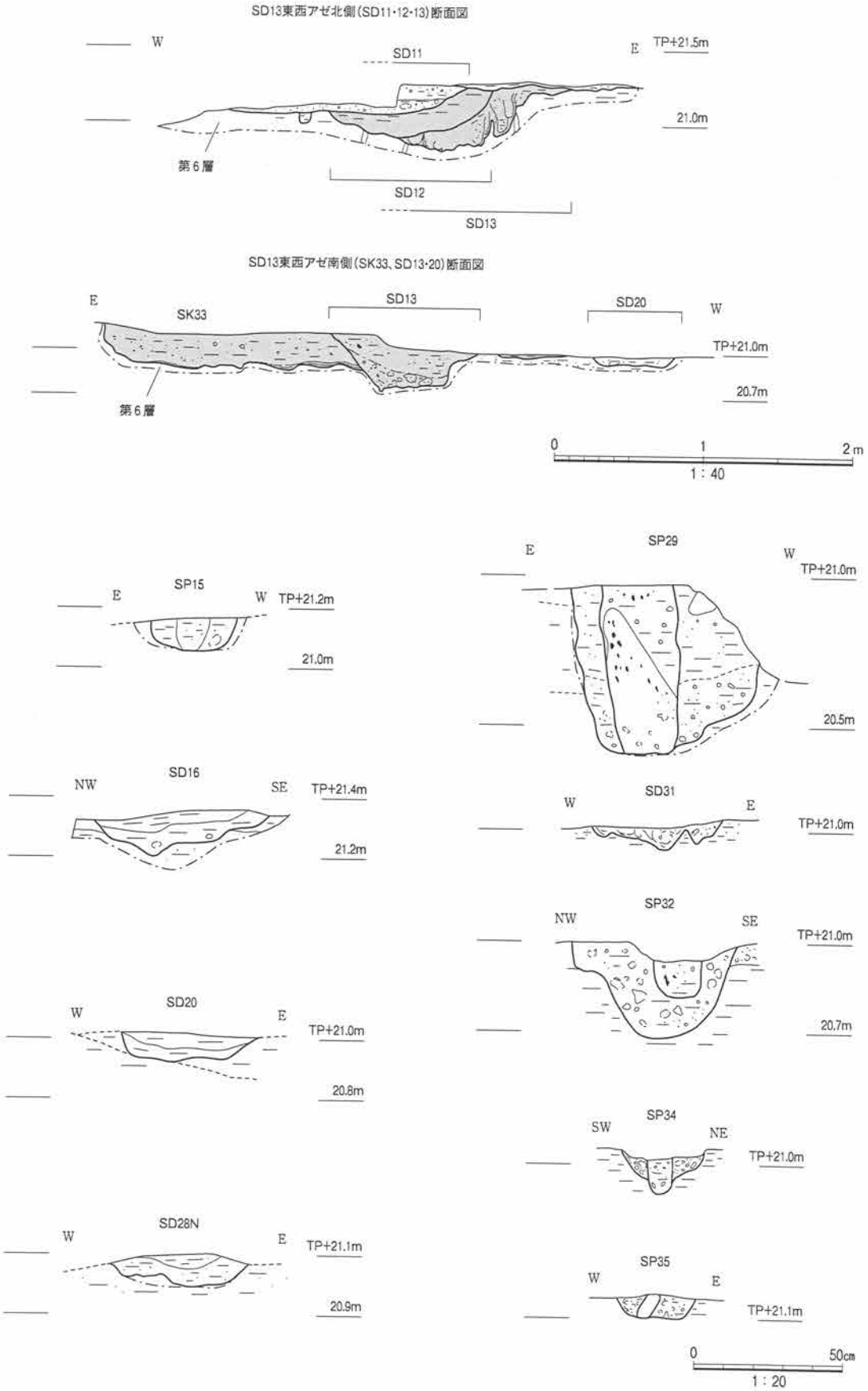

SD13東西アゼ北側(SD11・12・13)断面図
W
E
TP+21.5m
SD11
21.0m
第6層
SD12
SD13
SD13東西アゼ南側(SK33、SD13・20)断面図
E
SK33
SD13
SD20
W
TP+21.0m
20.7m
第6層
0
1
2m
1：40
SP15
E
W
TP+21.2m
21.0m
SP29
E
W
TP+21.0m
20.5m
SD16
NW
SE
TP+21.4m
21.2m
SD31
W
E
TP+21.0m
SP32
NW
SE
TP+21.0m
20.7m
SD20
W
E
TP+21.0m
20.8m
SP34
SW
NE
TP+21.0m
SD28N
W
E
TP+21.1m
20.9m
SP35
W
E
TP+21.1m
0
50cm
1：20

図7　遺構断面図

高杯・甕・竈片および須恵器壺片、榛原石が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SP34は拡張区で検出した柱穴で、掘形は長径0.40m、短径0.28mの長円形で、深さは0.10mであった。長軸は北西－南東方向に傾く。柱痕跡の直径は8cmで細く、自沈したらしく掘形底から約5cm下がっている。埋土は第5層で、掘形に地山偽礫が多く、柱痕跡には極めて少ない。埋土からは土師器細片および須恵器杯B片のほか、縄目タタキを施す平瓦が出土した。

SP15は調査区東北部で検出した柱穴で、掘形は長径0.35m、短径0.30mであった。深さは0.12mを検出したにすぎないが、最寄りの壁面の第6層の高度からみて、0.4m前後の深さがあったと推定できる。柱痕跡は直径12cmであった。埋土は第5層で、掘形に地山偽礫が多いが、柱痕跡には偽礫はなく、黒色材粒が含まれていた。出土遺物はない。

SP35は調査区南部で検出した柱穴で、掘形は長径0.34m、短径0.29m、深さは0.08mであった。また、柱痕跡は検出できなかったが、掘形底に長径10cm、厚さ4cmの亜角礫があり、根石であったと思われる。

（2）第5層上面の遺構とその遺物（図6～9）

SD13は調査区内を南北に直線的に延びる溝である。幅が1.4m、深さは0.4～0.5mである。埋土は第4b層の褐色（10YR4/4）～黒褐色（10Y3/2）粗粒～極細粒砂質シルトからなる堆積層であり、下部に加工時のものと思われる地山偽礫が多く含まれる。また、調査区中央付近では、溝底にウシとみられる偶蹄類の足跡が多数認められた。足跡は含水塑性変形しており、水の潰いた溝の中をウシが歩く風景が推定できる。SD13からは、古代の遺物としては土師器・須恵器・瓦のほか、榛原石・結晶片岩の板石、被熱した人頭大の花崗岩が出土した（図9）。13は土師器鍋である。体部外面にはユビオサエを施し、内面は横方向のナデで調整する。SD11・12から出土したものと破片が接合した。15～19・21は須恵器である。15は杯A蓋、16は同身である。15のかえりは下方へ突出する。17は杯B蓋、18は同身である。18の高台は高く、体部と底部の境よりも内側へ付く。19は杯蓋の大型品であろう。21は壺の底部で、内面には漆が付着することから、漆容器として使用したものであろう。以上は難波Ⅲ新段階～難波Ⅳ新段階のもので、7世紀中葉～8世紀初頭の時期幅を持つ。このほか、古墳時代の円筒埴輪22および、溝の廃絶後に入り込んだとみられる平安時代後半の土師器および瓦器片が出土している。23は土師器皿で、「て」字状口縁を有する。11～12世紀のものであろう。

SD13の西側の第6層上位の第4層基底面で、溝と並行する数条の轍を検出した（図6・8）。明瞭な轍は直線的に4.5m余り延びていた。この轍の断面は幅約5cm、深さ約6cmで角が少し丸みを帯びている。牛車の車輪の断面形状を表していると思われる。

轍内堆積物は黒褐色砂質シルトで第4～5層と類似する。轍の形状がほどよく保存されていることから、比較的早く埋没したものと考えられる。轍周囲の堆積物は、轍底へ収斂するよう変形しており、車輪が6cm以上めり込んだ際に周囲を引きずり込んだと推定できる。平面では、轍から20cm余り隔てた西側に、偶蹄類の足跡とみられる塑性変形が多数認められる。断面でも塑性変形した窪みが36cm離れた西側に2箇所に認められる。これらは牛車を引いたウシの足跡と推定できる。

轍には幅4cm程度のものもある。それより細い1～3cm幅のものが轍という確たる証拠はないが、轍のすぐ隣を車輪が通過したために、横からの加圧で変形した轍の可能性がある。

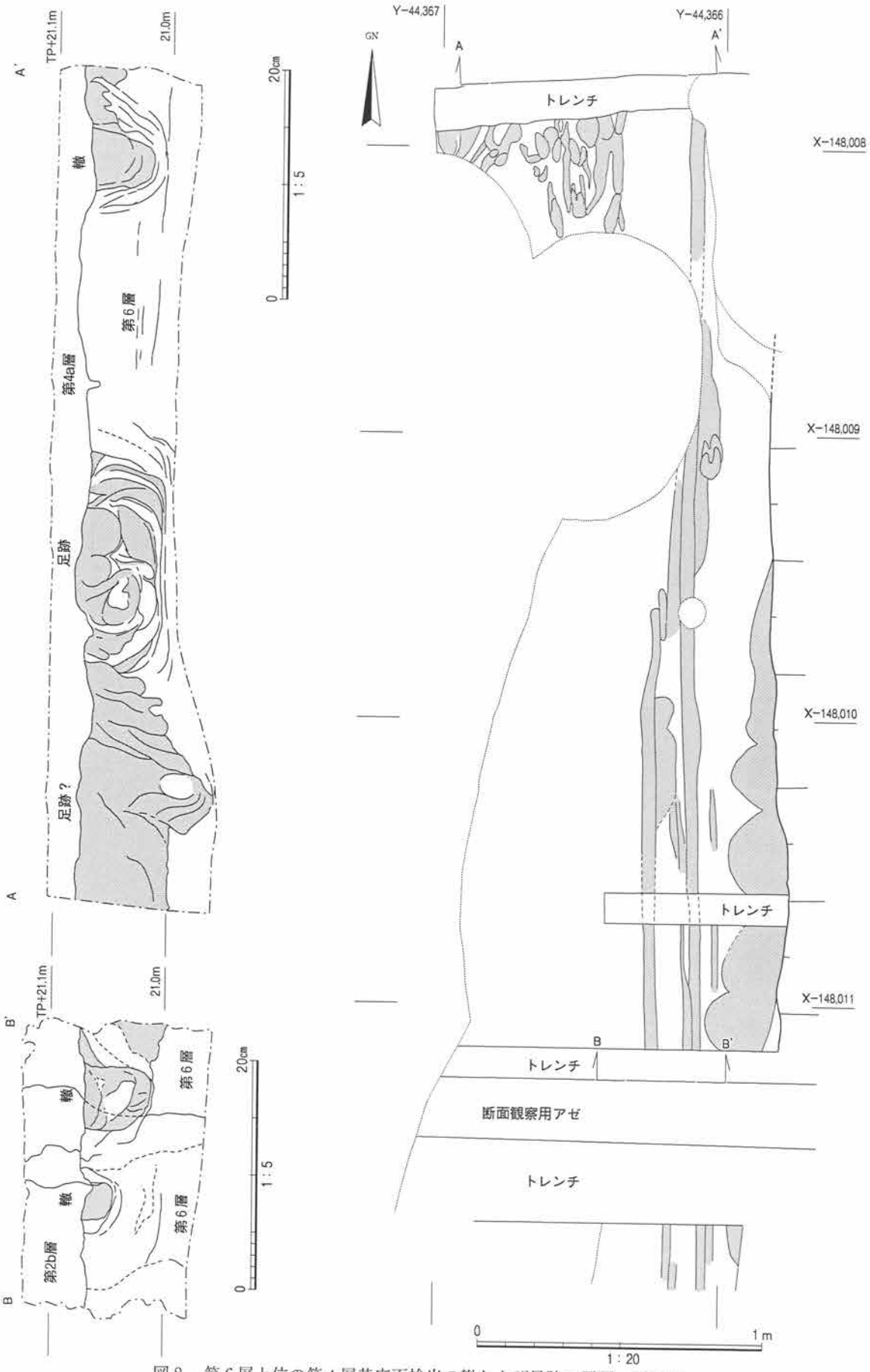


図8　第6層上位の第4層基底面検出の轍および足跡の平面・断面図

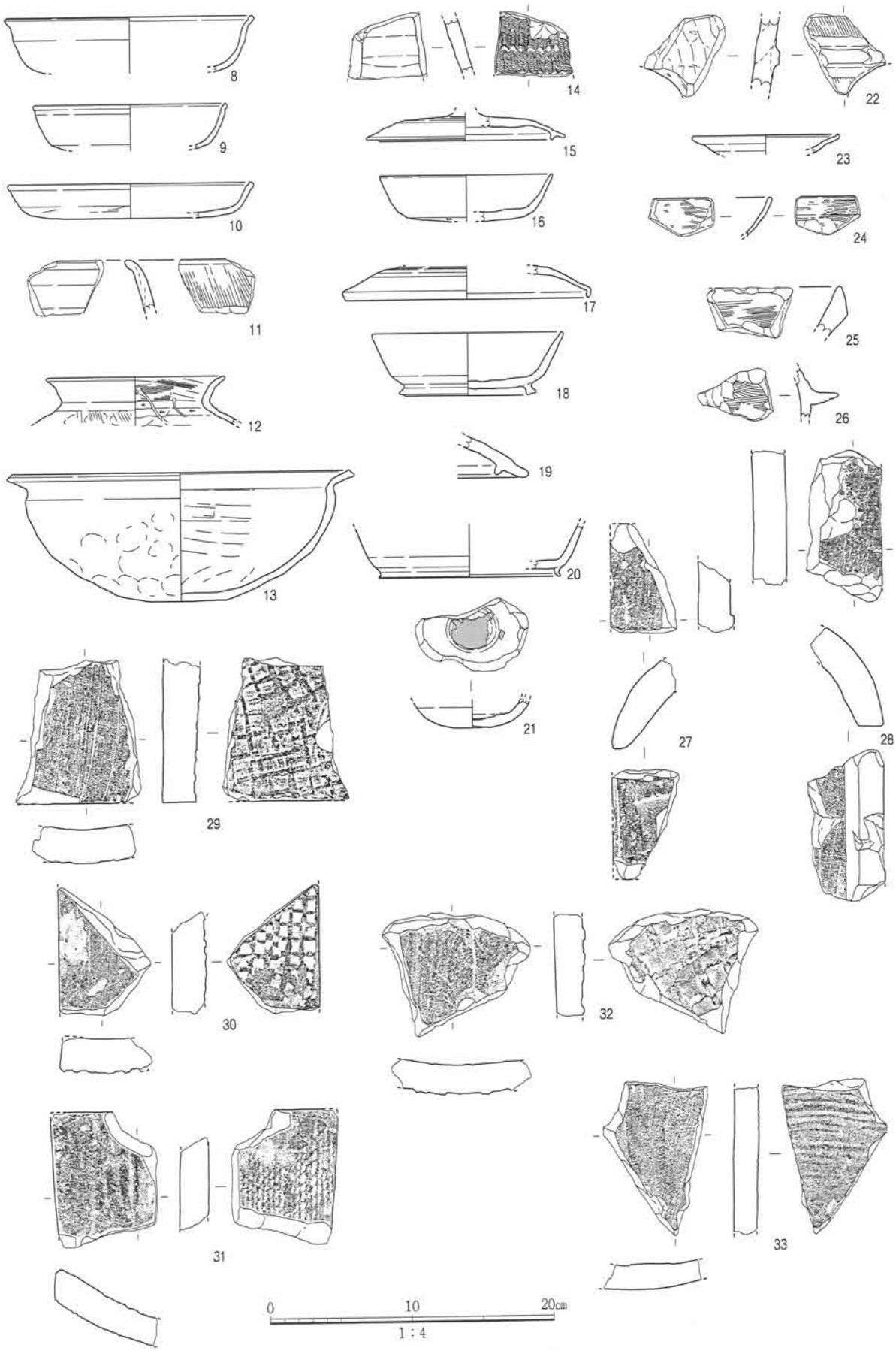


図9　出土遺物実測図（2）

SD12（9～11・30）、SD13（13・15～19・21～23）、SD20（12・32・33）、SD11（8・14・20・24～29・31）

ところで、第４層を埋土とするSD13の東側では遺構面がTP+21.2～21.5m、西側の轍を検出した遺構面がTP+21.0～21.1mで、東側が0.1～0.4m高い。これは上町台地の主稜線が調査地の東側にある地形と関係するとみられ、SD13を境に条坊内の造成地割が異なることを示唆する。

なお、SD13の南壁における溝底はTP+20.85mであり、これに対になる西側溝が分布すると推定された箇所は攪乱がTP+20.75～20.80mまで到達して、西側溝の有無は確認できなかった。

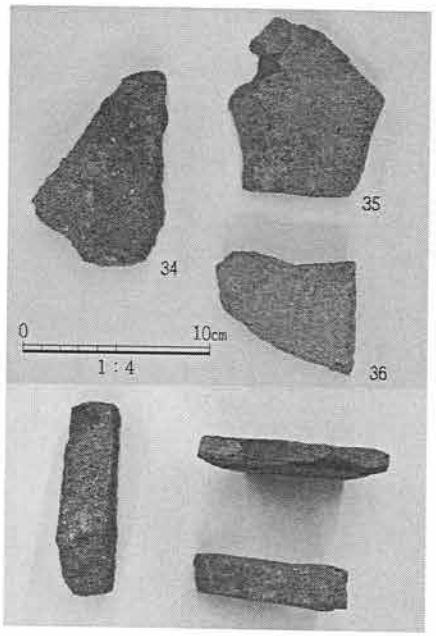


写真１　板状石
SD12(34・35)、SD11(36)

SD12は調査区北部でSD13の西寄りに重なる溝である。検出面での幅は0.5mだが、断面観察から本来は1.1m程度あったものと推定できる。深さは0.3m余りである。埋土の第4b層は暗褐色(10YR3/4)シルトの堆積層で、上半部にマンガン斑紋が顕著である。SD13の中心線から西へ0.3m寄って掘られているが、SD13が浚渫された際の溝と考えておく。北壁から約７m連続するが、南側で浅くなり、その先は不明となる。SD12からは土師器・須恵器・瓦・板状の石のほか、黒色土器が出土した。９～11は土師器である。９は杯Ａで口縁端部を外方へ軽くつまみ、外面には沈線が巡る。10は皿Ａで、口縁部の形状は９と類似する。11は移動式竈である。30は平瓦で、凸面には格子タタキを施し、瓦質焼成である。34・35は板状の安山岩(鉄平石)で、いわゆる榛原石である(写真１)。厚さはそれぞれ2.4cmと1.1cmである。これらのうち、９・10は難波Ｖ中～新段階で８世紀後葉～末、30は飛鳥時代の７世紀に遡るものとみられる。

その他、調査区東北部に、第４層を埋土とし、遺構の底だけが残ったSK23、北北西方向に延びがある溝状の窪みSD14・24などが見つかったが、切り合いなど詳細は不明である。

c. 中世の遺構と遺物(図６・７・９)

SD20はSD13の西側に並行して南北に直線的に延びる第4a層上面の溝である。幅は0.5～0.7m、深さ0.1～0.2mである。溝は徐々に埋っていったようで、埋土は暗褐～にぶい黄褐色(10YR３－4/1)中粒砂質シルトの堆積層で上方細粒化して粘土質シルトになる。調査区南部でSD11に壊されるが、南壁に溝底部分がわずかに残り、長さ12m以上が追跡できる。SD13との芯々間距離は1.5～1.6mである。埋土からは遊離資料であるが、土師器・須恵器・黒色土器および古代の瓦が出土した。12は土師器甕である。口縁部は短く外反する。32・33は平瓦である。32は外面には格子タタキを施し、33は外面に回転を利用した条線状のナデを施すものである。いずれも内面には模骨痕が見られ、須恵質で焼成はあまい。以上は７世紀中～後葉のものであろう。

SD31は拡張区に第５層上位の第３層基底面で検出した南北方向の溝である。幅0.5m、深さ0.1mで、長さは0.8m以上である。SD20との芯々間距離は3.2mである。

SX10は調査区の東際に西肩が分布した第4a層上面の遺構である。全容および詳細時期は不明であ

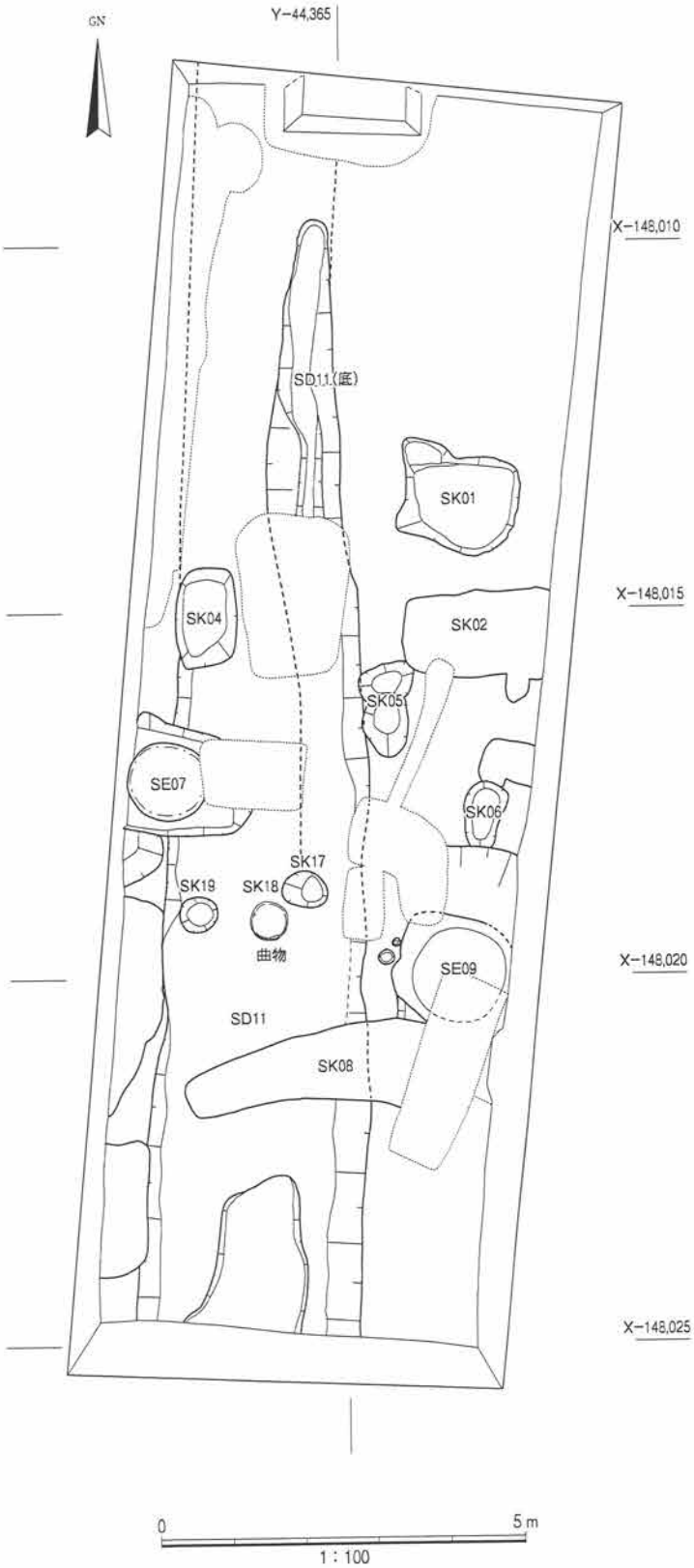


図10　近世・近代以降の遺構平面図

る。第3b層で埋る。試掘調査では土採り穴と考えられた。

d. 近世の遺構と遺物(図9・10)

SD11は下位のSD13・12・20の位置に重なり、ほぼ南北に延びる第3層上面の溝である。幅は2.7〜3.3m以上、深さ0.2〜0.4mで南側が深い。溝底は全般に平らであるが、調査区北部では上端が失われ、東寄りの深い部分のみが検出された。埋土下部は暗灰褐色粗粒〜中粒砂質泥の水漬きの機能時堆積層で、上部は礫混りシルト質粗粒〜細粒砂が主体の廃棄時の客土層である。下部下半に水漬きを示すラミナがあることから、客土は水中に搬入されたと考えられる。埋土の上部で18世紀の陶磁器類が出土したほか、下部より上部にかけて古墳〜室町時代の遺物が出土している。これらのうち、奈良時代以前の遺物としては土師器・須恵器・瓦・榛原石がある。8は土師器杯Aである。磨滅が著しく暗文の有無は不明である。14・20は須恵器である。14は古墳時代に属する器台である。20は杯Bである。高台はやや低く、底部の屈曲部付近に付く。28は瓦質焼成の丸瓦で、凸面には縄目タタキ、凹面には布目痕が残る。29・31は平瓦である。29は須恵質で、凸面には格子タタキを施す。31は土師質で、凸面に縄目タタキを施す。36は厚さ1.9cmの板状の凝灰岩である(写真1)。中世の遺物としては、黒色土器・瓦器・瓦質土器・備前焼・瓦がある。24は瓦器椀である。内外面ともに密なヘラミガキを施し、12世紀代に属するとみられる。25・26は瓦質土器である。25は口縁部が断面三角形で、内面にはハケ調整を施す。26は羽釜の口縁部で、鍔は短

い。体部内面はハケ、外面はヘラケズリで調整する。これらは15世紀後半に属するとみられる。27は瓦質焼成の丸瓦で、凸面をナデで仕上げる。

e. 近代以降の遺構と遺物(図10・11)

SE07・09は井戸、SK17・18・19は曲物の水溜めなどで、第2層上面の遺構である。SK18からは土師器灯明皿が複数枚出土しており、これらのうち1枚を図示した。37は底部外面を糸切りする土師器皿で、口縁部内面に煤が付着する。18世紀末以降であろう。

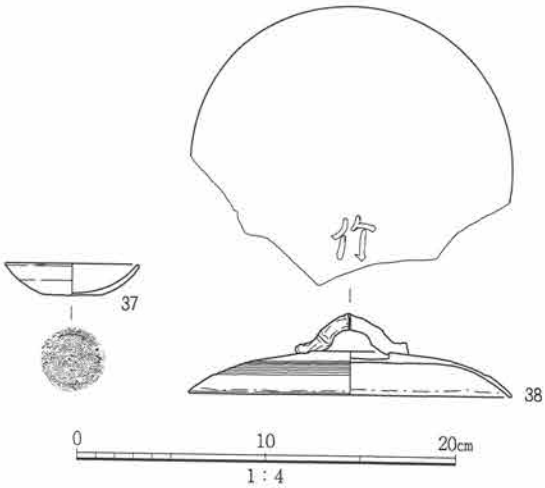


図11　出土遺物実測図(3)
SK18(37)、SK08(38)

SK01・02・04・05・06・08は第1層上面の土壙である。SK08には重機の爪跡があるなど、現代の掘削による土壙も含まれる。SK08からは肥前磁器染付碗のほか、関西系陶器が出土した。38は関西系陶器の鍋蓋で、竹を模した把手を付け、頂部付近に「竹」の文字を彫る。18世紀末～19世紀初頭であろう。

iii)坊間路について

[積山洋2013a]に基づき作図された[趙哲済・市川創ほか2014]によれば、本調査地には西三坊を東西に分ける坊間路が通る。SD13がその坊間路の推定中心線と並行していることから、SD13は坊間路の東側溝であった可能性がある。上述のように、溝を挟んで遺構面の造成地割が異なると推定されることもこの位置が地割境界であったことを支持する。対になる西側溝の位置は攪乱されていて存在が確認できなかったが、西側溝が存在したと仮定すると、坊間路の推定中心線はSD13の中心から約3.0m、SD13の西肩からは約2.5mになるから、東西側溝の芯々間距離は約6.0m、坊間路幅は約5.0mとなる。この路幅は、推定される大路幅が11m以上と推定されること[大阪文化財研究所2013]に比べればかなり狭い。当時の大路と間路の位置づけの違いを明瞭に示す差であろう。中世の平行するSD20·31の芯々間は約3.1m、路幅は約2.5mで大きな畔道程度に狭くなるが、坊間路中心線からの芯々間が1.6mと1.5 mであるから、古代の坊間路が踏襲されていた可能性がある。また、近世のSD11も、古代以来の溝や路の位置を地割区画として踏襲している可能性がある。

ところで、轍のある部分は当時の路面であったと考えられる。明瞭な轍はSD12の縁から30cm程度、SD13の緩やかな西縁からは数cmしか離れていない。本来のSD13では緩やかな斜面の上に当ることになる。そのような路肩際を牛車が通ることは普通ありえないと考えられる。しかし一方、そのような溝際の湿った軟弱な地盤の場所を車輪が通ったからこそ、轍が残ったとも考えられる。では、なぜそのような路肩を通ったのか。他の牛車を避けて路肩に寄ったのか、などと想像される。

路面の足跡にも注目しておきたい。精査で確認できた足跡は、北壁近くに5個と北壁から1.3m離れた位置に轍に重なった2個である。精査していないが、他にも足跡は少なからず残っていた。轍に重なる2個は形状および重複関係から見て前後肢の足印が重なったのであろう。足跡には足印長が10cm前後のものと、5cm前後のものがある。大きさからみて前者は成獣のウシと考えられる。後者は子ウ

シサイズだが、足印が浅かったなどの残存条件の問題かもしれない。興味深いことに、判定できた足跡はすべて北向きである。そうすると、当時、ウシは北向きに牛車を引っ張ったのか、と思われ、すなわち、条坊路を行く牛車は右側通行であったことを示すものか、と考えが及ぶ。

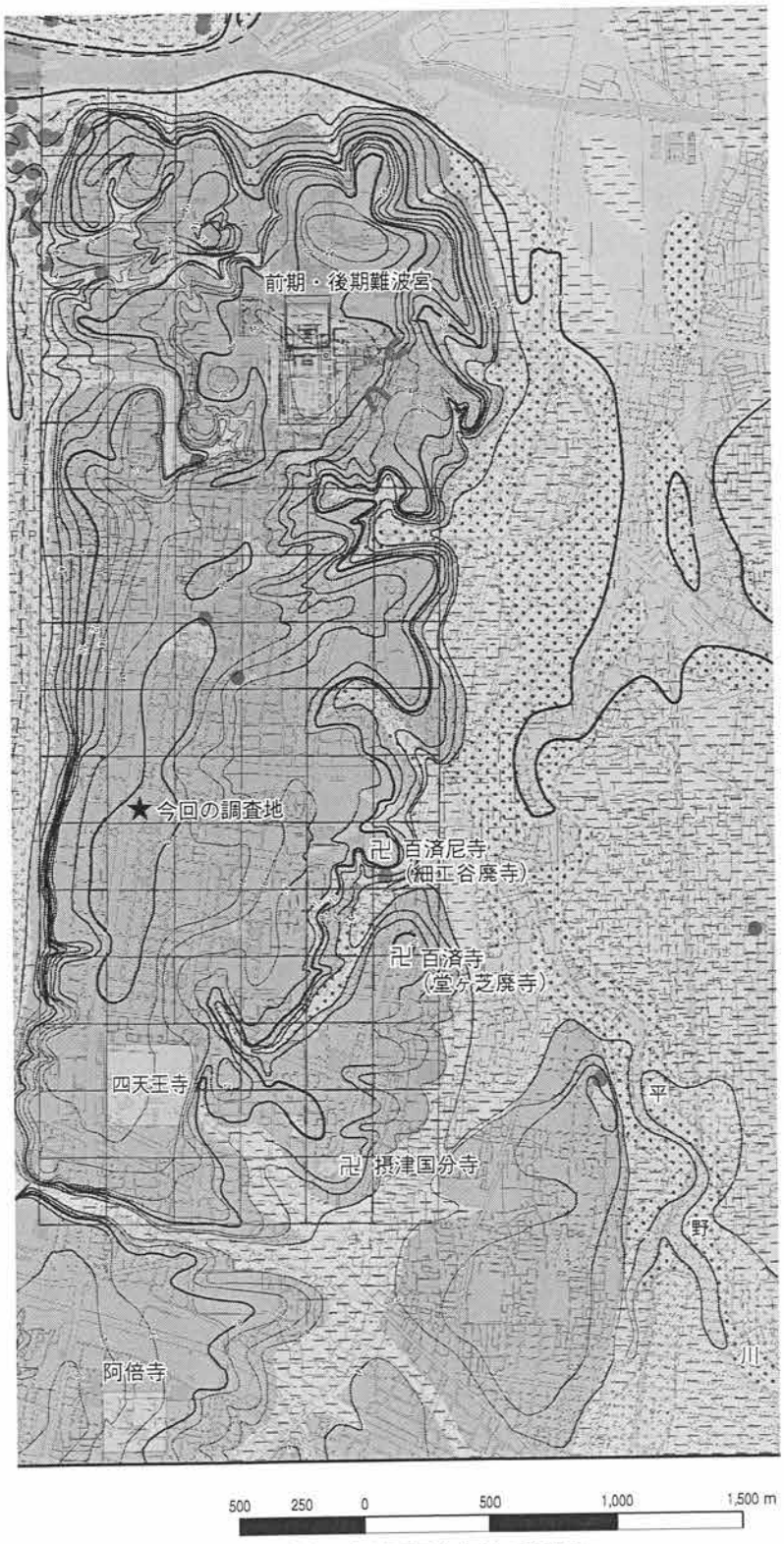


図12　古代の古地理図と今回の調査地

[趙・市川ほか2014]巻頭図版5から一部を抜粋して加筆

iv)古代の遺物について

今回の調査では、古代～近世の遺構から7世紀代に遡る瓦や漆容器と考えられる須恵器壺のほか、榛原石や凝灰岩の板石が出土したことが特筆される。瓦や漆容器は、付近に仏教関連施設や工房が存在したことを示唆する資料といえよう。また榛原石は、最近では奈良県小山田遺跡で出土例があり[奈良県立橿原考古学研究所2015]、大和盆地の寺院では飛鳥寺の金堂基壇や山田寺金堂の敷石のほか、6世紀末～7世紀中葉の終末期古墳でも石材として使用されている[関川尚功1994]。さらに、前期難波宮周辺では、宮殿ないしはそれ以前に存在した寺院での榛原石の使用が推定されている[大阪文化財研究所2012]。以上のことから、これらの遺物は、SD13が成立する以前の飛鳥時代において、近隣に仏堂や寺院ないしは官衙などが存在した蓋然性の高さを示すものといえよう。周辺の調査では、近世以降の土採りが広範囲に深くまで及んでいることが多く、これまで飛鳥時代に遡る遺構や遺物はほとんど確認されていなかった。そこで[趙・市川ほか2014]に掲

載された古代の古地理図でみると、今回の調査地は上町台地西側にある南北方向の主稜線上に位置する(図12)。当該期において距離的に最も近い寺院は、東へ0.8km離れた細工谷廃寺が挙げられる[積山2013b]。しかし、比高が約10mと大きいことを併せて考えると、飛鳥時代においてこれとは別の施設が台地の稜線上に存在した可能性を指摘しておきたい。

3)まとめ

本調査地では、当初の予想に反して古代以降の遺構・遺物がよく保存されていた。おもな結果を箇条書きにまとめておく。

・後期難波京の西三坊の坊間路が本調査地を通ることが予測されており、その東側溝とみられるSD13を検出した。ただし、対になる西側溝の有無は確認できなかった。

・坊間路推定中心線からの距離をもとに計算すると、路幅は5.0mと推測され、大路の復元幅より格段に狭いものとなる。

・SD13の西側の一部は路面があまり攪乱されることなく良好に保存されていて、轍や牛車を引いたとみられるウシの足跡が検出された。

・中世のSD20は、坊間路を踏襲した路の東側溝であった可能性があり、SD31がその対になる西側溝であった可能性がある。もしそうなら路幅は2.5mと狭い。

・近世のSD11もSD20に重なるから、古代以来の坊間路の位置が地割の区画として踏襲されていた可能性がある。

・出土遺物から飛鳥時代において仏堂ないしは寺院が近隣に存在した可能性が指摘される。

以上のように、当該地は難波京の条坊路に係る情報がよく残る地域であることが明らかとなった。条坊路の実態解明に今後の調査が期待される。

なお、本調査地の座標は正確な測量成果に基づいていないので、今後、検証する必要がある。

註)

(1)難波京の条坊路の名称は定まったものがない。本報告では坊路の基線を「朱雀路」とし、その東西に900尺(約265m)間隔で設けられた南北道路を「西一坊路」「東二坊路」などとし、各坊を二等分する南北道路を「坊間路」と呼称する。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04－2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203－210

2010a、「上本町遺跡発掘調査(UH08－4)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.343－356

2010b、「天王寺区上本町六丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH08－11)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

(2008)」、pp.379－387
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「天王寺区上汐三丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH10－３)報告書」：『平成22年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.311－317
2013、「上本町遺跡発掘調査(UH11－15)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.439－444
大阪文化財研究所2012、『難波宮址の研究』第十八、pp.197－202
2013、『天王寺区上汐三丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH13－３)報告書』、12ps.
佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：『難波宮址の研究』第十一、pp.253－265
積山洋2013a、『古代の都城と東アジア　大極殿と難波京』清文堂出版
2013b、「飛鳥時代難波の宗教環境」：『古代都城をめぐる信仰形態』都城制研究(７)、pp.19－38
関川尚功1994、「考古学からみた榛原石」：奈良県立橿原考古学研究所・塚梛墳研究会・由良大和古代文化研究会編『舞谷古墳群の研究』、pp.121－126
趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」：大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』巻頭図版１－７・pp.９－22
奈良県立橿原考古学研究所2015、『小山田遺跡第５・６次調査現地説明会資料』

調査区全景
（南から）

調査区南部拡張後（南から）

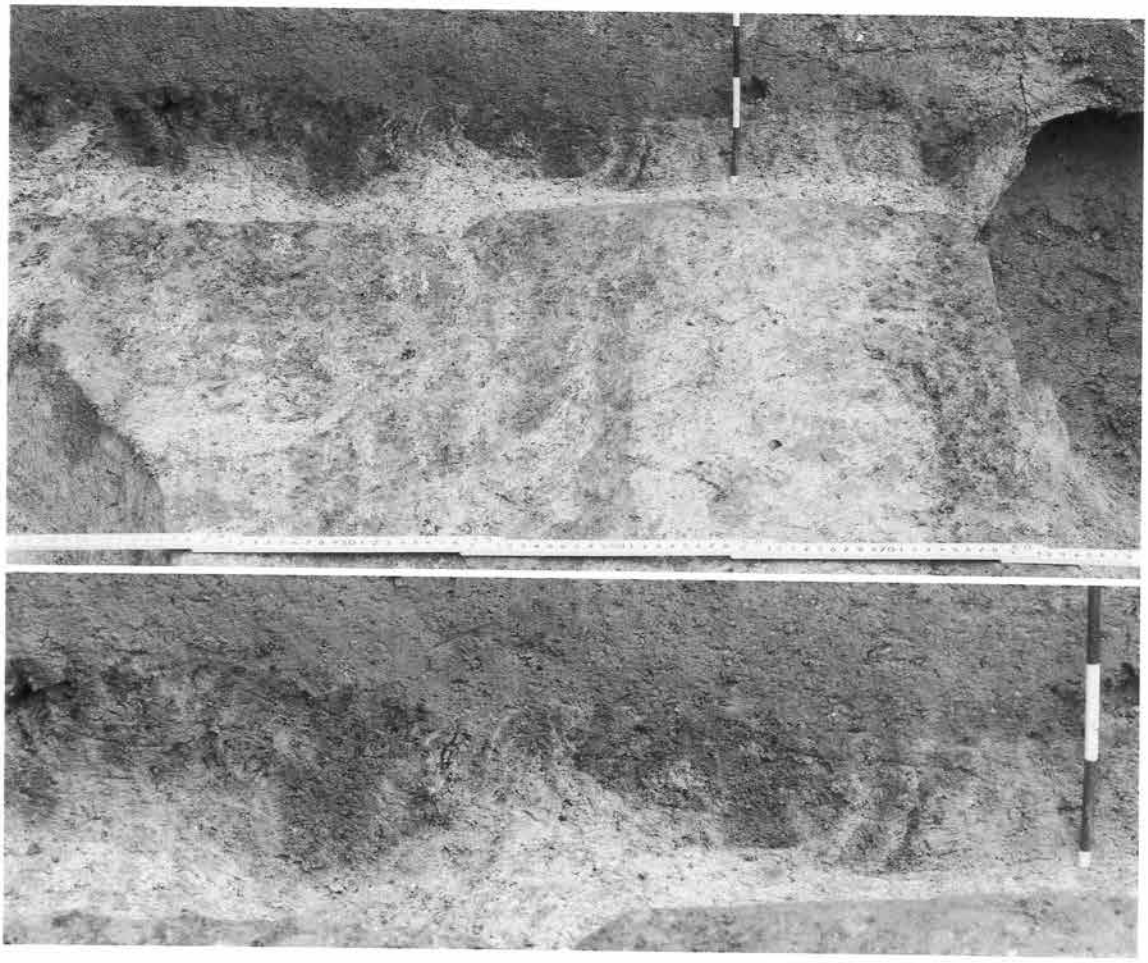
図版二

南壁地層断面
（北から）

東壁地層断面および
遺構検出状況
（北西から）

SD11・12・13の重なり
地層断面
（南から）

古代の轍(南から)



轍と足跡の断面(北壁：南から)

天王寺区上汐五丁目６－７における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH15－３)報告書

調査個所	大阪市天王寺区上汐5丁目6－7
調査面積	40㎡
調査期間	平成28年2月15日～2月19日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、松本啓子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は大阪を南北に貫く上町台地の尾根付近にあって、弥生時代～近世の集落遺跡である上本町遺跡の南半部に位置する(図1)。調査地の標高は21mである。上本町遺跡は古代の難波京の南部に該当し、周辺の調査でもNW81－4、UH07－1・2、UH11－12、UH13－6次調査で奈良時代の溝や柱穴、土壙、井戸などがみつかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983・2008b・2009、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、大阪文化財研究所2012]。また、UH07－3・08－10、US04－1・06－2次調査では、正方位に近い中世の溝が検出され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005・2008a・2008c・2010]、古代から続く大寺院・四天王寺の寺内町の様相も窺えた。本調査でも同様の時期の遺構・遺物の検出が期待された。

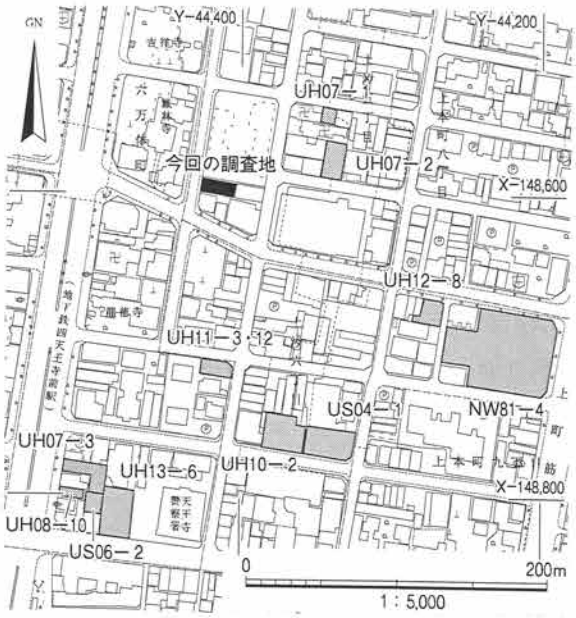


図1　調査地位置図

平成28年2月9日に大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約0.5m以下で本格的な発掘調査を要する中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査を行うことになった。

調査は平成28年2月15日から開始した。

東西8m、南北5mの調査区を設定し(図2)、地表下0.5mまでを重機を用いて掘削し、その後、人力による掘削を行った。層序に応じて順次掘り下げて遺構・遺物を検出し、適宜実測図や写真撮影によって記録しながら、段丘構成層の第3層上面(地表下1.2m)まで調査した。その後、後述の井戸SE113を、安全に配慮しつつ重機も駆使してTP+17.5mまで掘り下げ、記録をとった。2月19日には埋戻しを行い、現地における全ての作業を終えて調査を完了した。

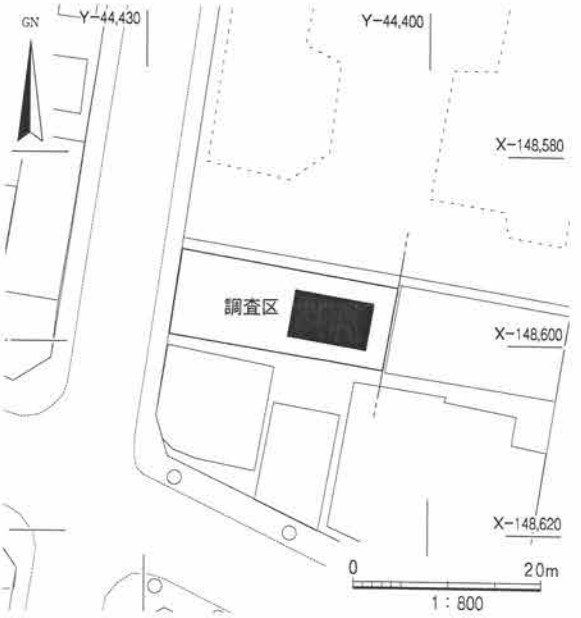


図2　調査区配置図

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地内の現況の標高はTP+21.1m前後で、周辺も含め、現地表はほぼ平坦になっている。

表土の下の地層は3層に分かれる。

第1層：本層は2層に分かれる。第1a層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト層で、層厚は最大20cmある。近世末の整地層である。本層で埋まる土壙や小穴が第1b層上面で見つかった。

第1b層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で、炭が混る。最大層厚25cmの近世の整地層である。本層上面で土壙1基、本層で埋まる土壙を第2層上面で検出した。

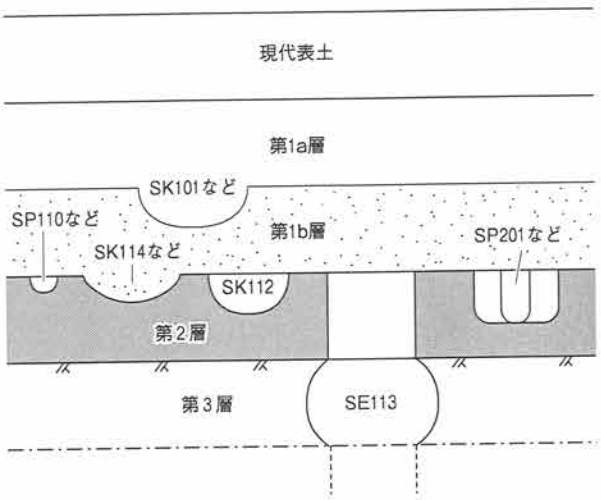


図3　地層と遺構の関係

第2層：褐色(7.5YR4/6)粘質シルト層で、炭・焼土が混る。層厚は最大40cmで、整地層である。本層上面で柱穴・井戸・小穴を検出した。

第3層：上部が明褐色(7.5YR5/8)シルト質粘土層(第3a層)で、その下に浅黄色(5Y7/3)粗粒～細粒砂層(第3b層)が堆積していた。本層上面からの乾痕が観察された。層厚は40cm以上ある。段丘の構成層で、本層上面で遺構は検出されず、本層出土の遺物もない。

ii)遺構と遺物(図5～10)

各層上面の遺構を、古いものから順に記述する。

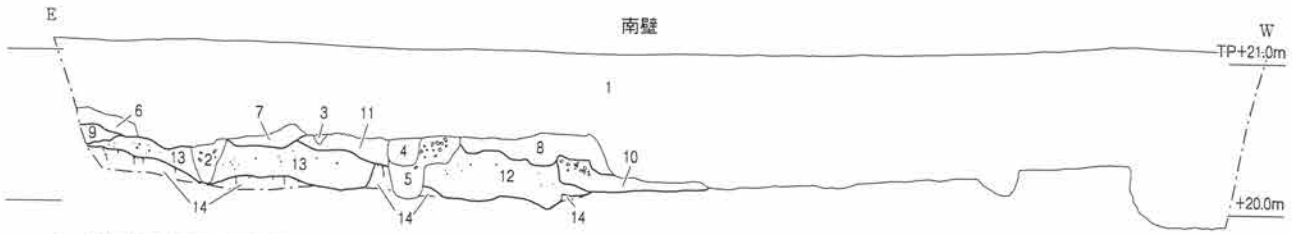
第2層上面(図5～9)

第2層上面で柱穴SP201～205・207、井戸SE113、土壙SK112・114と小穴を検出した。

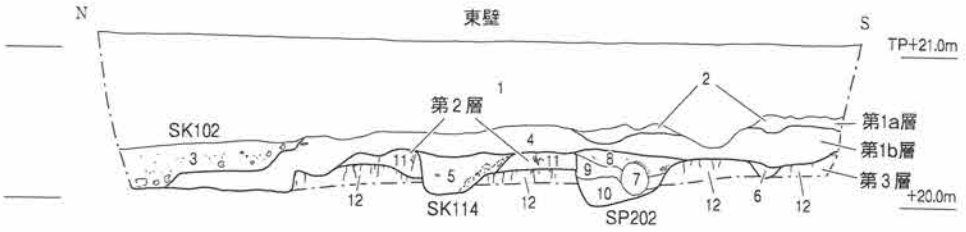
SP201は近世の土壙SK102の底面で見つかった柱穴で、大半は既に失われている。掘形の平面形は隅丸方形に近く、南北が約1.0m、東西約0.7mで、直径18cmほどの柱抜取穴がある。掘形の埋土は残っておらず、柱抜取穴の埋土となる褐色(7.5YR4/4)細粒砂混りシルト質粘土が5cmほどの深さで残っていた。柱抜取穴から土師器や須恵器、内黒の黒色土器の破片が出土した。9世紀後半頃までには柱が引き抜かれたとみてよい。

SP202は東壁際で見つかった柱穴で、掘形の平面は長方形か楕円形、掘形の規模は東西0.7m以上、南北約0.6m、深さ約0.4m分が残っていた。柱抜取穴は直径約20cm、深さ約0.2mであった。掘形の埋土は褐色(7.5YR4/4)シルト質粘土が主体で、炭・粗粒砂が混じり、マンガン斑がみられた。柱抜取穴の埋土は細粒砂混りシルト質粘土である。柱抜取穴から図8に示した8世紀の土師器杯1や須恵器とともに内黒の黒色土器の破片が出土し、掘形からは土師器の破片が出土した。9世紀後半頃の遺構と考えられる。

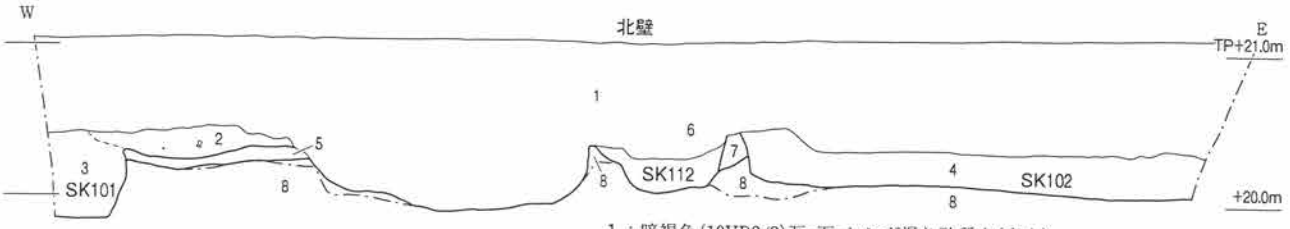
SP203はSK102の西肩で見つかった柱穴で、大半をこの土壙によって削られている。柱穴掘形の平面は隅丸方形とみられ、その規模は東西0.4m以上、南北約0.6mで、残存する深さは約0.3mである。



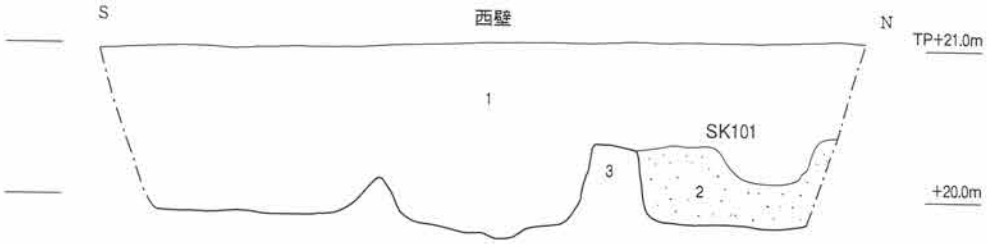
1：暗褐色(10YR3/3)瓦・礫・石・レンガ混り砂質土(表土)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘土偽礫・細粒砂混り粘土質シルト(攪乱)
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混り粘土質シルト(攪乱)
4：暗褐色(10YR3/3)炭・焼土・砂礫混り粘土質シルト(攪乱)
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)炭・粘土混り砂質シルト(攪乱)
6：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト(第1a層)
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂(SK105)
8：灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト(SK105)
9：オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭・細粒砂・混りシルト質砂(第1b層)
10：灰黄褐色(10YR4/2)炭・粘土混り砂質シルト(第1b層)
11：褐色(7.5YR4/4)炭・焼土・細粒砂混り粘土質シルト(第1b層)
12：褐色(7.5YR4/6)炭・焼土混り粘土質シルト(第2層)
13：明褐色(7.5YR5/6)炭・焼土混り粘土質シルト(第2層)
14：明褐色(7.5YR5/8)シルト質粘土(乾痕あり)(第3層)



1：暗褐色(10YR3/3)礫・石・漆喰・レンガ混り砂質土(表土)
2：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト(第1a層)
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)地山ブロック・炭混り砂質粘土(SK102)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭・粗粒砂混りシルト質砂(第1b層)
5：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂(炭・焼土を含む)(SK114)
6：褐色(10YR4/4)炭・土器混り砂質粘土(小穴)
7：褐色(10YR4/4)細粒砂混りシルト質粘土(SP202柱抜取穴)
8：褐色(10YR4/4)炭・土器・砂質粘土～砂質シルト(SP202掘形)
9：褐色(10YR4/4)炭・焼土・小礫混り粘土質シルト～シルト質粘土(SP202掘形)
10：褐色(7.5YR4/4)炭・粗粒砂混りシルト質粘土(SP202掘形)
11：黄褐色(10YR5/6)シルト混り粘土(乾痕)炭・焼土(第2層)
12：褐色(10YR4/6)シルト質粘土(乾痕あり)(第3層)



1：暗褐色(10YR3/3)瓦・石・レンガ混り砂質土(表土)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト(第1a層)
3：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト(SK101)
4：にぶい黄褐色(10YR4/3)第3層偽礫・炭混り砂質シルト(SK102)
5：にぶい黄褐色(10YR4/3)炭混りシルト質砂(第1b層)
6：暗褐色(10YR3/3)炭・第3層偽礫・砂混りシルト～シルト質砂(SK112)
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)炭混りシルト質粘土(第2層)
8：黄褐色(10YR5/6)シルト混り粘土(乾痕あり)(第3層)



1：暗褐色(10YR3/3)瓦・石・レンガ混り砂質土(表土)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～中粒砂混りシルト質砂(SK101)
3：明褐色(7.5YR5/6)シルト質粘土(第3層)

図4　地層断面図

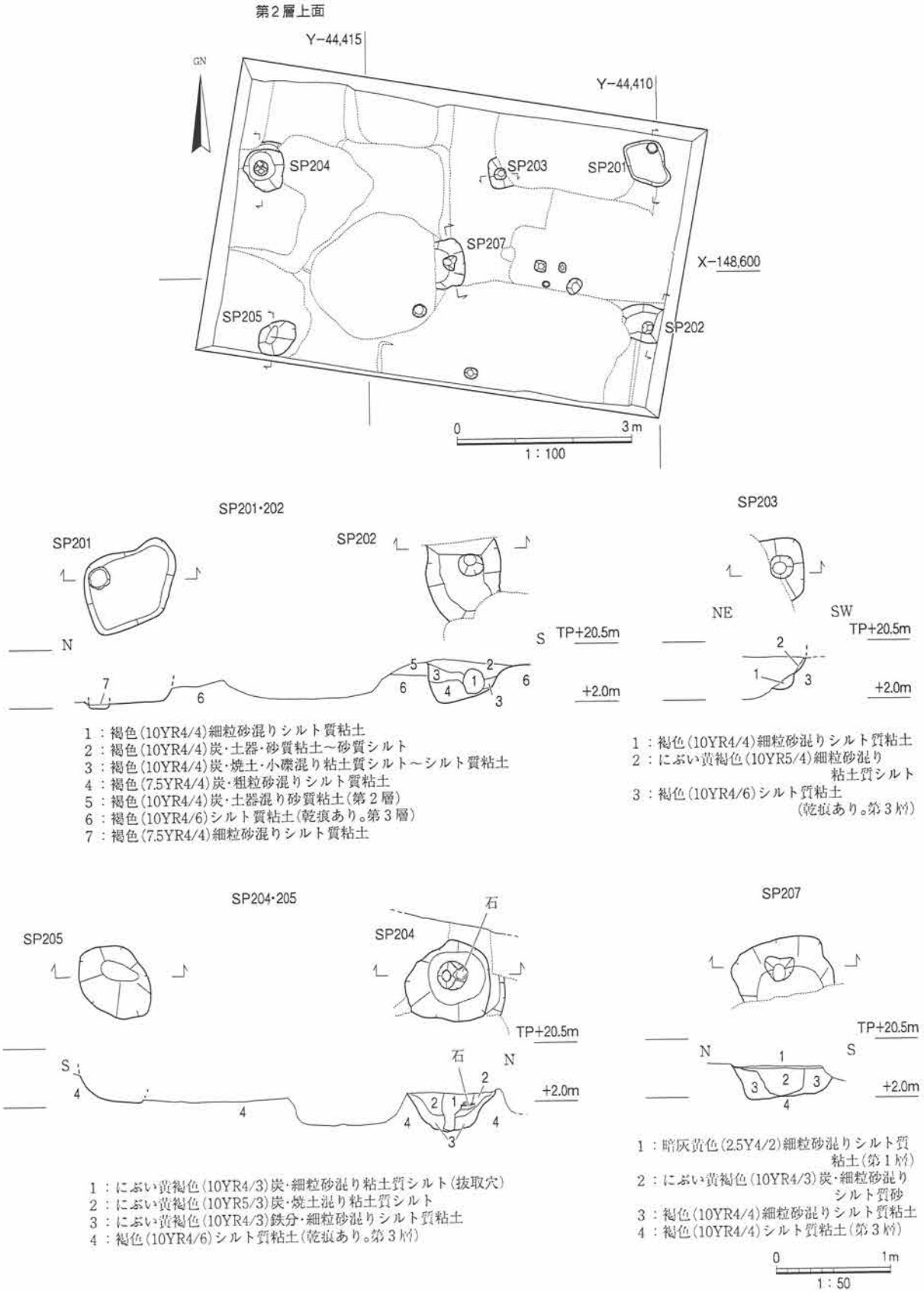


図5　第2層上面の遺構(柱穴および小穴)

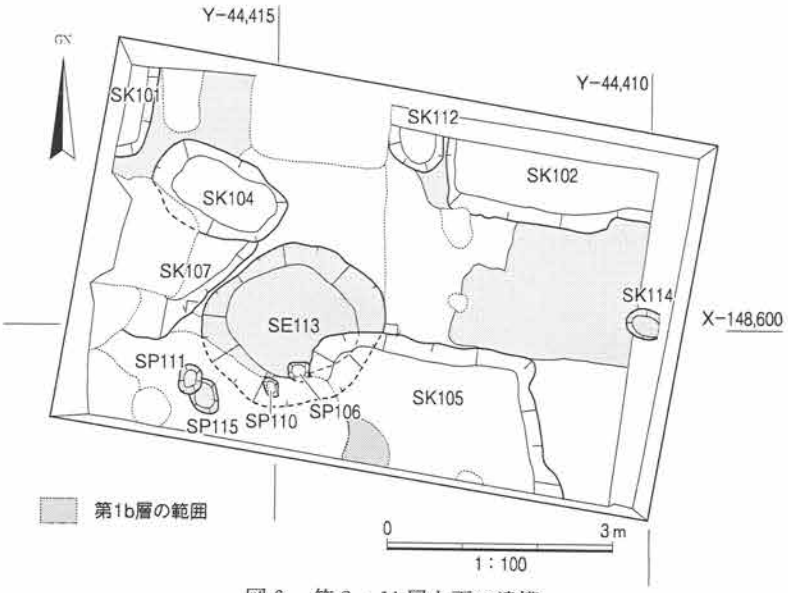
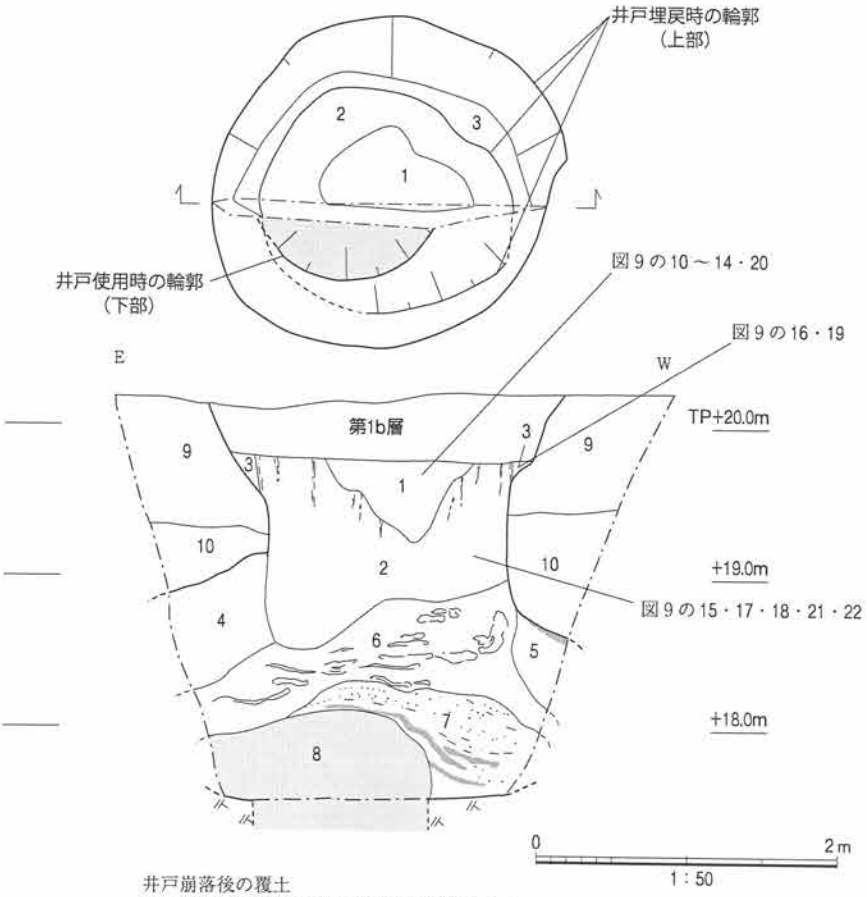


図6　第2・1b層上面の遺構



井戸崩落後の覆土
1：暗褐色(10YR3/3)炭・焼土混り砂質シルト
2：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト(灰白色シルトの乾痕あり)
井戸側設置土
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)炭・焼土・砂礫混り砂質シルト
井戸使用時の崩落土
4：褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土
5：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土(上部暗色化)
6：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混りシルト(粘土の偽礫を含む)
7：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂(鉄分・マンガンが帯状に分布)
8：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土
台地構成層(地ⅱ)
9：黄褐色(10YR5/6)細粒砂混りシルト質粘土(乾痕顕著、第3a層)
10：浅黄色(5Y7/3)粗粒～細粒砂(第3b層)

図7　SE113

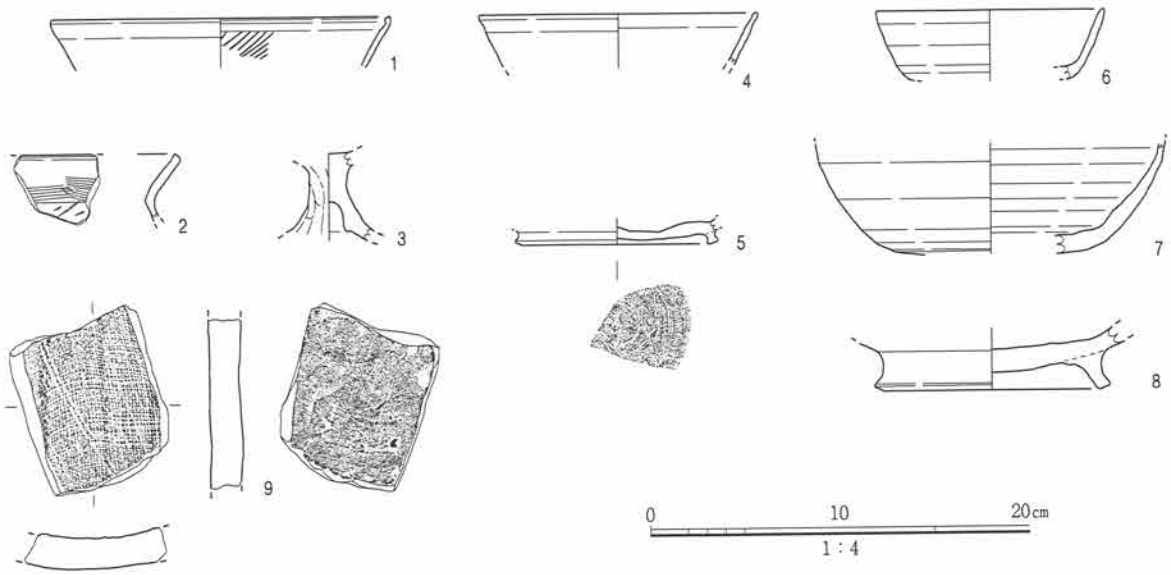


図８　古代の遺構出土遺物

SP202(１)、SP204(２～５・７～９)、SP204柱抜取穴(６)

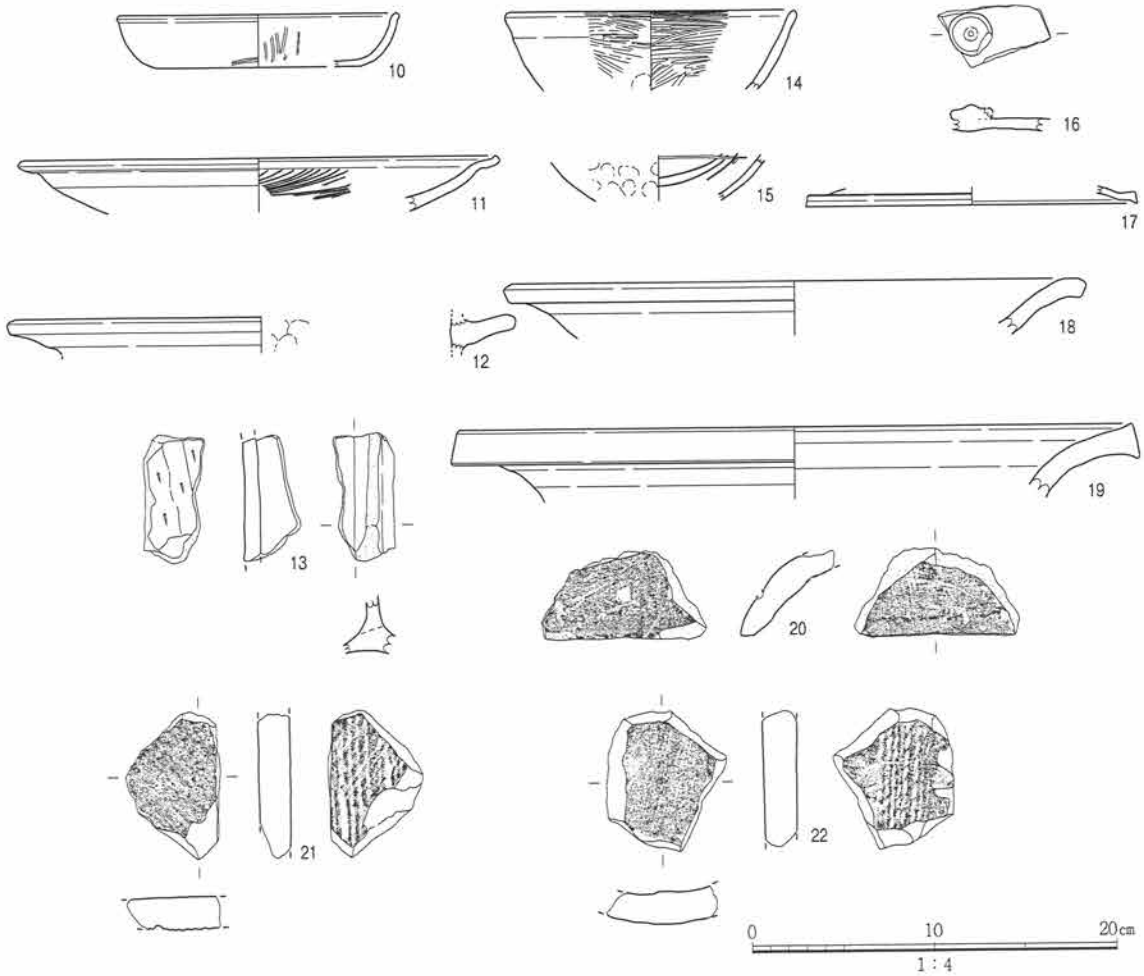


図９　SE113出土遺物

井戸掘形：図７－３層(16・19)、埋土：図７－２層(10～14・20)、埋土：図７－１層(15・17・18・21・22)

柱抜取穴は直径約20cm、深さ約0.1m分が残っていた。掘形の埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)の細粒砂混り粘土質シルトである。柱抜取穴の埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂混り粘土質シルトである。須恵器の破片が出土した。

SP204は調査区の北西部で見つかった。柱穴掘形の平面は隅丸方形で、その規模は東西0.7m、南北0.85mで、深さは約0.3m残存していた。柱抜取穴は検出面で直径約25cm、底部で直径8cmである。抜取穴の径が広がるところの掘形埋土との境目に平たい石が平坦面を上にして置かれていた。柱の据え直しがあったのかもしれない。掘形の埋土は上部が炭・焼土が混るにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト、下部がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土で鉄分・細粒砂が混る。柱抜取穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)の粘土質シルトで炭・細粒砂が混る。掘形、抜取穴の埋土にはマンガン斑が顕著にみられた。土師器の破片とともに8世紀の須恵器6が出土した。柱穴半裁時に図8に示した土師器の甕2・高杯3、須恵器の杯4・5、壺7・8、平瓦9などとともに黒色土器の破片が出土したので、柱穴の年代の下限は9世紀後半までに求められよう。

SP205は調査区南西隅の攪乱の側面で見つかった柱穴で、大半が削られていた。柱穴掘形の平面は現状では楕円形で、南北約0.8m、東西約0.6mで、深さ約0.2mほどであった。柱やその抜取穴は不明である。掘形の埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)の細粒砂混り粘土質シルトである。出土遺物はない。

SP207はSE113の東肩で見つかった柱穴で、大半をこの井戸によって削られている。柱穴掘形の平面は隅丸方形で、南北0.8m、東西0.5m以上で、深さ0.3mほどが残っていた。柱抜取穴は最大径40cmほどの不整形な穴である。上部が南に広がっているので南向きに柱を抜き取ったように見える。掘形の埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂混りシルト質粘土、柱抜取穴の埋土は炭・細粒砂が混るにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂で、マンガン斑がみられた。出土遺物はない。

これらのうち、SP201・202・204・205は規模や埋土、出土遺物がよく似ており、同時期のものと考えられる。各柱穴間は後世の遺構や攪乱により当時の地面が削り取られているため、この間に柱穴があったかどうかの手がかりはないが、柱推定位置を繋ぐと南北約3.1m、東西約6.6mの長方形の配置となる。また、この柱筋は北で西に少し振るが、ほぼ正南北に近い。同じ建物の柱穴、あるいは東西に並ぶ2棟の建物の側柱、南北方向の2列の柵などの可能性が考えられる。

このほか、直径0.1～0.2m、深さ5～10cmほどの小穴が調査区南東部で6個見つかった。

SE113は調査区南西部にある直径約2.4mの円形の井戸である。検出面から約2.7m下までを調査したが、崩落の危険があって完掘できなかった。崩落はこの井戸を使用している最中に起きたとみられ、検出面以下約1.0mから約1.7mの間に段丘構成層の第3b層が倒れ込んでいた。下部の直径とした約1.2mが本来の井戸の規模で、この部分には黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土(図7－8層)が堆積していた。崩落後は井戸の機能を果たさなくなっていたようで、暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト(図7－2層)、暗褐色(10YR3/3)炭・焼土混り砂質シルト(図7－1層)の順に埋め戻され、その上を第1b層が覆っていた。もともとは井戸側が設置されていたようで、埋戻し土の外側に炭・焼土・砂礫の混るにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト(図7－3層、井戸掘形埋土)が井戸の壁面に貼りついていた。

遺物は図7－1～3層から出土した。これらのうち、井戸掘形埋土(図7－3層)から出土した須恵

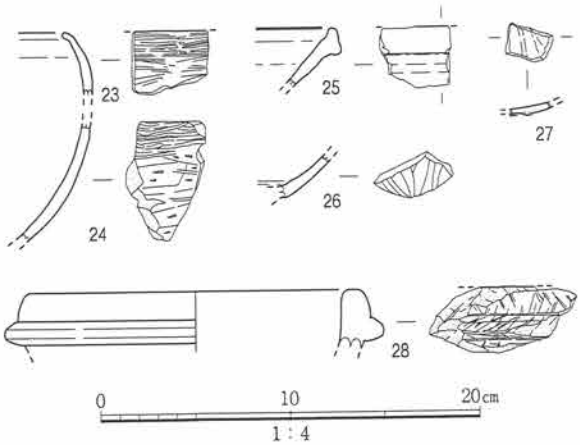


図10　第1b層とSK102出土遺物
第1b層(23～27)、SK102(28)

器蓋16・甕口縁部19、図７－２層出土の土師器杯10・高杯11・羽釜12・竈13、瓦器椀14、丸瓦20、図７－１層出土の須恵器蓋17・甕口縁部18、瓦器椀15、平瓦21と丸瓦22を図９に示した。奈良時代などの古い遺物も多いが、各層のもっとも新しい遺物の年代をみると、掘形埋土出土の蓋16が９世紀初頭、図７－２層出土の瓦器椀14が12世紀初頭、図７－１層出土の瓦器椀15が13世紀前半頃であるので、井戸開削の時期の上限はSP201などからなる建物の廃絶(９世紀後半)以後と考えられる。井戸機能の終了時期は、図７－１層と図７－２層が同時の埋立てであれば13世紀、図７－２層と図７－１層の埋立てに時間が開いたのであれば、12世紀初頭に機能を終えたと考えることができる。

東壁中央でSK114を検出した。南北約0.3m、東西0.2m以上、深さ約0.3mで、平面楕円形の土壙である。埋土は炭・焼土を含む第1b層で、遺物は出土しなかった。

小穴SP110･111･115は調査区西南部で検出した。SP110は南北0.4m、東西0.3m、SP111は南北0.35m、東西0.25m、SP115は南北0.4m、東西0.3mの楕円形の小穴で、深さは５～７cmで、第1b層で埋まっていた。遺物は出土しなかった。

調査区中央の北壁際でSK112を検出した。南北0.5m以上、東西約0.7m、深さ約0.4mの平面円形の土壙で、埋土は暗褐色(10YR3/3)シルト～シルト質砂で炭・第３層の偽礫・砂が混る。遺物は出土しなかった。

第1b層上面(図６・10)

第1b層上面で土採り穴SK101・102・104・105・107とSP106が見つかった。いずれも第1a層が埋土である。

SK101は南北1.2m以上、東西0.5m以上の長方形か楕円形の土採り穴で、深さは約0.5mで、19世紀の肥前磁器が出土した。

SK102は東西2.8m以上、南北0.8m以上、深さ約0.4mの土採り穴で、滑石製石鍋28や土師器破片が出土した。

SK104は東西約1.8m、南北約1.1m、深さ約0.3mの土採り穴で、須恵器や土師器の破片とともに肥前磁器や関西系陶器、軟質施釉陶器などの近世の遺物が出土した。

SK105は南北1.7m以上、東西約3.0m、深さ約0.2mの土採り穴で、土師器や須恵器、緑釉陶器、瓦器といった古代・中世の遺物とともに肥前磁器や丹波焼などの近世の遺物が出土した。

SK107は南北1.5m以上、東西1.1m以上、深さ0.4mの土採り穴で、土師器破片が出土した。

第1b層の遺物

第1b層からは土師器鉢23・24、東播系須恵器鉢25、瓦器片27、中国産青磁蓮弁文碗26などの古代・

中世の遺物とともに近世の肥前磁器が出土した。

3)まとめ

今回の調査では9世紀の柱穴と平安時代以降の井戸、近世の土採り穴を検出した。さらにこれらより古い古代の遺物が多く出土した。検出された遺構群は、近世以降に上面を削剥され、本来の遺構と地形の関係を失っており時期ごとにその変遷を明らかにすることはできなかった。今後の周辺の調査成果との検討によって、当該地の古代から近世に至る過程を明らかにすることができると思われる。今後の調査に期待したい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81－4次)発掘調査概報」:『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－62

2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.191－201

2008a、「上本町南遺跡発掘調査(US06－2)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.63－69

2008b、「上本町遺跡発掘調査(UH07－1)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.75－78

2008c、「上本町遺跡発掘調査(UH07－4)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.79－89

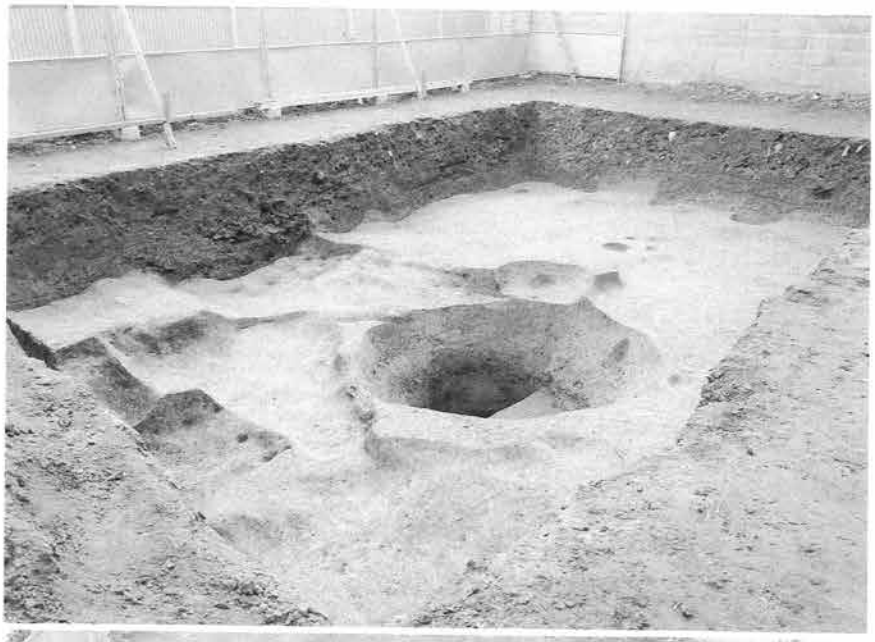
2009、「上本町遺跡発掘調査(UH07－2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.249－261

2010、「天王寺区六万体町における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH08－10)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.371－377地発掘調査報告書(2007)』、pp.249－261

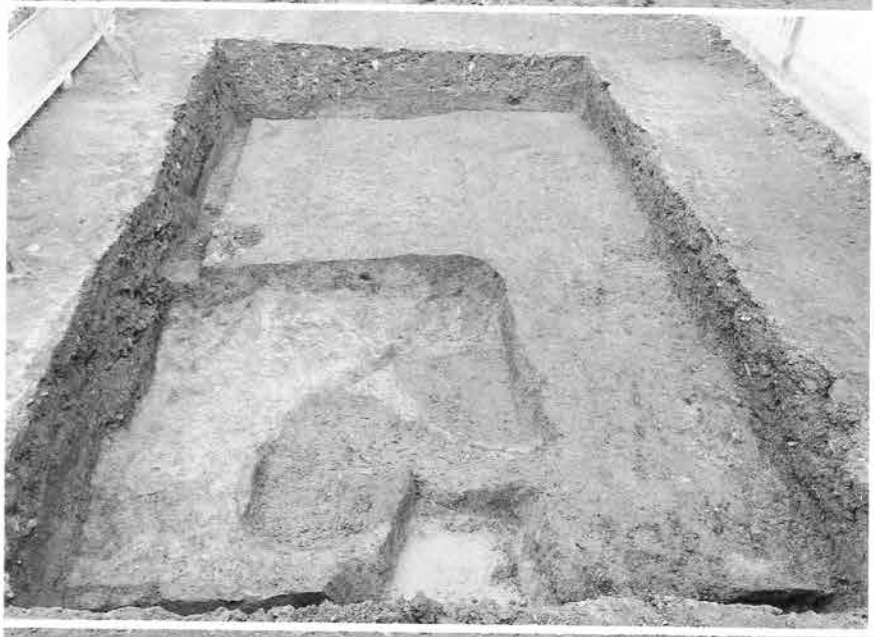
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「上本町遺跡発掘調査(UH13－6)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.501－510

大阪文化財研究所2012、『上本町遺跡発掘調査報告V

第３層上面全景
（南西から）



第1a層上面全景
（西から）



東壁地層断面
（西から）

SP204
（北東から）

SP207
（南から）

SE113
（西から）

淀川区宮原一丁目８－１における建設工事に伴う

宮原遺跡発掘調査(ＭＨ15－１)報告書

調査個所	淀川区宮原1丁目8－1
調査面積	56㎡
調査期間	平成28年1月18日～1月22日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	大阪文化財研究所 調査課長 清水和明、積山洋

1)調査に至る経緯と経過

調査地は中世の集落遺跡である宮原遺跡の中央部に位置している(図1)。付近では、条里にのる可能性がある東西方向の中世の溝が検出されたMH99－3次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001]、高台内に「上□」と判読される墨書を有する中国産白磁など12～15世紀の遺物が出土したMH06－1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a]、12世紀頃の遺物とともに集落の区画とみられる溝が検出されたMH06－2次調査や[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b]、瓦質井戸側を用いた15世紀の井戸が検出されたMH09－2・3次調査など複数の調査が行われている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.4m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする遺物包含層が検出された。今回の調査は、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に、開発地の中央付近で実施されることとなった(図2)。

調査は平成28年1月18日に開始された。後述する第1層までを機械力で掘削し、それ以後は人力による遺構の検出と掘削、写真撮影、実測、遺物の採集などに務めた。同月22日、現地作業を終了し、撤収した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。なお、本文中の遺物に関する記述については、当研究所学芸員小田木富慈美がこれを補佐した。

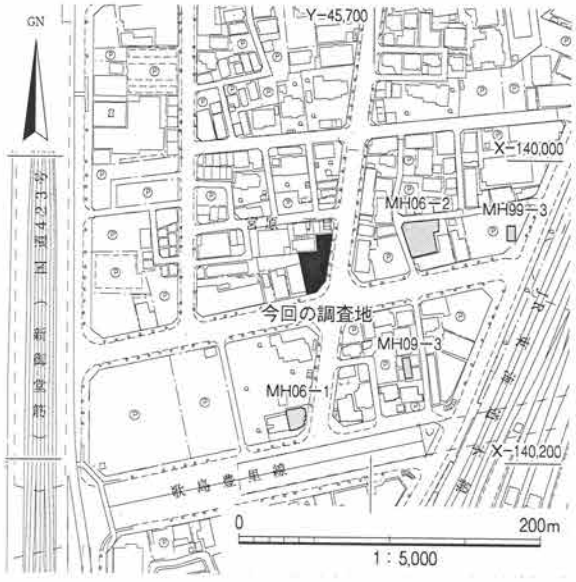


図1　調査地位置図

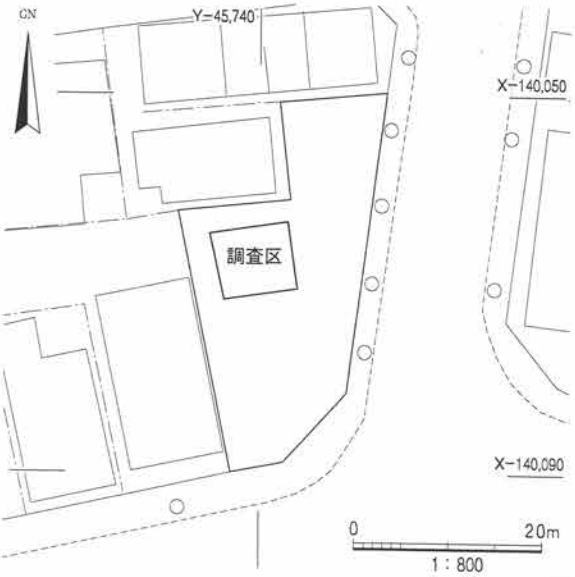


図2　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序と遺物(図3～5・9・10、写真図版上・中段)

調査地の地層は13層に区分される。いずれも淀川デルタに堆積した沖積層である。

第1層：近現代の作土層である。厚さは20cm足らずで、水田の作土とみられる。上面はTP+0.4mほどであり、その上を厚さ1.2m余の現代整地層が覆っている。

第2層：礫や砂の偽礫を含むオリーブ黒色砂混りシルトで、調査区北東隅で北東に下る落込みSX01を人為的に埋めた層準である。最大層厚約50cmを測る。

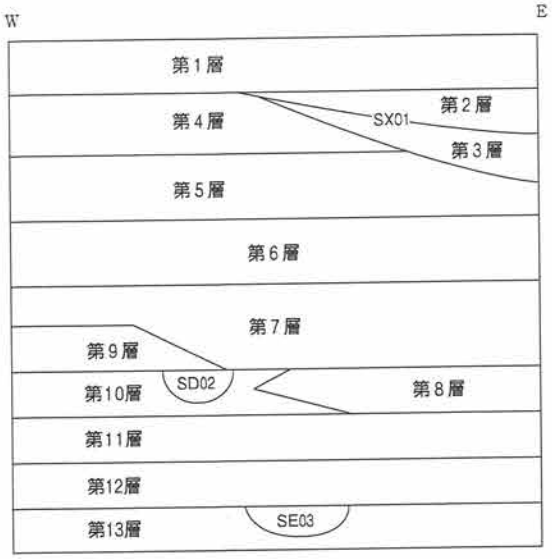


図3　地層と遺構の関係図

第3層：灰色の粗粒砂～シルトからなる自然堆積層で、ラミナが観察される。SX01内で第2層の下に堆積していた。最大層厚約40cmである。遺物には15世紀代の備前焼擂鉢36(図10)が出土しているが、下位層から肥前陶器が出土するため、古い土器が混入したものである。

第4層：黒褐色の砂・小礫混りシルトで、層厚は20cm余であるが、調査区の北東部に分布が限られている。

第5層：黒褐色～暗灰黄色の砂・シルトが明瞭

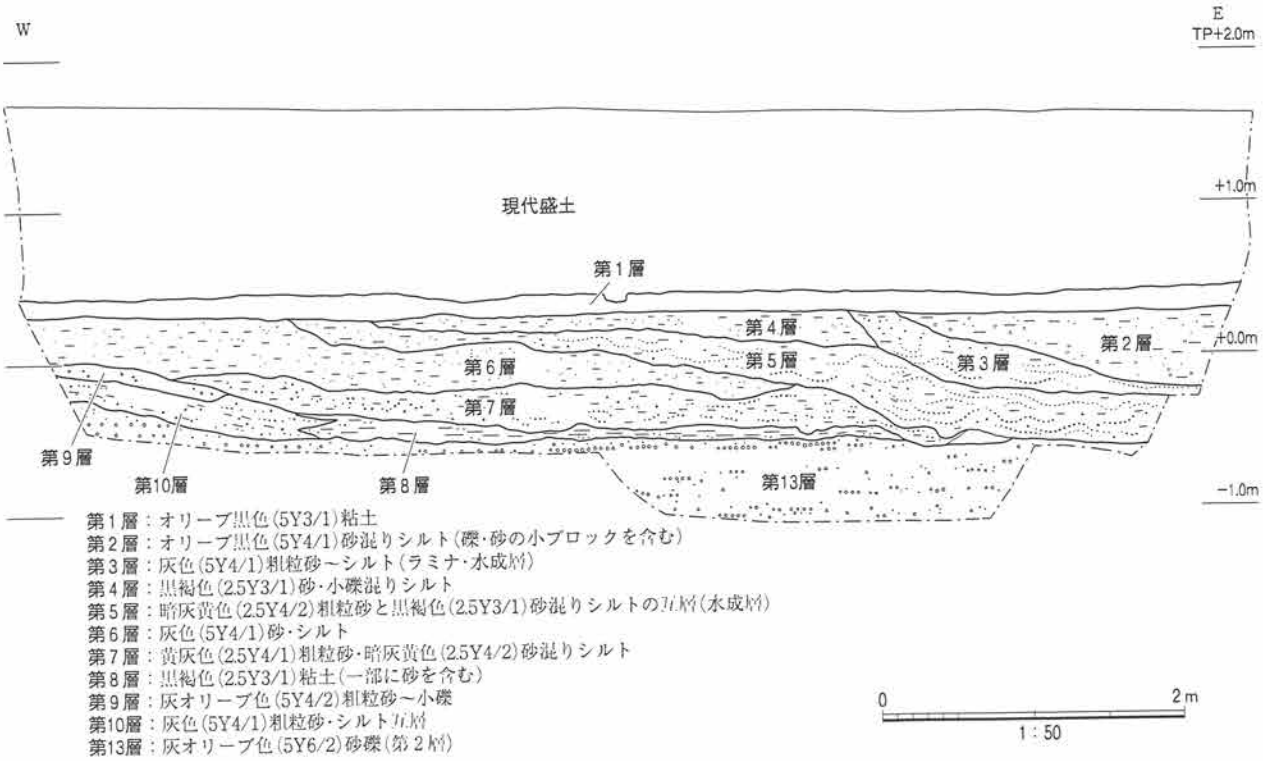


図4　北壁地層断面図

なラミナを形成する水成層で、調査区の北東に向かって低く傾斜している。最大層厚は南東隅で70cmに達する。本層の年代は下位層の遺物からみて、豊臣後期以降である。

第６層：灰色の砂・シルトで形成された層準で、TP±０m付近に堆積している。シルトが主体であるため、ラミナ等ははっきりしないが、水成層の可能性がある。最大層厚は40cmであるが、北西の高い部分は第１層に削られており、さらに厚かったようである。北西の高い部分から遺物がやや多く出土した。出土遺物(図10)から、本層も豊臣期に近い年代をあてることができる。

第７層：黄灰色粗粒砂や暗灰黄色砂混りシルトからなる水成層で、ラミナが認められる。調査区の北側に分布する。層厚は最大30cm余で、大半はTP－0.2m付近に位置する。出土遺物(図９)には15世紀代に遡るものも認められる一方で、16世紀代の備前焼擂鉢21のほか、肥前陶器20が存在することから、本層の形成時期はほぼ豊臣後期頃とみられる。

第８層：黒褐色粘土で、わずかに砂を含む。層厚は最大15cmで、TP－0.4m以下に堆積している。調査区北東部では第５層に削られており、中央から西側の高い部分には分布していない。調査区の東部が滞水状態であったことを示す。細かい年代は不明である。

第９・10層は第８層とほぼ同時期とみられ、いずれも調査区西側の高い部分に堆積していた層準である。

第９層：灰オリーブ色の砂・礫で、ごく部分的に第10層の上で検出された。

第10層：灰色の粗粒砂・シルトなどが互層をなす水成層で、比較的多く遺物が出土した(図９)。出土遺物から、本層の年代は16世紀後半頃とみられる。

第11層：黒褐色砂礫混りシルトで、西側の高い部分に分布しているため図４・５には図示していないが、TP＋0.1m以上に堆積し、上を第１層に削られている。最大層厚は20cmで、遺物は出土しなかった。

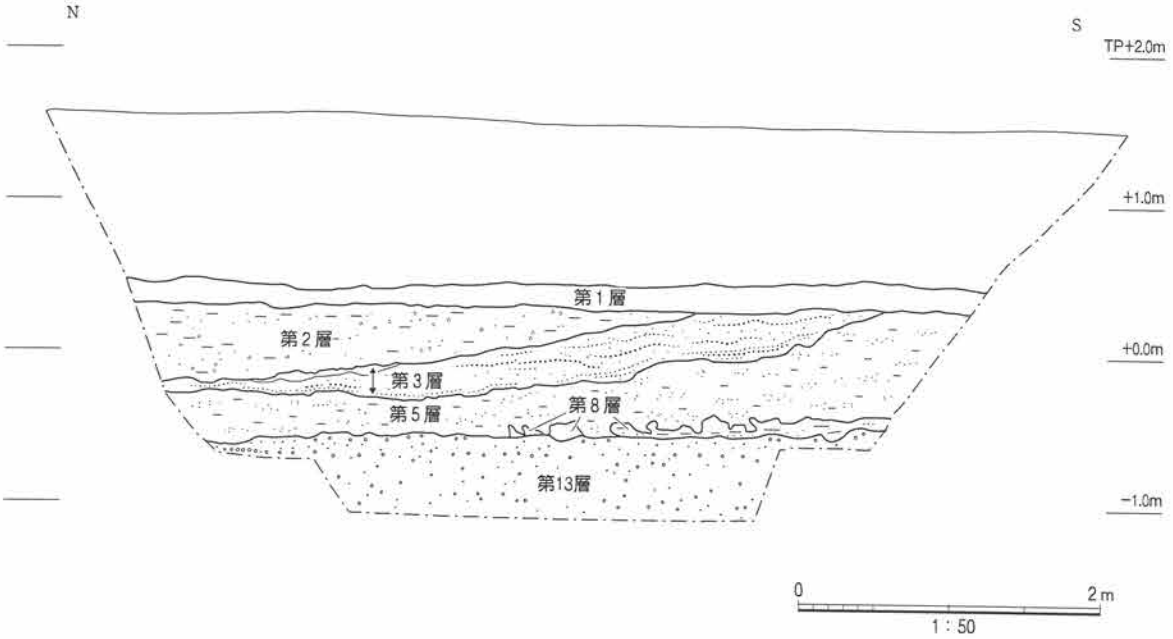


図５　東壁地層断面図

第12層：灰オリーブ色～黒褐色砂礫混りシルトで、やはり西側の高い部分でTP±０m付近に堆積していた。明確なラミナは見られなかったが、水成層に由来するものと考える。層厚は20～30cmで、遺物は出土しなかった。

第13層：西側でTP－0.1m以下、東側で－0.5m以下に堆積する自然の砂礫層で、ラミナが明瞭に認められた。本層は少なくともTP－2.1mまで連続していることを確認した。陸化以前の層準であろう。遺物の出土はない。

ii）遺構と遺物（図６～８）

a.中世後半の遺構

SE03：直径40cm足らずの曲物を転用して井戸側とした井戸で、その底部のみ高さ10cmほどが残存していた（図６、写真図版下段）。内部からは瓦質土器羽釜１が出土した（図７）。15世紀前半～中葉のものであろう。検出面は第13層上面であり、本調査区でもっとも古い遺構である。

b.近世以降の遺構

SD02：調査区の西側で、東へ降る斜面と平行するように検出された溝で、第10層上面から掘り込

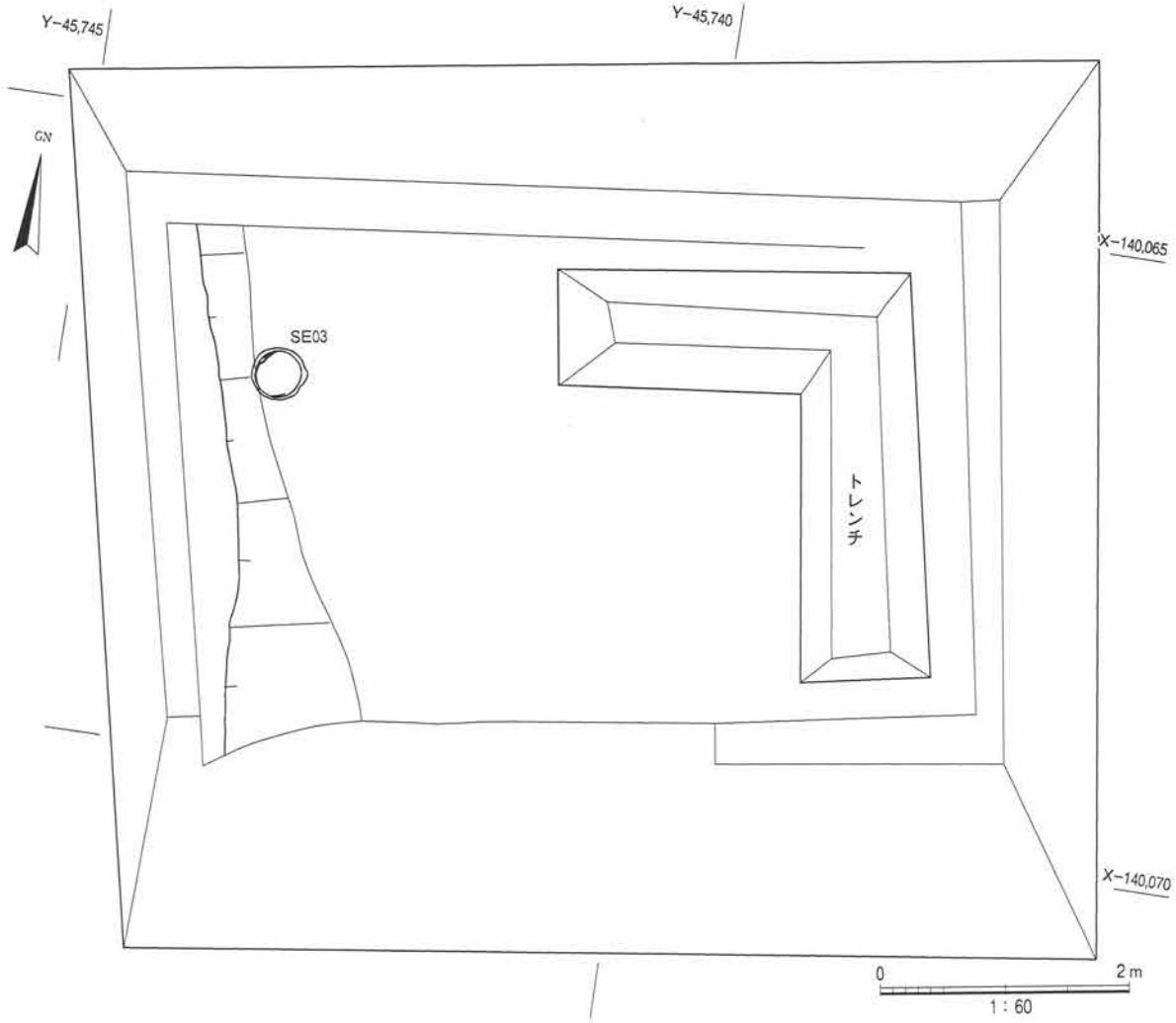


図６　中世後半の遺構平面図

まれていた。埋土は２層に分かれ、下位は浅黄色砂礫に第11層に由来するシルトの偽礫が混り、人為的に埋められたものとみられる。出土遺物は遊離資料である弥生時代後期の甕底部２、13世紀とみられる瓦器皿３のほか、15～16世紀代の中国産白磁皿４、中国産青磁碗５、瓦質土器羽釜６・土師器羽釜７、備前焼擂鉢８である(図７)。４は高台に抉りを有する皿で、高台内に「吉」ないしは「上ヵ（□)」と判読される墨書が見られる。５は蓮弁文を施す碗である。６は和泉地域に系譜を持つ羽釜で、口縁部が内傾し、外面には凹線を有する。体部外面はヘラケズリである。７は口縁部が短く直立する。以上の中で最も新しいものは土師器羽釜７で、16世紀に属し、遺構の時期もこれ以降となろう。

SX01：調査区北東部で検出された深さ0.6mの落込みである。大きな溝の一部なのかもしれない。下から第３層、第２層の順で埋まっていた。遺物の出土はなく、細かい年代は不明であるが、上限は江戸時代、下限は近代まで降るかもしれない。

ｃ.各層出土の遺物(図９・10)

第10層出土の遺物は９～16を掲載した。９・10は瓦器椀、11は中国産青磁碗、12・13は瓦質土器羽釜、14は同火鉢、15は同甕である。16は瀬戸美濃焼天目碗である。14は口縁部外面に２条の突帯とその間にスタンプ文を配す。いわゆる奈良火鉢である。９・10は13世紀、11～15は15世紀～16世紀前葉のものであるが、天目碗16は体部外面下半に濃い錆釉を塗布しており、藤澤良祐氏による編年の大窯２期から３期前半に属するとみられる[藤澤良祐2002]。

第７層出土の遺物は17～24を掲載した。土師器小皿17、中国産青磁碗18、古瀬戸平碗19、肥前陶器碗20、備前焼擂鉢21、瓦質土器羽釜22・23、丸瓦24などが出土した(図９)。19は内面に淡い発色の灰釉を施す。糸切の底部に輪高台を接合しており、底部内面の３箇所に目積跡が見られ、圏線状の凹みが巡る。

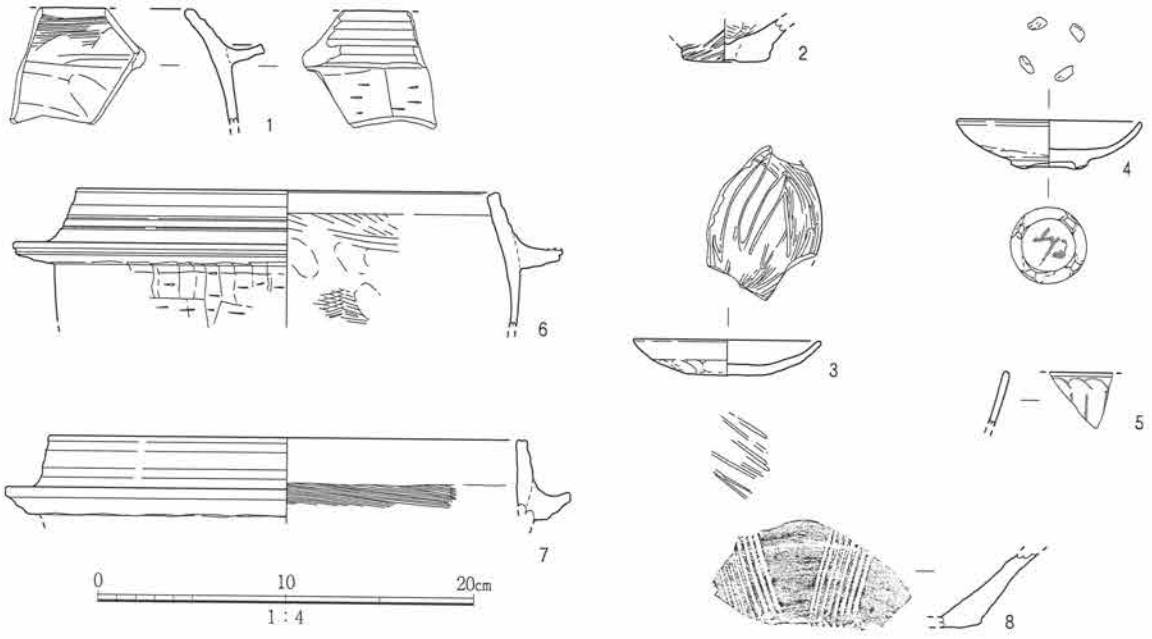


図７　遺構出土遺物実測図
SE03(１)、SD02(２～８)

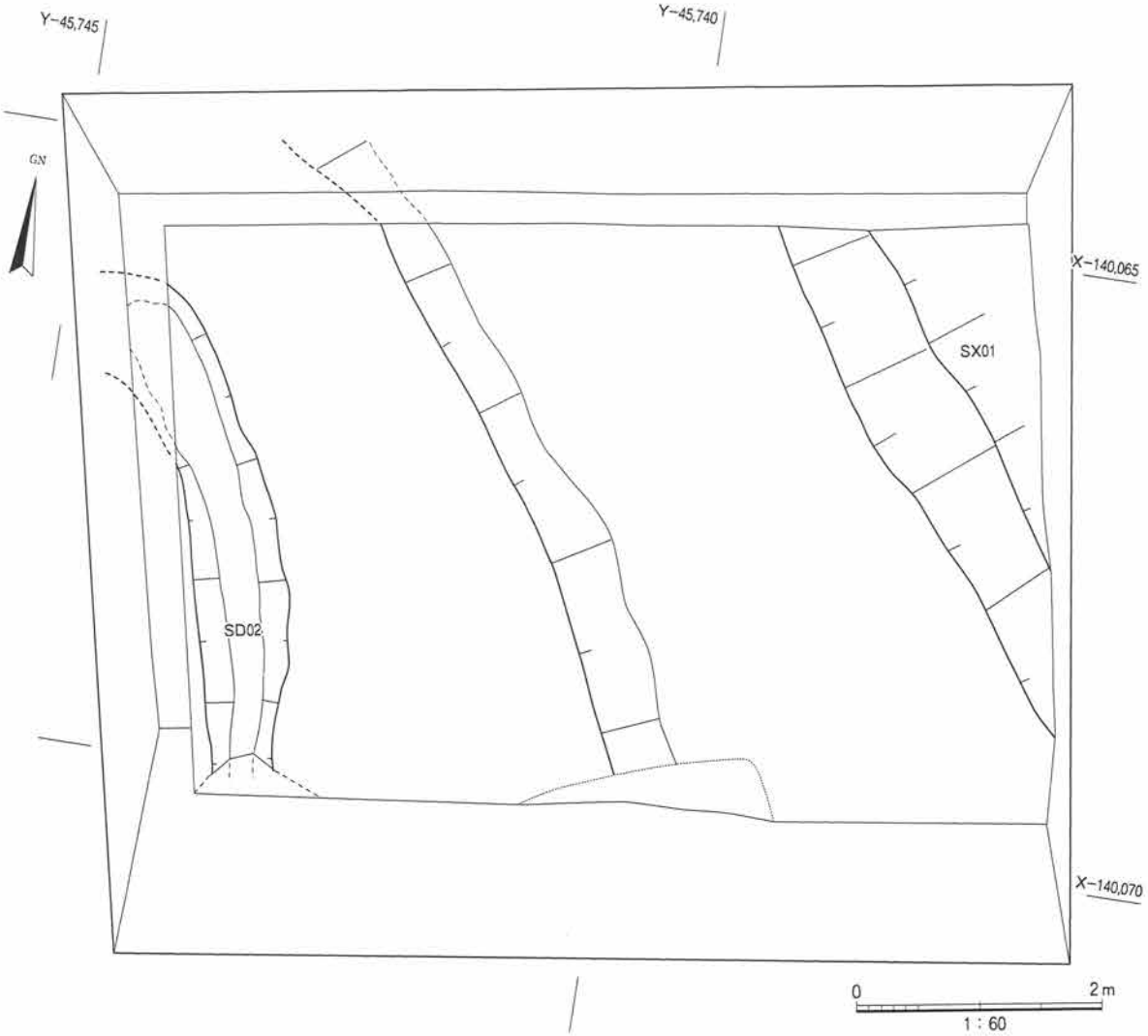


図８　近世以降の遺構平面図

第６層出土の遺物は25～29・37・38を掲載した。土師器皿25、中国産白磁碗26、瓦質土器擂鉢27・羽釜28などのほか、丸瓦29、銅製笄37、石製硯38などである(図10)。26は13世紀、27・28は15世紀後半のものであるが、25は16世紀以降にも見られる形態である。丸瓦29の鉄線切技法はコビキＡである。笄37は耳掻き状の上端部が欠損したものかもしれないが、確認できなかった。下端も破損している可能性がある。上部は幅1.2cmほどで帯状に広く、薄く盛り上がった方の面に毛彫りないしは打刻によるとみられるリング状(直径2.5～3.0mm)の文様が見られる。硯38は海の部分の破片で、折れた後に破損部を研磨しており、砥石などとして転用したのであろう。海部は四葉形を呈し、広島県草戸千軒町遺跡で類似品が出土している[広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1995]。

第５層出土の遺物は30～35を掲載した。土師器小皿30、黒色土器31、中国産白磁碗32・33などのほか、井戸側とみられる瓦質土器34や口縁部が高く直立する備前焼擂鉢35が含まれている(図10)。

3)まとめ

今回の調査で判明したことは次の２点である。

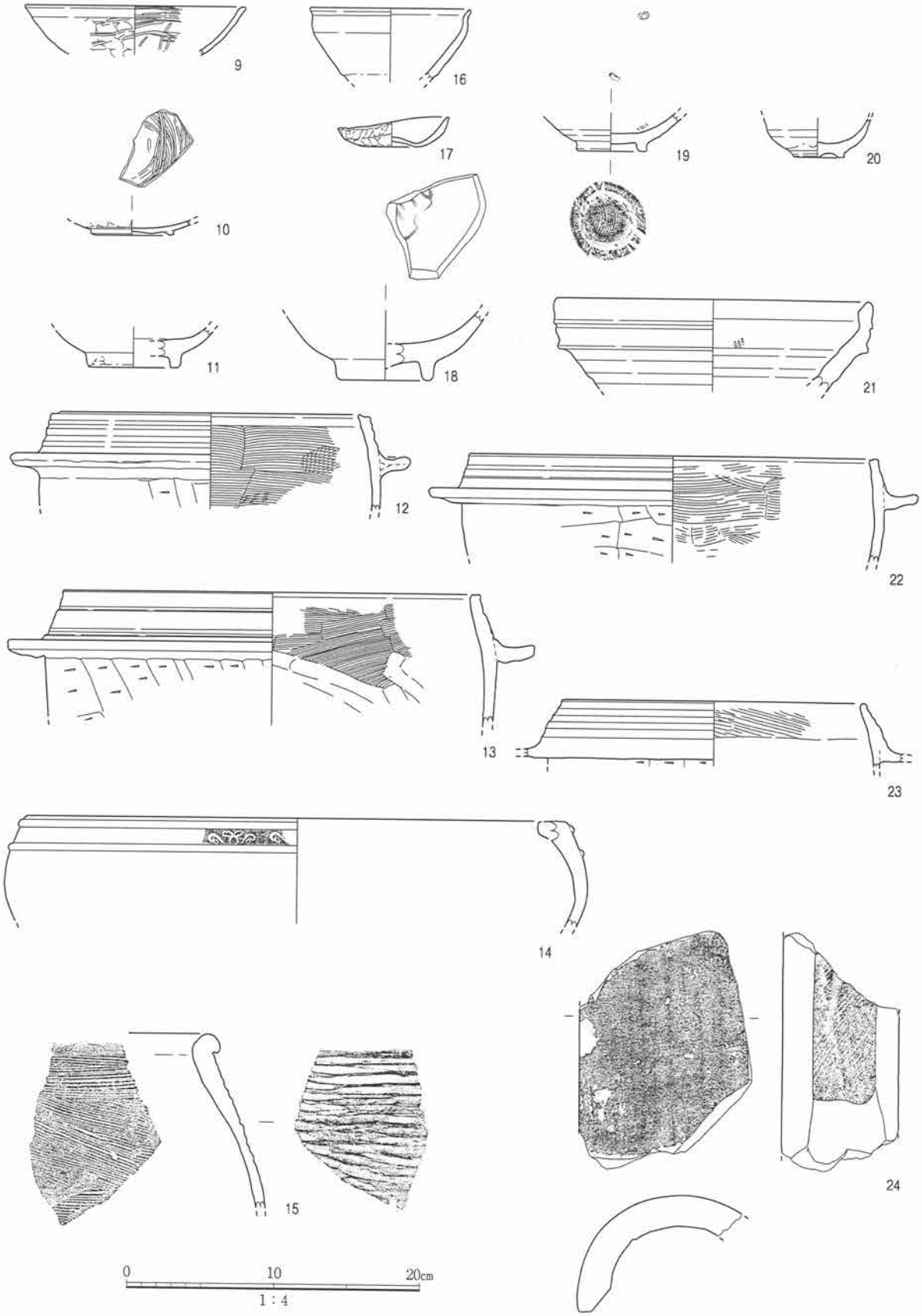


図９　各層出土遺物実測図（１）
第10層（９～16）、第７層（17～24）

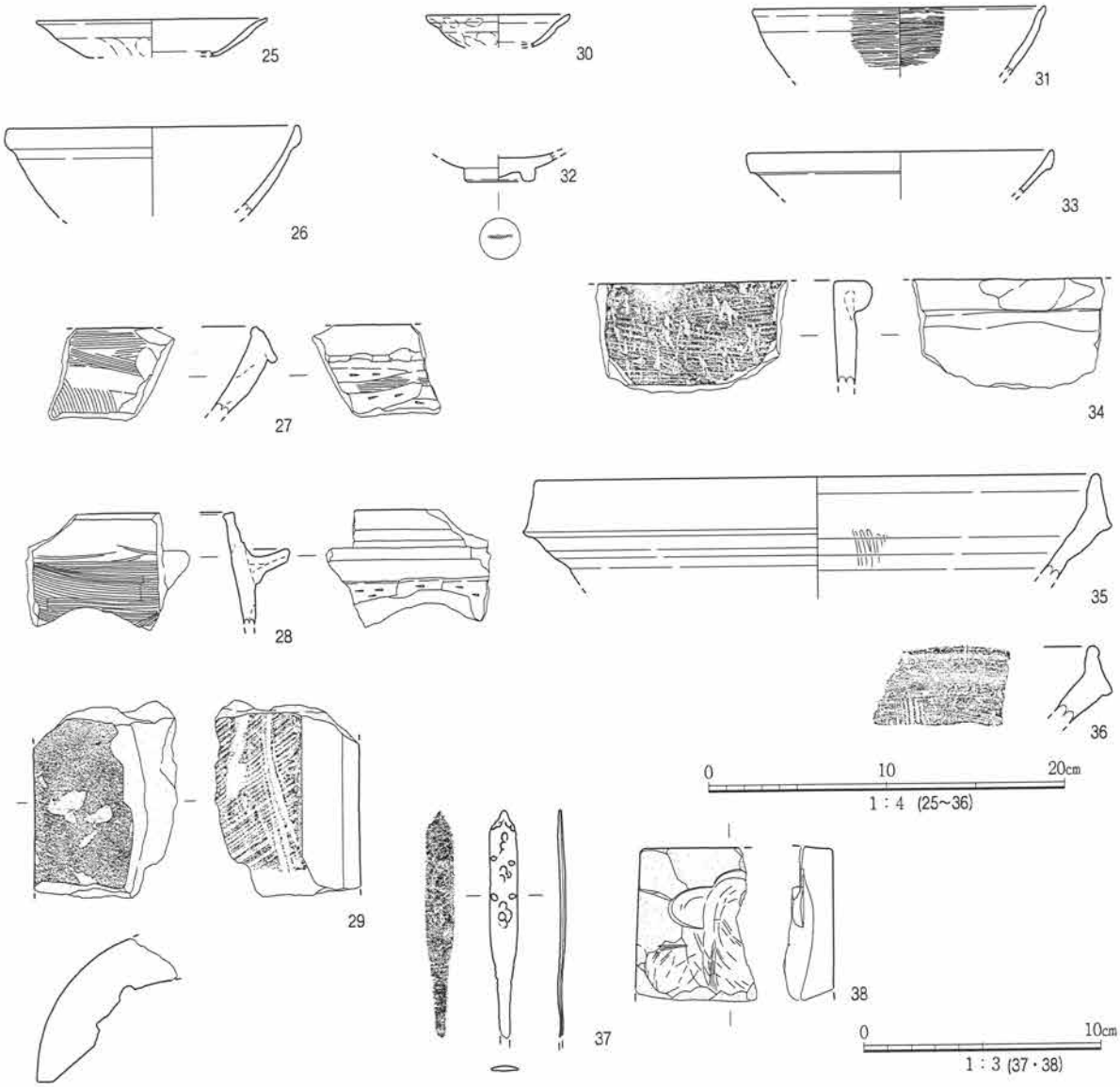


図10　各層出土遺物実測図(2)

第6層(25～29・37・38)、第5層(30～35)、第3層(36)

第一に、調査地は淀川デルタに位置するが、この地では東が低く西側が微高地になっていたことがわかった。今後の地形復元に資するであろう。

第二に、遺構はその微高地縁辺部のこの地ではSE03が最も古く、出土土器の年代は15世紀前半～中葉であった。そして、遺物全体も15～16世紀代のものと豊臣期のものが目立つことが判明した。おそらく、西側の微高地ではこうした時期に人々が居住したのであろう。

宮原遺跡では平安時代以後、人々の居住がみられるが、今回、中世後半～豊臣期というやや新しい時期の様相が明らかとなったことは、淀川デルタの開発史の研究に資するものであり、今後のさらなる調査の進展が期待される。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、「丸紅株式会社による建設工事に伴う宮原遺跡B地点発掘調査(MH99

－３)報告書」:『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.３－５
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a、「宮原遺跡発掘調査(MH06－１)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73－76
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b、「宮原遺跡における発掘調査(MH06－２)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.297－303
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「宮原遺跡発掘調査(MH09－３)報告書」:『平成21年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61－66
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1995、『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅲ
藤澤良祐2002、「瀬戸美濃大窯編年の再検討」:『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、pp.53－151

東壁断面
（西から）

北壁断面
（南から）

SE03
（東から）

東淀川区東中島六丁目1050－１における建設工事に伴う

崇禅寺遺跡発掘調査(SZ15－１)報告書

調査個所	大阪市東淀川区東中島6丁目1050－1
調査面積	81㎡
調査期間	平成27年12月15日～12月24日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、南秀雄・大庭重信

1)調査に至る経緯と経過

崇禅寺遺跡は、大阪湾岸の砂州と、淀川が形成した三角州によって陸化したところに営まれた。当地では、鉄製素環頭大刀が出土した大阪府教育委員会の調査をはじめ、各所で弥生時代後期末～古墳時代中期の遺構・遺物が発見されている(図1)[大阪府教育委員会1982・大阪市文化財協会1999ほか]。崇禅寺遺跡の特徴として、吉備・山陰・北陸・近江・伊勢湾沿岸など各地の特徴を有する土器の出土から、瀬戸内海・淀川を介した水上交通の結節点にあったことが指摘されてきた(上掲報告書)。また埴輪が点々と出土していたが、崇禅寺の南で墳丘の崩落土と考えられる地層とともに多数の埴輪が検出され、数10mクラスの古墳の存在が確実になった[大阪府教育委員会2003]。

古墳時代後期以降は遺構や遺物が希薄になるが、中世後半では嘉吉の乱(1441年)で殺された将軍足利義教の首級を埋めた崇禅寺が建立される。崇禅寺は、平野の大念仏寺とともに大阪市内では四天王寺に次ぐ大刹であり、柵を伴う防御のための二重の堀が発掘されている[大阪府教育委員会2003]。中世以降はこの地域は京・大阪から中国地方へ至る交通の要になっており、柴島城など戦国時代にはしばしば合戦の舞台になったところである。

今回の調査地近辺では、すぐ北の道路で1958年に弥生時代とされる包含層が見つかり(図1の5番)、周囲100m程度の範囲では試掘調査も含めてまんべんなく庄内式～布留式期の遺物包含層や遺構が確認されている。大阪市教育委員会の試掘では、地表から約50cmの自然堆積層上に中世と推測される土壙があり、土師器片なども出土すること

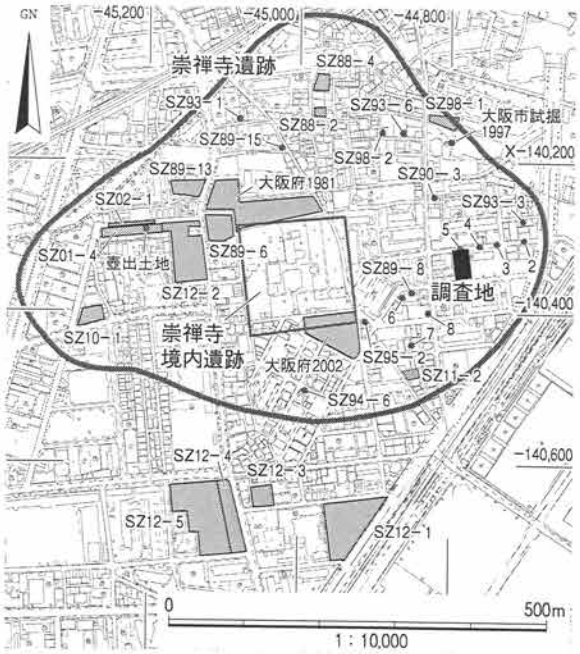


図1　調査地位置図

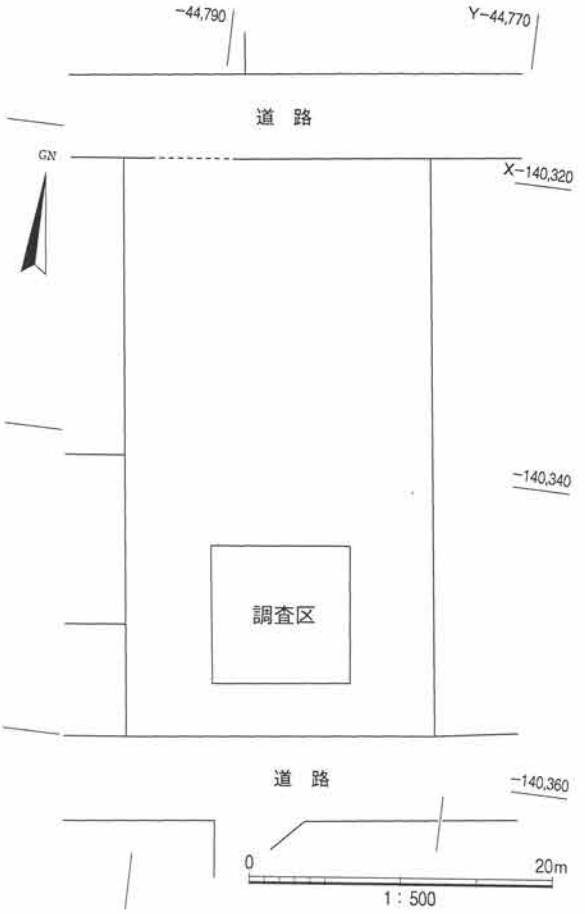


図2　調査区位置図

から本調査を実施した。発掘調査は敷地の南側の９×９ｍの範囲で行った(図２)。第２層上面までを平面的に調査し、それ以下は７×2.5mの南北トレンチによりTP+0.1mまで主に堆積状況を観察した。

基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

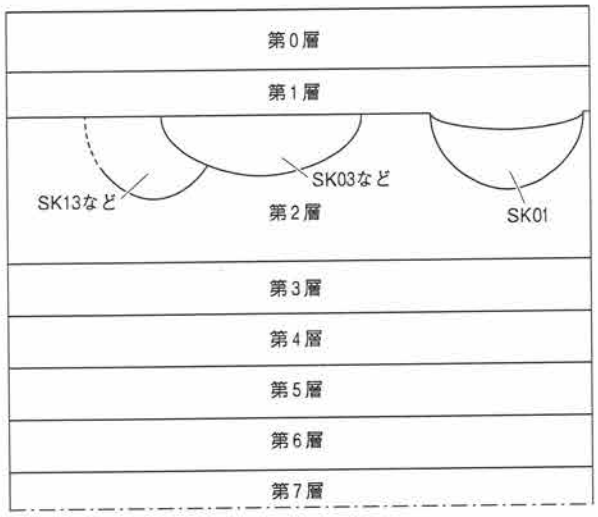


図３　地層と遺構の関係図

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

近現代の地層を第０層とし、以下のTP+2.7～0.1mまでの地層を第１～７層に区分した。第２層以下は調査区の東壁に沿って設定した深掘りトレンチで確認したものである。

第１層：細礫混り黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒～粗粒砂層で層厚30cm以上である。古土壌で、庄内式～布留式期の土器片を含む。

第２層：礫混り褐灰色(10YR4/1)中粒～極粗粒砂層で、最大層厚は100cmである。SK01などは本層の上面または第２層上端部で検出した。全体的に分級が悪いが、SK10等の南北アゼの

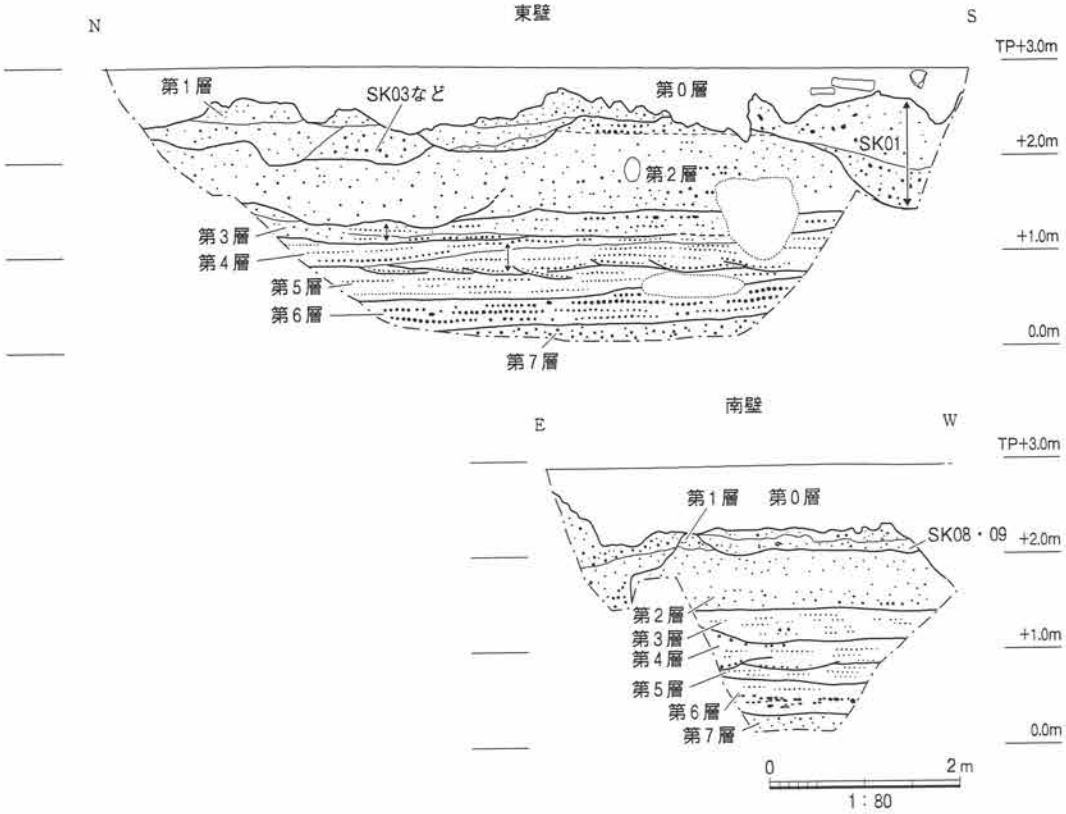


図４　東壁・南壁地層断面図

TP+2.1～2.2mで南(海)方向へ傾く覆瓦構造(インブリケーション)が見られる礫層があった。本層以下で遺物は出土していない。

第３層：黄褐色(10YR5/6)粗粒～極粗粒砂層で層厚20～35cmである。平行ラミナがある。

第４層：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒～粗粒砂層で層厚30～40cmである。東壁では南方向、南壁では東方向へ傾く斜交ラミナがある。流向は北西から南東である。

第５層：明黄褐色(10YR6/6)中粒～粗粒砂層で層厚10～35cmである。平行ラミナがある。

第６層：黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂～中礫層で層厚28～35cmである。礫をもっとも多く含む地層で、大きい礫で５cmある。平行ラミナがある。

第７層：淘汰が悪い明黄褐色(10YR6/6)礫混り粗粒砂層で、層厚20cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

第２層上面または第２層上端部でSK01～13を検出した。近現代の攪乱が半分以上を占めるが、そ

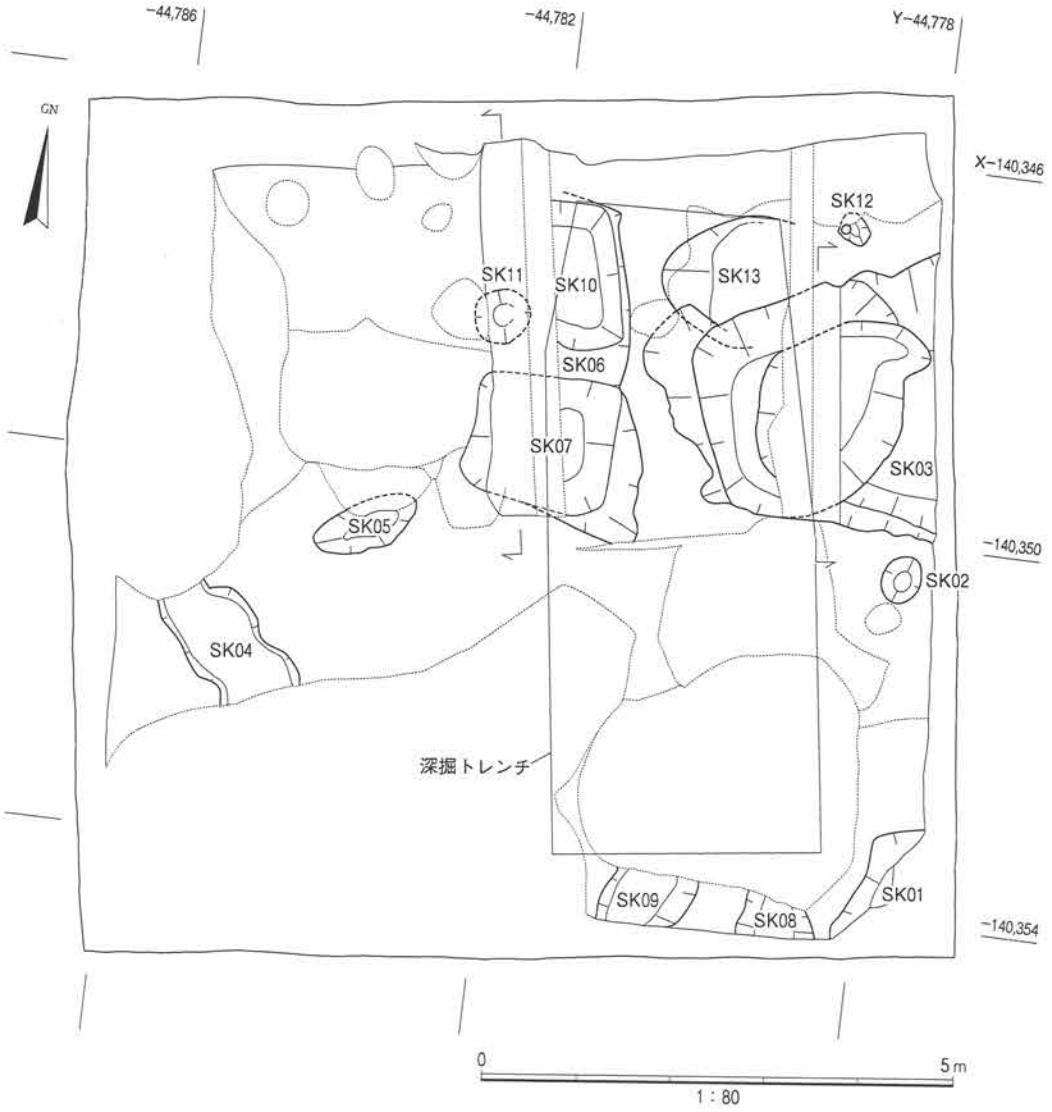


図５　遺構平面図

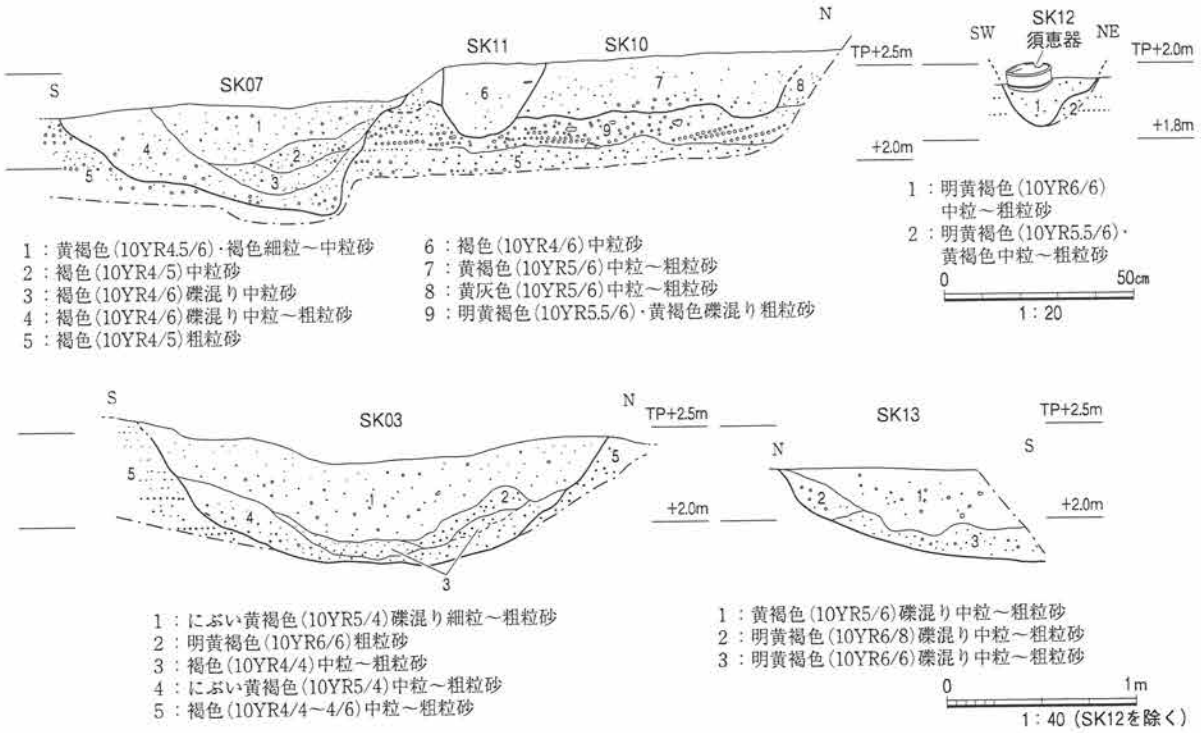


図6　土壙群断面図

れ以外では密度高く遺構がある(図5)。脆い砂層であるため当時の生活面(遺構面)は保たれず、第2層を少しずつ掘り下げて検出したり、断面から把握できた遺構もある。平面図と壁・遺構の断面図が一致しない所では、断面図の方が精度が高い。遺構出土遺物のほとんどは庄内式～布留式期の土師器が占め、ごく少量の須恵器から確実に5世紀まで下る遺構が存在する。

まず、須恵器が出土していない遺構にSK01・02・05・07～11がある。

南東角にあるSK01は南北2m以上、東西1.2m以上、深さ1.00mである。埋土は、下層がにぶい黄褐色(10YR5/4)礫混り中粒～粗粒砂層で、上層が第1層と類似する黄褐色(10YR5/6)礫混り中粒～粗粒砂層である。用途は不明だが、土壙のなかでは深い。

SK02・05は小型で浅い。SK02は長さ0.40～0.50mの楕円形で、深さ0.14mである。埋土は褐色(10YR4/4)礫混り中粒～粗粒砂層である。SK05は長さ1.15m、幅0.50m、深さ0.25mで、埋土は黄褐色(10YR5/6)礫混り中粒～粗粒砂層である。SK08・09は南壁際にある、にぶい黄褐色(10YR4/3)礫混り中粒～粗粒砂層を埋土にした土壙で、深さ0.1～0.2mである。自然の窪みかもしれない。

SK07・10・11は中央北側にかたまる土壙で、SK11はSK10を切っている(図6)。これらが埋まった後の周囲の浅い窪みをSK06とし、SK06からは須恵器片が出土した。SK07は南北1.85m、東西1.50m、深さ0.60mである。断面図(図6)では4番が加工時の堆積層、その上面が機能面で2番は機能時の北からの崩落土である。SK10は南北2.1m以上、東西約1.4m、深さ0.35m、SK11は約0.6mの円形で、深さ0.40mである(両遺構の埋土は図6参照)。

SK10からは土師器高杯の脚部5・6と、管状土錘7が出土した。7は62.2gである。上部のSK06といっしょに取り上げたSK10の出土遺物に、土師器鉢3と甕4がある。4は体部の外面がハケメ、内面がヘラケズリ、口縁部の外面がヨコナデ、内面が横方向のハケメで、浅黄色の胎土の摂津産庄内式甕である。

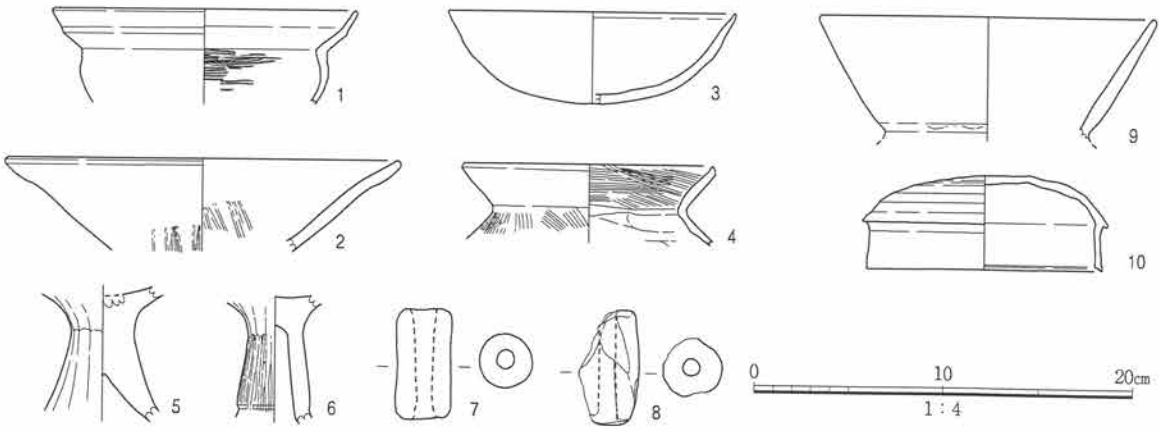


図7　遺物実測図

SK03(9)、SK06(1・2)、SK06・10(3・4)、SK10(5～7)、SK12(10)、SK13(8)

上記の遺構群からは庄内式～布留式の型式差のある土師器片が出土し、時期は弥生時代末から古墳時代前期である。

次に、須恵器が出土遺物に含まれる遺構に、SK06(前述)と北東にかたまるSK03・12・13がある。

SK03は南北約3m、東西3m以上あり、深さ0.75mである。断面図(図6)では4番が加工時の堆積層で上面が機能面、3番は機能時の堆積層で2番は壁の崩落土である。SK03からは図7の9の土師器広口壺の口縁部が出土した。SK03の下位でSK13を検出した。SK13は南北約1.4m以上、東西1.5m以上、深さ0.45mである(埋土は図6参照)。SK13からは土師質の管状土錘8が出土した。8は一部が破損し、現況で50.4gである。

SK12は、掘下げ中に完形の須恵器杯蓋が出土したことから気付いたもので、平面図は底近くのようすで遺構の輪郭はよくわからない。底はTP+1.83mであり、深さはSK03・13と類似する。SK12出土の杯蓋10はTK23型式である。このほかに、SK06から土師器の有段口縁鉢1と高杯2が出土した。

SK04は近世の瓦も出土した遺構で、深さ0.10mである。

3)まとめ

今次の調査では弥生時代末～古墳時代前期と、古墳時代中期の二つの時期の土壙が稠密に見つかった。検出した砂層上面の標高はTP+2.4m前後で、崇禅寺遺跡の当該期の遺構の検出面ではもっとも高い部類になる。調査地点は埋蔵文化財包蔵地の東端に近いが、既調査の遺構・遺物の検出状況も加味すると、遺跡の延びる方向や範囲を再吟味する必要があるかもしれない。

参考文献

大阪市文化財協会1999、『崇禅寺遺跡発掘調査報告書』I

大阪府教育委員会1982、『崇禅寺遺跡発掘調査概要』I

大阪府教育委員会2003、『崇禅寺遺跡』(大阪府埋蔵文化財調査報告2002－4)

東壁地層南半断面

遺構全景
（北から）

土壙群と断面
（北東から）

城東区野江四丁目36－１の一部における建設工事に伴う
榎並城跡伝承地発掘調査(EN15－１)報告書

調査個所	大阪市城東区野江四丁目36－１の一部
調査面積	63㎡
調査期間	平成27年10月28日～11月４日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、田中清美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は榎並城跡伝承地の東部に位置しており、天文2(1533)年に三好宗三が築いたとの伝承のある榎並城跡の一画にある水神社の北東側約100mにある(図1)。調査地の南西には15～16世紀の遺構・遺物が検出されたEN01－5次調査地が、西方約300mには弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)の遺構・遺物が検出されたEN11－1・2[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]、13－1次調査地が位置している(図1)。

当該地で大阪市教育委員会が平成27年9月24日に実施した試掘調査において、地表下約0.5mで、14世紀頃の瓦器の細片を含む作土層や古土壌が確認されたため、本調査を行うことになった。

調査は平成27年10月28日から敷地内の南寄りに東西7m、南北9mの調査区を設定した後、現代整地層から第3層までを重機で掘削した。この後、第4層を人力で掘り下げて、第5層の上面および第6層の上面の遺構の調査を行い、適宜、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録を作成した。その後、調査区の北東部の壁際を深掘りして、第6層以下の地層の堆積状況を観察した。11月4日、調査区中央部以西の第6層の上面で最終的な遺構の確認調査をした後、埋戻しおよび調査機材を撤収して、現地における調査を完了した。

本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文中ではTP±0mと記した。本報告書で用いた図2・5の方位は、調査地で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成して得た世界測地系座標北を基準にした。

2)調査の結果

i)層序

調査地の現在の地表面の標高はTP+0.6～0.8m前後あり、ほぼ平坦な面をなすが、水神社のある地

図1　調査地位置図

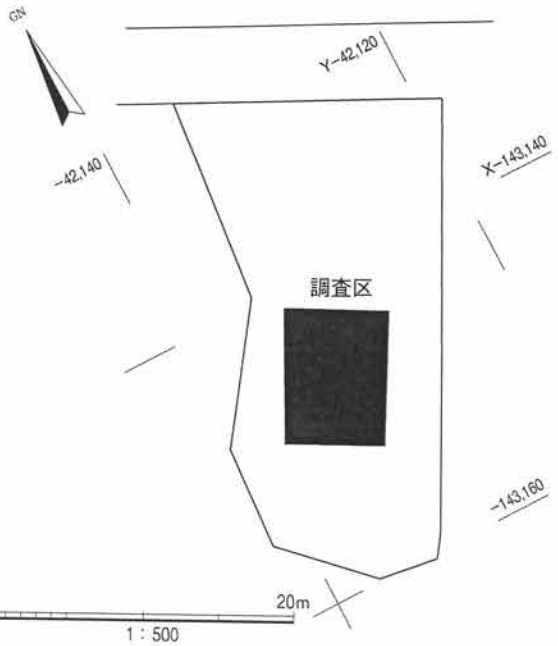


図2　調査区配置図

区から調査地域に向かってわずかに低くなっている。調査地では現代整地層(第0層)下1.4m(TP−80cm)までに第1～9層を確認した(図3・4)

第1層：灰色(N4/0)細礫混りシルト質細粒砂層で、層厚は5～20cmある。本層の下面には鋤溝が見られた。現代の作土層である。

第2層：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂層で、層厚は15～20cmある。本層の下面でも多くの鋤溝が見られた。19世紀以降の陶磁器・瓦の細片を含む江戸時代以降の作土層である。

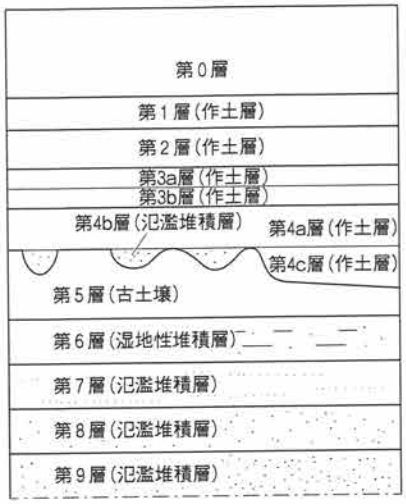


図3　地層と遺構の関係図

第3層：第3a層と第3b層に2分される。第3a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト層で、層厚は10～16cmあり、14世紀代の瓦器、土師器、陶磁器の細片を含む。江戸時代の作土層である。第3b層はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質極細粒砂層で、層厚は5～20cmである。土師器、瓦器、陶磁器の細片を含む江戸時代の作土層である。

第4層：第4a～4c層に3分される。第4a層は灰色(10Y4/1)極細粒砂質シルト層で、層厚は10～20cmである。13～14世紀の瓦器、土師器の細片を含む。豊臣期から徳川初期の作土層であろう。第4b層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂層で、単一の地層としては調査区南部の第4c層の水田上面の足跡内しか確認できなかった。氾濫堆積層である。第4c層は暗灰色(N3/0)極細粒砂質シルト～シルト層で、層厚は10～20cmである。本層の上面には第4a層の耕作時に下層の第4b層の細粒砂を踏み込んだ多数の凹凸が見られた。14世紀代の瓦器、土師器、15世紀代の瓦質土器の細片を含む。室町時代末の作土層であろう。なお、本層の上面では4箇所において2本一対の丸太杭を検出した。

第5層：黒色(N2/0)粘土質シルト層で、土壌化している。本層の層厚は5～10cmで、上面の標高はTP−10cm前後あり、ほぼ平坦な面をなす。本層上面には直径2cm前後のサンドパイプが見られたほか、調査区の中央部で南北方向の第4c層(水田作土層)と古土壌の境界を確認した(図5)。

第6層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトからなる湿地性堆積層で、層厚は20～25cmである。調査区の西南部では第4c層の耕作で撹拌されており、層厚は10cm以下であった。

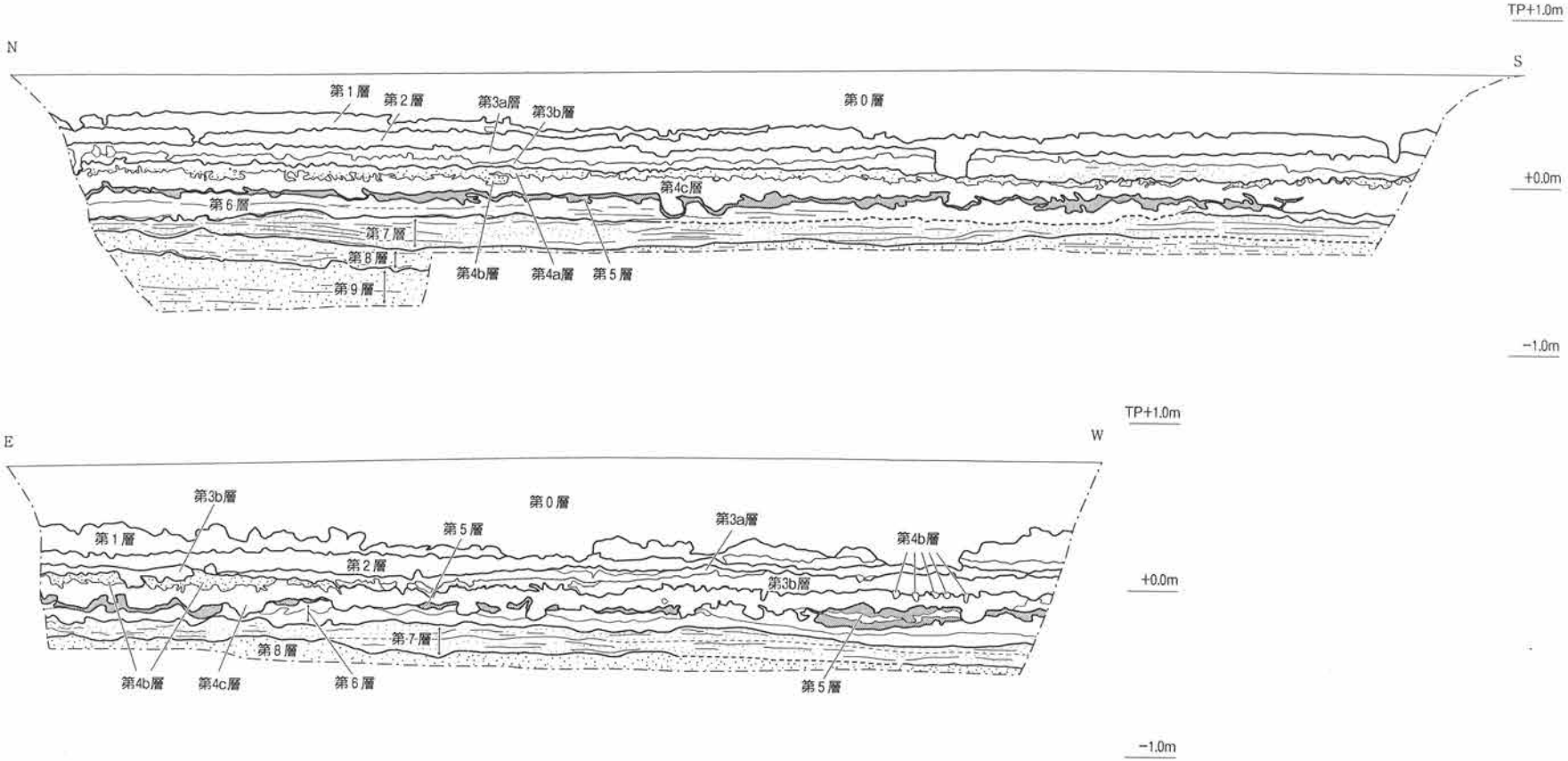
第7層：黒色(5Y2/1)極細粒砂質シルト～シルト層で、層厚は5～20cmである。本層は調査区の南部では極細粒砂から細粒砂に移行する氾濫堆積層である。

第8層：灰色(5Y4/1)細粒砂からなる層厚10～20cmの氾濫堆積層である。

第9層：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂からなる層厚30cm以上の氾濫堆積層である。本層以下の堆積状態については湧水が著しく掘削できなかったため明らかでない。

ii)遺構と遺物

調査区の中央部以西の第5層の上面で水田を検出した(図5)。第5層は先述したように土壌化しており、調査区の中程で本層と作土層(第4c層)の境界を8mほど確認した(図5)。境界には畦畔や溝な



第１層：灰色(N4/0)細礫混りシルト質細粒砂(作土層)
第２層：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂(作土層)
第3a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト(作土層)
第3b層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質極細粒砂(作土層)
第4a層：灰色(10Y4/1)極細粒砂質シルト(作土層)
第4b層：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂
第4c層：暗灰色(N3/0)極細粒砂質シルト～シルト(作土層)
第５層：黒色(N2/0)粘土質シルト(古土壌)
第６層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト
第７層：黒色(5Y2/1)極細粒砂質シルト～シルト
第８層：灰色(5Y4/1)細粒砂
第９層：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂

0　1　2m
1：40

図４　調査区東壁(上)、南壁(下)地層断面実測図

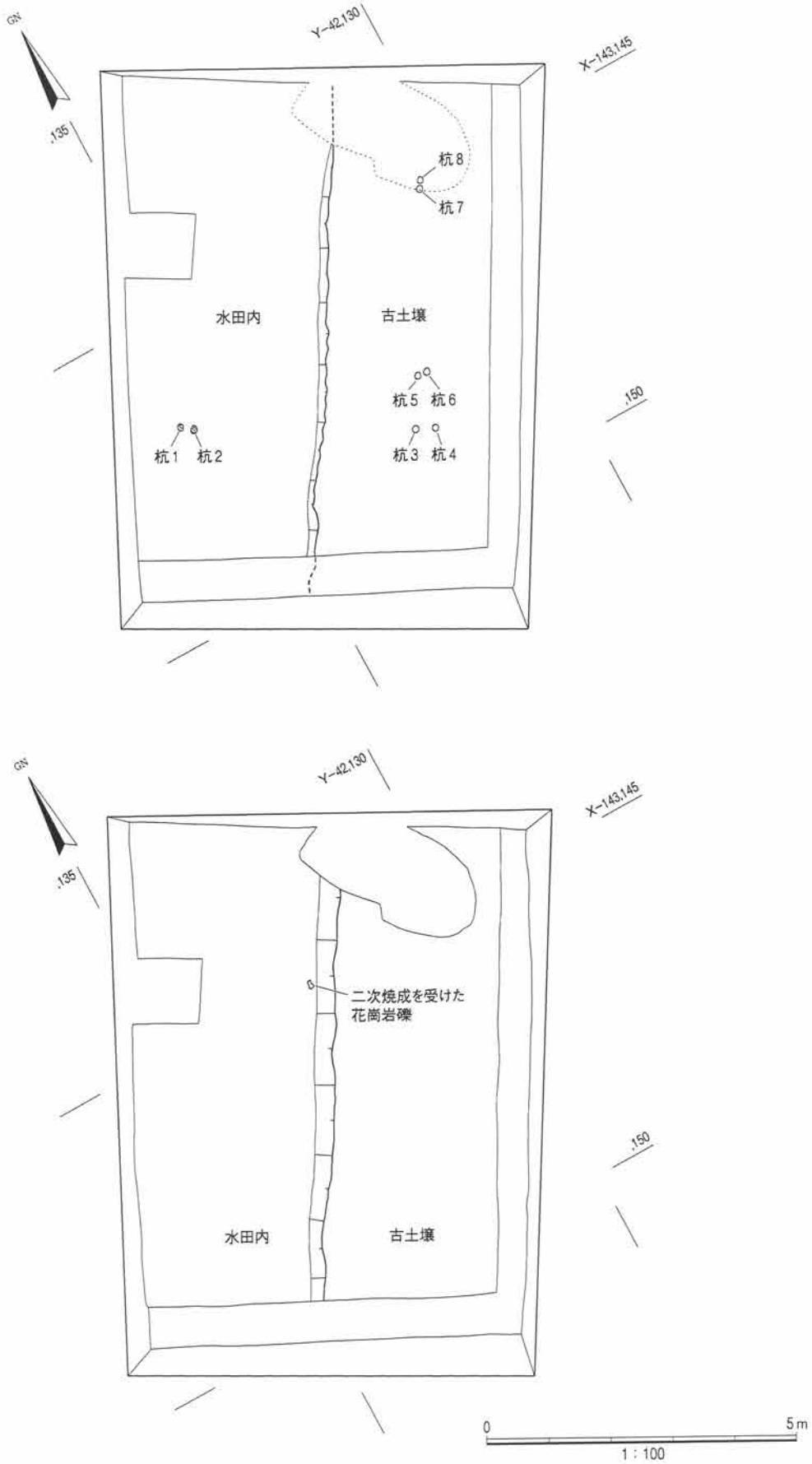


図5　第5層水田および杭位置図(上)、第4c層除去後の水田(下)平面図

どは見られなかった。作土層の下面には多数の踏み込みが確認されたが、鋤溝と断定しうる遺構は見られなかった。水田の時期は、作土層から出土した瓦器や土師器、瓦質土器の細片からみて、室町時代末以降と考えられる。

一方、作土層の基底面で検出した２本一対の丸太杭(杭１～８)であるが、これの機能については調査範囲内では明らかにしえなかった(図５－上)。

１は直径約14cmの杭で、先端を三方から鉄製の手斧で削って尖らせており、断面形は三角形である(図６)。樹種はマツである。本調査では８本の杭を確認したが、杭の先端は１と同様に加工しており、いずれも樹種はマツであった(写真１)。

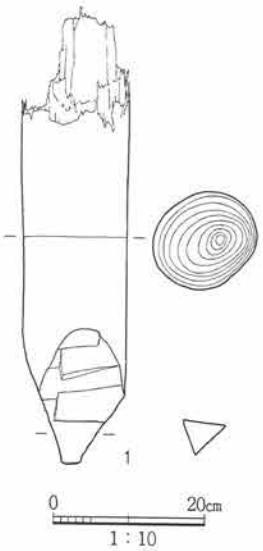


図６　出土遺物実測図
（１：杭１）

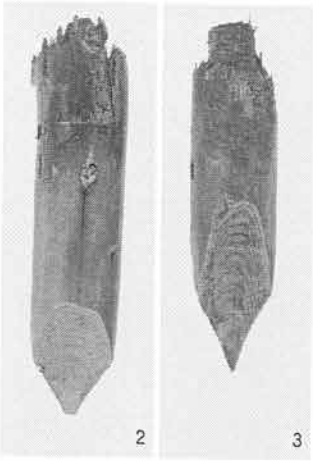


写真１　出土遺物写真
（２：杭２、３：杭３）

第６層の上面まで、第4c層の作土層を除去したところ、二次焼成を受けた花崗岩の礫が出土したほか、多くのサンドパイプが見られた。

３)まとめ

今回の調査地は、榎並城跡伝承地の一部と推定されている水神社に近接した場所に位置しているが、榎並城やこれと関係した遺構や遺物は見出せなかった。ただし、第５層の古土壌や水田の時期は当地域に榎並城が存在した時期とも重複することから、調査区の近隣に16世紀中葉頃の遺構や遺物が存在する可能性は高いといえよう。また、第4c層の上面で検出した８本の杭についても地上部の腐敗が進んでおり、長さについては明らかでないが、これも榎並城跡伝承地と関係するものかもしれない。

一方、第７層以下の各層は遺跡の北方を流れる淀川の沖積作用によって運ばれた氾濫堆積層であり、当地域の陸化の過程を復元するための基礎的な資料となった。今後、周辺部の調査が進めば榎並城跡伝承地の実態がさらに明らかになるものと思われる。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

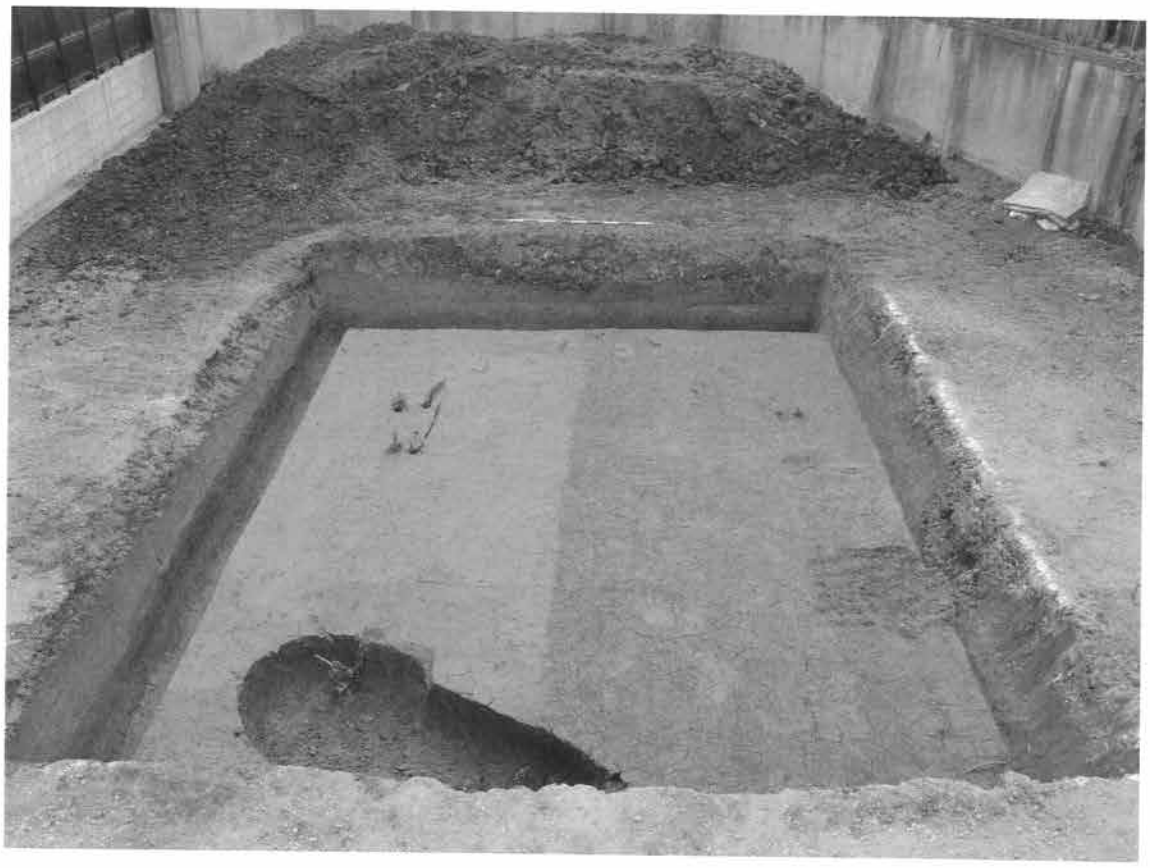
2003、「榎並城跡伝承地発掘調査(EN01－５)報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－87

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

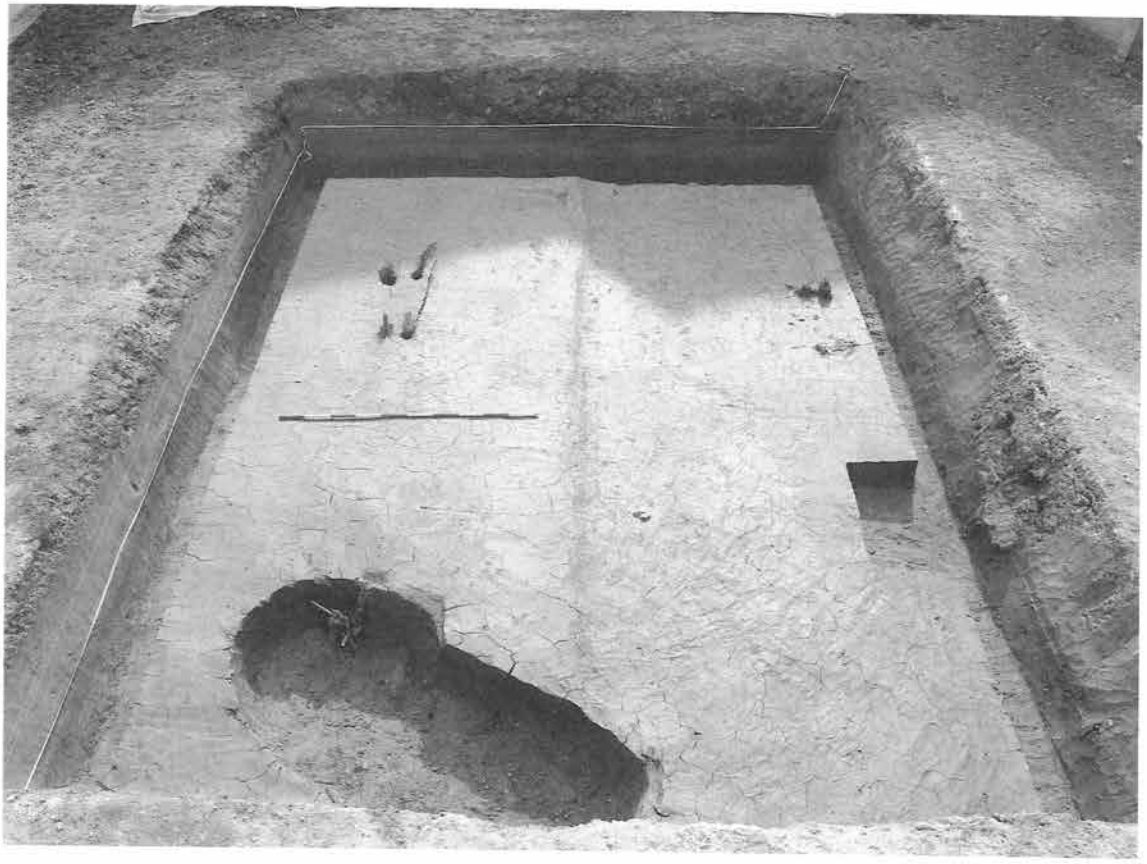
2013、「都島区内代町一丁目における建設工事に伴う榎並城跡伝承地発掘調査(EN11－１)報告書」:『平成23年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.15－29

南壁地層断面全景（北西から）

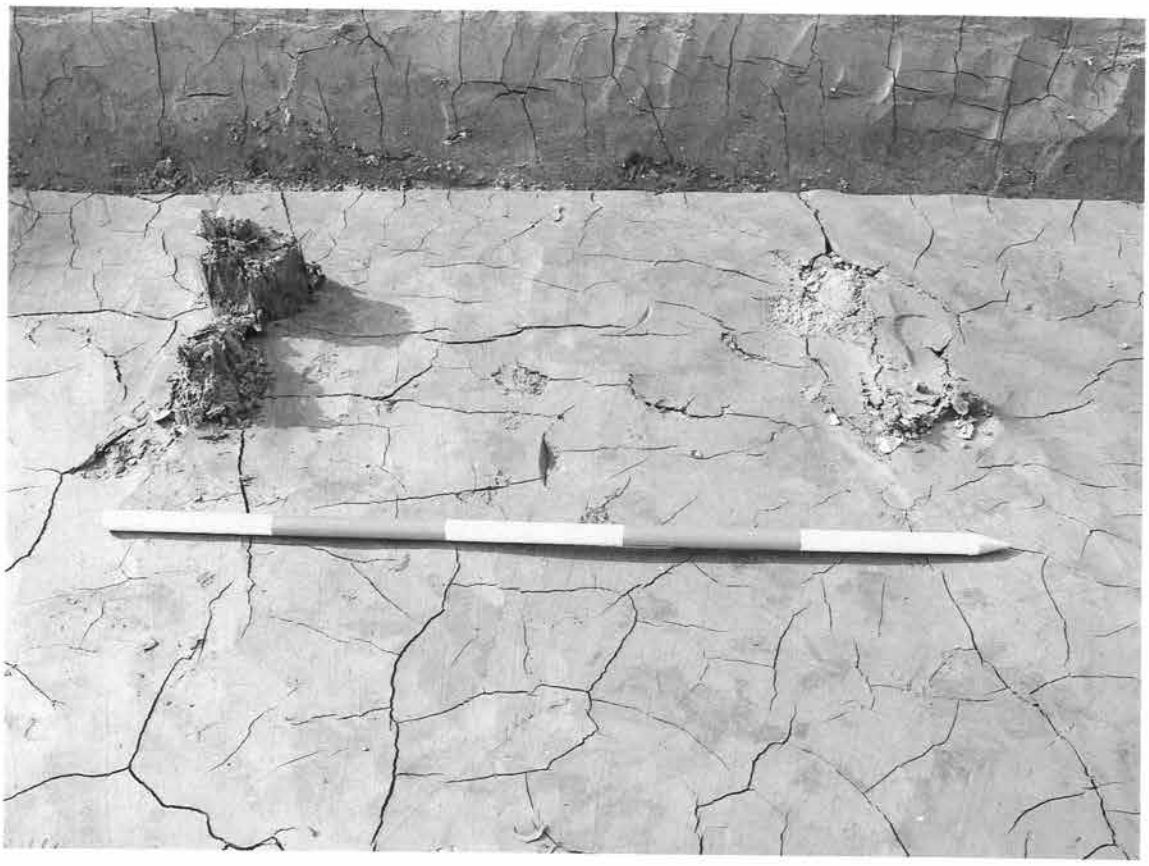
東壁深掘り地層断面（西から）



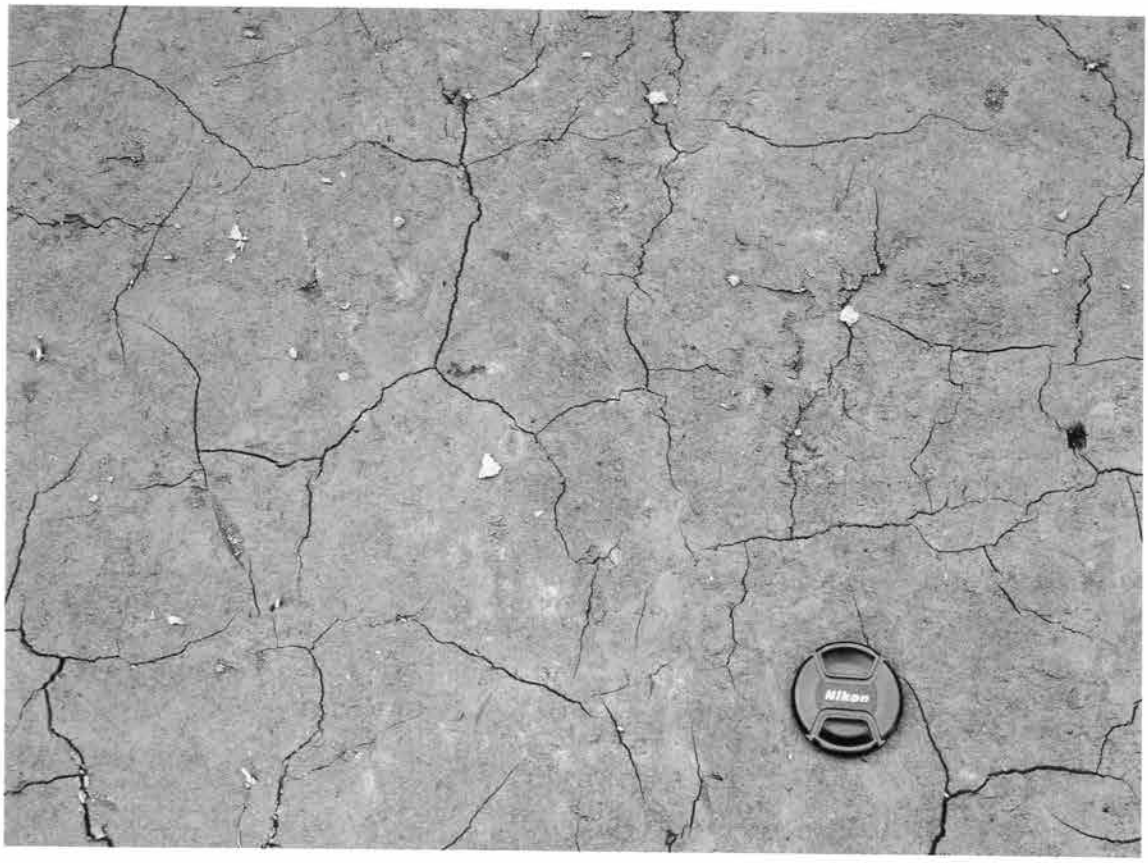
第５層上面水田検出状況（北から）



第4c層の作土を除去した水田全景（北から）



第4c層基底面での杭１・２検出状況(東から)



第５層上面のサンドパイプ

城東区関目二丁目９－７における建設工事に伴う
関目２丁目所在遺跡発掘調査(SE15－１)報告書

調査個所	大阪市城東区関目２丁目９－７
調査面積	120㎡
調査期間	平成27年10月26日～11月５日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水 和明、櫻田 小百合

1)調査に至る経緯と経過

調査地は新発見の奈良時代から中世にかけての集落遺跡である関目2丁目所在遺跡に位置する(図1)。西900mには弥生時代中期後葉の遺構・遺物が確認されている榎並城跡伝承地、北東900mには弥生時代中期の集落を中心として、弥生時代～江戸時代の遺構・遺物が検出されている森小路遺跡がある。調査地周辺における調査は少ないが、北約800mの地点でSE11－1次調査が行われており、平安時代後葉～末の溝が検出された結果、関目4丁目所在遺跡とされた[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が実施した試掘調査において布目瓦1が出土したため、本調査を実施したものである。平成27年10月26日に調査を開始し、当初90㎡の調査を予定していたが、大阪市教育委員会と協議して、遺構・遺物の分布状況を把握するため一部拡張して調査を行い、最終調査面積は120㎡となった(図2)。調査は、現代～近世の地層である第0～4層を重機により掘削し、第5層上面で平面調査を行った。実測図の作成および写真撮影による記録作業と並行して遺構の掘下げを行った後、第5層の堆積状況を確認するため一部深掘りトレンチを掘削して断面観察を行い、地層断面図および写真撮影による記録を行った。

基準点はMagellan社製Pro Mark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4、図版上・中)

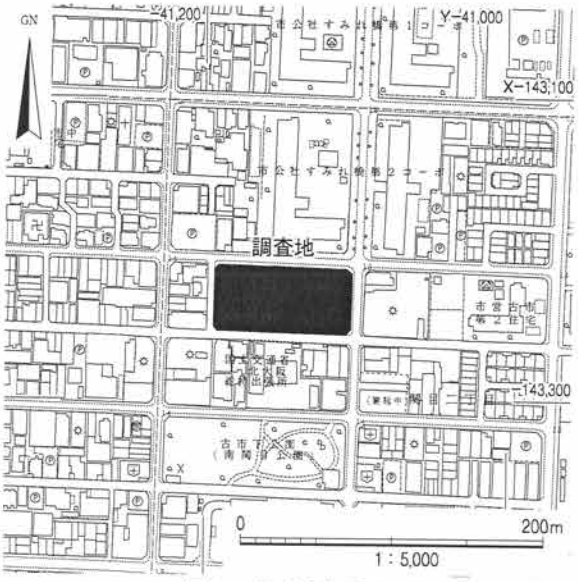


図1　調査地位置図

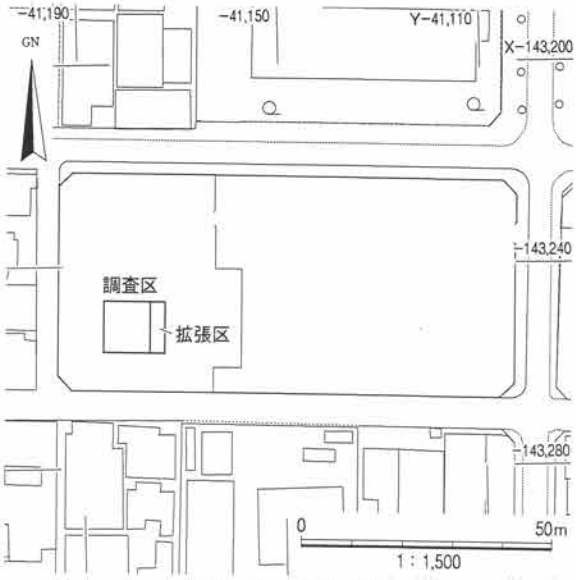
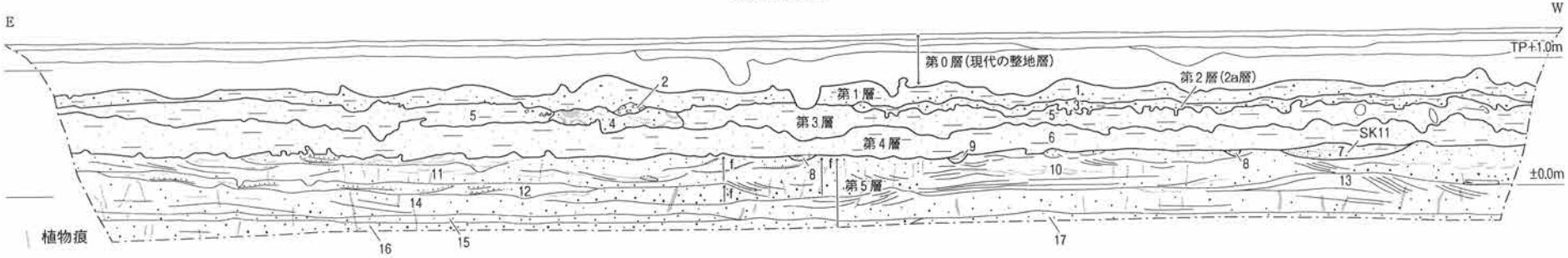


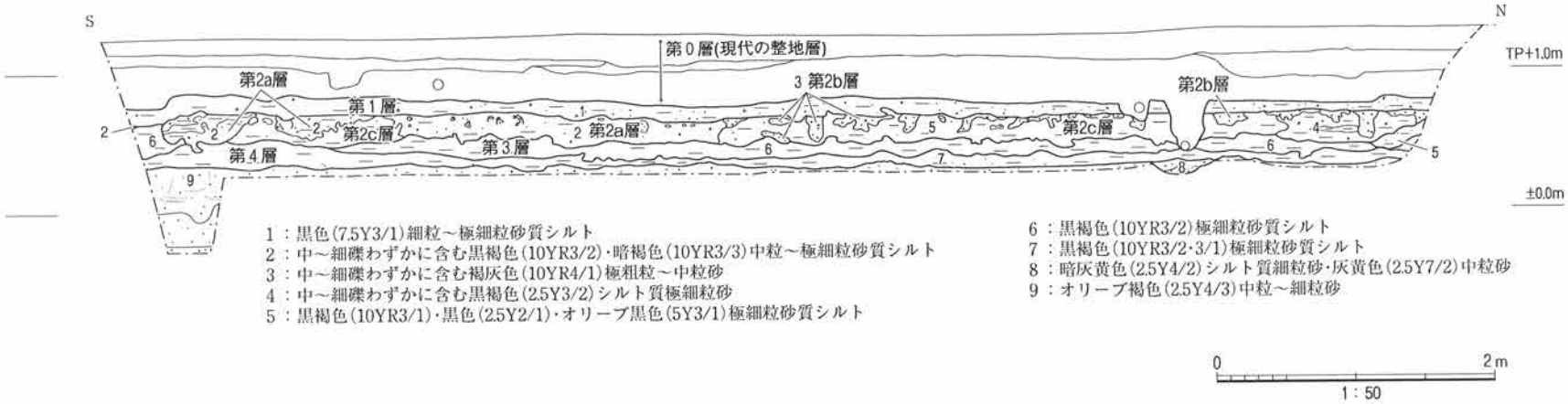
図2　調査区位置図

南壁地層断面



1：中～細礫わずかに含む黒褐色(2.5Y2/1)細粒～極細粒砂質シルト
2：極細粒砂質シルト偽礫含む黒褐色(2.5Y3/1)細粒～極細粒砂質シルト
3：中～細礫わずかに含むオリーブ黒色(5Y3/1)中粒～極細粒砂質シルト
4：灰オリーブ色(5Y5/2)中粒～細粒砂
5：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト
6：黒色(2.5Y2/1)極細粒砂質シルト
7：灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂・中粒砂
8：植物片含むオリーブ褐色(2.5Y5/3)・暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質細粒砂
9：植物片含むオリーブ褐色(2.5Y5/3)・暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質細粒砂
10：灰白色(2.5Y8/1)極粗粒～細粒砂
11：黒褐色(2.5Y3/2)中粒～細粒砂
12：黒褐色(10YR3/1)わずかにシルト質細粒砂・中粒砂
13：灰白色(5Y7/1)粗粒～中粒砂
14：灰白色(2.5Y7/1)・灰黄色(6/2)中粒砂主の粗粒～中粒砂
15：黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂
16：黄灰色(2.5Y6/1)・黄灰色(4/1)粗粒砂主の粗粒～中粒砂
17：黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂

西壁地層断面



1：黒色(7.5Y3/1)細粒～極細粒砂質シルト
2：中～細礫わずかに含む黒褐色(10YR3/2)・暗褐色(10YR3/3)中粒～極細粒砂質シルト
3：中～細礫わずかに含む褐灰色(10YR4/1)極粗粒～中粒砂
4：中～細礫わずかに含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質極細粒砂
5：黒褐色(10YR3/1)・黒色(2.5Y2/1)・オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂質シルト
6：黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルト
7：黒褐色(10YR3/2・3/1)極細粒砂質シルト
8：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂・灰黄色(2.5Y7/2)中粒砂
9：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～細粒砂

図3　調査区南・西壁地層断面図

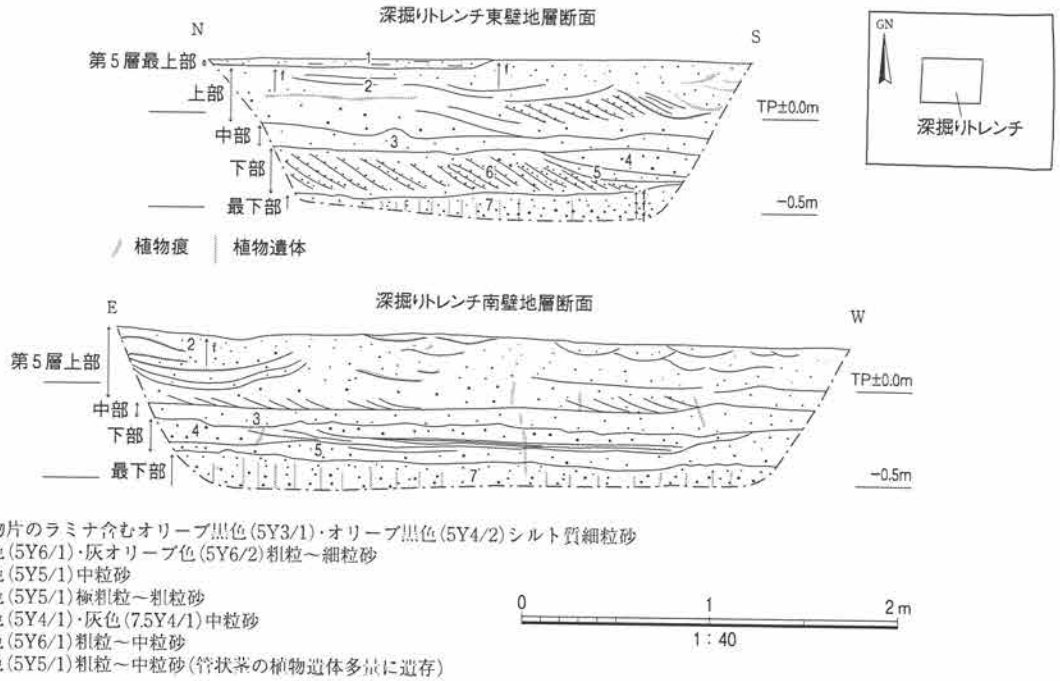


図4　深掘りトレンチ地層断面図

調査地における現地表面の標高はTP＋1.2～1.3mとほぼ平坦である。

第0層：現代の整地層で、層厚は31～53cmである。

第1層：中～細礫をわずかに含む黒褐色(2.5Y2/1)・黒色(7.5Y3/1)細粒～極細粒砂質シルトからなる近現代の耕作土である。層厚は最大で29cmである。

第2層：第2a・2b・2c層の3層に細分できる。第2a層は、中～細礫をわずかに含む黒褐色(10YR3/2)・暗褐色(10YR3/3)・オリーブ黒色(5Y3/1)中粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大で22cmである。第2b層の水成層が堆積した後に耕された耕作土である。第2b層は、中～細礫をわずかに含む褐灰色(10YR4/1)極粗粒～中粒砂からなる水成層で、層厚は最大20cmである。第2c層は、黒褐色(10YR3/1)・黒色(2.5Y2/1)・オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂質シルトからなる耕作土で、層厚は最大24cmである。これらの第2層からは、口縁部内面に四方襷文を施す肥前磁器の染付碗や関西系陶器碗が出土しており、18世紀後葉の地層とみられる。

第3層：黒褐色(10YR3/2・2.5Y3/1)極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大32cmである。第4層上部を耕した耕作土である。土師器・肥前磁器碗が出土している。肥前磁器の草花文を施す染付碗の年代から18世紀中葉頃の地層とみられる。

第4層：黒褐色(10YR3/2・3/1)・黒色(2.5Y2/1)極細粒砂質シルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は3～32cmである。土師器・瓦器・丹波焼・肥前磁器・平瓦が出土している。肥前磁器の一重網目文を施す染付碗の年代から17世紀中葉～18世紀前葉頃の地層とみられる。

第5層：極粗粒～細粒砂・わずかにシルト質細粒砂からなる水成層で、層厚は86cm以上である(図4)。最下部は粗粒～中粒砂からなり、上方細粒化する単位が複数認められる。下位の地層に生息したとみられる管状の茎の植物遺体が直立した状態で多量に認められたことから、第5層最下部堆積以前には一時的に比較的安定した水辺の環境にあったものとみられる。下部は極粗粒～中粒砂からな

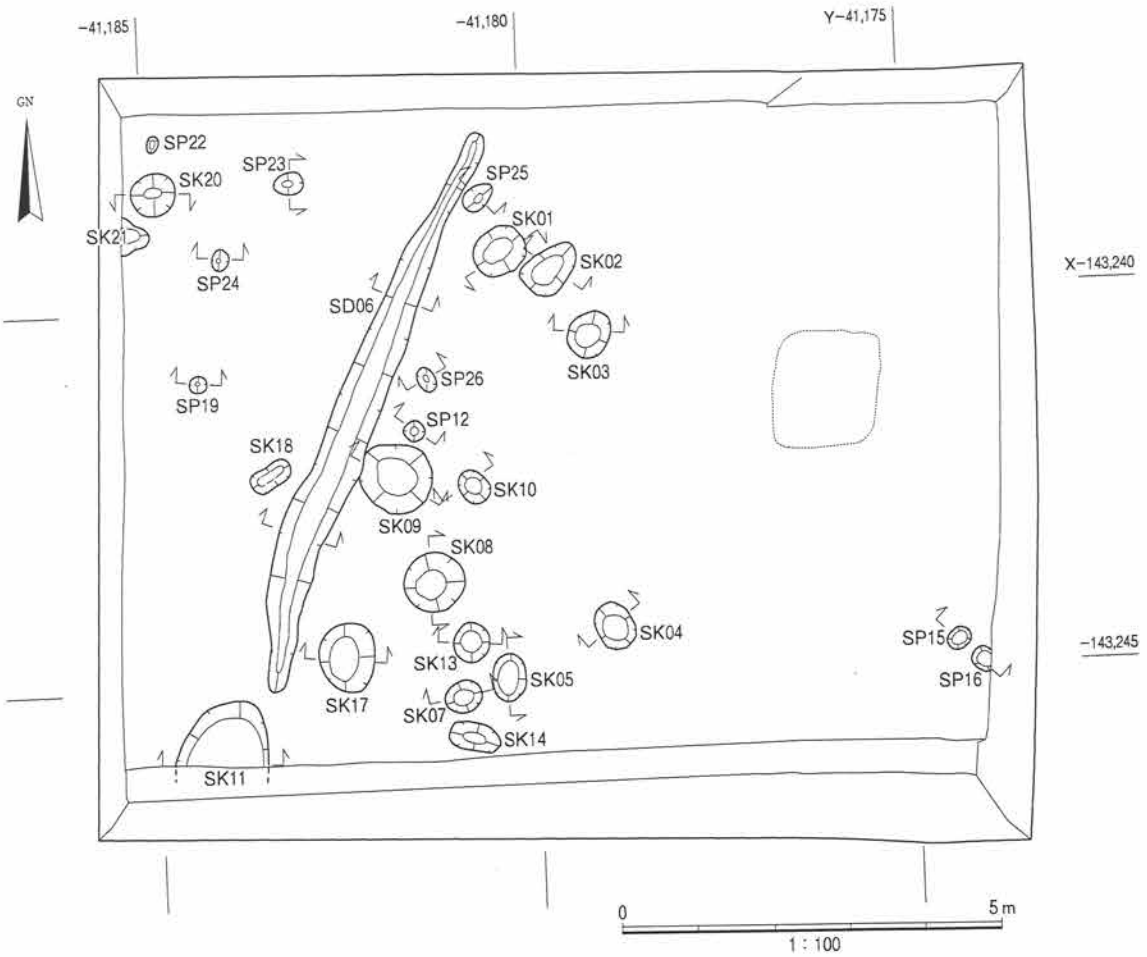


図5　遺構平面図

り、南・西へ傾くフォアセットラミナが認められ、流向はS27° Wである。中部は中粒砂からなる。上部は粗粒～細粒砂からなり、下半では南・西へ傾くフォアセットラミナが顕著に認められ、流向はS57° Wであった。最上部は植物片のラミナを含むシルト質細粒砂からなり、流速の減速が認められる。これら第5層は流向や流速を変えながらも概ね北東から南西方向の流向により堆積しており、淀川デルタの堆積物とみられる。遺物は出土しておらず、堆積時期は不明である。

ii)遺構と遺物(図5～8、図版上・中)

第5層上面でSD06、SK01～05、07～11、13・14・17・18・20・21、SP12・15・16・19・22～26を検出した。

SD06は、最大幅0.59m、深さ0.12mの北東－南西方向の溝である。

SK01は直径0.63～0.72m、深さ0.11mの円形の土壙である。SK02は北西－南東0.55m、北東－南西0.80mの土壙で、深さは0.09mである。SK03は直径0.54～0.64m、深さ0.10mの円形の土壙、SK04は直径0.50～0.65m、深さ0.10mの土壙である。SK05は直径0.45～0.64m、深さ0.05mの長円形の浅い土壙である。SK07は直径0.42～0.50m、深さ0.08mの円形の土壙、SK08は直径0.80m、深さ0.15mの円形の土壙である。SK09は直径0.90～0.96m、深さ0.08mの浅い土壙である。SK10は直径0.36～0.48m、深さ0.11mの土壙、SK11は東西1.23m以上、南北0.90m以上の土壙で、深さは0.11mある。SK13は直径0.48～0.52m、深さ0.10mの円形の土壙、SK14は直径0.36～0.70mの長円形の土

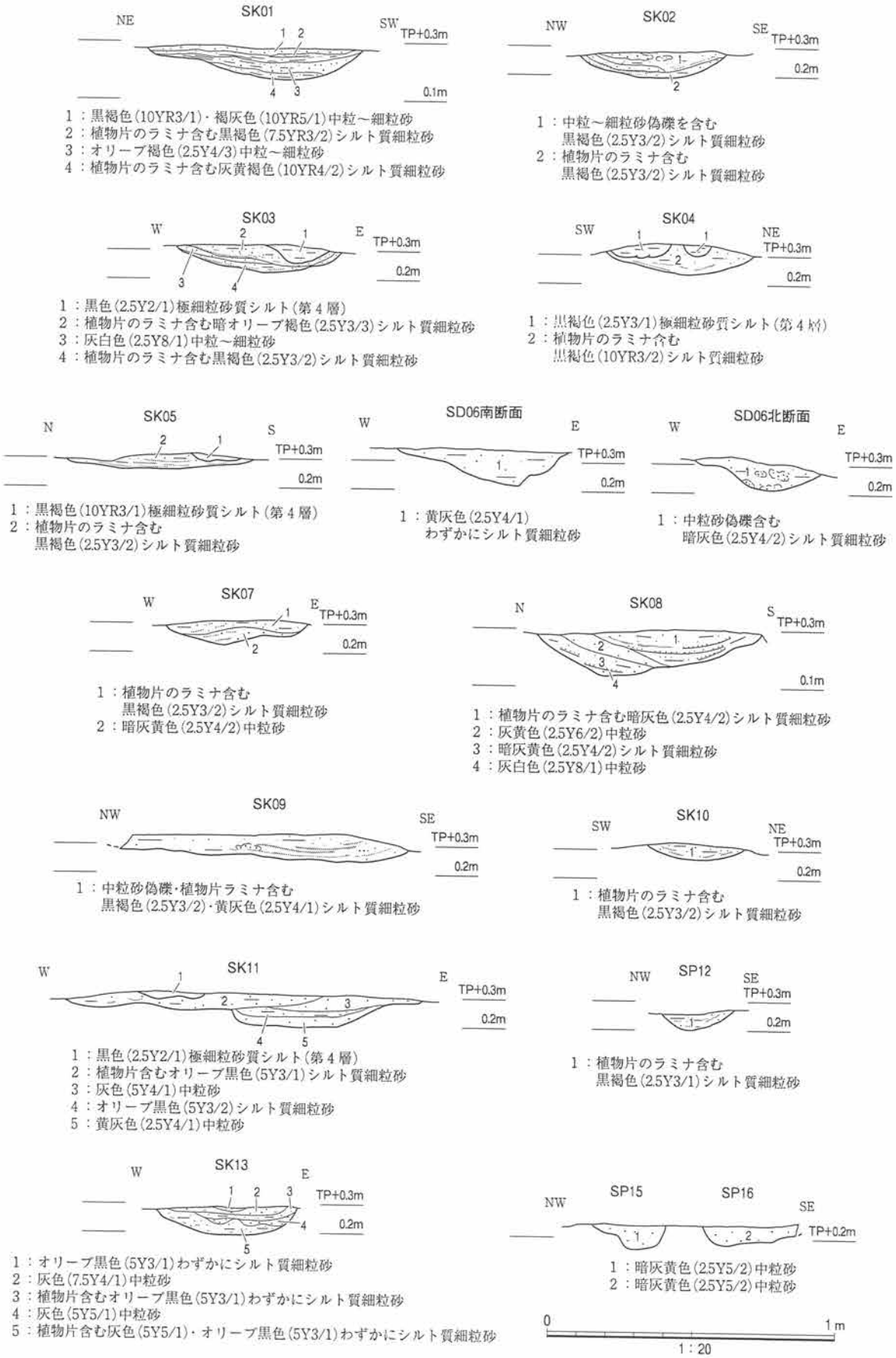

SK01
NE
SW
TP+0.3m
0.1m
1：黒褐色(10YR3/1)・褐灰色(10YR5/1)中粒～細粒砂
2：植物片のラミナ含む黒褐色(7.5YR3/2)シルト質細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～細粒砂
4：植物片のラミナ含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂
SK02
NW
SE
TP+0.3m
0.2m
1：中粒～細粒砂偽礫を含む
黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂
2：植物片のラミナ含む
黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂
SK03
W
E
TP+0.3m
0.2m
1：黒色(2.5Y2/1)極細粒砂質シルト(第4層)
2：植物片のラミナ含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂
3：灰白色(2.5Y8/1)中粒～細粒砂
4：植物片のラミナ含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂
SK04
SW
NE
TP+0.3m
0.2m
1：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト(第4層)
2：植物片のラミナ含む
黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂
SK05
N
S
TP+0.3m
0.2m
1：黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト(第4層)
2：植物片のラミナ含む
黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂
SD06南断面
W
E
TP+0.3m
0.2m
1：黄灰色(2.5Y4/1)
わずかにシルト質細粒砂
SD06北断面
W
E
TP+0.3m
0.2m
1：中粒砂偽礫含む
暗灰色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂
SK07
W
E
TP+0.3m
0.2m
1：植物片のラミナ含む
黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
SK08
N
S
TP+0.3m
0.1m
1：植物片のラミナ含む暗灰色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂
2：灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂
4：灰白色(2.5Y8/1)中粒砂
SK09
NW
SE
TP+0.3m
0.2m
1：中粒砂偽礫・植物片ラミナ含む
黒褐色(2.5Y3/2)・黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂
SK10
SW
NE
TP+0.3m
0.2m
1：植物片のラミナ含む
黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂
SK11
W
E
TP+0.3m
0.2m
1：黒色(2.5Y2/1)極細粒砂質シルト(第4層)
2：植物片含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂
3：灰色(5Y4/1)中粒砂
4：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂
5：黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂
SP12
NW
SE
TP+0.3m
0.2m
1：植物片のラミナ含む
黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂
SK13
W
E
TP+0.3m
0.2m
1：オリーブ黒色(5Y3/1)わずかにシルト質細粒砂
2：灰色(7.5Y4/1)中粒砂
3：植物片含むオリーブ黒色(5Y3/1)わずかにシルト質細粒砂
4：灰色(5Y5/1)中粒砂
5：植物片含む灰色(5Y5/1)・オリーブ黒色(5Y3/1)わずかにシルト質細粒砂
SP15
SP16
NW
SE
TP+0.2m
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂
0
1 m
1：20

図6　遺構断面図(1)

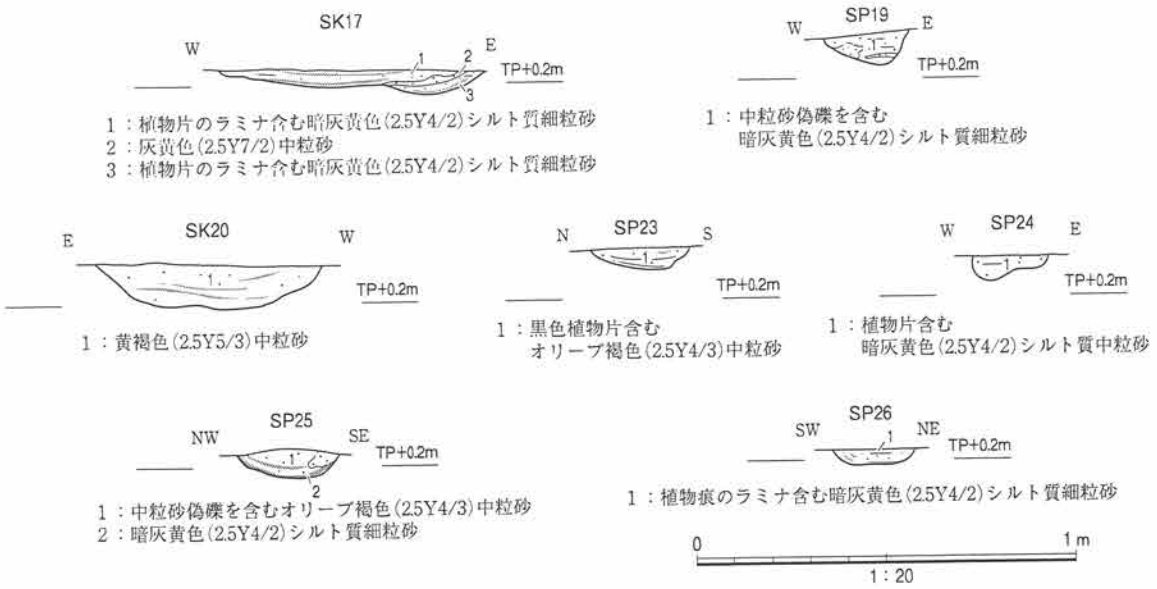


図7　遺構断面図(2)

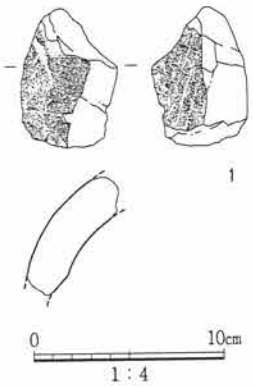


図8　出土遺物実測図

壙である。SK17は直径0.70～0.90mの土壙で、深さは0.06mである。SK18は直径0.28～0.58mの土壙、SK20は直径0.58mの円形の土壙で、深さは0.12mである。SK21は東西0.36m以上、南北0.38mの土壙である。これらの遺構はいずれも自然堆積により埋没しており、明確な加工時形成層や機能時堆積層、遺物を含まないことから人為的な遺構ではない可能性もある。

SP12・15・16・19・22～26は直径0.15～0.45mの小穴である。

これらの遺構の年代については、第4層が17世紀中葉～18世紀前葉頃とみられることからそれ以前の遺構であるが、いずれの遺構も出土遺物がなく詳細な年代については不明である。なお、大阪市教育委員会の行った試掘調査において第5層上面で丸瓦1が出土している。凹面にはコビキAが認められ、わずかに布目痕が残る。

3)まとめ

今回の調査では明確な近世以前の遺構であるSD06を検出した。遺構の年代を示す遺物の出土はなく詳細な年代は特定できなかったが、今後周辺における調査事例の蓄積により、調査地周辺における離水時期や人間活動の開始時期が明らかになることで、森小路遺跡や榎並城跡伝承地など周辺遺跡の状況と合わせて河内湖北岸域における地形環境の変化と人間活動について明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2013、「関目遺跡発掘調査(SE11－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.481－486

南壁地層断面
（北東から）

深掘りトレンチ
南壁地層断面
（北から）

遺構全景（西から）

阿倍野区阿倍野筋四丁目13－12他３筆における建設工事に伴う
阿倍野筋南遺跡発掘調査（AS15－１）報告書

調査個所	大阪市阿倍野区阿倍野筋四丁目13－12他３筆
調査面積	36㎡
調査期間	平成27年７月９日～７月13日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

大阪市阿倍野区に所在する阿倍野筋南遺跡は、南北に延びる上町台地の尾根筋に立地する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。現地表の標高は約16～17mで、台地の頂上部に当る。遺跡の東側は河内平野に向かって緩やかに下降する斜面地であるのに対し、西側は縄文海進の浸食により南北方向に急な波食崖が形成されている。

本調査地は遺跡範囲の東域に当る(図1)。調査地の北方では、AS89－1・97－8・98－2・7・99－3・4・06－2・10－1次調査などが行われ、庄内式期から布留式期にかけての竪穴建物・掘立柱建物が検出されている[大阪市文化財協会1999、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、2012]。なかでも、北50mにあるAS06－2次調査地では、当該期の遺構が調査区全体に分布し、庄内式期と布留式古段階の竪穴建物1棟が検出され、遺跡西半のみならず、東半にも集落域が拡がっていたことが明らかとなった。また、古墳時代中期の土器集積土壙も検出され、前期から継続して近辺に集落が営まれた可能性が高くなった。

図1　調査地位置図

大阪市教育委員会が2015年6月23日に行った試掘調査の結果、現地表下約0.6mで、近世以前の可能性がある遺構が検出され、本調査を実施することになった。当初、東西8m、南北5mの調査区を設定する予定であったが、土置き場を十分に確保できない恐れがあり、関係者との協議の上、東西6.6m、南北5.5mにあらため、7月9日から調査を開始した。

現代盛土ならびに第2層を重機によって掘削し、その後の掘下げはすべて人力によった。第5層(地山)上面で遺構の平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、

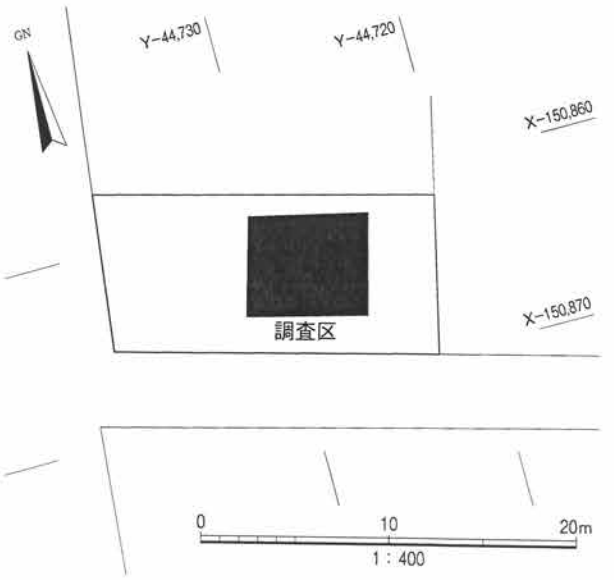


図2　調査区位置図

同月13日に調査を終え、埋戻しを行い、現地における作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高は T.P.値(東京湾平均海面値)である。また、図2・4で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

2)調査の結果

i)層序

調査地の現地表面はTP+16.9m前後とほぼ平坦である。調査では現地表下約0.8m (TP+16.1m)までの地層を確認した。各層の特徴は次の通りである。

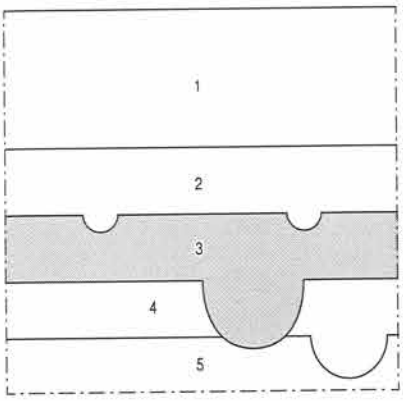


図3　地層と遺構の模式図

第1層:現代盛土・攪乱層である。

第2層:黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトからなるしまりの悪い作土層で、層厚は最大25cmである。遺物を含まず、時期は不明である。近世以降の可能性が高い。下面で耕作痕跡を確認した。

第3層:暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトからなる遺物包含層で、層厚は最大15cmである。瓦器小片を含む。下部は植物擾乱の影響が顕著に見られた。

第4層:褐色(10YR4/4)粘土質シルトからなり、層厚は最大20cmである。遺物は確認できなかった。下部は植物擾乱の影響が顕著に見られた。

第5層:明赤褐色(5 YR5/6)粘土質シルトからなる地山層である。層厚は20cm以上である。

ii)遺構と遺物

・第4層上面遺構

SX07　調査区東北部で検出した、長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.2mの不定形な穴である。埋土は地山偽礫が混じる黄褐色シルトで、底面に木根跡が観察でき、倒木などによって生じたものと考えられる。

・第5層上面遺構

SD01　調査区東南隅で検出した、幅0.7m、深さ0.2m、長さ2.0m以上の北東－南西方向の溝状遺構である。埋土は暗褐色粘土質シルトで、遺物は確認できなかった。埋土と地山の境界が不明瞭で、底面は凹凸が著しく、後述するSX02～06と同様、木根跡など自然による窪みの可能性もある。

SX02～06　調査区西北部で検出した暗褐色粘土質シルトを埋土とする、直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mの穴である。いずれも埋土と地山の境界が明瞭でなく、植物擾乱が著しく、木の根跡と考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、中世に属する可能性の高い第3層を確認できたものの、周辺で検出されている弥生時代末～古墳時代初頭の遺構は確認できなかった。北50mで竪穴建物を含む遺構が濃密に分布して

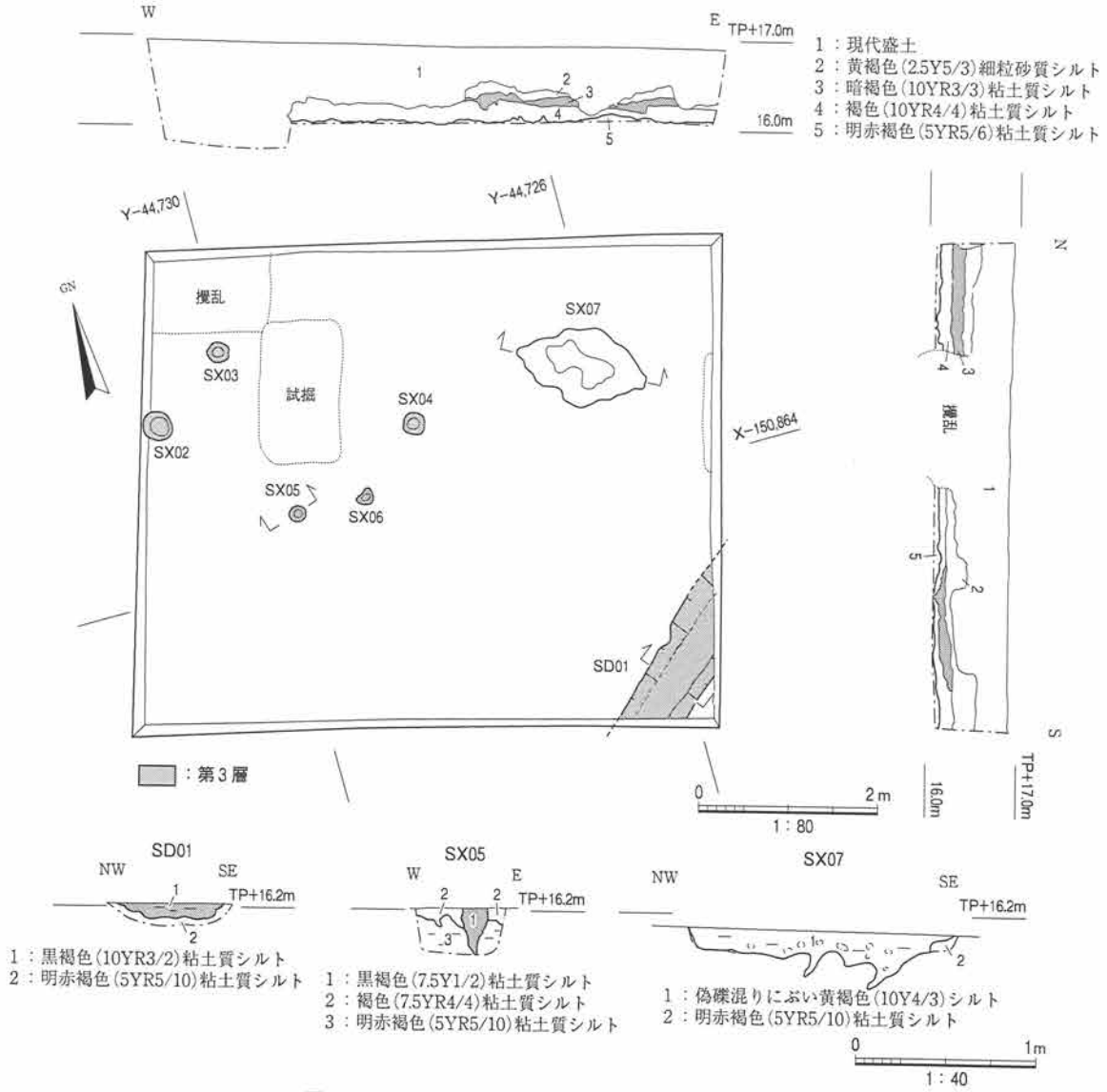


図4　北・東壁地層断面および遺構平面・断面図

いる状況と対照的である。調査地がたまたま弥生・古墳時代集落の空隙地に当たったのか、あるいは集落の縁辺部に位置するのか、その判断は周辺調査の進展を待ちたい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2001、「駒井勝治氏による建設工事に伴う阿倍野筋遺跡発掘調査(AS99－4)報告書」:『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.75－79

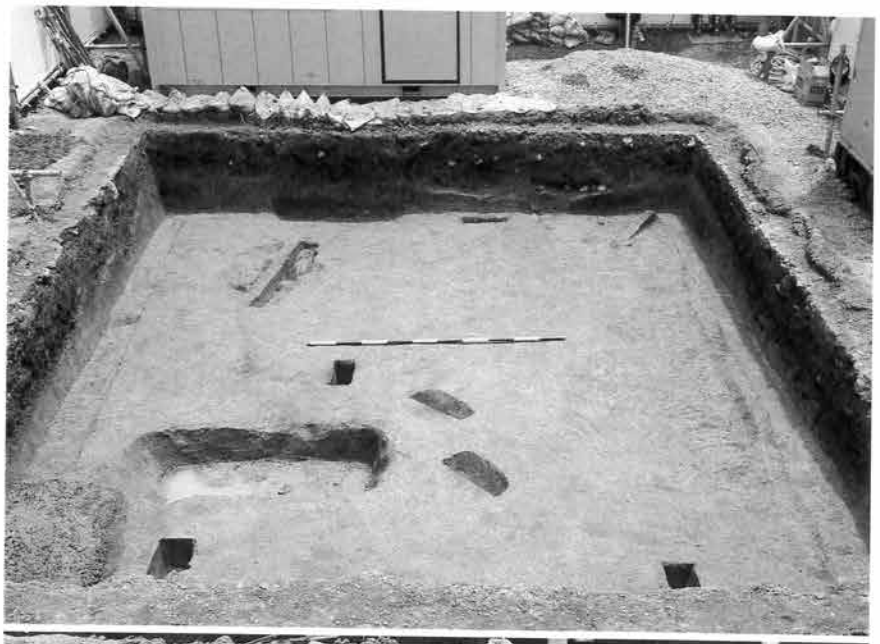
2008、「阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS06－2)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87－95

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「阿倍野区阿倍野筋四丁目における建設工事に伴う阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS10－1)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.59－65

2012、「阿倍野区阿倍野筋三丁目における建設工事に伴う阿倍野筋北遺跡B地点発掘調査(AS10－3)報告書」:『平成22年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.375－380

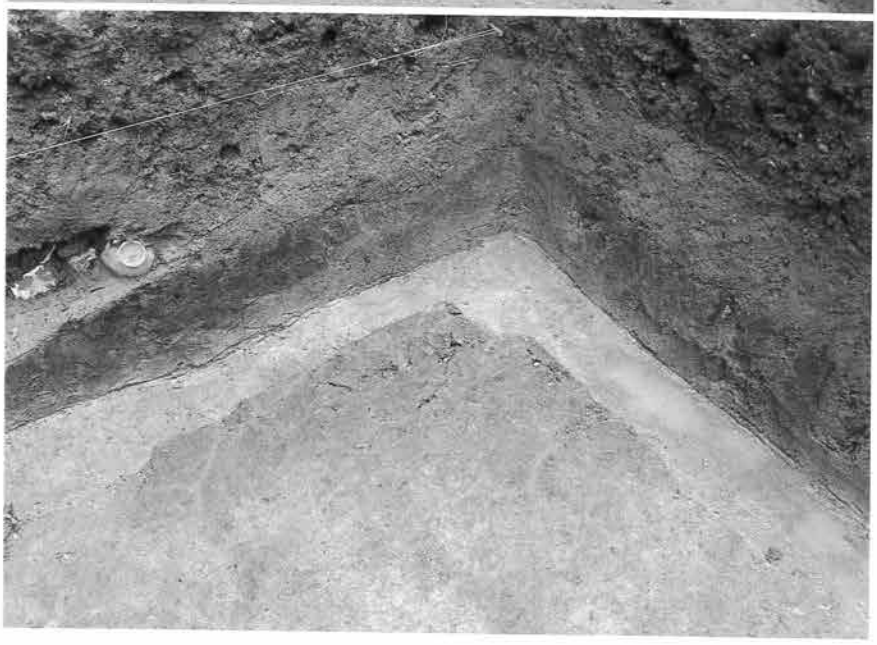
大阪市文化財協会1999、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告書』

調査区全景
（西から）



北壁地層断面
（南から）

SD01検出状況
（北西から）



住吉区山之内三丁目８－１・８－５・８－６における建設工事に伴う

山之内遺跡発掘調査（YM15－１）報告書

調査個所	大阪市住吉区山之内3丁目8－1・8－5・8－6
調査面積	206㎡
調査期間	平成27年8月27日～9月11日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、櫻田小百合

1)調査に至る経緯と経過

山之内遺跡は後期旧石器～江戸時代の複合遺跡である。調査地は遺跡西部に位置し、周辺ではYM81－3・88－21・86－3・90－5次調査[大阪市文化財協会1988・1998]が行われている(図1)。これらの調査では6世紀後葉～7世紀中葉の掘立柱建物が検出されており、今回の調査地においても同時期の遺構が検出されることが期待された。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が行った試掘調査において古代の遺物が確認されたため、本調査を実施したものである。調査は平成27年8月27日に開始した。現代の整地層および第1～5層の現代～近世の耕作土を重機により掘削し、第6層上面以下の遺構および地層を人力により掘り下げた。なお、後述する拡張区2については各地層の年代を把握するため、第3～5層を人力により掘り下げた。これらの作業と並行して実測図の作成および写真撮影による記録作業を行い、9月11日に調査を完了した。調査面積は当初156㎡を予定していたが、遺構の状況をより広範囲において確認するため大阪市教育委員会と協議し、拡張区1・拡張区2の計50㎡の拡張を行い、最終調査面積は206㎡となった(図2)。

基準点はMagellan社製Pro Mark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP+○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3～5、図版1)

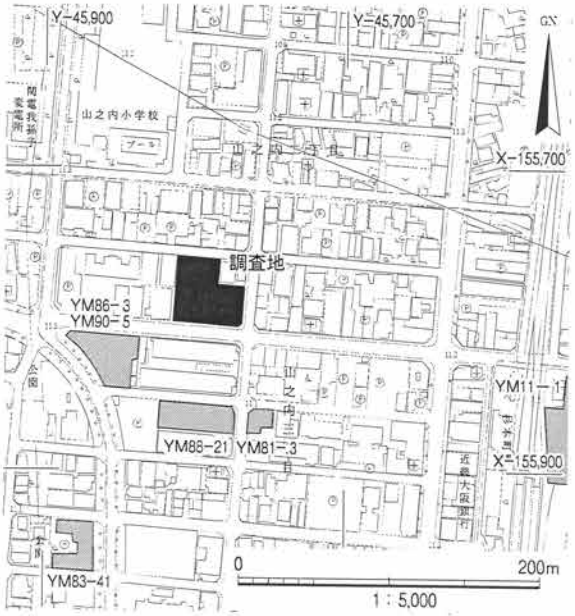


図1　調査地位置図

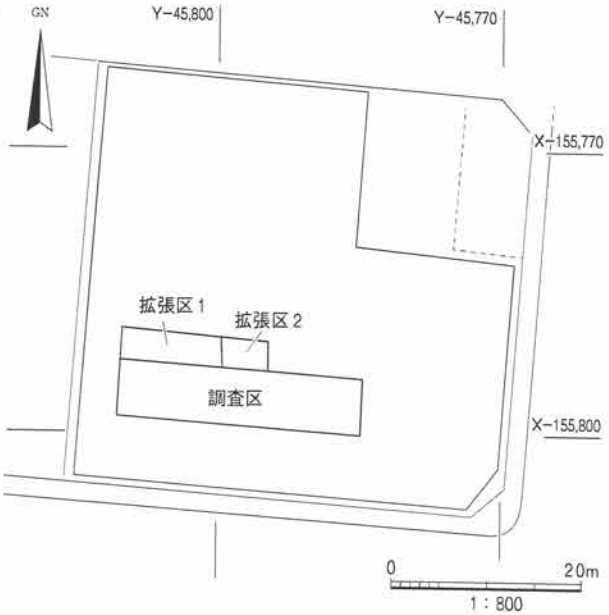


図2　調査区位置図

調査地における標高はTP+11m前後でほぼ平坦である。

第０層　現代の整地層で、層厚は２～42cmである。

第１層　中～細礫を含む黒色(2.5Y2/1)・黒褐色(2.5Y3/1・3/2)シルト質細粒～極細粒砂からなる現代の作土層である。層厚は最大24cmである。

第２層　幕末とみられる作土層で、第2a～2e層に細分できる。第2a層は中～細礫をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒～細粒砂質シルトからなり、層厚は最大９cmである。第2b層は炭をわずかに含む黄灰色(2.5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大10cmである。第2c層はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～細粒砂質シルトからなり、層厚は最大22cmである。第2d層は中～細礫・少量の炭を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大30cmである。第2e層は中～細礫をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)・褐色(10YR4/4)・暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～細粒砂質シルトからなり、層厚は最大29cmである。

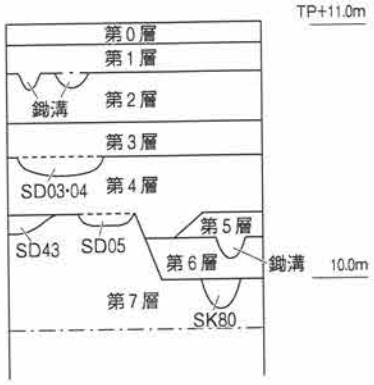


図３　地層と遺構の関係図

第３層　地山偽礫・中～細礫をわずかに含む褐灰色(10YR4/1)・にぶい黄褐色(10YR4/3)・褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト・細粒～極細粒砂質シルトからなる耕作土層である。層厚は最大30cmである。土師器・瓦質土器・平瓦・丸瓦・肥前磁器・鋳造関連遺物が出土しており、肥前磁器染付碗の年代から17世紀後葉の地層とみられる。

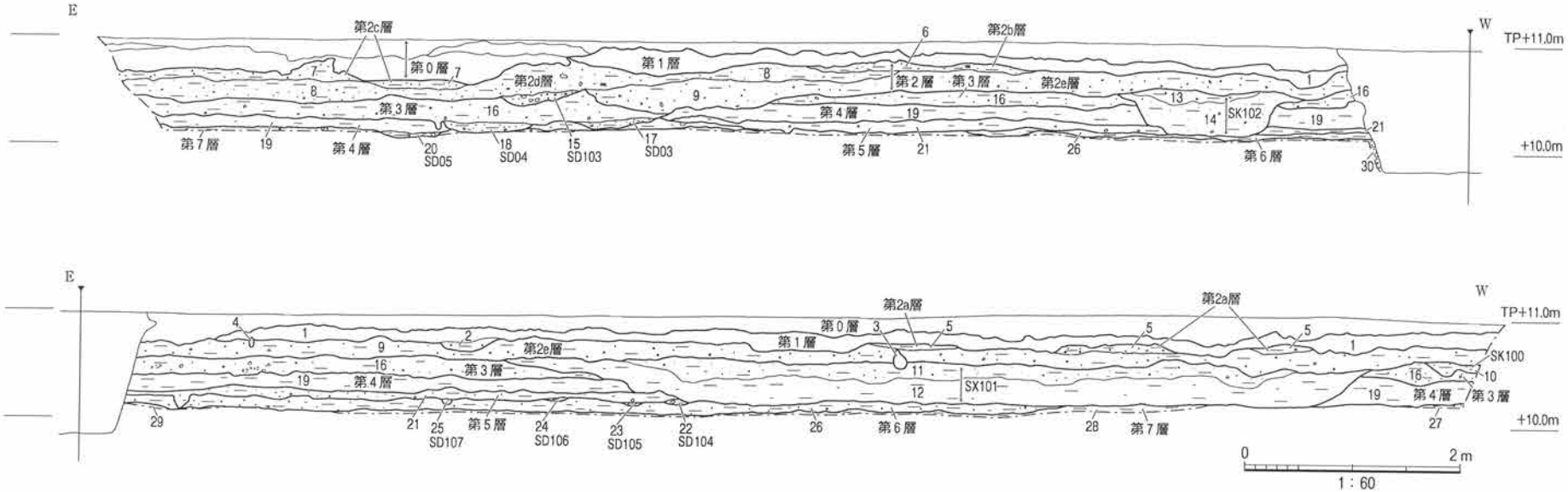
第４層　にぶい黄褐色(10YR4/3)・灰黄褐色(10YR5/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)・褐色(10YR4/4)極細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は最大32cmである。土師器・須恵器・備前焼擂鉢・瀬戸美濃焼陶器碗・平瓦、鋳造関連遺物が出土しており、このうち瀬戸美濃焼陶器碗は16世紀以降に属する。

第５層　中～細礫・少量の炭・第６層偽礫を含む暗褐色(7.5YR3/4)・灰黄褐色(10YR4/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は最大22cmである。土師器・須恵器・瀬戸美濃焼陶器・鋳造関連遺物が出土しており、瀬戸美濃焼陶器は稜皿とみられ豊臣期に属する。

このほか第４・５層から土師器・須恵器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・蛸壺・土錘・炉壁とみられる鋳造関連遺物が出土している。このうち瀬戸美濃焼陶器が近世初頭頃に属することから第４・５層は16～17世紀前半の地層である。

第６層　中～細礫をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/3)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルトからなる地層で、調査区中央部と西北部の浅い低地部に分布した。層厚は最大15cmである。第７層の上部が擾乱されて形成された古土壌あるいは浅い低地部に堆積した地層とみられる。土師器・須恵器・蛸壺が出土している。須恵器には杯Hの蓋、長頸壺、甕などが含まれており、概ね６世紀後葉～７世紀に属する。

第７層　黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルト、にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト、中



1：中～細礫を含む黒色(2.5Y2/1)・黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒～極細粒砂（第1層）
2：細礫をわずかに含むオリーブ黒色(5Y3/1)細粒～極細粒砂質シルト
3：中～細礫を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒～極細粒砂
4：中～細礫を含む暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒～極細粒砂
5：中～細礫をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒～細粒砂質シルト（第2a層）
6：炭をわずかに含む黄灰色(2.5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルト（第2b層）
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～細粒砂質シルト（第2c層）
8：中～細礫・少量の炭を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルト（第2d層）
9：中～細礫をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)・暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～細粒砂質シルト（第2e層）
10：中～細礫をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒～極細粒砂質シルト（SK100）
11：中～細礫をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト（SX101）
12：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂質シルト（SX101）
13：中～細礫をわずかに含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～極細粒砂質シルト（SK102）
14：中礫をわずかに含む灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルト（SK102）
15：中礫を含む明黄褐色(2.5Y6/6)中粒～細粒砂（SD103）
16：地山偽礫・中～細礫をわずかに含む褐灰色(10YR4/1)・にぶい黄褐色(10YR4/3)・褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト（第3層）
17：中～細礫をわずかに含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～極細粒砂質シルト(第3層系埋土)（SD03）
18：中～細礫をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト(第3層系埋土)（SD04）
19：にぶい黄褐色(10YR4/3)・灰黄褐色(10YR5/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂質シルト（第4層）
20：中～細礫をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂質シルト(第4層系埋土)（SD05）
21：中～細礫・少量の炭を含む灰黄褐色(10YR4/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト(マンガン斑顕著)（第5層）
22：第6層偽礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト（SD104）
23：第6層偽礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト（SD105）
24：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト（SD106）
25：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト（SD107）
26：中～細礫をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト（第6層）
27：中～細礫を含む黄褐色(10YR5/6)粗粒～細粒砂質シルト（第7層）
28：黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルト・にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト（第7層）
29：中～細礫を含む黄褐色(2.5Y5/6)・明黄褐色(10YR7/6)粗粒～中粒砂（第7層）
30：中～細礫を含む浅黄色(2.5Y7/3)わずかにシルト質粗粒～中粒砂（第7層）

図4　南壁地層断面図

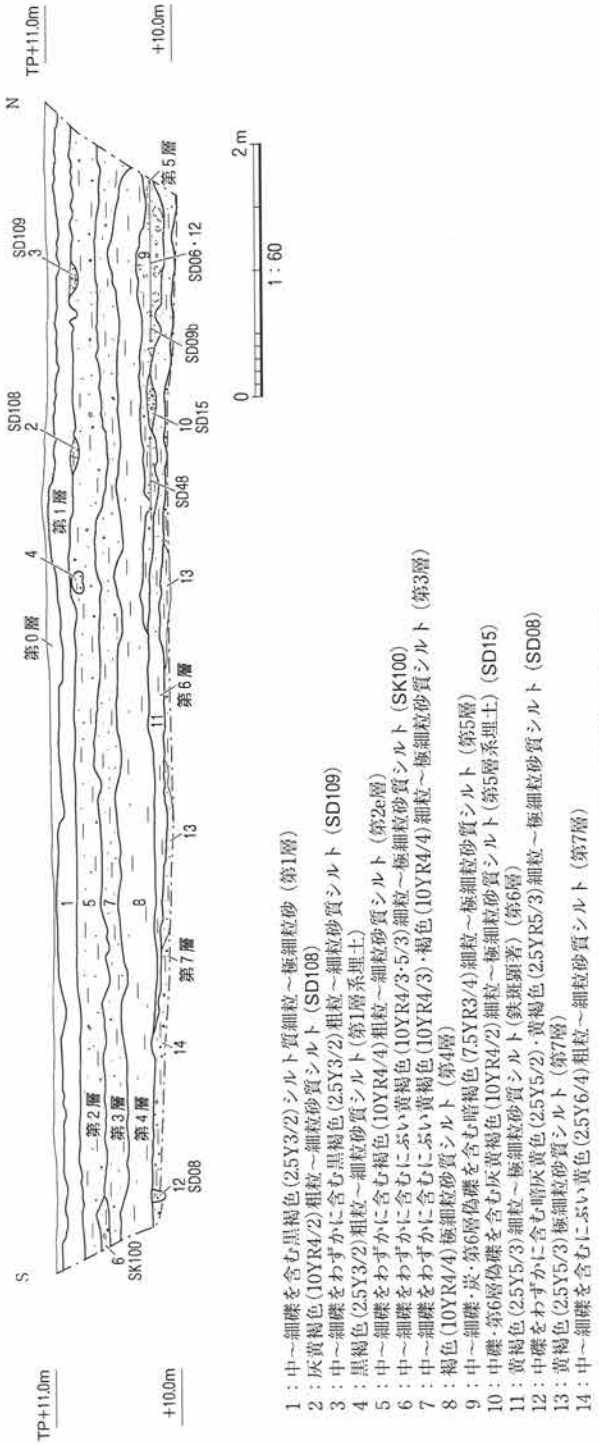


図5　西壁地層断面図

～細礫を含む黄褐色(2.5Y5/6)・明黄褐色(10YR7/6)粗粒～中粒砂、中～細礫を含む浅黄色(2.5Y7/3)わずかにシルト質粗粒～中粒砂、中～細礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒～細粒砂質シルトからなる段丘の構成層で、層厚は31cm以上である。

ii)遺構と遺物

遺構は第6層上面および地山である第7層の上面で検出した。

a)第7層上面遺構(図6～8、図版2上)

第7層上面では6世紀後葉～7世紀の遺構とみられるSP74・76・78・79・81・83～87・89、SK71～73・77・80、SD08・17・43・75を検出した。

SP78は直径0.12m、深さ0.06m、SP79は直径0.08m、深さ0.04mの小穴である。埋土が後述する他の小穴とは異なり暗色であり柱痕の可能性がある。掘形は確認できず、柱痕は掘形の底よりも下がったものと推定される。

SP89は直径0.18m、深さ0.29mの小穴で、規模や深さから柱穴と推定される。柱痕は確認できず、わずかにシルト質粗粒～中粒砂で埋められていることから柱は抜き取られたものと推定される。

SP74・76・81・83～87は第6層に類似する埋土の直径0.16～0.30m、深さ0.02～0.08mの小穴である。

SK71は東西0.77m、南北0.45m以上、深さ0.11mの土壙である。

SK72は東西0.69m以上、南北0.56m以上、深さ0.02mの浅い土壙である。

SK73は東西0.38m、南北0.66m、深さ0.12mの土壙である。須恵器杯Hの蓋1が出土している(図8)。天井部外面にはヘラ

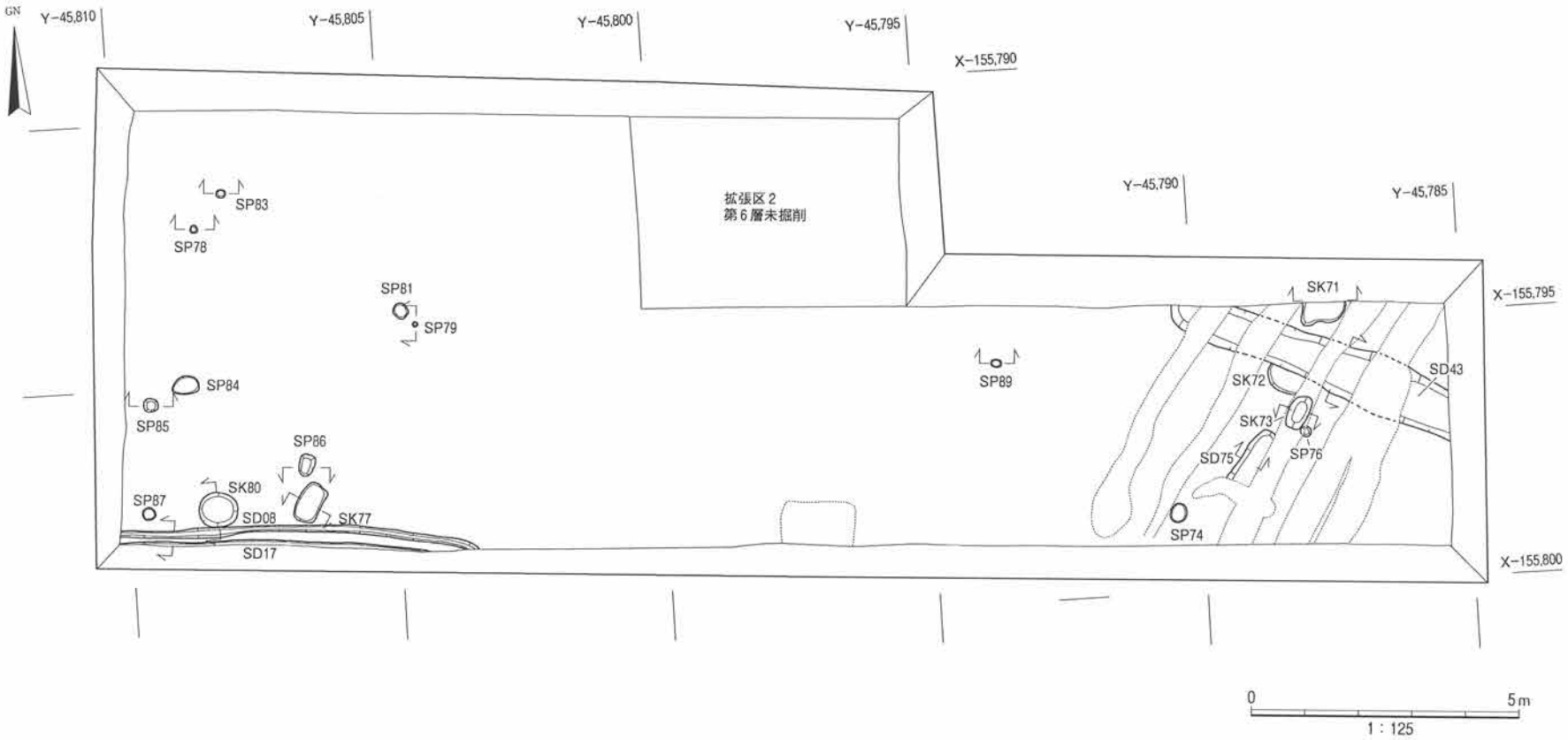


図6　第7層上面遺構平面図

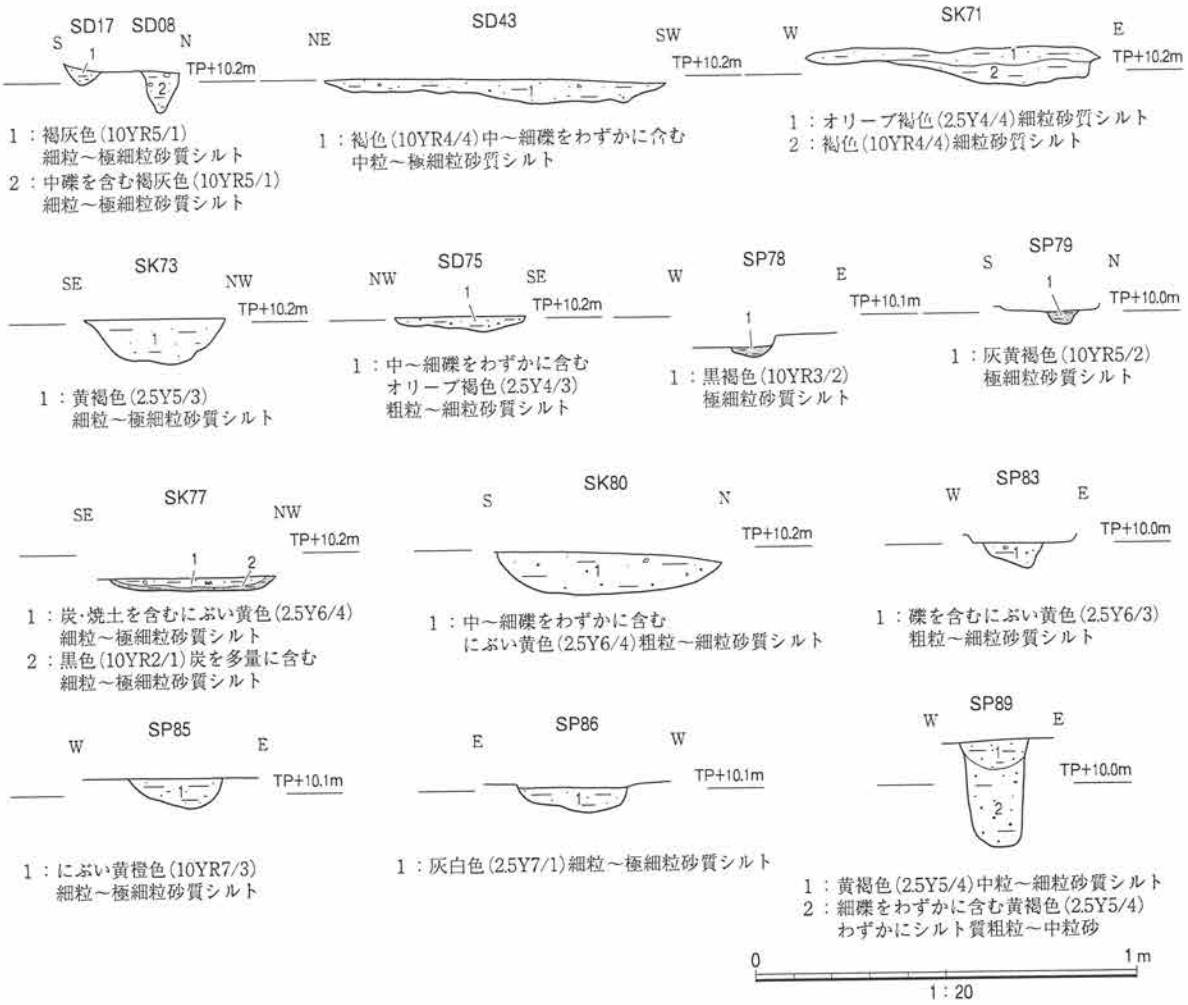


図7　第7層上面遺構断面図

記号がある。TK209型式に属する。

SK77は東西0.45m、南北0.77mの長方形の土壙で、深さは0.04mである。埋土には炭・焼土が含まれ、特に底には炭が多かった。

SK80は東西0.72m、南北0.59mの円形の土壙で、深さは0.12mである。

SD08・17は平行して掘削された東西方向の溝で、SD08は最大幅0.19m、深さ0.11m、SD17は幅0.10m、深さ0.06mである。第7層の上面で検出した遺構であるが、第6層の分布しない西南部で検出したため第6層上面遺構の可能性もある。

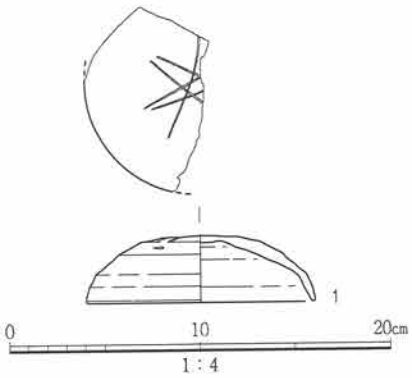


図8　SK73出土遺物実測図

SD43は最大幅1.04mの北西－南東方向の溝で、深さは0.07mである。

SD75は幅0.34m以上、深さ0.04mの溝である。方向は北東－南西方向で、SD43とほぼ垂直に交わる方向である。

b)第6層上面検出遺構(図9・10、図版2下)

第6層上面ではSP36・44・49・51・53～58・61・62・64・68・70・91、SK18・29・31・37・

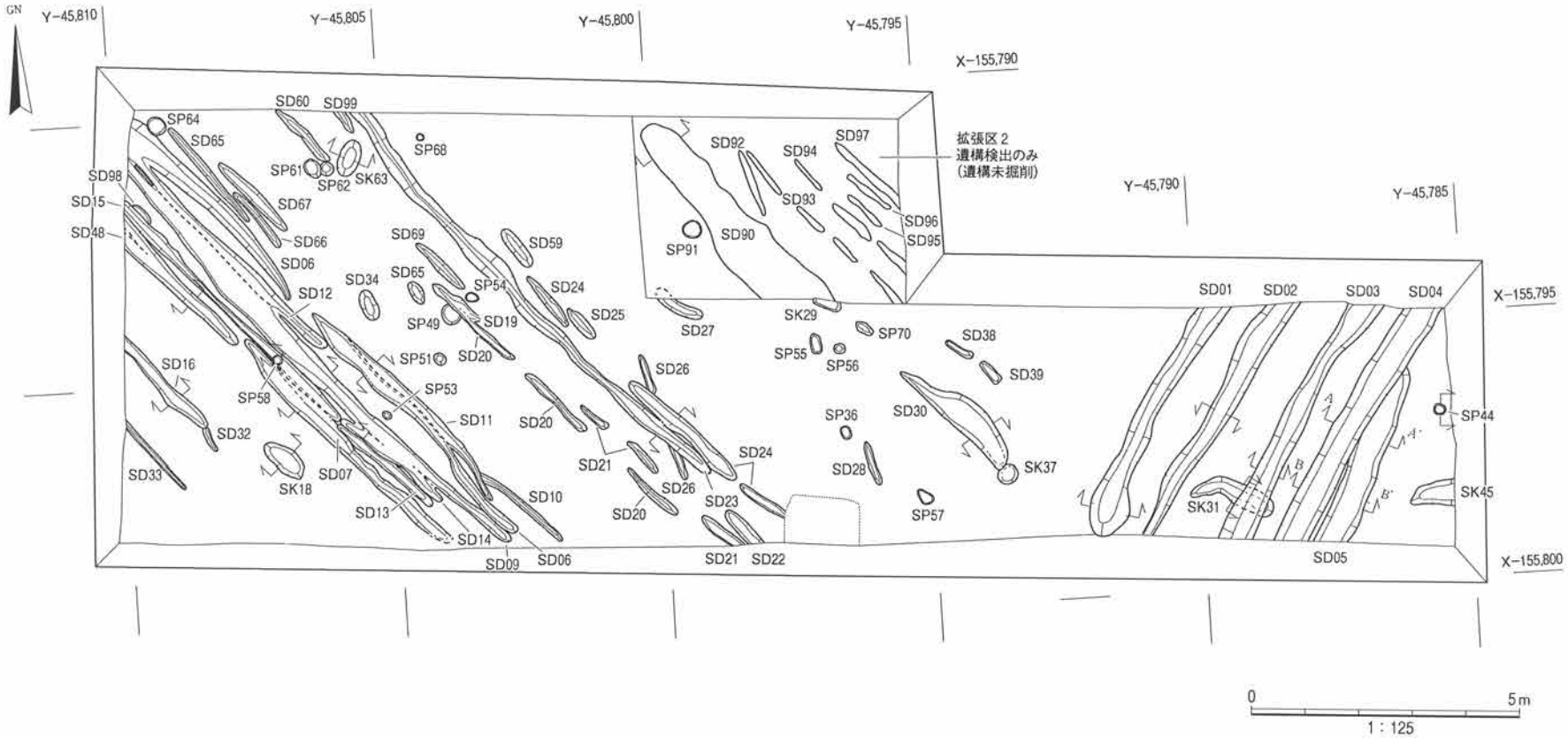


図９　第６層上面遺構平面図

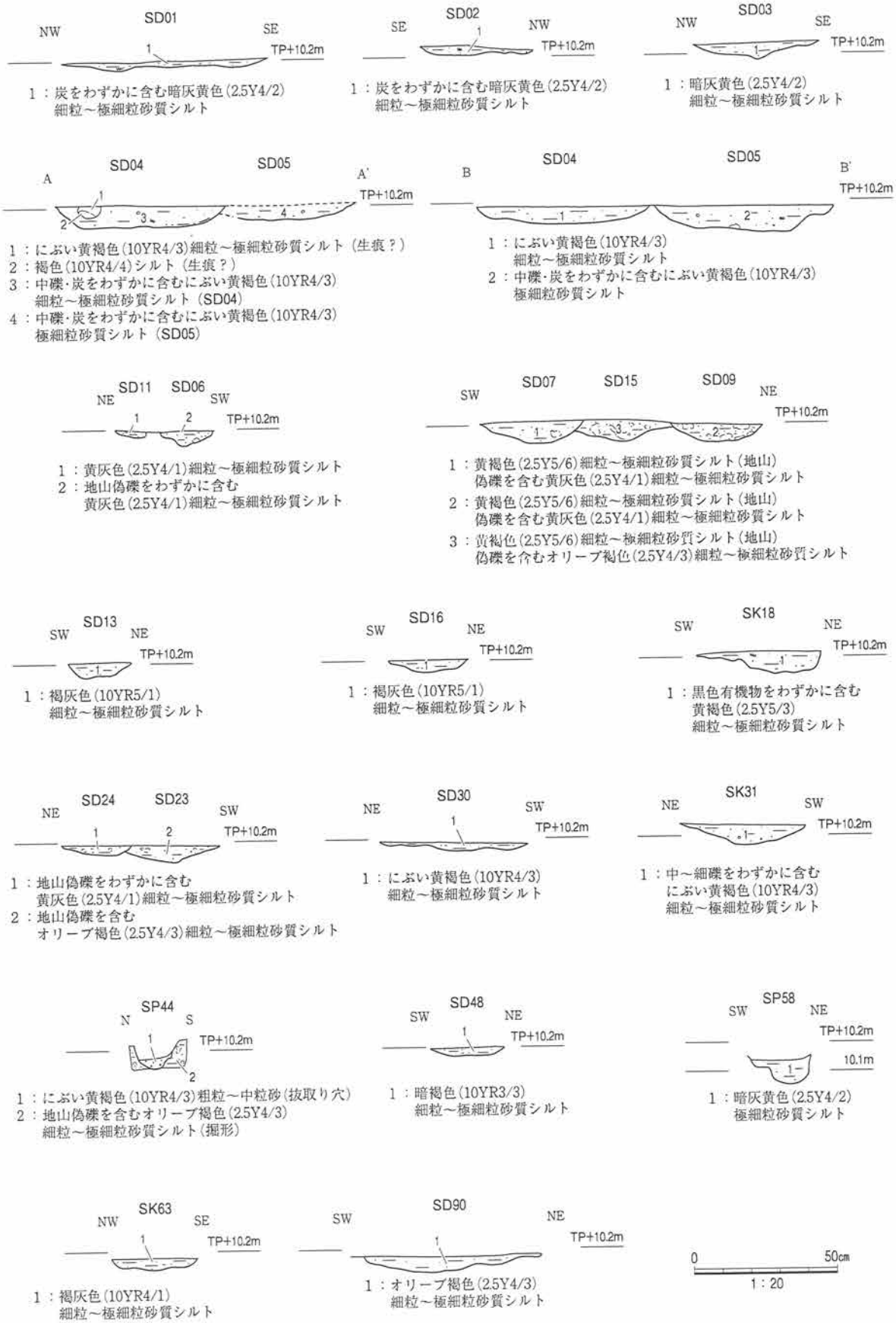


図10　第6層上面検出遺構断面図

45·63、第５層下面の北西－南東方向の鋤溝、第４層下面のSD05、第３層下面のSD01～04を検出した。なお、第６層上面遺構からは、第７層上面遺構や第６層出土遺物と同時期とみられる土師器・須恵器の小片が出土しているのみである。

SP44は直径0.20～0.22m、深さ0.10mの柱穴である。柱は抜き取られており、抜取り穴を砂で埋めていた。

SP58は直径0.18～0.22m、深さ0.10mの小穴である。一定の深さがあることから柱が抜き取られた柱穴の可能性もある。

その他はSP36・49・51・53～57・61・62・64・68・70・91は直径0.12～0.38m、深さ0.01～0.04mの浅い小穴である。

SK18は北西－南東0.91m、北東－南西0.44m、深さ0.08mの土壙である。

SK29は東西0.52m、南北0.18m以上、深さ0.03mの浅い土壙である。

SK31はSD03と重複しこれよりも古い溝状の土壙である。東西1.50m、南北0.44m、深さは0.07mである。

SK37は直径0.31～0.37mの円形の浅い土壙で、埋土は北側のSD30と類似する。

SK45は東西0.82m以上、南北0.52m、深さ0.06mの土壙である。埋土は第５層と類似する。

SK63は東西0.30m、南北0.69m、深さ0.04mの浅い土壙である。

SD05は北東－南西方向の溝で、第４層耕作時の溝と推定される。最大幅は0.60m、深さ0.09mである。

SD01～04は第３層耕作時の溝と推定される。北東－南西方向であるが、下位のSD05よりもやや東に振る。SD01は最大幅0.72m、深さ0.03m、SD02は最大幅0.57m、深さ0.04m、SD03は最大幅0.60m、深さ0.06m、SD04は最大幅0.60m、深さ0.08mである。

c)地層出土遺物(図11)

第３～４層から８、第４層から５、第４～５層から６・７・９、第４～６層から２、第６層から３・

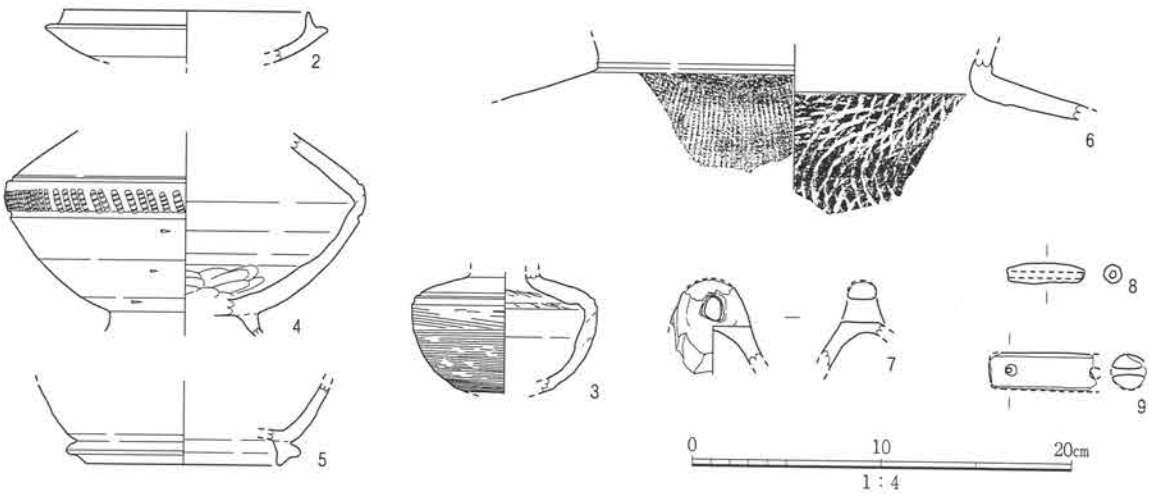


図11　地層出土遺物実測図

第３～４層(８)、第４層(５)、第４～５層(６・７・９)、第４～６層(２)、第６層(３・４)

4が出土した。このうち第3～5層から出土した遺物については本来は第6層以下に伴う遺物であり、各地層の年代を示すものではない。なお、第3～5層の年代についてはｉ)層序で述べたとおり16～17世紀の範疇であるが、年代決定の根拠となった遺物については小片のため図化していない。

2～6は須恵器である。2は杯HでTK209型式に位置づけられる。3は瓶とみられ、体部下半はカキメを巡らす。4は台付き長頸壺の体部、5は高台が付いた壺の底部である。6は甕の頸～体部である。7は土師質の蛸壺、8・9は土錘である。

3)まとめ

今回の調査では、これまでに周辺で検出されている掘立柱建物と同時期の6世紀後葉～7世紀の遺構・遺物が検出されたが、明確な建物跡は確認されなかった。周辺の掘立柱建物の検出面がTP+11m前後であるのに対し、今回の調査地では第7層上面がTP+10.1m前後と1m近く低いことから、この時期の集落域の中心は地形的にやや高い調査地より南に展開しており、調査地付近は集落の縁辺部であったことが推定される。

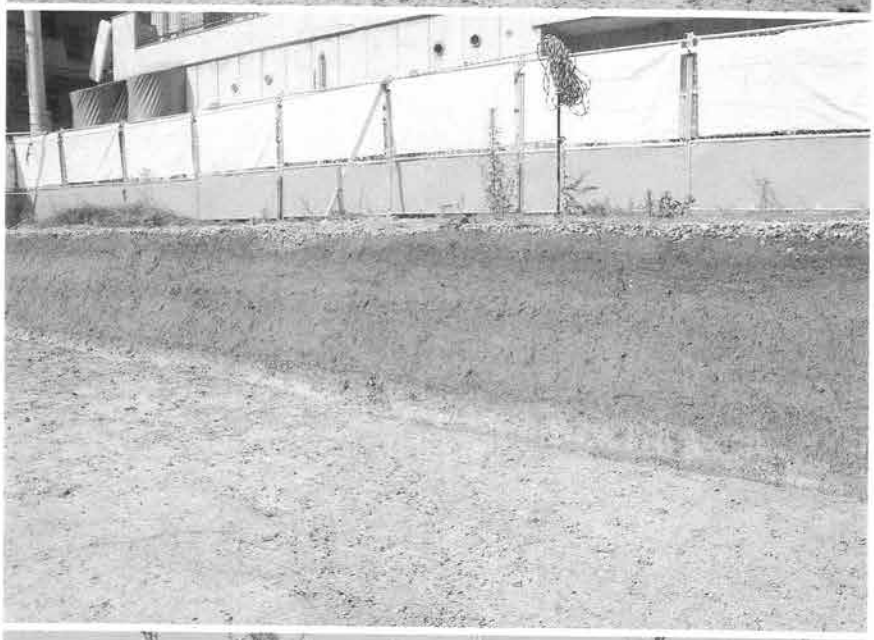
引用・参考文献

大阪市文化財協会1988、『中野甚一氏による建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM88－21)略報』
1998、『山之内遺跡発掘調査報告』

図版一

南壁地層断面
（北西から）

西壁地層断面
（北東から）



西壁地層断面
（東から）

第７層上面全景
（東から）

第６層上面全景（東から）

東住吉区杭全二丁目７－２・７－10における建設工事に伴う
杭全遺跡発掘調査(KP15－１)報告書

調査個所	大阪市東住吉区杭全2丁目7－2・7－10
調査面積	52㎡
調査期間	平成27年12月14日～12月21日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、松本啓子

1）調査に至る経緯と経過

調査地は大阪を南北に貫く上町台地の東斜面が沖積平野に埋没する地域に立地し、弥生時代の集落遺跡として知られる桑津遺跡の東に隣接する杭全遺跡のほぼ中央部に位置する（図１）。杭全遺跡は1994年に発見され、KW94－16･KP12－１次調査では弥生時代前期末～古墳時代初頭の遺構･遺物や、古代の水田などが出土した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。本調査でも同様の時期の遺構・遺物の検出が期待された。

当該地で平成27年10月22日大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約0.5m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査が行われることとなった。

調査は平成27年12月14日から開始した。東西４m、南北13mの調査区を設定し（図２）、地表下0.5mまでを重機を用いて掘削し、その後、人力による掘削を行った。層序に応じて順次掘り下げて遺構・遺物を検出し、適宜実測図や写真撮影によって記録しながら、後述する河川による自然堆積層の第７層層中（地表下2.2m）まで調査した。12月21日には現地における全ての作業を終えて撤収し、調査を完了した。

また、本報告で用いた方位は、発掘調査現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

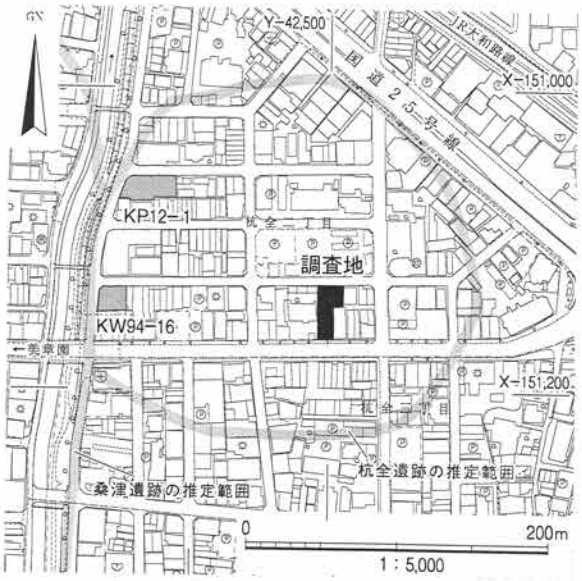


図１　調査地位置図

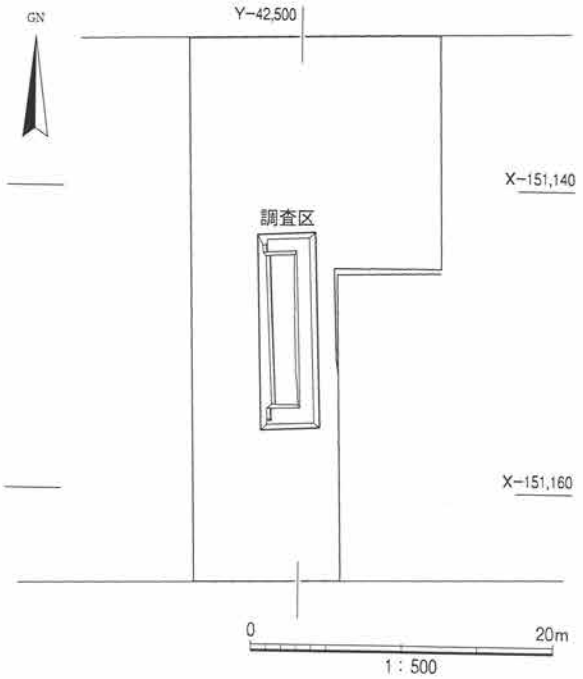


図２　調査区配置図

2）調査の結果

ｉ）層序（図３～５、写真図版中・下段）

調査地内の現況地形はTP＋4.0m前後で、周辺も含め、現地表はほぼ平坦になっている。

表土の下の地層は７層に分かれる。

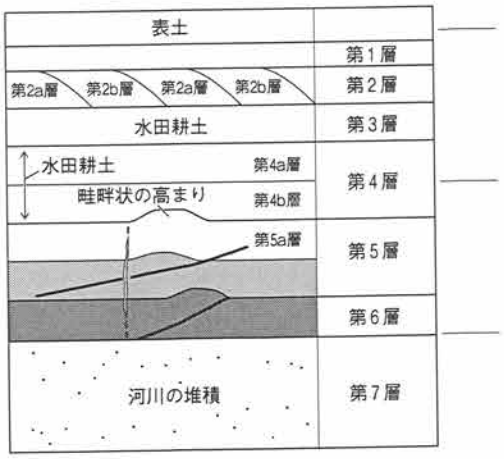


図3　地層と遺構の関係図

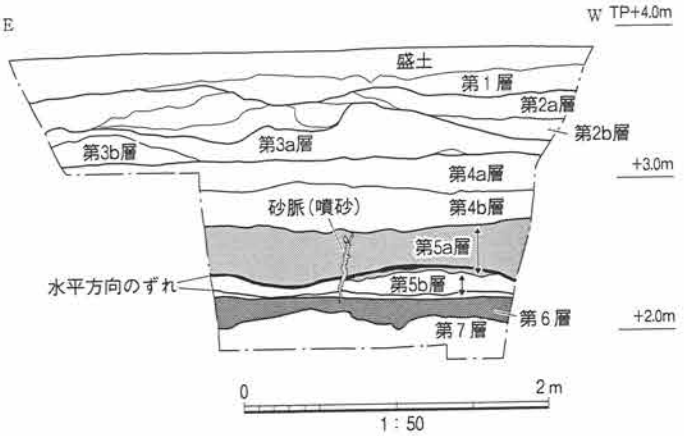


図4　南壁地層断面図(水平・垂直とも1：50)

第1層:黒褐色(10YR3/2)砂混り粘土層で、炭や礫が多く混る。層厚最大45cmの現代の地層である。

第2層：本層は客土層で、2分される。第2a層はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂層、第2b層は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質砂層で、粘土・礫が混る。これらを交互に投入して第2層を形成している。出土遺物から近代の地層と推定される。第2層の層厚は最大40cmである。

第3層：本層は調査区南東部のみに分布する地層で、水田耕土層とみられる。上下2層に分かれ、第3a層は褐色(10YR4/4)細粒砂混り粘土質シルト層、第3b層は黄褐色(2.5Y5/3)礫混りシルト質砂層である。層厚は第3a層が最大38cm、第3b層が最大18cmである。出土遺物はなく、近世末以降の地層である。

第4層：本層は水田の耕土層で、岩相によって第4a層、第4b層に2分される。第4a層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混り粘土層で、酸化マンガン・酸化鉄を多く含む。第4b層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混りシルト質粘土層で、酸化鉄を多く含む。本層の上面は平坦で、層厚は第4a層が最大35cm、第4b層が最大40cmである。出土遺物から近世後半の地層と考えられる。

第5層：本層は湿地の堆積層で、本層も上下2層に分かれる。第5a層は灰黄褐色(10YR5/2)礫・粗粒砂混り粘土質シルト層で、酸化マンガンを多く含み、上面からの乾痕が見られた。第5b層は灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混り粘土質シルト層で、酸化鉄を多く含む。層厚は第5a層が最大40cm、第5b層が最大22cmであるが、本層内に多くの地震による地層を斜めに剪断されたようすが観察されることから、水平方向の力が加わったために地層が変形して部分的に分厚くなっているものと思われる。この地層の剪断部分には黒褐色(10YR3/1)極細粒砂混りシルト質粘土や黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土が挟まっていた。また、第7層から第6層や本層にある斜めに横切る地震痕跡を突き破って噴き上がる砂脈が、第5a層上面付近まで達しているようすが観察された(図4、写真図版中・下段)。砂脈は第7層由来の灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒～細粒砂が噴き上がったものである。遺構は、第5a層上面で畦畔状の東西方向の高まりが観察された。出土遺物から第5層は6世紀末～7世紀前半の遺物包含層と考えられる。

第6層：本層は黄灰色(2.5Y4/1)砂混りシルト質粘土層で、湿地の堆積層である。層厚は最大25cmであるが、第5層に繋がる地層を斜めに横切る剪断痕跡が観察されることから、本層も水平方向の力

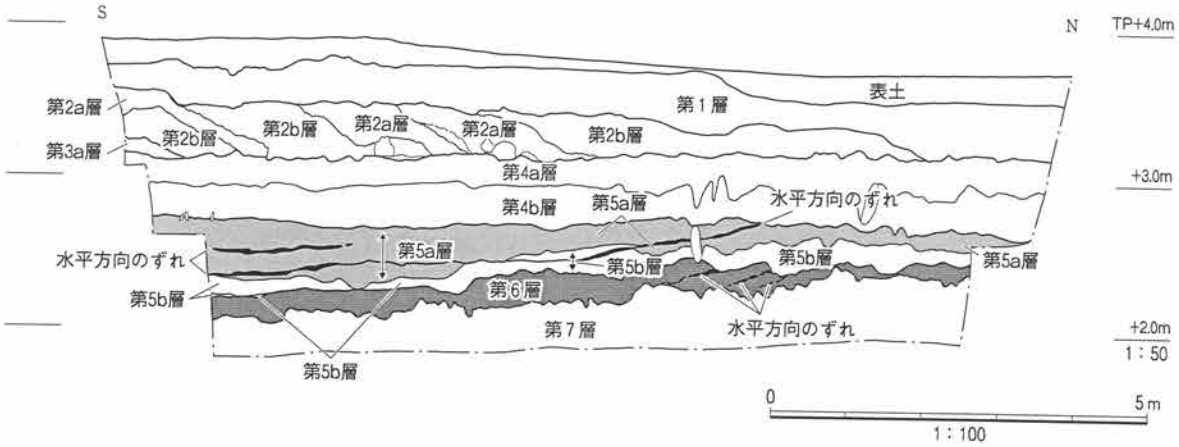


図5　西壁地層断面図(水平1：100、垂直1：50)

が加わったために地層が変形して部分的に分厚くなっているものと思われる。地層の傷跡には灰白色(10YR7/1)細粒砂が挟まっていた。本層も6世紀末～7世紀前半の遺物包含層である。

第7層：本層は河川の堆積層で、灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質細粒～粗粒砂層である。比較的早い流れのラミナがみられ、現在でも西から東へと流れる湧水がある。この湧水のため壁面が崩落する恐れがあったため、上面から約50cmの深さまでの調査にとどめた。古墳～飛鳥時代の土師器や須恵器、弥生土器の破片が出土した。

ii)遺構と遺物(図6・7、写真図版上段)

各層上面のようすを、古いものから順に記述する。

第7層上面(図6左上)　第7層上面は全体的に見ると北から南へと緩やかに下がっており、段差や土壙状の窪みは見られたが、明らかに遺構とわかるものはなかった。段差は最大15cmで、窪みの深さは3～7cmで、窪みから遺物は出土していない。

第6層上面　第6層上面も地面の波打っているようすは見られたが、明らかに遺構とわかるものはなかった。

第6層の出土遺物のうち、土師器の高杯2と甕4、須恵器杯蓋5と杯身8・10を図7に示した。

第5b層上面(図6右上)　本層上面では調査区中央部に北西－南東方向の高まりが見られた。最大20cmほどの高低差になっている。北側の斜面から土師器高杯3が出土した。6世紀末～7世紀前半のものである。また、本層上面では地震による砂脈が3か所で見つかった。砂脈の内包物はよく似ているが、方向はそれぞれ異なり、断面で観察したとおり、南壁に続く砂脈はそれ以前にあった地震の傷跡を突き破っているので、本層上面に見られた複数の砂脈は、同じ地震によるものかどうかはわからない。上位に堆積する第5a層の上面より上では地震痕跡が見られないので、いずれも6世紀末～7世紀前半以降、近世後半より前の地震と考えられる。

上記の土師器高杯3のほか、第5b層の出土遺物から須恵器の杯身7・9、杯蓋6を図7に示した。

第5a層上面(図6左下、写真図版上段)　第5a層上面では、上端で幅約2.5mの畦畔状の高まりが調査区中央部で検出された。高さは約5cmで、この高まりの上や斜面に直径約10cm、深さ2～3cmの窪みが見られた。高まりの南にはこれと並行する溝状の窪みが3条ある。幅0.4～0.6m、深さ約5cm

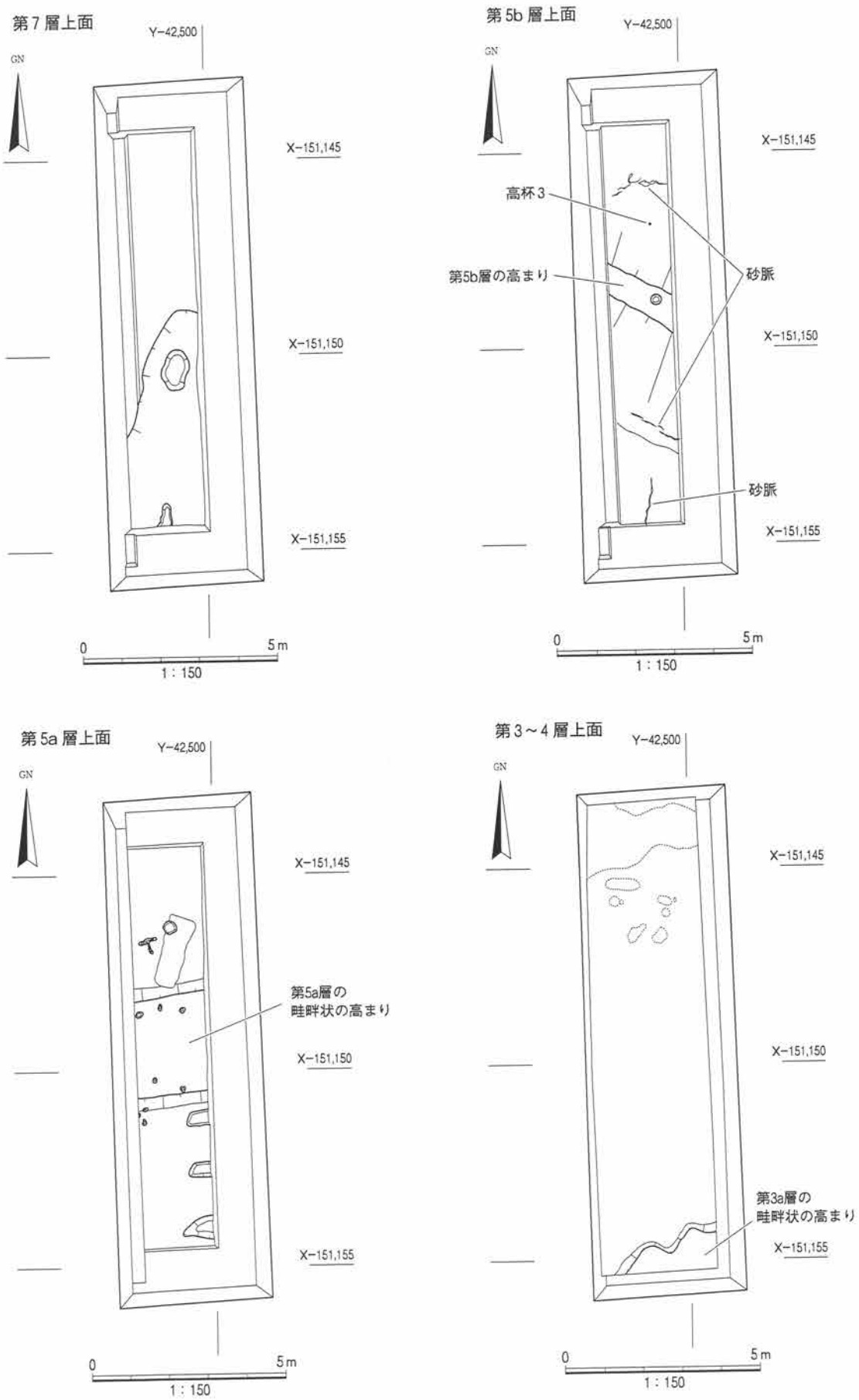

第7層上面
Y−42,500
GN
X−151,145
X−151,150
X−151,155
0
5m
1：150
第5b層上面
Y−42,500
GN
X−151,145
高杯3
第5b層の高まり
砂脈
X−151,150
砂脈
X−151,155
0
5m
1：150
第5a層上面
Y−42,500
GN
X−151,145
第5a層の
畦畔状の高まり
X−151,150
X−151,155
0
5m
1：150
第3～4層上面
Y−42,500
GN
X−151,145
X−151,150
第3a層の
畦畔状の高まり
X−151,155
0
5m
1：150

図6　各層遺構平面図

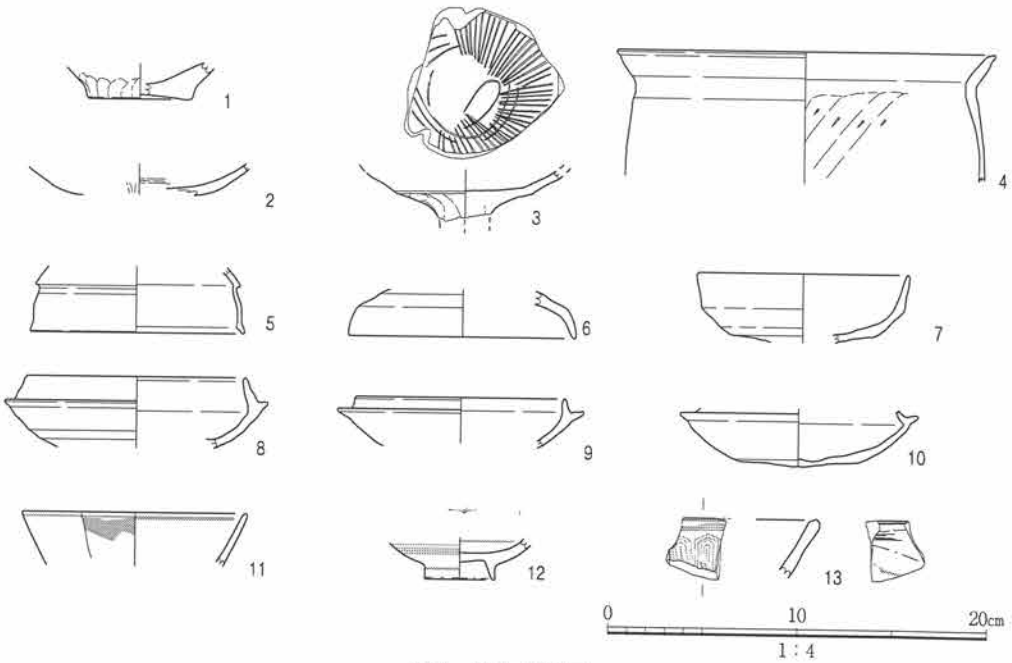


図７　遺物実測図

第６層（２・４・５・８・10）、第5b層（３・６・７・９）、第4b層（１・11～13）

の溝状の窪みである。高まりの北には直径約40cm、深さ５cmの小穴が検出された。これらの埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂混り粘土質シルトで、遺物は小穴から土師器の破片が出土した。

第４層上面・第３層上面(図６右下)。第４層上面はほぼ平坦な地面であるが、明らかに遺構とわかるものはなかった。また、第３層は調査区南西部のみ分布する耕土層であるので、図６右下の図に第４層上面と第３層の分布範囲をあわせて図示した。

第４層からは近世後半の19世紀初頭代の遺物が出土した。このうち第4b層出土の肥前磁器染付広東碗11と碗底部12と、肥前陶器三島手口縁部13、および下位層由来の弥生土器底部１を図示した。

３）まとめ

今回の調査では周辺地域ではまだ明らかでなかった６世紀末～７世紀前半に遡る可能性のある畦畔状の高まりを検出した。また、この時期以降、２回以上の地震痕跡を検出したことも今回の大きな成果である。今後の調査の積み重ねによって、当該地の古代から近世に至る過程を明らかにすることができると思われる。また、今回見つかったような地震痕跡は、今後起こり得る地震を想定する上で、手がかりとなり得るものである。

引用・参考文献

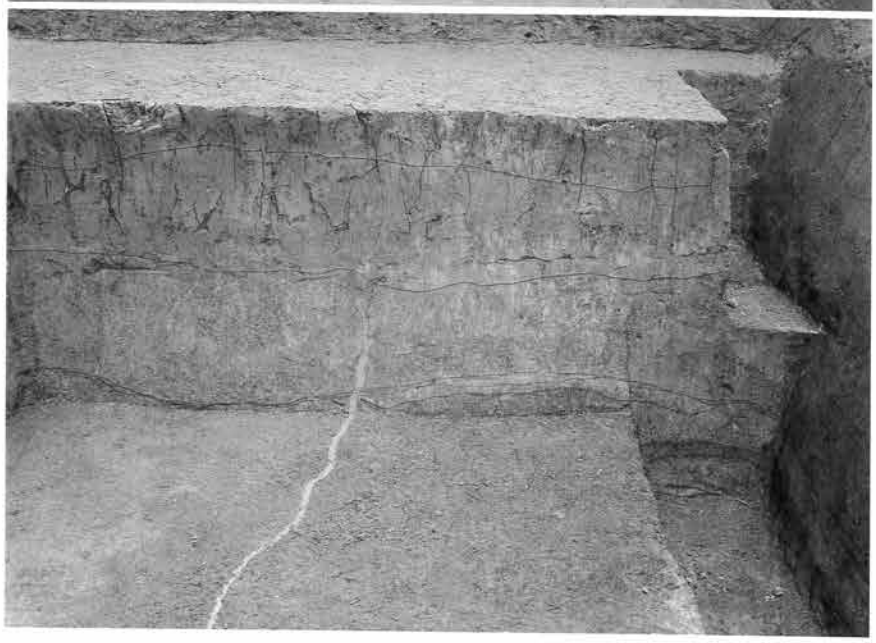
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「上町商事㈱による建築に伴う発掘調査（KW94－16）」：『平成６年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－96

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「東住吉区杭全二丁目における建設工事に伴う杭全遺跡発掘調査（KP12－１）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.407－412

第5a層上面全景
（南から）

南壁地層断面
（２回の地震痕跡が
見られる）

地層の水平方向のずれ
を貫く砂脈
（第5b層上面検出時、
南壁断面）



東住吉区南田辺一丁目24－６・24－７・24－８における建設工事に伴う
難波大道跡発掘調査(ND15－１)報告書

調査個所	大阪市東住吉区南田辺1丁目24－6・24－7・24－8
調査面積	72㎡
調査期間	平成28年1月27日～2月5日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　清水和明、松本啓子

1）調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮朱雀大路から南へ延びる古代の幹線道路の難波大道推定範囲に位置する。

難波大道跡は大和川の南の推定位置で遺構が検出されているが、大阪市内の難波大道跡推定地の調査にはND11－４・10－１次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012・2013a]（図１）や、さらに北側のND90－10・94－13・06－１次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991・1996・2008]があるが、これらの調査では難波大道とわかる確かな遺構は検出されていない。ただ、ND06－１次調査で検出された中世後半の北でやや東に振る畠境界や耕作溝は、難波大道の方向に近く、古代の地割を踏襲した可能性があることが指摘されている。

また、本調査地周辺では、ND10－１次調査で飛鳥～奈良時代の南北方向溝が検出されたほか、ND11－４次調査で７～８世紀の建物と10～11世紀の遺物が、またMQ11－１次調査で中世～近世の耕作遺構が検出され[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013b]、本調査でも同様の時期の遺構・遺物の検出が期待された。

平成27年11月20日大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約0.2m以下で本格的な発掘調査を必要とする中世とみられる遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査が行われることとなった。

調査は平成28年１月27日から開始した。東西12m、南北６mの調査区を設定し（図２）、地表下0.2mまでを重機を用いて掘削し、その後、人力による掘削を行った。層序に応じて順次掘り下げて遺構・遺物を検出し、適宜実測図や写真撮影によって記録しながら、上町台地を構成する自然堆積層中まで調査した。２月５日には現地における全ての作業を終えて撤収し、調査を完了した。

また、基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づ

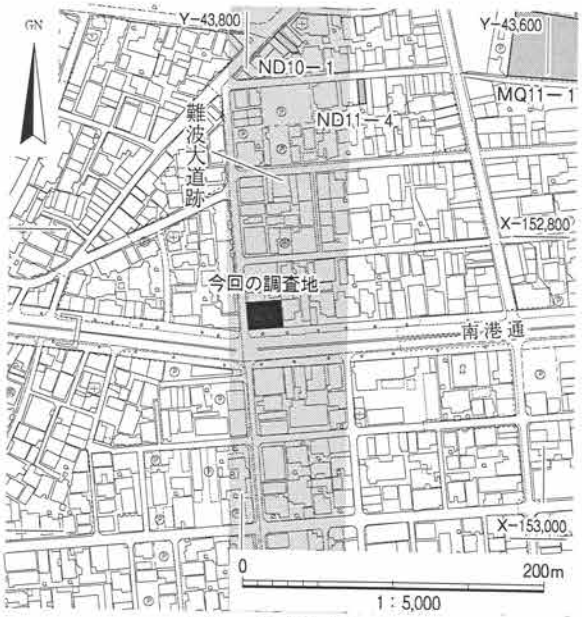


図１　調査地位置図

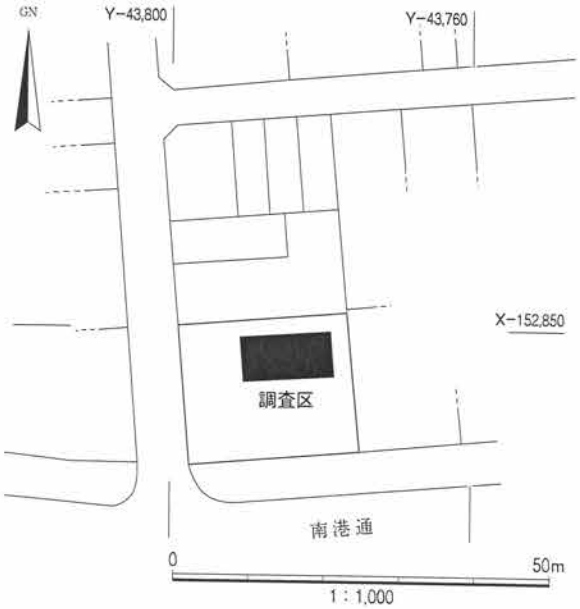


図２　調査区の位置

く座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地内の現況の標高はTP+7.0mで、周辺も含め、現地表はほぼ平坦になっている。

表土と現代の整地層の下は、大きくは2層に分かれる。

第1層：固く締まった黄褐色(10YR5/6)粘土偽礫を含む砂質シルト層で、炭が混る。本層に

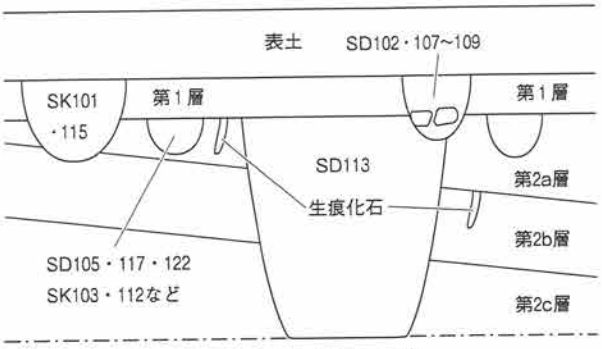


図3　地層と遺構の関係

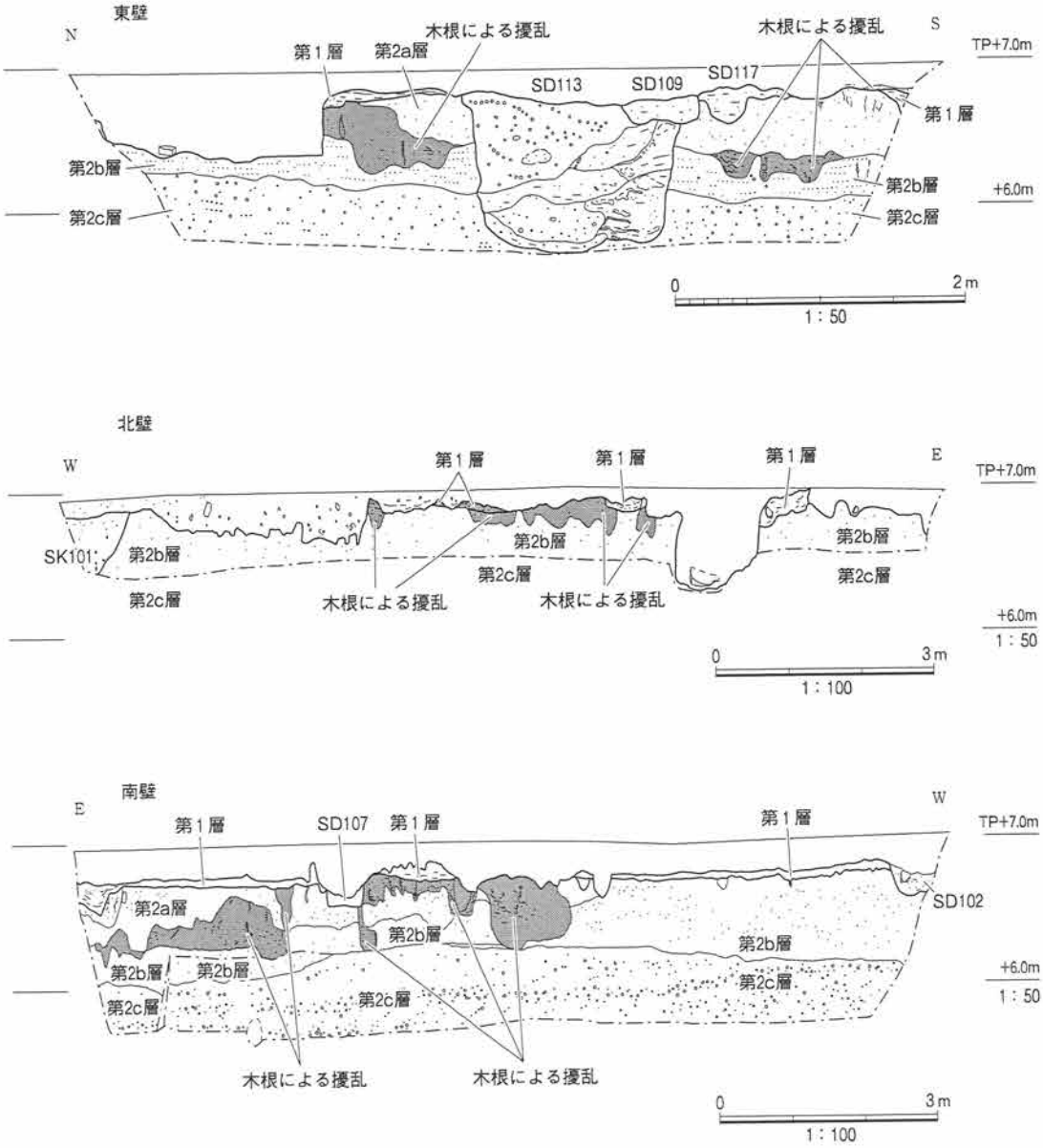


図4　地層断面図

混る偽礫は、上町台地の最上部に堆積する粘土に似ており、周辺に堆積していた地山層を混ぜて整地に用いた可能性が考えられる。層厚は5㎝程度でほぼ水平に堆積し、部分的には下層の窪みを埋めて20㎝程になるところもある。図7の瀬戸美濃焼磁器染付蓋1・染付鉢2などの近代(明治初)の遺物が出土したことから、本層はこの頃の整地層と考えられる。

本層上面で土壙と石敷きの溝を検出した。

第2層：本層は上町台地を構成する海成の堆積層で、3層に分かれる。

第2a層は明黄褐色(7.5Y4/6)細粒砂層で、層厚は最大50㎝である。本層上面はほぼ平坦であるが、調査区の中央部から南東部のみに分布し、南東隅に向かって厚くなっていた。第2a層上面で、近世の溝や土壙、小穴および巣穴化石が検出された。

第2b層は明黄褐色(10YR7/6)礫混り細粒砂層で、層厚は最大63㎝である。第2b層は全体的にみると北西から南東へと緩やかに下がって堆積していて、上面で約60㎝の高低差がある。第2a層上面で見られた巣穴化石は第2b層中にも達していた。

第2c層は明黄褐色(2.5Y6/6)巨礫混り粗粒砂層である。層厚は60㎝以上ある。

第2a層と第2b層は植物の根によって擾乱されていた。第2a層と第2b層で見られた巣穴化石は、直径8㎝ほどの円筒状の穴で、中に黄褐色細粒砂が詰まっていた(写真図版下段)。第2a・2b・2c層とも遺物は出土しなかった。

ⅱ)遺構と遺物(図5～7、写真図版上・中段)

第2b層上面(写真図版上段)

第2b層上面では土壙状の窪みが見られたが、明らかに遺構とわかるものはなかった。

第2a層上面(図5)

第2a層上面では、溝や土壙、小穴が検出された。

溝は幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.2m、埋土が炭を含んだ明褐色粘土質シルト～砂質シルトであるSD105・117・122と、幅1.5m、深さ1.1mのSD113がある。SD105・117・122の断面がU字形であるのに対し、SD113はほぼ垂直に掘られ、底が平坦になっている。さらにSD113の南北両側面は直線的で、土壙が順次掘られて繋がったようなものではなく、明らかに溝状に掘っている。SD113の埋土は下から順に黄褐色シルト混り細粒砂、明黄褐色砂質シルト、明黄褐色シルト質粘土で、最終的に明黄褐色砂礫で埋められていた。水の流れた痕跡はなく、木組みや石組などの構築物があったのかもしれない。これらの溝はすべて東西方向で、平行に配置されていた。

土壙は長径0.6～1.1m、短径約0.5m、深さ0.1～0.3m、埋土が炭や粘土を含んだ褐色砂質シルト～シルト質砂のSK103・104・112がある。

小穴は直径0.3m、深さ0.2m程のSP119・120や、直径0.1～0.2m、深さ0.2m程のSP121などがある。埋土は炭や粘土を含んだ褐色砂質シルトである。

これらの遺構は耕作関連のものと考えられるが、SD113は規模の大きさからみて、区画施設を兼ねたものとも考えられる。

遺物は、SD113から瀬戸美濃焼磁器高台や土師質火鉢、近世瓦が出土したほか、SD105、SK103・

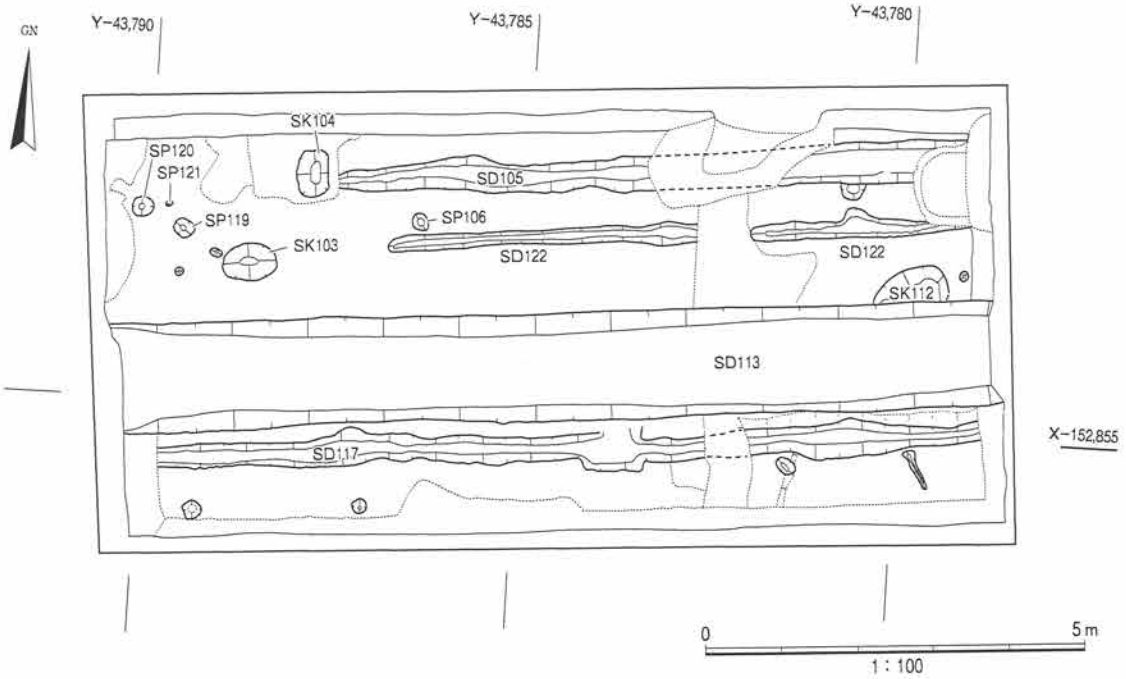


図５　第2a層上面遺構平面図

104･112、SP119から近世瓦が出土したが、いずれも破片で、図化しえなかった。これらの遺物から、第2a層上面の遺構は近世末のものと考えられる。

第１層上面(図６)

第１層上面は、溝と土壙が検出された。

溝はSD102・107～109が検出された。幅0.5m、深さ0.2mのSD108と、幅0.5m、深さ0.25mのSD109は東西方向の溝で、幅0.9m、深さ0.3mのSD109と、幅0.7m以上、深さ0.23mのSD102は南

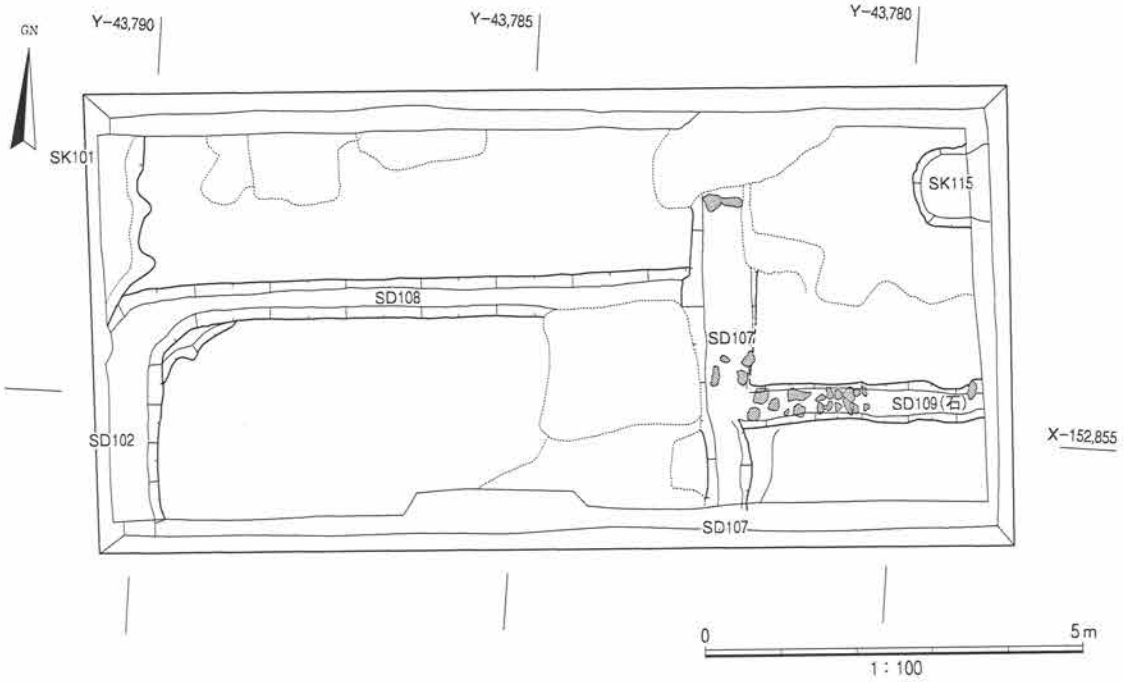


図６　第１層上面遺構平面図

北方向である。これらの溝は底に長径が15～30cm、短径が10～20cm、厚さ20cmほどの石を敷いていた。埋土はいずれも粘土や細粒砂・炭を含んだ明褐色シルト質砂である。配置は、SD102の北端で東西方向に曲ってSD108に繋がり、SD108の東端で南北方向のSD107に取付く。またSD109はSD108より約1.5m南の位置で西端がSD107に取付いていた。SD108とSD109より5cmほど底面が低く、SD107も同様に南側に若干低くなっている。もともとあったであろう敷石もかなりの部分が失われているので、水の流れた痕跡は確認できなかったが、建物の周囲に配された排水溝の可能性が考えられる。

遺物は、SD102から土師質植木鉢の破片が、またSD109から近世瓦の破片が出土した。

土壙は東西0.7m以上、南北2.5m以上で、深さ0.4mのSK101と、南北1.0m、東西0.7m以上、深さ0.5mの平面が隅丸方形のSK115がある。SK101とSK115の埋土は、ともに褐色シルト質粗粒砂で、礫や黄褐色粘土の偽礫を多く含む。SK101から近世～近代の瓦の破片が出土し、SK115から白磁や関西系陶器、近世瓦の破片とともに図7の焼締陶器擂鉢3が出土した。第1面は近代の遺構と考えられる。

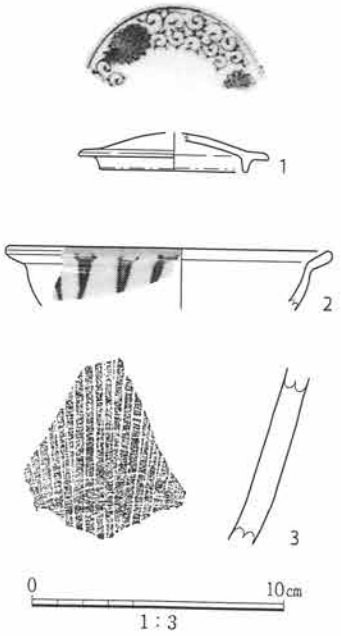


図7　遺物実測図
SK115(3)、第1層(1・2)

3)まとめ

今回の調査では古代の難波大道に関わる遺構や遺物は検出されなかったが、周辺の調査地で古代やそれ以前に遡る遺構・遺物が検出されている。それらの調査地の地山の層相やその高さ、および本来地山の最上部にあった黄褐色の粘土層が本調査地では第2a層の上にもともとの形では見られず、第1層がこういった粘土を混合して用いた整地土の可能性があることなどを考えあわせると、本調査地の地山の上面はかなりの削平を受けている可能性がある。また、本調査地が側溝と側溝の間の古道そのものの中に位置していたのなら、建物等の構築物は見つからなくて当然なのかもしれない。

今後の調査の成果と、これまでの調査や本調査の情報をあわせて検討することにより、当該地の古代から近世に至る過程を明らかにすることができると思われる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「難波大道跡発掘調査(ND06－1次)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.391－399

1991、「扶蘇邸の建設に伴う難波大道遺跡発掘調査(ND90－10)略報」:『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.177－182

1996、「大野邸建築に伴う発掘調査(ND94－13)」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.107－112

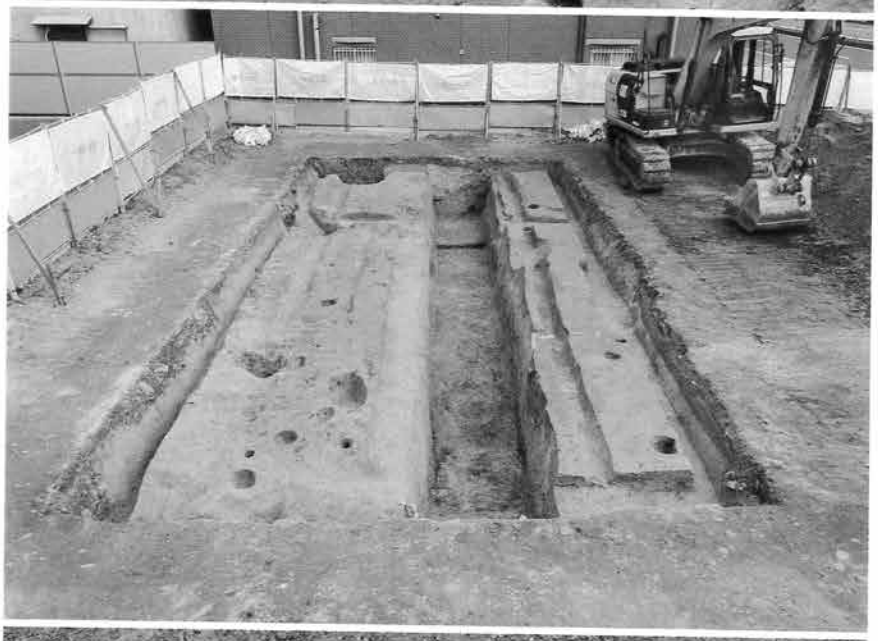
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「東住吉区南田辺一丁目における建設工事に伴う難波大道跡発掘調査(ND10－1)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.95－99

2013a、「難波大道跡発掘調査(ND11－4)報告書」:『平成23年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.169－174

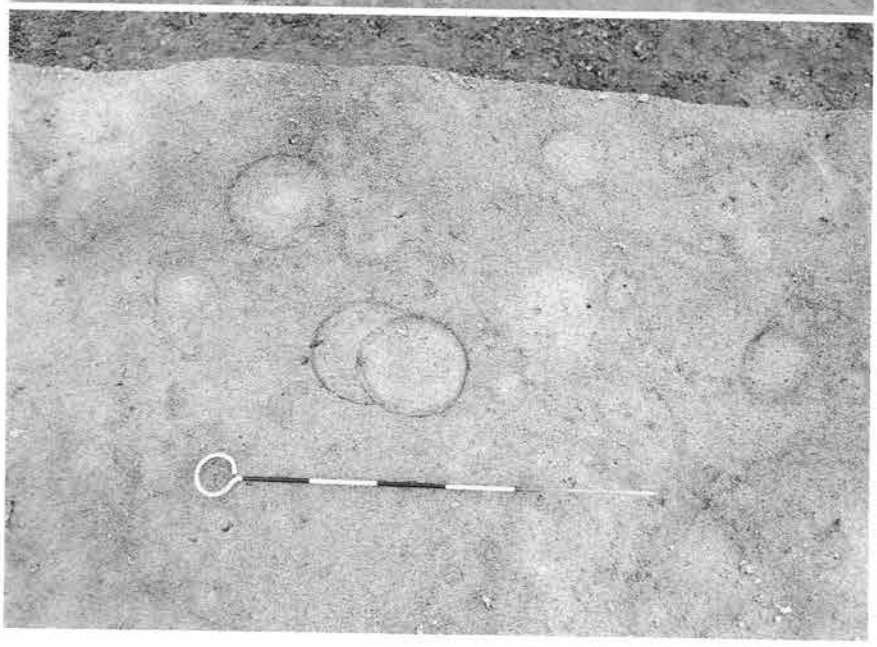
2013b、「南田辺遺跡発掘調査(MQ11－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.547－556

第2b層上面の傾斜
（北東から）

第2a層上面全景
（西から）



第2b層上面の巣穴化石



大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書（2015）

発行日　平成29年3月31日

発　行　大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編　集　大阪市教育委員会事務局文化財保護課
（大阪市北区中之島1-3-20）

印　刷　株式会社フォーラムK